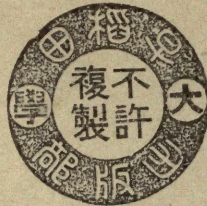
（漢籍國字解全書）

大正三年十月廿五日印刷
大正三年十月廿八日發行

編輯者　早稻田大學編輯部

發行者　早稻田大學出版部

代表者　高田早苗

東京府豊多摩郡戸塚町大字下戸塚五十八番地

印刷者　渡邊八太郎

東京市牛込區榎町七番地

東京府豊多摩郡戸塚町大字下戸塚五十八番地

發行所　早稻田大學出版部

振替東京一一二三番　電話番町三七四番 二四二三番

日清印刷株式會社印刷

聲より生ず、而るに響を止めんとして大聲を發すれば其の響又益々大なり、形與影競走するは、前に所謂人有惡影惡迹而走者、疾走不休、絕力而死、不知處陰以休影、處靜以息迹とある、是れなり、皆惠施の靜默して眞を保つこと能はず、徒らに外物を逐うて喧擾し、自ら其德を毀損せることを喩ふるなり、

名言

神何由降、明何由出、聖有所生、王有所成、皆原於一、

天下大亂、賢聖不明、道德不一、天下多得一察焉以自好、譬如耳目鼻口、皆有所明、不能相通、

內聖外王之道、闇而不明、鬱而不發、天下之人、各爲其所欲焉、以自爲方、悲夫、百家往而不反、必不合矣、

天能覆之、而不能載之、地能載之、而不能覆之、大道能包之、而不能辨之、

在己無居、形物自著、其動若水、其靜若鏡、其應若響、芴乎若亡、寂乎若清、同焉者和、得焉者失、未嘗先人而嘗隨人、

人皆取先、己獨取後、人皆取實、己獨取虛、人皆求福、己獨曲全、

堅則毀矣、銳則挫矣、常寬容於物、不削於人、可謂至極、

芴漠無形、變化無常、死與生與、天地並與、神明往與、芒乎何之、忽乎何適、萬物畢羅、莫足以歸、

以天下爲沈濁、不可與莊語、以巵言爲曼衍、以重言爲眞、以寓言爲廣、獨與天地精神往來、而不敖倪於萬物、不譴是非、以與世俗處、

上與造物者遊、而下與外死生無終始者爲友、

至大無外、謂之大一、至小無內、謂之小一、

飛鳥之景未嘗動也、鏃矢之疾而有不行不止之時、

一尺之棰、日取其半、萬世不竭、

莊子國字解下　終

競走也と曰うて、之を譏りながらも、惜乎惠施之才と曰ひ、又悲夫を以て結び、自餘の諸方術家と同視せず以て大に時人に尊敬せられし大家なるを見るべし、且つ其説多く牽强なるも、亦暗に物理生物幾何數學等の理を得たる者あり、若し惠施の學を紹述して大成する者あらしめば、獨り論理の精微を致すのみならず、又大に理科學の發達を致せしならんに、紹述人無く、其學廢絕し、五車の車又皆存せず、是れ我東洋古代の學を論述するに當りて又大に惜むべきなり、

【通釋】　天地の道を得たる至人よりして、惠施の能として誇る所の辯論を見れば、恰も一蚊一蝱の微聲を張り上げて自ら勞するが如き者なり、物の爲めには何の功用かある、徒らに喧擾し、時に來り刺して人を苦むるのみ、害ありて益無し、彼の墨翟以下の諸方術家の如く、道の一端を得て之を擴充するは、尙衆人に賢ると謂ふべし、若し此輩にして、更に大處に着眼し、道を貴ぶに至らば、則ち道に近き者なり、惠施は此の道の一端を擴充することを以て自ら安んずること能はず、其の折角の才を萬物に散じて、强ひて之が說を立てゝ、厭き休むこと無く、終に僅に辯論を善くするを以て名を爲せり、惜むべきかな、惠施は大才を有ちながら、之を放散して己に全くし得ず、萬物を逐うて妄說を立てたるのみにして、本眞に反らず、是れ何ぞ響を窮止せしめんとして自ら聲を振ひ影を逃れんとして、形が影と競走するが如き者なり、實に悲むべきことならずや、

【解義】　〔夫充一尙可曰愈貴道幾矣〕此の十一字、諸說紛紛、皆牽强にして明解無し、今王闓運の說に從ひ夫充一尙可曰愈を一句と爲し、貴道幾矣を一句と爲す、王氏曰く、充一は自ら一行に極詣する者、愈は踰なり、衆に賢るなりと、按ずるに、充一は卽ち墨翟以下道術の是に在る者を見、其風を聞きて之を說べる者なり、一とは道の一端なり、幾は近なり、〔惜乎惠施之才〕徐無鬼篇の、莊子送葬過惠子之墓の一節を參看すべし、惠施の才の惜むべく、其の本眞を得ずして終りしの悲むべきこと、自ら知るべし、〔駘蕩而不得〕司馬云ふ、駘蕩は放散なり、〔是窮響以聲形與影競走也〕成玄英曰く、是れ何ぞ響を逃れんと欲して以て聲を振ひ、將に影を避けんとして疾走する者に異ならんと、按ずるに、窮は窮止するなり、響は

當に奇に爲くるべし、倚人は異人なり、王逸九章（楚辭）に注して云ふ、奇は異なりと、倚は奇聲に從ふ、故に古字倚と奇と通ずるなり、「易」の說卦傳の參レ天兩地而倚數、蜀才本には、倚を奇に作る、春官（周禮）の大祝奇拜に杜子春曰く、奇讀で倚と爲すと、僖三十三年の「穀梁傳」に、匹馬倚輪無反者、「釋文」に、倚は居宜反、卽ち奇輪なり、字或は畸に作ると、「荀子」大略篇、墨子有レ見於齊無レ見於畸の楊注に、畸は不齊を謂ふなりとあり、不齊は卽ち異の義なりと、〔曰黃繚〕王闓運曰く、蓋し尉繚（人名）ならん、〔其塗隩矣〕成玄英曰く、塗は道なり、隩は音「アウ」深なり、林雲銘曰く、其の小にして暗く、六通四辟の道に非ざるを云ふなり、

由天地之道、觀惠施之能、其猶一蚉一䖟之勞者也、其於物也、何庸、夫充一尙可曰愈、貴道幾矣、惠施不能以此自寧、散於萬物、而不厭、卒以善辯爲名、惜乎、惠施之才、駘蕩而不得、逐萬物而不反、是窮響以聲、形與影競走也、悲夫、

【大意】惠施の能を小とし、其の大才を以て、之を善用して道に至る能はず、放散して物を逐ひ、己に得る所無くして終りしを惜み、前段諸方術家を顧みて、此の段を結ぶ、

○以上四節を合して第七段と爲す、惠施の學を論ずるなり、惠施は辯論を好み、其大才を負みて萬物を歷說し、務めて世人の言に反對して議論を鬪はせ、人を壓伏して自ら名を爲す、其の學、墨翟以下諸子の道術の一端を得たる者と異なりて、全く道に出でず、故に之を老莊の後に列す、然れども其人は莊子と時を同くして、常に相討論して屈せず、莊子も深く其才を惜みし人なるを以て、此篇の作者（莊子の自作とも云ふ）亦之を論じて、存レ雄而無レ術と曰ひ、其塗隩矣と曰ひ、猶二一蚊一䖟之勞者也と曰ひ、窮レ響以レ聲形與レ影

其略也と云ふが如し、上文の「卵有毛雞三足以下、皆是れなりと、「宣注」には曰く柢は根柢なり、惠施は他の長なし、時に故らに辯者と奇異を爲す心を存すること、此の如きに過ぎずと、亦一説と爲すべし、〔施存雄而無術〕「釋文」に司馬云ふ、意人に勝つに在りて、道理の術なし、「宣穎」曰く惠施但此の雄心を存し學術なし、

南方有倚人焉、曰黃繚、問天地所以不墜不陷、風雨雷霆之故、惠施不辭而應、不慮而對、徧爲萬物說、說而不休、多而無已、猶以爲寡、益之以怪、以反人爲實、而欲以勝人爲名、是以與衆不適也、弱於德强於物、其塗澳矣、

【大意】 惠施が如何なる難問題にも、思慮せずして妄說し、萬物を歷說して休止せず、更に之に增すに怪を以てするを敍し、之を斷じて、德に弱く其途隩幽ありと曰ふ、

【通釋】 南方に一奇人あり、其の名を黃繚と曰ふ、嘗て惠施を見て、天は空中に懸りて何故に墜ちざるや、地は萬物の重きを載せて何故に陷ちざるや、風雨の起り雷霆の鳴るは何によるやと問へるに、惠施敢て辭讓せずして其の問ひに應じ、其の然る所以の理を思慮せずして、妄りに之に對へ、其の餘徧く萬物に就きて說を爲し、喋喋として說きて休止せず、多々辯論して、猶以て十分ならずと爲し、之に增益するに奇異怪誕の說を以てす、之を要するに、惠施は常人の言ふ所に反對して、異說を立つるを以て實道と爲し、而して如何なる强辯を用ひても、人に勝ち以て名譽と爲さんと欲す、是を以て常に衝突して衆人と和適せざるなり、惠施が內に有する所の德は甚だ微弱にして、外に於て物に接するの辯は甚だ强く、其の由る所の徑路は迂曲幽深にして、人の常に由る所に非ず、人の知るべからざる難路なり、

【解義】 〔南方有倚人焉〕「釋文」に云ふ、倚はもと、或は畸に作る、同じ、李云ふ、異なり、郭慶藩曰く、倚

に兩あり、若し其れ析つべからざれば、其の一常に存す、故に曰く、萬世まで竭きずと、一說に云ふ、一尺の棰、今日上半を取り、明日下半を取れば、上下循環、何の竭くることか之あらんと、又一說に曰く、兩說共に非なり、日取其半には、其の析つべきと析つべからざるとを問はざるなり、又今日上半を取り、明日下半を取れば、兩日にして竭く、何ぞ萬世不竭と曰ふを得ん、此說は數理上より言へるにて、正確の說なり、例へば今日其の半を取れば、殘る所は其の半なり、明日又殘餘の半を取れば、殘る所は四分の一なり、かくて八分の一となり、十六分の一となり、三十二分の一と爲り、千萬世の後まで之を繼續するも、終に無に歸すること無し、常人は實物上に就てのみ之を見る、故に萬世不竭を以て怪と爲すのみと、按ずるに「墨子」の經下篇に非半則不斲則不動說在端と、經說下篇に斲非半進前取也前則中無爲半猶端也、前後取則端中也斲必半無與非半不可斲也とあり、此れと相參照すべし、又按ずるに卵有毛なり本句に至るまで、乃ち下文に謂へる天下之辯者が持守する話柄なり、

〔桓團公孫龍〕成玄英曰く、姓は桓、名は團、姓は公孫名は龍、並に趙人皆辯士なり、平原君の家に客遊す、而して公孫龍守白論を著はし、世に行はる、

〔辯者之囿也〕囿は園を設けて禽獸を置く所なり、辯者此内に限局せられて出づる能はず、故に辯者之囿と曰ふ、

〔與人之辯特與天下之辯者爲怪〕成玄英曰く、特は獨なり、字亦將に作る者あり、惠子日に分別の智を用ひ人と共に之を評し、獨り一己を將て天地と殊異すと、俞樾曰く、與人之辯は、義通ずべからず、蓋し下句天下之辯者に涉りて、之の字を衍するなりと、特は「成疏」に獨なりと見えたり、按ずるに特は直なり、空なり「荀子」の勸學篇に上不能好其人下不能隆禮、安特將學雜識志詩書而已耳とあり、楊倞が注に特猶言直也と云へり、「漢書」の高帝紀に母特俱死とあり注に文穎云特獨也、蘇林云特但也、師古云蘇說是也、但空也空死而無所成名と見えたり、乃ち此の所にては惠施は人と辯論を鬪はすが其の効果を問へば、タヾホンノ天下の辯者と怪誕の說を爲す位が先づ關の山なりと、極めて輕視したる辭なり、

〔此其柢也〕俞樾曰く、柢は氐と通ず、「史記」の秦始皇紀に、大氐盡畔秦吏、正義に曰く、氐猶略也と、此其柢也は猶此

も亦犬可以爲羊と同論法、一說に云ふ、蛇は形長しと雖も、而かも命は長からず、龜は形短しと雖も、命は甚だ長しと、又一說に云ふ、此れ卽ち莫大於秋毫之末、而大山爲小の意と、〔矩不方規不可以爲圓〕矩の象は一縱一横のみ、曷ぞ嘗て方ならん、規も亦然り、本と圓相無し、況や方圓を爲す者は匠なり、規下豈之を爲さんやとなり、〔鑿不圍枘〕鑿は孔なり、枘は孔中に內るゝの木なり、鑿が枘を圍むに非ずして、枘自ら之に入ると也、〔飛鳥之景未嘗動也〕鳥空中に飛び、地に印するの景亦動く、然れども景自ら動くに非ず、鳥動きて景之に從ふなり、故に飛鳥の景未だ嘗て動かずと謂ふとなり、按ずるに「墨子」の經下篇に景不徙、說在改爲と、經說下篇に景光至景亡、若在盡古息と云へり、此の本文と互に參照すべし、〔鏃矢之疾而有不行不止之時〕鏃は矢端の金、卽ち「ヤジリ」なり、矢已に弦上を離るるも、未だ行くべきの處まで行かざるの間は、之を行くと謂ふを得ず、未だ的を貫かざれば、之を止まると謂ふを得ず、故に此の間を不行不止の時と謂ふなりと、又一說に、鏃矢の行くは疾しと雖も、更に鏃矢よりも疾き者あり、例へば、今一定の距離を、鏃矢は三秒時間にて達し、聲音は一秒間にて達すとせば、其差の二秒時間は、鏃矢行かざるに非ずして止り、止まるに非ずして行かざるの時なりと、〔狗非犬〕狗と犬とは實を同くして名を異にす、名實合へば、則ち彼の所謂狗は此の所謂犬なり名實離るれば、則ち彼の所謂狗は犬に異なり、一說に犬は總名なり、狗は犬中の一種なり、部分は全體に非ず、故に狗を以て直に犬なりと謂ふを得ずと、〔黃馬驪牛三〕驪は馬の純黑色なり、驪牛は黑牛を謂ふ、色は形に非ず、形は色に非ず、馬と牛とは二形二體なり黃と驪とは色なり、二形と色とを合せて三と爲す、一說に、黃色と馬形と名とは三なり、故に黃馬は一なるが如くにして三、驪牛も一にして三の意なりと、〔白狗黑〕白と曰ひ黑と曰ふ、皆人の命ずる所なり、若し雪の色を黑と爲し、炭の色を白と爲さば、白狗は之を黑狗と謂ふを得べしと、〔孤駒未嘗有母〕駒の生まるには母あり、然れども既に孤と言へば、則ち母無かるべし、孤の稱立てば則ち母の名は去るなり、故に曰く、孤駒は未だ嘗て母あらず、〔一尺之棰日取其半萬世不竭〕棰は杖なり、若し其れ析つべければ、則ち常

ふの名は、人の命ずる所にして、自然に有するに非ず人爲に出づる者なれば、又人爲を以て犬を改め呼で羊と爲し、羊を改め呼で犬と爲すも亦可なり、〔馬有卵〕馬は胎生にして卵生に非ず、然れども胎に胞ありて之を裹める狀は、卵と粗同じ、但母胎を出づる時に之を脫すると、出でゝ後に之を脫するとの小異あるのみ、則ち馬にも亦卵ありと謂ふを得べしとなり、一說に馬には固より卵なし、然れども馬とか鳥とかの名は、人の命せし者なれば、今雞を改めて馬と名づくれば、則ち馬も卵生と爲る、是れ馬に卵あるなりと、〔丁子有尾〕楚人蝦蟆を呼で丁子と爲す、蝦蟆は「ヒキガヘル」なり、蝦蟆には尾無し、然れども蝦蟆の初めて生ずるを科斗と爲し、科斗化して蝦蟆と爲る、而して科斗には尾あり、則ち蝦蟆にも亦尾ありと謂ふを得べし、〔火不熱〕火は熱く水は冷かと謂ふは常情に出づ、然れども人々各好惡あり、好惡を以て美醜を定むべからず、此と同じく、現に火鼠は火中に棲み、火を以て家と爲す、是れ火必ずしも熱からず、火を熱しと爲すは、人の私情なり、故に曰く、火は熱からずと、按ずるに「墨子」の經下篇に火不熱說在視と、經說下篇に以目見火、若以火視火、謂火熱也、非以火之熱と云へり、此の說に依れば、火に就いて光熱の辨を說きたる學說を謂ふ、尙ほ墨子國字解を參考すべし、〔山出口〕山に口無し、然れども無人の山中にて呼ぶも、何者か之に答ふるありて傳はる、是れ山に口ありて、聲を出だすに非ずして何ぞとなり、〔輪不蹍地〕車の行くは地を蹍るに似たり、然れども輪の旋轉する、其の一小點だけ瞬時地上に支ふるのみにて、未だ嘗て地上を蹍らず、若し地を蹍れば輪膠著して行くを得ずとなり、〔目不見〕目の能く物を見るは、光あるが爲めなり、其の證は暗黑中に在りては、眼前の物をも見る能はざるを以て知るべし、然らば則ち目の能く見るが如くなるは、其の光の力を假るが爲めにして、目は實は物を見る能はずとなり、〔指不至至不絕〕此の六字は誤脫あるやも知るべからず、「列子」の仲尼篇には、有指則不至、無指則皆至に作る、或は又云ふ、至不絕の三字は注文の竄入せるなりと、解する者曰く、指は指すのみにて、物をして至らしむること能はざるも、物を假りて之を取り、至りて絕たざらしむるを得と、〔龜長於蛇〕此

子に尾あり、(七)火は熱からず、(八)山口を出す(九)輪は地を蹍らず、(十)目は見ず、(十一)指は至らず、至りて絶えず、(十二)龜は蛇よりも長し、(十三)矩は方ならず、(十四)規は以て圓を爲すべからず、(十五)鑿は枘を圍せず、(十六)飛鳥の景は未だ嘗て動かざるなり、(十七)鏃矢の疾きも行かず、止まらざるの時あり、(十八)狗は犬に非ず、(十九)黃馬驪牛は三なり(二十)白狗は黑し、(二十一)孤駒は未だ嘗て母あらず、(二十二)一尺の杖、日に其半を取れば、萬世まで竭きず、諸の辯者、此等の題を以て惠施と相應答し、終身强辯して窮止すること無し、桓團公孫龍は乃ち辯者の徒なり、强辯を以て常理に勝ち、人の心を彫飾し、人の意を變易し、迷ひ惑はしめて、自己の說を立つれども、たゞ能く一時人の口に勝つのみにして、人の心に勝つこと能はず、天下の辯者は皆此等の奇怪なる題目に囚はれて出づる能はず、此れ實に辯者の囿なり、惠施は日に其の心知を飾り、以て人と論辯を鬪はし、天下の辯者と爭うて、怪誕奇異の說を爲すに止れり、乃ち此に揭げたるは其の概略なり、然れども惠施は其の無益にして大害あるを曉らず、其の口辯を以て自ら天下最第一の賢者と爲し、自ら歎美して曰く、我が辯の壯んなるに敵する者は、唯其れ天地のみ天地壯大、我辯も亦壯大なるかなと、惠施の得意此くの如し、故に之を斷じて曰く、惠施は雄張して人に勝たんとするの心あるのみにして、道無しと、道は謙柔にして、人に勝ち物の先きと爲ること無き者なり、

【解義】〔卵有毛〕「釋文」に司馬云ふ、胎卵の生ずる必ず毛羽あり、雞が鵠の卵を伏するも、卵は雞と爲らず、胎卵は未だ孵化せざる前よりして、毛羽の性は已に著きあるなり、故に卵には毛無けれども毛ありと曰ふなり、〔雞三足〕司馬云ふ、雞には兩足あり、以て行く、然れども其の行くは發動に由り、神御に由る故に有形兩足の外、之をして行かしむる神御の一を加へて、三足と曰ふ、〔郢有天下〕郢は楚の都なり、「釋文」に李云ふ、九州の內は、宇宙の中に於て、未だ萬中の一分ならず、天下とは全土の稱なれば、九州は以て此に當るに足らず、而るに中國の諸侯各其の所有を指して天下と爲す、則ち郢は方千里と雖も、亦以て天下を有つと謂ふを得べし、〔犬可以爲羊〕犬羊には自然に其の形質あれども、之を犬と曰ひ羊と曰

以爲羊、馬有卵、丁子有尾、火不熱、山出口、輪不蹍地、目不見、指不至、至不絕、龜長於蛇、矩不方、規不可以爲圓、鑿不圍枘、飛鳥之景、未嘗動也、鏃矢之疾、而有不行止不之時、狗非犬、黃馬驪牛三、白狗黑、孤駒未嘗有母、一尺之棰、日取其半、萬世不竭、辯者以此與惠施相應、終身無窮、桓團公孫龍、辯者之徒、飾人之心、易人之意、能勝人之口、不能服人之心、辯者之囿也、惠施日以其知與人[之]辯、特與天下之辯者爲怪、此其柢也、然惠施之口談、自以爲最賢曰、天地其壯乎、施存雄而無術、

【大意】 惠施及び其徒の好んで論ずる所の巨多の命題を掲げ、惠施は終身此くの如き議論を爲し、能く人の口を服するも人の心を服する能はず、而して自ら以て最賢と爲す、故に終に之を斷じ、徒らに氣のみ壯にして道術無しと爲す、

【通釋】 此に掲げられたる者は、惠施及び其の徒の辯士が、好んで論じたる議論の命題のみを列擧したるなり、其の著書毀滅して後世に傳らざれば、其の理由に至りては今明かに之を知るを得ず、諸注各其の說を爲しあれども、多くは後世學者の想像に出づれば果して當を得たりや否やを知る能はず、故に姑く解義に於て其說を示し、茲に解說せず、重複を避くるのみならず、又讀者を誤らんことを恐るればなり、(一)卵に毛あり、(二)雞に三足あり、(三)郢天下を有す、(四)犬は以て羊と爲すべし、(五)馬に卵あり(六)丁

馳に作る、義亦同じと、〔歷物之意〕「釋文」に云ふ、歷は分別して之を歷說するなり、〔無厚不可積也其大千里〕按ずるに此れ幾何學の定義に、線は位置及び長さあつて、幅及び厚さ無く面は位置と長さ及び幅ありて厚さ無しと謂ふに同じ、厚さ無ければ、之を累積する能はず、而して線或は面は幾千萬里にも及ぶを得、「釋文」に司馬云ふ、物は形を言うて有と爲し形の外を無と爲す、無形は有と表裏を相爲す、故に形物の厚は無厚に盡く、無厚と有とは同一體なり、其有厚の大なる者は、其の無厚も亦大、高は廣に因りて立ち、有は無に因りて積む、則ち其の積むべきは積むべからざる者に因る、苟も其れ積むべければ、何ぞ但千里のみならんやと、瞶々の說取るに足らず、此の他之に類するの說多し、今皆略す、〔日方中方睨〕成玄英曰く、睨は側視なり、西に居る者は呼びて中と爲し、東に處る者は呼で側と爲す、則ち中側無きなり、經度の差によりて時の一定すべからざるを謂ふなり、〔大同而與小同異〕按ずるに、與は於と通ず、〔今日適越而昔來〕此語又齊物論篇に見え、彼には來を至に作る、〔氾愛萬物天地一體也〕氾愛は博愛なり、〔大觀於天下〕大觀は達觀なり、

【備考】惠施の學は、今日の論理學に類する者なり、莊子は物外に超然たるを主とし、而して惠施は物に就て一々之を論ず、故に其の學互に相合はず、頗る詆議を加へ、諸子の猶道術の一部分を得たるにも及ばずとし、古之道術有ㇾ在ㇾ於ㇾ是者、某某聞㆓其風㆒而悅ㇾ之の句を用ひずして、代るに惠施以ㇾ此爲㆓大觀於天下㆒而曉㆓辯者㆒天下之辯者相與樂ㇾ之の句を以てす、然れども今日より之を觀れば、惠施の論議する所、必ずしも取るべき無きに非ず、殊に物理數學幾何等、理科の思想、他の諸子に卓絕するを覺ゆ、獘は意を研究思索に專らにせずして、徒に辯を以て人に勝つことを務め、牽强不理に陷るに在り、若し其の五車の書猶存し、後人をして其の緒を承けて研究を積ましめば、理科の發達は大に觀るべき者ありしならん、惜むらくは漢以後名家の學廢し、遺書も復存する者なく、徒らに人の談柄に資するに過ぎず、然れども僅に存する所の零細の語によりて、周末に於て既に理科の盛んなりしを知るを幸とするのみ、

卵有ㇾ毛、雞三足、郢有㆓天下㆒、犬可㆓

視して之を一にする能はず、一々分別して之を歷說して曰く、物の至大にして外無き、之を大一と謂ひ、至小にして內無く、復分つべからざる、之を小一と謂ふ、厚さの無き物は之を積重すべからず、而して其の大さは千里にも及ぶべし、天は高くして地は卑く、同じからざるか如くなれども、天垂れて地と接す、則ち天も地と同く卑きなり、山は聳え澤は平らかにして、同じからざるが如くなれども、山上には多く水澤あり、則ち山も亦澤と同く平らかなりと謂ふを得べし、太陽方に中央に在るも、觀者の位置によりては、又之を側面に在りと謂ふを得べく、物の生死も、明界に於ては方に生ぜりと爲すも、幽界に於ては之を方に死せりと爲すを得べし、物と物と大體相同く、而して小部分に於て小く同異ある、此を小同異と謂ひ、萬物の盡く相同きか又は盡く相異る、此を大同大異と謂ふ、南方は廣漠窮り無しと稱するも、南方と謂へば已に分際あり、故に必ず窮極なきこと能はす、今日始めて越に適くも、適かんとするの念起りし時、心已に越に至る、故に昔來ると謂ふも亦妨げなし、環の連貫したる者は、之を離解する能はざるが如きも、亦之を解くを得べしと、蓋し連環は自然の物に非ずして、人爲に成りし者なれば、又人爲にて解くを得ればなり、天下の中央は何處なるか、之を知る者なし、我獨り之を知れり、燕の北も中央なれば、越の南も亦中央なり、蓋し天下の中央なる者は元來あることなし、人々の居る所に隨ひ、各其の地を以て中央と爲して可なり、又天地は大にして萬物蕃しと雖も、苟も我が心に博く萬物を愛すれば、天地は皆一體なりと、其の論ずる所大略此くの如し、惠施は此を以て、自ら天下を大觀せりと爲し、天下好辯の士に曉示す、而して天下の辯士其の說を聞て之を悅び、相與に樂で之を唱道す、

【解義】〔惠施多方〕他の諸子は一方術を偏守すれども、惠施は辯を以て人に勝つことを主とするが故に、衆多の方術に涉る、故に多方と謂ふ、〔其道舛駁〕郭慶藩曰く、司馬本には、舛を踳に作る、乖なり、「文選」魏都賦の注に司馬を引て曰く、踳讀で舛と曰ふ、駁は色雜りて同じからざるなり、又司馬の此注を引き、一に舛馳に作る、「法言」の叙に曰く、諸子各以其知舛馳、「淮南」俶眞訓に、二者代謝舛馳、氾論訓に、見聞舛馳於外、說山訓に、分流舛馳、「玉篇」に引て僢

脫することは、蛇や蟬などの蛻脫するが如きを待たす、道の妙は茫茫昧昧として把束すべからず、莊周の文辭と雖も、未だ之を言ひ盡くすを得ざるなり、

【解義】〔上與造物者遊—無終始者爲友〕此の二句は、道と浮遊するを謂ふ、已に德充符大宗師及び其他の諸篇に詳論しあり、故に此に覆說せず、〔弘大而辟〕辟は闢に同じ、王闓運曰く、聖人の未だ言はざる所を開闢するなり、〔深閎而肆〕閎も亦弘なり、肆は大なり、〔稠適而上遂〕「釋文」に云ふ、稠一本亦調に作る、宣穎曰く當に調に作るべしと、成玄英曰く、遂は達なり、〔芒乎昧乎〕成玄英曰く「芒昧は猶ほ窈冥の如し、

惠施多方、其書五車、其道舛駁、其言也不中、歷物之意曰、至大無外、謂之大一、至小無內、謂之小一、無厚不可積也、其大千里、天與地卑、山與澤平、日方中方睨、物方生方死、大同而與小同異、此之謂小同異、萬物畢同畢異、此之謂大同異、南方無窮而有窮、今日適越而昔來、連環可解也、我知天下之中央、燕之北、越之南是也、氾愛萬物、天地一體也、惠施以此爲大觀於天下、而曉辯者、天下之辯者相與樂之、

【大意】惠施が議論を好み辯を以て人に勝つことを務め、一方術に拘はらず、舛駁不中、道と乖くの學を略述す、

【通釋】惠施は衆多の方術に涉り、其の著書も甚だ多く、五車に滿載するほどなり、其の道とする所は、乖亂錯雜し、其の言ふ所は、道理に當らず、萬物を輕

の愚說なり、〔以巵言爲曼衍〕巵言重言寓言、皆前の寓言篇に出づ、爲曼衍は其事理に因りて之を推衍す、謂はゆる巵言日出、因以曼衍とあるは卽ち是れなり、〔與天地精神往來〕天地の精神は自然の道なり、道と相交るを謂ふ、王先謙は天地と精神往來すと讀み、精神上にて天地と交ると解せり、〔其書雖瓌瑋〕「釋文」に云ふ、瓌瑋は奇特なり、〔連犿无傷也〕「釋文」に云ふ、犿一本亦抃に作る、李を引て云ふ、連犿は宛轉の貌、一に云ふ、相從ふの貌、〔其辭雖參差〕成玄英曰く、參差とは、或は虛、或は實其言を一にせざるなりと、〔諔詭〕既に德充符篇に見ゆ、奇幻にして變化百出するを謂ふ、

上與造物者遊、而下與外死生無終始者爲友、其於本也、弘大而辟、深閎而肆、其於宗也、可謂稠適而上遂矣、雖然其應於化而解於物也、其理不竭、其來不蛻、芒乎昧乎、未之盡者、

【大意】前節の充實不可以已を承け、莊周が本宗に得る所の弘大深閎なるを言ひ、終に道の妙用盡くすべからざるを歎美して、暗に莊周を賛揚す、○以上の三節を合して第六段とす、莊周の學術を論述するなり、前の諸方術家に於ては、末尾に雖然の字を用ひて其の短處を非難して論斷せし例によりて、莊周にも雖然の句を用ひしも、唯道の妙用、言語文辭の能く盡くす所に非ざるを歎美せるのみにて、莊周を非駁したるに非ず、莊周は乃ち其の歎美する所の道を得たる者なれば、反つて大に之を稱贊したることとなる章法を同くして、其の意を同くせず、齊整中に不齊整あり作者の本意を伺ふべし、

【通釋】上は造物者と遊び、而して下は死生を外にし、始め無く終り無き者と友たり、其の充實する所、實に此の如し、其の根本に於けるや、弘大にして開闢し、深廣にして肆大、其の大宗に於けるや、能く之と調和適合し、上達して與に一と爲ると謂ふべし、然りと雖も、其の造化自然の妙用に應ずることは、其の理微妙にして、變化窮まり無く、又世上萬物の係累を解

なり、「高注」に無形狀なりとあり、「說文」土部に、垠は地垠なり、「楚辭」の王注は、垠は岸崖なり、「文選」甘泉賦の李善注に、郭は垠堮なりと、〔恣縱而不儻〕恣縱は縱論恣論するを謂ふ、成玄英曰く、不儻は偏儻せざるなり、〔不以觭見之也〕觭は奇と通ず、亦偏なり、不以觭見とは全きを見るを謂ふ、

以天下爲沈濁不可與莊語、以巵言爲曼衍、以重言爲眞、以寓言爲廣、獨與天地精神往來、而不敖倪於萬物、不譴是非、以與世俗處、其書雖環瑋、而連犿無傷也、其辭雖參差、而諔詭可觀、彼其充實不可以已、

【大意】莊周の言行及び著書を叙して、之を概評す、

【通釋】莊子は、天下の人を以て、皆名利に沈濁して昏迷なれば、之と正言して道を說くべからずと爲し、巵言重言寓言の三種を用ひ、巵言を以て之を推衍し、世人の重んずる古聖賢の名を借り重言して、眞に其の事あるが如くに信ぜしめ、假りに人名を設け、又は草木禽獸風雲等を假りたる寓言を以て、如何なることをも廣く言ひ盡くす、莊周の言此の如し、又獨り天地の精神たる自然の道と往來して相交り、萬物の外に超絕して、之と與に遊はず、之を眼中に置かず、是非を一にして、必らずしも善惡得失を以て、人の行ひを責めず、以て世俗の衆人と雜處す、其の行ひ又此くの如し、又其著はす所の書は、奇異特立にして、人と同じからざれども、而も宛轉して能く物と相從ふ故に傷害なく、其の文辭は或は虛或は實、其の言を一にせざれども、而も變化奇妙にして、觀るべき者あり、彼の莊周は心に道を得て、充實するを以て、其外に發する者、知らず識らず此くの如きに至り、自ら止むを得ざるなり、此くの如く爲さんと欲して、故意に此くの如くなるに非ざるなり、

【解義】〔不可與莊語〕「釋文」に、莊は正なりとあり莊語は正論、卽ち眞面目の議論を謂ふ、郭象の莊を莊周と爲し、莊周と語るべからずと注せるは、笑ふべき

天地竝與、神明往與、芒乎何之、忽乎何適、萬物畢羅、莫足以歸、古之道術有在於是者、莊周聞其風悅之、以謬悠之說、荒唐之言、無端崖之辭、時恣縱而不儻、不以觭見之也、

【大意】 道と浮遊して物を輕んずる莊周の學の大略を敘す、前段關尹老聃の學と同じ、たゞ用語少しく異なるのみ、

【通釋】 無心寂靜にして、形迹の見るべき無く、自然の運に隨ひ、變化して常形無く、死生を一にして、死したるか生きたるか知るべからず、其の德の大なること天地と同じく、造化と往來して友とし遊ぶ者に似たり、其の精神は常に茫漠として何くに行くや、洸忽として何くに行くや、測り知るべからず、萬物群生して眼前に羅列するも、一も以て心を歸するに足らずと爲して、之を顧みること無し、古の道術には、斯く道と浮遊して物を輕んずる者あり、莊周は其の風を聞きて之を悅び、情實を忘れたるが如き說、廣大空漠の言、端緒の尋ぬべき無く、畔崖の見るべき無き辭を以て、時々言語恣縱すれども、偏して一方に黨すること無く、道の全體を見て、一端を偏見すること無し、

【解義】〔芴漠〕「釋文」に云ふ、芴、元嘉本には寂に作ると、按ずるに芴漠は前段の芴乎若亡、寂乎若清と同意、〔死與生與〕既に死生を一にす、故に現在が死なるか、生なるかを知らず、謂はゆる不知生、不知死なり、〔天地竝與〕天の上に與の字を加へて看るべし、齊物論篇に天地與我竝生とあると同意、〔神明往與〕神の上に與の字を加へて看るべし、天地竝與は生を言ふ、神明往與は死を言ふ、〔萬物畢羅〕畢は盡くなり、羅は羅列なり、具らざる無きを謂ふ、〔謬悠之說〕「釋文」に云ふ、謬悠は情實を忘れたる者の若くなるを謂ふなり、〔荒唐之言〕「釋文」に云ふ、荒唐は廣大にして域畔なき者を謂ふなりと、〔無端崖〕郭慶藩曰く、無端崖は猶無垠鄂の如きなり、「淮南」原道篇、無垠鄂之門の許注に、垠鄂は端崖を云ふ

く世塵の中に處して、毫も自ら毀損せらるゝことなく、たゞ無爲にして能く世に隨應し、因て世人が營々として巧智を弄し、利を爭ふを笑ひ、世人は皆福利を求むれども、老聃は獨り委曲物に隨ひ、自ら全くして苟くも、禍咎に罹るを免るゝを得れば可なりと、敢て福利を求むること無し、老聃は深く太初の無有に存する者を以て根と爲し、極めて簡約なる無爲を以て統紀と爲して、曰く、凡べて物は、堅ければ則ち他物に觸れて必ず毀損し、鋭ければ則ち他物を穿たんとして必ず挫折するを免れずと、故に無有を根と爲し、無爲を紀と爲して、虛無柔弱にし、常に寬大にして物を包容し、人を侵削することなし、此くの如きは道の至極を得たる者と謂ふべし、此道を得たる關尹老聃こそ、實に古の宏博至大の眞人と同じき人なるかな、

【解義】〔知其雄守其雌〕雄は强きこと、尊貴なることを謂ひ、雌は弱きこと卑賤なることを謂ひ、尊貴なるべきの德ありて、卑賤の地位に安んずるに喩ふ、下文の知二其白一守二其辱一も同意、皆以二濡弱謙下一爲レ表のことなり、〔受天下之垢〕垢は人の汚穢として棄つる者あり、故に以て人の厭棄する雌辱後に喩ふ、〔人皆取實己獨取虛〕按ずるに、此の下恐らくは曰字を脫せるならん、上文の人皆取レ先、己獨取レ後、曰、受二天下之垢一、下文の人皆求レ福、己獨曲全、曰、苟免二於咎一と、皆曰の字あり、人皆の二句は其の行を叙し、而して之を承くるに其の言を以てす、前後の文例皆然り、此處獨り曰の字無かるべからず、〔巋然而有餘〕巋は山の聳ゆる貌、以て其有餘の大なるに喩へ、獨立して自ら足るを謂ふ、〔徐而不費〕徐は安徐なり、不費は事少くして閑なること、老子の主義は未嘗先人にあれば、其身の行爲常に安徐にして、事少く閑靜なるを謂ふ、章炳麟曰く、徐讀で餘と爲す、同く余聲に從へばなり「左氏」文元年傳の歸二餘於終一を歷書には歸二邪於終一に作り、邶風の其虛其邪を釋訓には其虛其徐に作る、是れ徐邪餘の三字は相通ず、餘而不費とは、老子云ふ、治レ人事レ天莫レ若レ嗇なりと、成玄英曰く費は損なり、〔己獨曲全〕委曲して物に隨ひ、以て自ら全くするなり、亦濡弱謙下の意、

芴漠無レ形、變化無レ常、死與生與、

人可レ謂レ至極ニ關尹老聃乎、古之博大眞人哉、

【大意】老聃の言と行ひとを叙述し、遂に關尹老聃を合論して之を稱揚し、古之博大眞人哉と斷定す、以上三節を合して第五段と爲す、關尹老聃の學を論ず、老聃の學は、無有を本とし、太一を主とし、濡弱謙下を以て世に處す、卽ち道の至極を得たる者にして、莊子の師事せし所也、故に之を頌して古之博大眞人哉と云ひ、貶抑の辭なし、關尹老聃及び次ぎの莊周は道術を得たる者にて、墨翟禽滑釐以下の方術とは全く異なりたる者なり、然らば何故に他の方術の諸子と竝列して別たらざるかと云ふに、上文に曰へる如く、道術は明ニ於本數一、係ニ於末度一、六通四辟、小大精粗、其運無レ乎レ不レ在のものなり、而るに老莊は其の本たり、大たり、精たる者のみを取りて、末たり、小たり、粗たる者を取らず、道術に於ては猶其一部分にして、全體に非ず、是れ其他の方術の諸子と竝列して別たざる所以なり、然れども既に其の本を得れば、末は自ら具はる、老莊の之を言はざるは世弊を矯むるが爲めに特に之を言はざるなり、他の諸子の道術中の末の部分を得て、愈々末に趨き、世を亂し民を苦しむ者と同じからず、故に口を極めて之を頌賛し、毫も頌辭を加へず、是れ此篇を讀む者の大に注意すべき所なり、

【通釋】老聃曰く、我れ能く雄の强きことを知りて、而して能く雌の弱きを守り、白の顯明なるを知りて、而して能く下賤汚辱の地位に居れば、己の德全くして毀損せらるゝこと無く、衆人の之に歸すること、百川萬水の谿谷に流注するが如しと、世人は皆人に後れを取ることを耻ぢて、力めて人の先と爲り上と爲らんとすれども、老聃は獨り故と身を退けて、人後と爲りて、曰く、人の棄てゝ取らざる者を我は取るなりと、世人は皆金玉貨財等の實物を貪り取れども、老聃は獨り無用の虛を取りて、曰く、有形の物は、貪りて收藏すればする程愈不足を感ずる者なれども、我は有形の物を收藏すること無し、故に常に餘りあり、其の餘りあることも、少許には非ずして、山の如く餘りありて、獨立自存することを得と、老聃の其身を行ふや、餘裕ありて、挹めども盡きず、撓せとも濁らず、能

關尹曰、在己無居、形物自著、其動若水、其靜若鏡、其應若響、芴乎若亡、寂乎若淸、同焉者和、得焉者失、未嘗先人、而常隨人、

【大意】此節は、關尹の言ふ所と行ひとを叙して、其の主張する學術を示す、

【通釋】關尹曰く、自己の意志を建てゝ一定の處に拘泥すること無く、自然に任せて無爲にすれば、萬物其の間に自得して、其の功自ら彰著する者なり、故に其の動くときは、水の無心なるが如く、其の靜かなるときは、鏡の物來れば盡く之を映出して擇ぶこと無きが如く、其の應ずることは響の聲に和するが如く、茫忽として無きが如く、寂として動かざるときは、澄める水の如し、無有太一は、之と同一と爲らんとすれば、遂に和して在己無居形物自著に至るを得れども、之を得んとしては、道は固より形無ければ、之を失うて終に得ること能はずと、關尹の自ら言ふこと此くの如くにして、其の平生爲す所は、未だ嘗て人に先だつこと無く、常に人の後に隨へり、

【解義】〔芴乎若亡〕成玄英曰く、芴は忽なり、亡は無なり、〔未嘗先人而常隨人〕成玄英曰く、和して唱せざるなり、按するに、得焉者失までは關尹の言にして此二句は、關尹の平生の行ひを叙したるなり、言行並べ叙するは前段よりの例皆然り、

老聃曰、知其雄、守其雌、爲天下谿、知其白、守其辱、爲天下谷、人皆取先、己獨取後、曰、受天下之垢、人皆取實、己獨取虛、無藏也、故有餘、巋然而有餘、其行身也、徐而不費、無爲也、而笑巧、人皆求福、己獨曲全、曰、苟免於咎、以深爲根、以約爲紀、曰、堅則毀矣、鋭則挫矣、常寬容於物、不削於

尹老聃の學術の大略を擧ぐ、

【通釋】萬有の由りて生ぜし本、卽ち無を以て精と爲し、有形の物を以て粗と爲す、末たり粗たる物は、如何ほど之を積むも、猶ほ以て不足なりとし、金銀財寶などに心を留めず、淡然として明神卽ち道本と居り、自然を守る、古の道術は是の道に居ることある者あり、關尹老聃は其の風を聞きて之を悅び、此の主義を主張せり、先づ道の最も貴き有る無きを以て、其の學の基本を建て、太一卽ち無有の初めの一を以て其の學の主と爲し、柔弱謙和して物の先と爲らざるを以て、世に處し人に接する外面の行ひと爲し、空虛にして萬物を毀損せざるを以て、內の實德と爲す、是れ關尹老聃の學術の大意なり、

【解義】〔以本爲精〕本とは、萬物の由りて生ぜし本、卽ち道なり、天道篇に、夫虛靜恬淡寂漠無爲萬物之本とあり、是れなり、〔澹然〕無欲の貌卽ち恬淡寂漠なり、〔關尹〕「釋文」に云ふ、關令尹喜なり、或は云ふ、尹喜字は公度、兪樾曰く、漢書藝文志の道家に、關尹子九篇あり、注に云ふ、名は喜、關吏と爲ると、或は尹喜を以て姓名と爲すは、之を失す、又曰く「釋文」に云ふ、老子喜の爲めに書十九篇を著すと、考するに老子一書、漢志（漢書の藝文志）に鄰氏經傳四篇傅氏經說三十七篇徐氏經說六篇あり、未だ十九篇の說あるを聞かず、「呂覽」不二篇、關尹貴淸の高注に、關尹は關正なり、名は喜、道書九篇を作る、能く風角を相し、將に神人あらんとするを知る、而して老子到る、喜之を說び、請うて上至經五千言を著はすと、上至經の名他書の未だ見ざる所也、〔建之以常無有〕常とは不變の謂にて物は變ずるなれども、道は變ずる無し、謂はゆる道は始なく終なし、天地盡くるあるも、道は盡くる無し、故に老莊一派常を以て形容す、「老子」の道可道非常道の常の如き卽ち是なり、常無有とは虛無の道を指して云ふ、〔主之以太一〕太は至大無上の謂なり、一とは不二なり、成玄英曰く大道曠蕩にして制圍せざるなし、萬有を括囊し通じて一と爲す、故に之を太一と謂ふ、〔濡弱謙下爲表〕濡は懦と通ず、濡弱謙下は老子の所謂天下之至柔馳騁天下之至堅、及び江流所以能爲百谷王者、以其善下之故能爲百谷王、是以聖人欲上民、必以言下之、欲先民、必以身後之意なり、表は外なり、

らず、田駢は彭蒙を師とし、教へざるを以て教と爲すの教旨を學び得たり、彭蒙の師曰く、古の道人は、是とすることも無く、非とすることも無く、是非善惡の別を廢するを以て道の極致と爲すと、其の學風實に奇怪にして、可とすべき所なく、而して其の言ふ所は常に生人の情に反し、民望に違うて、衆人に聚まり觀られず、而かも田駢等自身に於ては、意志を刻斷して圭角を除き去ることを免れず、自他共に何等の益なし、之を要するに、其の謂ふ所の道なる者は、眞の道に非ず、而して言うて是とする所は、反つて非を免れず、則ち彭蒙田駢愼到は、皆未だ道を知らざる者なり然りと雖も、彼等は叉嘗て道の大概を聞きたることある者なり、たゞ其の一偏を得て、道の全を得ざるのみ、

【解義】〔得不教焉〕不教は不言之教に同じ、〔其風窢然惡可〕窢は、「釋文」に、字亦罭に作り、又闕に作るとあり、郭象曰く、逆風動く所の聲と、按ずるに、窢の字は經傳に見えず、たゞ此處に見ゆるのみ、罭は魚網なり、闕は門限なり、皆此處の意に當らず、窢は盚し惑の假借なり、「呂覽」審爲篇、世必惑之の高注に、惑は怪なり、「國語」魯語、惑之の韋注に、惑は疑怪なりとあり、惑とすれば、上文の適得怪焉の怪と照應し、文義明通す、郭象の逆風動く所の聲と爲すは、下文の常反人を探りて妄りに訓を作せるに過ぎず、據あるに非ず、郭象は其風窢然惡可而言の下に於て注を出だし、八字を以て一句と爲す、今其風窢然惡可の六字を以て一句と爲し、而言常反人を以て又一句と爲す、惡は何なり、惡可は可に非ざるを謂ふなり、〔不免於魭斷〕魭斷は上文の輐斷に同じ、亦魭は刓と爲して讀むべし、〔所言之韙〕郭象曰く韙は是なり、

以本爲精、以物爲粗、以有積爲不足、澹然獨與神明居、古之道術有在於是者、關尹老聃聞其風而悅之、建之以常無有、主之以太一、以濡弱謙下爲表、以空虛不毀萬物爲實、

【大意】道の大本に合し、神明と居るを主とする關

名」に、踝在足旁とあり、磽确も亦其形の踝踝然たるに因るなり、謑髁は堅确にして能く恥辱を忍ぶを謂ふ、「釋文」に謑髁は訛倪不正の貌と云ひ、王は謹刻なりと云ふ、均く未だ望文生義を免れず、「釋文」に無任は施任する所なきなり、〔笑天下之尚賢〕尚は上と通ず、尚賢は上賢なり、下の大聖と對文、其義同じ、尚賢者を尊崇すと解するは非なり、〔椎拍輐斷〕椎拍は椎にて擊つ、輐は刓と同じ、削るなり、皆圭角を去るの義、〔魏然〕成玄英曰く、獨立の貌、〔磨石之隧〕「釋文」に隧、は音「遂」、回なり、成玄英も亦曰く、隧は轉なり、

田駢亦然、學於彭蒙、得不教焉、彭蒙之師曰、古之道人、至於莫之是莫之非而已矣、其風窢然惡可而言、常反人、不聚觀、而不免於鯇斷、其所謂道非道、而所言之韙、不免於非、彭蒙田駢愼到不知道、雖然槩乎皆嘗有聞者也、

【大意】此節は、田駢彭蒙も亦愼到と同じく、生人の道に非ずして、自ら刓斷を免れざるを言ひ、遂に三子を總論して不知道の一語に歸着す、〇以上の四節を合して第四段と爲し、彭蒙田駢愼到の學を論ず、此の學派は、齊物と言ひ、棄知去己と言ふ、頗る莊子の言と似たる者あり、物に同ずるに專らにして、無知の物に齊しからんとし、土塊を學べと言ふに至りては、たゞ智を棄つるのみならず、全く生を去るなり、莊子の死生を一貫とし、生に執着せざるのみにして、死も亦生なりと爲すに同じからず、是れ三子の不知道と斷論せらるゝの已むを得ざる所以なり、此處を能く分辨して觀るを要す、但し墨子や宋鈃尹文とは異なりて、道に近き者あり、是れ末尾に又之を揚げて、槩乎皆嘗有聞者也と曰ふ所以なり、墨翟より宋鈃、而して彭蒙等三子、道に遠き者よりして漸く近き者に及び、遂に老聃莊周に入る、是れ此篇論述の順序なり、

【通釋】田駢の主張する所の學術も、亦愼到に異な

能く恥辱を忍び自ら任ずるに事を以てせず、而して能く事に任ずる天下の大賢を笑ひ、己れは縦肆脱略行爲に覊束なく、仁義の德行を爲さず、而して聖智德行ある天下の大聖の行ひを非とせり、椎を以て物を擊つが如くして、全く圭角を削り去り、毫も廉隅なからしめ、たゞ能く宛轉して物と推移し、事の是と非とを問はず、苟も一時の煩累を免るゝを得れば足れりと爲し、毫も知慮を用ひず、事の前後本末をも知らず俗と同塵し、たゞ自己の本性を守り、巍然と獨立して毀損せらるゝことなし、總て推されて而して行き、曳かれて而して往き、意思を其の間に用ふることなし、其の狀宛も飄風の回ぐるが如く、落つる羽毛の空中に舞ひ旋くるが如く、磨きたる石の光滑にして善く回轉し、滯礙なきが如く、物と宛轉して抵抗すること無し、故に身常に安全にして、誹らるゝこと無く、動くに於ても靜かなるに於ても過失なく、未だ嘗て罪を得ることあらず、是れ何の故ぞ、夫の木石瓦礫の如き無智の物は、たゞ人に由りて動靜するが故に、己の意見を建つるが爲めの禍無く、又己の知慮を用ふるが爲めの煩累も無きと同じく、動靜ともに理に離れず、是を以て其の身の終るまで稱譽せらるゝこと無く、從つて又誹譏せらるゝことも無きなり、故に曰く、人は全く無知の物の如くなるを得ば足れり、聖賢と爲ることを勉むるを用ひず、唯形ちあるのみにて何等の智情もなくして夫の土塊は眞に道を失はざる者なれば、人も宜しく土塊となることを學ぶべしと、豪傑の士相共に之を笑うて曰く、愼到の道は、世上に生活する人の行ふべき道に非ず、其の理とする所は、死人に至るの理のみ、道理に非ずして、適に奇怪と爲すべきのみと、豪傑の語を借りて、愼到の方術を斷せしなり、

【解義】〔冷汰於物〕「釋文」に云て、冷汰は猶沙汰のごとし、羅勉道曰く、冷は淸冷の意、汰は洗滌の意、冷汰於物とは、猶ほ事に遇うて灑脫すと言ふが如し〔薄知〕少智に同じ、〔鄰傷之者也〕孫詒讓曰く、「考工記」に鮑人、雖敝不甐とあり、古書に甐或は鄰に作る、此の鄰も亦同じと、甐は「ヤブル」と訓す、〔謑髁無任〕郭崇燾曰く、「說文」に謑詬恥也と、謑一に謨に作る、賈誼の治安策に、謨詬無節とあり、髁は髀骨なり、髁通じて跨に作る、「廣韻」に、跨同踝とあり、「釋

疑ふらくは誤字ならん、道は物に非ず、固より形なし之を有形の天地二物と並擧すべからず、且つ下文の道則無遺者矣と礙す、以て其の誤字なるを知るべし、

是故愼到棄知去己、而緣不得已、冷汰於物以爲道理、曰、知不知、將薄知而後鄰傷之者也、謑髁無任、而笑天下之尙賢也、縱脫無行、而非天下之大聖、椎拍輐斷、與物宛轉、舍是與非、苟可以免、不師知慮、不知前後、魏然而已矣、推而後行、曳而後往、若飄風之還、若羽之旋、若磨石之隧、全而無非、動靜無過、未嘗有罪、是何故、夫無知之物、無建己之患、無用知之累、動靜不離於理、是以終身無譽、故曰、至於若無知之物而已、無用賢聖、夫塊不失道、豪傑相與笑之曰、愼到之道、非生人之行、而至死人之理、適得怪焉、

【大意】　愼到の道とする所を詳述し、而して終に其の生人の行に非ず、道を得ずして徒に怪を得るを斷ず、

【通釋】　この故に、愼到は知を棄て己を捨て、凡べて事を處するに我意を出だすこと無く、自然の已むを得ざるに緣りて之を爲し、事物の外に灑脫し、これを以て道理と爲して、曰く、人智の知る能はざることを强ひて知らんとするは、是れ自己の智を用ひて、而して終には之を傷害する者なりと、己れを堅确にして

て行ふ、古の道術は是の自然に任せて知慮を用ひざる所に在る者あり、彭蒙田駢愼到は其の風を聞きて之を悅び、此の主義を主張せり、

【解義】〔公而不當〕「釋文」に、崔本黨に作りて云ふ至公にして黨無きなりと、盧文弨曰く、不黨に作るは是なり、〔彭蒙〕姓は彭、名は蒙、田駢愼到と皆齊人なり、稷下に游び、書數篇を著す、兪樾曰く、下文に據れば、彭蒙は當に是れ田駢の師なるべし、意林に尹文子を引き、彭蒙曰、雉兎在野、衆皆逐之、分未定也、雞豕滿市、莫有志者、分定故也とあり、〔田駢〕兪樾曰く、「漢書」藝文志の道家に、田子二十五篇、名駢、齊人、遊稷下とあり、「呂覽」の不二篇に、陳駢貴齊とあり、卽ち田駢なり、「淮南」の人間篇に、唐子短陳駢子於齊威王云云とあり、卽ち田駢の事實なり、亦以て齊に貴きの一端を見るべし、

齊萬物以爲首、曰、天能覆之、而不能載之、地能載之、而不能覆之、大道能包之、而不能辯之、知萬物皆有所可、有所不可、故曰、選則不偏、敎則不至、道則無遺者矣、

【大意】彭蒙等の、萬物を齊くするを以て第一と爲すを言ひ、其方術の大略を擧ぐ、

【通釋】彭蒙等は萬物を齊同するを以て第一の工夫と爲して曰く、天は上に在りて能く覆へども、載すること能はず、地は下に在りて能く載すれども、覆ふこと能はず、大道は能く之を包圍すれども、微細に辨別すること能はず、天地は大なりと雖も亦究竟物なり、而して各一端に偏して兼ぬる能はざるを觀れば、以て萬物の各皆可なる所あり、不可なる所あるを知るべし、故に曰く、凡そ物は彼是を選擇する所あるときは、各可不可ありて周偏ならず、之を敎へて善ならしめんとするも、盡く敎ふるを得べきに非ず、唯道の自然に任せて選擇せず敎へざれば、則ち萬物皆齊くして遺すことなし、此を第一の工夫と爲すと、

【解義】〔大道能包之而不能辯之〕按ずるに、道の字

飽」按ずるに、此れ五升之飯足矣に就きて、世人の言ふ所にて、宋鈃尹文の語に非ず、郭象曰く、宋鈃尹文、天下を稱して先生と爲し、自ら稱して弟子と爲すなりと、天下の人老少一ならず、盡く之を呼びて先生と爲すの理なし、先生は宋鈃尹文を指し、弟子は其の徒を指すを可とす、〔我必得活哉〕按ずるに、我自ら飢餓を甘んず、豈必ず生活を得るを欲せんやと言ふ、利の爲めにせざるを謂ふなり、〔圖傲乎救世之士哉〕「釋文」に圖傲の二字を連讀するは非なり、按ずるに、圖は期圖なり、言ふは、我れ自ら屈辱を甘んず、豈敢て自ら救世の士たるを傲らんことを期せんやと、名の爲めにせざるを謂ふなり、〔以爲无益於天下者明之不如己也〕按ずるに、无益於天下者は戰陣の法射擊の技を謂ふ、言ふは、戰鬪の術を講明するは、止めて爲さゞるに如かざるなりと、〔君子不爲苛察〕「釋文」に苛一本に苟に作る、郭慶藩曰く、苛一本に苟に作るは非なり、古書句に從ひ可に從ふの字、往々隸變に因りて譌る、苛の苟に作るも、亦形似の誤りなり、漢巴郡太守張納碑の犴無拘紲人の拘を抲と作し、胸忍蠻夷の朐を眗と作し、冀州從事郭君碑の凋柯霜榮の柯の字を枸と作す、「說文」に抲の字の解に酒誥を引て曰く、盡執抲を今本には抲を拘に作る、攷工記妢胡之笴を注に故書笴を笱に爲ると、杜子春云ふ、笱當に笴に作るべしと、「管子」五輔篇の上彌殘苛而無解舍の苛、今本譌りて笱に作る皆其明證なりと、

公而不當、易而無私、決然無主、趣物而不兩、不顧於慮、不謀於知、於物無擇、與之與往、古之道術有在於是者、彭蒙田駢愼到聞其風而悅之、

【大意】　事物の自然に任せて、人の知慮を用ひざる、彭蒙田駢等の方術の大略を擧く、

【通釋】　公平にして阿黨せず、平易にして偏私すること無く、何に事も理の當然によりて決斷し、自ら主持する所無く、事物の趨く所に隨ひ任せて一致し、之と兩立して忤ふことなく、心慮に顧み思はず、知巧に謀り考へず、事物の如何を問はず、皆其の自然に順ひ

天下者、明之不如已也、以禁攻寢兵爲外、以情欲寡淺爲內、其大小精粗、其行適至此而止、

【大意】多く宋鈃尹文の言を引きて之を評し、遂に之を論斷す、○以上の三節を合して第三段と爲す、宋鈃尹文の學術を叙述して之を論じ、情慾を寡くして攻伐を禁ぜんとするに止まり、未だ道術の全を得ず、方術の一たるに過ぎざるを斷ず、今日歐洲學者の唱ふる平和主義非戰主義は、支那の戰國時代に於て既に之を唱ふる學者ありしを知るべし、

【通釋】宋鈃尹文は、寛宥して物我相犯さゞるを主張すと雖も、其の人の爲めにすることは太甚だ多くして分に過ぎ、自己の爲めにすることは太甚だ少し、其言に曰く、世人の固く我が敎を守り、互に懽樂し安寧を致されんことを願望す、我はたゞ五升の飯あれば足れりと、此くの如くにては、先生も恐らくは飽食するを得ず、弟子は飢餓するに至らん、然れども猶自己の苦を忍びて、世人の爭ひを救ひ、天下を安寧にせんことを忘れずして、日夜休息することなし、又曰く我の之を主張するは、何ぞ必ずしも生活を求むるが爲めにせんや、又何ぞ世を救ふの仁人なりとの美名を得て人に傲ることを圖らんやと、又曰く、君子は人を寛恕して苛察を爲さず、自己の身を飾るが爲めに、濫りに物を假り用ふることを爲さずと、要するに此の學派の人は以爲らく、天下に無益なる戰鬪の術、擊刺の技、其の他道に乖き物に逆ふ等、すべて平和安寧に害あることは、之を講明するは、愈々世の爭亂を大にするのみなれば、之を廢止して爲さゞるに若かずと、攻伐を禁止し、兵事を止息するを以て、身外の實行と爲し、情欲を寡淺にし、名譽を忘れ、安飽を求めざるを以て、內心の修養と爲し、其の敎とする所、小にも大にも、精にも粗にも其の身心の行ひ、適に此に至りて止まり、此の外また廣大精微の意あること無し、一方術たるに過ぎざるのみ、

【解義】〔諸欲固置〕按ずるに、上文の請欲置之以爲主と同じく、世人の必ず其敎に從ひて合驩安寧を致さんことを願ふなり、郭象は下文の五升之飯足矣と連讀して一句と爲せども是ならず、〔先生恐不得

其の親昵主義を以て人と人との懽樂を和合し、猶之を推し廣めて、諸侯を互に相親睦せしめて海内を調理し、天下の萬民をして毫も爭鬪戰亂に苦しましめず、和氣靄靄たる裡に生活せしめんとす、世人の皆之を立てゝ主と爲さんと欲し、此の主義を貫くが爲めには、人より輕侮せらるゝも、以て恥辱と爲さずして民の戰鬪を救ひ、攻伐を禁止し兵爭を息めて、世の戰鬪を救はんとし、偏く天下を周行して、上は王侯に說き、下は百姓に敎諭し、天下の人其の議論を取らざるも、猶屈せず倦まず、强ひて聒しく說きて止まざるなり、故に世人は之を譏りて、上下に皆厭ひ嫌はれて、猶强ひて謁見を求むる者と曰うて之を笑へり、

【解義】〔華山之冠〕華山は山の名五岳の一、「釋文」に曰く、華山は上下均平なり、冠を作りて之に象どり己の心の均平なるを表はすなり、〔語心之容〕章炳麟曰く、容借りて欲と爲す、同に谷聲に從ひ、東侯對轉すればなり、「樂記」の感於物而動、性之欲也を「樂書」には性之頌也に作る、頌容は古今の字、頌、借りて欲と爲す、故に容も亦借りて欲と爲す、「荀子」正論篇に、子宋子曰、人之情欲寡、而皆以己之情爲欲多と、是れ宋鈃心の欲を語るなり、〔命之曰心之行〕陸樹芝曰く、上文墨子の命之曰節用に照せば、亦是れ著書の篇名なるべし、〔以聏合驩〕「釋文」に云ふ、聏、崔音而、郭音餌、崔郭王云ふ、和なり、章炳麟曰く、聏借りて而と爲す、釋名に餌は而なり、相ひ黏而するなりと、是れ古語而を訓して黏と爲す、其の本字は卽ち當に暱に作るべし、暱或は昵に作る、左氏傳の不暱、說文に引て不䵒に作る、䵒は黏なり、相親暱するは、本黏合の意あり、故に此に以而合驩と言ふ、亦卽ち以暱合驩なり、〔寢兵〕成玄英曰く、寢は息なり、

雖然其爲人太多、其自爲太少、曰、請欲固置五升之飯足矣、先生恐不得飽、弟子雖饑不忘天下、日夜不休、曰、我必得活哉、圖傲乎救世之士哉、曰、君子不爲苛察、不以身假物、以爲無益於

の謂はゆる平和主義なり、古の道術は是の平和に在る者あり、宋鈃尹文の徒は、其の風を聞きて之を悅び此の主義を主張せり、

【解義】〔不苟於人〕章炳麟曰く、苟は苛の誤りなり漢時の俗書、苛苟相亂る、下文の不爲苛察の苛、一本に苟に作る、亦其の例なり、按ずるに、章說用ふべし、苛に作りて人民を苛刻にせずと解すれば、下句の不忮於衆とも對して、意義明瞭なれども、不苟にては解を費す、〔不忮於衆〕忮は害なり、〔以此白心〕「釋文」に崔云ふ、白或は任に作ると、按ずるに、本文のまゝにて其心を明白にすと讀むも、通せざるには非ざるも、一本に從ひて任に作り、心此を以て自ら任ずと解するの優れるに若かず、〔宋鈃〕成玄英曰く、姓は宋、名は鈃、齊の宣王の時、稷下に遊び、書一篇を著はす、按ずるに、宋鈃は孟子に遇ひたる宋牼と同人ならん、其の共に戰を非とし平和を愛すると、鈃(音ケイ又ケン)牼(音カウ又ケイ)の音相近きは、以て證と爲すべし、〔尹文〕成玄英曰く、姓は尹、名は文、兪樾曰く、「列子」の周穆王篇に、老成子學幻於尹文先生とあり、未だ卽ち其の人なりや否やを知らず、「漢書」藝文志に、尹文子一篇、名家に在り、師古曰く、劉向云ふ、宋鈃と俱に稷下に遊ぶと、

作爲華山之冠、以自表、接萬物以別宥爲始、語心之容、命之曰心之行、以胹合驩、以調海內、請欲置之以爲主、見侮不辱、救民之鬪、禁攻寢兵、救世之戰、以此周行天下、上說下教、雖天下不取、强聒而不舍者也、故曰、上下見厭而彊見也、

【大意】前を承けて、宋鈃尹文の平和主義を詳述す、

【通釋】上下均平なる華山の形に象りたる冠を作り常に之を戴きて其の主義を表はし、他の人物に接するには、人我を別ちて相侵逼せず、之を寬宥して苛刻にせざるを以て第一と爲す、因て其の心の欲する所を語りて、書を著はし、之を名づけて心之行と曰ひ、

派に比して特に之を詳論するは墨子は儒學と並立して、當時最も有力の學派なるを以てなり、

〔通釋〕 之を要するに、墨翟禽滑釐は、禹の勤儉を以て宗旨と爲せる者なれば、其の意は則ち是なれども、其の行ふ所は餘りに極端に馳せて、甚だ非なり、後の墨子の道を奉する者をして、必ず自ら苦み、腓に胈無く脛に毛無きを以て相尊び相進ましめんとするのみ、是れ物に逆ひ性を傷ふ、荒亂の上首にして、治術の最下なり、取るに足らざるなり、然れども墨子の此の如く自ら苦むは眞に天下の人を愛好するに出づるなり、天下を兼利し兼愛せんことを求めて、未だ其の手段を得ず、故に自ら苦みて枯槁するに至ると雖も止めざるなり、才士なるかな、

【解義】 〔墨子眞天下之好也〕 兪樾曰く、眞天下之好とは、其の眞に天下を好みするを謂ふなり、即ち所謂墨子の兼愛なり、下文に曰く、將求之不得也、雖枯槁不舍也と、此の求の字は即ち心誠求之（大學に見ゆ）の求なり、求之不得、雖枯槁不舍は、即ち所謂摩頂放踵、利天下爲之（孟子）なり、〔才士也夫〕夫は歎辭、成玄英曰く、物に逆ひ性を傷ふ、誠に聖賢に非ず、亦勤儉して世を救ふ、才能の士のみと、按ずるに、才士の義、成說之を得たり、或は以て才佞巧僞の義と爲す者は誤る、

不累於俗、不飾於物、不苟於人、不忮於衆、願天下之安寧以活民命、人我之養畢足而止、以此白心、古之道術有在於是者、宋鈃尹文聞其風而悅之、

【大意】 人物を愛し、安寧を求むる、宋鈃尹文の方術の大略を擧ぐ、

【通釋】 務めて世俗の紛擾を去りて之を煩累せず、物を假り用ひて自己の威重を粧飾することを爲さず、寬大にして人の內情を苛察せず、衆民を安慰して之を損害せず、たゞ天下の安寧にして戰亂無く、人民の生命を安全に生活せしめんことを願ひ、人と我と相與に斯の生を養うて滿足するを得るを度と爲し、其の餘を求めず、唯此の事を以て自ら心に任ず、即ち今

に墨經を誦すれども、其の執る所各背き離れて同じからず、互に己を本宗とし、他を排して彼は互に自ら別派の墨徒なりと謂ひ、堅白同異の强辨を以て相詆譏し、奇偶不合の辭を以て相應答して止まず、墨翟の道を得たる巨子を以て聖人と爲し、皆之を得て其の主と爲さんことを願ひ、墨子の學の正傳を得たる後裔と爲らんことを願ひ、今に至るまで相爭うて決せず、

【解義】〔相里勤〕「釋文」に司馬云ふ、墨師なり、姓は相里、名は勤、兪樾曰く、韓非子顯學篇に、有相里氏之墨、有相夫氏之墨、有鄧陵氏之墨、とあり、〔五侯〕成玄英曰く、墨を學ぶの人なり、按ずるに、五侯も亦人の姓名、五爵諸侯に非ず、羅勉道の說從ふべからず、〔苦獲已齒〕「釋文」に云ふ、二人の姓名なり、〔倍譎〕倍は背なり、「釋文」に崔云ふ、譎は決なり、〔觭偶不仵〕觭偶は奇偶に同じ、「釋文」に云ふ、仵は同なり、成玄英曰く、仵は倫なり、〔巨子〕「釋文」に云ふ、向崔本鉅に作る、向云ふ、墨家其の道理成る者を號して鉅子と爲す、儒家の碩儒の若し、王闓運異說あり、曰く、巨子は矩なり、墨は工みに器を制し、至る所、矩を執り以て往く、海外遂に之を奉祀す、今の耶蘇天敎奉ずる所の十字架なり、師弟ありて父子無しと、其の牽强笑ふべし、〔皆願爲之尸〕郭象曰く、尸は主なり、

墨翟禽滑釐之意則是、其行則非也、將使後世之墨者自苦、以腓無胈脛無毛相進而已矣、亂之上也、治之下也、雖然墨子眞天下之好也、將求之不得也、雖枯槁不舍也、才士也夫、

【大意】此の一節は、前に叙述せし所を綜括して、墨子の學を論定せしなり、其の意は是なるも其行ひは非、但し其非も天下を兼愛するの篤きに出て、他意あるに非ず、故に遂に墨子を目するに才士を以てし、有道有德者を以て之を許さず、○以上の六節を合して第二段と爲す、墨翟の學術を叙述論駁して、其の道術の全を得ず、方術の一たるに過ぎざるを斷ず、他の學

を言ふ、故に九雜天下之川と曰ふなりと、章炳麟曰く、九は當に別本鳩字の義に從ふべし、然れども九に作る者は是れ故書、褋借りて集と爲す、〔腓無胈脛無毛〕腓は脛後の肉なり、胈は小毛なり、二句亦在宥篇に見ゆ、〔沐甚風櫛疾風〕盧文弨曰く、此れ甚雨を以て櫛字の上に在り、當に本は是れ沐甚雨櫛疾風なるべし、文義較々順なり、「淮南」修務訓に云ふ、禹沐浴霪雨櫛扶風と、以て證と爲すべし、「淮南」の浴の字は乃ち衍文なり、李善「文選」の和王著作八公山詩を注して淮南を引き、沐淫雨櫛疾風に作る、「釋文」に云ふ、崔本甚を湛に作る、音淫と、郭慶藩曰く、崔本甚を湛に作るは是なり、湛は淫と同じ、「論衡」明雩篇に、久雨爲湛と、湛は卽ち淫なり、太史公自序(史記)に帝辛湛湎とあり、揚雄光祿勳箴には桀紂淫湎とあり、淫湛義同く、字も亦相通ず、攷工記(周官)に慌氏淫之以蜃、杜子春云ふ、淫當に湛と爲すべしと、淮南脩務篇には正に禹沐淫雨に作る、「淮南」覽冥篇に、東風而酒湛溢とあり、湛溢は卽ち淫溢、酒東風を得て加長ずるを謂ふなり、「春秋繁露」同類相動篇に、水得夜長數分東風而酒湛溢と皆其の證なり、〔置萬國〕置は立なり、國は城邑なり、多く諸侯を封ぜしを謂ふに非ず、〔以裘褐爲衣〕成玄英曰く裘褐は粗衣なり、〔以跂蹻爲服〕「釋文」に李云ふ、麻を屩と曰ひ、木を屐と曰ふ、屐は跂と同じく、屩は蹻と同じ、一に云ふ、鞋の類なり、

相里勤之弟子、五侯之徒、南方之墨者、苦獲已齒鄧陵子之屬、俱誦墨經、而倍譎不同、相謂別墨、以堅白同異之說相訾、以觭偶不仵之辭相應、以巨子爲聖人、皆願爲之尸、冀得爲其後世、至今不決、

【大意】　墨翟死後の墨徒の派を分ちて相爭ひ、一致せざることを叙す、

【通釋】　相里勤の弟子や、五侯の徒や、南方の墨者たる苦獲已齒鄧陵子の屬徒やは、皆墨子の末流にて、俱

【通釋】　墨子其の道の本づく所を稱して曰く、昔禹の洪水を塞ぎ止め、江河の下流に積もりし泥土を決り開きて之を海に注ぎ、四夷九州の往來を通ぜしとき、大川三百、支流三千、其餘無數の小水、皆盡く汎濫横流したるを、禹躬自ら橐耜を操りて、小川より支流に、支流より大川にと聚め注がしめたり、此の大工事の爲めに、禹は腓に胈無く、脛に毛無きに至り、身を淫雨に沐し、髮を疾風に櫛けづり、遂に以て水土を平げ、多くの城邑を置き、人民を安樂に住居せしめたり夫れ禹は大聖人なり、而るに尙天下の爲めに艱苦辛勞せられしこと此くの如しと、因て後世の墨子の徒たる者をして、禹を師法と爲し、粗末なる裘褐を衣と爲し、草叉は木にて造りたる履を用ひしめ、日夜勞作して休息すること無く、自ら苦むを以て道理の妙極と爲して曰く、此くの如くなる能はざれば、禹の道に非ざるなり、墨者と謂ふに足らずと、

【解義】　〔湮洪水〕「釋文」に云ふ、湮は塞なり、〔名山三百〕兪樾曰く、名山は當に名川に作るべし、字の誤りなり、名川支川は猶大水小水と言ふが如し、下文に曰く、禹親自操二橐耜一而九二雜天下之川一と、此文は專ら川を以て言ひ、當に山を言ふべからざるを見るべきなり、若し但支川を言うて名川を言はざれば、則ち是れ流を擧げて其の原を遺す、文に於て備はらずと爲す、襄十一年の左傳に曰く、名山名川と、是れ山川並びに名と言ふを得、學者多く名山を見て名川を見ること尠し、故に誤て之を改むるのみ、「呂氏春秋」始覽篇、「淮南子」墜形篇並びに名川六百と曰ふ、郭慶藩曰く、名川は大川なり、「禮」の禮器に、因二名山一升二中於天一の鄭注に、名は猶大の如し、王制（禮記の篇名）に名山大川と言ひ、月令（同上）に大川名源と言ふ、其の言一なり、魯語（國語）の取二名魚一の韋注に名魚は大魚なり、秦策（戰國策）賂二之一名都一の高注に、名は大なりと、此れ皆名を訓して大と爲すの證なりと、我が朝藤澤東畡、亦嘗て名山を名川と改むべしと云へり、〔操橐耜〕「釋文」に司馬云ふ、橐は土を盛る器なり、又三蒼を引て曰く、耜は耒頭の鐵なり、〔九雜天下之川〕「釋文」に云ふ、九本亦鳩に作る、聚なり、崔云ふ、治むる所一に非ず、故に雜と曰ふなり、郭崇燾曰く、「玉篇」に雜は同なり、「廣韻」に雜は集なり、書序に決九州とは、諸川の水を雜匯して大川に同會せしむる

情の自然に發する者にて、之を廢せんとするも廢する能はざるなり、而るに墨子は歌ふことを非と爲し、哭することを非と爲し、音樂を非と爲すは、是れ果して人の情に類するや否や、實に大に人情に近からざる者と謂ふべし、生存中は則ち勤苦を以て日を送り、死亡するときは薄葬して棄るが如くする墨子の道は薄きこと亦甚し、勤苦勞働を强ひ、人をして憂悲のみあらしめて、毫も歡樂無からしむることは、人の常行として爲し難きことなり、此くの如きは、恐らくは聖人中正の道と爲すべからず、天下の人心に反し、天下の堪へざる所なり、之を首唱する墨子のみは能く之に堪へ得るとするも、天下の堪ふる能はざるを如何せんや、斯く人情に近からずして、天下の人心に離るゝ道は、王道を去ること甚だ遠きものなり、

【解義】〔歌而非歌〕「釋文」に云ふ、人生きては應に歌ふべし、而るに墨は以て非と爲すなり、〔其道大觳〕郭崇燾曰く、「爾雅」の釋詁に觳盡也とあり、「管子」地員篇に、淖而不刖、剛而不觳、其下土三十物、又其次曰五觳とあり、觳は薄なり、「史記」の始皇本紀に、雖監門之養不觳於此矣とあり、此より薄からざるを言ふなり、墨子の道、自ら處するに薄を以てす、「郭象」は觳無潤也と注せり、

墨子稱道曰、昔者禹之湮洪水、決江河而通四夷九州也、名山三百、支川三千、小者無數、禹親自操橐耜而九雜天下之川、腓無胈、脛無毛、沐甚風、櫛疾雨、置萬國、禹大聖也、而形勞天下也如此、使後世之墨者、多以裘褐爲衣、以跂蹻爲服、日夜不休、以自苦爲極、曰、不能如此、非禹之道也、不足謂墨、

【大意】墨子其道の禹に本づくを謂ひ、禹の治水に勞し、辛苦節儉したるを師法と爲すべきを其の徒に勸むることを叙す、

には大韶の樂あり、禹には大夏の樂あり、湯には大濩の樂あり、文王には辟雍の樂あり、武王周公は武の樂を作り、古の五帝三王、皆其樂あらざることなし、又禮は喪禮を以て重しとす、故に古の帝王は貴賤上下に從て皆儀法ありて、其の秩序を定めたり、即ち天子を葬むるには、内外の棺槨七重とし、諸侯は五重とし、大夫は三重とし、士は再重とし、決して犯すべからざる者と定めたり、而るに墨子はすべて此の禮樂を奢侈と認めて之を毀棄し、歌樂を以て生を樂ましむることも無く、死するも喪服を服すこと無く、槨即ち外箱を作ることを廢し、僅に厚さ三寸の朽ち易き桐を以て棺を作るを法式と爲せり、斯る節儉して歡樂せざるを以て人を敎ふるは、墨子は自ら以て人を愛利する心なるべきも、恐らくは人を愛利することに爲らず、又此を以て自ら行はふは、固より己を愛せざるなり、但し未だ此を以て墨子の道を敗るには至らざるなり、

【解義】〔又好學而博不異不與先王同〕章炳麟曰く、又好學而博を句と爲し、不異を句と爲し、不與先王同を句と爲す、言ふ、墨子は既に苟も異を立てず、亦一切從ひ同ぜず、異ならざる者は、天を尊び鬼を敬し儉を尙ぶ、皆淸廟の守の有る所の事なり、同じからざる者は、節葬非禮、古禮の本然に非ざるなりと、〔黃帝有咸池〕咸池は音樂の名なり、下の大章大韶等皆同じ、

雖然歌而非歌、哭而非哭、樂而非樂、是果類乎、其生也勤、其死也薄、其道大觳、使人憂、使人悲、其行難爲也、恐其不可以爲聖人之道、反天下之心、天下不堪、墨子雖獨能任、奈天下何、離於天下、其去王也遠矣、

【大意】墨子の道は薄きに過ぎて、人情に近からず、人の堪ふる能はざる所にて行はれ難く、聖人の道と大に異なるを言ふ、

【通釋】然れども人の喜びて歌ひ悲みて哭するは、

爲は作なり 墨子書中多く之を用ゆ、非樂節用は篇の名なり、今の墨子に二篇あり、宜く參考すべし、本城實生曰く、「釋文」に云ふ、非樂節用は墨子の二篇の名と此說に從て本文を解すれは、非樂篇を著はし、之を命けて節用篇と曰ふと言ふなり、文義を成さず、按ずるに、作爲は勤なり、非は不と通ず、不樂は儉なり、勤勞作爲してたゞ儉素を守り、敢て歡樂せす、故に之を命けて節用と曰ふなりと、

墨子汜愛兼利而非鬭、其道不怒、又好學而博不異、不與先王同、毀古之禮樂、黃帝有咸池、堯有大章、舜有大韶、禹有大夏、湯有大濩、文王有辟雍之樂、武王周公作武、古之喪禮、貴賤有儀、上下有等、天子棺槨七重、諸侯五重、大夫三重、士再重、今墨子獨生不歌、死不服、桐棺三寸而無槨、以爲法式、以此敎人、恐不愛人、以此自行、固不愛己、未敗墨子道、

【大意】 墨子の兼愛非鬭主義は古先聖王の道と同じからず、五帝三王皆其の樂あり、又最も禮法を重んず、而るに墨子は一切之を廢棄し、人をして生きて歌はず、死して喪服を服せざらしむるは、是れ人を愛せず又己を愛せざる者なるを言ふ、

【通釋】 墨子は親疏の別無く汎く愛し兼ね利して、群生をして皆自ら足らしめて鬭爭すること無く、鬭爭を以て人の爲すべきことに非ずと爲す、故に墨子の道は他に對して怨怒すること無きを以て主眼と爲す、又學を好みて博く古今の事を通知し、天を尊び鬼神を敬すること等は、古の聖王と異ならざるも、禮樂に於ては先王と同じからず、古の禮樂を皆無益有害として毀棄して用ひざるなり、夫れ音樂に就いて言はんに黃帝には咸池の樂あり、堯には大章の樂あり、舜

於數度、以繩墨自矯、而備世之急、古之道術、有在於是者、墨翟禽滑釐聞其風而說之、爲之大過、已之大循、作爲非樂、命之曰節用、生不歌、死無服、

【大意】 以下諸家を詳列して、道術の將裂を見ず、而して本段は墨翟勤儉の學は、固より道術の一邊なるも、墨子は之を守ること太甚しく、勤勞のみして歡樂せず、生るゝも歌はず、死するも葬喪の服を造らざるに至るを言ひ、墨子の學を略述す、

【通釋】 後世をして常に質素にして侈奢に流れしめず、濫に萬物を消費せず、禮樂を修め制度を飾りて外觀を明曜せず、專ら繩墨を以て己の志行を束縛し、矯拂して、決して必要以上に出でしめず、餘りあるを存して以て世民必要の用に供す、古の道術中には、固よりあり、淳樸にして不切の事を爲さゞる、此くの如き者あり、後世の墨翟禽滑釐は、其の風を聞きて之を悅び、此の一局部を認めて以て道と爲し、繩墨自ら矯むることは、力めて之を爲して太過に至り、不侈不靡不暉に於ても亦之を禁止すること太甚にして、少しにても此の道に違うて順はざることあらんかと恐れ、非音樂の說を作り爲して聊かも敢て休息歡樂すること無く、之を名づけて節用と曰ひ、固く此の主義を守りて、子生まるゝも喜びて歌ふこと無く、人死するも衣衾棺槨等葬儀に資するの服無し、蓋し歌樂は勤に害あり、喪服は無益に物を費やすと爲して之を爲さゞるなり、

【解義】〔不靡於萬物〕 按ずるに、荀子富國篇の以相顚倒、以靡歡之の高誘注に曰く、靡讀で糜と爲すと、賈子道術篇には、費弗過適、謂之節、反節爲靡と、あり、則ち不靡於萬物は、用を節して濫に物を費消せざるを謂ふなり、〔以繩墨自矯〕成玄英曰く、矯は厲なり、羅勉道曰く、繩墨を守りて以て自ら矯拂するなりと、按ずるに、成說非なり、羅說從ふべし、〔墨翟禽滑釐聞其風而說之〕「釋文」に云ふ、墨翟は宋の大夫、儉素を尙ぶ、禽滑釐は翟の弟子、五帝二王の樂に順はず、其の奢を嫌ふ、說音悅、〔作爲非樂命之曰節用〕は作

らず、鬱塞して發するを得ず、天下の人、各其の意の爲さんと欲する所を爲して、以て自ら其の方術を爲すのみ、悲きかな、百家は皆其の自ら道とする一方に奔り往きて根本に反歸すること無ければ、必す大道に合はず、故に後世の學者は、不幸にして天地の純美古人の內外を兼該せる大體を見るを得ず、嗚呼古の道術は天下の學者の方術を主張するが爲めに分裂せられて紛亂せんとすと、〔諸家形而上の學の亦一方に偏して、全德大體に通ぜざるを歎じ、其の道に大害あるを痛嘆す〕

【解義】〔天下多得一察焉以自好〕王念孫曰く、郭象は天下多得一を斷つて句と爲し、「釋文」に曰く、一偏を得一術を得と、案ずるに、天下多得一察焉以自好を當に一知と作して讀むべし、下文に云ふ、天下之人、各爲其所欲焉、以自爲方と、句法正に此と同じ、一察は其の一端を察して其の全體を知らざるを謂ふ、下文に云ふ、譬如耳目鼻口皆有所明不能相通と、卽ち所謂一察なり、若し一の字を以て上屬して句を爲し、察の字は下屬して句を爲せば、則ち文義を成さず、兪樾曰く、郭讀は義を成さず、當に王讀に從ふべし、惟れ一察を以て其の一端を察すと爲すは、義亦未だ安からず、察當に讀で際と爲すべし、一察は猶一邊の如きなり、「廣雅」釋詁に、際邊並に訓じて方と爲す是れ際と邊とは同義、得其一察は卽ち得其一邊なり、正に全體を知らざるの謂ひなり、察際並に發聲に從ひ、古音相同じ、故に通用するを得るのみ、下文に云ふ、不該不徧一曲之士也と、一際と一曲と、其義相近しと、〔不該不徧一曲之士也〕「釋文」に云ふ、徧音遍、按ずるに、此の句は百家衆技に就きて言ひ、前譬の不能相通と對文、諸家の方術に就きて言ふに非ず、〔天地之純〕純は不雜なり、上文の天下之美と同し、〔以自爲方〕方は方術なり、〔道術將爲天下裂矣〕郭慶藩曰く、裂は字に依りて當に列に作るべし、「說文」に、列は分解なり、「易」艮の九三に列其夤、「管子」五輔篇、曾子天圓篇（大戴禮）に、痤大袂列と、古は分解の字は皆列に作る、「說文」に、裂は繒餘也と、義各同じからず、今分列の字、皆裂に作り、而して列はたゞ行列の字と爲る、

不侈於後世、不靡於萬物、不暉

夫、百家往而不反、必不合矣、後世之學者、不幸不見天地之純、古人之大體、道術將爲天下裂、

【大意】 後世は大に亂れて、道德一ならず、學者皆道の一邊を得て、全體に通ぜず、自ら其道とする所を道とし、一方に奔逸して、根本に反ることを知らず、故に古の道術は今の學者の方術を主張するが爲めに分裂せられんとすと嘆じ、道に大害あるを謂ふ、以上四節を合して第一段とす、古の道術と今の方術とを比較し、道術は內聖外王を兼ね、古人は能く此の全體を具するを謂ひ、之を詳說して、先づ形而下の明知すべき者を撇却し、形而上の道德に於て、今の學者の一方に偏局して全體に通ぜず、僻說を主張して道を害するを嘆じ、全篇の主意を總論す、古今の字、道術方術の字、相對照して眼目と爲り、全篇を貫通す、以下今の方術を一々論列するなり、宣穎曰く精粗一貫、本末相該、此古人大道之學也、乃精微大本不可言傳、後學但得其粗者末者、以自據、則愈趨愈遠矣、史家據其典冊、士子據其六經、百家據其散數、嗚呼至於百家、尙可言乎其始末、嘗不本於古之支流餘裔、而濫觴不止、分爭乖隔、此莊子所以深歎於割裂之禍也と、

【通釋】 古人は全德を備へ居りしと前述の如くなるも、後世に及び、天下大に亂れて、聖人の道明かならず、諸家各、其の道とする所を道とし、其の德とする所を德として、道德一ならず、天下の學者は、多くは皆道の全體を知らず、其一邊のみを得て、以て自ら喜び復た加ふべからずと爲す、諸家の學は之を譬ふれば、猶耳の聽き、目の視、鼻の香を嗅ぎ、口は五味を分ち、皆各明かなる所あるも、其能たゞ一部分に止まりて、全體に通ずる能はざるが如し、又百工の或は衣服を裁縫し、器物を造り、家居を構へ、農圃の穀禾菜蔬を作りなどして、其の技皆各長ずる所あり、人生に要用なる所あるも、全體に兼通せず周遍せず、唯一局部に執滯するの士たるに止まるが如き也、之を判別するに天地の美を以てし、之を分析するに萬物の理を以てし、之を考察するに古人の全德を以てすれば、則ち其の說皆褊小にして、能く天地の美を備へ、神明の全體に稱ふ者寡し、是の故に、內に聖德を保ち、之を外に出して王業を成すの道術は、昏暗にして明かな

於て猶諸多の一方に偏したる方術あることを說き出だすなり、

【解義】〔配神明〕上文の神何由降明何由出を承け、宗を離れず、精を離れず、眞を離れざるを謂ふ、〔醇天地〕章炳麟曰く、醇は借りて準と爲す、地官質人の壹其淳制の「釋文」に、淳音準とあり、是れ其例なり、易に曰く、易與天地準と、配神明淳天地の二句は同意なり、〔明於本數〕萬物皆通の一に出づ、故に末度に對して道を本數と謂ふなり、「宣注」に本舉而末從也、係字妙とあり、〔六通四辟〕宣穎曰く以下三句にて一括す謂はゆる備はる者は此の如しと、「釋文」に云ふ、辟又闢に作ると、辟は闢の省のみ、別字に非ず、闢は開なり、古人神聖の德四方に及ぶを謂ふ、〔其明而在數度云云〕以下古人の神明傳はらずして而も其の見るべき者三項ありて、後に傳ふるを言ふ、〔鄒魯之士〕成玄英曰く、鄒は邑名なり、魯は國號なり、「釋文」に云ふ、鄒は孔子の父の封ぜられし邑、〔搢紳先生〕搢或は縉に作る義同じ搢は挿なり、笏を大帶の間に挿むなり、紳は大帶なり、卿大夫を謂ふ、先生は儒士なり、〔詩以道志〕成玄英曰く、道は達なり、通なり、以下六句六經を註明して、此の六經の一項は士子の由りて傳ふる所なるを言ふ、〔其數散於天下云云〕以下三句此の散數の一項は百家の由りて傳ふる所なるを言ふ、以上の分項は宣穎の說に依る、

天下大亂、賢聖不明、道德不一、天下多得一察焉以自好、譬如耳目鼻口皆有所明、不能相通、猶百家衆技也、皆有所長、時有所用、雖然不該不徧、一曲之士也、判天地之美、析萬物之理、察右今之全、寡能備於天地之美、稱神明之容、是故內聖外王之道、闇而不明、鬱而不發、天下之人、各爲其所欲焉以自爲方、悲

數度者、舊法世傳之史、尙多有之、其在於詩書禮樂者、鄒魯之士、縉紳先生多能明之、詩以道志、書以道事、禮以道行、樂以道和、易以道陰陽、春秋以道名分、其數散於天下、而設於中國者、百家之學、時或稱而道之、

【大意】前節を承けて、古人は內聖外王を兼ね、大小精粗完備せるを言ひ、更に之を分ちて、其內の形而下の部分、數度に在る者、詩書禮樂に在る者は、史官の記載、士大夫及び儒者、諸子百家之を稱道するを言ひ、以て之を撒開して、形而上の道德に於て、又諸種の方術あるを起すなり、

【通釋】古の人は聖人君子を兼ね、道術を保ちて、實に能く完備せる者なるかな、神明に配合して一と爲り、天地と其の德を同くして、萬物を生育し、天下を和平にし、其の恩澤は普く衆庶に及び、萬物の根本たる道の一を明白にして、仁義禮樂より名法制度の末を係屬して遺す所無く、六合に通し四方に開き、德を修め性を全くするの、大にして精なる者より、天下を和平し衣食を給し、民をして凍餒無からしむるの、小にして純なる者に至るまで、時に隨ひ機に應し、變化運用、在らざる所無く、至らざる所無し、其れ此の如し、完備と謂はざるべけんや、其の道の明顯にして制度に在る者は、古來の名法、及び世々傳ふる所の記載に、尙多くありて、之を知るを得べく、又其の詩書禮樂に在る者は、鄒魯の地方に在る孔門の諸弟子、及び在朝士大夫の遺敎を奉する者多くありて、能く之を明かにす、卽ち詩は以て志を道ひ、書は以て政事を道ひ、禮は以て人の行ひを道ひ、樂は以て和適を道ひ、易は以て陰陽の消長を道ひ、春秋は以て褒貶黜陟して君臣上下の名分を道ふ、其の數の天下に散布して中國に設置せられし者は、諸子百家の學、時に或は稱說して之を道ふ、故に此の詩書禮樂及び法令制度の形而下の方術は、人の皆知る所なれば、更に擧げて說くを要せずと之を撒脫し去り、以下形而上の道德に

は一なり、則ち天人神人至人も亦同じ、而して聖人は此三者を合したる者なれば、亦之を天人神人至人に同じと謂ふを得べし、以上にて有所生の聖人を說き以下有所成の王者を說きて曰く、仁惠を布きて恩澤を爲し、義に由りて事理を裁し、禮義を正しくして行爲を節文し、音樂を奏して性情を和らげ、其の人に接するや、蘭蕙の香氣の薰るが如くに、溫和にして慈仁なる者、之を君子と謂ふ、所謂王者即ち是れなり、王者の德は上述の如くなれども、之を政に施すには、法を設けて上下の分を定め、官名を設けて各其の掌る所の實務を表出し、古事の已に然るを參へ取りて功驗を見、時勢利害を稽考して、決斷を爲す、又其の上下の分を定むるには數を以てす、一二三四の階級是れなり、百官此の階級を以て相齒列し、互に分限を相侵すこと無く、各其の職事を治め、衣食を以て主要と爲して農桑を務め、民の產を制し、鷄豚狗彘の養ひ、田澤漁獵の時を失はずして、能く之を蕃殖せしめ、又倉廩府庫を設けて、能く之を蓄藏し、凶年饑歲にも乏絕して死亡すること無からしめ、而して最も意を老弱孤寡の依賴する所無き窮民に注ぎて之を哀憐す、此の君子の施設する所は、皆民を養ふの理を得たる者なり、王者の有所成ること此くの如し、

【解義】〔不離於宗〕宗は大宗師の宗あり、應帝王篇に曰く、鄕吾示之以未始出吾宗とあり、不出吾宗とは即ち本文の不離於宗なり、〔不離於精〕「呂覽」の大樂篇に道也者至精也とあり、又論人篇には無以害其天則知精とあり、以て精は即ち道及び天と同じきを知るべし、〔不離於眞〕漁父篇に眞者精誠之至也とあり、〔薰然慈仁〕「釋文」に云ふ、薰然は溫和の貌、〔以稽爲決〕「釋文」に云ふ、稽は考なり、〔老弱孤寡爲意〕老弱孤寡は鰥寡孤獨を謂ふ、「孟子」梁惠王篇に、此四者天下之窮民而無告者、文王發政施仁、必先斯四者、詩云、哿矣富人、哀此煢獨と、即ち此意なり、

古之人其備乎、配神明、醇天地、育萬物、和天下、澤及百姓、明於本數、係於末度、六通四辟、大小精粗、其運無乎不在、其明而在

神明を受けたる者にて、異なる所あるに非ざるなり、道術は內聖外王を兼ね、今の天下に於ても在らざる所なしと爲し、以下更に此意を詳論す、

【解義】〔天下之治方術者〕按ずるに、下文に古之所謂道術者果何乎在の句あり、方術は道術と對するの稱なり、大宗師篇に孔子曰、彼遊方之外者也、而丘遊方之內者也となり、治方術者は卽ち遊方之內者にして道術は遊方之外者の治むる所なり、陸西星曰く、方術は道術の一方に局する者なりと、此說從ふべし、成玄英は方は道なりと曰ひ、方術と道術とを混じて一と爲す、從ふべからず、

不離於宗、謂之天人、不離於精、謂之神人、不離於眞、謂之至人、以天爲宗、以德爲本、以道爲門、兆於變化、謂之聖人、以仁爲恩、以義爲理、以禮爲行、以樂爲和、薰然慈仁、謂之君子、以法爲分、以名爲表、以參爲驗、以稽爲決、其數一二三四是也、百官以此相齒、以事爲常、以衣食爲主、蕃息蓄藏、老弱孤寡爲意、皆有以養民之理也、

【大意】聖人の天を以て宗師と爲し、道德を以て原本と爲し、天人神人至人と相同じきを謂ひ、又君子は仁義禮樂を躬にし、法を設け官を立て、古今の宜きを觀て政を施し、衣食を主とし、窮民を哀むを謂ひ、以て前の聖有所生王有所成の二句を詳說す、

【通釋】前に述べたることを猶詳言すれば、人にして自然の大宗を離れざる者は、之を天人と謂ひ、道の精粹を保ちて離れざる者は、之を神人と謂ひ、精誠の至りなる眞を保ちて離れざる者は、之を至人と謂ふ、天を以て宗師と爲し、德を以て本と爲し、道を以て門と爲し、變化測られず、物に隨うて端を見はす者、之を聖人と謂ふ、宗と精と眞とは皆道の異名にして、其實

編せし者の序と爲すとの二說あり、○方今各家の學は、皆道の一部分を得たるのみにして、道の全を得たる者に非ず、而して各皆自ら是として、其の偏なるを知らず、故に道之が爲めに滅裂するを歎じ、因て諸家の學術を列叙して其の得失を論じ、遂に老莊に及び、老莊は道の本を得、造物者と遊ぶを言うて、之に歸重し、諸家の末に趨り外物に拘束せらるゝと同じからざるを論ず、是れ此篇の大意なり、全篇を通じて一章と爲す、故に段を分ち、段中更に節を分ちて之を講すべし、宣穎曰く一部大書之後、作此洋洋大篇以爲收尾、如史記之有自叙一般、溯古道之淵源、推末流之散失、前作大冒、中分五段、隱隱以老子及自己收服諸家、接古學眞派、末用惠子一段、止借以反襯諸家而已、其體大、其色蒼、其致淡、超世之文と、

天下之治方術者多矣、皆以其有爲不可加矣、古之所謂道術者、果惡乎在、曰、無乎不在、曰、神何由降、明何由出、聖有所生、王有所成、皆原於一、

【大意】 今の天下に方術を治むる學者多く、皆己の學を以て最優と爲し、其の偏して該ねざるを知らざるを謂ひ、因て古の道術を呼び起し、道術の內聖外王を兼ぬるを略言す、

【通釋】 今の天下には種々一方に偏したる學術を治むる者、其の人誠に多し、諸家皆各自己の有する所の學術を以て最善にして、此に加ふべき他道なしと爲し、其の一方に偏したるを知らざるなり、是に於て或者問ひを起して曰く、然らば道の全きを盡くしたる、古の所謂道術なる者は、果して何くに在るや、今の天下には已に存在せざるにや、對へて曰く、道の流行は古今に變り無し、今日の天下に於ても存在せざることなし、又問うて曰く、道術に於て謂ふ所の神明なる者は何より出るや、曰く、內に聖德ある者は、物をして生育する所あらしめ、外に仁惠を施すの王者は、物を成就し、萬民をして其の所を得しむ、此の聖と王とは內外の別ありと雖も、倶に一の道に原本したる

を論じて曰く、與奪するに情無く、自然に委任するは此れ眞の公平なり、若し情慮を運らし、偏頗の私心を以て萬物を均平せんと欲すれば其公平なりとする所のことが卽ち不公平なり、聖人は無心にして、感ずるあれば則ち應ず、此れ眞應なり、若し始めより物に應ぜざらんとするに心ありて、而して應ずれば、自ら以て眞應なりと爲すも、此れ眞の應に非ず、明知の人は、其の知を役するが爲めに反て物に使役せらるゝのみにして、物を使役する能はず、有道者の神に任ずる者にして、始めて能く物に應じて眞應を得るなり、夫れ明知の及ぶ所は形に止まり、神は無心感應して無形に及ぶ、卽ち明智は固より神に勝たざるなり、而るに世の愚者は神に任ずる能はずして、明智の見る所を恃みて、人爲に陷りて出る能はず、其の功業たるや、粗なる外形に過ぎずして、天に入り內の性情を治むる能はず、悲むべきに非ずや、〔此章は、莊子將死の句あるによりて、編者特に之を最後に置きたるならん〕

【解義】〔以不徵徵〕郭象曰く、徵は應なり、名言

造物者之報人也、不報其人、而報其人之天、聖人安其所安、不安其所不安、衆人安其所不安、不安其所安、

聖人以必不必、故無兵、衆人以不必必之、故多兵、離外刑者、金木訊之、離內刑者、陰陽食之、

凡人心險於山川、難於知天、天猶有春秋冬夏旦暮之期、人者厚貌深情、

君子遠使之而觀其忠、近使之而觀其敬、煩使之而觀其能、卒然問焉而觀其知、急與之期而觀其信、委之以財而觀其仁、告之以危而觀其節、醉之以酒而觀其則、雜之以處而觀其色、九徵至、不肖人得矣、

賊莫大乎德有心、而心有睫、及其有睫也而內視、內視而敗矣、

以不平平、其平也不平、以不徵徵、其徵也不徵、

天下第三十三

此篇は本書の序文なり、古書は序文を後に置くを例とす、但し此篇を莊周の自序と爲すと、周の書を

曰、吾以天地爲棺槨、以日月爲連璧、星辰爲珠璣、萬物爲齎送、吾葬具豈不備邪、何以加此、弟子曰、吾恐烏鳶之食夫子也、莊子曰、在上爲烏鳶食、在下爲螻蟻食、奪彼與此、何其偏也、以不平平、其平也不平、以不徵徵、其徵也不徵、明者唯爲之使、神者徵之、夫明之不勝神也久矣、而愚者恃其所見入於人、其功外也、不亦悲乎、

【大意】　莊子死せんとするの際、弟子に諭し、日月星辰其他の萬物、皆吾の葬具なれば、已に大に備はれり更に盛葬するの要なしと言ひ、因て人の私知を用ひて天に由らず、天人の別を知らざるを歎ずるなり、

【通釋】　莊子病みて將に死せんとせし時、諸弟子相議し棺槨を美にし珠玉を納れ、贈り物を多くして、厚く之を葬らんとす、莊子之を聞きて曰く、吾は天地を以て棺槨と爲し、日月を以て一對の璧と爲し、星辰を以て珠璣と爲し、萬物を以て盡く我への賜り物と爲し居るなり、吾の葬具は豈完備せるに非ずや、諸子は我を盛葬せんと欲するも、何ぞ此より盛んにするを得んやと、〔莊子は死生を同くし、道と一と爲る、故に天地日月の大なるを以て葬具と視做し、盛葬の無用なることを曰はずして、已に大に備はると曰ふ、至人に非ざれば此に至る能はず〕弟子曰く、吾等の夫子を厚葬せんとするは、烏鳶の啄みて夫子の遺骸を食はんことを恐れ、之を避けんが爲めに棺槨を重ねんとするなり、敢て世俗の虛禮に傚ふに非ずと、莊子曰く、骸地上に在れば、烏鳶の食と爲り、埋みて地下に在れば、螻蟻の食と爲る、尸骸は棄置くも埋むも共に烏か蟲かに食はるゝ者なり、而るに烏鳶の食はんことを恐れて之を埋葬するは、烏鳶の食を奪うて螻蟻に與ふるなり、何ぞ其れ偏頗なるやと、因て又之

然らば則ち是れ欺罔耻づべきの事のみ、何ぞ以て人に驕るに足らんや、

【解義】〔驕穉莊子〕郭慶藩曰く、穉も亦驕なり、管子軍令篇に、工以雕文刻鏤相穉、尹知章の注に、穉も亦驕なり、王引之の「經義述聞」に云ふ、詩の載馳篇の衆穉且狂とは、既に驕りて且狂するを謂ふなりと、〔恃緯蕭而食〕「釋文」に云ふ、緯は織なり、蕭は荻蒿なり、蕭を織り以て畚と爲して之を賣る、〔取石來鍛之〕「釋文」に云ふ、之を槌破するを謂ふ、〔驪龍〕「釋文」に云ふ、黑龍なり、

或聘於莊子、莊子應其使曰、子見夫犧牛乎、衣以文繡、食以芻叔、及其牽而入於太廟、雖欲爲孤犢、其可得乎、

【大意】莊子、犧牛の平日美衣食の養を享けて、祭りの日に至り之を悔ゆるも、及ぶ無きの喩を設け、以て己が外物の爲めに生命を毀損するを欲せざるの意を言ひ、聘を辭することを叙す、

【通釋】或る國の君、莊子を聘せんとして、使を遣されしかば、莊子其の使に應對して曰く、子は彼の祭に用ふる犧牛を見ずや、預め養ひ置き、之に被するに美麗なる繡の衣を以てし、之に食はするに柔かなる艸及び豆を以てし、誠に安樂なるが如きも、祭りの日に至り、牽かれて太廟に入り神に供せらるゝに及びて、過去の豐養を享けしが爲めに今日の事あるを悔い、孤獨にして依賴する所なき犢になりとも爲りたしと希ふと雖も、竟に免るゝを得ざるなりと、〔此の喩の中には、君に仕へて其祿を食む者は、又君の爲めに死せざるを得ざること、此の犧牛の如し、余は一時の富貴の爲めに生命を毀損するを欲せず、故に仕を願はずとの意あるなり、史記の本傳に記する所は、此と同意にして、文は更に詳なり、參照して讀むべし〕

【解義】〔或聘於莊子〕史記本傳には、楚威王聞莊周賢、使使厚幣迎之に作る、〔子見夫犧牛乎〕成玄英曰く、犧は養なり、君王預め前三月、牛を養ひ宗廟を祭るを犧と曰ふ、〔食以芻叔〕「釋文」に云ふ、芻は草なり、叔は菽と同し大豆なり、

莊子將死、弟子欲厚葬之、莊子

十乘驕稺莊子、莊子曰、河上有家貧恃緯蕭而食者、其子沒於淵得千金之珠、其父謂其子曰、取石來鍛之、夫千金之珠、必在九重之淵而驪龍頷下、子能得珠者、必遭其睡也、使驪龍而寤、子尚奚微之有哉、今宋國之深、非直九重之淵也、宋王之猛、非直驪龍也、子能得車者、必遭其睡也、使宋王而寤、子爲虀粉夫、

【大意】或人の僥倖して宋王より車十乘を賜はりしを驕るに對して、莊子貧人の子の驪龍の睡に乘じて頷下の明珠を得たるに喩へ是れ宋王を欺きて車を得たるに、驕るに足らざるを謂ひ、以て之を戒む、

【通釋】或人凡庸の質を以て、宋に遊びて宋王に妄說し、車十乘を賜はりし者あり、其の十乘の車を得しことを以て、自ら非常の材ありと爲し、莊子に驕りたり、莊子曰く、黃河の上りに、家貧くして、蒿を織りて畚と爲し、之を賣りて僅に生活する者あり、或時其の子が河の淵に沒入して、千金の價ある明珠を取り來れり、其父其の子に謂うて曰く、石を持ち來り之を槌破せよ、此の千金の珠は、必ず九重の深淵の底に潛める黑龍の頷の下に在るなり、決して人の取り得る者に非ず、汝の能く此の珠を得たるは、必ず黑龍の睡れる時に遭ひ、幸に之を得たるならん、若しも黑龍にして寤めたる時ならしめば、汝深淵に沒入するも、何の微物をも取り來るを得んや、何ぞ況んや千金の珠をやと、今宋國の危くして入り難きことは、九重の深淵よりも危く、宋王の猛暴なることは、黑龍よりも猛なり、されば有道の君子か非常の才ある者かに非ざれば、宋王を悅ばせて賜を受くること能はざるなり、而るに子の能く車を得しは、驪龍の睡りに乘じて珠を取り來りしと同じく、妄說して宋王を欺き、迷惑せしめて得來りしのみ、宋王をして其の欺罔なることを知らしめば、必ず大に怒りて子を誅戮し、寸斷とせん

心有睫を言へば、心を眉睫に役するの謂に非ず、「郭注」非なり、心有睫は心を以て睫と爲すを謂ふなり、人、目の接せざる所に於て、意を以て之を度る、是の如きは是れ心有睫なり、聖人は不逆詐不意不信、豈是くの如くならんや、故に曰く、賊莫大乎德有心而心有睫と、下文に曰く、及其有睫也而內視、內視而敗矣と、然らば則ち心有睫は正に內視の謂なり、內視とは收視返聽を謂ふに非ず、目を以て視ず、而して心を以て視るを謂ふなり、〔及其有睫也而內視〕按ずるに、而の字は則と爲して讀む、下文の內視而敗矣の而も亦同じ、〔凶德有五而中德爲首〕成玄英曰く、心耳眼舌鼻を謂ふなり、陸樹芝曰く、五者の欲は皆凶德、而して心其の中に主と爲る心の欲を尤も凶德の首と爲す、〔吡其所不爲者也〕郭象曰く、吡は訾なり、〔美髯長大壯麗勇敢〕二字づゝを一事と爲すを穩當とすれども、八極の數に合はず、已むを得ず、姑く成疏に從うて通釋す、但し强解たるを免れず、〔知慧外通〕按ずるに、外通は當に多痛に爲るべし、多と外と形似て誤るなり、通は痛の假借、通痛共に甬に從ひ音を得、故に相通ずるなり、知慧多痛は下文の勇動多怨仁義多責と對文、意義自ら明かなり、外通と爲せば則ち句法倫せす、義も亦通じ難し、〔達生之情者傀〕郭象曰く、傀然は大に恬解の貌なり、〔達於知者肖〕郭象曰く、肖は釋散なり、王念孫曰く、郭象肖を以て釋散と爲すは非なり、「方言」に曰く、肖は小なりと、肖と傀とは正に相反す、天に任ずれば則ち大、智に任すれば則ち小なるを言ふなり、肖は猶宵の如きなり、「學記」に宵雅肄三の「鄭注」に曰く、宵の言たる小なりと、宵肖は古同聲、故に「漢書」刑法志に肖通して宵に爲る、「史記」太史公自序に申呂肖矣、徐廣曰く、肖音痟、痟は猶衰微の如し、義も亦相近し、〔達小命者遭〕成玄英曰く、小命は小年なり、遭は遇なり、巖井文曰く、敗に遇ふなり、達小命は上に謂ふ所の知慧勇動仁義是れなり、故に遭と曰ふ、按ずるに、達小命者の達大命者に對するは、達於知者の達生之情者に對するが如し、達小命者は達大命者の反對と爲さゝるべからず、諸家多く二者を同視し、或は稍及はさる者と解するは非なり、故に巖井說を取る、

人有見宋王者、錫車十乘、以其

り、故に數節に分ちて解釋し、難解の字句は措て解せざるべし、讀者請ふ之を諒せよ、

【通釋】 無心にして始めて德全きなり、而るに德に心あり而して心に睫ある者あり、心に睫あれば、是れ心が目の用を爲さんとするなり、性を賊すること此より大なるは無し、何となれば、心に睫あるに及びては内よりして外の事物を視んとす、内より視るとは、耳目よりして内に感するを待たず、心にて意度する ことなり、内より視れば則ち必ず德を敗り性を賊害す、

凶德に五種あり、其の中にて中德を以て第一の凶と爲す、何をか中德と謂ふや、中德とは己の心に好しとすることありて、以て自ら是と爲し、而して人の之を爲さゞる者を呰りて非と爲す者なり、心中に自ら以て是とする者あるを以て、故に之を中德と曰ふ、

人の窮するは、之をして必ず窮せしむるの原因と爲る者八あり、達するは、之をして必ず達せしむるの原因と爲る者三あり、形には六の府藏あり、何を八極と謂ふ、姿美くしくして、顏に髯あり、丈高くして、又肥大に、多力にして、而かも硏華に、勇猛にして、且決斷よき、此の八の事倶に常人に超過するを謂ふ、是れ皆人の羨み求むる所なれども、有れば必ず自ら之を恃むが故に、反て之が爲めに窮に至るなり、何をか三必と謂ふ、自立する能はず、物に緣り他に順うて始めて立つを得る者、俯仰共に人に從ひ、自ら主たる能はざる者、及び怯弱にして常に畏懼する者は、皆人に及ばざる者なれども、其の人に及ばざるが爲めの故に、三者倶に達するを得るなり、何をか六府と謂ふ、知慧ある者は爲めに痛多く、勇動する者は爲めに怨まるゝこと多く、仁義の人は救ひを望む者多くして責め多し、生の眞誠卽ち生の本に通達する者は大なるも、知に通達する者は小なり、命の大なる者卽ち天命に通達して、死生を外にし終始無き者は、天と一にして相違へども、小命の知勇仁義等に達する者は、必ず敗に遭ふ、〔以上列する所、知慧、勇動、仁義、達生之情者、達於知之情者、達大命者、達小命者、合計七あり六府の數と合はず、是れ亦此章の斷片たる一證なり、强ひて其由を窮むるに足らず〕

【解義】 〔心有睫〕兪樾曰く、「郭注」に云ふ、心を眉睫の間に役すれば、則ち僞已甚しと、然れども正文に

弗父何の曾孫なり、成玄英曰く、考は成なり、父は大なり、考成の大德ありて正道を履む、故に正考父と號す、則ち孔子十代の祖にして、宋の大夫なり、〔一命而傴〕成玄英曰く、士は一命、大夫は二命、卿は三命なり、林希逸曰く、傴は背の曲るなり、僂は腰の曲るなり、俯は身の地に伏するなり、〔如而夫者〕郭象曰く、而夫は凡夫なり、成玄英曰く、而夫は鄙夫なり、章炳麟曰く、而は女なり、而夫は卽ち女夫、左氏昭六年傳に、左師曰、女夫也必亡とあり、此れ輕賤する語なり、莊子の而夫と言ふは、亦必ず指斥する所あるならん、〔一命而呂鉅〕郭崇燾曰く、「釋文」に呂鉅は矯貌とあれども、疑ふらくは、此れ矯と爲すべからず、「方言」に、殀呂長也、東齊曰殀、宋魯曰呂と、「說文」に、鉅大剛也と、亦通じて巨に作る、大なり、呂鉅は自ら高大にするを謂ふ、當に矜張の意と爲すべし、矯と云ふは非なり、〔孰協唐許〕郭崇燾曰く、郭象注に、唐は堯を謂ひ、許は許由を謂ふ、而夫と考父と誰か唐許の事に同じと言ふと、今按ずるに、孰協唐許は孰敢不軌と對文、而夫の如き者は誰か唐許に比同するを知らんやと言ふなり、

賊莫大乎德有心、而心有睫、及其有睫也、而內視、內視而敗矣、凶德有五、中德爲首、何謂中德、中德也者、有以自好也、而吡其所不爲者也、窮有八極、達有三必、形有六府、美髯長大壯麗勇敢、八者俱過人也、因以是窮、緣循偃佒困畏不若人、三者俱通達、知慧外通、勇動多怨、仁義多責、達生之情者傀、達於知者肖、達大命者隨、達小命者遭、

【大意】此一章は、意義貫通せず、字句にも甚だ解し難き者あり、蓋し片々たる零餘の文句を纏めて、末卷の終りに置きたる者ならん、古書には往々此例あ

威儀有則、既醉之後、威儀反反、威儀佖佖と、是れ則無きなり、故に曰く、醉之以酒而觀其則と、周書官人篇には、醉之酒以觀其恭に作る、此と語意相近し大戴禮文王官人篇には、醉之以觀其不失也に作る、不失は卽ち法則を失はざるなりと、郭崇燾曰く、側當に則に爲るべし、詩に曰く、飮酒孔嘉、維其令儀と、所謂則なりと、

正考父一命而傴、再命而僂、三命而俯、循牆而走、孰敢不軌、如而夫者、一命而呂鉅、再命而於車上儛、三命而名諸父、孰協唐許、

【大意】　正考父は位愈尊くして愈卑退せるに、今人は之に反して、位の進むに從ひ愈尊大にし、禮に違うて自ら知らざるを戒む、

【通釋】　正考父は、一命せられて士と爲りしより、常に身を曲げ、敢て仰ぎて傲然たりしことなし、再命せられて大夫と爲りしよりは、常に腰を曲げ、三命せられて卿と爲りしより、常に俯したり、僂は傴よりも甚しく、俯は僂よりも更に甚しく、頭を低れ躬を曲げて全く俯したるが如くにし、行くにも路の中央を避け牆に循うて走れり、皆其の敬恭卑退の狀を謂ふなり、其の地位の高きを以て驕らざるのみならず、愈敬恭卑退する正考父の如き人は、誰か敢て取て以て軌範と爲さゞらん、然るに今日の凡庸人の如きは、一命せられて士と爲れば、已に自ら誇りて尊大にし、再命せられて大夫となれば、歡喜に堪へずして、車上に於て手を振ひ足を蹈みて舞ひ、三命せられて卿と爲れは此の上なき立身と爲し、親の兄弟にして、尊敬せざるべからざる伯父叔父を呼ぶにも、直に名を稱して諱まず、其の禮を失ふを知らざるに至る、正考父の位愈尊くして身愈卑退せるとは大に同じからず、古の帝堯許由は互に帝位の貴きを讓りて取らざりしに、今人は人の臣下たる微位に貪戀して、之を欣び之を誇ること此くの如し、何ぞ帝堯許由の德に比同するを得んや、

【解義】　〔正考父〕「釋文」に云ふ、宋の湣公の玄孫、

に忍びずして、貪らざる者なり、之に告ぐるに危亡に瀕せるを以てして、其の節義を觀るべし、節義なき者は、危難に臨みて心を變ずる者なり、之を醉むしむるに酒を以てして、法則あるの人なるや否やを觀るべし、男女を雜えて之を處らしめ、以て其の顏色を伺ひ淫なるや否やを觀るべし、此の九の試驗を爲して、其の表見する所を徵檢すれば、いかに厚貌深情なる者も、終に掩ふこと能はずして、陋劣不善の士を見出すを得べし、（按ずるに、此章に言ふ所は、法術家の言に類し、莊子の學とは全く因緣無し、誤つて他書より竄入したる者なるべし）

【解義】〔貌愿而益〕「釋文」に「廣雅」を引て曰く、愿は謹愨なり、兪樾曰く、益當に溢に作るべし、溢の言たる驕溢なり、「荀子」不苟篇に、以驕溢人とあり、是れなり、謹愿と驕溢とは、義正に相反す、〔有長若不肖〕不肖の字亦人間世篇に見ゆ、剋核太至、則必有不肖之心應之、郭象曰く、剋核太精、則鄙吝心生而不自覺也と、「列子」楊朱篇に、楊朱曰、人肖天地之類、懷五常之性と、注に、肖似也、類同陰陽、性稟五性也、又「論衡」自然篇に、問曰、人生於天地、天地無爲、人稟天性者、亦當無爲、而有爲何也、曰、至德純渥之人、稟天氣多、故能則天自然無爲、稟氣薄少、不遵道德、不似天地、故曰不肖、不肖者不似也、不似天地、不類聖賢、故有爲也とあり、卽ち不肖とは天に似ざるなり、〔順懁而達〕「釋文」に王曰く、順は愼、懁は堅辨なり、按ずるに、成玄英曰く、達は心、理に達するなりと、然れども前後皆外善にして內姦なるに、此れ獨り內外倶に善なるは、文に於て宜からず、「周禮」小宰に、小事則專達、「釋文」に于注を引て曰く、達は決なりと、此の達字も亦當に訓じて決と爲すべし、禮法の外に決出するを謂ふなり、〔有堅而縵有緩而釬〕兪樾曰く、縵は慢の假字、釬は悍の假字、堅强にして又惰慢、紓緩にして又桀悍、故に情貌相反すと爲すなり、〔觀其側〕兪樾曰く、「釋文」に云ふ、側は不正なり、一に云ふ、醉者喜で冠を傾側するを謂ふなりと、王云ふ、側は凡て不正を爲すを謂ふなりと、然れども上文の觀其忠、觀其敬云云、觀る所の者は皆美德を擧げて之を言へるに、此れ獨り其不正を觀るとしては、則ち倫せず、諸說皆非なり、其の側或作則と云ふは、當に之に從ふべし、則は法則なり、「國語」周書に曰く

觀其知、急與之期而觀其信、委之以財而觀其仁、告之以危而觀其節、醉之以酒而觀其則、雜之以處而觀其色、九徵至、不肖人得、

【大意】人は外貌を飾りて心情を掩ひ居れば、其の賢否は甚だ知り難く、外貌と全く相反する種々の人あれば、誤りて之を信用すれば、大害を被るべし、但し列記する所の九事を以て之を試驗し、其の徵迹を參考すれば、心情の陋劣なる者を觀破し得へきを言ふ、

【通釋】孔子曰く、凡そ人心の險なることは、山川の險なるよりも險に、人心の知り難きことは、遠く隔りたる天の知り難きよりも難し、天には猶一定したる春夏秋冬の循環と朝夕の交代とありて、之を知るを得れども、人は面貌を厚くして外に表はさず、心情を深く潛めて出さず、毫も之を知るべき端緒なし、故に外は謹愿らしく見せて、實は驕りて禮法を顧みざる者あり、外は君子長者の如くにして、實は陋劣不善なる者あり、外は順堅質訥なるが如くにして、實は放逸にして法度の外に決出する者あり、外は堅强なるが如くにして、實は惰慢なる者あり、外は緩舒なるが如くにして、實は桀悍なる者あり、外貌と內心との相反すること此の如し、故に其の人、前には義に就くこと渴者の飲に就くが如くなりし者も、其の義を棄て去ること熱火を逃るゝが如くに急にし、前と反對なることあり、故に在上の君子、其の情僞を知らんと欲せば、遠ざけて之を使うて其忠なるや否やを觀るべし、忠臣は遠ざけらるゝも怨み怠ることなし、近づけて之を使うて其の敬なるや否やを觀るべし、佞臣は近づけらるれば、狎れて其の敬弛む者なり、煩難の局に當らしめて、其の材能の任使に堪ふるや否やを觀るべし、卒然と意外の事を問うて、其の知識の淺深廣狹を觀、遽に之と期約して、其の信を守る人なるや否やを觀るべし、此二事は卒遽にせざれば、豫備し矯飾するの恐れあればなり、之に委託するに貨財を以てして、其の仁なるや否やを觀るべし、仁者ならば欺く

とも無く、道を離れて憂患に陷ることも無きは、唯眞人のみ之を能くす、仲尼の如き外飾忍性して禮樂仁義を主持する者は、外刑には罹ること無きも、內刑に罹ることを免れず、眞人を去ること甚だ遠し、此れ以て孔子の任用するに足らざるを知るべし、

【解義】〔爲外刑者、爲內刑者〕按ずるに、外刑は國君定むる所の刑律を謂ふ、內刑は卽ち所謂遁天の刑是れなり、陸樹芝は、人の體を刑する者は外刑なり、人の心を刑する者は內刑なりと曰へり、〔金與木也〕郭象曰く、金は刀鋸斧鉞を謂ひ、木は棰楚桎梏を謂ふ〔動與過也〕林雲銘曰く、動は心の搖作を謂ひ、過は事の悔尤を謂ふ、〔宵人之離外刑者〕兪樾曰く、「郭注」に云ふ、明坦の塗に由らざる者、之を宵人と謂ふ、「釋文」に王注を引て云ふ、明正に非ざるの徒は、之を宵夜の人と謂ふなりと皆望文生義、未だ塙詁と爲さず、宵人は猶小人の如きなり、「禮記」學記篇に、宵雅肄三、「鄭注」に曰く、宵の言たる小なり、小雅の三を習ふ、鹿鳴四牡皇皇者華を謂ふなりと、然らば則ち宵人の小人たるは、猶ほ宵雅の小雅たるが如し、亦字宵に作る、方言に曰く、宵は小なり、「史記」太史公自序に、申呂肖矣、徐廣曰く、肖音痟、猶衰微の如し、義も亦相近しと、「文選」江文通の雜體詩に、宵人重恩光、李善注に春秋演孔圖を引て曰く、宵人之世多饑寒、宋均曰く、宵は猶小の如きなりと、此說之を得たりと、按ずるに、羅勉道已に先づ此說あり、唯兪氏の詳なるに若かず、故に兪說を引く、成玄英曰く、離は罹なり、〔金木訊之〕「釋文」に云ふ、訊は問なり、

孔子曰、凡人心險於山川、難於知天、天猶有春秋冬夏旦暮之期、人者厚貌深情、故有貌愿而益、有長若不肖、有順懁而達、有堅而縵、有緩而釬、故其就義若渇者、其去義若熱、故君子遠使之而觀其忠、近使之而觀其敬、煩使之而觀其能、卒然問焉而

物を衞らば、物我倶に失ふなりと曰ふ、皆誤解なり、從ふべからず、

施於人而不忘、非天布也、商賈不齒、雖以事齒之、神者弗齒、爲外刑者、金與木也、爲內刑者、動與過也、宵人之離外刑者、金木訊之、離內刑者、陰陽食之、夫免乎外內之刑者、唯眞人能之、

【大意】人に施して其の惠を忘れざるは、自然の萬物に惠澤して報を求めざると同じからず、甚だ耻づべきことなりとして、儒敎の君臣父子夫婦兄弟朋友交互に相報ずるを譏り、又儒者の外飾忍性して道を離るゝは囚刑を免れず、眞人に及ばずと論じ、以て孔子の任用するに足らざるを證す、○以上二節を合して一章と爲す、前節は仲尼の禮樂仁義を主持するは、以て人に長とすべきに非ざるを言ひ、後節は更に其敎の互に報を求むるは、天の惠施と同じからず、耻づべきの甚しき、已に神と離る、神と離るゝ者は內刑に罹り、大に眞人に及ばずと言ひ、以て儒敎を排斥し哀公に孔子を用ひず、眞人に任するを勸むるなり、

【通釋】人に恩惠を施して、之を忘るゝ能はず、其の報を求むるは、天の萬物を生育して、報を求めざると同じからず、恩惠を施して之が報を求むるは、鄙夫の爲す所にして、利に汲々たる商賈と雖も猶之と齒列するを耻づ、況や士君子をや、人は事の已むを得ざるを以て、耻ぢ厭ひながら、時に之を齒列することあるも、神は決して之と齒することなし、儒敎の父慈に子孝、君義に臣忠等を敎へ、夫婦兄弟朋友皆互に相報せしむるは、是れ人に施して報を求め、商賈も之と齒するを屑とせざる所なり、實を離れ僞を學ぶ者なり、世主の定むる所の刑律を施行するは、刀鋸斧鉞の金と、棰楚桎梏の木とを以てし、道を離れ天を遁れたる者に加ふる刑罰は、心搖作して憂ひ多きと、事の悔尤とを以てす、故に小人の法律を犯し外刑に罹る者は金木の刑具を用ひて之を訊問し、道を離れて遁天の刑に罹りたる者は、造化の譴ありて、陰陽之を剝蝕し、憂患に堪へざらしむ、彼の犯罪して外刑に罹るこ

頤養せしむれば可ならん、假令其の事誤るも、徒らに廩祿を費したるのみにて、其害少く、民を誤り國を誤るの大害に至らず、若し然らずして、仲尼を用ひて政を爲さしめ、民をして性の實を離れて仁義の僞を學ばしむるは、民に示して導く所以の道に非ず、後世に至らば、其の害更に甚しき者あらんとす、故に後世の爲めに慮らば、仲尼を任用することは之を止むるに如かず、禮樂仁義の華飾忍性にては、民を治め難く、國の瘦ゆることはあらざるなり、

【解義】〔以仲尼爲貞幹〕林雲銘曰く、貞は楨と通ず貞幹は猶楝梁と云ふが如し、成玄英は以て忠貞幹濟の德と爲せり、林說是なり、〔殆哉圾乎〕按ずるに、「集韻」に、岌通じて圾に作るとあり、則ち圾岌は通用すべし、「孟子」萬章篇に、天下殆哉岌岌乎、趙岐注して曰く、岌岌乎は不安の貌なりと、郭象は殆哉圾乎仲尼の下に注を出だし、百姓既危、至人亦無以爲安也と曰ひ、成玄英も、殆は近なり、圾は危なり、貞幹の迹を以て物を率ゆれば、物既に性を失ふ、仲尼何を以て安からんやと曰ふ、郭成は殆哉圾乎仲尼の六字を以て一句と爲し、仲尼を危くするに近しと訓むなり、大に誤る、殆は危也、且つ危殆なるは魯國にして仲尼に非ず、殆哉圾乎の四字を以て一句と爲し、仲尼二字は下句に屬して讀むべし、〔方且飾羽而畫〕郭象曰く、凡そ方且と言ふは、皆後世將に然らんとするを謂ふと、按ずるに、郭說未だ必ずしも然らず、飾羽而畫云云は仲尼の禮樂を飾るを譏りて謂ふなり、而るに注疏共に之を後世に係く、故に全章の注從つて皆誤る、宣穎曰く、羽に自然の文采あり、飾りて之を畫くは、則ち人巧を務むるなり、〔忍性以視民〕性中に仁義無し、而るに强ひて仁義を爲すは、是れ性を忍ぶなり、「釋文」に云ふ、視音示、下同じ、〔受乎心宰乎神〕心は私心なり、宰は判なり割なり、命を私心に受けて精神に分離するを謂ふ、皆仲尼に就きて言ふ、〔陸樹芝曰く、彼は仲尼を指し、汝は哀公を謂ふ〕按ずるに、陸說從ふべし、郭注成疏共に彼を以て百姓なりと爲す、非なり、〔予頤與〕予は與なり、與は上句と同く乎なり、周易序卦に曰く、頤は養なり、仲尼に頤養を與ふるを謂ふ、郭象の彼に效ふは己を養ふ所以に非ざるなりと曰ひ、成玄英の我と百姓と怡養同じからず、譬へば魚鳥の升沈各異なるが如し、若し汝の養ふ所を以て

とは古字通す、閭巷皆居なり、故に窮閭を或は窮巷と云ふと、〔槁項黄馘〕「釋文」に李云ふ、槁項は羸痩の貌、俞樾曰く、馘は俘馘なり、此に施す所に非ず、馘疑ふらくは㾉の假字ならん、說文疒部に、㾉は頭痛なりと、黄馘は頭痛して色黄ばむを謂ふ、〔秦王有病〕「釋文」に司馬云ふ、秦王は惠王なり、〔破癰潰痤〕成玄英曰く、癰は痒くして熱ある毒腫なり、痔は下漏病なり、林雲銘曰く、痤も亦癰の類、

魯哀公問於顏闔曰、吾以仲尼爲貞幹、國其有瘳乎、曰、殆哉圾乎、仲尼方且飾羽而畫、從事華辭、以支爲旨、忍性以視民、而不知不信、受乎心、宰乎神、夫何足以上民、彼宜汝與、予頤與、誤而可矣、今使民離實學僞、非所以視民也、爲後世慮、不若休之、難治也、

【大意】魯の哀公、仲尼を任用し以て國病を治癒せしめんことを希ふ、顏闔之を止めて曰く、仲尼の敎ふる所の禮樂は華辭、仁義は忍性、皆矯僞にして本性に非ず、此を以て民に示して、實を離れ僞を學ばしめば其害甚だ大なる者あらん、而して國治まり難し、

【通釋】魯の哀公顏闔に問うて曰く、吾仲尼を用ひて宰相と爲し政を任せんとす、仲尼は仁德あり、禮樂に明かなれば、從來の衰亂を去り、國治まりて民樂むこと、病の治癒するが如くなるを得んか、顏闔曰く、否、若しも仲尼を相と爲して政を任せんか、國は岌々手として危殆ならんとす、仲尼は方に禮樂を明かにするを主とし、文物の美を爲さんとし、自然の上に粧飾を加へ、實を忘れて華彩ある言辭を爲すことに從事し、支葉を以て本旨と爲し、又本性を忍び、强ひて仁義を爲し、民に示して之に循行せしめんとし、而して其矯僞なることを知らず、心に受けて自ら之を是と爲し、精神に離れ去る、仲尼の如き者は何ぞ以て人民に上たるに足らんや、彼の仲尼の人と爲りが君の心に合ひ、之を悅はるゝならば、豐祿を與へて十分に

者百乘者、商之所長也、莊子曰、秦王有病召醫、破癰潰痤者、得車一乘、舐痔者、得車五乘、所治愈下、得車愈多、子豈治其痔邪、何得車之多也、子行矣、

【大意】 曹商秦に使ひして車百乘を得、莊子に向つて其知能を誇り、莊子醫者の治する所、愈下れは賞を得ること愈多きの例を引き、曹商の君意を迎合し、事功を以て重賞を受くるの、却て恥づべきを言うて之を挫く、

【通釋】 宋人に曹商といふ者あり、宋の偃王の爲めに秦に使ひせり、曹商の往くときには、僅に車數乘を得たるのみなりしに、秦に至りて應對宜しきを得たりしかば、秦王之を愛し、遂に車百乘を益し賜ひたり曹商已に宋に反り、莊子を見て曰く、貧民窟たる陋巷に住居し、困窮して手づから屨を織り、頸項枯槁顑頷し、頭痛して面色黄ばむか如きことは、商の短なる所にて、之を爲す能はず、一たひ使ひして大國の主を開悟せしめて、從車百乘を得ることは、是れ商の長ずる所なりと、自ら知能を誇りて、暗に莊子の貧窮を笑ひたり、莊子曰く、聞く秦の惠王病ありて醫を召せし時癰を破り痤を潰りて其膿を去りし者は、賞として車一乘を得、痔を舐りて其の惡血を去りし者は、賞として五乘を得、其の治療する所愈下りて、汚穢を辭せざれば、車を得ること愈多しと、子も秦王の痔を舐りて治療せしに非ざるか、何ぞ車を得ることの多きや、子の如き富貴を貪りて恥を知らざるの徒は、與に語るに足らず、速に去れと、〔癰を破り痤を潰るは、諂屈して君意を迎合するに喩ふ、郭象注して曰く、事下りて然る後に功高く、功高くして然る後に祿重し、故に高遠恬淡なる者は榮を遺るなりと、善く本文の意を得たり〕

【解義】 〔爲宋王使秦〕「釋文」に司馬云ふ、宋王は偃王なり、〔得車數乘〕成玄英曰く、乘は駟馬なり、〔窮閭阨巷〕郭慶藩曰く、廣雅に閭は居なり、古は里中の道を謂て巷と爲し、居る所の宅を謂て巷と爲す、「廣雅」に衖は尻なり、（尻今通して居に作る、衖と巷

〔故無兵〕林雲銘曰く、兵は胸中の交戰を謂ふなり、〔小夫之知〕成玄英曰く、小夫は猶匹夫の如し、知は智と同じ、〔不離苞苴竿牘〕成玄英曰く、苞苴は香草なり、宣穎曰く、裹むを苞と曰ひ、藉くを苴と曰ふ、「詩」の鄭箋に、以果實相遺者、必苞苴之とあり、「釋文」に司馬云ふ、竿は竹簡にて書を爲るを謂ふ、章炳麟曰く、竿は本借りて簡の字と爲す、古へは干の聲と間の聲と相通す、「聘禮記」の皮馬相間の間を、古文には干に作り、「小雅」の秩秩斯干の傳に、干を以て澗と爲す、是れ其例なり、〔敝精神於蹇淺〕成玄英曰く、精神を跛蹇淺薄の事に勞し、虛に遊び遠きに涉る能はざるを謂ふ、按ずるに、蹇者は歩に艱む、行くこと遠からず、蹇淺は卽ち淺近なり、〔兼濟道物〕道物は道と物となり卽ち道理と事物とを善く融會妙通するを謂ふ、〔太一形虛〕形虛は形と虛となり、卽ち有無を混一して太初に返すことを謂ふ、〔歸精神乎無始〕成玄英曰く、無始は妙本なり、按ずるに、齊物論篇に古之人、其知有所至矣、惡乎至、有以爲未始有物者、至矣盡矣、不可以加矣と、無始は卽ち未始有物なり、〔甘冥乎無何有之鄕〕兪樾曰く、釋文に、冥は

字の如し、又云ふ、本亦眠に作る、又音眠と、當に之に從ふべし、瞑眠は古今の字、「文選」養生論に達旦不瞑、李善注して曰く、瞑は古の眠字と、是なり、甘瞑は卽ち甘眠、徐無鬼篇に、孫叔敖甘寢秉羽、而郢人投兵、司馬云ふ、安寢恬臥以て德を廟堂の上に養ひ、千里の外に折衝すと、此に甘瞑と云ひ、彼に甘寢と云ふ其義一なり、並びに安寢恬臥を謂ふなり、「釋文」に冥を讀で冥の如くすは、之を失す、淮南子俶眞篇に曰く甘瞑於溷澖之域と、卽ち此に本づくと、〔水流乎無形〕成玄英曰く、物に順ふこと無く、水の流行するが如く、時に隨ひ變に適して、形迹を守らざるなり、〔悲哉乎〕「釋文」に、一本悲哉悲哉に作る、

宋人有曹商者、爲宋王使秦、其往也、得車數乘、王說之、益車百乘、反於宋、見莊子曰、夫處窮閭阨巷、困窘織屨、槁項黃馘者、商之所短也、一悟萬乘之主、而從

なる所を擧げ、又其證を示して曰く、朱泙漫といふ人龍を屠るの術を支離益に學び、千金の家產を盡くし、學ぶこと三年にして其の術始めて成れり、而かも其の事世に用無く、術巧みなりと雖も、之を用ふる所無し、古人の道を學ぶは屠龍の術と同じく、人の爲めにするに非ざるが故に、世に用ふる所無く、獨り心に自得するのみ、道を得たる聖人は、理に於て必然なることゝ雖も、猶之を固執せずして、時と因循し、物情に隨逐す、故に至順にして爭ひの心なし、衆人は此に反し、理の必然ならざることをも猶之を固執して、時と違ひ物情に忤ふ、故に乖逆生じて常に爭氣を帶ぶ、常に爭氣に順ふが故に、其の行ひに貪求ありて、性に順ならざるなり、爭氣は之を恃みて止むと無ければ、則ち必ず自ら其の性を亡ぼすに至る、道を得ざる小夫の智は、人に贈遺し、或は簡牘を通し、以て意氣を修むるに過ぎず、精神を淺近の務めに疲弊せしめて、已の性を全くし天と一と爲ることを思はず、而して淺近の智を以て濫りに道を衞（マモ）り萬物を成就し、有形の物と無形の道とを合一にせんと欲す、此くの如き小夫は、其の智は宇宙の間に迷惑し、形は事物に累はされて、道の大本を知らざるなり、此に反して彼の至人は、精神を道の大本たる無始に歸して、無何有の鄕に甘眠し、形物の外に水の流るゝが如くに動き、自然の太淸に任せて發泄するが故に、發動するも亦淸靜にして、爲すことあるも亦無爲逍遙なり、悲ひかな、汝の知と爲す所は細小なること毛の如き者なるに、之に纏繞せられて、物外に超然たる能はず、性を葆（タモ）ち自然に任せて大寧靜に至ることを知らざるはと、反覆説きて、道を知る者と知らざる者との別を明かにしたるなり、

【解義】〔知道易勿言難〕老子の知者不ㇾ言、言者不ㇾ知と同意なり、其の語亦既に本書の天道篇知北遊篇に出づ、〔朱泙漫學屠龍於支離益〕「釋文」に司馬云ふ、朱泙漫支離益は皆人の姓名なり、郭慶藩曰く、「文選」張景陽七命の注に司馬を引て云ふ、朱は姓なり、泙漫は名なり、益は人名なりと、「釋文」と小異、兪樾曰く、支離は複姓なり、説、人間世篇に在り、朱泙も亦複姓、「廣韻」十虞朱字の注に、莊子有㆓朱泙漫㆒、郭注、朱泙姓也とあり、今の「象注」に此文無しと、〔單千金之家〕「釋文」に、單は盡なり、宣穎曰く、單は殫に同じ、

羅りしなり、〔聖人安其所安云云〕林雲銘曰く、所安は天なり、所不安は人なり、

莊子曰、知道易、勿言難、知而不言、所以之天也、知而言之、所以之人也、古之人、天而不人、朱泙漫學屠龍於支離益、單千金之家、三年技成、而無所用其巧、聖人以必不必、故無兵、衆人以不必必之、故多兵、順於兵故行有求、兵恃之則亡、小夫之知、不離苞苴竿牘、敝精神乎蹇淺、而欲兼濟道物、太一形虛、若是者、迷惑於宇宙、形累不知太初、彼至人者、歸精神乎無始、而甘冥於無何有之鄕、水流乎無形、發泄乎太淸、悲哉乎汝爲知、在毫毛、而不知太寧、

【大意】道を知る者は言はず、言ふ者は道を知らず、不言と言とを以て天と人とを分ち、古人は天にして人ならずと斷じ、朱泙漫の屠龍の術を學びて無用なるを擧げて之を證し、更に道を知らざる小夫は、小知を弄して精神を敝し、形に累はされて太初を知らず、至人は精神を無始に歸して無爲逍遙するを對論して其別を明かにするなり、

【通釋】莊子曰く、道を知ることは易きも、言を忘れて言ふこと無きは難し、心に道を知りて身に體し、而して口に之を言はざるは、卽ち眞知にして、進て天と一と爲る所以なり、道を知るも、妄に之を言うて身に體する能はざるは、是れ眞知に非ずして、知を誇る者のみ、退きて人に往く所以なり、古の人は無言にして道を體し、天と一にして人たらず、今人の人にして天ならざるとは同じからず、以上先づ古人の今人に異

自ら墨たるべきの性を具有せるが故に、造物者が彼をして墨たらしめしなり、師授にも非ず、亦緩の力にも非ず、而るに彼の緩は自ら恃み、儒學の功は常人に異なる者ありと爲し、弟の學の性の自然なるを知らず、奪うて以て己の功と爲し、自ら尊大にして父を賤む、迷妄も亦甚だし、之を譬ふれば、井を穿ちて水出るは、地中に先づ泉あればなり、而るに齊人の或者は己が泉を造りたる功ありとして之を私し、他の飲む者を拒みて爭ひ、相擊ちたると同じ豈迷妄の甚しきに非ずや、余故に曰く、今世の人は皆緩と同じく、性の固有を知らずして、何事も人力にて爲し得らるゝ者と信じ、自ら是として其の知巧を誇らざる者なし、彼の有德者の誠に有德者たる所以は、其の是れあるを知らざるを以てなり、而るを況や更に進みたる有道者に於てをや、豈自ら已に道あるを知らんや、世人の自ら是として自然を忘るゝ者は、古に之を遁天の刑に懸る者と爲せり、人は天の生ずる所なれば、天の自然に任すれば、甚だ安くして災害無けれども、天を離れて人に任せ物に牽かるれば、災害を免れず、則ち天を遁れ離れたる刑罰を受くるなり、緩の自殺して生を滅したるが如きは、卽ち其の明證なり、之を要するに、道を得たる聖人は、常に其の安んずべき所の天に安んじて、其安からざる所の人に安んぜす、而して世俗の衆人は、常に其の安からざる所の人に安んじて、其の安んずべき所の天に安んぜず、是れ聖人と衆人との別、而して禍福の由て分るゝ所なり、

【解義】〔造物者之報人也〕造物者の字、亦大宗師篇に見ゆ、偉哉夫造物者、將以予爲此拘拘也と、成玄英曰く、造物者は無物なり、能く萬物を造化す、故に之を造物と謂ふ、〔相捽〕「說文」に、捽は頭髮を持つなり、「晉語」〔國語〕戎夏交捽の韋注に、捽は交對なりと、相爭うて擊つを謂ふなり、〔自是有德者以不知也〕兪樾曰く、自是の二字にて絕句すべし、緩の自ら其儒を美とするが若きは、是れ自ら是とするなり、有德者は已に此あるを知らず、有道者は更に論無し、故に曰く、有德者以不知也、而況有道者乎と、以の字は讀で已と爲す、〔古者謂之遁天之刑〕養生主篇に曰く、遁天倍情、忘其所受、古者謂之遁天之刑と、緩の自ら是として天より受けし所の性を忘れしは、卽ち遁天にして、其の爲めに自殺の禍を取りしは刑に

は語助なり、胡は何なり、王先謙曰く、闔は盍に同じ、何不なり、胡も亦何なり、闔胡連文するは、古書の尙猶惟獨の例の如し、自ら複語あるのみ、嘗は試なり、兪樾曰く「釋文」に云ふ、良とは良人、緩を謂ふなりと此れ下句の義と屬せず、又云ふ、良或は垠に作る、冢なりと、此說之に近し、垠は猶壙の如し、壙と垠とは本疊韻の字、應帝王篇の以處壙垠之野是れなり、故に壙も亦之を垠と謂ふを得、「管子」の度地篇に、郭外爲之土閬とあり、閬は垠と同し、外物篇胞有重閬の「郭注」に曰く、閬は空曠なりと、其の義亦相近し、〔既爲秋柏之實〕秋は宣本に楸に作る、樹の名「韻會」に楸は梓と本同く、末異なり、檜の柏葉松身なるが如し、「埤雅」に楸梧早脫、故楸謂之秋とあり、

夫造物者之報人也、不報其人而報其人之天、彼故使彼、夫人以己爲有異於人、以賤其親、齊人之井飲者相捽也、故曰、今之世皆緩也、自是、有德者以不知也、而況有道者乎、古者謂之遁天之刑、聖人安其所安、不安其所不安、衆人安其所不安、不安其所安、

【大意】鄭人緩也の節及び此節を合して一章と爲す先づ緩と翟との事を敍し、後に之を論して、其の天を忘れて人を主とするの迷謬を斥し、今世の人は皆緩に同く、天に安んせずして人に安んじて禍害を取るを歎ず、鄭緩を論ずるに非ずして、緩を假りて世俗の迷謬を論ずるなり、

【通釋】以下は前の鄭緩の事に就きて之を論ずるなり、造物者の人に報施するは、其の人の力に報施するに非ずして、其の人の天性のまゝに報施する者なり、故に學業の成るも、其の人の天性自ら之を成すに適するによる者にて、本人の希望勉勵、他人の資助、師たる者の敎誘等に由るに非ず、されば彼の弟は先づ

年、而緩爲儒、河潤九里、澤及三族、使其弟墨、儒墨相與辯、其父助翟、十年而緩自殺、其父夢之、曰、使而子爲墨者予也、闔胡嘗視其良、既爲秋柏之實矣、

【大意】　鄭人の緩なる者、學びて儒と爲り、又其の弟の翟に資して學ばしめしに、翟は墨と爲りたり、兄弟學を異にして相爭辯し、父は翟を助けしかば、緩憤りて自殺し、父の夢に見はれて、翟を墨と爲せしは我の力なるに、我を苦しめて已に秋柏の實と爲るに至らしめたりと曰うて、父を恨みしことを叙す、

【通釋】　鄭人の緩なる者、裘氏と云ふ地にて誦讀し、學問すること適に三年にして學成り、緩は儒者と爲り、仕へて俸祿を得たれば、黄河の流るゝ所、其の潤ひ沿岸九里の遠きに及ぶが如く、緩の利澤三族に及び、其の弟の翟に資して學ばしめしに、翟は墨教を大成せり、儒は堯舜を祖述し文武を憲章し、禮樂を飾る而して墨は禹の道に遵ひ、勤儉を主とし、禮樂を薄くす其赴く所同じからず、故に兄弟各其學を執りて、是を爭辯して止まず、而して其父は弟の墨を助けて緩を紲けしかば、十年にして緩憤慨に堪へず、遂に自殺して死せり、既にして其の父緩を夢に見たり、緩父に謂うて曰く、汝の子をして墨と爲らしめしは予の力なり、然るに汝之を思はず、反つて弟を助けて吾を苦しめしは何ぞや、何ぞ試みに我の墓上を視ざる、已に化して秋柏の實と爲れり、汝尚之を憐まざるかと、

【解義】　〔緩也〕「釋文」に司馬云ふ、緩は名なり、〔呻吟裘氏之地〕「釋文」に、呻吟は吟詠を謂ふ、學問の聲なり、崔云ふ、呻は誦なり、裘氏は地名、崔云ふ、裘は儒服、〔祇三年〕郭象曰く、祇は適なり、〔澤及三族〕成玄英曰く、三族は父母妻の族を謂ふなり、〔其父助翟〕「郭注」に翟は緩が弟の名と見えたり、按ずるに翟は墨子の名なり、乃ち其の墨翟の學を爲せる弟を助くるを謂ふ、孔門の徒夫子の名を諱みて丘を名と爲す者なし、墨子の門流と雖も、亦恐らくは直ちに其の宗師と、名を同くする者なかるべし、姑く錄して考を待つ、「宣注」に弟習墨翟之教、故曰助翟と是の説之を獲たり、〔闔胡嘗視其良〕「釋文」に闔

と曰ひ、假借して詳審の義と爲す、「漢書」の本紀に、其孰計之、賈誼傳に、日夜念此至孰也、鄒陽傳に、願大王孰察之、顏師古の注に曰く、孰は審なりと、之を覺悟すること莫くして終に自ら審にせざるを言ふなり、

巧者勞而知者憂、無能者無所求、飽食而遨遊、汎若不繫之舟、虛而遨遊者也、

【大意】前段を承けて知巧ある者は憂勞を免れず、無能者は外物に求めらるゝこと無きを以て、飽食して遨遊し、自然を樂むを得るを論ず、

【通釋】前既に伯昏瞀人の列禦寇を戒飭せしことを敍し、而して末に之を論じて曰く、巧者は外物の爲めに勞苦し、知者は又外物の爲めに憂思す、たゞ知巧を闕きたる無能者は外物に求めらるゝことなし、故に腹に充つるまでに飽食して終生自由に遊び樂むを得、其の世の中に浮遊すること、譬へば猶ほ繫がざる舟の水上に浮び、波に任せて去流するが如し、是れ虛心にして遨遊する者、卽ち所謂逍遙遊にして、至人に非ざれば此に至る能はざるなり、

【解義】〔飽食而敖遊〕「釋文」に云ふ、敖本又遨に作ると、遨も亦遊なり、〔汎若不繫之舟〕「說文」に、汎は浮ぶ貌、一に曰く、風波に任せて自ら縱にするなり「詩」邶風に亦汎其流とあり、

【備考】篇首より此に至るまでの三節を合して一章と爲す、第一節は、列禦寇が齊に適かんとして、賣漿の主人の特に己を敬するを見、驚き悟りて途中より還りしことを敍す、是れ禦寇已に齊に用ひらるゝの性に害あるを知るなり、第二節は、門弟の列禦寇の家に聚まり依るに因りて、伯昏瞀人其の猶未だ知能を去る能はずして人に依られ、終に其の本性を害するに至るを責む、是れ禦寇門弟に聚まり依らるゝの、齊に用ひらるゝと同く、亦性に害あるを知らざるなり、第三節之を論して、人は宜く無能にして物に求めらるゝこと無く、逍遙自適して自然を樂むべきを謂ふ、前の二章は敍事にして、後の一節は論贊の如し、主意は論贊に在り、

鄭人緩也、呻吟裘氏之地、祇三

れ盡く人の毒害なり、多衆相聚まるも、徒らに小言嗷々たるのみにして、互に道に於て覺ること無く悟ること無し、何ぞ相審かにする所あらんや、

【解義】〔敦杖蹙之乎頤〕「釋文」に司馬云ふ、敦は竪なり、林雲銘曰く、其杖を柱にし以て頤を支へ、而して皮肉皺むを謂ふなり、〔賓者以告列子〕「釋文」に云ふ、賓一本亦儐に作る、同じ、客を通ずるの人を謂ふ、〔暨乎門〕暨は及なり、〔曾不發藥乎〕曾は乃なり、「釋文」に、司馬本發を廢に作りて云ふ、置なり、郭慶藩曰く、發廢古同聲通用の字なり、「爾雅」に、廢は稅舍なり、方言に、發は稅舍車なりと、是れ發は廢と同じ、「漢書」貨殖の發貯を「史記」に廢著に作り、「荀子」禮論篇、大昏之未發齊也の發を、「史記」禮書には廢に作り、「史記」扁鵲傳の色廢脈亂、徐廣曰く、一に發に作ると、皆其の例なりと、〔果保汝矣〕郭慶藩曰く、保汝とは汝に依るを謂ふなり、僖二年「左傳」、保於途旅の杜注に、保は依なり、周本紀(史記)に百姓懷之、多從而保歸焉と、保歸は依歸を謂ふなり、司馬保を訓して附と爲す、附も亦依なり、〔而焉用之感豫出異也〕王先謙曰く、列子黄帝篇には、之の下に感也の二字多く、異の下に也の字無し、「張注」に云ふ、汝何の術を用ひて能く物を感ずること此の如きやと、先謙案ずるに、本文の而焉用之、其の義自ら明かなり張說非なり、感豫出感とは、物に先だちて惠を施し、豫め出だして以て人を感ぜしむ、是れ自ら異にするなり、〔必且有感搖而本才又無謂也〕王先謙曰く、黄帝篇には必且を且必に作り、感の下に也字あり、才を身に作る、先謙案ずるに、本才は卽ち本質也、「孟子」の非才之罪也と義同じ、「釋文」に一本才を性に作るとあり、意亦同じ、言ふこころは、必ず惠あり、以て人を感ずれば、則ち此の心物を逐ひ、汝の本質を搖かさん、究に何をか謂はんや、〔彼所小言盡人毒也〕「釋文」に、言、道に入らず、故に小言と曰ふ、其の多患なるを以て故に人毒と曰ふ、張湛黄帝篇(列子)に注して曰く、小言は細巧、以て人を感ぜしめ易し、故に人の毒害と爲すなり、〔莫覺莫悟何相孰也〕「釋文」に王云ふ、孰は誰なり、誰か相親愛する者ぞと謂ふ、既に告語する無きは、此れ相親愛せざるの至りなり、郭嵩燾曰く、疑ふらくは莊子の本旨、親愛の意を蠲くに在り、王說非なり、說文に、孰は食飪なり、孰食を孰

門、曰、先生既來、曾不發藥乎、曰、已矣、吾固告汝曰、人將保汝、果保汝矣、非汝能使人保汝、而汝不能使人無保汝也、而焉用之感豫出異也、必且有感搖而本才、又無謂也、與汝遊者、又莫汝告也、彼所小言、盡人毒也、莫覺莫悟、何相孰也、

【大意】 列禦寇の家に徒弟多く聚まるを見て、伯昏瞀人猶其知能を顯はし人の感ずるが爲めに此の如くなれば、終に將に其本性を毀傷するに至らんとすと戒むるなり、

【通釋】 其の後多く時日を經過せざる頃に、伯昏瞀人が列禦寇の所に往きたるに、家に弟子の聚まりて教を受くる者多しと見え、戸外に脱ぎたる履滿てり、伯昏瞀人北面して戸外に立ち、杖を竪てゝ頤を杖へ、鈹を杖頭に聚めて立つこと久しくして、何をも言はず、踵を回らして出で去れり、列氏の賓客を通ずるを司る儐者が之を見、内に入りて列子に告げしかば、列子其の伯昏瞀人なるを知り、急ぎ出で來り、履を穿く暇も無く、手に履を提げ、跣にて走り往き、門にて之に追ひつきて曰く、先生既に此まで來られしに、一言も禦寇の藥と爲るべき誨言を置かずして去らるゝかと、伯昏瞀人曰く、休めよ、復た言ふこと勿れ、吾前日既に汝に告げて、人將に汝に聚り依らんとすと注意し置きたるに、今來て見れば、果して聚まりて汝に依れり、是汝が求めて人をして汝に聚まり依らしむるに非ず、汝に猶才知の外に顯はるゝありて、人を感じて汝に聚まり依る無からしむること能はざるなり、汝何ぞ此の人を感ずることを用ひんや、物に先だちて惠を施し、豫め出だして以て人を感ぜしむるは、是れ汝自ら人に異にするなり、必ず惠して以て人を感ぜしむるあれば、則ち此の心、物を遂ひ、汝の本質を搖かすに至る、竟に何をか謂はんや、汝に聚まりて與に交はる者は、皆汝の知能を喜ぶ者なれば、汝に忠告する者無し、彼等細巧の言は以て人を感ぜしめ易し、是

共に意義を成さず、孫詒讓曰く、諜借りて渫と爲す、形が外に宣渫して光儀あるを謂ふなりと、今之に從ふ、〔使人輕乎貴老〕按ずるに、人は漿人なり、長老は宜く貴敬すべし、而るに之を後にし、先づ列子に漿を遺る、是れ貴老を輕んずる也「釋文」に、貴老は御寇を重んずると老人よりも過ぐるを謂ふと曰ひ林雲銘は貴は爵ある者老は齒ある者と爲すは、共に穩ならざるに似たり、〔而鳌其所患〕「釋文」に曰く、鳌は亂なり、成玄英曰く、良に禍患の方に亂生せんことを恐ると、按ずるに、而は則なり、「一切經音義」に通俗文を引て曰く、淹韭を鳌と曰ふ、凡べて齏醬和する所の細切したるを鳌と曰ふと、此に據れば則ち鳌は醃釀の義あり、釀生所患と曰はずして鳌と曰ふは、饗家饗人等を承けて、巧みに字を用ひたるなり、亂と訓じては、啻に意義通じ難きのみならず、又作者の苦心を沒するに似たり、〔多餘之贏〕東條弘曰く、江本古藏本及び江南李氏書庫本、張溍夫注本、共に多上に無字あり、按ずるに、「列子」黃帝篇に此文あり、亦多上に無字あり、此れ恐らくは脫せるならん、賣漿の主人は亘多の餘りたる財產無き貧人なるを言ひ、齊國萬乘の主に照映するなり、〔效我以功〕按ずるに、「國策」西周策の而吾得無效也、齊策の願效之王、秦策の效上洛於秦の高誘注竝びに曰く、效は致なりと、「詩」の七月の載纘武功、崧高の世執其功、毛傳竝びに曰く、功は事なりと、則ち效我以功は致我以事を言ふなり、成玄英の我を驗するに功績を以てすと曰ふは、望文生義たるを免れず、〔女處己人將保汝矣〕女處己の三字は、上の善哉觀乎に連ねて讀むべし、郭象曰く、苟も形を遺れざれば、則ち所在保せらる、成玄英曰く、汝己の身を安處し、我を忘るゝ能はず、猶形德を顯はす、物の歸する所と爲り、門人益を請うて之を聚守せんと、共に女處己を人將保汝矣に連ねて讀む、非なり、

無幾何而往、則戶外之屨滿矣、伯昏瞀人北面而立、敦杖蹙之乎頤、立有間不言而出、賓者以告列子、列子提屨跣而走、暨乎

づ我に漿を進めたり、伯昏瞀人曰く、賣漿の五家にて汝に先づ進めたりとて、何の爲めに驚けるや、列禦寇曰く、吾れ内の本性外物に拘懸せられて、未だ解脱すること能はず、智能外に表顯して光華を成し、以て外に人心を鎭服し、人をして貴敬すべき長者を輕んじて、吾に先づ漿を進めしむるに至る、則ち恐らくは禍患を釀生せん、彼の漿を賣る人は、唯漿羮の代金を取るが爲めにするのみにて、亘多く餘贏の財產ある者に非ず、其利たるや薄く、其の權たるや輕し、然らば則ち競うて人に求むること無かるべきに、猶我に對して特に鄭重にし、他客の貴敬すべき者を輕んじて先づ我に進めしこと是くの如し、而るを況や萬乘大國の主に於てをや、國大に權重くして、一日も安逸する能はず、其身力は政務に勞れ、其の智慮は國事に盡き、知能の賢士を求むるに急なるや必せり、吾若し齊に至らば、齊王將に我に任ずるに政務を以てし、而して我に授くるに國事を以てせんとす、則ち物の爲めに役せられて、性を傷毀し、禍患を免れざらんとす、吾れ漿家に觀て、勢ひ其の此に至らんとするに驚きたり、故に齊王を見ず、中途より反りたるなりと、伯昏瞀人之を聞て曰く、汝の漿人に觀察して中途より還りたるは甚だ善き處置なり、汝の如き知能ある士には、人將に聚り來り附きて益を求めんとす、愼まざるべからずと、「人將保女矣」の一句、此節を收めて下節を牽き起すなり」

【解義】「遇伯昏瞀人」成玄英曰く、伯昏は楚の賢士號して伯昏瞀人と曰ふ、隱者の徒なり、禦寇既に壺子を師とし、又伯昏に事ふ、「奚方而反」按ずるに、書堯典、「方命圮族」の馬鄭の注竝びに曰く、方は放なりと、此の方も亦當に放に通じて讀み、論語の「放利而行多怨」の放と同く依と訓ずべし、「釋文」に李云ふ、方は道なりと、恐らくは非なり、「吾嘗食於十饗而五饗先饋」「釋文」に司馬云ふ、饗良讀で漿と曰ふ、饋は遺なり、按ずるに、賣漿十家中の五家は、貴老を後にして先づ漿を列子に饋るを言ふなり、下文の「使人輕乎貴老」は之を承けて言ふ、「内誠不解」誠は卽ち眞なり、性を謂ふ、解は懸解の解なり、知能事功の意其性を拘懸して未だ解脱する能はざるを言ふ、「形諜成光」郭象曰く、舉動便辟にして光儀を成すなり、「釋文」に司馬云ふ、形、衷に諜して光華を成すなりと

易也、故聖人法天貴眞、不拘於俗、

列禦寇第三十二

篇首の三字を取りて篇に名づく、意義なし○凡べて八章、

列禦寇之齊、中道而反、遇伯昏瞀人、伯昏瞀人曰、奚方而反、曰、吾驚焉、曰、惡乎驚、曰、吾嘗食於十饗、而五饗先饋、伯昏瞀人曰、若是則汝何爲驚已、曰、夫內誠不解、形諜成光、以外鎭人心、使人輕乎貴老、而韲其所患、夫饗人特爲食羹之貨、多餘之贏、其爲利也薄、其爲權也輕、而猶若是、而況於萬乘之主乎、身勞於國、而知盡於事、彼將任我以事而效我以功、吾是以驚、伯昏瞀人曰、善哉觀乎、汝處已、人將保汝矣、

【大意】列禦寇齊に適き、賣漿の家の主人が、多く己を尊敬するを觀て、吾性の物に拘懸せられ、知能外に發して、此に至るを察し、齊に至らば、王の己を重用して國政を委任せられ、爲めに眞性を毀傷するに至らんことを恐れ、中途より還りしことを其の師伯昏瞀人に語り瞀人其の觀察を善しとせしことを叙す、

【通釋】列禦寇が齊に適き、中途よりして止めて還り、途にて其の師の伯昏瞀人に遇ひたり、伯昏瞀人問うて曰く、汝は齊に適きたるに、何によりて反り來れるや、列禦寇曰く、吾心に驚きたり、故に中途より反れり、曰く、何に驚きたるや、曰く、吾れ旅中屢〻賣漿の家に食せしに、十家の内五家は、他客を差置きて先

之主千乘之君」成玄英曰く、天子は萬乘、諸侯は千乘と、戰車を出すの數を謂ふなり、「湛於禮義有間矣」「釋文」に云ふ、湛或は其に作ると、按ずるに、其に作る者是なり、孔子猶未だ禮の僞造にして取るに足らざるを悟らず、子路の言を失ふを責むるに視て知るべし、或は禮義に沈溺し、大道と間ありと解すれども下文と支吾し、意義疏通せず、「彼非至仁不能下人」按ずるに、彼の字は汎く人に接する者を指す、漁父を指さず、又孔子自らを指さず、至仁の至は精誠之至の至なり、至仁は卽ち眞仁を謂ふ、賢を見る者に就て言ふ、成玄英曰く、若し至德の人に非ざれば則ち人をして謙下せしむる能はずと、林雲銘之を駁して曰く、至仁を以て漁父を指して說き、漁父の至仁、故に能く人を服して之を下らしむと謂はゞ、則ち「下レ人不レ精、不レ得二其眞一」の二語便ち解し去らずと、林說是なり、「惜哉不仁之於人也」按ずるに、惜哉以下由獨擅之に至るまでの十七字は一氣讀すべし、惜哉は由に係り、子路の賢者を尊敬すべきを知らず、獨り不仁の禍を擅にするを惜むなり、

【備考】以上七節を通じて一篇の文章を構成す、先づ第一節子貢の語中に於て、仁義禮樂の字を點出し、漁父の語中に於て眞の字を點出して字眼と爲し、以下各節之を承け、眞を以て仁義禮樂を破るを以て此篇の主意と爲す、而して孔子自ら漁父の有道の至人なるを知り、大道を學ばんとするの志甚だ篤きに拘はらず、反て終に禮の人爲に出で仁義の身に禍するを悟りて之を脫却すること能はず、末節の子路を戒むるに於ても、猶失禮不仁にして賢者を尊敬する能はざるを以てす、以て儒敎の人心を錮蔽する甚だ固く、道に大害あるを示す、是れ作者微意の存する所なり、

名言

同類相從、同聲相應、固天之理也、

强哭者雖レ悲不レ哀、强怒者雖レ嚴不レ威、强親者雖レ笑不レ和、眞悲無レ聲而悲、眞怒未レ發而威、眞親未レ笑而和、

忠貞以レ功爲レ主、飮酒以レ樂爲レ主、處レ喪以レ哀爲レ主、事レ親以レ適爲レ主、

事レ親以レ適、不レ論二所以一矣、飮レ酒以レ樂、不レ選二其具一矣、處レ喪以レ哀、無レ問二其禮一矣、

禮者世俗之所レ爲也、眞者所三以受二於天一也、自然不レ可

道之所在、聖人尊之、今漁父之於道、可謂有矣、吾敢不敬乎、

【大意】　歸途に子路、孔子の漁父に接するに甚だ敬せられたる所以を問ひ、孔子子路の失禮不仁の心あるを戒め、道は萬物の由る所にして、死生成敗の在る所、而して漁父は有道の至人なるが故に之を敬せりと對へて、此篇を結ぶ、

【通釋】　已に歸途に就き、子路孔子の車に旁うて歩み問うて曰く、拙者仲由夫子に從ひ、役を門下に執ること日久し、未だ嘗て夫子が人を遇せらるゝこと、此の漁父の如くに畏敬せられしを見ず、是れまでに萬乘の天子、大國千乘の君の夫子を見るに、未だ嘗て廷上に相對して禮位を設け、同等にせざること無きも、夫子猶之に對して倨傲の容あり、今彼の漁父は棹を杖つきて逆ひ立ちたるまゝにして、夫子は腰を曲げて磬の如くに折り、言ふ每に必ず起ち拜して應せられしは、之を敬せらるゝこと甚だ過ぐる無きを得んや、門人皆夫子の爲され方を怪めり、彼れ一漁父の身、何を以て此の如き畏敬の待遇を受くを得るやと、孔子軾に伏して歎じて曰く、甚しきかな由の教化し難きことや、汝の禮義を學ぶとの日たる甚だ久し、而るに樸鄙の心今に至りて猶未だ除き去らざるか、近く進み寄れよ、吾れ汝に語らん、夫れ長老に遇うて敬せざるは、是れ失禮なり、賢者を見て尊ばざるは、是れ不仁なり、至仁の人に非ざれば人に謙下すること能はず、謙下するも精誠ならざれば、其の眞を得ずして仁禮の實無し、故に長く禍敗を取りて其の身を傷害するなり、不仁の人の身を害するや、禍之より大なるはなし、而して由は獨り禮義に化せずして、此の不仁の禍害を一身に受けんとす、惜むべきの事なり、且つ道は萬物の由て生死成敗する根本なり、物皆道を失へば死し、道を得れば生ず、人の事を爲すにも、道に逆らへば則ち失敗し、道に順へば則ち成就す、故に物には貴賤無く、道の在る所は聖人之を尊敬す、今彼の漁父は有道の人と謂ふべし、萬乘の主千乘の君の、人爲を以て貴き者と同じからず、吾敢て之を尊敬せざるを得んや、請ふ諸子之を怪む勿れ、

【解義】　〔遇人如此其威也〕按ずるに、其は之と通じ威は畏と通ず、遇人如此之畏也と言ふなり、〔萬乘

吾は子を去らんと言ひ捨て、乃ち棹を操り船を刺して去り、岸近く蘆葦の間に緣りて、次第に遠ざかり行けり、顏淵因りて車を還らして歸り仕度を爲し、子路は綏を授けて車に乘らしめんとするに、孔子之を顧みず、一心に漁父の行くを見送り、船已に遠く、水波全く定まり、棹の音も聞えざるに至りて、而る後に敢て車に乘り、歸途に就きたり、孔子既に異人を見て至道の端を聞くを得て、之を仰ぐこと彌〻甚だしく、喜懼交も〳〵至る、故に思慕して容易に去る能はざるなり、

【解義】〔今者丘得過也〕「釋文」に云ふ、過失を得るを謂ふなり、過或は遇に作る、郭慶藩曰く、遇に作る者是なり、遇過形以て互に訛り易し、〔子路授綏〕綏は車に乘る時、顚墜を防ぐ爲めに執る所の繩なり、

子路旁車而問曰、由得爲役久矣、未嘗見夫子遇人如此其威也、萬乘之主、千乘之君、見夫子、未嘗不分庭伉禮、夫子猶有倨敖之容、今漁父杖拏逆立、而夫子曲要磬折、言拜而應、得無太甚乎、門人皆怪夫子矣、漁父何以得此乎、孔子伏軾而歎曰、甚矣由之難化也、湛於禮義有間矣、而樸鄙之心、至今未去、進吾語汝、夫遇長不敬失禮也、見賢不尊不仁也、彼非至仁、不能下人、下人不精、不得其眞、故長傷身、惜哉、不仁之於人也、禍莫大焉、而由獨擅之、且道者萬物之所由也、庶物失之者死、得之者生、爲事逆之則敗、順之則成、故

て主と爲す、〔恤於人〕成玄英曰く、恤は憂なり、〔祿祿而受變於俗〕陸西星曰く、祿祿は碌碌と同じ、〔子之蚤湛於人僞〕「釋文」に、蚤は音早、字亦早に作る、成玄英曰く、孔子の雄才、久く情を聖迹に迷はし、人間の浮僞に耽りて早く元道を聞かざるを惜む、

孔子又再拜而起曰、今者丘得過也、若天幸然、先生不羞而比之服役、而身教之、敢問舍所在、請因受業而卒學大道、客曰、吾聞之、可與往者、與之至於妙道、不可與往者、不知其道、愼勿與之、身乃無咎、子勉之、吾去子矣、吾去子矣、乃刺船而去、延緣於葦間、顏淵還車、子路授綏、孔子不顧、待水波定、不聞拏音、而後敢乘、

【大意】孔子漁父に請うて、其の舍に就きて大道を受けんと願ひ、漁父許さず、自ら勉めて道を求めよと曰うて去ることを叙す、

【通釋】孔子又再拜して起ちて曰く、丘は不幸にして至人に遇はず、大道を聞くを得ざりしに、今日偶然先生に遇ふを得しは、天幸の如し、願はくは先生丘の如き、鄙陋の者の師たるを羞とせず、之を家に服役する奴僕に比して、教誨を垂れられんことを、敢て問ふ先生の舍宅の在る所は何處なりや、請ふ因て業を受けて、卒に大道を學ばんと、漁父曰く、吾れ聞けることあり、若し上智の士の與に妙道に往き得べき者に逢はゞ、之と相語り以て與に妙道に至るべし、若し下根の人の與に妙道に往く能はず道の貴きを知らざる者に逢はゞ、愼で之と相語ること勿れ、乃ち咎殃無からんと、子は吾の言ふ所を解せず、自ら省察して其の眞を保つことを思はざるは、是れ未だ與に道に往くべからざる者にして、與に道を語るに足らざる者なり、子たゞ勉めて自ら道を求めよ、吾は子を去らん、

ざりしを憐む、

【通釋】 孔子又愀然と慙ち悚(オソ)れたる貌して問うて曰く、眞を守れと謂はるゝ其の眞とは何を謂ふにや、漁父曰く、眞とは精誠の至極を謂ふなり、精ならず誠ならずしては人は感動すること能はず、故に哀情無くして強ひて哭する者は、其の聲悲しと雖も、人をして哀れを催さしめず、內に忿怒の情無くして強ひて怒る者は、其聲貌嚴なりと雖も、人をして畏懼せしむること能はず、內に愛情無くして強ひて親む者は、其笑容掬すべしと雖も、人をして和樂せしむる能はず、之に反して、眞の悲しきは聲無きも哀れに、眞の怒りは外に發せざるも威あり、眞の親しきは笑はざるも和らぎ、內に眞情ある者は、其精神必ず外に露(アラ)はれて人を感動す、是れ眞を貴ぶ所以なり、其の之を人理に用ふるや、眞を以て親に事ふれば則ち慈孝と爲り、眞を以て君に事ふれば則ち忠貞と爲り、眞を以て酒を飲めば則ち歡樂し、眞を以て喪に處(ヲ)れば則ち悲哀す、忠貞を致すは事功の成るを以て主と爲し、酒を飲むは樂みを盡くすを以て主と爲し、喪に處るには哀を盡くすを以て主と爲し、親に事ふるには、父母の意に適して欣慰せしむるを以て主と爲す、是を以て功の成るは其の績の美なるに在りて、其の事迹を一にすべからず、親に事へて父母の意に適するには、何事を以てすべきを論ずるに及ばず、酒を飲みて歡樂するには、其の用ふる所の器具を選ばず、喪に處りて哀戚するには、其の禮を問ふに及ばず、禮なる者は世俗人爲に成りたる者なり、眞なる者は天より受けて生れたる者なり、自然にして改易すべからざる者なり、故に聖人の世に處するは、すべて天に法象し、眞性を貴びて、人爲の俗禮に拘はることなし、愚迷の徒は此に反し、天に法象すること能はずして、一々人爲の禮に違はんことを憂ひ、天より受けたる眞性を貴ぶことを知らず、碌々として俗禮の爲めに其の眞性を變せらる、故に精誠を失ひ、人を感動するに足らずして禍に遭ふを免れざるなり、惜いかな子の早く人爲の俗禮に沈溺して、大道を聞くことの晩きや、

【解義】〔眞者精誠之至也〕成玄英曰く、眞とは僞ならず、精とは雜ならず、誠とは矯めざるなり、按ずるに、卽ち性の毫も毀損せられざる者を謂ふ、〔忠貞以功爲主〕成玄英曰く、貞は事の幹なり、故に功績を以

【解義】〔愀然而歎〕成玄英曰く、愀然は慙竦の貌、〔離此四謗〕離は罹なり、遭なり、魯衛宋陳蔡の事は前に見ゆ、〔處陰以休影處靜以息迹〕處陰處靜は無爲自ら守るを謂ふなり、

孔子愀然曰、請問何謂眞、客曰、眞者精誠之至也、不精不誠、不能動人、故强哭者、雖悲不哀、强怒者、雖嚴不威、强親者、雖笑不和、眞悲無聲而哀、眞怒未發而威、眞親未笑而和、眞在內者、神動於外、是所以貴眞也、其用於人理也、事親則慈孝、事君則忠貞、飮酒則歡樂、處喪則悲哀、忠貞以功爲主、飮酒以樂爲主、處喪以哀爲主、事親以適爲主、功成之美、無一其迹矣、事親以適、不論所以矣、飮酒以樂、不選其具矣、處喪以哀、無問其禮矣、禮者世俗之所爲也、眞者所以受於天也、自然不可易也、故聖人法天貴眞、不拘於俗、愚者反此、不能法天而恤於人、不知貴眞、祿祿而受變於俗、故不足、惜哉子之蚤湛於僞而晚聞大道也、

【大意】孔子何をか眞と謂ふと問ひ、漁父之に對へて、眞は精誠の至りて、能く人を感動し、功用又著大なり、故に聖人は之を貴ぶ、禮は僞にして自然に出でず、而して俗士は之に拘はりて其の眞を損し、以て禍敗を取ると曰ひ、孔子の俗禮に沈溺して大道を聞か

際、觀動靜之變、適受與之度、理好惡之情、和喜怒之節、而幾於不免矣、謹脩而身、愼守其眞、還以物與人、則無所累矣、今不修之身、而求之人、不亦外乎、

【大意】孔子魯衞宋陳蔡の厄難を擧げて、自ら罪失なきに此の禍謗に遭ふ所以を問ひ、漁父、愚人の影を畏れ迹を惡み、疾走して死せる喩を設け、孔子は自ら無爲にして眞を守る能はざるが爲めに、此禍に遭ふことを語げ、其眞を守るべきを勸む、

【通釋】孔子愀然として慚ぢ悄れたる貌して歎息し、再拜して起ちて曰く、丘は再び魯より逐はれ、迹を衞に削られ、樹を宋に伐られ、陳蔡にては圍まれ、死に瀕したること數なり、丘は身に罪失の行ひあるを知らず、而るに此の四謗に遭罹するは何の故なるやと、蓋し孔子未だ漁父の言へる語に就きて自ら省察する能はず、故に此の疑を發せられたるなり、漁父之を聞き、悽然と傷悲し、容を變じて曰く、甚しきかな、子の解悟し難きや、或る地に影を畏れ足迹を惡みて之を去らんとして走る者ありたり、足を擧ぐること愈速かにして、足迹は愈多くなり、走ること愈疾くして、影嘗て身を離れず、自ら以て走ること遲きが爲めに影に追ひつかると爲し、疾く走りて休まず、終に力絕えて死せり、此人陰處に居りて以て影を休め、身を靜かに置きて以て迹を息むることを知らざるは、愚も亦甚だし、而して子の四謗に遭ふを歎ずるも、亦此愚人に同じ、子は常に仁義の間を審かにし、君子小人同異の際を察し、人事動靜の變を觀、受と與との度を適宜にし、好惡の情を理め、喜怒の節を和せんとし、務めて心を外物に馳す、故に禍に免れざらんとするなり、謹で汝の身を修め、愼で其の眞を守り、內自ら全くして、心を外事外物に勞せず、之を人の爲すがまゝに任せば、則ち陰に處りて影自ら消え、靜に處りて跡自ら息むと同く、禍患に累せらるゝこと無し、而るに今之を己の身に修むることを思はず、禍謗を免れんことを人に求むるは、豈道に外れたることならずやと、

謂ふ、方言に曰く、露は敗なり、本或は路に作る、路露古通用す、淮南臣道篇の路亶者也に、王念孫曰く、路亶は猶羸憊の如し、亦通じて潞に作る、秦策士民潞病の高注に云ふ、潞羸也と、皆敗義と相近し、孟子滕文公篇、是率天下而路也の「趙注」に云ふ、是道率天下之人以羸路也と云へり、〔貢職不美〕「釋文」に云ふ、職或は賦に作る、〔不泰多事乎〕「釋文」に云ふ、泰一本又大に作る、音同じ、〔非其事而事之謂總〕「成疏」は摠に濫なりと章炳麟曰く、總借りて傯と爲す、地官廛人掌斂市總布肆長斂其總布、杜子春皆云ふ、總當に傯と爲すべしと、古音東談相轉ずるなり、「曲禮」に、長者不及毋儳言とあり、是れ傯とは、應に豫るべからずして之に豫るなり、〔兩容頰適〕章炳麟曰く、頰は夾聲に從ふ、夾の平聲は兼と爲る、器有幷夾は猶幷兼の如し、此の類は則ち借りて兼と爲す、〔變更易常以挂功名〕章炳麟曰く、挂は圭聲に從ふ、卦畫と本同字、「說文」に、挂は畫也とあり、畫引伸して謀畫と爲す、圖本謀と訓じ、而して引伸して畫圖と爲すと、反覆相明かなり、規と營とも亦圖を畫くと謂ふ、引伸して規畫と爲し、營求と爲す、皆同意、挂功名とは、功名を圖るなり、功名を規畫するなり、〔謂之很〕郭慶藩曰く、「說文」に、很は言不聽從也とあり、「逸周書」謚法篇に、愎很遂過者曰刺と、「荀子」成相篇に、愎很遂過有悔、

孔子愀然而歎、再拜而起曰、丘再逐於魯、削迹於衛、伐樹於宋、圍於陳蔡、丘不知所失、而離此四謗者何也、客悽然變容曰、甚矣子之難悟也、人有畏影惡迹而去之走者、擧足愈數、而迹愈多、走愈疾、而影不離身、自以爲尙遲、疾走不休、絶力而死、不知處陰以休影、處靜以息迹、愚亦甚矣、子審仁義之間、察同異之

の君たり、天子の公卿たる勢位あること無く、又諸侯の卿大夫たる職事も無く、一庶人たる身分にして、擅に禮樂を整へ、人倫を善くし、以て衆民を教化せんとするは、是れ位を離れ上を犯せる者にて、爲すべからざる、多事を爲して天下を亂す者に非ずや、且つ世人の行ひには八の疵あり、爲す所の事には四の患あり、之を察せざるべからざるなり、八疵とは何ぞや、己の事とすべきことに非ざるに、強ひて其の事に豫るは、之を摠と謂ふ、上より顧みて其の言を求めざるに、強ひて進言するは、之を佞と謂ふ、人の意氣を希望して、其の言を導達するは、之を諂と謂ふ、是非を擇ばずして多言するは、之を諛と謂ふ、好で人の過惡を言ふは、之を讒と謂ふ、人の交りを析き親みを離して、互に相怨ましむるは、之を賊と謂ふ、私利の爲めに惡人を稱譽し、詐僞して人を失敗せしむるは、之を慝と謂ふ、善と惡とを擇ばず、二者共に容れ共に適合して、偸かに其の意の欲する所を覗ひ、之に阿附せんとするは、之を險と謂ふ、此の八疵は、外は以て衆人を惑亂し、内は以て己の身を傷敗す、故に此の行ひある者は、君子は遠ざけて之を朋友と爲さず、明君は斥けて之を臣下と爲さず、所謂四患とは何ぞや、好で大事を經營し、變更して常を易へ、以て其の間に於て功名を圖る、之を叨と謂ふ、一己の私智を專らにして事を擅にし、人を侵して自ら用ふる、之を貪と謂ふ、己の過失を見るも敢て改めず、人の諫言を聞きて從はざるのみならず、反て愈甚しくする、之を狠と謂ふ、人の爲す事が己に同じければ、惡なるも之を善なりとし、己の爲す事に異なるは、善なるも之を惡なりとするは之を矜と謂ふ、此の叨貪狠矜が卽ち四患なり、能く此の八疵を除き去り、四患を行ふこと無ければ、始めて敎ふるを得べきなり、子も亦宜く自ら省察して八疵四患を去るべし、

【解義】〔至於今六十九歲〕巖井文曰く、孔子七十にして從心所欲不踰矩、（論語の爲政篇）故に六十九と曰ふ、妙甚し、〔經子之所以〕「釋文」に司馬云ふ、經は理なり、按ずるに、所以は卽ち前に所謂所治なり、性服忠信云云 の事を謂ふ、故に曰く、子之所以者人事也と、〔四者離位而亂莫大焉〕按ずるに、而の字則と爲して讀む、〔乃無所陵〕成玄英曰く、陵も亦亂なり、〔田荒室露〕郭慶藩曰く、荒露は荒蕪敗露を

其の位を守ると守らざるとに由りて治亂するを言ひ、次ぎに四階級に就き、各其の憂ふべき事を列擧し、孔子の天子諸侯大夫に非ずして、禮樂を飭へ人倫を善くせんとするは、分を踰え位を犯したる事なりと責め、更に人に總佞諂諛讒賊慝險の八疵と、叨貪狠矜の四患とあり、此を除き去りて始めて敎ふべきを言ふ、

【通釋】孔子再拜して起て曰く、丘は少き時よりして學を修め、以て今に至りて年已に六十九歳なり、而るに未だ至人の道を聞くを得ず、今幸に先生に遇ふを得たり、敢て心を虚にして高敎を受けざらんや、漁父曰く、類を同くする者は相從ひ、同聲は相應するは、固より天の道なり、子の學を好み至敎を聞かんとするの篤きは、是れ我と同類同聲なり、宜く相從ひ相應ずべし、吾れ請ふ、吾の得る所の者を披き出して、子の治むる所の者を經理して、至道に入らしめん、子の治むる所は人事なり、人世には天子諸侯大夫庶人の四階級あり、此の四階級の人々、各其の分を守りて自ら正しくすれば、是れ則ち天下治平の盛美なる者なり、若し然らずして、此の四の者が其の地位を離れて他の位を犯すときは、天下の亂これより大なるは無し、天子諸侯大夫の官に在る者は、各其の司る所の職を治め、庶人は又各其の務むべき事に心を用ふれば、則ち上下の分立ちて、亂るゝこと無し、故に家貧にして田畝荒蕪し、屋室敗壞し、衣食足らず、上より徵されて納むべき租賦か屬かず、其の上に妻妾和合せず、長幼序次を失ひ、尊卑亂れて一家治らざるは、是れ庶人の憂ふべき事なり、材能譾劣にして任に任へず、官事治まらず、品行淸白ならず、下僚屬官荒亂して事を勤めず、功績の美あらずして、爵祿を保持する能はざるは、是れ大夫の憂ふべき事なり、朝廷に忠臣無く、國家昏亂して、民間の工藝技術巧みならず、隨て貢獻の物も美なるを得ず、春秋の朝覲に他の同列の諸侯の下位に落され、天子に順なるを得ざるは、是れ諸侯の憂ふべき事なり、陰陽の二氣和せずして、寒暑時を失ひ、以て動植諸物の生育を損傷し、諸侯暴亂して戰爭起り、互に相攘奪攻伐し、以て人民を殘害し、禮樂壞れて節ならず、財用窮乏し、人倫五常の道修まらず、風俗亂れて百姓淫亂なるは、是れ天子の三公九卿たる者の憂ふべき事なり、今孔子は既に諸侯

工技不巧、貢職不美、春秋後倫、不順天子、諸侯之憂也、陰陽不和、寒暑不時、以傷庶物、諸侯暴亂、擅相攘伐、以殘民人、禮樂不節、財用窮匱、人倫不飭、百姓淫亂、天子有司之憂也、今子既上無君侯有司之勢、而下無大臣職事之官、而擅飾禮樂、選人倫、以化齊民、不泰多事乎、且人有八疵、事有四患、不可不察也、非其事而事之、謂之摠、莫之顧而進之、謂之佞、希意道言、謂之諂、不擇是非而言、謂之諛、好言人之惡、謂之讒、析交離親、謂之賊、稱譽詐僞以敗惡人、謂之慝、不擇善否、兩容頰適、偸拔其所欲、謂之險、此八疵者、外以亂人、内以傷身、君子不友、明君不臣、所謂四患者、好經大事、變更易常、以挂功名、謂之叨、專知擅事、侵人自用、謂之貪、見過不更、聞諫愈甚、謂之狠、同於己則可、不同於己、雖善不善、謂之矜、此四患也、能去八疵、無行四患、而始可教已、

【大意】孔子の至教を聞かんとするに篤きを稱して之を許し、世に天子諸侯大夫庶人の四階級あり、人各

りしは、將に何を求めんとするや、孔子曰く、先生曩に門人どもにお話あり、十分に言ひ盡くされずして去られたり、丘は不肖にして未だ先生の言はれし所を了解する能はず、因て追うて此まで至りし也、竊に下方に侍して先生の欬言を聞かんとす、願はくは丘の及ばざるを助けて十分に敎へられたしと、漁父喜ばしく笑聲を爲して曰く、子の學を好むこと亦甚しきかなと、

【解義】〔方將杖拏而引其船〕「釋文」に拏は女居反と司馬云ふ、橈なり音は饒と、「サホ」と訓ず、〔先生有緒言〕兪樾曰く、楚詞九章、款秋冬之緒の王注に曰く、緒は餘なりと、讓王篇に曰く、其緒餘以爲國家と、是れ緒は餘と同義、緒言は餘言なり、先生の言未だ畢らずして去る、是れ盡くさゞるの言あり、故に緒言と曰ふ、「釋文」に猶先言の如しと曰ふは是に非ずと、〔咳唾之音〕人の談話を尊敬して言ふなり、漢書宣元六王傳に、大王誠賜咳唾とあり、此と同じ、〔嘻甚矣子之好學也〕成玄英曰く、嘻は笑聲なり、

孔子再拜而起曰、丘少而脩學、以至於今六十九歲矣、無所得聞至教、敢不虛心、客曰、同類相從、同聲相應、固天之理也、吾請釋吾之所有、而經子之所以、子之所以者人事也、天子諸侯大夫庶人、此四者自正、治之美也、四者離位、而亂莫大焉、官治其職、人憂其事、乃無所陵、故田荒室露、衣食不足、徵賦不屬、妻妾不和、長少無序、庶人之憂也、能不勝任、官事不治、行不清白、群下荒怠、功美不有、爵祿不持、大夫之憂也、廷無忠臣、國家昏亂、

して漁父と曰ふ、卽ち屈原の逢ひし所の者なり、既にして海に汎びて齊に至り、號して鴟夷子と曰ふ、魯に至りて號して白珪先生と曰ひ、陶に至り、號して朱公と曰ふ、迹を晦まし光を韜み、時に隨て變化し、仍ち大夫種に書を遺ると、按ずるに、此れ無稽の說、取るに足らず、漁父を假りて儒敎を駁し、眞を葆ち道を求むべきを言ふのみ、毫も范蠡と涉るなし、〔須眉交白〕「釋文」に云ふ、須眉一本亦鬚眉に作る、李云ふ、交は俱なり、一本皎に作る、成玄英曰く、鬚眉の白を交ふは壽者の容と、按ずるに、皎に作る者是なり、全白なるを謂ふ、〔揄袂〕「釋文」に李云ふ、揄音投、投は揮なり、〔距陸而止〕「釋文」に李云ふ、距は至なり、爾雅釋に、高平を陸と謂ふ。〔飾禮樂〕「釋文」に云ふ、本飭に作る、音勅と、按ずるに、飾は飭と通用す、飭は修整なり、〔選人倫〕「漢書」武帝紀の集注に應劭を引て曰く、選は善なり、〔其分於道也〕「釋文」に司馬云ふ、分は離なり、

子貢還報孔子、孔子推琴而起、曰、其聖人與、乃下求之、至於澤畔、方將杖拏而引其船、顧見孔子、還鄉而立、孔子反走、再拜而進、客曰、子將何求、孔子曰、曩者先生有緒言而去、丘不肖、未知所謂、竊待於下風、幸聞咳唾之音、以卒相丘也、客曰、嘻甚矣子之好學也、

【大意】孔子二人に聞き、漁父を求めて澤畔に至り、敎を乞はれしことを敍す、

【通釋】子貢還り來りて漁父の言ひしことを孔子に報じたれば、孔子琴を推しやりて起ち、其漁父は聖德ある人ならんかと曰ひ、直に杏壇を下り、之を尋ね求めて澤畔に至られしに、漁父は方に棹を立てゝ船を引き下さんとする所なりしが、顧みて孔子の來られしを見て、還りて孔子に向つて立てり、孔子少しく退き、再拜して進む、漁夫曰く、子の我を追うて此に至

【大意】孔子弟子と緇帷の林に遊び、絃歌して居られしとき、一漁夫來り聽きて、子路子貢に孔子の事を問ひ其心を苦め形を勞し、自己の眞性を危害するは大に道と離るゝを知らざるを笑ふことを叙す、

【通釋】孔子が諸弟子と與に緇帷といふ林に遊ばれ、杏壇の上に休坐し、弟子は書を讀み、孔子は詩を歌うて琴を鼓き居られ、曲を奏すること未だ半ばならざるとき、一漁父あり、船を下りて來る、其の人鬚も眉も皎白にして、頭に冠を戴かず、髮を被り、袂を揮つて原を行き、上りて小高く平かなる處に至りては止まり、左手は膝の上に置き、右手に頤を持ちて、孔子の鼓かるゝ歌曲を聽き居りしが、一曲終りしとき、子貢と子路とを、手招きして呼びたり、二人倶に往きて漁父に對せしかば、漁父孔子を指さして問うて曰く、彼は如何なる人ぞや、子路對へて曰く、魯國の君子なり、漁父其の氏族を問ふ、子路對へて曰く、族は孔氏なり、漁父曰く、孔氏は何を職業とする人なるや、子路如何に答ふべきやと考へて未た應ぜず、子貢乃ち對へて曰く、孔子は心に忠信を佩服して、身には仁義を行ひ、禮樂を修整して人倫を善くし、上は以て君主に忠を致し、下は以て衆民を敎化せんとす、是れ孔子の事とし治むる所なりと、漁父又問うて曰く、孔子は土地を所有せらるゝ君主なるか、子貢曰く、否、有土の君に非ず、又問ふ、然らば侯王を輔佐する卿相の位ある人か、曰く、否、卿相にも非ずと、漁父乃ち笑つて還り、行く〳〵言うて曰く、孔子は仁なることは則ち仁なり、恐らくは自己の身を敗ることを免れざらん、斯く人の爲めに心を苦め形を勞して、以て自己の眞性を危害するは、嗚呼遠く道と離るゝことなるが、孔子は之を知らざるなりと、〔末尾の一語、主意を徹露し、下文を引き起すなり〕、

【解義】〔緇帷之林〕「釋文」に司馬云ふ、林の名なり、成玄英曰く、其林欝茂、日を蔽うて陰沈、葉條を布垂し、又帷幕の如し、故に之を緇帷の林と謂ふなり、〔杏壇〕「釋文」に司馬云ふ、澤中の高處なり、李云ふ、壇の名、成玄英曰く、其處杏多し、之を杏壇と謂ふなりと、〔有漁父者〕「釋文」に云ふ、魚を取る者なり、一に云ふ、是れ范蠡なりと、成玄英曰く、漁父は越の相范蠡なり、越王句踐を輔佐して呉を平げ、事訖りて乃ち扁舟に乘りて三江五湖に游び、姓名を變易し、號

篇あるべからず、知らず郭象何を以て之を删除せざりしや、吾れ是に至りては郭象の學に疑ひ無き能はざるなり、

漁父第三十一

此篇も亦一篇一章の文なり、孔子漁父に遇うて道を問ひ、漁父孔子の分を忘れ外を務めて僞に陷るを詰り、物累を避け、眞を守り、以て自ら妙道に至るべきを教ふ、

孔子遊乎緇帷之林、休坐乎杏壇之上、弟子讀書、孔子絃歌鼓琴、奏曲未半、有漁父者、下船而來、須眉交白、被髮揄袂、行原以上、距陸而止、左手據膝、右手持頤以聽、曲終而招子貢子路、二人倶對、客指孔子曰、彼何爲者也、子路對曰、魯之君子也、客問其族、子路對曰、族孔氏、客曰、孔氏者何治也、子路未應、子貢對曰、孔氏者性服忠信、身行仁義、飾禮樂、選人倫、上以忠於世主、下以化於齊民、將以利天下、此孔氏之所治也、又問曰、有土之君與、子貢曰、非也、侯王之佐與、子貢曰、非也、客乃笑而還行、言曰、仁則仁矣、恐不免其身、苦心勞形、以危其眞、嗚呼遠哉、其分於道也、

ら、闘雞に異ならざる庶人の劍を好まるゝは、臣竊に大王の爲めに之を薄しとすと、是に於て趙王豁然として其非を覺悟し、自ら莊子の手を牽きて殿に上らしめたり、食事掛りの臣、食を上つりしに、王深く慚悔の情に堪へず、心氣を安定して就て食すること能はず、立て食卓を三たびも繞られたり、莊子之を見て氣の毒に思ひ、王を呼で曰く、大王安坐して心氣を靜定せられよ、劍の事は己に盡く奏し了れりと、是に於て文王已の非を悔い過を思うて、其の後三ケ月の久しき、宮を出でられざりき、此より文王復た劍を喜びざりしかば、劍士は禮遇の昔の如くならざるを不平に思へ共、莊子の言の道理あるに服し、皆自殺して斃れたり、

【解義】〔宰人上食〕宰人は宰割を掌るの臣にて、厨人に同じ、〔王三環之〕成玄英曰く、環は繞なり、〔劍士皆服斃其處也〕「釋文」に司馬云ふ、禮せられざるを怨りて皆自殺するなり、成玄英曰く、復た賞を受けず、故に恨みて死を致すなり、按ずるに、一說に服は感服なり、劍士莊子三劍の說を傍聽して、其の大にして至理あるに感服するなり、斃は踣なり、死と訓ずべからず、其の處は殿下なり、斃其處は自殺して其處に死するを謂ふ、一說に劍士皆自ら其技の小なるを耻ぢ、頭垂れ膝屈し、遂に身其處に倒れて起つ能はざるなりと、上文に文王の莊子の說に服したるを叙し、此二句、劍士の服せしことを補叙すと、

【備考】此篇の主意は、文王に說きて其の喜好する所の擊劍を止めしむるに在り、莊子能く王霸の大劍を以て庶人の小劍を折き、文王を開悟せしめて太子の囑望を成せり、叙事精彩あり、首尾照應あり、結構完密にして、妙文と稱すべし、但し此篇は孟子梁惠王篇の齊宣王曰、寡人有疾、寡人好勇、對曰、王請無好小勇、夫撫劍疾視、曰彼惡當我哉、此匹夫之勇、敵一人者也、王請大之より取りたる者にて、匹夫之勇に代るに庶人之劍を以てしたるに過ぎず、主意已に劍士を排して王道を勸むるに在りて、毫も道家虛無因應自然に從ふの意無し、文中又夫子必儒服而見之の語あり、是に由りて之を觀れば、名は莊周なれども、其人は儒家にして、道家の徒に非ざるを知るべし、其の文章も亦戰國遊說の徒の語氣に近くして、他の諸篇に似ず、以て此篇の莊周の作に非ざるのみならず、道家の手に成らざるや明かなり、南華の書中、當に此

の推移を順にし、中は萬民の意を和樂して四方を安んず、此の劍一たび用ふれば、其威力の盛なることは雷霆の震ふが如くにして、海内の諸侯皆降服して其の命令に聽從せざる者無く、天下糾合せられて一と爲る、此れ諸侯の劍なりと、是れ亦天下の英豪を用ひ海内の諸侯を威服する覇者の事業を劍に寓せて説きたるなり、

【解義】〔直之亦無前〕亦は前の王者の劍に亦するなり、下同じ、東西南北思服せざるなきは、王覇皆同じ、たゞ德と力との異なるのみ、〔安四鄕〕成玄英曰く、四鄕は猶四方の如し、

王曰、庶人之劍何如、曰、庶人之劍、蓬頭突鬢、垂冠、曼胡之纓、短後之衣、瞋目而語難、相擊於前、上斬頸領、下決肝肺、此庶人之劍、無異於鬬雞、一旦命已絕矣、無所用於國事、今大王有天子之位、而好庶人之劍、臣竊爲大王薄之、王乃牽而上殿、宰人上食、王三環之、莊子曰、大王安坐定氣、劍事已畢奏矣、於是文王不出宮三月、劍士皆服斃其處也、

【大意】王次ぎに庶人の劍を問ひ、莊子乃ち現に王の好む所の劍士の風貌を擧げて、其有害無益の小技なるを極言し、王其非を悟りて慚悔することを叙す、

【通釋】王曰く、庶人の劍は何如、莊子曰く、庶人の劍は、蓬頭突鬢して垂冠を戴き、曼胡の纓を結び、短後の衣を著け、目を瞋らして語難し、王の前に相擊ち、或は頸や領を斬り、或は肝や肺を決る、此れ庶人の劍にして、雞の鬪ふに異なることなし、相擊ちて一たび生命已に絕てば、復た其の人を國事に用ふる能はず、實に無益有害の小技なり、今大王は、天子の劍を用ひて王道を行ひ、天子と爲るべきの位ありなが

本には、所奏を所奏に作る〔以燕谿石城爲鋒〕以下九句は其の體なるを言ふ、「釋文」に、燕谿は地名、燕國に在り、石城は塞外に在り、〔齊岱爲鍔〕齊岱は齊の泰山なり、天子明堂の在りし處、「釋文」に司馬云ふ、鍔は劍刃なり、〔晉魏爲脊〕按ずるに、下文に韓魏爲夾とあり、魏の字再出、此れ恐らくは晉楚の誤り、〔周宋爲鐔〕「釋文」に三蒼を引て曰く、鐔は劍口なり、和名「ツバ」と訓ず〔韓魏爲夾〕「釋文」に司馬云ふ、夾は把なり、一本鋏に作る、同じ、和名「ツカ」と訓ず〔開以陰陽持以春夏行以秋冬〕制以五行の句より以下本句までは其製の精なるを言ふ、開は劍德の實用を謂ふ、開を分て持と行と爲す、春夏は陽にして秋冬は陰なり、春夏は仁惠に比し、秋冬は刑罰に比す、

曰、諸侯之劍何如、曰、諸侯之劍、以知勇士爲鋒、以清廉士爲鍔、以賢良士爲脊、以忠勝士爲鐔、以豪桀士爲夾、此劍直之亦無前、擧之亦無上、案之亦無下、運之亦無旁、上法圓天以順三光、下法方地以順四時、中和民意以安四鄕、此劍一用、如雷霆之震也、四封之內、無不賓服而聽從者矣、此諸侯之劍也、

【大意】次ぎに文王諸侯の劍を問ひ、莊子又劍に寓せて覇者力を以て諸侯を威服し天下を平定するの道を説く、

【通釋】既にして王又諸侯の劍は何如と問へり、莊子對へて曰く、諸侯の劍は、智勇の士を以て鋒と爲し、清廉の士を以て鍔と爲し、賢良の士を以て脊と爲し、忠勝の士を以て鐔と爲し、豪傑の士を以て鋏と爲す、此の劍之を直くして前を衝けば、亦前に當る者無く、之を擧げて上を拂へば、亦上に支ふる者無く、之を案へて擊ち下せば、亦下に障ふる者無く、之を左右に拂へば、亦旁に礙る者無し、上は圓天に法象して日月星の運行を順にし、下は方地に法象して春夏秋冬

【大意】 莊子將に殿下に技を試みんとして、三劒あるを言ひ、王の問に應じて、先づ天子劒を詳說し、劒に寓せて聖人王道の大にして効用の宏なるを陳べ、文王茫然自失せしことを叙す、

【通釋】 乃ち莊子を召し出し、王之に謂うて曰く、今日は士をして劒技を治め、夫子と勝負を試ましめんとすと、莊子曰く、久く之を望みて待ち居りしなり、請ふ速に之を試みん、王曰く、夫子が用ふる所の杖は、長きか可きや、短きか可きや、莊子曰く、臣の劒を奏するは、長きも短きも皆可も、然れども臣には三劒あり、唯王の用ひんと欲せらるゝまゝ、何れをも用ふべし、請ふ先づ三劒を言ひ、而る後に技を試みん、王曰く、願はくば其の三劒の說明を聞かん 莊子曰く、天子の劒あり、諸侯の劒あり、庶人の劒あり、此を三劒と爲す、王曰く、天子の劒とは何如、莊子曰く、天子の劒は、燕谿石城を以て鋒と爲し、齊の泰山を以て鍔と爲し、晋魏を脊と爲し、周宋を鐔と爲し、韓魏を鋏と爲し、其外を包むに四方の夷狄を以てし、之を裹むに四時を以てし、繞らすに渤海を以てし、帶ぶるに常山を以てし、之を制御するには金木水火土の五行を以てし、之を論ずるには刑罰と恩德とを以てし、開きて用ふるには陰陽を以てし、開き用ふるの內、堅く持するには春夏を以てし、行りて致すには秋冬を以てす、此の劒之を直くして前を衝けば、前に當る者無く、之を擧げて上を拂へば、上に支ふる者無く、之を案へて擊ち下せば、下に障ふる者無く、之を左右に揮へば、旁に礙る者無し、上は天の浮雲をも決り、下は地の紀軸をも絕つを得、此の劒一たび用ふれば、諸侯を匡正して天下盡く服從す、是れ天子の劒なりと、〔聖人仁義の王道を用ひて天下を治むることを以て、劒に寓せて說き、其の效用の甚だ大なるを言ふ、〕文王始めより劒技の道を聞かんとして、忽ち聖人王道の大効用を聞く、故に茫然として自失せり、〔莊子は固と始めより之を言はんと欲す、劒服を著け劒技を誇說するは、之を說き出さんが爲めの手段たるに過ぎず、〕

【解義】〔今日試使士敦劒〕兪樾曰く、詩の魯頌、敦商之旅の箋に云ふ、敦は治なりと、「孟子」にも使虞敦匠事の文あり、敦劒は劒を治むるなり、〔夫子所御杖〕成玄英曰く、御は用なり、巖井文曰く、杖は木劒の類を謂ふ、〔臣之所奉皆可〕「釋文」に云ふ、司馬

子劔技の至る所を問へるにて、其携ふ所の劔の利鈍を問ふに非ず、司馬の說從ふべし、俞樾の十步一人千里不留行は其劔の利を極言するなり、行は劔を以て言ひ、人を以て言ふに非ずと曰ふは、反つて誤る、〔示之以虛云云〕按ずるに、此數句擊劔の術を說くのみ、道と關せず、成玄英の忘己虛心、開通利物、感而後應、機照物先、莊子之用劔也と、道を以て說くは非なり、〔令設戲請夫子〕按ずるに、「國語」の晉語に、請與之戲、韋注に、戲は力を角するなりと、此の戲は此と同じ、與に力を角すべき者を選び、而して夫子を請うて之を試ましめんと言ふなり、故に下文に其の劔士を校することを敍す、或は戲を以て戲場と爲すは非なり、〔乃校劔士〕「釋文」に司馬云ふ、考校して其の勝者を取るなりと、

乃召莊子、王曰、今日試使士敦劍、莊子曰、望之久矣、王曰、夫子所御杖、長短何如、曰、臣之所奉皆可、然臣有三劍、唯王所用、請先言而後試、王曰、願聞三劍、曰、有天子劍、有諸侯劍、有庶人劍、王曰、天子之劍何如、曰、天子之劍、以燕谿石城爲鋒、齊岱爲鍔、晉魏爲脊、周宋爲鐔、韓魏爲夾、包以四夷、裹以四時、繞以渤海、帶以常山、制以五行、論以刑德、開以陰陽、持以春夏、行以秋冬、此劍直之無前、擧之無上、案之無下、運之無旁、上決浮雲、下絕地紀、此劍一用、匡諸侯、天下服矣、此天子之劍也、文王芒然自失、

至、願得試之、王曰、夫子休、就舎待命、令設戲請夫子、王乃校劍士七日、死傷者六十餘人、得五六人、使奉劍於殿下、

【大意】 莊子劍士の裝ひして文王に見え、己の妙技を誇說して試合を請ひ、文王大に悅びて劍士を校し、敵手たるべき者を選ぶことを敍す、

【通釋】 文王劍の室を脫し、白刃を手にして莊子の入るを待ち、莊子も亦勇を示して敢て畏れず、殿門を入りても趨走せず、王に見えても拜せず、王問うて曰く、子は何の術を以て我に敎へんとして、太子をして、先づ我に言はしめしや、莊子曰く、臣大王の劍を喜まるゝを聞く、故に劍技を以て、王に見えしなり、王曰く、子の劍技は如何に能く勝て禁制するや、莊子曰く、臣の劍は十步毎に一人を斬り、此くの如くして千里を行くも足を留めず、敵する者は皆斬殺して、免れしむること無しと、文王之を聞き、大に悅びて曰く、莊子は誠に天下に敵無き達人なりと、莊子曰く、臣の劍の道たる、始めに敵に示すに虛を以てし、敵を開き導くに、擊ち込めば利あるべきの形を以てし、敵をして來り擊たしめ、之に後れて發し、劍を揮ふこと電光石火の如く、反つて敵に先きだちて之を擊刺するなり、願はくば敵手を得て之を試むるを得んと、眞に擊劍を善くする者の如くに誇說せり、王其の技術の錬達、尋常劍士の能く敵する所に非ざるべきを思ひ、直に試合を命せずして曰く、夫子休息せよ、宿舍に就きて命を待て、夫子に敵すべき者を選出せしめて、更に夫子を延き請はんと、莊子を退かしめ、乃ち三千の劍士を相擊たしめて、其の技を考校すること七日、其の試合の激甚なるが爲めに、死傷する者六十餘人あり、遂に選拔して妙技の士五六人を得、莊子に對して殿下にて劍技を奏せしむることゝ爲したり、

【解義】 「千里不留行」「釋文」に司馬云ふ、十步に一人と相擊て輙ち之を殺す、故に千里行くを留めざるなりと、東畡曰く千里の道十步毎に一人を置き、之と相闘うて過ぎ、能く遄に之を殺す、故に行を留めざるなりと、按ずるに、王の子之劍何能禁制と曰ふは、莊

の短き衣を著け、目を釣りあけ怒らして、言語流暢ならざる者のみ、此の如くなれば、王乃ち悅ばるゝなり、而るに今夫子は必ず儒服を著けて王に見えられては、其の事が必ず大に王の意に逆ひ、從て說く所も聽かれざらんと、莊子曰く、然らば劍士の服を縫はせ調ふべしと、太子の邸を辭し、歸りて劍服を仕立させ、〔三日めに劍服成りて、又太子に見えたれば、太子乃ち莊子を伴ひて王に謁見せられたり、〔蓋し此の三日の間に、太子より莊周と云ふ大擊劍家の來りしことを王に語り、王も欣びて之を待ち居りしなり、〕

【解義】〔趙文王〕「釋文」に司馬云ふ、惠文王なり、名は何、武靈王の子、莊子に後るゝこと三百五十年、洞紀に云ふ、周の赧王の十七年は趙の惠文王の元年なり、一に云ふ、長曆を案じ、惠文王を推すに、莊子と相値ふ、恐らくは司馬彪の言誤る、〔太子悝〕「釋文」に、悝は太子の名、兪樾曰く、惠文王の後を孝成王丹と爲す、此れに據れば太子蓋し立たず、〔然吾王所見唯劍士也〕按ずるに、然は雖然なり、否定するの辭にして肯定の辭にあらず、太子莊周の劍を善くせず、王に謁見しかたきを恐れ、此の言を發す、故に莊子對へて曰く、諸周善爲劍と、〔然吾王所見劍士〕此の然の字も亦雖然と云ふと同じ、太子莊子の儒服して王に見え、其意に逆ひ、說く所も從て聽かれざらんことを恐れて此言を發す、故に莊子對へて曰く、請治劍服と、〔曼胡之纓〕「釋文」に司馬云ふ、麤纓の文理なきを謂ふ、〔短後之衣〕陸西星曰く、衣の前が後よりも短きなり、事に便なる所以、〔語難〕「釋文」に云ふ、勇士憤氣心胸に積み、言流利ならざるなり、

王脫白刃待之、莊子入殿門不趨、見王不拜、王曰、子欲何以教寡人、使太子先、曰、臣聞大王喜劍、故以劍見王、王曰、子之劍何能禁制、曰、臣之劍、十步一人、千里不留行、王大說之曰、天下無敵矣、莊子曰、夫爲劍者、示之以虛、開之以利、後之以發、先之以

【大意】 趙の文王擊劍を好み、政を怠り、國衰ふ、太子悝之を患ひ、莊周をして之を止めしめんとす、莊子千金を辭して受けず、太子と語り、遂に劍服して太子と與に王に見ゆることを叙す、此の一節は前序なり、

【通釋】 昔趙の文王擊劍を好み、劍士の門を夾みて客となり養はるゝ者三千餘人あり、日夜王の前にて相擊たしめ、死傷する者、一年中に百餘人に至る、文王之を好みて厭くこと無く、國政を顧みず、是の如きこと三年、國衰へ、隣國諸侯相謀りて將に趙を伐たんとす、太子悝之を患ひ、左右近侍の者に募りて曰く、孰か能く父王の意を悅ばせて、劍士を好むを止むる者ぞ、若し能く之を止むる者あらば、千金の賞を賜與せんと、左右曰く、莊子は賢人なれば、當に之を能くすべしと推薦したり、太子乃ち使者を遣り、千金を以て莊子に捧げ贈らしめたるに、莊子金を受けず、使者と共に往きて太子に見えて問うて曰く、太子は何事を以て周に命ぜんとして、周に千金を賜はるや、太子曰く、夫子の明哲睿聰なるを聞き、願ひたき事ありて、謹で千金を捧げ、幣帛の代りとして從者の許まで贈りたるに、夫子之を受けられず、悝尙何ぞ敢て願ひを言ふを得んや、莊子曰く、使者の言ふ所を聞くに、太子の周を用ひんと欲する所は、趙王の喜好せらるゝ擊劍を絕止せしめんとせらるゝなりと、若し周大王に說きて聽かれず、上は大王の意に逆らうて怒られ、下は太子が擊劍を止めしめんとせらるゝの望みに當らざるときは、則ち自身は刑せられて死せん、周尙いづくに金を用ふる所あらんや、若し周大王に說きて聽かれ、上は大王の意を悅ばせて擊劍を止めしめ、下は太子の望みに當るときは、是れ趙が隣國より伐たれんとするの危きを救ふ者なれば、周何を求めてか得ざらんや、如何なる希望をも遂げ得ざるなからん、區々の千金何ぞ顧るに足らん、周の先づ千金を受けざるは是を以てなり、太子曰く、誠に先生の言ふ所の如し、吾父王は唯劍士のみを見て國政を聽かず、故に我之を患ひて、擊劍の嗜好を絕止せしめんと欲するなり、莊子曰く、承諾せり、周は嘗て劍を學びて擊劍を善くすれば、劍士として王に見えて之に說くべし、太子曰く、然れども吾父が平生見らるゝ所の劍士は、頭髮亂れて蓬の如く、鬢毛は突出し、低く傾きたる冠を戴き、粗末なる纓を結び、後方よりも前面

此篇は、莊子趙王に劍に三種の別あることを說き、王の好む所は最下の庶人の劍なるを言うて、王の意を開悟せしめ、其の擊劍を好むを止めしことを記す、全篇一章の文なり、

昔趙文王喜劍、劍士夾門而客三千餘人、日夜相擊於前、死傷者歲百餘人、好之不厭、如是三年、國衰、諸侯謀之、太子悝患之、募左右曰、孰能說王之意、止劍士者、賜之千金、左右曰、莊子當能、太子乃使人以千金奉莊子、莊子弗受、與使者俱往、見太子曰、太子何以敎周、賜周千金、太子曰、聞夫子明聖、謹奉千金以幣從者、夫子弗受、悝尙何敢言、

莊子曰、聞太子所欲用周者、欲絕王之喜好也、使臣上說大王、而逆王意、下不當太子、則身刑而死、周尙安所事金乎、使臣上說大王、下當太子、趙國何求而不得也、太子曰、然、吾王所見唯劍士也、莊子曰、諾、周善爲劍、太子曰、然吾王所見劍士、皆蓬頭突鬢、垂冠、曼胡之纓、短後之衣、瞋目而語難、王乃說之、今夫子必儒服而見王、事必大逆、莊子曰、請治劍服、治劍服三日、乃見太子、太子乃與見王、

と、「古詩」に曰く、交疏結綺窻と、孔を穿つこと交綺の如くする所以の者は、本と由て盗を防ぐなり、「釋名」に、樓は牖戸の間射孔なり、慺慺然たるを謂ふなりと、射孔は正に盗を防ぐの具なり、〔盡性竭財〕王先謙曰く、財を嗜むこと天性の若し、財は卽ち性なり、故に盡性竭財と曰ふ、〔單以反一日之無故〕郭嵩燾曰く、單當に亶と爲すべし、「史記」曆書の單閼、崔駰の注に、單閼一に亶安に作る、單亶字通ずと、「漢書」但字多く亶に作る、賈誼傳、非亶倒懸而已、揚雄傳、亶費精神於此と、單以反一日之無故とは、猶但以反一日之無故と言ふが如し、玉篇に、單は一なりと、一は猶單獨の如し、但字と義亦近し、〔繚意體而爭此〕王先謙曰く、繚は曲なり、意を曲げ體を屈して、之を爭ふを言ふ、

【備考】 無足問於知和より此に至るの三節を合して一章と爲す、無足先づ富の長生安體樂意すべきの効あるを曰ひ、知和其の然らざるを曰ひ、次ぎに無足富利を好むは人の性なりと曰ひ、知足之に對へて、我も亦一に性に由りて動き、外物の爲めに性を害するを欲せず、故に富利を貪らずと曰ひ、無足更に富利を求めざるの害を曰ひ、知足反て富利を貪るの大害を擧げて之を反駁す、要するに、世俗貪慾厭くを知らざるの徒を警醒し、富利の貴ぶに足らず、性の重ずべきを知らしめて、欲を去りて性を保ち、以て逍遙無爲自然に從はしめんとするなり、

名言

好面譽人者、亦好背而毀之、

人上壽百歲、中壽八十、下壽六十、除病瘐死喪憂患、其中開口而笑者、一月之中、不過四五日而已矣、

天與地無窮、人死者有時、操有時之具、而託於無窮之間、忽然無異騏驥之馳過隙也、

無恥者富、多信者顯、

小盜者拘、大盜者爲諸侯、諸侯之門、義士存焉、

孰惡孰美、成者爲首、不成者爲尾、

小人殉財、君子殉名、其所以變其情易其性則異矣、乃至於棄其所爲而殉其所不爲則一也、

説劍第三十

るなり、故に財を積み富を成すことは、之を名譽上より觀るも、其の名譽たるを見ず、之を利益上に求むるも、其の利益を得る能はざるなり、而るに流俗の人は、委曲至らざる所なく、心意身體を苦めて、かゝる無益有害の者を爭ひ求むるは、豈大惑の甚しきに非ずやと、〔觀之名、求之利〕の二句、自然に首節の無足の語に應じて、全章を結ぶ、作法甚だ巧妙なり、」

【解義】〔耳營鐘鼓筦籥之聲〕「淮南子」の原道篇に、精神亂營及び不足以營其精神」とあり、高誘の注に竝びに曰く、營は亂也、「大戴禮」文王官人篇、煩亂之而志不營の盧辯注に曰く、營は猶亂の如きなり、「釋文」に、筦一本亦管に作ると、成玄英曰く、籥は簫笛の類なり、〔口嗛於芻豢醪醴之味〕「孟子」告子篇、猶芻豢之悅我口」の趙注に草食曰芻、穀食曰豢とあり、「國語」の韋注同じ、又「大戴禮」曾子天圓篇の盧注に、牛羊曰芻、犬豕曰豢とあり、醪醴は共に酒なり、郭慶藩曰く、嗛は快なり、「戰國策」趙策の高注に曰く、嗛は快なりと、〔侅溺於馮氣〕侅は音「ガイ」「釋文」に云ふ、飲食咽に至るを侅と爲す、郭崇燾曰く「釋文」未だ强ひて意を通ずるを免れず、「說文」に、奇侅非常也とあり、「楊子方言」、非常曰侅事とあり侅溺は猶沈溺の深しと言ふが如しと、「釋文」に云ふ、馮音「憤」、憤は滿なり、憤畜して通ぜざるの氣を言ふなりと、王念孫曰く、馮氣は盛氣なり、昭五年の「左傳」に、今君奮焉震電馮怒、杜注に曰く、馮は盛なり、「楚詞」離騷の馮不厭乎求索の王注に曰く、馮は滿なり、楚人滿を名づけて馮と曰ふと、是れ馮は盛滿の義たり、讀を改めて、憤と爲すを煩す無きなり、〔貪財而取慰〕郭慶藩曰く、慰は當に蔚と通ずべし、「淮南」淑眞篇、五藏無蔚氣の高注に曰く、蔚は病なり、繆稱篇、侏儒瞽師人之困慰者也の高注に曰く、慰は病なりと、是れ蔚慰二字古訓通用するなり、〔服膺而不舍〕按ずるに、「禮記」中庸に眷眷服膺而弗失之、戴震曰く、服膺弗失とは、物を持つ者、之を奉じて胸間に著け少しも置かざるが如しと、不舍は卽ち弗失なり、郭慶藩の服膺而不舍は卽ち上文馮而不舍の義、服膺は卽ち馮なりと曰ふは非なり、〔滿心戚醮〕成玄英曰く、戚醮は煩惱なりと、按ずるに、醮通じて憔に作る、戚戚憂勞するを謂ふなり、〔內周樓疏〕疏正しくは䟽に作る、「說文」に、䟽は門戶の靑疏窻なり

の大害たる亂苦疾辱憂畏の六事を列擧し、富こそ反て害ありて益なき者なるに、心身を苦めて之を求むるは大惑なりと曰うて、之を反駁す、

【通釋】無足又曰く、子の如く必ず其の名譽を修め、其の形體を苦め、甘美の生活を絶ち、窮約攝養して其の生命を保持するは、則ち是れ亦久く病氣に艱み長く困厄して死せざる者と同じ、徒らに苦痛を增すのみにて、何の樂みもあることなし、子の言ふ所に從へば、人と生れたる甲斐なきにあらずや、知和又之を駁して曰く、平にして過不足なきを福となし、過ぎて餘りあるを害と爲すは、すべての物皆然らざるはなし、而して就中財の餘りあるは、其の害最も甚しき者なり、何となれば、富める人は、耳は鐘鼓筦籥等の音樂の聲に聒しく亂され、口は牛羊犬豕醪醴等の酒肉の味に快く夾へられ、以て其の意を感動して昏くなり、其の業を忘れて覺知する無きに至る、亂と謂ふべし、深く盛氣に溺れて、多慾厭くこと無く、益財を增積せんとして勉强することは、重き荷物を負うて坂路を上り行くが如くなるは、苦と謂ふべし、財寶を貪るが爲めに疾病を釀し、威權を貪るが爲めに精力を竭盡して、心身を衰弱せしむ、斯く安靜閒居すれば則ち其の體沈溺し、體氣悅澤すれば則ち盛氣勃發して、動靜共に困苦するは、疾と謂ふべし、富を欲し利に就くが爲めに、心を之に專らにして、耳あれども善言を聞くを得ざること、垣墻を築きて塞ぎたるが如くにして、身害の前に迫り來るも、之を避くるを知らず、更に氣を盛んにして貪りて止む能はざるは、辱と謂ふべし、財寶己に積て山の如きも、之を散じて用ふること無く、徒らに保持し吝惜して失ふことなく、心は全く之が爲めに惱み苦むも、尙ほ之を增殖せんとして止まざるは、憂と謂ふべし、家に在るときは則ち刼賊の來りて財を取らんことを恐れ、外に出るときは則ち寇盜の剝奪に遇はんことを畏れ、家には射孔のあきたる高き建物を周らして、嚴く盜賊を防ぎ、外に出づるときは、恐懼して獨行する能はず、此の如きは畏と謂ふべし、此の亂苦疾辱憂畏の六つは、天下の至害なり、然るに富者は其の害を遺忘して察するを知らず、災患己に至るに及びては、財寶の有らん限りを盡くして、たゞ以て一日だけにても無事安靜の境遇に反りたしと願ひ求むと雖も、其の願ひを遂ぐる能はざ

と曰ふは、恐らくは是に非ず、〔爭四處〕「成疏」曰く、四處は猶四方の如し、〔堯舜爲帝而雍〕孫詒讓曰く、雍は推の誤り、「漢書」田千秋傳の劉子推を、「鹽鐵論」の雜論篇に、推を雍に作る、是れ其例なり、推は位を善卷許由に推すを謂ふ、

無足曰、必持其名、苦體絕甘、約養以持生、則亦久病長阨而不死者也、知和曰、平爲福、有餘爲害者、物莫不然、而財其甚者也、今富人、耳營鐘鼓筦籥之聲、口嗛於芻豢醪醴之味、以感其意、遺忘其業、可謂亂矣、侅溺於馮氣、若負重行而上也、可謂苦矣、貪財而取慰、貪權而取竭、靜居則溺、體澤則馮、可謂疾矣、爲欲富就利故、滿若堵耳而不知避、且馮而不舍、可謂辱矣、財積而無用、服膺而不舍、滿心戚醮、求益而不止、可謂憂矣、內則疑劫請之賊、外則畏冠盜之害、內周樓疏、外不敢獨行、可謂畏矣、此六者天下之至害也、皆遺忘而不知察、及其患至、求盡性竭財、單以反一日之無故、而不可得也、故觀之名則不見、求之利則不得、繚意體而爭此、不亦惑乎、

【大意】無足又、子の如く富で快樂を盡くすことを求めず、節約して生を保持するは、久病長厄して死せざる者と同く、生甲斐無き者なりと曰ひ、知和因て富

り一擧一動皆天下百姓の具有する所の性の自然に率ひ、敢て其適度に違ふことなし、是を以て必要だけの物が足りさへすれば、更に爭ひ取らんとせず、爲すべきこと無ければ、外に求むること無し、若し足らざれば則ち之を求めて、四方に爭ひ取る、而かも己むを得ざる必要を足すのみなるが故に、自ら此を以て貪と爲さゝるなり、若し餘りあれば則ち之を辭して人に與ふ、而かも是れ必要以外の贅物を棄つるに過ぎざるが故に、天下を棄ると雖も、自ら此を以て廉と爲さゝるなり、人或は此を以て廉を爲し貪と爲さんも、其の實は敢て外の名利に迫られて爲すに非ず、内に反視して性の適度に鑑照し、過不足なからしむるに過ぎざるなり、是の故に、至人は勢は天子と爲るも、敢て位の貴きを以て人に驕らず、富は天下を有つも、敢て財の多きを以て人を戯侮せず、天子と爲り天下を有つの災患を計り、外は富貴なるも、内は其の反對の疾苦あることを慮り、以て性を毀損するの害ありと爲す、故に天下を辭して受けざるのみ、名譽を求むるが爲めに之を辭するに非ざるなり、堯舜が帝と爲り、其の位を推して許由善卷に讓りしは、天下を以て許由善卷に仁するに非ず、富貴の美を以て其の性を害せざらんが爲めなり、許由善卷が帝位を讓られて之を受けざりしは、故なく辭讓するに非ず、外事を以て己の性を害せざらんが爲めなり、此の堯舜も許由善卷も、皆同じく其の利に就き其の害を避くるに非ざるは無し、而して天下の人之を稱して賢と爲せば、則ち其の賢名に居るべきも、始めより名譽の爲めに與起して天下を相讓るに非ざるなりと、「無足知和倶に利に就き害を避くと曰ふ、而して無足は富貴を以て利と爲し、貧賤を以て害と爲し、知和は葆性を以て利と爲し、性を毀損するを以て害と爲す、語を同くして意を異にし、機鋒相當る所を見るべし」

【解義】「俠人之勇力」俠は挾と通ず、漢書叔孫通傳の殿下郎中俠」陛の師「古注」に曰く、俠は挾と同じと、「故動以百姓不違其度」按ずるに、故は固に通ず、動以百姓は、百姓の皆具有する所の性を以て動くを謂ふ、無足の欲惡避就固不待」師、此人之性也と曰ふに對す、政治を施すを謂ふに非ず、其度は性の適する所、過不足無きを謂ふなり、「成疏」の施爲擧動、百姓の心を以て心と爲す、百姓之に順ひ、亦其法度に違はざるなり

之度、勢爲天子而不以貴驕人、富有天下而不以財戲人、計其患慮其反、以爲害於性、故辭而不受也、非以要名譽也、堯舜爲帝而雍、非仁天下也、不以美害生也、善卷許由得帝而不受、非虛辭讓也、不以事害已、此皆就其利辭其害、而天下稱賢焉、則可以有之、彼非以興名譽也、

【大意】 無足は更に、富貴の利を好みて之に就き、貧賤の害を惡みて之を避くるは、人の性なりと曰うて、其論を補ひ、知和之を駁して曰く、至人の爲す所も亦皆性に本づき、利に就き害を避くるに外ならず、唯至人は性の適度の外に求むること無く、無用の外物の爲めに性を害するを欲せず、故に利害の名は同きも、葆性を以て利と爲し、失性を以て害とす、其實は同じからずと、說く、

【通釋】 無足又曰く、夫れ富の人に於ける、何事にも利便ならざることなし、富さへあれば、能く天下の善美、人間の勢威を窮極して、快樂を盡くすを得、是れ至德の人も逮ぶ能はざる所にして、又賢哲の士の及ぶ能はざる所なり、富者には人多く歸附するが故に、人の勇力を挾みて以て己の威强と爲し、人の知謀を取りて以て己の明察と爲し、人の道德に因りて以て己の賢良と爲し、國土を享受するに非ざるも、其の尊嚴なることは侯國の君主の如くなるを得、且つ夫の耳は聲を悅び、眼は色を愛し、口は滋味を旨しとし、威權勢力の以て其情に適することは、學ぶを待たずして心之を樂み、象どり倣ふを待たずして體之に安んず、夫れ心身の希欲する所は之に就き、嫌惡する所は之を避くるは、固より師授を待たず、此れ人の自然に具有する性の然らしむる所なり、故に凡そ天下の人、誰か能く富貴を離れて貧賤を樂む者あらんや、我一人富貴を樂みて之を欲するに非ざるなりと、知和又之を駁して曰く、道を知る者の事を爲すも、亦固よ

を求めざるなり、

【解義】〔無足問於知和〕成玄英曰く、無足は貪婪の人にして足るを知らざる者を謂ふ、知和は中和の道を體知し、分を守る淸廉の人を謂ふなり、二人を假設し、以て貪廉の禍福を明かにす、〔人卒〕猶人民の如し、前の天地秋水至樂諸篇に見ゆ、〔意知而力不能行邪〕郭慶藩曰く、意は語詞なり、讀で抑の若くす、抑意の二字古字通ず、「論語」學而篇抑與之與を、漢石經には抑を意に作る、是れ其の證、〔故推正不忘邪〕按ずるに、故は胡と通ず、何なり、「釋文」「成疏」共に承上遞下の辭と爲す、文義に於て不可なるに似たり、〔以爲夫絕俗適世之士焉〕按ずるに、此句首恐らくは誤脫あり、此まゝにては解釋を下す能はず、故に補足改訂して通釋を施したり、讀者之を諒せよ、〔慘憺之疾恬愉之安〕成玄英曰く、慘憺は悲みなり、恬愉は樂なり、

無足曰、夫富之於人、無所不利、窮美究勢、至人之所不得逮、聖人之所不能及、俠人之勇力而以爲威强、秉人之知謀以爲明察、因人之德以爲賢良、非享國而嚴若君父、且夫聲色滋味權勢之於人、心不待學而樂之、體不待象而安之、夫欲惡避就、固不待師、此人之性也、天下雖非我、孰能辭之、知和曰、知者之爲、故動以百姓、不違其度、是以足而不爭、無以爲、故不求、不足故求之、爭四處而不自以爲貪、有餘故辭之、棄天下而不自以爲廉、廉貪之實、非以迫外也、反監

愉之安、不監於體、怵惕之恐、欣歡之喜、不監於心、知爲爲而不知所以爲、是以貴爲天子、富有天下、而不免於患也、

【大意】 無足は富を以て長生安體樂意するの功ありと爲して、知和の之を求めざるを怪み問ひ、知和は富を求むる者は現在目前のみを覽て、古今を通觀する能はず、性を棄てゝ顧みず、是れ長生安體樂意する所以の道に非ずして、徒に禍患を取るのみ、故に富を求めずと答ふ、

【通釋】 無足が知和に問うて曰く、人たる者は未だ名譽に興起し利祿に從ひ就かざる者あらず、玆に人ありて其財産富めば、則ち人多く之に歸往す、歸往すれば則ち自ら下卑す、自ら下卑すれば則ち其の富人を尊貴す、夫れ人より下卑して尊貴せらるゝは、甚だ快くして、生命を長くし身體を安くし意を樂ましむる所以の道なり、而るに子のみは此の富を求むるに意無きは何ぞや、智足らずして富の功益を知らざるか、抑又富の功益を知るも、力足らずして之を求むる能はざるか、何ぞ正道を推求して念々忘れず、而して富貴を外にするや、知和曰く、此の富人は自ら以爲らく、我と時を同くして生き、鄉を同くして住居する者は、皆我に及ばず、我一人のみ流俗に超絕し世人に過越したる士なりと、斯れ全く胸中に主無く正道無く、古今の時と是非の分とを覽る能はず、唯現在目前の事のみを覽て、世俗に化せられ、人の至重至尊なる性を棄て去り、以て其の爲さんとする所の富貴を求むることのみを爲すなり、此くの如きは、其の生命を長くし身體を安くし意を樂ましむる所以の道を論ずるに於て、豈誤ること甚だ大ならずや、如何なるが悲痛の疾苦なるや、如何なるが恬愉の安樂なるやを、身體の上に監察せず、如何なるが怵惕の恐れなるや、如何なるが欣懽の喜びなるやを、心の上に監察せず、只管富貴を求むることのみを爲すを知りて、其の爲す所の事は、以て慘憺怵惕を來すか、恬愉欣懽を來すかを知らず、內を忘れて專ら外にのみ奔赴するが故に、貴きことは天子と爲り、富むことは天下を保有するも、猶禍患を免るゝ能はざるなり、故に我は道を守りて富

にして母に非ず、然れども其の父を見ざりしは幼にして父沒せしに出り、義の失に非ず、要するに亦誣言のみ、深く論ずるに足らず、〔匡子不見父〕「釋文」に司馬云ふ、匡子名は章、齊人、其の父を諫め、父の逐ふ所と爲り、終身父を見ず、孟子に見ゆ、盧文弨曰く、父母の二字互に易え、孔子不レ見レ父匡子不レ見レ母と爲すべし、〔正其言〕按ずるに、正は正邪の正に非ず、預期なり、孟子の公孫丑上篇に必有レ事焉、而勿レ正の正に同じ、〔離其患〕離は罹なり、

【備考】 子張問滿苟得より以下此に至るまでの四節を合して一章と爲す、子張は儒敎を代表し、滿苟得は世俗を代表し、行ひを修めて、仁義を爲すと、欲を縱にして利得を貪るとの是非に就きて、互に相論難じて決せず、遂に無約に就きて判決を乞ひ、無約之を判して、二人の主張する所皆道に背くと爲し、人は當に逍遙無爲、物に拘束せられずして、性を保ち天に從ふべきを曰ふ、主意は末節に在り、故に此章は前章に幷觀し、子張を以て孔子の代理と爲し、滿苟得を以て盜跖の代理と爲し、孔跖、未決の獄を此章にて判決せし者として讀めば、兩章共に主意甚だ明瞭なるべし、

無足問於知和曰、人卒未有不興名就利者、彼富則人歸之、歸則下之、下則貴之、夫見下貴者、所以長生安體樂意之道也、今子獨無意焉、知不足邪、意知而力不能行邪、故推正不忘邪、知和曰、今夫此人以爲與己同時而生、同鄕而處者、以爲夫絕俗過世之士焉、是專無主正、所以覽古今之時是非之分也、與俗化世、去至重、棄至尊、以爲其所爲也、此其所以論長生安體樂意之道、不亦遠乎、慘怛之疾、恬

背專爲と、卽ち此に所謂無專而行なり、此れ上文の與時消息與道徘徊を承けて言ふ、言ふは、當に時に隨ひ道に順ふべし、專ら仁義を行ふべからず、若し而の行ひを專にし而の義を成さんとすれば、則ち將に其の爲すべき所を失はんとすと、故に下文に正其言必其行、故服其殃離其患也と云ふ、必其行とは卽ち此に所謂專而行なり、秋水篇に無一而行與道參差とあり、一も亦專なり、無專而行は猶無一而行と言ふが如し、專と轉とは古字通ず、亦通じて摶に作る、「史記」吳王濞傳の燕王摶胡衆入蕭關の索隱に曰く、摶音專、專ら胡兵を統領するを謂ふなり、「漢書」には摶を轉に作る、〔將棄而天〕以上古語、以下古事を引て、之を證するなり、〔比干剖心〕成玄英曰く、比干紂に忠諫す、紂云ふ、聞く聖人の心には九竅ありと、遂に其の心を剖きて、之を視る、〔子胥抉眼〕成玄英曰く、子胥夫差を忠諫す、夫差之を殺す、子胥曰く、吾死する後、眼を抉りて、吳門の東に懸けよ、以て越の吳を滅すを見んと、〔直躬證父〕「論語」の子路篇の吾黨有直躬者、其父攘羊而子證之とあるは是なり、其の人名は躬、而して甚だ直なるを以て之を直躬と稱するなり、〔鮑子立乾〕「釋文」に司馬云ふ、鮑子名は焦、周末の人、時を汚として仕へず、蔬を採りて食ふ、子貢之を見て謂うて曰く、何の爲めに仕へて祿を食まざる、答へて曰く、仕ふべき者無し、子貢曰く、時君を汚とすれば其の祿を食はず、其の政を惡めば其の土を踐まず、今子は其の君を惡みて其の土に處り其の蔬を食ふ、何ぞ志行の相違ふやと、鮑焦遂に其の蔬を棄てゝ餓死す、按ずるに、鮑焦抱木而死す、故に立乾と曰ふなり、〔申子不自理〕「釋文」に勝子自理を出して云ふ、一本理を俚に作る、本又申子自埋に作る、或は云ふ、申徒狄甕を抱きて河に之くを謂ふなりと、一本に申子不自理に作る、申生を謂ふなり、按ずるに、上文に鮑焦と竝べて申徒狄を引きしを視れば、此れ亦申徒狄なるべく、申子自埋に作るに從ふべし、〔孔子不見母〕「釋文」に李云ふ、未だ聞かず、成玄英曰く、孔子聖迹に滯耽し、歷國應聘し、其の母終りに臨むも孔子見ずと、按ずるに、成說は未だ其據る所を知らず、「禮記」の檀弓に孔子少孤、不知其墓、殯於五父之衢、問於郰曼父之母、然後得合葬於防とあるに據れば、孔子の見ざりしは父

に拘泥すること無く、善く之に應じ、圓機たる性を保持して、物の束縛を受けず、汝の意を獨立全成して、道と徘徊無爲にせよ、汝の行ひを專一にすること勿れ、行ひを專一にして仁義を爲さんとすれば、將に汝の爲すべき所の無爲を失はんとす、又富貴に奔赴して之を得んとすること勿れ、成功を遂うて之に殉すること勿れ、富貴に奔赴して其の成功に殉ずれば、將に汝が天より受けたる性を失はんとすと、之を實事に觀るに、比干が、紂王を諫めて、心を剖かれ、伍子胥が吳王夫差を諫めて殺され、眼を抉りて東門に懸けられしは、忠を爲すよりして得たる禍なり、直躬が父の羊を攘みたるを證して、刑を受けしめ、尾生が女子と約して橋下に會し、水至りて去らず、遂に溺死せしは、信を守るよりして得たる禍なり、鮑焦が食はずして木を抱き、立ちたるまゝに餓死して乾燥し、申徒狄が河に投じて自ら沈みしは、固く廉ならんとせしよりの害なり、孔子が母に遇はず、匡章が父に怒られ、家を出でゝ、父の死歿にも會せざりしは、固く孝せんとせしよりの失なり、以上列擧せし諸事は、上世より傳へし所にして、後世の人の相語りて知る所なり、士たる者、其言ひたることを實事に見はさんことを期し、其行ひを必ず忠孝廉直にせんとするが故に、其殃に服し其の禍に罹るなり、

【解義】〔曰小人殉財云云〕曰くとは無約の曰へるなり、以下末尾に至るまで皆無約の辭、小人殉財より則一也までの數句は、駢拇篇の臧穀亡羊伯夷盜跖殘生傷性を論ずるの一節と同意なり、參照して讀むべし、〔反殉而天〕而は爾なり汝なり、〔相而天極〕按ずるに、「爾雅」釋詁に相は視なり、天極は天の南北極なり、衆星皆極を中樞として之を回る、故に亦道を以て之に比す、而天極は道の人に在る者にて、卽ち性なり、〔面觀四方〕按ずるに、面は鄕なり、「ムカフ」と訓ず、天子南面諸侯北面の面と同じ、面觀四方とは一方に偏せざるなり、〔與時消息〕「易」の豐卦の彖傳に、天地盈虛、與時消息とあり、消は滅ぶ、息は生ずるなり、〔執而圓機〕成玄英曰く、圓機は猶環中の如し、按ずるに、機に應じて善く圓を成す、亦性を謂ふなり、〔與道徘徊〕按ずるに、徘徊は猶逍遙の如し、前の消息亦同じ、〔無轉而行〕王念孫曰く、轉は讀で專と爲す、山木篇に云ふ、一龍一蛇、與時俱化、而無

也、故曰、無爲小人、反殉而天、無爲君子、從天之理、若枉若直、相而天極、面觀四方、與時消息、若是若非、執而圓機、獨成而意、與道徘徊、無轉而行、無成而義、將失而所爲、無赴而富、無徇而成、將棄而天、比干剖心、子胥抉眼、忠之禍也、直躬證父、尾生溺死、信之患也、鮑子立乾、勝子不自理、廉之害也、孔子不見母、匡子不見父、義之失也、此上世之所傳、下世之所語、以爲士者、正其言、必其行、故服其殃、離其患也、

【大意】　修行縱欲共に其情性を毀損する者にて、道に背き、皆非なれば、人は當に天に從ひ性を保ちて、逍遙無爲にし、物に拘束せらるゝこと無かるべし、枉直是非を分ちて其行ひを必せんとすれば、常に禍患を免れざるを明らかにす、

【通釋】　かくて二人相携へて無約の處に往き、各其の主張を陳べたれば、無約曰く、小人は財利に殉し、君子は名譽に殉す、此の二者の其の情を變へ其の性を傷つくる所以の者は、利と名との異あれども、人は自然に循ひ無爲なるべきに、之を棄てゝ爲すべからざることに殉し、以て性眞を損傷するに至りては、則ち君子小人皆同く道に背きたる者なり、故に二人の主張する所は皆非なり、古語に曰く、小人と爲りて利を貪ること無く、其の根に反りて汝の天に殉へ、君子と爲りて名を求むることなく、其の性に率うて天の理に從へ、枉必ずしも惡ならず、直必ずしも善ならず、故に枉くべきときは枉け、直くすべきことは直くして、汝の天極たる性を視て、一方に偏すること無く、偏く四方を觀、能く時に應じて起居消息すべし、是必ずしも善ならず、非必ずしも惡ならず、故に是非

如し、且つ子の行を修るを主とするは、正に名譽を取らんが爲めにし、我の無耻を嫌はず多言を主とするは、正に名譽を取らんが爲めにするなり、而して名利の實は共に理に順はず、道に明かならざる者あるに似たり、我將に子と與に徃きて無約に訟げ、其の裁斷を仰がんとすと、

【解義】〔疏戚無倫〕成玄英曰く、倫は理なり、〔五紀六位〕兪樾曰く、司馬云ふ、五紀は歲日月星辰曆數と、然れども疏戚貴賤長幼の義と相應せず、殆ど非なり、五紀は卽ち五倫なり、六位は卽ち六紀なり、「白虎通」の三綱六記篇に曰く、六紀者、謂諸父兄弟族人諸舅師長朋友也と、此れ皆疏戚貴賤長幼の別を爲す所以なり、五倫と曰はずして五紀と曰ひ、六紀と曰はずして六位と曰ふは、古人の語異なるのみ、「家語」入官篇、群僕之倫也の王肅注に曰く、倫は紀なりと、然らば則ち倫と紀とは通稱するを得、〔堯殺長子〕「釋文」に、崔云ふ、堯長子考監明を殺すと、何に據るを知らず、丹朱を廢して天位を與へざるを誣ひて殺と爲すならん、〔舜流母弟〕「釋文」に云ふ、弟は象を謂ふなり、流は放なりと、又孟子の象を有庳に封じ、其の國に於て爲す有らしめず、天子吏をして其國を治めて貢稅を納れしむを引くは、非なり、此處にては堯殺に對して竄逐の義と爲すべし、〔儒者僞辭〕僞は人爲なり、儒敎は道の外に忠孝仁義等巨多の名目を作りて敎を立て、道に傅會す、故に僞辭と曰ふなり、〔五紀六位將有別乎〕按ずるに、將字は衍文、前の將何以爲別乎に涉りて入れるのみ、有倫乎有義乎と對文なれば、宜く將字あるべからず、〔不監於道〕成玄英曰く、監は明なり、見なり、〔吾日與子訟於無約〕按ずるに、日は且の誤りて下の一畫を失ひたるならん、「說文」に、訟爭也とあり、六書故に、曲直を官有司に爭ふなり、〔無約〕按ずるに、說文に、約は纏束なり、名を離れ利を棄て、外物に纏束せらるゝ無きの義を取りて人名と爲すなり、

曰、小人殉財、君子殉名、其所以變其情易其性、則異矣、乃至於棄其所爲而殉其所不爲則一

て、聖人の言行一致せざるを證するのみ、實事に非ず、〔悖戰胸中〕成玄英曰く、悖は逆なり、〔不亦拂乎〕亦は語助、成玄英曰く、拂は反戻なり、〔書曰〕尙書に此語なし、蓋し亦妄作して尙書に擬せるなり、〔孰惡孰美云云四句〕首尾は猶上下と言ふが如し、

子張曰、子不爲行、即將疏戚無倫、貴賤無義、長幼無序、五紀六位將何以爲別乎、滿苟得曰、堯殺長子、舜流母弟、疏戚有倫乎、湯放桀、武王殺紂、貴賤有義乎、王季爲適、周公殺兄、長幼有序乎、儒者僞辭、墨者兼愛、五紀六位將有別乎、且子正爲名、我正爲利、名利之實、不順於理、不監於道、吾日與子訟於無約、

【大意】子張更に行ひを脩めざれば倫常を亂すの大害ありと曰ひ、滿苟得之を駁して、古の聖賢皆已に倫常を亂す、行ひを脩めず、利を貪るも害無しと曰ひ、遂に無約に就きて裁斷を請はんとす、此を第三論難とす、

【通釋】子張曰く、子行ひを修めざれば、則ち族中の疎遠なる者と親近なる者と相亂れて理次を失ひ、貴き者と賤しき者と相亂れて禮の宜しきを失ひ、長幼相亂れて順序なきに至らんとす、五倫も六紀も將に何を以て辨別を爲さんとするか、故に行ひは修めざるべからずと、滿苟得又之を駁して曰く、堯は長子の丹朱を殺し、舜は同母弟の象を流せり、是れ猶ほ疏戚倫あるが、殷の湯王は其の君夏の桀王を放ち、周の武王は其君殷の紂王を殺せり、是れ猶貴賤義あるが、王季は二兄を超えて嫡嗣となり、周公は兄の管叔蔡叔を殺せり、是れ猶長幼序あるが、儒者は種々の名目を爲りて敎を立て、墨者は親疏を分たず一切兼ね愛す、是れ猶五倫六紀別ありと謂ふを得べきが、子が貴ぶ所の聖賢皆倫常を亂し、子の言と合はざること此の

貌を變へ顔色を易へ、卑德何ぞ孔墨に比するに足らんと稱して、敢て當らざるは何ぞや、仲尼墨翟は士の誠に貴ぶ所なればなり、故に勢威の盛なること天子となると雖も、未だ必ずしも貴しと爲さず、窮して匹夫と爲ると雖も、未だ必ずしも賤しと爲さず、貴賤の分別は行ひの美惡に在るなり、行ひ豈修めざるべけんや、滿苟得又之を駁して曰く、器物金錢等を竊みし小盜は、拘囚せられて刑罰を受け、人の國家を竊みし大盜は、刑せられざるのみならず、反て諸侯と爲る、而して其の盜賊より成りし諸侯に、忠義を効すの士ありて之に仕ふ、昔時齊の桓公小白は其の兄子糾を殺し、嫂を入れて室と爲すの不義を行ひたるに、賢人の管仲は之が臣と爲りて輔佐し、齊の田成子常は其の君簡公を弑したる亂賊なるに、聖人の孔子は之に朝して其の幣帛を受けたり、言論上に於ては、君父兄を弑す者を亂賊として賤めども、己の身の行ひに於ては、則ち下りて亂賊に臣事す、則ち是れ言行の情相逆ひて胸中に戰ふなり、豈戾らずや、所謂聖賢なる者の貴ぶに足らざること此くの如し、故に書に曰く、何れを惡とし何れを美とせん、美惡は元來一定せる者に非ず、功の成りたる者を首として貴び、失敗したる行を尾として賤むのみと、桀紂も戰敗れて殺されたるが故に惡人と稱せらるゝのみ、貴賤は行ひの美惡に由りて決するに非ずとの意なり、

【解義】〔今謂臧聚曰〕「釋文」に司馬云ふ、臧聚は臧獲盜濫竊聚の人を謂ふ、章炳麟曰く、司馬の臧を以て臧獲と爲すは是也、聚を謂て盜濫竊聚の人と爲すは則ち非なり、孫詒讓曰く、聚は當に讀で騶と爲すべし「說文」は、騶廐御也とあり、「楚語」(國語)に齊騶馬繻あり、月令(禮記)七騶の鄭注にも亦卽ち趣馬なりと謂ふ、趣聚同く取より聲を得、古字通用す、聚と臧とは皆僕隸賤役、故に之を並擧す、〔小盜者拘云云〕胠篋篇の竊鉤者誅、竊國者爲諸侯、諸侯之門而仁義存焉と同意、〔桓公小白殺兄入嫂〕齊の桓公名は小白、兄の子糾と戰うて之を殺す、「釋文」に云ふ、嫂を以て室家と爲す、〔田成子常〕齊の大夫田常、諡して成子と曰ふ、胠篋篇に見ゆ、陳恆に同じ、〔孔子受幣〕「論語」の憲問篇に、陳成子弑簡公、孔子沐浴而朝、告哀公曰、陳恆弑其君、請討之とあり、何ぞ其の田成子に仕へて其幣を受くるの事あらんや、此れ孔子を誣ひ

る、〔抱其天乎〕抱は保に通ず、說前に見ゆ、

子張曰、昔者桀紂貴爲天子、富有天下、今謂臧聚曰、汝行如桀紂、則有怍色、有不服之心者、小人所賤也、仲尼墨翟窮爲匹夫、今謂宰相曰、子行如仲尼墨翟、則變容易色稱不足者、士誠貴也、故勢爲天子、未必貴也、窮爲匹夫、未必賤也、貴賤之分、在行之美惡、滿苟得曰、小盜者拘、大盜者爲諸侯、諸侯之門、義士存焉、昔者桓公小白殺兄入嫂、而管仲爲臣、田成子常殺君竊國、而孔子受幣、論則賤之、行則下之、則是言行之情、悖戰於胸中也、不亦拂乎、故書曰、孰惡孰美、成者爲首、不成者爲尾、

【大意】子張又桀紂は天子たるも、奴僕之を賤み、孔墨は匹夫なるも士大夫之を貴ぶを證して、貴賤の分は行ひの美惡に在りと曰ひ、滿苟得又之を駁し、管仲が桓公を輔け、孔子が田常に仕へしを引きて、聖賢の言行一致せざるを證し、貴賤美惡は成敗に因りて決し、行ひに因らざるを曰ふ、此を第二論難と爲す、

【通釋】子張曰く、古昔桀紂は、貴きことに於ては天子と爲り、富めることに於ては天下を保有し、富貴共に此上無かりしも、今奴僕馬丁に向つて、汝の行ひは桀紂の如しと曰へば則ち怍づる色あり、之に比せらるゝに不服の心あるは何ぞや　桀紂は奴僕の如き小人も、猶之を賤めばなり、仲尼墨翟は窮して時に用ひられず、一匹夫たるに過ぎざるなり、而るに今宰相に向つて、子の行ひは仲尼墨翟の如しと曰へば、則ち容

爲レ行、抱二其天一乎、

【大意】子張は行ひを脩め義を爲すは、名利を得るにも宜しく、又士の本分として一日も爲さゞるべからずと曰ひ、滿苟得は之を駁して、無耻にして多言なるは名利を得るの道なり、若し士の本分として爲すべきとは、天性を保つに在り、仁義の行ひに非ずと此を第一論難と爲す、

【通釋】子張は滿苟得に問うて曰く、君何ぞ行ひを脩めて義を爲さゞるや、行ひ脩まらざれば則ち人に信せられず、信せられざれば、則ち任用せられず、任用せられざれば則ち利祿を得る能はず、故に之を名譽の上より觀、利益の上より計れば則ち行ひの義に合ふことは眞に好事なり、君宜く之を行ふべし、若し名譽利益を離れ之を本心に反省すれば、則ち士として仁義の行ひを脩むるは、一日も爲さゞる可らざる者なるをや、滿苟得曰く、世の廉潔なる者は貧く、耻辱を忘れて多く貪る者は富み、謙退沈默する者は名無く、多言にして自ら矜る者は名顯る、夫の名利の大なる者は、殆ど無耻にして多言なるに在り、故に之を名譽の上より觀、利益の上より計れば、則ち多言より好きは無し、多言は眞に名利の本なり、若し名譽利益を離れ、之を本心に反省すれば、則ち士たる者の行ひは、其天性を保ちて性の命ずるまゝに行ふに在らんか、仁義は人の性に非ず、行ふべきことに非ずと、

【解義】〔子張〕孔子の弟子なり、姓は顓孫、名は師、字は子張、〔滿苟得〕成玄英曰く、姓は滿、名は苟得、假託して姓名と爲し、苟も貪得し以て其心を滿たすを曰ふ、利を求むるの人なり、〔盍不爲行〕「釋文」に曰く、盍は何なり、何ぞ德行を爲さゞると勸む、王引之曰く、盍は何不なり、今本盍不に作る、不の字は後人の加ふる所なり、〔觀之名計之計而義眞是也〕按ずるに、而の字は則に通じて讀むべし、〔若棄名利反之於心〕按ずるに、反は反省なり、外の名利を得ることを棄て、内に本心に反りて省察するを言ふ、滿苟得は貪利の徒なるが故に、先づ名利を以て之を誘ひ、而る後に本分に入りて說くなり、成玄英反を訓して乖逆と爲し、若し名利を棄つれば則ち我心に乖逆す、故に士の身を立つる、一日も仁義を行はざるべからずと曰ふは謬解なり、從ふべからず、〔多信者顯〕成玄英曰く、多信は猶多言の如し、多言夸伐すれば則ち顯

衆の亡ぼさんと欲する所に因りて之を亡ぼせば、王紂と雖も去るべく、衆に因らずして獨り己を用ふれば、盜跖と雖も御すべからざるを明かにするなりと曰ひ、成玄英は、此章の大意、聖迹を排擯し、名利を嗤鄙す、是を以て聖迹を排すれば則ち堯舜を訶責し名利を鄙めは則ち夷齊を輕忽にす、故に孔跖に寄せて此の意を摸するなり、即ち郭注の意は之を失すること遠しと曰ひ、陸樹芝は、此れ眞に孔子を非るに非ず正に世の異說を擬し以て自ら是とする者を非ると見れば、何ぞ奇と爲すに足らん、直に盜跖孔子を怒罵すとするを以て、方に是れ奇なるのみと曰ひ、林雲銘は聖孔子の如きも、猶盜跖に折服せらる、則ち聖知誠に恃むべからず、以て聖人不レ死大盜不レ止の註脚と爲して可なりと、按ずるに諸說皆附會、取るに足らず、此章のみを見れば、孔子は盜跖に屈し儒敎は盜跖の縱欲說に如かざるが如きも、實は兇暴を以て孔子を威壓したるのみにて、眞に孔子の屈したるに非ず、又作者の意も、縱欲說を取りて儒敎を抑へたるにも非ず、其の故は、次章に於て子張滿苟得の二人儒敎と縱欲との得失を論じ、竟に無約の裁斷を請ひ、無約は二人の共に天を離るゝを非と爲すを觀れば、作者の意は甚だ明瞭にして、駢拇篇の伯夷死二名於首陽之下一、盜跖死二利於東陵之上一、二人者所レ死不レ同、其於レ殘レ生傷レ性均也、奚必伯夷之是而盜跖之非乎と曰ふに同じ、諸家皆次章と併觀すること能はず、故に其說を得ずして、濫に附會の說を爲すのみ、

子張問二於滿苟得一曰、盍レ不レ爲レ行、無レ行則不レ信、不レ信則不レ任、不レ任則不レ利、故觀二之名一、計二之利一、而義眞是也、若棄二名利一反二之於心一、則夫士之爲レ行、不レ可二一日不一レ爲乎、

滿苟得曰、無レ恥者富、多レ信者顯、夫名利之大者、幾在二無レ恥而信一、故觀二之名一、計二之利一、而信眞是也、若棄二名利一反二之於心一、則夫士之

不免虎口哉、

【大意】 孔子跖の前を退きて慴懼せられし狀を叙し又柳下季との問答を叙して、悔悟の狀を記し、首節に應じて全章を結ぶ、

【通釋】 孔子盗跖を再拜し、趨走して退き、門を出でゝ車に乘り、轡を執りて自ら馬を御せんとせしに、慴懼して心も身に副はざれば、三たひも轡を落し、目は茫然として物を見る能はず、顏色は血の氣無くして死灰の如く、軾に據り頭を低れて、少しも元氣を出す能はず、歸りて魯の東門の外に到りしとき、適々柳下季に出遭ひたり、柳下季曰く、此頃數日間、絶えて相見ず、見受くる所の車馬の樣子にては、旅行せられたる者の如し、往きて弟の跖を見られしに非るを得んやと、孔子天を仰いで歎じて曰く、然り、跖を訪ひたる歸途なり、柳下季曰く、跖は先生の言に逆らふこと前に吾の言ひしが如きこと無かりしや、孔子曰く、然り、實に子の言はれし如く、吾言を聽かず、大に侮辱を加へられたり、丘は諺に所謂病無きに自ら灸したると同じく、無用の事を爲して自ら侮辱を取り、危く殺されんとせしは、疾く走り往きて虎の頭を摩で虎の鬚を編み、殆ど虎口に噬まるゝを免れざらんとせしに異ならずと、

【解義】〔執轡〕轡は「タヅナ」なり、馬を御する者、〔色若死灰〕死灰は火氣の無き灰なり、齊物論篇に見ゆ、〔據軾低頭〕成玄英曰く、軾は車前の横木、之に凭り座する者なり、〔闕然〕此まで毎日相見しに數日相見ず、故に此の形辭を用ふなり、〔得微往見跖邪〕微は無なり、〔料虎頭〕料は摩なり、〔編虎須〕須は鬚と通ず、

【備考】 篇首より此に至るまでの九節を合して一章と爲す、孔子儒敎の旨を以て、盗跖を說て其の暴亂を弭めしめ、天下の人民を安んぜんとし、而して盗跖聽かず、反て儒敎の天下を害し、身を爲むるに足らず、徒らに利に惑ひ名を貪りて、性命を毀損するのみ、人の壽命は甚だ短き者なれば、欲を縱にし樂みを極めて其壽命を養ふべし、之を知らざる者は、道を知らざる者なりと言ひ、暴言惡罵して孔子を逐ひ還したることを論叙す、○此章の言ふ所に據れば、孔子は盗跖に論難せられて辭屈したる者の如く、非理も亦甚し、故に古來注家種々の說を爲し、郭象は、此篇は寄せて

することと多くして、其の中に口を開きて笑ふことは、一ヶ月中に僅に四五日に過ぎざるのみ、天と地とは死亡毀壞することなくして、無窮に存在すれども、人は必ず死して限りあり、長くも百年を越ゆる能はず、限りあるの身を以て、窮極なき天地の間に寓居す、其の忽然として死するの速かなること、騏驥が馳せて戶隙を過ぎ、チラと見ゆるのみと同じ、かゝる短き生命なるを思はずして、徒らに利を爭ひ名を求めて自ら苦み、其の志意を悦ばせ其の壽命を養ふこと能はざる者は、皆道に通じたる者に非ざるなり、丘の言ふ所の聖賢忠臣は皆此の徒輩にて、吾の取るに足らずとして棄つる所なり、汝速に去りて、走り歸れ、復た再び之を言ふこと勿れ、汝の道は性を失ひて常に足らざるを苦み、外貌のみを飾る巧詐虛僞の事なり、以て本眞を全くし得べきに非ず、何ぞ論ずるに足らんやと、遂に孔子を逐ひ出したり、

【解義】〔病瘐死喪憂患〕王念孫曰く、瘐當に瘦と爲すべし、字の誤なり、瘦も亦病なり、病瘦を一類と爲し、憂患を一類と爲す、瘦の字は本と瘉に作る、「爾雅」に曰く、瘉は病なり、小雅正月篇、胡俾我瘉の毛傳、爾雅と同じ、「漢書」宣帝紀に、今繫者或以掠辜若饑寒、瘐死獄中、蘇林曰く、瘐は病なり、囚徒の病ひ、律名づけて庾と爲す、師古曰く　瘐音瘦、字或は瘉に作る、王子侯表に曰く、富侯龍下獄庾死と、〔亟去走歸〕「釋文」に云ふ、亟は急なり、〔狂狂汲汲〕成玄英曰く、狂狂は性を失ふなり、汲汲は不足なり、

孔子再拜、趨走出門、上車執轡、三失、目芒然無見、色若死灰、據軾低頭、不能出氣、歸到魯東門外、適遇柳下季、柳下季曰、今者闕然數日不見、車馬有行色、得微往見跖邪、孔子仰天而歎曰、然、柳下季曰、跖得無逆汝意若前乎、孔子曰、然、丘所謂無病而自灸也、疾走料虎頭、編虎須、幾

介推田、號曰介山と、偏く經傳を査するに、並びに介推燔死の事無し、屈子立枯の說を爲し、莊生燔死の文ありて、よりて東方朔の七諫「漢書」の丙吉傳皆其誤りを承く、今當に「左傳」「呂覽」を以て之を正すべし、〔尾生〕「釋文」に云ふ、一本微生に作る、「戰國策」には尾生高に作る、高誘以て魯人と爲す、〔操瓢〕瓢は飮食を盛るの器なり、

今吾告子以人之情、目欲視色、耳欲聽聲、口欲察味、志氣欲盈、人上壽百歲、中壽八十、下壽六十、除病[瘦]死喪憂患、其中開口而笑者、一月之中、不過四五日而已矣、天與地無窮、人死者有時、操有時之具、而託於無窮之間、忽然無異騏驥之馳過隙也、不能說其志意、養其壽命者、皆非通道者也、丘之所言、皆吾之所棄也、亟去走歸、無復言之、子之道狂狂汲汲、詐巧虛僞事也、非可以全眞也、奚足論哉、

【大意】人の世に在る年壽は極めて短き者なれば、成るべく性意を悅ばせ愉快に過ごすべきに、徒らに名利を求むることに勞して、性眞を失ふの儒敎は、道に非ずと言ひ、上數節に駁擊したる議論を結びて、孔子を逐ひ出すなり、

【通釋】今吾れ子に告ぐるに人の情を以てすべし、目は美色を視んことを欲し、耳は美聲を聽かんことを欲し、口は美味を察せんことを欲し、志氣は之を遂行して滿足せんことを欲す、是れ人の情なり、人は最も長命の者卽ち上壽にて百歲、其次きの中壽にて八十、下壽にては六十に過ぎず、自己の疾病、親戚朋友の死亡、及び其他種々の憂患の爲めに、一生の間愁苦

絮說すること勿れと、孔子の口を閉ぢて言ふ能はざらしむるなり、

【解義】〔禹偏枯〕成玄英曰く、治水に勤勞し、風に櫛り雨に沐し、偏枯の疾を致し、半身不隨なり、〔文王拘羑里〕成玄英曰く、羑里は殷の獄名、文王紂の難に遭ひ、囹圄に厄せられ、七十を經て脫するを得たり、〔此六子者〕以上擧ぐる所黃帝堯舜禹湯文武凡べて七人、東條弘曰く江南古藏本には六を七に作る、〔伯夷叔齊〕「成疏本」には此四字を複す、按ずるに、若し之を複すれば、上に莫若の二字無かるべからず、然らざれば文を成さず、今姑く通行本に從ふ、〔鮑焦飾行非世抱木而死〕成玄英曰く、姓は鮑、名は焦、周の時の隱者なり、行ひを飾り世を非り、廉潔自ら守り、荷擔採樵し、橡を拾うて食に充つ、故に子胤なし、天子に臣たらず、諸侯に友たらず、子貢之に遇ひ、之に謂て曰く、吾聞く、其政を非る者は其地を履まず、其君を汚とする者は其利を受けずと、今子其の地を履み其の利を食ふ、其れ可ならんやと、鮑焦曰く吾聞く、廉士は進むを重んじて退くを輕んじ、賢人は愧ぢ易くして死を輕んずと、遂に木を抱き立て枯す、〔申徒狄諫而不聽自投於河〕「釋文」に云ふ、申徒狄將に河に投ぜんとす、崔嘉之を止めて曰く、聖人の仁は士民の父母なり、若し足を濡すの故に溺人を救はざれば、可ならんか、申徒狄曰く、然らず、昔桀は龍逄を殺し、紂は比干を殺して天下を亡ひ、吳は子胥を殺し陳は泄冶を殺して其國を滅ぼせり、聖人の仁ならざるに非ず、用ひざる故なりと、遂に河に沈みて死す、〔介子推云云〕成玄英曰く、文公は晉の文公重耳なり驪姬の難に遭うて他國に出奔し、路に在りて困乏す、推股肉を割きて之に食せしむ、公後ち還りて三日、功ある者を封じ、遂に子推を忘る、子推龍蛇の歌を作りて其營門に書し、怒りて逃る、公後に慚ぢて謝し、子推を介山に追はしむ、子推隱れ避く、公因て火を放ちて山を燒かしめ、其走り出でんことを庶ふ、火至る子推遂に樹を抱きて焚死す、〔燔死〕「釋文」に云ふ、燔は燒なり、郭慶藩曰く、「左傳」に曰く、介子推不言祿、祿亦弗及、又曰く、晉侯求之不得、以綿上之田曰、以志吾過、且旌善人と、「呂覽」に曰く、介推負釜蓋簦終身不見と、「史記」に曰く、使人召之、則亡、聞其入綿上山中、於是環綿上之山中而封之、以爲

堯は不慈にして天下を其の子に傳へず、舜は不孝にして父に惡まれ、禹は過勞の爲め天生を傷めて半身不隨と爲り、湯は其の主君たる夏の桀王を放ち、周の武王は殷の紂王を伐ちて之を殺し、文王は紂の爲めに羑里に拘囚せられたり、此の六子は世俗の貴ぶ所なるも、之を熟論すれば、皆天下に君たるの利の爲めに其天眞を迷惑し、而して强ひて其の情性に反したることを爲せる者にて、其の行ふ所は決して貴ぶに足らず、反つて甚だ羞づべきことのみなり、又世俗の謂ふ所の賢士を論ぜんに、伯夷叔齊は孤竹の君たることを辭して、首陽の山に餓死し、之を收葬する者無くして、骨肉野に暴露し、禽獸に食はれ、鮑焦は行ひを飾り世を誹りて、木を抱きて死し、申徒狄は君を諫めて聽かれず、石を負うて自ら河に投じ、魚鼈に食はれたり、介子推は至極の忠臣なり、自ら其の股の肉を割きて其の君晉の文公に食はせたるに、文公國に歸りたる後、德に背きて子推を賞せざりしかば、子推怒りて去りて山に入り、强ひて出さんとすれども出でず、遂に木を抱きて燒死せり、尾生は女子と約して橋下に待合はしたるに、女子來らずして、其間に水量大に增し來れども、固く約を守りて去らず、遂に橋柱を抱きて死したり、此の伯夷以下の六子、木を抱きて死したるは、磔になりたる犬に異なるなく、水に投じて死したるは、流るゝ豕に異なるなく、其名を求むるに急なるは、瓢を操りて人の門戸に立つ乞丐に異なるなし、皆名譽に繫縛せられて死を輕んじ、天より禀けたる本性を念ひ壽を養ひ保ちて天命を全くせざる者なり、何ぞ以て賢とするに足らんや、世俗に謂ふ所の忠臣は、王子比干と吳子胥とに若くは無し、子胥は殺されて江に沈められ、比干は心を剖きて殺されたり、此の二子は世俗にては忠臣と爲せども、徒に性命を毀損したる者なるを以て、卒に天下の道に達したる者の笑ひと爲る、上の黃帝堯舜より、下子胥比干に至るまでの、所謂聖賢を歷觀するに、皆貴ぶに足らざるなり、丘の我に說く所の者、更に何を以てせんとするや若し我に告ぐるに鬼神幽界の事を以てするなれば、則ち我之を知る能はざるも、若し我に告ぐるに人事を以てするなれば、汝の言ふ所は世俗の所謂聖賢忠臣の事に過ぎず、皆吾の始めより聞知する所にて、汝の說くを待たず、又一も取るに足らざる者なり、更に

行乃甚可羞也、世之所謂賢士、伯夷叔齊、辭孤竹之君、而餓死於首陽之山、骨肉不葬、鮑焦飾行非世、抱木而死、申徒狄諫而不聽、負石自投於河、爲魚鼈所食、介子推至忠也、自割其股以食文公、文公後背之、子推怒而去、抱木而燔死、尾生與女子期於梁下、女子不來、水至不去、抱梁柱而死、此四者無異於磔犬流豕操瓢而乞者、皆離名輕死、不念本養壽命者也、世所謂忠臣者、莫若王子比干伍子胥、子胥沈江、比干剖心、此二子者、世謂忠臣也、然卒爲天下笑、自上觀之、至於子胥比干、皆不足貴也、丘之所以說我者、若告我以鬼事、則我不能知也、若告我以人事者、不過此矣、皆吾所聞知也、

【大意】更に進みて、世に謂ふ所の聖人は利に惑ひ、賢人忠臣は名譽に繋がれて、共に性命を毀損し、貴ぶに足らず、丘の我に說かんとする所は、此の聖賢忠臣の事ならんも、皆吾の先づ知りて輕んずる所なれば、更に說くを要せずと、孔子の口を閉ぢて言はざらしめんとするなり、

【通釋】世人の聖人として貴ぶ所の人は、黄帝に若くは無し、其の黄帝の尙ほ德を全くする能はずして、蚩尤と涿鹿の野に戰ひ、血を流すこと百里に及べり、

以て子路を說きて之を從はしめ、子路をして其の載せたる高き冠を棄て、其の佩びたる長大の劒を解きて、敎を子に受けしめたり、天下の人皆曰く、孔丘は能く暴行を止め非違を禁じたりと、然れども其終りや、子路衞君蒯聵を殺さんとして、事成らず、其の身は衞の東門の上に殺されて、漬物にせられたり、是れ子が敎の至らざるに由るなり、子又自ら才士聖人と謂ふか、是も亦然らず、子は再び魯に逐はれ、跡を衞に削られ、齊に窮し、陳蔡に圍まれ、廣き天下に一身を容るゝ所なし、子は子路に敎へて、子路をして身を漬物にせらるゝの慘害に罹らしめ、己の身も亦此の如し、以て身を治むるの效もなく、又以て人を治むるの效も無し、子の道は何ぞ貴ぶに足らんや、

【解義】〔危冠〕「釋文」に李云ふ、危は高なり、子路勇を好み、冠は雄雞の形に似、背に豭牛を負ひ、用て己の強きを表せり、〔子路欲殺衞君云云〕成玄英曰く、仲由惡を疾むの情深く、衞君蒯聵を殺さんとし、事既に及ばず、身葅醢に遭ふ、盜跖故に此を以て相譏る也、〔葅於衞東門之上〕葅は「說文」に曰く、酢菜、徐曰く、米粒を酢に和し、以て菜を漬すなり、「玉篇」に淹菜爲葅也と、〔敎子路葅此患〕王先謙曰く、疑ふらくは奪文あらん、按ずるに葅當に罹に作るべし、前の葅於衞東門之上の句に因りて誤る也、章炳麟は敎子路葅の四字を以て一句と爲し、此患の二字は之を下文の上無以爲身に屬して曰く、患讀で貫と爲す、大雅串夷載路の釋文に、串は古患切、一本患に作る、串貫通ず、串は卽ち毋字、今通じて貫に作る、「釋詁」に、貫は事也と、此貫とは此事也、卽ち前に說く所の脩文武之道、掌天下之辯等を指す、下に子之道と言ふ、子之道は卽ち此貫也と、此患の字前の脩文武之道の句と文勢接せず、其の說牽强、從ふべからず、

世之所高、莫若黃帝、黃帝尚不能全德、而戰涿鹿之野、流血百里、堯不慈、舜不孝、禹偏枯、湯放其主、武王伐紂、文王拘羑里、此六子者、世之所高也、孰論之、皆以利惑其眞、而強反其情性、其

を逐ふ、楡罔黃帝と謀を合して擊て蚩尤を殺す、漢書音義に云ふ、蚩尤は古の天子と、一に曰く、庶人の貪る者と、〔涿鹿〕「釋文」に司馬云ふ、涿鹿は地名、故城今上谷郡の西南八十里に在りと、〔修文武之道〕成玄英曰く、孔子は文武を憲章し、仁義を辯說し、後世の敎と爲すなり、按ずるに、此の句は上文湯武以來、皆亂人之徒也の句を承く、故に孔子の敎主とする所は亂賊の魁にして、其の敎は君を殺し天下を奪ふの敎なり、下文の盜莫大於子云云は此より出づ、〔縫衣〕郭慶藩曰く、向秀曰く、儒服寬にして長大と、〔列子黃帝篇の注に見ゆ〕「釋文」に大衣なり、或は逢に作る、書洪範子孫其逢吉の馬注に曰く、逢は大なり、「禮記」の儒行篇に逢掖之衣あり、「鄭注」に逢は猶大の如きなりと、「荀子」の非二十子篇の其衣逢、儒行篇の逢衣淺帶の楊注竝に曰く、逢は大なりと、又省して縫に作る、「墨子」公孟篇に縫衣博袍とあり、縫博皆大なり、〔淺帶〕「釋文」に云ふ、帶を縫うて淺狹ならしめしなり、

子以甘辭說子路而使從之、使子路去其危冠、解其長劍、而受敎於子、天下皆曰、孔丘能止暴禁非、其卒之也、子路欲殺衞君而事不成、身菹於衞東門之上、是子敎之不至也、子自謂才士聖人邪、則再逐於魯、削迹於衞、窮於齊、圍於陳蔡、不容身於天下、子敎子路菹、此患、上無以爲身、下無以爲人、子之道豈足貴邪、

【大意】 子路の殺されしことゝ、孔子の世に窮せられしことを擧げて、孔子の敎の以て身を爲むるに足らず、又人を爲むるに足らず、貴ぶに足らざるを言ふ、

【通釋】 子路は初め勇を好み亂暴せしを、子甘言を

うて、兩軍に死傷多く、血を流すこと百里に及べり、降りて堯舜の作りて天子たるに及び、百官を置きて政務を煩雜にし、古の無爲の治を爲す能はず、更に降りて、殷の湯王は其君主たる夏の桀王を伐ちて南巣に放ち、周の武王又殷の紂王を伐ちて之を殺し、以て其の天下を奪へり、是より後は、力の强き者は弱き者を凌辱し、兵の衆き者は寡き者を暴掠し、互に相攻伐侵略して、其の非なるを知ることなし、故に湯武より以來の世の名君賢相は、皆亂人の徒輩なり、今子は此の亂賊の魁たる文武の道を修め、天下の辯説者の主と爲りて、以て後世に亂賊を敎へ、寬博の衣と狹き帶とを著けて儒服と爲し、天性に反したる仁義を稱道して、言行を矯飾し、天下の諸侯に遊説して之を迷惑せしめ、而して吾身を用ひられて寵祿を取り富貴を求めんと欲す、是によりて觀れば、今日に於ての盜賊は、子より大なる者なく、孔丘こそ今日の盜賊の巨魁にして、吾等の如きの比に非ず、而るに天下の人、何故に子を謂て盜丘と爲さずして、反つて我を謂て盜跖と爲すや、實に怪むべきの至りなりと、〔遂に盜を止むるを勸むる孔子を以て、反て盜丘と爲す、柳下李の所謂辨足以飾非とは卽ち是なり〕、

【解義】〔無置錐之地〕置は立なり、錐の穎は極めて細く、之を立つるに廣き場所を要せず、故に無立錐之地とは少許の地も無きを謂ふ、成玄英曰く、堯舜に讓りて丹朱に授けず、舜禹に讓りて商均嗣がず、故に置錐の地無きなり、〔後世絶滅〕按ずるに戰國の時、周猶天下の共主たり、然れども諸侯割據、攻伐を事とし畿內の地も亦已に侵略せられ、威令天下に行はれず、僅に空名を存するに過ぎず、故に孟子も三代之滅、以其不仁と曰ひ、至る所の諸侯に代りて王たらんことを勸む、此に絶滅と曰ふも、孟子と同く、其實を以て言ふ大概の語のみ、〔臥則居居〕成玄英曰く、居居は安靜の容、〔起則于于〕成玄英曰く、于于は自得の貌、郭慶藩曰く、于于は廣大の意なり、「方言」に于は大なり、「禮記」文王世子に于其身以善其君の鄭注に曰く、于讀で迂と爲す、迂は猶廣の如く大の如きなり、「檀弓」に于其子の正義も亦于を訓して廣大と爲す、于于は重言なり、〔蚩尤〕「釋文」に云ふ、神農の時の諸侯、始めて兵を造りし者なり、神農の後第八帝を楡罔と曰ふ、蚩尤氏强くして楡罔と王を爭ひ、楡罔

ひ、上古無爲至德の治より降りて湯武の亂賊と爲るを言ひ、孔子の敎は卽ち亂賊の敎にして、孔子こそ今日天下の盜魁なりと反駁するなり、

【通釋】 盜跖之を聞て、大に怒り曰く、孔丘來り進め利を以て誘うて規(タヾ)すことを得べきと、言を以て諭(サト)して諫むることを得べきとは、皆愚陋の凡民を謂ふのみ、汝は我を何と思へるや、今汝が譽むる所の我の長大美好にして、人皆見て之を悅ぶ者は、此れ吾が父母の授けられし遺德なり、丘が吾を譽めずとも、吾獨り自ら之を知らざらんや、且吾れ之を聞く、面前にて人を譽むることを好む者は、又陰にて人を毀(ソシ)ることを好む者なりと、丘は今將軍は三德を具有すと曰ひて、喋々我を譽むるを見れば、退きて我を毀ること必せり、吾何ぞ此の輕薄の語を悅ばんやと、先づ其面譽を罵倒し、次ぎに其言ふ所の城邑封侯の利の重んずるに足らざるを駁して曰く、今丘は我に告ぐるに、大城を築き衆民の主と爲すことを以てす、是れ利誘して我を規(タヾ)さんとし我を待遇するに凡庸の徒を以てするなり、大城衆民の利は何ぞ久く之を保つを得んや、愚陋の凡民は之を悅ばんも、我は之が爲めに心を動かす者に非ず、何となれば、城の最も大なるは天下を擧げて一城と爲せる者より大なるは無し、堯舜は天下を保有せしも、其子孫は少許の地も無し、殷の湯王周の武王は、立て天子と爲りしも、其の後裔は已に絕滅したり、是れ其の利大なるを以て、人之を爭ひ、久しく保有する能はざるに非ずや、且つ吾之を聞けり、古の時は禽獸多くして人少く、人往々禽獸の害を被る、故に民皆樹上に巢を構へて居住して其害を避け、晝は下りて橡(トチ)や栗の實を拾ひ、夜は又木の上に棲みたり、故に此時代を名づけて有巢氏の民と曰へり、又古の時は民未だ衣服を造りて寒を防ぐことを知らず、夏の中に多く薪を積み蓄へ置き、冬に至れば之を焚やし、煬(アタヽ)まりて暖を取りたり、故に此の時代の民を知生の民と曰へり、神農氏の帝たりし世には、民臥しては居居と安靜に睡り、起きては于于と心廣く樂みて歩行し、毫も苦痛あることなし、民たゞ其の母のみを知りて其の父を知らず、麋(ビ)鹿と共に居り、耕して食ひ、織りて衣て、互に相害するの心無し、此れ至德の最も隆んなるなり、然り而して其の後黃帝の帝たるに至り、至德を致すこと能はず、蚩尤と大に涿鹿の野に戰

之、好面譽人者、亦好背而毀之、今告我以大城衆民、是規我以利而恒民畜我也、安可長久也、城之大者、莫大乎天下矣、堯舜有天下、子孫無置錐之地、湯武立爲天子、而後世絕滅、非以其利大故邪、且吾聞之、古者禽獸多而人民少、於是民皆巢居以避之、晝拾橡栗、暮棲木上、故命之曰有巢氏之民、古者民不知衣服、夏多積薪、冬則煬之、故命之曰知生之民、神農之世、臥則居居、起則于于、民知其母、不知其父、與麋鹿共處、耕而食、織而衣、無有相害之心、此至德之隆也、然而黃帝不能致德、與蚩尤戰於涿鹿之野、流血百里、堯舜作、立群臣、湯放其主、武王殺紂、自是之後、以强凌弱、以衆暴寡、湯武以來、皆亂人之徒也、今子修文武之道、掌天下之辯、以教後世、縫衣淺帶、矯言僞行、以迷惑天下之主、而欲求富貴焉、盜莫大於子、天下何故不謂子爲盜丘、而乃謂我爲盜跖、

【大意】 以下盜跖の對へを叙す、此一節は先づ孔子の面譽を罵り、次ぎに大城衆民の利の保ち難きを言

如く、齒は美しく揃うて、形の齊しき貝を列ねたるが如く、聲音は高低の調子、能く黃鐘の音律に中れり、此の如き德あるに、而るに名づけて盜跖と曰はるゝは、丘竊に將軍の爲めに耻ぢて取らざるなり、將軍若し臣の言ふ所に聽從せんとするの意あらば、臣請ふ南は吳越に使ひし、北は齊魯に使ひし、西は晉楚に使ひし、諸侯の君に說きて、各地を割かしめ、將軍の爲めに大城の數百里なるを造築し、數十萬戶の封邑を立て、將軍の位を尊くして諸侯と爲し、天下の諸侯と共に、今日までの騷亂を一新して、兵を罷め士卒を休息せしめ、兄弟の離散せる者を收め養うて家族を保護し、時物を供して先祖を祭らしめん、此くの如く、自ら貴富を取り、又以て天下の民を安んずるは、此れ聖人才士の行ひにして、天下の願ふ所なり、將軍豈之を欲せざるかと、

【解義】〔願望履幕下〕「釋文」に、司馬本には幕を綦に作りて云ふ、敢て跖の面を望まず、履結を望みて還らんと言ふなりと、成玄英曰く、敢て儀容を正視せず、たゞ履を帳幕の下に望むを願ふと、皆謁を請ふの意を言ひ、自ら謙下して跖を尊敬したる語なり、〔兩展其足〕司馬云ふ、展は申なり、〔瞋目〕「釋文」に「廣雅」を引て曰く、瞋は張なり、〔乳虎〕子を乳養する虎なり、物の來て子を害せんことを恐れて咆吼し、其の猛烈なること平日に倍す、〔知維天地〕「釋文」に、知は音「智」とあり、維は繫ぐなり、智は天地を包羅するを謂ふ、〔脣如激丹〕「釋文」に司馬云ふ、激は明なり、章炳麟曰く、激借りて敫と爲す、「說文」に、敫は光景流るゝなり、讀で龠の若くすと、故に司馬明と訓ず、〔與天下更始〕更始は舊を改めて新を始むるなり、「禮記」に數將幾終、歲且更始とあり、〔共祭先祖〕「釋文」に共音恭、王先謙曰く、共は讀で供と爲すと、

盜跖大怒曰、丘來前、夫可規以利、而可諫以言者、皆愚陋恒民之謂耳、今長大美好、人見而說之者、此吾父母之遺德也、丘雖不吾譽、吾獨不自知邪、且吾聞

軍兼此三者、身長八尺二寸、面目有光、脣如激丹、齒如齊貝、音中黃鐘、而名曰盜跖、丘竊爲將軍耻不取焉、將軍有意聽臣、臣請南使吳越、北使齊魯、東使宋衞、西使晉楚、使爲將軍造大城數百里、立數十萬戶之邑、尊將軍爲諸侯、與天下更始、罷兵休卒、收養昆弟、共祭先祖、此聖人才士之行、而天下之願也、

【大意】孔子更に請うて盜跖を見、其の容貌の美、知能の優と勇武多衆とを稱し、之れが爲めに諸侯に說きて地を割かしめて侯王と爲さんと言ひ、以て其の橫暴を止めしめんとすることを敘す、

【通釋】孔子復た謁者をして通ぜしめて曰く、丘は將軍の兄の柳下季に交誼を辱くし居る者なれば、願はくば將軍にも一たび謁見するの榮を得たしと、謁者之を盜跖に通ぜしかば、盜跖さらば來り進ましめよと曰ひ、孔子乃ち入りて趨り進み、席を避けて少しく卻行し、盜跖を再拜せられたり、盜跖大に怒り、脚を左右に展ばし廣げ、手を劍にかけ、目を張りて睨みつけ、子持ちの虎の如き畏るべき聲を出して曰く、丘來り進め、汝の言ふ所、吾の意に順はゞ則ち生かし置かんも、若し吾の心に逆ふことあらば、則ち殺して赦さずと、孔子曰く、丘之を聞けり、凡そ天下に三德あり、生れつき身體長大、且つ容貌美好なること天下に竝ぶ者無く、貴賤と無く少長と無く、見て皆之を悅ぶは此れ上德なり、智は天地を包羅し、能は諸事物を辨じ三才に通じ知らざる無く、能くせざる無きは、此れ中德なり、勇悍果敢にして、衆を聚め兵を率ゆるは、此れ下德なり、凡そ人此の三德中の一德ある者も、以て諸侯の君と爲り、南面して孤と稱するに足るなり、今將軍は此の三德を兼ね備へ、實に希有の大人物なり、其上德のみを言はんに、身の長けは八尺二寸ありて、面目には光輝あり、脣は赤くして、明かなる丹の

華、華葉を雕飾す、繁茂なること樹枝に類するあるを言ふ、林希逸曰く、枝木は木枝の皮を削りて以て冠と爲すなりと、是れ亦一說なり、幷せ記して參考に供す、「死牛之脅」「釋文」に司馬云ふ、牛皮を取りて大革帶と爲す、成玄英曰く、脅は肋なり、牛皮を用ひて革帶と爲す、既に濶く且つ堅し、又牛肋の如きなり、〔多辭繆說〕章炳麟曰く、繆は猶繁の如きなり、庚桑楚篇に曰く、外韄者不可繁而捉、內韄者不可繆而捉、と「說文」に繆は枲の十絜なりと、故に引伸して繁と爲すを得、繁說は多辭と同辭、今人繆を以て亂と爲す而して繁も亦亂と訓ずべし、皆冣後引伸の義、此の繆說の訓に非ざるなりと、亦一說と爲すべし、〔妄作孝弟而僥倖於封侯富貴者也〕成玄英曰く、僥倖は冀望なり、夫の孝弟を作し人倫を序するは、意富貴封侯に在るなり、故に歷聘已まず、接輿鳳兮の譏あり、本を棄て迹に滯す、師金芻狗の誚を致す、〔罪大極重〕兪樾曰く、極は當に殛に作るべし、「爾雅」釋言に、殛は誅なり、罪大にして誅重きを言ふなり、極は殛と古字通ず、「書」洪範篇の鯀則殛死、多士篇の大罰殛之、僖二十八年「左傳」の明神殛之、昭七年傳の昔堯殛鯀於羽山、釋文並びに曰く、殛本極に作ると、

孔子復通曰、丘得幸於季、願望履幕下、謁者復通、盜跖曰、使來前、孔子趨而進、避席反走、再拜盜跖、盜跖大怒、兩展其足、案劍瞋目、聲如乳虎、曰、丘來前、若所言順吾意則生、逆吾心則死、孔子曰、丘聞之、凡天下有三德、生而長大美好無雙、少長貴賤見而皆說之、此上德也、知維天地、能辯諸物、此中德也、勇悍果敢、聚衆率兵、此下德也、凡人有此一德者、足以南面稱孤矣、今將

食を爲してありたり、孔子盜跖の處に到りて車を下り、前みて取次ぎを掌る謁者を見て曰く、余は魯人の孔丘なる者なるが、將軍の高義を聞きて、遠く來りて謁を請はんとすと曰ひ、敬て謁者を再拜して、盜跖に通ぜんことを請はれたり、謁者中に入りて、孔子が來りて面會を求むることを通ぜしかば、盜跖之を聞て大に怒り、目は明星の如くに耀き、頭髮は上(ノボ)り立ちて冠を指し、此の者は、彼の魯國の僞作に巧みなる孔丘には非ざるか、我が爲めに之を告げて曰へ、汝は仁義忠孝等許多の語を造りて人道と爲し、妄りに文王武王の德を稱述し、首には飾りの多き冠を戴き、身には牛の肋(アバラ)の皮にて造りたる帶を纒ひ、徒に多辭繁說するのみにて、自ら耕さずして食ひ、自ら織らずして衣、唇を搖がし舌を鼓して道を說き、擅に事物に是非善惡の別を生じ、上にしては天下の君主を迷はし、下にしては天下の學士を惑はしめ、又自己は妄りに孝弟を爲し、外飾を以て封侯を取り富貴を得んことを僥倖する者なり、汝の罪は此の如く重大なり、疾(スミヤ)かに走り歸れ、若し尙ほ歸らず、强ひて面會を求めば我將に汝を殺し、汝の肝を以て晝餔の食膳を益さんとすと曰ひ、面會を拒絕し、慢罵して逐ひ立てんとしたり、

【解義】〔顏回爲馭子貢爲右〕馭者は車の中央に在り、主人は其左に在り、故に別に一人を馭者の右に乘らしむ、之を驂乘又は車右と謂ひ、又單に右とも謂ふ、〔大山之陽〕「釋文」に大音太とあり、泰山に同じ、齊魯の界上に在り、〔膾人肝而餔之〕「釋文」に林云ふ、日申時の食なりと、申は今の午後四時頃なり、成玄英曰く、餔は食なり、〔敬再拜謁者〕此れ兩說あり一說は孔子の言は聞將軍高義の句までにて終り、敬再拜謁者は言ひ了りて謁者を再拜して盜跖に通ぜんことを請はれしことを記せしなり、一說は此の五字も孔子の言にて、直ちに盜跖を指すを憚り、謁者と曰はれしなり、左右或は執事といふが如しと、今後說を用ふ、〔巧僞人〕僞は人爲なり、道家は自然を尙び、儒家の孝弟仁義等を以て、人爲に出で自然に反すと爲す、故に孔子を呼で巧僞人と爲すなり、下の作言造語及び擅生是非妄作孝弟等は皆巧僞を謂ふなり、〔枝木之冠〕「釋文」に司馬云ふ、冠に華飾多く、木の枝の繁きが如し、成玄英曰く、尼父(孔子)戴く所の冕は浮

く亂暴にして、制止すべからず、力は强くして敵を拒ぐに足り、辯は巧みにして非を飾りて是と爲すに足る、毫も理の當否を思はず、たゞ人が自己の心に順へば則ち喜び、其の心に逆らへば則ち怒り、又罵詈して人を辱かしむるを容易にす、先生往きて之を說諭せらるゝも、必ず聽かず、却て暴言を吐きて侮辱を加へん先生必ず往くこと勿れ、

【解義】〔必能詔其子〕「釋文」は、詔に教なり、

孔子不聽、顏回爲馭、子貢爲右、往見盜跖、盜跖乃方休卒徒大山之陽、膾人肝而餔之、孔子下車而前、見謁者曰、魯人孔丘、聞將軍高義、再拜謁者、謁者入通、盜跖聞之大怒、目如明星、髮上指冠、曰、此夫魯國之巧僞人孔丘非邪、爲我告之、爾作言造語、妄稱文武、冠枝木之冠、帶死牛之脅、多辭謬說、不耕而食、不織而衣、搖脣鼓舌、擅生是非、以迷天下之主、使天下學士不反其本、妄作孝弟而徼倖於封侯富貴者也、子之罪大極重、疾走歸、不然我將以子肝益晝餔之膳、

【大意】孔子柳下季の言を聽かず、盜跖を訪うて面會を請ひ、盜跖孔子を罵りて巧僞人と爲し、妄りに人道を作りて、道の根本を離れ、天下の君主と學士とを迷亂せしめ、自ら矯飾して封侯富貴を取らんとする者と曰ひ、嚴に面會を拒絕したることを叙す、

【通釋】孔子は柳下季の止むるを聽かず、顏回をして車を馭せしめ、子貢を車右と爲し、盜跖に面會せんとして出で往かれたり、此時盜跖は方に配下の卒徒を泰山の下に休憩せしめ、己は人の肝を膾にして晝

教其弟、則無貴父子兄弟之親矣、今先生世之才士也、弟爲盜跖、爲天下害、而弗能教也、丘竊爲先生羞之、丘請爲先生往說之、柳下季曰、先生言、爲人父者必能詔其子、爲人兄者必能教其弟、若子不聽父之詔、弟不受兄之教、雖今先生之辯、將奈之何哉、且跖之爲人也、心如涌泉、意如飄風、强足以拒敵、辯足以飾非、順其心則喜、逆其心則怒、易辱人以言、先生必無往、

【大意】　孔子柳下季の其の弟を教へざるを責め、代りて盜跖を說諭せんとし、柳下季盜跖の暴戾にして教を受けざるを言ひ、孔子の往くも必ず聽かず、却て侮辱すべきを以て、之を止むることを敍す、

【通釋】　孔子柳下季に謂うて曰く、人の父たる者は必ず能く其の子を教へ、人の兄たる者は必ず能く其の弟を教へ、之を善に導きて不善を爲さざらしめてこそ、父子兄弟の親愛の情あるなり、若し父として其の子を教ふる能はず、兄として其の弟を教ふる能はざれば、則ち父子兄弟の親は、毫も益する所なし、何ぞ貴ぶに足らんや、今先生は世の才士なり、而るに其の弟が盜賊と爲り、天下人民の大害と爲り、而して先生は之を教へて盜を止めしむる能はず、丘竊に先生の爲めに之を羞づ、因て丘は先生の爲めに、往きて之を說諭して、善に反り盜を止めしめんとすと、柳下季曰く、先生は人の父たる者は必ず能く其の子を教へ、人の兄たる者は必ず能く其の弟を教ふべしと言はるれども、若し子弟が暴惡にして、父の教を聽かず、兄の教を受けざる時は、先生の辯を以て說諭すと雖も、之を如何ともする能はざらん、且つ跖の人と爲りは、其心は涌き出る泉の如く盛んにして、他人の言の爲めに其の心を抂ぐること無く、其の意氣は飄風の如

驅人牛馬、取人婦女、貪得忘親、不顧父母兄弟、不祭先祖、所過之邑、大國守城、小國入保、萬民苦之、

〔大意〕 孔子が盜跖を訪うて相語ることを叙せんと欲し、第一節先づ盜跖の平生爲す所を叙し、其の大盜たるを明かにす、

【通釋】 孔子は柳下季と友として交はられたり、柳下季の弟、其の名を盜跖と曰ふ、盜跖は常に卒徒九千人を從へて天下を横行し、諸侯を侵掠暴逆し、小にしては人家の屋室に穴を穿ち、又は戶を探り開きて入り、人の牛馬を驅りて奪ひ、人の婦女を掠め取り、得ることを貪り親族をも忘れ、父母兄弟を顧みず、先祖の祭りを修めず、其の過ぐる所の邑、大國は城を守り、小國は堡に入りて之を防禦し、以て難を避く、萬民皆之を苦みたり、

【解義】 〔孔子與柳下季爲友〕「釋文」に、柳下惠姓は展、名は獲、字は季禽、一に云ふ字は子禽と、柳下に居りて德惠を施す、一に云ふ、惠は諡なり、一に云ふ、柳下は邑の名と、「左傳」に據るに、展禽は是れ魯の僖公の時の人、孔子の生るゝに至りて、八十餘年、若し子路の死するに至らば百五六十歲なり、友たるを得ず、是れ寄言なり、〔柳下季之弟名曰盜跖〕「釋文」に曰く「漢書」の李奇の注を引いて曰く、跖は秦の大盜なり、兪樾曰く、「史記伯夷傳」の「正義」に又云ふ、蹠は黃帝の時の大盜の名と、是れ跖の何れの時の人たる、竟に定說なし、孔子と柳下惠と時を同くせず、柳下惠と盜跖と亦時を同くせず、讀者寓言を以て實と爲す勿れと、〔穴室樞戶〕巖井文曰く、樞の字通せす、當に摳に作るべし、摳は猶探のことし、按ずるに、孫詒讓も亦同說、殷敬順の列子釋文を引て曰く、摳は探なり、〔小國入保〕保は堡の省字、「釋文」に「禮記」鄭注を引て曰く、小城を保と曰ふ、

孔子謂柳下季曰、夫爲人父者、必能詔其子、爲人兄者、必能敎其弟、若父不能詔其子、兄不能

も亦當に恃と訓ずべし、〔推亂易暴〕成玄英曰く、周の亂を推し、以て殷の暴に易はるなりと、采薇歌に所謂る以暴易暴と同義なり、〔其竝乎周以塗吾身也〕按ずるに、「呂氏春秋」誠廉篇には其の上に與字あり、此れ脱するに似たり、〔遂餓而死焉〕郭象曰く、論語には、伯夷叔齊餓于首陽之下とありて、其の死を言はず、而るに死焉とあるは、亦其の餓を守り以て終りしを明かにするのみ、未だ必ずしも餓死せざるなり、〔苟可得已則必不頼〕章炳麟曰く、方言に頼は取なり、

〔備考〕　莊子の學は、道を體して全生葆眞するに在り、故に内外を辨じ、輕重を審にし、富貴名譽を土芥視して、肯て天下國家の爲めに心身を勞苦せしめず、一書三十餘篇數十萬言、論次する所、皆此旨に歸着せざるなし、此の篇許由子州支父の堯の讓りを受けざるより、孔子の陳蔡に圍まれて、弦歌自ら娛むに至るまで十餘人皆生を重んじて富貴を輕んずるの事を列叙す、而して北人無擇卞隨瞀光及び伯夷叔齊に至りては、富貴を避くるが爲めに、却て生を損し身を滅ぼすに至り、全生葆眞の本旨と全く相反す、「釋文」に唐氏を引て呶々之を辯ずと雖も、人をして首肯せしむるに足らず、此の數章は、末流の徒、本旨を失へる者の手に成ること、斷じて疑ひなし、郭象の此を存して刪らざりしは、實に怪むに堪へたり、

名言

道之眞以治身、其緒餘以爲國家、其土苴以治天下、

無財、謂之貧、學而不能行、謂之病、

身在江海之上、心居乎魏闕之下、

君子通於道之謂通、窮於道之謂窮、

古之得道者、窮亦樂、通亦樂、

樂與政爲政、樂與治爲治、

盜跖第二十九

我が邦先輩大鹽氏の説あり、既に本書序説に載す、宜く參考すべし、

孔子與柳下季爲友、柳下季之弟、名曰盜跖、盜跖從卒九千人、横行天下、侵暴諸侯、穴室樞戶

くし、敢て其の職任を避けず、亂世に遇へば、苟も世に在りて身を汙さずと、今や殷の政亂れて天下道なく、周の德も亦衰へたり、此の時に於て、亂逆を行ふ周と共に居りて、吾身を汙さんよりは、之を避けて吾行ひを清潔にするに如かずと、二人乃ち北の方首陽山に至り、遂に餓を守りて山中に死せり、此の伯夷叔齊の如きは、其の富貴に於けるや、苟も已むを得べければ、必ず取らず、節操を高くし、世俗に反するの行を爲して、獨り其志を樂しくして、世務を事とせず、是れ二士が執る所の節なり、

【解義】〔有士二人處於孤竹〕「釋文」に司馬云ふ、孤竹國は遼東令支縣界に在り、伯夷叔齊は其の君の二子なり、成玄英曰く、伯夷叔齊兄弟位を讓ると、或は曰く士二人と曰ひ、又處と曰ふを以て視れば、以て國君の子に非ざるを知るべし、「史記」に載する所を以て此を解するは、文義を失す、〔西方有人〕西方は岐周を謂ひ、人は西伯昌を指す、〔至於岐陽〕成玄英曰く、岐山の陽、文王の都せし地、今〔唐の時〕扶風是れなり、〔叔旦〕成玄英曰く、周公名は旦、武王の弟なり、故に叔旦と曰ふ、〔血牲而埋之〕林希逸曰く牲を殺して其の血を取り以て盟ひ、而る後に之を埋むるなり、〔時祀盡敬而不祈喜〕成玄英曰く、祈は求なり、兪樾曰く、喜當に禧に作るべし、「爾雅」の釋詁に、禧は福なり、不祈禧とは不祈福なり、「呂氏春秋」誠廉篇には時祀盡敬、而不レ祈レ福に作る、此と字異にして義同じ、〔樂與政爲政樂與治爲治〕按ずるに「呂氏春秋」誠廉篇には正與テ爲レ正治與テ爲レ治に作る、政とは正なり、音義正通す、與は又以と通用す、與政爲政とは以正爲政なり、正道を以て政を施すを言ふなり、下句の二の治字、上は治道を謂ひ、下は治を施すを謂ふ、〔今周見殷之亂而遽爲政〕按ずるに、政字亂と對す、亦正と爲して讀むべし、「呂氏春秋」誠廉篇には、今周見殷之僻亂也而遽爲之正與治に作る、〔上謀而下行貨〕王念孫曰く、下の字は後人の加ふる所なり、上は尙と同じ、上謀而行貨、阻兵而保威、句法正に相對す、後人上を誤讀して上下の上と爲す、故に下の字を加ふるのみ、「呂氏春秋」誠廉篇には、正に上レ謀而行レ貨、阻レ兵而保レ威に作る、〔阻兵而保威〕高誘の「呂氏春秋」の注に曰く、阻は依なり、保は持なり、畢沅曰く、杜預「左傳」に注して云ふ、阻は恃なりと、保

者、其於富貴也、苟可得已、則必不賴、高節戾行、獨樂其志、不事於世、此二士之節也、

【大意】 伯夷叔齊、西方に有道者ありと聞きて周に至り、武王の利を以て之を結ばんとするを觀て、其の殷の亂に乘じ、紂を代て天下を取らんとするの志あるを知り、其亂行の爲めに吾身を汚さんことを羞ぢ、避けて首陽山に入りて餓死せしことを叙す、

【通釋】 昔し周の興りし時、士二人あり、仕へずして孤竹に居れり、其名を伯夷叔齊と曰ふ、二人相與に謂うて曰く、吾聞く西方に人あり、道ある人に似たりと試みに往きて之を觀んと、往きて岐山の陽に至れば、西伯昌は已に死し、其の子武王繼ぎて立ち、將に紂王を伐ちて天下を取らんとし、賢良を招致す、二人の遠方より來るを聞き、弟の旦をして往きて之を見て、與に盟はしめて曰く、兩賢遠く來りて我を助く、我甚だ之を悅ぶ、因て祿は第二級を與へ、官は第一列に就かしめんと、牲を殺して其血を取り、盟ひ畢りて其盟書を埋み、以て二人の心を結ばんとせり、伯夷叔齊互に相視て笑つて曰く、嘻異なるかな、吾は有道者ありと聞きて來りしに、此の如く利を以て人を誘はれんとは、是れ吾が謂ふ所の道に非ざるなり、昔神農の帝と爲りて天下を有せしとき、四時の祭祀には恭敬を盡くせしも、以て幸福を求むるに非ず、其の人に接するには、忠誠信實にして治を盡くすも、毫も民に求むること無し、常に正しき道を以て政を爲すを樂み、治まる道を以て治を施すを樂み、人の政を毀敗するを以て、乘じて自ら成さんとせず、人の行ひの卑陋なるを以て、特に自ら行ひを高くして名譽を取らんとせず好き時機に遭ふを以て、因て以て自ら利を收めんとせざりき、然るに今周は殷の政の亂るゝを見て遽に治政を施し、謀略を尙びて人に貨利を與へ、兵を恃みて威を保持し、牲を割き殺して盟ひ、以て信を爲し、己の善行を揚げ彰はして、以て衆庶を悅服せしめ、兵を出だし殷を伐ち、君を殺して以て天子たるの利を要め取らんとす、是れ皆道に背きたる事なり、此くの如き所爲を以て天下を取れば、是れたゞ武王の亂を推して紂王の暴に易はるのみ、毫も優劣あることなし、吾聞く、古の士は、治世に遭へば、出て仕へて力を盡

を懷くの人にして隱者なり、〔忍垢〕「釋文」に司馬云ふ、垢は辱行なり、李云ふ、君を弑するには須く垢を忍ぶべし、〔稠水〕「釋文」に、又桐水に作る、司馬云ふ、桐水は穎川に在り、一に云ふ、范陽の郡界に在り、〔我享其利〕成玄英曰く、享は受なり、享其利は祿を受くるなり、〔盧水〕「釋文」に云ふ、司馬本には盧水に作る、遼東の西界に在り、一に云ふ、北平の郡界に在り、

昔周之興、有士二人、處於孤竹、曰伯夷叔齊、二人相謂曰、吾聞西方有人、似有道者、試往觀焉、至於岐陽、武王聞之、使叔旦往見之、與之盟曰、加富二等、就官一列、血牲而埋之、二人相視而笑曰、嘻異哉、此非吾所謂道也、昔神農之有天下也、時祀盡敬而不祈喜、其於人也、忠信盡治、而無求焉、樂與政爲政、樂與治爲治、不以人之壞自成也、不以人之卑自高也、不以遭時自利也、今周見殷之亂而遽爲政、上謀而下行貨、阻兵而保威、割牲而盟以爲信、揚行以說衆、殺伐以要利、是推亂以易暴也、吾聞古之士、遭治世不避其任、遇亂世不爲苟存、今天下闇、周德衰、其並乎周以塗吾身也、不如避之以潔吾行、二子北至於首陽之山、遂餓而死焉、若伯夷叔齊

【大意】 湯が桀を伐たんとして卞隨務光に謀り、二人皆斥けて應ぜず、已に紂に勝ちて天下を讓りしに、二人又皆辭して受けず、數々汚辱の事を見聞するに忍びずと曰うて、水に投じて死せしことを敍す、

【通釋】 湯將に夏の桀王を伐たんとし、卞隨の賢なるを知り、就きて其の方略を謀議せり、卞隨曰く、吾は隱者にて世事に與からず、君を伐ち天下を取るが如きは、吾の關與すべき事に非ずと謝絶せるに、湯更に然らば此の事を謀議すべき人は誰か可なるやと問ひたるを、吾は其の人を知らずと對へたり、湯又瞀光の賢者なるを知り、就きて謀りたるに、瞀光も卞隨と同じく、吾が事に非ずと對へ、湯の孰れか謀かるべき人なるやと問へるも、吾れ知らずと對へたるに、湯更に伊尹は此の事を謀議すべき人なるや何如と問へるに、瞀光は彼の伊尹は努力勉强して、世俗汚辱の事に耐へ忍ぶの人なり、其他の事は吾れ之を知らずと對へたり、是に於て、湯遂に伊尹と謀りて桀を伐ち、之に勝ちて殷の天下を奪ひ、以て卞隨に讓りて天子と爲らしめんとせり、卞隨辭して曰く、曩に君の桀を伐たんとして、我に謀られしは、必ず我を以て君を弑するの賊心ある者と爲せしならん、已に桀に勝ちて、我に天下を讓るは、必ず我を以て天下を取らんとするの貪心ある者と爲すならん、吾れ亂世に生れて、湯の如き無道の人再び來りて我を汚すに其の辱行を以てせり、吾猶生きて屢々かゝる事を聞くに忍びずと、竟に自ら椆水に投じて死したり、湯又天下を瞀光に讓りて曰く、智ある者之を謀り、武力ある者之を遂行して取り、仁德ある者天子の位に居りて之を治むるは、古の道なり、吾子何ぞ立ちて天子と爲らざるやと瞀光辭して曰く、人臣として上たる君を廢するは義に非ざるなり、戰亂を起して君を殺すは仁に非ざるなり、他人が討伐の難を犯して取りたるに、我れ勞せずして其の利祿を受くるは、廉に非ざるなり、吾嘗て聞けり、其の義に非ざる者は其の祿を受けず、無道の世には其土地を踐まずと、かゝる古語さへあるに、況して我を尊んで天子と爲さんとするも、何ぞ之を受くべけんや、吾は此の辱行を久しく見るに忍びずと曰ひ、乃ち石を負ふて自ら廬水に沈みて死したり、

【解義】 〔卞隨瞀光〕「釋文」に云ふ、瞀或は務に作る成玄英曰く、姓は卞、名は隨、姓は務、名は光、並に道

【解義】〔北人無擇〕成玄英曰く、北方の人にして名を無擇と曰ふ、舜の友人なり、〔后之爲人也〕成玄英曰く、后は君なり、〔居於畎畝之中〕「釋文」に司馬云ふ、壟上を畝と曰ひ、壟中を畎と曰ふと、壟は田のうねなり、居於畎畝之中は農耕に從事するを謂ふなり、〔欲以其辱行漫我〕章炳麟曰く、漫當に槾に作るべし、說文に漫無し、槾我とは我を塗汙するなり、〔淸冷之淵〕「釋文」に「山海經」を引て云ふ、江南に在りと、又一に云ふ、南陽郡西崿山の下に在りと、

湯將伐桀、因卞隨而謀、卞隨曰、非吾事也、湯曰、孰可、曰、吾不知也、湯又因瞀光而謀、瞀光曰、非吾事也、湯曰、孰可、曰、吾不知也、湯曰、伊尹何如、曰、强力忍垢、吾不知其他也、湯遂與伊尹謀、伐桀尅之、以讓卞隨、卞隨辭曰、后之伐桀也、謀乎我、必以我爲賊也、勝桀而讓我、必以我爲貪也、吾生乎亂世、而無道之人、再來漫我以其辱行、吾不忍數聞也、乃自投椆水而死、湯又讓瞀光曰、知者謀之、武者遂之、仁者居之、古之道也、吾子胡不立乎、瞀光辭曰、廢上非義也、殺民非仁也、人犯其難、我享其利、非廉也、吾聞之、曰、非其義者、不受其祿、無道之世、不踐其土、況尊我乎、吾不忍久見也、乃負石而自沈於廬水、

知天之高也地之下也」按ずるに、子貢の語は此に止まる、古之得道以下は作者の議論也、「道德於此」兪樾曰く、德當に得に作るべし、「呂覽」愼人篇には道得於此則窮達一也に作る、「窮通爲寒暑風雨之序矣」兪樾曰く、疑ふらくは此文窮通の下に亦當に一也の二字あるべし、而して今之を奪すと、「共伯得乎共首」「釋文」に司馬云ふ、共伯名は和、其の行を修めて賢人を好む、諸侯皆以て賢と爲す、周の厲王の難に天子曠絶す、諸侯皆以て天子と爲さんと請ふ、共和聽かざれども免るゝを得ず、遂に王位に卽く、十四年天下大に旱し、舍屋焚く、太陽に卜す、兆に曰く、厲王祟を爲すと、召公乃ち宣王を立つ、共伯宗に復歸し、共山の首に逍遙得意す、郭慶藩曰く、「釋文」に司馬を引て共伯共山の首に逍遙得意すと云ひ、而して共山の某所に屬するを詳にせず、　疑ふらくは共首は卽ち共頭なり、「荀子」儒效篇に至共頭而山隧、楊倞注に、共は河內の縣名、共頭は蓋し共縣の山名と、盧文弨曰ふ、共頭は卽ち「莊子」の共首と、「呂氏春秋」誠廉篇にも亦共頭に作る、此の首の字も亦當に頭の誤りと爲すべし、頭は頁に從ふ、頁は卽ち首字なり、古は頭首字通用す、

舜以天下讓其友北人無擇、北人無擇曰、異哉、后之爲人也、居於畎畝之中、而遊堯之門、不若是而已、又欲以其辱行漫我、吾羞見之、因自投淸冷之淵、

【大意】　舜天下を北人無擇に讓り、無擇之を羞ぢて淵に投じて死せしことを敍す、

【通釋】　舜が天下を以て其友の北人無擇に讓りたり、北人無擇曰く、異なるかな君の人と爲りや、舜は初め畎畝の中に耕したるに、之に安んずる能はずして、堯の門に遊びて天子と爲り、天下の爲めに勞苦し、以て其性を毀損するに至れり、唯己が此くの如くするのみならず、又辱づべき行ひを以て我にも塗りつけ汚して、天子と爲らしめんとするは、果して何の心ぞや、吾は生きて此の如き人を見るを羞づと、因て自ら淸冷と云ふ淵に身を投げて死したり、

て、復た彈きつゝ詩を歌はるれば、二人共に感悟して喜び、子路は勇ましく起ちて、干を執りて舞ひ、子貢は歎じて曰く、天は高けれども、之を夫子の德の高きに比すれば、其高きを知らず、地は深く下れとも、之を夫子の道の深淵なるに比すれば、其の深く下きを知らずと、古の道を得たる者は、此の孔子の如く、窮する時に於ても亦樂み、通ずる時に於ても亦樂む、樂む所は富貴貧賤の窮通にあらず、此の身に道德あれば以て自ら樂むに足り、外より來る窮通の如きは、寒暑風雨の次第に行はるゝが如きに思ひ、敢て之が爲めに心を動かすことなし、故に許由は堯の天下を讓らんとするを避けて、潁水の陽に隱居して自ら樂み、共伯は王位を辭して、共山の首に自得せり、皆貴賤を忘れて其道を樂むなり、

【解義】〔七日不火食〕「釋文」に云ふ、元嘉本に火字なしと、按ずるに下に藜羹不糝とあり、羹を調するには必ず火を用ふ、不火食と合はず、元嘉本是に似たり、〔藜羹不糝〕「說文」に、糂を古文に糝に作る、米を以て羹に和するなり、〔夫子再逐於魯〕「史記」世家に季氏饗士、孔子與往、陽虎黜之、孔子由是退と、又云ふ、孔子攝行相事、齊人歸女樂、季氏受之、孔子行と、再逐とは蓋し此を謂ふなり、〔藉夫子者無禁〕「釋文」に云ふ、藉は毀なり、又云ふ、陵藉なり、「史記」の魏其武安傳に、今我在也、而人皆藉吾弟、令我百歲後皆魚肉之矣の藉と同じ、〔其何窮之爲〕郭慶藩曰く、爲は猶ほ謂の如し、古謂爲二字義通ず、「呂氏春秋」愼人篇には何窮之謂に作り、「呂氏春秋」精諭篇の胡爲不可を、「淮南」原道道應篇には胡謂不可に作り、漢書高帝紀の酈食其爲里監門を、史記には爲を謂に作る、皆其證なり、〔天寒既至〕兪樾曰く、天は乃ち大字の誤り、「國語」の魯語に大寒降とあり、韋昭注して曰く、季冬建丑の月大寒の後を謂ふなりと、若し天寒既至に作れば其義を失す、「呂氏春秋」愼人篇に亦此事を載せ、正に大寒に作る、〔吾是以知松柏之茂也〕「廣雅釋詁」に茂は盛なり、此の喩は「論語」の歲寒然後知松柏之後凋也より取るなり、〔陳蔡之隘〕「釋文」に隘音厄とあり、音同じければ義も亦同じ、〔孔子削然反琴〕「釋文」に李云ふ、削然は琴を反へす聲なり、亦梢に作る、音消、〔子路扢然〕扢音「コツ」又音「キツ」、「釋文」に李云ふ、扢然は奮舞の貌、〔吾不

【大意】孔子陳蔡の間に窮して、鼓琴自ら樂む、子路子貢之を誹り、孔子二人を召して、窮通は道に通ずると否とに在りて、外來の貴賤貧富は窮通に非ざるを諭して、二人の感悔せしことを叙し、道を得たる者の樂む所は、窮通に非ずして、身の道德に在るを謂ふ、

【通釋】孔子が陳蔡の間に窮せられしとき、米を得る能はずして、七日間も飯を炊かず、米を混えざる藜のみの羹を食ひ、顏色青ざめて、甚だ衰へ疲れたり、而るに猶晏然として一室の中に坐し、琴を彈き詩を歌うて自ら娯み、其の窮苦を知らざるが如くなりき、顏回が室の外にて羹に供すべき野菜を擇り分け居る處へ、子路子貢の二人來りて、相與に語りて曰く、夫子は初め魯に仕へて、再び官を免じて逐はれ、後に衞に遊びて、又用ひられずして迹を削られ、宋にては樹下に禮を講じて、桓魋に其樹を伐り倒して殺されんとし、商周にても窮厄し、今又陳蔡の間に圍まる、夫子は世に容れられず、人に惡まれ、夫子を殺す者は罪せられず、夫子を狼藉して暴逆を加ふるも禁止する者なきなり、而るに詩を歌ひ琴を彈きて、少しも音樂の聲を絶つことなし、君子と云ふ者は耻を知らざること此の如きかと、互に誹り合へり、顏回は默して敢て之に應ぜず、室に入りて二人の言ふ所を孔子に告げたれば、孔子彈き居られし琴を前に推しやり、喟然として歎じて曰く、由(子路)と賜(子貢)とは誠に小人なり、召して來れ、吾れ之に語り聞かせんと、顏回出でゝ二人に告げ、子路子貢共に孔子の室に入り、子路曰く、夫子の現狀の如きは、困苦の甚だしき、誠に窮せりと謂ふべしと、孔子曰く、是れ何の言ぞや、元來窮通とは貧富貴賤を謂ふに非ず、君子は道に通ずるを通と謂ひ、道に窮するを窮と謂へり、今丘は身に仁義の道を抱き、而して亂世の爲めに、處々にて禍患に遭へり、是れ何ぞ窮と謂ふべけんや、故に自ら心に省みて道に窮する所なく、如何なる禍難に臨むも、其德を失ふこと無し、之を樹木に譬ふれば、大寒既に至り、霜雪既に降るに及びては、衆多の樹木葉盡く落ち將に枯死せんとするが中に、獨り松柏のみは青々として立ち、以て其勢力の茂盛なるを知るが如し、陳蔡の厄難は大寒霜雪にて、以て我が德量を驗するを得、丘に於ては反て幸なり、決して窮する所あらずと、云ひ畢りて、削然として前に推しやりし琴を引き寄せ

是なりと、

孔子窮於陳蔡之間、七日不火食、藜羹不糝、顏色甚憊、而弦歌於室、顏回擇菜、子路子貢相與言曰、夫子再逐於魯、削迹於衛、伐樹於宋、窮於商周、圍於陳蔡、殺夫子者無罪、藉夫子者無禁、弦歌鼓琴、未嘗絕音、君子之無恥也、若此乎、顏回無以應、入告孔子、孔子推琴、喟然而歎曰、由與賜細人也、召而來、吾語之、子路子貢入、子路曰、如此者可謂窮矣、孔子曰、是何言也、君子通於道之謂通、窮於道之謂窮、今丘抱仁義之道、以遭亂世之患、其何窮之爲、故內省而不竊於道、臨難而不失其德、天寒既至、霜雪既降、吾是以知松柏之茂也、陳蔡之隘、於丘其幸乎、孔子削然反琴而弦歌、子路扢然執干而舞、子貢曰、吾不知天之高也地之下也、古之得道者、窮亦樂、通亦樂、所樂非窮通也、道德於此、則窮通爲寒暑風雨之序矣、故許由娛於潁陽、而共伯得乎共首、

姑く情欲の赴く所を放にして、榮華を念はせ置くべし、但し精神に於て、既に名利の慕ふに足らざるを知りて、自ら江海の濱に隱れ、又且つ生命の重んずべきを知れば、精神は情欲の榮華を忘れざるを惡む無からんや、久しき間には、遂に應に之に勝つを得べし、若し然らず、自ら情欲に勝つ能はざるを、强ひて榮華を念はざらしめんとし、情欲を放にせざる者は、此を重傷と謂ふ、情欲已に榮華を戀うて精神に傷つけ、又情欲を抑制して之を傷つけ、性情共に之を傷つくる者は、天壽を全くせざる者の類にて、早死を免るゝ能はざるべし、故に强ひて情欲を抑制すること無く、姑く之を放にして、精神の竟に勝ちて自ら榮華を念はざるに至るを待つべしと、彼の魏牟は萬乘の大國たる魏の公子にして、富貴榮華の裡に生長したる人なり、故に其の世事を謝して巖穴に隱るゝや、布衣貧賤の士が之を爲すよりも爲し難し、則ち性情の相鬪うて俄に榮華を忘るゝ能はざるも、亦止むを得ざるなり、彼は未だ道に至らずと雖も、道に至らんとするの意ある者と謂ふを得べし、

【解義】〔中山公子牟〕「釋文」に、魏の公子にして、中山に封ぜられ、名は牟とあり、〔瞻子〕「釋文」に賢人なり、「淮南」には詹に作る、〔魏闕〕魏は高大なり、魏國を指すに非ず、「釋文」に司馬云ふ、闕は人君の門なり、心居乎魏闕之下とは朝廷に於ける富貴榮華の樂みを忘るゝ能はざるを謂ふなり、〔不能自勝則從〕兪樾曰く、「釋文」に云ふ、不能自勝則從にて句を絶つと、此の讀是なり、又曰く、一讀には神字に至て句を絶つと、則ち之を失す、「呂氏春秋」の審爲篇に亦此事を載せ不能自勝則縱之神無惡乎に作る、「文子」の下德篇、「淮南子」の道應篇、並に從之の二字を疊ね、從之從之に作る、則ち從神の連讀すべからざること明かなり、又曰く、「呂氏春秋」に從を縱に作る、則ち當に子用反に讀むべし、〔神無惡乎〕按ずるに、神は精神卽ち性なり、言ふは、姑く情欲の赴く所を放にして之を制せざるも、精神は則ち之を惡むなからんや、故に久くして遂に之を忘るべし、〔此之謂重傷〕兪樾曰く、重傷は猶ほ再傷の如きなり、不能自勝れば則ち己に傷つく、又强ひて之を制して縱にせしめざるは、是れ再傷なり、故に此之謂重傷と曰ふなり、「呂氏春秋」審爲篇の高誘注に曰く、重は復重の重に讀むと、

雅を引て曰く、怍は慙なり、〔是丘之得也〕按ずるに久しく其語を誦して其人を見ず、今や回に於て始めて之を見、以て平生の憾みを解くを得たり、故に是れ丘が得る所の益なりと曰うて喜ぶなり、成玄英曰く、回に仕を勸めしは豈に失言に非ずや、回に因りて返照す、故に丘之を得たりと曰ふなり、林希逸曰く、眞に友を得たるを言ふなりと、共に語氣を失するに似たり、恐らくは從ふべからず、

中山公子牟謂瞻子曰、身在江海之上、心居乎魏闕之下、奈何、瞻子曰、重生、重生則利輕、中山公子牟曰、雖知之、未能勝也、瞻子曰、不能自勝則從、神無惡乎、不能自勝而强不從者、此之謂重傷、重傷之人、無壽類矣、魏牟萬乘之公子也、其隱巖穴也、難爲於布衣之士、雖未至乎道、可謂有其意矣、

【大意】魏の公子牟が、身已に江海の濱に隱れしも、心猶榮華の樂みを忘るゝ能はざるに就きて、瞻子と問答せしことを叙し、外物たる富貴榮華を忘れ以て性眞を全くするの術を示すなり、

【通釋】中山の公子牟が瞻子に謂うて曰く、吾が身は已に江海の上に隱遁し居れども、心は尚魏闕の事を念うて、榮華の樂みを忘るゝこと能はず、如何にせば此の情欲に勝ち得べきやと問へるに、瞻子對へて曰く、榮華を戀ふの念を忘れんと欲せば、たゞ吾が生命の貴きことを知りて之を重んずべし、生命を重んずれば則ち自ら榮利の輕きを知りて、復た魏闕を戀ふこと無きに至らん、公子牟曰く、我れ已に生命の重んずべきを知ると雖も、猶自ら情欲に勝ちて榮華の念を絶つこと能はざるなりと、瞻子曰く、生命の重んずべきを知るも猶自ら情欲に勝つ能はざれば、則ち

然變容曰、善哉回之意、丘聞之、知足者、不以利自累也、審自得者失之而不懼、行修於內者、無位而不怍、丘誦之久矣、今於回而後見之、是丘之得也、

【大意】 顏回貧賤に安んじて道を樂み、仕官を願はず、孔子大に之を稱せられたることを叙す、主意は知足者云々の三句に在り、

【通釋】 孔子顏回に謂て曰く、回や、汝は家貧しく、陋巷卑小の裡に住居し、其の憂ひに堪へざるべし、何ぞ仕官して豐祿を取らざるやと、顏回對へて曰く、回は仕官することを願はざるなり、回貧なりと雖も、郭外の田五十畝あり、之を耕作して以て飦粥の資を給するに足り、又郭內の田十畝あり、之に桑麻を植ゑて絲を取り、以て衣服を爲るに足り、琴を彈き詩を歌へば、以て自ら娛むに足り、且つ夫子に學ぶ所の道は、以て自ら心を樂むに足れり、故に回は仕官するを願はざるなりと、孔子愀然として容を變じて曰く、善いかな回の心掛けは、誠に感服するに堪へたり、丘嘗て足ることを知るものは利の爲めに自ら累はされず、善く自得の樂みを審に知る者は、得喪を以て心を駭かさず、故に利を失ふも懼れず、德行の內に修まる者は、自ら尊き者あるが故に、人爵なきを以て慙とせずとの語を聞けり、丘は之を確言として久く口に誦し居りしも、未だ其人を見ざりしに、今や回に於て始めて之を見るを得、平生の憾を解くを得たり、是れ丘が得る所の益なりとて、大に喜ばれたり、

【解義】〔回來〕王引之曰く、來は句中の語助なり、嗟來桑戶乎の嗟來は猶嗟乎のごときなりと、之に據れば回來の來も語助なり、語らんと欲して先づ其名を呼ぶのみ、呼で前に來らしむるには非ず、〔足以給飦粥〕「釋文」に飦或は饘に作る、廣雅に云ふ、糜なり、「家語」に云ふ、厚粥なり、〔愀然變容〕「釋文」に云ふ愀一本欣に作る、集韻に、愀は容色變ずるなり、禮の哀公問に、愀然作色、「列子」の仲尼篇に、愀然有間、蘇軾の赤壁賦に、愀然正襟危坐、皆七小切に讀み、悄と通ず、又音「秋」とあり、〔無位而不怍〕「釋文」に爾

【通釋】曾子が衞に居りしとき、甚だ貧窮にして、縕袍の表は破れ盡くして絮露はれ、病の爲め、顏に水氣ありて膨れ、家に僕婢無くして自ら力作するが爲めに、手足は胼胝して龜の甲の如くになり、米を得る能はずして、三日も炊烟を擧げざることあり、又十年の間も新衣を製すること無し、故に冠も衣服も履も皆弊敗し、冠を正しくせんとすれば其纓絕れ、衿を捉りて衣を整へんとすれば、袖破れて肘見はれ、履に足を納るれば、踵の處は決れて無し、かゝる貧窶にして、人の堪へ難き苦境なるも、曾子は其苦を知らず、敗れ履を曳きつゝ商頌の詩を歌ふに、其の聲淸く且つ大にして、天地に滿ち、金石より出づる音樂の如く、自然の節奏に叶へり、其高尚にして道を樂み、貧富貴賤を眼中に置かざること此の如くなるが故に、天子も之を臣とするを得ず、諸侯も之を友とし交るを得ざるなり、（以上叙事以下議論）故に志を養ふの士は、形を忘れて、口體の奉の爲めに其の志を挫せず、形を養ふの士は利を忘れて、勢位の爲めに其の生を傷毀せず、此れよりも更に進みて道を致すの士は、心知を忘れ、無爲にして爲さゞるなし、

【解義】〔縕袍無表〕縕袍は綿を入れたる衣にて、賤者の服なり、無表は表の破れ盡きたることなり、始めより表なきにはあらず、〔顏色腫噲〕「釋文」に司馬云ふ、腫噲は剝錯なり、王云ふ、盈虛常ならざるの貌、郭慶藩曰く、噲疑ふらくは瘖に爲るべし、病甚しきなり、通じて殨に作ると、蓋し病甚だしく、顏に水氣ありて腫れたるなり、〔手足胼胝〕胼は「ヒヾ」胝は「アカギレ」手足の皮厚くなりて龜裂するを謂ふ、〔曳縰而歌商頌〕縰は前章縰履の縰に同じ、蹋むなり商頌は詩經に在り、殷の湯王の德を譽めたる詩篇の名なり、

孔子謂顏回曰、回來、家貧居卑、胡不仕乎、顏回曰、不願仕、回有郭外之田五十畝、足以給飦粥、郭內之田十畝、足以爲絲麻、鼓琴足以自娛、所學夫子之道者、足以自樂也、回不願仕、孔子愀

を倡へながら、假りて以て姦惡を爲し、車輿乘馬を美にして外貌を飾り、以て俗人に傲ることは、憲の耻ぢて爲すに忍びざる所なりと、此の數言は、子貢の外を務めて内を忘るゝを諷切したるにて、此章の主意の在る所なり、

【解義】〔原憲〕成玄英曰く、孔子の弟子、姓は原、名は思、字は憲なり、〔環堵之室〕解は前の庚桑楚篇に出づ、小室を謂ふなり、〔茨以生草〕「釋文」に、茨は屋を蓋ふなり、成玄英曰く、草を以て屋を蓋ふ、之を茨と謂ふなり、郭慶藩曰く、「新序」の節士篇には、生草を生蒿に作る、蒿も亦草なり、〔匡坐而弦〕「釋文」に司馬云ふ、匡は正なり、陸德明云ふ、弦は絃歌を謂ふ、〔子貢〕成玄英曰く、子貢は孔子の弟子、名は賜、言語を能くし、榮華を好む、〔華冠〕「釋文」に、華木の皮を以て冠と爲す、郭慶藩曰く、華は樗なり、上林賦に華秤楓櫪とあり、張揖云ふ、華皮以て索と爲すべし、說文に樗は木なりと、其皮を以て松脂を裹む、讀で華の若くすと、〔縰履〕「釋文」に李云ふ、縰履は履の跟無きを謂ふなり、三蒼の解詁に、躧に作り、云ふ、躡むなり、「聲類」に、或は屣に作る、通俗文に、履の跟を著けざるを屣と謂ふ、〔嘻先生何病〕成玄英曰く、嘻は笑ふ聲なり、〔子貢逡巡而有愧色〕成玄英曰く、逡巡は郤退の貌、〔希世而行〕「釋文」に、司馬云ふ、希は望なり、行ふ所常に世譽を顧みて動く、故に希世而行と曰ふ、〔仁義之慝〕「釋文」に、慝は惡なり、司馬云ふ、仁義に依託して姦惡を爲すを謂ふ、

曾子居衞、縕袍無表、顏色腫噲、手足胼胝、三日不擧火、十年不製衣、正冠而纓絕、捉衿而肘見、納履而踵決、曳縱而歌商頌、聲滿天地、若出金石、天子不得臣、諸侯不得友、故養志者忘形、養形者忘利、致道者忘心矣、

【大意】曾子の貧苦に居りながら貧苦を忘れて道を娛むを叙し、志を養ふ者は形を忘れ、形を養ふ者は利を忘れ、道を致す者は心を忘るゝを謂ふ、

財謂之貧、學而不能行、謂之病、今憲貧也、非病也、子貢逡巡而有愧色、原憲笑曰、夫希世而行、比周而友、學以爲人、敎以爲己、仁義之慝、輿馬之飾、憲不忍爲也、

【大意】 原憲の貧と子貢の富とを叙し、原憲の貧にして身性を保全するは、子貢の外を飾り外物に牽かれて、本を忘るゝに勝るゝを言ふ、

【通釋】 原憲が魯に居りし時、環堵の小室に住し、茨りたるまゝの生草にて屋根を葺き、蓬を織りて門の戸と爲しあり、完全に門を塞ぐに足らず、桑の枝を用ひて樞と爲して開閉し、而して家は二室に分ち、破甕を隔ての壁に挾みて牖と爲して、夫妻各一室に居り、褐衣を掛けて牖を塞ぎ、上の屋根より雨漏りて、下の床は常に濕ひ、見るに堪へざる程の陋居なるに、原憲は晏然として其の中に正坐して琴を彈き、心樂みて貧苦を知らざる者の如し、其の處へ同門の子貢が、大馬を車に駕し、下着は紺にして表着は素の美服を纏ひ、揚々として訪ひ來りしが、狹き陋巷なるが爲め、高大なる車を容るゝ能はず、子貢乃ち車を下りて、徒歩して住きて原憲の門に到り面會を求めたり、其家固より取次の僕も無ければ、原憲自ら華木にて製したる粗末の冠を戴き、履を躧み、藜の筇を杖きて門に出迎へて應接せり、子貢其の衰へたる狀を見て曰く、嘻先生何によりて斯く病めるぞと、原憲對へて曰く、憲嘗て財產の無きを貧と謂ひ、學を爲して其の學びたる所を行ふ能はざる者を病むと謂ふと聞きたり、今憲は見らるゝ如くの貧乏なれども、嘗て學びたることを以て性を保ち身を修め居り、學を實行する能はざる者に非ざれば、病めるには非ずと、子貢其の言の理あるに窮し、逡巡して退き、頗る愧ぢたる色あり、原憲又笑つて曰く、夫の世に媚び、人に譽められんことを望みて、心にも無きことを行ひ、或は朋黨比周して交友を結び、私利を營み、學問は己の身性を保全するが爲めにせずして、人の爲にし、人に敎ふるにも、道の爲めにせずして、自己の名利の爲めにし、口に仁

足らず、又臣の勇氣は、寇を拒ぎて戰死するにも足らず、吳國の軍已に楚都の郢に侵し來りし時、臣は難の吾身に及ばんことを畏れ、寇を避けて出て走りたるにて、忠義を致さんが爲めに大王に隨ひしに非ず、何等の功もあることなし、今大王楚國の法律を廢毀して、無功の說を見んとせらるゝは、臣は之を天下の人に聞かしむべき美事と爲す能はずと、王之を聞き、司馬子綦に謂うて曰く、屠羊說は其の地位甚だ卑賤なる者なれども、義を陳ぶること甚だ高尙なれば、之を重用して政を爲さしめんと欲す、子其れ我が爲めに說を延きて三旌の位を授けよと、屠羊說又之を辭して曰く、夫の三旌の位は、吾れ其の屠羊の肆よりも貴く、萬鍾の祿は、吾れ其の屠羊の利よりも富めるを知る、然れども吾身に爵祿を貪りて、吾君をして無功の者に爵祿を妄施するの惡名を蒙らしむべけんや、故に說は敢て三旌の位に當らず、願くは吾が多年從事せる屠羊の肆に反らんと言ひて、遂に受けざりき、

【解義】（楚昭王失國）成玄英曰く、昭王名は軫、平王の子なり、伍奢伍尙平王の誅戮に遭ひ、子胥吳に奔りて野に耕す、後吳王闔閭の世に至り、兵を請うて楚を伐ち、遂に楚を破りて郢に入り、以て父の讎を雪ぐ、其の時昭王窘窮し、棄て走りて隨に奔り、又鄭に奔る、（子綦爲我）兪樾曰く、此れ昭王自ら司馬子綦と言ふ、當に子と稱すべし、當に子綦と稱すべからず、綦の字衍文なり、王先謙曰く、綦或は當に其に作るべし、按ずるに、林希逸の本に綦を其に作る、（三旌之位）「釋文」に、三公の位なり、司馬本三珪に作りて云ふ、諸侯の三卿を謂ふ、皆珪を執る故に三珪と謂ふと、

原憲居魯、環堵之室、茨以生草、蓬戶不完、桑以爲樞、而甕牖二室、褐以爲塞、上漏下濕、匡坐而弦、子貢乘大馬、中紺而表素、軒車不容巷、往見原憲、原憲華冠縰履、杖藜而應門、子貢曰、嘻先生何病、原憲應之曰、憲聞之、無

知不足以存國、而勇不足以死寇、吳軍入郢、說畏難而避寇、非故隨大王也、今大王欲廢法毀約而見說、此非臣之所以聞天下也、王謂司馬子綦曰、屠羊說居處卑賤、而陳義甚高、子綦爲我延之以三旌之位、屠羊說曰、夫三旌之位、吾知其貴於屠羊之肆也、萬鍾之祿、吾知其富於屠羊之利也、然豈可以貪爵祿而使吾君有妄施之名乎、說不敢當、願復反吾屠羊之肆、遂不受也

【大意】　屠羊說の本分を守りて、非義の富貴を貪り外物に心を奪はれざることを叙す、

【通釋】　楚の昭王吳の爲めに侵され、國を棄てゝ出で走り、羊を屠殺するを以て業とする賤人の說なる者、亦走りて王に從へり、其の後昭王戰勝つて國に反るに及び、將に艱難中に從ひし者に賞を與へんとす、屠羊說も賞與を受くることゝなれり、屠羊說辭して受けず、曰く、大王は國を失うて出て走り、說も屠羊の業を失ひたれども、大王已に國に反りて、說も亦我が屠羊の業に反ることを得たれば、臣の爵祿は已に回復せられたり、此の上又何ぞ賞を受くるの理由あらんやと、昭王行賞掛の臣に、强ひて賞を受けしめよと命せられ、掛りの官吏說に之を强ひしかば、屠羊說對へて曰く、大王の國を失はれしは臣の罪に非ざるが故に、臣敢て其の誅に伏せず、大王の國に反られしも臣の功に非ざるが故に、臣敢て其の賞に當らずと、昭王其の貪らずして言ふことの理あるを聞き、之を謁見せしめよと命じたれは、屠羊說之を辭して曰く、楚國の法は必ず重賞大功ありて而る後に王に見ゆるを得るなり、今臣の智略は、敵を退けて國を存するに

而して粟米は辭して之を受けざりき、使者已に去り列子内に入りたり、其の妻之を望見し、胸を拊ちて歎きて曰く、妾嘗て有道者の妻子と爲れば皆安逸歡樂を受くるを得ると聞けり、而るに今此くの如きの貧窮に苦み、飢餓の爲めに容貌衰弱するのみならず、子陽君乃ち賢者を窮せしむるの過失なるを知り、先生に食を贈遺せられたるに、先生は之を辭して受けず、將に益々窮困せんとす、是れ豈妾の薄命に非ずやと、深く恨みて列子を責めたり、列子笑て之に謂て曰く、彼の子陽は、自ら我の賢なるを知るに非ざるなり、人の我を賢なりと謂ふの言を聞きて、我に粟を贈れるのみ、されば其の他日我を罪するに至るも、亦人の我を譏るに因りて直に誅戮を加へんとす、此れ我の其贈遺を受けざりし所以なりと論せり、其の後鄭の民果して難を作して子陽を殺せり、而して列子は其食を受けざりしを以て、禍に免るゝを得たり、

【解義】〔鄭子陽〕「釋文」に子陽は鄭の相なり、〔君過而遺先生食〕張湛が列子の注に曰く、君賢人を用ひざるを以て過と爲すと、〔民果作難而殺子陽〕「釋文」に、子陽嚴酷、罪ある者は赦すなし、舍人弓を折る、子陽の怒り責めんことを畏れ、國人の猘狗を逐ふに因りて子陽を殺すと、兪樾曰く、子陽の事、「呂覽」の適威篇、「淮南」の氾論訓に見ゆ、史記鄭世家に至ては、則ち云ふ、繻公二十五年鄭公其相子陽を殺す、二十七年、子陽の黨共に繻公駘を弑すと、又諸書と同じからずと、

楚昭王失國、屠羊說走而從於昭王、昭王反國、將賞從者、及屠羊說、屠羊說曰、大王失國、說失屠羊、大王反國、說亦反屠羊、臣之爵祿已復矣、又何賞之有、王曰、強之、屠羊說曰、大王失國、非臣之罪、故不敢伏其誅、大王反國、非臣之功、故不敢當其賞、王曰、見之、屠羊說曰、楚國之法、必有重賞大功、而後得見、今臣之

なり、〔豈特隨侯之重哉〕兪樾曰く、隨侯の下、當に珠字あるべし、若し珠字無ければ、文義足らず、「呂氏春秋」貴生篇には夫生豈特隨侯珠之重也哉に作る、當に據りて補ふべし、

子列子窮、容貌有飢色、客有言之於鄭子陽者曰、列禦寇蓋有道之士也、居君之國而窮、君無乃爲不好士乎、鄭子陽即令官遺之粟、子列子見使者、再拜而辭、使者去、子列子入、其妻望之而拊心曰、妾聞、爲有道者之妻子、皆得佚樂、今有飢色、君過而遺先生食、先生不受、豈不命邪、子列子笑謂之曰、君非自知我也、以人之言而遺我粟、至其罪我也、又且以人之言、此吾所以不受也、其卒民果作難而殺子陽、

【大意】鄭の相子陽、列子の賢にして窮苦せることを客に聞きて粟を贈りしに、列子辭して受けず、其妻の恨み責むるに因りて、子陽は自ら我賢を知るに非ざれば、亦將に人言に因りて我を罪せんとす、故に受けずと論ず、亦賢者は生を重んじ物を輕んずることを說く、

【通釋】子列子が貧窮の極、食物も十分ならざるが爲め、容貌衰弱して、飢ゑたる氣色をなし居れり、客之を見て、列子の窮狀を鄭の宰相子陽に言うて曰く、列禦寇は蓋し有道の賢士なり、此の如き賢士が君の國内に住して貧窮し、食に乏しきの極に至るは、君が賢士を好まざる故には非ざるかと、子陽之を聞き、即時に倉廩を掌る官吏に命じ、列子に粟米を贈らしめたり、列子使者に接見し、再拜して其の厚意を謝し、

きて之を訪求したるも、顏闔は已に何地にか立去り、卒に尋ね得ずして已みたり、（以上叙事以下議論）此の如き事實なるが故に、顏闔の如き者は、たゞ富貴を慕はざるのみならず、眞に富貴を惡む者なり、故に語に曰く、道の眞髓は、たゞ以て吾身を治め、其の殘餘を以て國家を治め、又其の用ふるに足らざる棄擲すべきの土苴を以て天下を治むと、此に由りて之を觀れば、帝王の天下國家を平治する功業は、聖人の餘事なり、天下國家を治平するが爲めに勞苦するは、身を完くし生を養ふ所以に非ざるなり、然るに今の世俗の君子は、多く身を危くし、生を棄てゝ富貴利祿などの外物に殉ずるは、是れ輕重大小を失へるの甚しき者にて、豈悲むべきことならずや、凡べて聖人の動作は、必ず其の心の至る所、卽ち目的とする所と、其の爲す所とを察するが故に、輕重を失ふことなし、今且つ此に人あり、隨侯の寶珠を以て、千仭の遠きに居る雀を彈擊すれば、世人は必ず之を笑はん、之を笑ふは何の故ぞや、其の用ふる所は貴重なる寶珠にして、求むる所は極めて輕微なる一小雀に過ぎざるを以てなり、天より授けられたる生の貴重なることは、豈たゞ隨侯の珠の貴重なるのみならんや、而るに之を輕微なる外物の爲めに損傷する者多きに、世人の之を笑ふを知らざるは何ぞや、亦怪むべきなり、

【解義】〔魯君〕「釋文」に、一本魯侯に作る、李云ふ、哀公なり、〔顏闔〕成玄英曰く、姓は顏、名は闔、魯人にして隱者なり、〔苴布之衣〕成玄英曰く、苴布は子麻の布、卽ち粗惡の布なり、〔恐聽者謬而遺使者罪〕兪樾曰く、上の者の字は衍文、恐聽謬而遺使者罪は其の誤聽を以て罪を得るゝを恐るゝなり、聽は卽ち使者之を聽く聽者一人使者一人に非ざるなり、「呂氏春秋」の貴生篇、正に恐聽繆而遺使者罪に作る、〔其緖餘以爲國家〕「釋文」に司馬及び李並に云ふ、緖は殘なり、緖餘は殘餘を謂ふ、〔其土苴以治天下〕「釋文」に司馬云ふ、土苴は糞草の如きなり、李云ふ、土苴は糟粕なり、〔必察其所以之與所以爲〕「釋文」に王云ふ、所以之は德の加ふる所の方を謂ひ、所以爲は物を待する所以を謂ふなり、高誘は呂覽に注して曰く、之は至なり、〔隨侯之珠〕成玄英曰く、隨國は濮水に近し、濮水寶珠を出す、卽ち是れ靈蛇の銜みて以て恩を報ずる所、隨侯の得る者、故に之を隨侯の珠と謂ふ

者、眞惡富貴也、故曰、道之眞以治身、其緒餘以爲國家、其土苴以治天下、由此觀之、帝王之功、聖人之餘事也、非所以完身養生也、今世俗之君子、多危身棄生以殉物、豈不悲哉、凡聖人之動作也、必察其所以之與其所以爲、今且有人於此、以隨侯之珠、彈千仞之雀、世必笑之、是何也、則其所用者重、而所要者輕也、夫生者豈特隨侯之重哉、

【大意】魯君顏闔を聘用せんとし、使者を遣りて幣物を贈らしめしに、顏闔は仕ふるを欲せず、因て使者を欺きて還らしめ、其再び來る間に逃れ去りたることを叙し、顏闔は身を完くし生を重んずるが爲めに、富貴を惡むこと此くの如し、輕重する所を知る者と謂ふべし、今の世俗の君子の之に反し、身を危くし生を棄てゝ富貴に殉するは、是れ輕重を知らず、實に悲むべきを論ず、

【通釋】魯の哀公が、顏闔は道を得たる人なりと聞き、之を聘用せんと欲し、使者を遣りて幣物を贈り、先づ其の意を通ぜしめたり、顏闔は家極めて貧しく、疏陋の閭巷に居り、粗惡の布衣を著け、身自ら牛に食せしめゐたる所へ、魯君の使者來りたれは、顏闔自ら之に應接したり、使者は顏闔を其僕かと思ひ、問うて曰く、此は顏闔の家なるか、顏闔對へて曰く、然り、此は顏闔の家なりと、使者因て齎し來りし幣物を出だし授けんとしたれば、顏闔之を受くるを欲せず、使者を欺いて曰く、我の如き卑賤の者に、魯君よりかゝる鄭重なる幣物を贈らるゝ筈なし、恐らくは使者の聽き謬りならん、我に此の幣物を授與せらるれば、使者の過失となりて罪せられん、一應還りて之を審にし確かむるに若かずと、使者之を信じ、還りて之を聽き質したるに、矢張り前の顏闔に相違なければ、再ひ往

み取りて、天下を掌握せんとせらるゝや如何と、昭信侯對へて曰く、寡人は臂を斬られて此銘を捉み、天下を取ることを爲さずと、子華子曰く、君の言ふ所甚だ善し、君が臂を失うて天下を取ることを爲さゞるを以て觀れば、是れ兩臂は天下よりも貴重なるなり、我が一身は更に兩臂よりも重く、韓はたゞ天下の一國にして、其の天下より輕きこと亦甚だ遠し、而して今王が魏と爭ふ所の地は境上の小地なれば、其の韓よりも輕きこと又遠し、君は兩臂を以て天下よりも重くと爲しながら、何ぞ身を愁へしめ生を傷めて、此の輕微の地を得ざらんことを憂へらるゝやと、昭信侯之を聞き、翻然として悟り、歎じて曰く、善い哉言や、此れ迄寡人を敎戒せし者多けれども、未だ甞て子の如く切實なる者を聞きしこと無しと、遂に地を爭ふことを止めたり、子華子は實に物の輕重を知る者と謂ふべし、

【解義】〔子華子〕「釋文」に司馬云ふ、魏人なり、兪樾曰く、「呂覽」の貴生篇に、子華子曰、全レ生爲レ上、虧レ生次レ之、死次レ之、迫生爲レ下と、又誣徒篇に、子華子曰王者樂二其所一以王、亡者樂二其所一以亡」と、「高注」竝に云ふ、子華子は古の體道の人と、知度審爲の兩篇の注も同じ、〔昭信侯〕「釋文」に司馬云ふ、韓侯なり、兪樾曰く、韓に昭侯あり信王あるも、昭信侯無し、〔今使天下書銘於君之前〕成玄英曰く、銘は書記なり、〔君固愁身傷生以憂戚不得也〕按ずるに、固は胡と通用す、胡は何なり、君何すれぞ身を愁へ生を傷め以て此地を得る能はざるを憂戚すると言ふなり、

魯君聞二顏闔得レ道之人一也、使三人以レ幣先二焉、顏闔守二陋閭一、苴布之衣而自飯レ牛、魯君之使者至、顏闔自對レ之、使者曰、此顏闔之家與、顏闔對曰、此闔之家也、使者致レ幣、顏闔曰、恐聽者謬而遺二使者罪一、不レ若レ審レ之、使者還反審レ之、復來求レ之、則不レ得已、故若二顏闔一

とは宮中を逃れ出でゝ山中に穴居するなり、〔援綏〕成玄英曰く、援は引なり、綏は車上の繩なりと、車上より垂れ、車に登るとき、顚墜せざる爲めに、引きて身を支ふる繩なり、

韓魏相與爭侵地、子華子見昭僖侯、昭僖侯有憂色、子華子曰、今使天下書銘於君之前、書之言曰、左手攫之、則右手廢之右手攫之、則左手廢、然而攫之者、必有天下、君能攫之乎、昭僖公曰、寡人不攫也、子華子曰、甚善、自是觀之、兩臂重於天下也、身亦重於兩臂、韓之輕於天下、亦遠矣、今之所爭者、其輕於韓又遠、君固愁身傷生以憂戚不得也、昭僖公曰、善哉、教寡人者衆矣、未嘗得聞此言也、子華子可謂知輕重矣、

【大意】子華子が、天下を取れば手を斬らるゝの喩を以て昭僖公に問ひ、以て公が魏と疆上の地を爭ふの、輕重を失するの愚を感悟せしめしことを叙し、子華子は輕重を知る賢者なるを論賛す、

【通釋】韓と魏とは相隣接したる國にて、互に其の境上を爭ひ侵して相戰ひ、勝敗未だ決せず、其時子華子と云ふ賢人が韓君の昭僖侯に謁見したるに、昭信侯戰の勝敗如何を惕れて、頗る心配の氣色ありたり、子華子曰く、今若し天下の諸侯をして、君の面前に於て契約書を書かしめ、其書する所の辭に、左の手にて此の銘書を捉み取らば、右の手は斬り去られん、右の手にて此の銘書を捉み取らば、左の手は斬り去られん、然れども銘書を捉み取りたる者は、必ず天下を其の所有と爲すを得と、君は臂を失ふも猶能く之を捉

乎君乎、獨不可以舍我乎、王子捜非惡爲君也、惡爲君之患也、若王子捜者、可謂不以國傷生矣、此固越人之所欲得爲君也、

【大意】越の王子捜が君位に即くことを避けて、山穴に匿れ、强ひられて已むを得ず、車に登るとき、天を仰ぎて歎息したることを叙し、其の國を以て生を傷せず、輕重本末を知るを稱むるなり、

【通釋】越の國は内亂多く、三世の君皆其下の爲めに弑せられたり、繼いで立つべき王子捜は、亦弑害に遭はんことを懼れ、逃れて山中の丹穴に匿れたれば、越國には君主なきことゝなれり、國人王子捜を尋ね求むれども、其の在る所を得ず、遂に丹穴の中に匿れ居ることを知りて、往きて之を迎へしも、王子捜穴を出るを肯せず、越人乃ち艾を焚やし、烟を穴中に送りて之を薰べ出し、强ひて王の車に乘らしむ、王子捜遂に已むを得ず、綏を引きて車に登らんとし、天を仰ぎ長歎して呼で曰く、君か君か、我も遂に亦君たらざるを得ざるか、獨り我のみを舍てゝ君となることを免れしむる能はざるかと、以上叙事王子捜は斯く逃匿し長歎して、國君と爲ることを避くるは、敢て君と爲ることを嫌ひ惡むには非で、君と爲りて亦前代の王の如く弑害に遭ふことを嫌ひ惡むなり、王子捜の如き者は、實に國君たるの富貴の爲めに、其の生命を傷害せざる者と謂ふべし、此の輕重を辨じ本末を知る所が、乃ち越人の如何にもして戴て君と爲さんと欲する所以なり、

【解義】〔越人三世弑其君王子捜患之〕「釋文」に李云ふ、捜は王子の名なり、兪樾曰く、「釋文」に云ふ、捜を「淮南子」に翳に作ると、然れども翳の前に三世君を弑するの事なし、史記越世家の索隱に、捜を以て翳の子無顓と爲す、「竹書紀年」に據るに、翳其子の弑する所と爲る、越人其子を殺して無余を立つ、無余又弑せられて無顓を立つ、是れ無顓以前の三君皆終りを善くせず、則ち王子捜は是れ無顓の異名たること疑ひなし、「淮南子」は蓋し傳聞の誤りならん、當に「索隱」に據りて訂正すべしと、〔丹穴〕「釋文」に爾雅を引て曰く、南に日を戴くを丹穴と爲すと、逃乎丹穴

の求むる所は、皮帛犬馬珠玉の類に非ずして、大王の有する土地を取らんと欲するなり、大王乃ち邠の父老に語げて曰く、此の土地を狄人に奪はれざらんとすれば、之と戰はざるべからず、然れども人の兄と居りて其の弟を戰死せしめ、人の父と居りて其の子を戰死せしむることは、吾れ之を爲すに忍びず、汝等皆勉めて此地に留まり居れ、吾の臣と爲るも狄人の臣と爲るも、何も異なること無からん、且吾れ又聞けることあり、用ひて人を養ふ所の物卽ち土地の爲めに、養ふ所の人を傷害すべからずと、故に吾寧ろ此を避けて去らん、狄人と戰ふを欲せずと、因て策を杖つき、飄然として邠の地を立去りたり、是に於て邠の民皆大王の仁を慕ひ、相引き連れて從ひ往き、遂に岐山の下に止まりて國邑を成せり、夫の大王亶父は外物を輕んじて、能く生命を尊べる者と謂ふべし、能く生命を尊ぶ者は、其の身人君たる富貴の地位に在るも、用て人を養ふ所の土地の爲めに人身を傷害せず、又貧賤の地位に在るも、貧賤を免れんとして、利を得るが爲めに、危難を犯して其身を毀害することなし、然るに今世の人は、高官尊位に居る者は、皆之を失はんことを重かり、貧者は利を見ては之を得んと欲して、其に爲さゞる所無く、爲めに罪戾に罹り、刑辟に觸れ、危難に陷りて、輕く其身を亡ぼすは、是れ輕重本末を知らざるの甚だしき者にて、豈惑へるに非ずや、

【解義】〔大王亶父居邠〕大王は王季の父にして文王の祖なり、邠は音「ヒン」地名、〔狄人〕獫狁なり、邠の隣地に住する異人種、〔不以所用養害所養〕「釋文」に曰く、地は以て人を養ふ所なり、今爭うて以て人を殺せば、是れ地を以て人を害するなり、人は地に養はる、故に地の故を以て人を害せざるなり、○此章の事、又「呂氏春秋」の審爲篇、「淮南子」の道應訓に載せ、此と略同文なり、又「詩」及び「孟子」に見ゆ、

越人三世弑其君、王子搜患之、逃乎丹穴、而越國無君、求王子搜不得、從之丹穴、王子搜不肯出、越人薰之以艾、乘以王輿、王子搜援綏登車、仰天而呼曰、君

成玄英曰く、古人は物を荷するに、多く頭を用て戴く、如今高麗に猶此風ありと、「入於海」「釋文」に司馬云ふ、凡そ入と言ふは、皆其の洲島の上と其の曲隈中とに居るなり、

大王亶父居邠、狄人攻之、事之以皮帛而不受、事之以犬馬而不受、事之以珠玉而不受、狄人之所求者土地也、大王亶父曰、與人之兄居而殺其弟、與人之父居而殺其子、吾不忍也、子皆勉居矣、爲吾臣與爲狄人臣奚以異、且吾聞之、不以所用養害所養、因杖筴而去之、民相連而從之、遂成國岐山之下、夫大王亶父可謂能尊生矣、能尊生者、雖富貴不以養傷身、雖貧賤不以利累形、今世之人、居高官尊爵者、皆重失之、見利輕亡其身、豈不惑哉、

【大意】　大王亶父が狄人に攻められ、人民を傷害せんことを恐れて、與に戰はず、邠の地を棄て去りしことを叙し、大王は能く物を輕んじて生命を重んぜるに、今世の人は、官位利欲の爲めに身を亡ぼし、輕重本末を忘るゝの惑ひなることを論ず、

【通釋】　大王亶父が邠に居りしとき、其の地狄人の地と隣接せしかば、狄人攻め來れり、大王は與に戰ふを欲せず、之に獸皮と織物とを贈りて、和を講ぜんとせしも、狄人受取らず、大王更に畜ふ所の犬馬を贈りて和を講ぜんとせしも、狄人又之を受取らず、大王更に貴重なる珠玉を贈りて其歡心を求め、和を講ぜんとせしも、尙受取らず、益攻擊を續けたり、蓋し狄人

我は宇宙の間に處り、冬日は獸皮の裘を着て暖を取り、夏日は葛絺の衣を着て涼を取り、春は耕作に從事して、十分に身體を勞働し、以て健康を保ち、秋は禾實の收穫ありて、身體を休養して口腹を滿たすに足り、日々日出づれば己も出でゝ勞働し、日入れば己も入りて休息し、四時晝夜、其宜きに隨うて天地の間に逍遙し、心意自得せり、吾復何ぞ天下の君と爲ることを用ひんや、悲いかな子が我の志を知らずして、我に天下を讓らんとせしことよと、遂に受けずして、去て深山に入り、其の所在を晦ませり、舜又天下を以て其の友石戸之農に讓りたり、石戸之農曰く、綣々と力を用ひて勤苦する君の人と爲りは、是れ葆力の士なり、到底も拙者如きにては代はりて天下を治むるに足らずと、斯く自ら謙遜したるは、舜の德を以て未だ十分ならずと爲せばなり、是に於て夫の石戸之農は家財を背に負ひ、妻は頭に戴き、子を引き連れて本土を去り、海中の島に移りて、終身復反らざりき、

【解義】〔舜以天下讓善卷〕「釋文」に李云ふ、善卷姓は善、名は卷と、「呂覽」下賢篇には善綣に作る、曰く、堯不以帝見善綣、北面而問焉、堯天子也、善綣布衣也、何故禮之若此其甚也、善綣得道之士也と、羅勉道曰く、今の常德府武陵縣南蒼山に善卷壇あり、宋の政和中、號を遯世高蹈先生と賜ひ、郡守李燾壇の記を爲る、壇の近きに仍ほ其墳あり、〔夏日衣葛絺〕「詩」の周南葛覃に葛之覃兮、施于中谷、維葉莫莫、是刈是濩、爲絺爲綌、服之無斁、毛傳に精なるを絺と曰ひ、麤なるを綌と曰ふとあり、葛絺は葛の細き纖緯にて織りたる衣なり、〔吾何以天下爲哉〕以は用なり、爲は語助、〔石戸之農〕「釋文」に戸一本亦后に作る、李云ふ、石戸は地名、名は農、農人なり、〔捲捲乎〕「釋文」に、力を用ふる貌、〔后之爲人〕后は君なり舊解多く舜を指す、王先謙言く、戸亦后に作る、此の后は乃ち自稱、言ふ我は捲捲と勤苦す、是れ葆力の士なり、未だ天下を治むるに暇あらずと、王說に從へば、姓は石、名は后ならん、李頤の石戸を以て地名と爲すは、從ふべからず、然れども之農の二字尚ほ解を費すを免れず、按ずるに石戸は姓にして、農は名にして之は語助ならん、蓋し文例「左傳」の介之推、燭之武、「孟子」の庾公之斯尹公之他と同じ、〔夫負妻戴〕妻戴は本邦八瀨大原諸村の婦女の物を頭に戴くの俗の如し、

に子州支伯は此を以て自己の性命に易へざること此の如し、是れ道を懷く者の、流俗の人の行ひに異なる所なり、

【解義】〔堯以天下讓許由〕堯許の事、詳に逍遙遊篇に見ゆ、〔子州支父〕「釋文」に、父音甫、支父は字、卽ち支伯なり、成玄英曰く、懷道の人、隱者なり、〔猶之可也〕之は句中の語詞なり、少しく語を緩くす、〔幽憂之病〕「釋文」に王云ふ、深固なるを謂ふなりと、或は曰く、眞性の毀傷を謂ふ、或は幽鬱憂悶の病と爲すは誤りなりと、〔不以害其生〕生は性なり、成玄英の生涯と爲すは、恐らくは非なり、〔唯無以天下爲者可以託天下也〕爲は語助、此二句は、老子の貴以身爲天下者、則可以寄天下、愛以身爲天下者、乃可以託天下と曰へると同義なり、

舜以天下讓善卷、善卷曰、余立於宇宙之中、冬日衣皮毛、夏日衣葛絺、春耕種、形足以勞動、秋收斂、身足以休食、日出而作、日入而息、逍遙於天地之間、而心意自得、吾何以天下爲哉、悲夫子之不知余也、遂不受、於是去而入深山、莫知其處、舜以天下讓其友石戶之農、石戶之農曰、捲捲乎后之爲人、葆力之士也、以舜之德爲未至也、於是夫負妻戴、攜子以入於海、終身不反也、

【大意】舜が天下を善卷及び、石戶之農に讓り、二人皆受けずして逃れ、一は山に入り一は海に入りたることを敍し、有道の士は境遇に安んじ、貧賤に居ると雖も、外物の爲めに形を累し生を損せざることを示すなり、

【通釋】舜が天下を以て善卷に讓りたり、善卷曰く、

に眩惑し、物に役せられて返らず、其性命を毀損するを戒む、故に讓王を以て篇に名づく、

堯以天下讓許由、許由不受、又讓於子州支父、子州支父曰、以我爲天子、猶之可也、雖然我適有幽憂之病、方且治之、未暇治天下也、夫天下至重也、而不以害其生、又況他物乎、唯無以天下爲者、可以託天下也、舜讓天下於子州支伯、子州支伯曰、予適有幽憂之病、方且治之、未暇治天下也、故天下大器也、而不以易生、此有道者之所以異乎俗者也、

【大意】　許由支伯が堯舜の天下を讓るを受けざりしことを叙して之を論じ、其の天下を輕んじて生を重んずるを稱す、

【通釋】　堯天下を以て許由に讓らんとしたるに、許由受けず、堯又之を子州支父に讓らんとす、子州支父曰く我を以て、天子と爲すは猶ほ可ならんも、我は適に深固なる病あり、之を治療して性命を全くせんとするの際なれば、未だ天下を治むるに暇あらずと、天下は至重なる者なれば、之を受くれば尊貴此上なきも、許由も子州支父も、天下を治むるが爲めに自己の性命を損傷すべからずとして之を辭したり、天下の富天子の尊すら辭して受けざれば、況や其他の事物に於て、何ぞ意に介せんや、然れども人民の方より言へば、唯能く天下の至重なるを忘れ、天下の爲めに性命を損傷するを欲せざる許由子州支父の如き者にして、始めて以て天下を委託して治めしむべき人なるなり、舜が天下を子州支伯に讓らんとしたるに、子州支伯曰く、予は適に眞性に病ありて、之を治療して性命を全くせんとする際なれば、未だ天下を治むるに暇あらずと、天下に君たる帝王の位は重大の器なる

迎送し、舍の主人自ら席を執りて座せしめ、其の妻爲めに巾櫛を捧げなどし、同宿の者も席を避けて子居に讓り、竈の前にて煬まり居たる者も、避けて子居に讓りたるに、老子の所より反り來りし時は、子居の矜驕尊嚴の容色全く改まりて宛然平凡人に見ゆるを以て、人皆其の敬重すべきを見ず、同宿の者之と席を爭ふに至りたり、

【解義】〔陽子居南之沛〕成玄英曰く、姓は楊、名は朱、字は子居、之は往なり、列子黃帝篇には、陽子居を楊朱に作る、〔進盥漱巾櫛〕按ずるに、爾雅釋名に、進は引なり、引て進むるなり、成玄英曰く、盥は洒ふなり、櫛は梳るなり、〔而睢睢盱盱〕成玄英曰く、而は汝なり、郭象曰く、睢睢盱盱は跋扈の貌、〔大白若辱盛德若不足〕二句道德經に出づ、〔蹴然變容〕蹴然は慚悚の貌、〔舍者迎將〕舍者は旅舍に同宿するの人なり、將は送なり、〔家公執席〕家公は主人公乃ち旅舍の主人なり、〔煬者避席〕煬は火を燃すなり、

名言

巵言日出、和以天倪、因以曼衍、所以窮年、

親父不爲其子媒、親父譽之、不若非其父者也、

言無言、終身言未嘗不言、終身不言、未嘗不言、

受才乎大本、復靈以生、

太白若辱、盛德若不足、

讓王第二十八

此篇及び以下盜跖說劍漁父の四篇、蘇軾以て莊子の作る所に非ずと爲し、後人此に從ふ者多し、然れども南華一書必ずしも盡く莊周の筆に非ず、其徒の手に成る者多し、獨り此の四篇のみならざるなり、唯外篇雜篇は皆篇首の二三字を摘取して篇名と爲せるに、此四篇のみは其例に由らず、別に篇名を作りたるは怪むべしと爲す、蓋し此四篇は或る一人の手に成りたる者なるべく、其の作者は固より道家の徒たるは明かなれども、未だ其の蘊奧を極めたる者には非ざるべし、其の說く所の膚淺にして、他の諸篇と同じからざるを見て之を知るべし、○此の篇王侯の位を輕んじて之を辭し、以て自ら其の性命を保全する者を歷敍し、以て人の名利

不問、是以不敢、今問矣、請問其故、老子曰、而睢睢盱盱、而誰與居、太白若辱、正德若不足、陽子居蹵然變容曰、敬聞命矣、其往也、舍者迎將、其家公執席、妻執巾櫛、舍者避席、煬者避竈、其反也、舍者與之爭席矣、

【大意】外飾を務め、自己の是非を執て相下らざる者は、道と遠く、必ず和光同塵、外足らざるが如くにして、乃ち道に適くべきを謂ふ、

【通釋】陽子居が老聃に見えんとして、南の方沛に往きしに、たま〳〵老聃は西の方秦に遊びたり、子居乃ち中途に追付きて之を見んと思ひ、梁の地に至りて、始めて老子に遇へり、因て與に同行したるに、老子中途にて天を仰ぎて歎息して曰く、我始めは汝を以て敎ふるに足る者と思ひたれども、今の樣子にては敎ふるに足らざる者と認めたりと、子居之を聞き、默して答へざりしが、旣にして旅舍に着きたれば、盥水等を取寄せ、手を洗ひ口を漱ぎ、巾にて顏を拭ひ、頭髮を梳き上げ、十分身を濡めて老子の室に至り、戶外にて履を脫ぎ、恐る〳〵膝行して進みて曰く、今日途中にての敎言に就き、其の時に請ひ問はんと欲したれども、夫子御步行中にて其の閒無かりしを以て、敢て問はず、默して過ぎしが、今は旅舍にて其の閒あれば、進み謁したり、未に如何なる過失あるが爲めに敎ふるに足らざるや、其の故を請ひ問ふと、老子對へて曰く、汝は睢々盱々として威勢を盛んにし、自ら矜驕して他に燿かすの色あり、斯くては道に志す人は、皆汝を避けて交らざらんとす、汝は誰と共に此の世に居らんとするや、眞の淸白なる者は反て汙辱なるが如く、盛德ある至人は猶ほ足らざる所ある者の如し、汝の如く自ら滿ちて得意の色あるは、卽ち德の毀損せられたる明證なり、故に敎ふるに足らずと歎息したるなりと、是に於て楊子居蹴然として慚ぢて容を改め、謹で敎命を聞きたりと曰うて退きたり、子居の初め沛に往く時には、旅舍中の人々、尊敬して常

に於てをや、吾れ何ぞ自ら主たるを得んや、彼の形來れば則ち我れ之と倶に來り、彼れ往けば則ち我れ之と倶に往き、彼れ逍遙すれば則ち我れ又之と逍遙し、我は吾が意思なく、一に彼に從うて動き、無爲にして浮遊するのみ、斯く無爲逍遙する者なるに、子は又何を以て我に其の故を問ふことあるや、子も亦かゝる無益の質問を止めて、我と與に逍遙すべきのみ、

【解義】〔衆罔兩問於景〕齊物論篇に罔兩問景章あり、此章の前半は字句も多くは同く、主意も亦同じ、參考すべし、罔兩は景の外の淡き景なり、故に景の又景として相問答するなり、「釋文」に云ふ、景一本或は影に作ると、盧文弨曰く、影字は陶宏景の撰る作に係る、古字に非ず、〔若向也俯〕向也を齊物論篇には曩に作る、同義也、成玄英曰く、若は汝なり、俯は頭を低るゝなり、〔向也括〕成玄英曰く、括は髮を束ぬるなり、〔搜搜也奚稍問也〕「釋文」に云ふ、搜字一本又叟に作ると、呂吉甫曰く、影外の微陰一に非ず、故に叟叟と曰ふ、羅勉道曰く、叟は老人の稱、稍は略なり、罔兩と影とは、叟と叟との如し、二叟相逢うて世に住する能く幾時ある、略稍相問ふに過ぎざるのみ、汝何ぞ必ずしも問はんや、王闓運曰く、搜搜は騷々なり、稍は當に屑と爲すべし、今王說を取る、〔予蜩甲也蛇蛻也〕成玄英曰く、蜩甲は蟬の殼なり、蛇蛻は蛇の蛻皮なり、按ずるに、二の也字、共に邪に通ず、〔火與日吾屯也〕「文選」謝靈運游南亭詩の注に司馬を引て曰く、屯は聚なり、火日明かにして影見ゆ、故に吾聚ると曰ひ、陰闇なれば則ち影見えず、故に吾代ると曰ふ夜代るとは、休息を得しむるを謂ふなり、〔强陽〕「成疏」に强陽は運動の貌と王闓運曰く、强陽は徜徉なりと、徜徉は卽ち逍遙なりと、

陽子居南之沛、老聃遊於秦、邀於郊、至於梁而遇老子、老子中道仰天而歎曰、始以汝爲可敎、今不可也、陽子居不答、至舍、進盥漱巾櫛、脫屨戶外、膝行而前曰、向者弟子欲請夫子、夫子行

盈蝕を推知すべし、〔地有人據〕人據は人物の依據して居住往來するを謂ふ、以て山川地脉を考察すべし、

衆罔兩問於景曰、若向也俯、而今也仰、向也括、而今也被髮、向也坐、而今也起、向也行、而今也止、何也、景曰、搜搜也、奚稍問也、予有而不知其所以、予蜩甲也、蛇蛻也、似之而非也、火與日吾屯也、陰與夜吾代也、彼所以有待邪、而況乎以有待者乎、彼來則我與之來、彼往則我與之往、彼强陽則我與之强陽、强陽者又何以有問乎、

【大意】罔兩と景との問答を設け、人は道の化によりて生ずる者なれば、景の形に從うて來往座起するが如く、自己の意思を棄て、自然に從ひて無爲逍遙すべきを謂ふなり、

【通釋】衆多の罔兩が影に問うて曰く、汝曩には頭を低れ居りしに、今は頭を擧げ、曩には髮を束ね居りしに、今は解きて髮を被れり、曩には座せしに、今は起てり、曩には步行せしに、今は止まれり、斯く屢〻變化して一定せる操守なく、自ら主たる能はざるは何の故ぞと、景曰く、汝等搜々と騷がしく、言立てゝ、何ぞ些細の事を問ふや、我は見るべきの形あれども、何故に此の景なる我あるやを知らざる也、我は實體なき者なれば、蟬の殼や蛇の蛻皮と同じきかと云ふに、蜩甲や蛇蛻は、其の中は空虛なれども、猶外皮の實形あれば、我と少しく似たるのみにて、又我の全く空なるとは同じからず、火光又は日光の物を照すあれば、吾れ聚りて出て來れども、天陰るか又は暗夜には、吾は之と入り代り去りて休息するなり、然らば則ち、彼の形は、吾の待ちて生ずる所にあらずや、而るを況や吾が待て生ずる所の形も、亦火と日とを待つ者なる

なり、主意は後節に在り、此章も子游の年々進化して上達すること、孔子の六十にして六十化すると似たるを以て、之を類記し、前章曾子の再化と同じからず、眞に道に進む者の變化の終に大妙測るべからざるに至るを示すなり、

【通釋】人が世に生るゝも、無爲なれば則ち生あるを知らず、死あるを知らざるなり、生れて人爲の私あれば、乃ち自ら其の生を粧うて死あり、是れ有爲は實に死の自る所なり、之に勸むるに公平にして私無く、其の身に私せずして之を外にするに至るを以てするは、正に死は有爲よりして來る、而して人の生るゝは自然の陽氣に由りて生れて無爲なるよりして來るを以てなり、然れども此の勸むる所の者、果して是なるか、果して是なりとせば、則ち人は但當に天に任せて逍遙遊し、思ふことも無く爲すことも無かるべきなり、又何ぞ好惡是非を分ち生死を區別して以て適する所あり適せざる所ありと爲さんや、此れ往くとして妙ならざる無くして、大妙なる所以なり、天は歷數に由り以て日月星辰の運行を推知するを得べく、地は人の處る所の方域に據りて以て山川地脈を考究するを得べきも、何が故に歷數ありや、人據あるや、其の然る所以に至りては則ち何に於て之を求めて知るべきや茫々冥々として總べて測るべからず、之を求むるに流行して息まず、終る所を知ることなし、終り無ければ則ち命なしと謂ふべからざるか、循環して端なく、始まる所を知らざれば、則ち命ありと謂ふべからざるか耳目は聲色に應じて働き、心智は物事に應じて働きて、相互に應ずるの影響より速かなるを以て推せば、豈其れ鬼神なからんや、必らず不可思議の主宰ありて然るなり、然れども亦時によりては、睡眠中の如き、眼耳心智ありと雖も、其の靈動を失ふことありて、一切相應せず、豈に其れ鬼神あるか、其の測られざること此くの如し、人如何ぞ是非好惡に拘はり、外物に懸りて解けざるや、宜しく自然の推移に任かして無爲なるべきなり、

【解義】此一節は訛誤脫衍ある者の如く、極めて讀み難く解し難く、郭象以下古來諸家の注、皆明解なし今姑く宣穎の說に從つて解釋すること左の如し、

〔有自也〕郭象姑く、自は由なり、〔天有歷數〕歷數は星曆度數を謂ふ、之ありて以て四時の推移、日月の

彼我を一にするのみならず、心神凝定して物と同じきに至り、五年にして、道の自ら來り集るに至り、六年にして、唯來り集るのみならず、鬼神入り舍りて、造化を吾が胸中に納めたり、七年にして、其の德大成して天と合し、造化の無爲にして爲さゞる所なきと同じきに至り、八年にして、人間の視息するの生たり、形散し體亡ぶるの死たるを知らず、道の中に浮遊して、死生の爲めに變ぜず、九年にして、終に玄妙至極の處に至れり、初めの野と從とは外貌の變進に過ぎざるも、次第に進みて內に及び、終に道と同一にして玄妙の極に至る、是れ皆身心を以て驗證すべく、言語を以て傳ふべからざるなり、

【解義】〔顏成子游謂東郭子綦〕顏成子游已に齊物論篇に出づ、子綦の弟子なり、東郭子綦亦同篇の南郭子綦に同じ、其の居る所を以て之を稱するなり、〔一年而野〕成玄英曰く、野は質樸なり、按ずるに、馬蹄篇に、同乎無欲、是謂素樸、素樸而民性得矣と、是れなり、〔六年而鬼入〕德充符篇に、夫徇耳目內通、而外於心知、鬼神將來舍、而況人乎とあり、鬼入は卽ち鬼神來舍なり、

生有爲死也、勸公以其死也有自也、而生陽也、無自也、而果然乎、惡乎其所適、惡乎其所不適、天有歷數、地有人據、吾惡乎求之、莫知其所終、若之何其無命也、莫知其所始、若之何其有命也、有以相應也、若之何其無鬼邪、無以相應也、若之何其有鬼耶、

【大意】前の顏成子游の語に就て之を論ず、人の死あり生ありとするは、有爲の累にして、無爲なれば則ち死生一視、死を知らず生を知らず、道と共に浮遊して始終あることなし、是れ大妙なる所以なり、道を得たる至人は蓋し此くの如し、○顏成子游の節と此節を合して一章と爲す、前節は敍事にして後節は議論

之を覊絆纓紼に比するは、皆恒語なり、郭罪の罪罟たるを悟らず、乃ち祿の罪に係る無しと云ふは、詰詘甚だしと、〔彼〕郭象曰く、彼は無係の人を謂ふなり、東條弘曰く、彼は曾子を指すと、東條說誤る、〔如觀雀蚊虻相過乎前也〕兪樾曰く、雀字は衍文なり、「釋文」に云ふ、「元嘉本は如鸛蚊に作り、虻字無しと、則ち陸氏の據る所の本尙未だ雀字を衍せず、故に元嘉本鸛蚊に作り、陸氏但其の虻字無きを曰うて、其の雀字無きを言はざるなり、惟鸛と蚊虻とは、一は鳥一は蟲にて、喩を取ること倫ならず、王云ふ、大小相縣るを取り、以て三釜三千鍾の多少に喩ふと、此れ然らず、夫れ至人の物を視る一吷のみ、豈三釜三千鍾の多寡に屑々して必ず其の鸛たり、蚊たるを分別せんや、今案ずるに、「釋文」に云ふ、鸛本觀に作ると、疑ふらくは、是れ古本此くの如し、其文蓋し曰ふ、彼視三釜三千鍾、如觀蚊虻相過乎前也と、淮南淑眞篇に、毀譽之於己、猶蚊虻之一過也と、義此と同じ、觀誤て鸛に作れば、則ち鸛蚊虻の三字不倫なるに因り、乃ち一の虻字を删り、蚊と鸛との兩文相稱はしむる者あり、元嘉本是れなり、又一の雀字を增し、鸛雀と蚊虻との兩文をして相稱はしむる者あり、今本是れなり、皆莊子の舊に非ず、

顏成子游謂東郭子綦曰、自吾聞子之言、一年而野、二年而從、三年而通、四年而物、五年而來、六年而鬼入、七年而天成、八年而不知死、不知生、九年而大妙、

【大意】　顏成子游が東郭子綦に從學し、其年々進みて變化することを歷敍せるなり、外よりして漸く內に及び、終に玄妙に至る、孔子の志學より從心所欲までの順序を曰はれしと同じ、

【通釋】　顏成子游が其の師東郭子綦に曰つて曰く、吾れ子に從つて敎を受けしより、年々變化進境あるを覺ゆ、一年の後には、仁義を忘れ禮樂を除き、文飾去りて質朴に歸せり、二年にして、世俗に從順して、是非善惡に於て己の意見を立てざるに至れり、三年にして、彼我を通じて一と爲すに至り、四年にして唯

蚊虻相過乎前也、

【大意】 至人は利祿を視ること蚊虻の眼前を過ぐるが如くにして、毫も之が爲めに心を動かし喜悲せざるを説く、

【通釋】 曾子は兩度仕官して、兩度とも心の感ずる所同じからず、曾子曰く、吾初め親の猶存生中に仕官せしときは、俸祿は僅に三釜に過ぎざりしも、以て老親を養ふことを得たるを以て、心に於て甚だ之を樂めり、其の後に仕官したるときは、三千鍾の大祿を得たるなれども、其の時は親既に死して、孝養すること能はざりしを以て、吾心之を悲めりと、孔子の弟子之を孔子に問うて曰く、曾參は親の存すると否とを以て悲樂し、敢て祿の如きを樂まず、此の若きは、外物の網に心を係縛せらるゝことなき者と謂ふべきかと、仲尼曰く、否、參は己の榮利に念なしと雖も、祿の爲めに悲喜すれば、是れ既に外物に係縛せられたるなり、若し物に係縛せらるゝこと無ければ、何ぞ俸祿の爲めに悲哀することあるべけんや、彼の至人の全く外物に累はさるゝこと無き者は、三釜の微祿も三千鍾の重祿も、之を同一に視るのみならず、且つ之を蚊や虻が眼前を飛び過ぐると齊しくして、絶えて之が爲めに心を動かさず、何ぞ敢て悲哀の其間に生ずることあらんや、〔按ずるに、此章は曾子の再仕して心再化すると、孔子の行年六十にして六十化すると似て非なるを以て、編者之を其次ぎに列したるなり〕

【解義】 〔曾子再仕而心再化〕 曾子姓は曾、名は參、孔子の弟子なり、再化は悲樂の變を謂ふ、史記仲尼弟子列傳に、曾參孔子より少きこと四十六歳とあり、されば曾子の老子大儒と爲り、仕へて三千鍾の祿を得る時には、孔子已に死すること久し、以て此章の寓言なるを知るべし、〔三釜而心樂〕「釋文」に小爾雅を引て云ふ、六斗四升を釜と曰ふと、三釜は微祿なり、〔三千鍾而不洎〕 洎音「キ」及なり、成玄英曰く、六斛四斗を鍾と曰ふ、三千鍾は重祿なり、不洎は親の在るに及ばざるなり、〔可謂無所縣其罪乎〕 郭象曰く、縣は係なり、參の仕ふるは、以て親の爲めにし、祿の罪に係る無きを謂ふなり、章炳麟曰く、此の罪は乃ち罪罟の罪にして、辜の借字に非ず、説文に、罪は魚を捕ふる竹罔なりと、無所縣其罪とは、猶ほ無所絓其罔と云ふが如きのみ、利祿を以て罔羅に比し、或は

しめ、敢て違逆して之と角立せず、紛々たる爭論盡く已み、以て自ら天下の定論を定むるが如きは、是れ至人の道、無言の敎にして、始めて善くすることにて、言論を以てしては、決して此に至る能はず、已まんか已まんか、吾等の喋々と互に相論ずるは、彼の孔子の無言なるには及ぶ能はざらんかと、惠子の堅白同異の說を固執するの益なきを明白に論じたるなり、

【解義】〔行年六十而六十化〕此句及び下の三句とも、亦則陽篇に出で、蘧伯玉の事と爲す、今假りて之を孔子の事と爲す、〔勤志服知〕成玄英曰く、服は用なり、志を勵まし、行ひを勤め、心を用ひて道を學びしが故に、斯の知に至りしを謂ふ、〔孔子謝之矣〕宣穎曰く、孔子は已に勤勞の迹を謝去して道に進むを言ふ、〔其未之嘗言〕按ずるに之は句中の語助、指す所あるの辭に非ず、未嘗言は卽ち無言なり、或は勤志の事を言はずと爲し、或は之を謝することを言はずと爲すは、恐らくは誤りならん、〔受才乎大本復靈以生〕王闓運曰く、大本は宗なり、才は材なり、聖人の材、之を天に受くるなり、成玄英曰く、復靈以生は靈命に復し以て生涯を盡くすを謂ふ、豈志を勤め心を役し造物に乖かんや、孔子の語は此の二句に止まる、〔鳴而當律〕律は音律なり、言うて法と爲るを謂ふ、按ずるに德充符篇、莊子惠子に謂ふ語中に、天選子之形、子以堅白鳴の句あり、鳴の字蓋し此より來り、堅白の辨を指す、此より下の好惡是非に至るにまでの四句、連ねて一事と爲す、郭象は各二句づゝに分つて二事と爲す、恐らくは滅裂して義を成さず、〔直服人之口而已矣〕直は唯なり、服は服從なり、〔不敢蘁立〕「釋文」に、蘁は音「ゴ」又音「ガク」忤なり逆なりと、反對すること、

曾子再仕而心再化、曰、吾及親仕、三釜而心樂、後仕三千鍾而不洎、吾心悲、弟子問於仲尼曰、若參者可謂無所縣其罪乎、曰、既已縣矣、夫無所縣者、可以有哀乎、彼視三釜三千鍾、如觀雀

非也、惠子曰、孔子勤志服知也、莊子曰、孔子謝之矣、而其未之嘗言、孔子云、夫受才乎大本、復靈以生、鳴而當律、言而當法、利義陳乎前、而好惡是非直服人之口而已矣、使人乃以心服、而不敢蘁立、定天下之定、已乎已乎、吾且不得及彼乎、

【大意】孔子の事を引て、惠子の謬解を正だし、言論は徒らに人の口を服するのみにて、心服せしめて論爭を止むるは、無言に非ざれば能はざるを告げ、以て之を戒むるなり、

【通釋】莊子が惠子に謂うて曰く、孔子は年々學德進みて止むこと無く、年齡六十歲に至るまでに六十度進化せり、其年の始めに於て是なりと信じたるとも、年末に至りては之を非なりと悟りて改むるを以て、今日に是と信ずることも、明年に至らば又之を非とすると同じきかも知れずと、「莊子の意は、蓋し惠子の固く堅白同異の學を守り、自ら其非を知りて改むること無きを以て、孔子の非を知り自ら改むることを言ひ、以て之を諷せしなり」惠子其意を曉らずして曰く、孔子は志を勵み行ひを勤め、心を用ひて道を學びしによりて、漸々進みて已まざるなりと、固執に由りて進むと爲して、自ら改むべきを知らず、莊子乃ち其誤解を正して曰く、子が言ふ所の勤志服知の事の如きは、是れ尋常庸儒の爲す所のみ、孔子は早く已に之を謝絕して、敢て此に從事せず、而して孔子は初めより未だ嘗て言論を以て人と是非を爭はず、所謂無言の訣を得たる者なり、孔子嘗て曰ふ、人は材を大本卽ち道に受けたる者なれば、性を全くし本初の虛靈に復りて、以て其生を盡くすべしと、然らば今聲は律と爲り、言は法と爲り、言論する所一々理に協ひ、人の利と爲り兼ねて義に合する所以を前に陳列して、事の好惡是非を論じ、人をして復た言ふ能はざらしむるも、是れ唯人の口を服せしむるに過ぎざるのみ、人をして心服せ

りとする所を然りと爲す、何を然らずとするかといふに、其意の然らずとする所を然らずと爲す、我れ何を可とするかといふに、其意の可とする所を可とし、何を不可とするかといふに、其意の不可とする所を不可とするなり、然れども物には本來然る所あり、可なる所ある者にて、是非彼我の意を去りて之を觀れば、物として然らざるは無く、物として可ならざるは無し、語を替へて之を言へば、人に是非彼我の私意あるよりして然不然可不可を生ず、此の私意を去れば、物は皆齊等ならざるなし、故に日々卮言を出だし、之を調和するに自然の理を以てし、尙之に因るに委蛇自得を以てして、全く無心にて言ふに非ざれば、何ぞ能く天地と共に長久なるを得んや、夫れ萬物は皆造化の一元氣に出る者にて、其種は本と一なれども、其形は萬不同にして、或は人と爲り、或は禽獸蟲魚と爲り、或は草木藻苔となりて、禪代已むこと無く、始めは卒りと爲り卒りは又始めと爲ること、環の連屬して端なきが如く、皆大同至齊、一にして類なし、斯く不同不齊の中に自ら大同至齊の存するあるを名づけて、天均とは謂ふなり、其天均とは卽ち天倪なりと、前に應じて結ぶなり、

【解義】〔因以曼衍〕因以は論語先進篇の加之以師旅因之以饑饉の因以に同じ、朱子曰く、因は仍なりと、猶其上に加ふるに曼衍を以てするを言ふなり、成玄英曰く、曼衍は無心なり、林希逸曰く、曼衍は遊衍自得なり、齊物論篇に、和之以天倪因之以曼衍所以窮年也とあり、其下に何謂和之以天倪の句ありて、之を說明しあり、參照して讀むべし、〔有自也而可〕郭象曰く、自は由なり、彼我の情偏するに由りて、故に可あり不可あり、〔惡乎然〕此句より下の無物不可に至るまでの數句、亦齊物論篇に見ゆ、故に通釋には重複を避けて詳解せず、〔以不同形相禪〕成玄英曰く、禪は代なりと、物皆造化の妙用によつて化成し、或は動物と爲り、或は植物と爲り、遷轉死生して變化するを謂ふ、〔是謂天均〕齊物論篇に休乎天鈞の語あり、天鈞は天均と同じ、

莊子謂惠子曰、孔子行年六十而六十化、始時所是、卒而非之、未知今之所謂是之非五十九

物不可、非卮言日出、和以天倪、孰得其久、萬物皆種也、以不同形相禪、始卒若環、莫得其倫、是謂天均、天均者天倪也、

【大意】 日々卮言を出だし、和するに天倪を以てする所以は、萬物皆同じからざれども、道の化成に非ざるは無く、其理は一にして、萬物皆同じ、故に卮言卽ち無心の言を以て之に應ずれば、千言萬語するも皆無言なれども、言論を以てしては物を齊一にする能はざるは、人に私意あるによる、故に卮言せざるべからざるなりと說き、猶ほ進みて、萬物は元來皆一にして、化より出でゝ化に入る、是れ卽ち天均卽ち天倪なりと結ぶ、○以上三節と合して一章と爲す、第一節は寓言を說き、第二節は重言を說き、第三節は卮言を說く、然れども重言は寓言の中に在り、寓言は又卮言の中に在り、寓言重言を爲すにも、亦和以天倪、因以曼衍するに非ざるなし、故に初めに三言を列擧すれども、卮言を以て主と爲し、無心にして言ひ、言うて無言たるべきを說くが此章の主意なり、

【通釋】 卮言は日々口より出だすも、之を調和するに自然の理を以てし、尙之に因るに委蛇自得を以てして、全く無心にて言ひ、歲月の有らん限り、此を以て長久を保つなり、世の中の事は萬不同なれども、其理は卽ち一なり、故に措て論ぜざれば、物は自ら齊等なれども、若し其不同なるを齊等にせんとして之を論ずれば、反對する者多く起りて、紛々と亂れ、愈〻齊等にするを得ざるなり、斯く論じて之を齊くせんとすれば齊しからざるが故に、無言を以て吾が道の極致とするなり、されど此の無言とは、口を閉ぢて沈默せよとのことに非ず、無心にして人と是非を爭ふ勿れといふことなり、故に無心にて言ふは卽ち無言にして、身を終るまで口を絕たざるも、無言に非ざる無く、之に反して人と是非を爭ふの意あるときは、終身沈默して言はざるも、言ふに非ざる無し、さて其の言うて齊しからざる所以は、凡そ言の出づる、其可とする所、不可とする所、然りとする所、然らずとする所は、皆各自の意に於て由て來る所ありて之を決するなり、我れ何を然りとするかといふに、其意の然

なり、たゞ年齢のみ人に先だちて老壽なるも、經緯本末無きは、年數を以て人に過ぐるのみにて、人に過ぎたる心徳なく、之を人に先だつと謂ふを得ざるなり、人にして人に先だち過ぐる無きは、則ち是れ其の人たるの道を盡くす能はざればなり、人として人たるの道を盡くさざる者は、是れたゞ年歴たる陳き人と謂ふべきのみ、尊ぶに足らざるなり、古先帝王も人道なき陳人に過ぎざれども、世俗の人は此の陳久の人を信ずるが故に、姑く之を假りて重きを取り、其の爭辯を止むるのみ、我れ實に之を尊ぶに非ざるなり、

【解義】〔所以已言也〕林希逸曰く、已は止なり、已言とは以て其爭辯を止むべきなり、巖井文曰く、古人の已に言ふ所と、今取らず、〔是爲耆艾〕成玄英曰く、耆艾は壽老者の稱なり、「國語」の周語、耆艾修レ之の章注に、耆艾は師傳なり、東齊人は尊を謂て耆艾と爲す、「禮記」の曲禮上に、六十曰レ耆、五十曰レ艾、〔經緯本末〕成玄英曰く、上下を經と爲し、傍通を緯と爲す、林希逸曰く、經緯本末は常を知り變を知り、首を知り終を知るを謂ふなり、〔以期年耆者〕期は期頤の期なり、「禮記」曲禮に、百年曰レ期頤とあり、則ち期は大老のことなり、以二期年一耆者とは、年の老いたるのみを以て耆艾たる者を謂ふ、〔陳人〕郭象云ふ、陳は久なりと、徒らに年老いたるのみの人を謂ふ、老朽に同じ、

巵言日出、和以天倪、因以曼衍、所以窮年、不言則齊、齊與言不齊、言與齊不齊也、故曰無言、言無言、終身言未嘗言、終身不言、未嘗不言、有自也而可、有自也而不可、有自也而然、有自也而不然、惡乎然、然於然、惡乎不然、不然於不然、惡乎可、可於可、惡乎不可、不可於不可、物固有所然、物固有所可、無物不然、無

寓する所の人必ずしも聖賢のみならず、或は工匠、或は漁夫舟人、或は病者小童、或は巨盜刑徒、一ならず、又假設の肩吾連叔の徒あり、獨り人のみならず、河海風雲鳥獸樹木の類に至るまで、皆其言に寄せて己の議論を發す、十九は、「釋文」に云ふ、十言して九信せらると、非なり、呂吉甫曰く、寓言十九なれば、寓に非ずして言ふ者十の一なりと、此說從ふづし、〔重言〕林希逸曰く、古人の名を借りて以て自ら重くす、黃帝神農孔子の如き是れなり、按ずるに、重言は寓言中の聖人の名に託したる者なり、故に重言は寓言中の一部分なり、〔巵言日出〕「釋文」に字略云ふ、圓き酒器なり、王云ふ、夫の巵器、滿つれば則ち傾き、空しければ則ち仰ぎ、物に隨うて變じ、一を執り故を守る者に非ざるなり、之を言に施せば、人に從ひ變に從うて常主なき者なり、「宣注」に曰く器に隨ふて摹寫して、水の巵に在るが如し、則ち日に談ずる者皆是れなり、日々言ふ所の寓言重言及び其餘の十の一も皆巵言に屬す、故に日出といふ、〔和以天倪〕「宣注」に己を以て與らざるなりと、林希逸曰く、和は調和なり、天倪は天理なり、天理を以て衆人の心を調和するなり、天倪の解、前の齊物論篇に詳なり、〔藉外論之〕郭象曰く、藉は借なり、〔同於己爲是之〕王引之曰く、爲は猶則の如し、又字の如く讀むも可なり、

重言十七、所以已言也、是爲耆艾、年先矣、而無經緯本末、以期年耆者、是非先也、人而無以先人、無人道也、人而無人道、是之謂陳人、

【大意】重言を用ふるは世人の爭辯を止むる爲めなり、世俗の尊重する所の人は、道を得たるに非ず、其の尊ぶに足らざることは、徒らに年老いたる者に異ならざれば、我は之を尊ばざれども、借りて世俗の人に聞かしむるに便するのみ、

【通釋】十中の七も重言を用ふるは、以て其の爭辯を止むべきを以てなり、古先帝王聖賢の如き、世人の尊重する所の言を借りて我の道を說けば、聞く者敢て以て非と爲さず、以て其議論を止め塞ぐべければ

始まるに非ず、而して皆確據あるに非ず、たゞ寓言重言卮言を言ふを以て、著書の意を言ふと爲して臆斷するのみ、姑く記して參考に資す、

寓言十九、重言十七、卮言日出、和以天倪、寓言十九、藉外論之、親父不爲其子媒、親父譽之、不若非其父者也、非吾罪也、人之罪也、與己同則應、不與己同則反、同於己爲是之、異於己爲非之、

【大意】　莊子の平生言ふ所に寓言重言卮言の三種あるを言ひ、寓言を用ふるは人の私心を以て妄に之を是非し、虚心にて聽かざるに由るを謂ふ、

【通釋】　我の言はんと欲する所を、他の人若くは物の言葉にて發する者、十分の九あり、又世人の尊重する人の名を借りて言ふ者十分の七あり、又人に從ひ變に應じて發するの言は、日々之を出だし、而して天理を以て衆人の心を調和す、吾が平生の言は、大凡此の三種に外ならず、寓言十九は、外の人若くは物に假託して之を論ずるなり、其の外を借る所以は何ぞや、譬へば、其子の爲めに妻を娶るに、親父自ら媒妁せず、必ず他人をして媒妁せしむるは、親父が其子を譽むれば人之を信ぜざれども、他人の口を借りて之を譽むれば、信用して緣談成るを以てなり、此と同じく、吾が言を以て吾が道を論ずれば、聽く者妄に嫌疑を起して信ぜざれども、他の言として之を發すれば、人之を信じ易ければなり、故に我の寓言を假るは、吾が罪に非ず、聽者の私心妄に嫌疑する罪なり、若し我の言として發すれば、人其の私心を以て之を議し、己の意見と同じければ則ち應和し、己の意見と同じからざれば則ち反對し、己の意見に同じければ則ち之を是とし、己の意見に異なれば則ち之を非とし、虚心にて審聽する者なし、是れ寓言を用ふるの已むを得ざる所以なり、

【解義】　〔寓言十九〕「釋文」に、寓は寄なり、人己を信ぜざるを以て、故に之を他人に託すと、按ずるに、

具なれば、兎を得たる上は蹄のことは之を忘る、此と同じく言語は意志を載せて人に示すの具なれば、意志を達するを得たる上は、言語は之を忘るゝこと、魚兎を得たる後の筌蹄の如くにして可なり、然るに世には言語を以て重しと爲し、主たる意を輕しと爲し、主客を顚倒して自ら知らざる者甚だ多し、吾願くは言跡に拘泥せず、能く言を忘るゝの人を得て與に妙を語らんと欲するも、其人の得難きを如何せんや、

【解義】〔筌者所以在魚〕筌は「ウヘ」と訓ず成玄英曰く、筌は魚笱なり、竹を以て之を爲る、故に字竹に從ふ者あり、蓀筌なり、香草なり、以て魚に餌すべし、香を柴木蘆葦の中に置き、以て魚を取るなり、按ずるに、「釋文」は筌に作り、七全反、崔音孫、香草なりと、香草を以て魚を取ると、未だ之を聞かず、竹に從ふを是とす、王先謙曰く、在は之を生致するなり、〔蹄者所以在兎〕成玄英曰く、蹄は兎罝なり、兎の脚を繫係するを以て、故に之を蹄と謂ふと、兎を捕ふる網なり、筌蹄の故事は此より出づ、

名言

木與木相摩則然、金與火相守則流、陰陽錯行則天地大絯、於是乎有雷有霆、水中有火、乃焚大槐、有甚憂兩陷而無所逃、螴蜳不得成、心若縣於天地之間、慰沈暋屯、利害相摩、生火甚多、衆人焚和、月固不勝火、於是乎有僓然而道盡、

雖有至知、萬人謀之、魚不畏網、而畏鵜鶘、

嬰兒生無石師而能言、與能言者處也、

凡道不欲壅、壅則哽、哽而不止則跈、跈則衆害生、

室無空虛則婦姑勃谿、心無天遊則六鑿相攘、

筌者所以在魚、得魚而忘筌、蹄者所以在兎、得兎而忘蹄、言者所以在意、得意而忘言、

寓言第二十七

寓言は篇首の二字を取りて名と爲すのみにて意義なきこと前諸篇と同じ、〇王闓運曰く、寓言は周（莊子）の自序なり、此より、以下讓王盜跖等の五篇は莊子の書に非ず、之を除けば、本書は此に終る、最後に自叙あるは古書の例なりと、按ずるに此篇を莊周の自叙と爲すは、古人も亦其說あり、王氏に

光に天下を與へんとせしかば、務光は己を汚せりとして之を怒り、遠く林中に遁げ去れり、此れ皆其の本性に牽ひ、物の爲めに己を累はすを欲せずして辭去したるにて、其の他に求むる所ありて然りしに非ず、紀他之を聞き、其の亦己に天下を譲らんとする者あらんことを恐れ、弟子を引連れ、去て窾水の涯に蹲踞し、若し天下を譲らんとする者あれば、直に水に投じて死せんと準備せり、諸侯之を聞き其廉潔なるを重んじ、又其自ら沈沒せんことを恐れ、人を遣りて之を弔慰せしめたり、其後三年にして、申徒狄は其風を慕ひ、因て自ら身を河水に投じて死せり、紀他は許由務光の風を高しとして、未だ天下を譲る者あらざるに、死するの準備を爲し、申徒狄は又其の名を慕うて未だ譲らんとする者あらざるに、先づ河に投じて死するに至る、皆名を慕ひ性を矯め、僞りて此に至れるにて眞に天下を輕んじて本性を保つに非ず、反て物の爲めに性を毀傷する者なり、名を重んずるの弊亦此くの如し、

【解義】〔演門〕「釋文」に、宋の城門の名、成玄英曰く、東門なり、亦寅に作る者あり、〔以善毀爵爲官師〕毀は瘠なり、親の死を悲むが爲めに身瘠するを善毀と曰ふ、成玄英曰く、宋君其の至孝を嘉みし、遂に爵を加へて命じて卿と爲す、〔黨人〕黨は鄉黨、同鄉の人を謂ふ、〔許由〕逍遙遊篇及び其他に見ゆ、〔務光紀他申徒狄〕三人竝に隱者なり、大宗師篇に見ゆ、〔踆於窾水〕「釋文」に林云ふ、踆は右の蹲の字、司馬云ふ、窾は水の名、〔踣河〕「釋文」に林云ふ、踣は偃なり、李云ふ、頓なりと、身を河中に投じて死するを謂ふ、

筌者所以在魚、得魚而忘筌、蹄者所以在兎、得兎而忘蹄、言者所以在意、得意而忘言、吾安得夫忘言之人而與之言哉、

【大意】筌蹄の二者を假りて譬と爲し、意を主と爲し、言辭も亦宜く之を忘るべきに、世人の之に拘泥して眞意を失ひ、與に道を言ふ能はざるを歎ずるなり、

【通釋】筌は魚を捕ふる爲めの具なれば、魚を得たる上は筌のことは之を忘る、蹄は兎を捕ふる爲めの

【解義】〔靜然可以補病〕林疑獨曰く、靜然は靜默に作るべし、按ずるに、林說從ふべし、恐らくは傳寫の誤ならん、〔皆娍可以休老〕郭崇燾曰く、「釋文」に、娍本又作搣と、廣韻に搣は案也摩也と、兩手を以て目皆を案摩するを謂ふなり、娍は搣と通ず、皆は目匡なり、〔非佚者之所未嘗過而問焉〕王先謙曰く非の字は當に衍なるべしと、按ずるに、王說從ふべし、佚者より焉までの十字を一句と爲して讀む、佚は逸に同じ、佚者は神人と同じ、勞者に對して佚者と謂ひ、聖に對して神人と謂ふのみ、佚者は自然と冥合し、物外に超然として勞せず、生死を一にして老せず、故に此の諸術を用ふるを要せず、靜默皆娍寧は蓋し養生家の說なり、〔聖人之所以駴天下〕此の聖人は堯舜禹湯の如き儒教の聖人を指す、駴は駭と同じ、驚かすなり、駴天下とは制を立て教を垂れ百姓の視聽を改むるを謂ふ、

演門有親死者、以善毀爵爲官師、其黨人毀而死者半、堯與許由天下、許由逃之、湯與務光、務光怒之、紀他聞之、帥弟子而蹲於窾水、諸侯弔之、三年申徒狄因以踣河、

【大意】宋君孝子を賞して之に爵を與ふれば、倣うて毀死する者多く、許由務光の天下を辭するを高しとすれば、紀他申徒狄倣うて爲めに身を殺し性を毀傷するを叙し、世人の本を離れ外を慕ふを歎ずるなり、

【通釋】宋の演門の附近に住する民に、其親の死したるとき、之を悲みて身の瘠せたる者あり、宋君其の孝を賞し、爵位を與へて卿と爲せり、同鄕の人々其の孝を以て貴くなりしを見て之に倣んとし、強ひて哭し、食を減じ、因て瘠せて死せし者十人中に五人ありたり、是れ賞を慕ひ性を矯め情を僞りて此に至れるにて、眞孝を去ること遠し、賢を尙ぶの弊此くの如し、堯が許由に天下を讓らんとせしかば、許由耳を洗うて之を辭し、逃れて巢山に避けたり、殷の湯王が務

に怒生と曰ふ、〔銚鎒〕二物皆農具なり、成玄英曰く、銚は耜の類、鎒は鋤なり、〔草木之到植〕盧文弨曰く、到は古の倒の字、「釋文」に植は立なり、

靜然可以補病、眥㓕可以休老、寧可以止遽、雖然若是勞者之務也、非佚者之所、未嘗過而問焉、聖人之所以駴天下、神人未嘗過而問焉、賢人所以駴世、聖人未嘗過而問焉、君子所以駴世、賢人未嘗過而問焉、小人所以合時、君子未嘗過而問焉、

【大意】　此章は神人の無爲なるを謂ふなり、初めに養生の三事を擧げて、是れ勞者の務めにして、逸者は之を爲さずと排斥し、之と同じく、聖人の天下を駭かす所の事も、亦神人は之を爲さずと排斥し、以下賢人君子小人遞次降下し、以て神人の自然と冥合して無爲なるを明かにす、

【通釋】　心を安靜にして沈默を守れば、以て神氣を補益して病を療すべし、兩手の指にて目尻を按へ、目を閉ぢ精神を養へば、以て老衰を休息すべし、心を寧んずるときは、以て事に臨みて躁急するを止むべし、然れども此の三つのことは、物累の爲めに神智を勞役する者の務むる所の事にて、性を保ち道と一體たる神人の、常に閒逸にして勞せず、病まざる者は、之を問ふことを爲さゝるなり、此と同じく、堯舜禹湯の如き聖人の制を立て敎を設けて天下百姓の視聽を改むる所の事は、無爲の神人は之を問ふことを爲さず、又一等下りたる賢人の治平を致し、世人の耳目を駭かす所の事は、聖人は之を問ふことを爲さず、又一等下りたる君子の事功を立て、一國を駭かす所の事は、賢人は之を問ふことを爲さず、又一等下りたる小人の時に合ひ君意を迎へて利祿寵榮を得ることは、君子は之を問ふことを爲さず、以上人物に差等あり、下の爲す所は上の之を顧みざるを言うて、最上たる神人の無爲なるを明らかにするなり、

倒して立つに至る、而して農夫は人爲を以て自然を妨げ、草木の性を毀損せることを知らざるなり、人の外物名利の爲めに其性を毀損し天遊を失ふも、亦此と同じ、

【解義】〔目徹爲明〕成玄英曰く、徹は通なりと、瞳孔より神經に通じて腦に達し、中途に之を障礙する者無ければ、能く物の形色を觀る、之を明と謂ふなり、下の知徹爲德の一句は是れ主、他の六徹は是れ客、〔鼻徹爲顫〕成玄英曰く、顫は辛臭の事なりと、香臭を嗅ぐに審なるを謂ふなり、〔哽而不止則跈〕「釋文」に、哽は塞なり、王念孫曰く、跈讀で抮と爲す、抮は戾なり、哽塞して止まざれば、則ち相乖戾し、相乖戾すれば則ち衆害生ずるを言ふ、「廣雅」に曰く、抮は盭なり、（盭は戾と同じ）「方言」に曰く、軫は戾なり、郭璞曰く、相了戾するなり、「孟子」告子篇、紾兄之臂而奪之食の「趙注」に曰く、紾は戾なりと、此に哽而不止則跈と云ふ、義並びに抮と同じ、〔其不殷非天之罪〕郭象曰く、殷は當なり、「爾雅」釋言に曰く、殷は齊中なり、〔日夜無降〕兪樾曰く、降當に痒に作るべし、卽ち癃の籀文なり、「素問」の宣明五氣篇に膀胱利ならざるを癃と爲す、又五常政大論篇に、其病癃閟とあり、日夜無降は痒癃閟せざるを謂ふなり、〔胞有重閬〕「釋文」に胞は腹中の胎なり、郭象曰く、閬は空曠なり、〔婦姑勃谿〕「釋文」に司馬云ふ、勃谿は反戾なり、虛室の以て其私を容るゝ無ければ、則ち反戾して共に闘爭するなり、〔六鑿相攘〕郭象曰く、攘は逆なり、「釋文」に司馬云ふ、六情攘奪するを謂ふ、「宣注」には六鑿は六根の性を鑿する者と云へり〔名溢乎暴〕郭崇燾曰く、「釋文」に、暴は晞なり、「孟子」に暴之於民、而民受之、「荀子」富國篇に聲名足以暴炙之と、皆表暴の意なり、名の洋溢する所以は、表暴以て之を成すを言ふなり、五句並びに同一意、郭象云ふ、暴を禁ずれば則ち名德より美と、恐らくは誤り、〔謀稽乎誸〕誸は音賢郭象曰く、誸は急なり、急にして後に其謀を考ふ、成玄英曰く、稽は考なり、〔柴生乎守〕郭象曰く、柴は塞なり、成玄英曰く、守は執なり、〔春雨日時〕王先謙曰く、日疑ふらくは曰の誤り、按ずるに、王說從ふべし、曰は語助、春雨降るべきの時を以て降るを謂ふ、〔草木怒生〕怒は逍遙遊篇怒而飛の怒と同じ、草木奮然として生ず、故

【通釋】目の能く通じて物を視るを明と爲し、耳の能く通じて聲を聽くを聰と爲し、鼻の能く通じて臭を嗅くを顫と爲し、口の能く通じて味を知るを甘と爲し、心の能く通じて、耳目鼻口より來る所の事物を判知するを知と爲し、知の能く通じて外物に牽かれざるを德と爲す、耳目口鼻其他凡ての道なる者は、能く通ずるを貴びて、壅がるを欲せず、姑く食道に就て言はんに、若し食道壅がれば食物哽へて胃に降らず、哽へて止まざれば、逆戻りして吐出するに至る、食物逆戻りして吐出さるゝに至れば、之が爲めに種々の病氣を起すべし、又凡べて物の知覺ある者は、氣息の流通するを恃みて生きるなり、其の氣息流通の正しからざるは、天の然らしむるに非ず、卽ち天の罪に非ず、天の人を生ずるには、氣管を開通し、日夜呼吸して障礙無からしむるに、人顧みて衞生を重んぜずして其竇孔を塞ぎ、氣息の流通を害して死するに至る、人の身體は諸官の通じて竇孔あるのみならず、又腹中に幾重にも空虛の處ありて、諸の機能を活動せしむ、其心にも物に拘束せられず、天空に浮遊し、自然と冥合するの遊ありて、心は身に寓すれども、其の遊する所は甚だ廣く、以て其性を全くするなり、若し家小にして空虛の室なく、家族皆一室に聚まり居るときは、嫁と姑と相爭ふに至ることあり、心若し天遊なければ、耳目鼻口心知の六つの者が之を攘み奪ひて性を毀損すべし、人の大林に遊び、丘山に登るを樂むは、心に天遊無く、平日胸次狹隘にして、其精神之に勝へざるが故なり、心に天遊あれば、如何なる狹隘の境に居りても、無際の虛空に逍遙するを以て、大林丘山の如き淸曠の地を假りて樂を爲さゞるなり、人の天遊無きに至る所以は、其の内に在るの德が、名譽の爲めに溢れて外に出で、名は本と彰はれざれども、表暴に因て溢れて外に出づ、謀は名利を得るが爲めに用ひ出され、心に塞柵を築きて彼我を分つは、我意を固執して人を拒ぐが爲めに生じ、官府の事は衆僚の宜しとする所によりて成り、道の自然に從はず、是れ皆人の天遊を失ふ所以なり、春雨時を以て降れば、其の滋潤を得て、草木皆勢よく萠生ず、是に於て農具を修理し、野外に出でゝ鋤拔し、人工を加ふ、之が爲めに草木は自然の性を遂ぐる能はずして、大半は傾

卑むは誤まれり、死生の一なるは古今の一なるが如し、生に處するにも亦宜く死に處するが如く、留滯せずして浮遊すべし、而るに世を厭うて決絶火馳するは誤まれりと、〔學者之流也〕陳壽昌曰く、流は輩也、〔狶韋氏〕成玄英曰く、三皇以前の帝號なり、〔孰能不波〕波は波だち流るゝを謂ふ、上文の流字を承けて波字を用ひしなり、言ふ、今日の太古に同きは、下流の水の上流と同く波だちて流るゝが如しと、〔彼敎不學〕彼敎は儒敎を指す、「宣注」に曰く、彼敎固不狥而學之、亦承其意而不分別於彼此、至人環中之妙不爲流連之卑靡、亦不爲決絶之高蹈、所以逍遥自適而無一念之累、眞能遊者也と、

目徹爲明、耳徹爲聰、鼻徹爲顫、口徹爲甘、心徹爲知、知徹爲德、凡道不欲壅、壅則哽、哽而不止、則跈、跈則衆害生、物之有知者恃息、其不殷、非天之罪、天之穿之、日夜無降、人則顧塞其竇、胞有重閬、心有天遊、室無空虚、則婦姑勃谿、心無天遊、則六鑿相攘、大林丘山之善於人也、亦神者不勝也、德溢乎名、名溢乎暴、謀稽乎誸、知出乎爭、柴生乎守、官事果乎衆宜、春雨日時、草木怒生、銚鎒於是乎始修、草木之到植者過半、而不知其然、

【大意】此章は心の天遊を説くなり、耳目鼻口心の通を客として、知徹爲德の主を起し、更に食道氣管の通を具説して、始めて心有天遊に入り、又心の天遊を失ふ所以は、名利を爭ひ彼我を分つによるを言ひ、終に草木の人爲の爲めに其性を失ふを以て此に喩へて一章を結ぶ、

に浮遊し、之に累はさるゝことなし、世には君臣上下の分あり、至嚴にして犯すべからす、極めて煩累なるが如きも、是れ唯一時の事のみ、世に在る間の事のみ、死して此の世を易ふれば、前に君たり、臣たりしとて、復た相貴び相賤むことなし、至人は此の理を知るが故に、世に在る須臾の間は、俗に順うて臣禮を守るも、其の心は悠々として物外に浮遊し、之を厭苦することなし、名分は君臣の間より嚴なるは無きも、尙且つ之を厭苦せざれば、其他何事も厭苦すべき者無く、悠々として自適す、故に語に曰く、至人は行を留めずと、至人は事物に留滯執着せざるを謂ふなり、夫れ人の死生は猶時の古今の如し、古今は一なり、古必ずしも美ならず、今必しも惡からず、此と同じく、死も亦樂むに足らず、生も亦厭苦するに足らざるなり、而るに猶之を厭苦して決絕火馳するは、物に累はれて遊する能はざる者なり、世人古を尊みて淳美と爲し、今を卑みて澆季と爲すは、是れ學者の徒輩にて、淺見笑ふべし、且つ更に溯りて太古の狶韋氏の輩よりして今日の世を觀るも、亦河流の波を蕩かして流るゝが如く、太古も今も同じからんのみ、古今一なれば死生も亦一なり、而るに衆人は此世に處すること死後に處するが如くなる能はず、唯至人は則ち能く世俗の外に浮遊するも、敢て世に乖きて自ら異にせず、人に順じて自ら異にせざるも、亦敢て己の本性を失はず、彼の世俗の敎は固より淺狹固陋なれば、肯て之を學ばざるも、亦其意に承順して彼我を分別せず、蓋し己に事物に拘束せられず、亦世習を鄙薄せず、隨處逍遙して大自在を得る所以なり、

【解義】〔流遁之志決絕之行〕林希逸曰く、流遁は物を逐うて返るを忘るゝなり、決絕は世と判然として自ら異にするなり、〔噫至知厚德之任〕王引之曰く、噫は抑と同じ、林希逸曰く、至知厚德は自然に循ふの人なり、任は爲なり、〔火馳〕速に馳すること電光の如きを謂ふ、亦天地篇に見ゆ、〔易世而無以相賤〕易世は死後を謂ふなり、成玄英の世變革易と爲し、世變革易に遭へば、臣たり君たりしを以て相賤輕すべからすと曰ふは、非なり、〔尊古而卑今〕按ずるに、尊古より孰能不波までは、古今を以て死生に喩へたるなり、別に又古今を論ずと爲して解するは、作者の意に非ず、言ふ、古今は一なり、學者の古を尊んで今を

莊子曰、人有能遊、且得不遊乎、人而不能遊、且得遊乎、夫流遁之志、決絶之行、噫其非至知厚德之任與、覆墜而不反、火馳而不顧、雖相與爲君臣、時也、易世而無以相賤、故曰、至人不留行焉、夫尊古而卑今、學者之流也、且以狶韋氏之流觀今之世、夫孰能不波、唯至人乃能遊於世而不僻、順人而不失己、彼敎不學、承意不彼、

【大意】　至人は能く世に浮遊して物に累せられざるも、道を得ざる者は、或は物と流蕩し、或は世と絶たんとす、皆物に累せられて性を失ひ、遊する能はざる者なり、遊とは他なし、生を視ること死の如く、世事に留滯執着せざるなり、外は人に從ひ世俗に同じて、内は己の性を失はざるなり、

【通釋】　莊子曰く、人の心に天遊ありて、能く物外に超然たる者は、如何なる境遇に在るも、事物に拘束せられず、逍遙として浮遊せざること無し、即ち入るとして自適せざる無し、之に反し、人にして道と離れ、事物に拘束せられて浮遊する能はざる者は、强ひて之をして浮遊せしむることを得んや、即ち悠々自適すること能はざるなり、彼の遊する能はざる者は、或は物を逐ひ、流蕩して本に返ることを忘れ、或は世の俗累を厭ひ、山中に隱れて物と絶たんとす、此くの如き志行は極愚極鄙にして、至知厚德の人即ち有道者の爲す所に非ず、流遁する者は、世事に陷溺し外物に拘束せられ、其の本性を離るゝこと、顚覆して墜落するが如くにして本に返らず、又決絶する者は、世の煩累を厭うて、之を棄て去ること電火の如く速かにして、身を僻遠の地に隱し、肯て反顧せず、是れ皆情を物に忘るゝこと能はず、棄て去ると雖も猶ほ物に累はさるゝ者なり、至人は則ち物と與に居りて物外

純の江賦の注に司馬を引て云ふ、鑽は卜を命じて卜する所の事を以て之を灼くなりと、卽ち卜に用ふるを謂ふ、〔鵜鶘〕「釋文」に、水鳥なり、一名淘河と、和名「ウ」、〔石師〕石は碩の假借、碩は大なり、「釋文」に一本所師に作り、又碩師に作る、

惠子謂莊子曰、子言無用、莊子曰、知無用而始可與言用矣、夫地非不廣且大也、人之所用容足耳、然則廁足而墊之致黃泉、人尙有用乎、惠子曰、無用、莊子曰、然則無用之爲用也亦明矣、

【大意】足の踐む所の外の餘地ありて、始めて踐む所の地の安全なるを謂うて、無用の用を明かにするなり、

【通釋】惠子、莊子に謂うて曰く、予が言ふ所の道は人世に切要ならず、無用の言なりと、莊子之に對へて曰く、無用なることを知りて、而る後に始めて其有用なることを言ふべし、之を譬ふれば此の地は廣く且つ大ならざるに非ず、然れども人の用ふる所は、僅に足を載せ踐むだけにて、其他は皆無用の地なり、然らば足の踐む所を測りて、其れだけの地を殘し、其周圍を掘下て、黃泉のある深さまでに至らば、其の立てる人は尙蹈む所の地のみが有用なりと謂ふを得べきや、恐らくは危險にして立つことも能はざるべし、惠子曰く、かく周圍の餘地を盡く掘り取り、踐む所の地のみ殘りては、有用と謂ふを得ずと、莊子曰く、然らば則ち足の踐まざる無用の餘地ありて、始めて踐む所の地か有用と爲ることとなれば、無用の地の有用たるや明らかなり、我が言ふ所の道も、日用に切要ならざるが如きも、此の無用の道を棄てゝは、人は一日も世に處る能はざれば、無用に似て實は大有用なること、踐まざる土地の無用に似て實は有用なると同じと、

【解義】〔廁足而墊之〕「釋文」に、廁音測、司馬崔云ふ、墊は下なり、本又塹に作る、掘るなりと、足の形を測りて之を遺し、其周圍は皆掘り下げるなり、〔致黃泉〕「釋文」に、致は至なり、本亦至に作る、

に入りて取らるゝ神龜の如き者多し、是れ徒らに小知を弄して大知を用ひざればなり、故に人も小知を棄てゝ用ひざれば、則ち自然の大智明かになり、區々たる善を爲すことを去れば、則ち自然の眞善と爲る、以て人智の用ふるに足らず、之を用ふれば却て禍むるを知るべし、生れたまゝの嬰兒は、良師に就きて言語を學ぶことを爲さゞるも、能く言語を操るに至るは、學ばんとするの心無く、卽ち小知を用ひず、無心にして能く言語する人々と與に居るを以てなり、此の嬰兒の如く無心にして、道の中に居れば、自然に道に化して、大智明らかに眞善に至るべきなり、

【解義】〔宋元君〕「釋文」に李云ふ、元公なり、陸德明云ふ、元公明は佐、平公の子なり、宋元公亦田子方篇に見ゆ、〔闕阿門〕闕は竊に通ず、「釋文」に司馬云ふ、阿は屋の曲簷なり、林希逸曰く、阿は曲なり、阿は曲側の門を謂ふと、門旁の小門のことなり、今之に從ふ、〔宰路〕「釋文」に李云ふ、淵の名なり、龜の居る所、〔清江〕按ずるに、大江なり、河の濁るに對して清江といふなり、〔余且〕「史記」龜筴傳及び「說苑」共に豫且に作る、謂はゆる白龍漁服の事、蓋し此に基づく、〔其圓五尺〕孫詒讓曰く、圓は卽ち員の字なり、「西山經」に廣員百里、越語廣運百里、山木篇に目大運寸とあり、員運皆廣なり、章炳麟曰く、孫說是なり、商頌景員維河の傳に云ふ、員は大、員は均なり、幅隕既長の傳に云ふ、幅は廣、隕は均なりと、幅隕同義、皆廣也、景員も亦大廣を謂ふ、傳に均と訓ずるは、「說文」に云ふ、均平偏也と、平偏は廣の義、又說文に軍圜圍也と、圍は卽ち□字、「說文」に□回也、象回帀之形、回は轉なり、轉は運也、是れ卽ち軍運聲義皆相近く、而して運又廣と訓ず、員既に同音なれば、乃ち復た廣と訓ず、蓋し古語廣と圓とは名多く相同じ、當に事に隨て之を解すべし、〔殺龜以卜吉〕他事を卜するに此の龜を用ふれば吉なるを謂ふ、他は龜の活殺を決する爲めに、龜を殺して卜すと說く者あり、大なる誤解なり、〔七十二鑽〕左暄の「三餘偶筆」に或者の說を引き、七十二乃天地陰陽五行之盈數也、故言數之至多者、每極之七十二と言ひ、管子地數篇の古者封泰山、禪梁父者七十二家、「史記」滑稽傳の齊威王、于是乃朝諸縣令七十二人、「漢書」高帝紀の左股有七十二黑子を擧げて其の實數に非ざるを證せり、「文選」郭景

【大意】此章は、神龜が余且に得られ、宋元君の夢に見はれて救助を求めしも、遂に殺して卜に用ひらるゝに至りしことを叙し、神龜の神知も禍患に免るゝ能はざるを見れば、知を用ふるは徒に害ありて益なし、故に小知を去りて大知を明かにし、小善を去りて眞善を致し、道と與に化すべきを謂ふ、二節に分ちて看るべし、前節は叙事にして後節は議論なり、

【通釋】宋の元君が嘗て夜半に夢を見たり、其の夢は人が髮を被りて門側の小門を窺ひたるにより、何者ぞと問ひたれば、予は宰路の淵より來りし者なり、予淸江の神の爲めに黄河の神なる河伯の處へ使に往き、途中にて漁人の余且なる者予を捕獲せりとて、救助を求めたり、元君夢覺めて之を奇なりとし、卜人をして其夢を占はしめたり、卜人曰く、君の夢に見えたる者は神龜なりと、元君乃ち左右近侍の者に、國中の漁人に余且と云ふ者ありやと問へるに、近侍の者余且といふ漁人ありと答へたれば、元君曰く、然らば余且を召して朝廷に出でしめよと、因て其命を傳へたれば、明日余且朝廷に來れり、元君問うて曰く、汝近ごろ漁獵して何物を得たるや、余且對へて曰く、臣の投じたる網に白き龜を得たり、其甲の廣さ五尺ありと、元君曰く、汝の得たる龜を獻ぜよと、既にして龜至れり、元君龜の處分に就きて反覆思考し、一たびは之を殺さんとし、既にして思ひ直して之を活かさんとし、再び之を殺さんとして、又活かさんと思ひ直し、心惑うて決する能はず、遂に之を卜したるに、此の龜を殺して卜に用ふれば吉なりと告げたり、乃ち龜の腹を切り、腸を刳りて之を殺し、以て卜に用ふること七十二度の多きに及ぶも、其の卜善く中りて一度も誤まりたること無かりき、仲尼之を論じて曰く、神龜は能く夢に元君に見ゆることを得るも、余且の網を避くる能はず、又其知は七十二度の卜ひに一度も誤まり無きを得るも、腸を刳らるゝの禍を避くる能はず、此れ知あるが爲めに、殺して卜に用ひらるゝに至れるなり、是に由りて之を觀れば、知ある者も、困窮することあり、神妙の靈能ある者も及ばざる所あるなり、至知ありと雖も、萬人の衆きを以て之を取らんと謀れば、必ず免るゝ能はず、魚は水中に潜みさへすれば安全なりとし、網の俄に襲ひ來るを畏れずして、水面に浮びて鵜鶘に取らるることのみを畏れ、網

譽、堯而非桀を承けず、非譽の字亦天地篇に見え、天下之非譽無益損焉、是謂全德之人とあり、〔聖人躊躇以興事〕「釋文」に、躊躇は從容なり、成玄英曰く、聖人無心、機に應じて動き、事業を興起し、恒に自ら從容として物情に逆らはず、故に其功每に成る、〔奈何哉其載焉終矜爾〕成玄英曰く、奈何は猶如何の如し、按ずるに、焉は之なり、堯を譽め桀を非る是非毀譽の心及び天下を經營せんとするの心を指す、言ふ、汝何爲れぞ心に是非を執り外物に馳役せられて之を去る能はざるや、此の如くなれば則ち矜知を以て身を終らんのみ、君子と爲ること能はず、

宋元君夜半而夢、人被髮闚阿門、曰、予自宰路之淵、予爲清江使河伯之所、漁者余且得予、元君覺、使人占之、曰、此神龜也、君曰、漁者有余且乎、左右曰、有、君曰、令余且會朝、明日余且朝、君曰、漁何得、對曰、且之網得白龜焉、其圓五尺、君曰、獻若之龜、龜至、君再欲殺之、再欲活之、心疑卜之、曰、殺龜以卜吉、乃刳龜、七十二鑽而無遺筴、仲尼曰、神龜能見夢於元君、不能避余且之網、知能七十二鑽而無遺筴、不能避刳腸之患、如是則知有所困、神有所不及也、雖有至知、萬人謀之、魚不畏網而畏鵜鶘、去小知而大知明、去善而自善矣、嬰兒生無石師而能言、與能言者處也、

を問ふに對へて去子之驕氣與多欲、態色與淫志、是皆無益於子之身と曰ふと同義なり、〔蹙然〕成玄英曰く、驚恐の貌、〔業可得進乎〕「釋文」に、仁義を行ふ可きやと問ふなり、〔驁萬世之患〕按ずるに、呂覽下賢篇、志驁祿爵の「高注」に曰く、驁は輕なりと、此處の驁も亦當に輕と訓すべし、驁萬世之患とは、萬世の後の久きに亙たる禍患を輕んじて之を顧みざるを曰ふ、〔抑固窶邪〕「爾雅」釋言に、窶は貧なり、按ずるに、其識見の鄙小、近きを見て遠きを見る能はざるを以て、家の貧陋に喩へなるなり、郭崇燾曰く、蓄備する所無き之を窶と謂ふ、其心蓄備なきを言ふと、從ふべし、〔亡其略弗及邪〕郭慶藩曰く、亡讀て無の如くす、亡其は轉語なり、「史記」の范雎蔡澤列傳の亡其言臣者賤不可用乎、「呂氏春秋」愛類篇の亡其不得宋且不義、猶攻之乎、「韓策」（戰國策）の又亡其行子之術、而廢子之謁乎、是れ凡そ亡其と言ふは皆轉語詞なり、〔惠以歡爲驁終身之醜〕按ずるに、惠以歡爲にて一句と爲し、驁の字は下句に屬し、驁終身之醜にて一句と爲す、此の驁も亦輕と訓し、人の歡樂するを以て一時の惠を爲し、而して其の終身の醜辱を輕視するを言ふなり、仁義を施して、一世の艱苦を救ひ、而して其の弊の極まる所、後世人相食ふの慘禍を貽すは、譬へば、乞丐に錢を與へて一時を歡ばせ、而して其終身乞丐の徒たるを免れざらしむるの醜辱を輕視するが如し、〔中民之行進焉耳〕中民の字、亦前の徐無鬼篇に見ゆ、宣穎曰く、庸人なり、按ずるに、中民之行四字を一句と爲し、上文の惠以歡爲、驁終身之醜は中民の行ひなりと斷ず、進焉耳の三字を一句と爲し、焉を此と訓じ、仲尼の業は此の中民の行に進むのみと對へ、進の字正に業可得進乎の進と相照應す、〔相結以隱〕兪樾曰く、李云ふ、隱は病患也と、然れども病患は相結ぶ所以に非ず、「郭注」云ふ、隱栝進之謂也と、然れども隱栝は曲木を正す所以、亦相結ぶ所以に非ざるなり、隱當に訓して私と爲すべし、「呂氏春秋」の圜道篇に分定下不相隱、「高注」に曰く隱は私也と、「文選」の赭白馬賦に恩隱周渥、李善は國語の注を引て曰く、隱は私也と、相結以隱とは相結ぶに恩私を以てするを謂ふ、舊說皆非なり、〔閉其所譽〕按ずるに、所の字恐らくは非の誤りならん、閉其非譽に作らざれば、兩忘と爲らず、又上文の

に惠與するに其歡欣する所の爲を以てして、其の人の醜辱を輕んじて之を顧みざるは、是れ庸人の行ひなり、汝の業は此の庸人の行ひに進むを得るのみ、汝の爲す所は、人を引いて善に入らしむるには、聖邪賢不肖君子小人是非善惡等種々の名を以てし、人と相結ぶには、仁惠の恩私を以てす、然れども斯く分別を立て、區々たる恩私を施すは、卽ち道を失ふ所以なれば、堯を聖人として譽め、桀を暴君として非るよりも、堯桀兩つながら忘れて毀譽すること無く、道と化して相樂むに如かず、之に反して是非を分つは、德を毀傷するに非ざるは無く、心を外物に動かし、天下を經營せんとするが如きは、邪僻に非ざるは無し、聖人は則ち從容無心、機に應じて事を爲す、故に每に成功あり、汝は何爲れぞ常に是非を分別し、四海を經營せんとすることを心に載せて、從容無爲なる能はざるや、此くの如くなれば、汝は終身躬矜容知を除去する能はず、君子たることも亦能はざらん、

【解義】〔老萊子〕史記老莊申韓列傳に、或曰、老萊子亦楚人也、著書十五篇、言道德家之用、與孔子同時云とありて、老聃と同人かと疑ふ、成玄英曰く、老萊子は楚の賢人の隱るゝ者なり、嘗て蒙山に隱る、楚王其の賢を知り、使を遣し、召して相と爲さんとす、其の妻樵を採り、歸りて門前に車馬の迹あるを見、其故を問ふ、老萊曰く、楚王我を召して相と爲さんとすと、妻曰く、人の有を受くる者は、必ず人の制する所となりて、己れ人の制を爲す能はずと、妻遂に捨てゝ去る、老萊之に隨ひ、夫負ひ妻戴きて江南に逃れ、之く所を知るなし、〔脩上而趨下〕成玄英曰く、脩は長なり、趨は短なり、「史記」孔子世家に自要以下不及禹三寸とあり、則ち腰より上が長くして腰より下が短きなり、〔末僂而後耳〕「釋文」に李云ふ、末上は頭前を謂ふなり、又背脊を謂ふなり、孫詒讓曰く、「說文」に、周公韈僂、或言背僂、韈僂卽末僂と、是れ許は末を以て背と爲すなり、「淮南」地形訓に、其人面末僂修頸、「高注」に云ふ、末は脊なりと、李の後義正に同じ、「釋文」に司馬云ふ、後耳は耳後ちに卻く、〔不知其誰氏之子〕東條保曰く、誰氏之子と曰ふは、之を輕侮するなり、「孟子」の臧氏之子、論語の鄹人之子、春秋の武氏之子、仍叔之子の如き皆是れなり、〔去汝躬矜與汝容知〕「史記」老莊申韓列傳に、老子孔子の禮

進乎、老萊子曰、夫不忍一世之傷、而驁萬世之患、抑固窶邪、亡其略弗及邪、惠以歡爲驁、終身之醜、中民之行、進焉耳、相引以名、相結以隱、與其譽堯而非桀不如兩忘而閉其所譽、反無非傷也、動無非邪也、聖人躊躇以興事、以每成功、奈何哉其載焉、終矜爾、

【大意】　此章は、老萊子が、孔子の世民の傷害を憐み、仁義を施して之を救はんとするは、萬世の後に大害を貽す者也として之を責め、是非を齊くし、堯桀を忘れ、道の中に從容無爲なるべきを曰ふ問答を假設し、有爲の治を排撃し、齊物論大宗師諸篇の意を說く、

【通釋】　老萊子の弟子が野に出でゝ薪を採り、仲尼に遇へり、然れども弟子は未だ其の仲尼なることを知らず、反りて老萊子に告げて曰く、今日彼の野外に於て一の異人を見たり、其の人上半身は頗る長くして下半身は短く、其の背は曲僂して、耳は稍後に附き、其目つきによりて觀るに、其の志は四海の內を經營して治平を致すを以て自ら任ずる者の如し、弟子は其族姓の何と曰ひ何人の子なるやを知らずと、老萊子曰く、是れ必ず魯の孔丘ならん、汝再び往きて喚び來れと、弟子其言の如く迎へに往きて連れ來れり、老萊子乃ち仲尼に謂うて曰く、丘や、汝の身を飾りて莊重にすることゝ、汝の容貌を智慧者らしく裝ふことゝを除き去れ、是れ皆害ありて益なき者なり、之を除き去らば卽ち君子と爲らんと、仲尼揖して少く退き、蹙然と驚き恐れて、容を改めて曰く、矜を去り知を去らば、果して仁義を斯世に行ひ、治平の事業を成すことを得べきやと、老萊子曰く、現在の世の亂れて、庶民の悲傷すべきに忍びず、之を救はんとして仁義を唱道し、其弊の及ぶ所、萬世の後には人々相食ふに至らんとするに、其禍患を輕視して之を思はざるは、抑ふに汝の胸中固より蘊蓄無きが爲めか、然らざれば汝の智略は萬世の後までを洞觀する能はざるか、人

らざる者なりと、〔詩を引きて是非を顚倒し、珠を含む者を以て非となし、之を奪取するを以て是と爲す、且つ大儒小儒の問答自ら詩句を爲して、一々儒者の口氣あり、〕是に於て彼の小儒、死者の鬢毛を撮み、指にて頤の下を按へ、他の一人の小儒、金椎を以て頤を打ち、徐に其頰を引き別け、口中の珠を傷くること無くして取り出したり、〔大儒小儒の問答は則ち詩にして、接其鬢以下、珠を取り出すの容は則ち禮なり、此一章は、胠篋篇に成子併與其聖治之法而盜之と曰ひ、及び盜跖が盜の道を說き、聖勇義知仁の五者備はらずして能く大盜と成る者は天下に未だこれあらずと曰ふを叙すると同じく、儒教の天下を害すること多きを論ずるなり、

【解義】〔臚傳〕「釋文」に臚は力於反一音盧と見えたり又「釋文」に、蘇林漢書に注して云ふ、上より傳語して下に告ぐるを臚と曰ふ、臚は猶行の如しと、〔東方作矣〕「釋文」に、司馬云ふ、日出を謂ふなり、作若押韻、〔裙襦〕裙は裳なり、襦は肌に親き衣、卽ち襦袢なり、襦珠押韻、〔靑靑之麥生於陵陂〕「釋文」に司馬云ふ、此れ逸詩、死人を刺るなりと、陵は冢なり、陂は陵側の傾斜せる處なり、〔死何含珠爲〕古は貴人を葬るには、口中に珠を含ましむ、死後にも餓えざらんことを欲してなり、陂爲韻、或は爲を下句に屬するは誤りなり、〔接其鬢〕成玄英曰く、接は撮なり、〔壓其顪〕「釋文」に、壓本亦擪に作る、同じ、字林に云ふ、擪は一指にて按ゆるなり、司馬云ふ、顪は音「カイ」頤の下の毛なり、〔儒以金錐〕「藝文類聚」の寶玉部に此を引き、儒を而に作る、是に似たり、金錐は金屬製の錐なり、黃金に非ず、〔控其頤〕成玄英曰く、控は打なり、

老萊子之弟子出薪、遇仲尼、反以告曰、有人於彼、修上而趨下、末僂而後耳、視若營四海、不知其誰氏之子、老萊子曰、是丘也、召而來、仲尼至、曰、丘去汝躬矜與汝容知、斯爲君子矣、仲尼揖而退、蹙然改容而問曰、業可得

と、縣令の官名は秦以後に始まるを以て、此の諸說皆官名と爲さゞるなり、胡文英曰く、沈諸梁は楚の葉縣尹と爲り、穆公縣子を召して問ふ、當時も亦縣令あり、特未だ天下に通じて之を稱せざるのみ、況や竿累灌瀆は皆小の意あり、縣賞と意與かる無しと、今之に從ふ、

儒以詩禮發冢、大儒臚傳曰、東方作矣、事之何若、小儒曰、未解裙襦、口中有珠、詩固有之、曰、靑靑之麥、生於陵陂、生不布施、死何含珠爲、接其鬢、壓其顪、儒以金權控其頤、徐別其頰、無傷口中珠、

【大意】 儒者の詩禮を以て冢を發きて盜を爲すことを敍す、大儒は冢外に立ち、小儒は冢中に入り、互に詩を以て問答し、又詩を以て口中の珠を取るも道に背かざるを言ひ、遂に其の之を取るの容の禮に合するを敍す、陋儒詩書の迹に拘はりて、其意を失ひ、以て不善を爲す、假りて儒敎の世に害あるを謂ふなり、

【通釋】 儒は詩を誦し禮を講じ、仁義忠孝を說けども、其用ひ方如何によりては、大に世の害となることあり、小人儒の最下なる者に至りては、詩禮を以て冢を掘り發き、死者に附けて埋みたる衣服珠玉等を盜む者あり、其頭分なる大儒が外より、墓穴中に入り居る小儒に謂うて曰く、已に曉近くなりたれば、やがて日も出でんとす、仕事の模樣は如何ぞやと、小儒穴中より對へて曰く、たゞ上衣を剝ぎたるのみにて、下裳と襦袢とは未だ脫がせざれども、其の口中を捫するに、含みたる珠あり、こは意外のまうけ物なり、此は奪取るも非なることなし、其の故は詩に固より之あり、詩の意は、青々たる麥は陵陂に生ぜり、古より陵墓の久しく存する者無く、未だ幾ばくならずして麥秀の墟と爲るを常とす、且つ人にして生前に恩德を布かざる者は、死したる後に何ぞ珠を含みて長に餓ゑざるを望むべけんと、此の墓中の死者も、生前に恩德を布かざりし不仁者なれば、死後に珠を含むべか

はざるべし、何となれば、其の志ざす所極めて小なればなり、此と同じく、彼の淺陋なる說辭を飾りて、自ら得たりと爲し、以て一地方の縣令に向つて採用を求むる者は、宇宙の眞理を洞觀する大達見とは亦甚だ遠し、到底之に及ぶを得ざるべきなり、是を以て未だ任氏の風俗、卽ち眼前の小事に心を勞せず、最も大なる者に心を用ふることを聞かざる者は、以て世を經綸する能はざるの庸才にて、道を去ること亦甚だ遠し、

【解義】〔任公子〕「釋文」に李云ふ、任は國の名と、公子は君の子なり、〔巨緇〕「釋文」に司馬云ふ、大なる黑綸なり、〔犗〕「釋文」に犍牛なり、又說文を引て云く、騬牛なり、司馬云ふ、犧牛なりと、增韻には、凡べて畜の健强なる者を犗と曰ふとあり、〔蹲乎會稽〕蹲は踞なり、「シリウタギ」と訓す、尻を會稽山の巔に安んじ、兩足を伸べて坐するなり、〔錎沒〕「釋文」に錎音陷、字林を引て曰く、猶ほ陷字の如きなり、〔鶩揚而奮鬐〕漢書音義に亂れ馳するを鶩と曰ふとあり、鬐は音「シ」「ヒレ」と訓ず、魚脊なり、〔侔〕齊等なり、〔憚赫千里〕「釋文」に、千里皆懼るを言ふ、林希逸云ふ、憚赫は驚恐なり、〔若魚〕「釋文」に司馬云ふ、大魚名は若、海神なり、或は云ふ、若魚は猶ほ此魚と言ふが如しと、今或說に從ふ、〔腊〕乾肉なり、〔制河以東〕「釋文」に、制は諸設反、字當に浙に作るべし、浙水以東を謂ふなり、郭慶藩曰く、古へ制の聲は浙と同じ、「論語」顏淵篇、片言可以折獄者、「鄭注」に魯折を讀で制と爲すと曰ひ、「書」呂刑の制以刑、「墨子」尙同篇には制を折に作る、〔蒼梧〕成玄英曰く、山の名、嶺南に在り、舜を葬りし所、〔輇才〕「釋文」に李云ふ、輇は人を量るなり、本或は軨に作る、軨は小なり、本又或は輕に作ると、林希逸曰く、輇は孱と通ずと、人を量るにては義を成さず、小才と爲して解すべし、〔揭竿累〕「釋文」に累本亦纍に作る、司馬云ふ、綸なり、章炳麟曰く、累は纍の俗省なり、當に別本に從ふべし、〔趣灌瀆〕「釋文」に、本又趨に作る、司馬云ふ、灌瀆は漑灌の瀆なり、〔鯢鮒〕「釋文」に李云ふ、皆小魚なり、〔干縣令〕成玄英曰く、干は求なり、縣は高なり、令は令聞を謂ふと、林希逸曰く、縣令は猶今の揭示の如し、焦竑曰く、縣令は猶賞格の如し、其の示す所の令格に合はんことを求むるを言ふ

而腊之、自制河以東、蒼梧已北、莫不厭若魚者、已而後世輇才諷説之徒、皆驚而相告也、夫揭竿累、趨灌瀆、守鯢鮒、其於得大魚難矣、飾小説以干縣令、其於大達亦遠矣、是以未嘗聞任氏之風俗、其不可與經於世亦遠矣、

【大意】　任公子の大魚を釣り衆民を飽かしめたる事を叙し、鯢鮒を守る小釣者の大魚を得る能はざるを言ひ、以て淺陋なる説を飾り、徒に名譽を求むる儒者の、大道を知らず、經世濟民する能はざるを論ず、○任公子を以て至人に比し、大魚を道に比して、道の以て天下の民を濟ふに足るを言ひ、竿累を揭る者を以て儒者に比し、鯢鮒を以て儒教に比し、遂に之を指して、小説を飾り縣令を干むる者となし、世を經すべからず、亦遠しと曰うて之を結び、以て大道に志さゞる者は、經世濟民の業を爲す能はざるを言ふなり、

【通釋】　任國の公子が、大なる鉤と大なる縄とを爲り、五十頭の健强なる牛を餌として携へ、會稽山の巓に踞して、釣竿を東海に投じ、毎朝釣りたるに、一ケ年を經れども魚を得ざりき、已にして、ある朝非常に大なる魚が餌を食ひ、巨鉤を含み、牽きて海底に陷沒して下り、少らくして又大速力を以て水面に馳せ揚りて、鬐を奮へば、白波山の如くに起り、海水震うて飛び立ち、其聲の大なること鬼神に等しく、千里の遠き地方までをも畏懼せしめたり、任の公子已に此の如き大魚を得て、之を切り離して腊と爲し、人に食はせたれば、浙河より東、蒼梧山より北なる、廣き地域に居住する人民は、皆此の魚に飽かざる者なかりき、已にして後世の小才にして徒らに書を讀み言説する者、皆此の大魚の事を驚きて相告げ、之を疑はざるはなし、以上任公子の事を叙し、以下これに就きて論じて曰く、彼の小竿細絲を肩に揭け、田圃に灌ぐ用水の小溝に趨きて、鯢や鮒の如き小魚を釣らんと見守る釣者は、大魚を得ることは甚だ難く、到底之を得る能

れり、侯の邑金を得たる後ち、我に三百金を貸さんと言ふは、豈此に類せずや、それ迄には吾將に餓死せんとすと、〔性命を保全するの急なるを言はんが爲めに、莊周粟を監河侯に貸るの一話を設けて、性を生命に喩へ、監河侯の邑金を得るの後に三百金を貸さんと言へるの、緩急輕重を失へるを責めんが爲め、更に轍鮒の一話を設けて、己の生命の危急に迫れるを告げ、而して性命を保全するの急にすべき主意に至りては、一も言及せず、讀者をして不言の中に之を得しむ〕、

【解義】〔監河侯〕「說苑」には魏文侯に作る、成玄英曰く、監河侯は魏文侯なりと、蓋し說苑に據るなり、魏の地は河の東西に跨がる、故に當時又呼で監河侯と爲すか、〔車轍〕轍は車行の跡なり、多數の車皆之に由る、故に其跡窪みて雨潦を留め、鮒魚を棲ましむるに足る、たゞ日を待たずして水涸れんとす、鮒の急に水を求むる所以なり、〔鮒魚來〕來は語助にて意義なし、又猶は乎の如し、往來の來と爲すは誤りなり、〔波臣〕「釋文」に司馬云ふ、波蕩之臣を謂ふと、海若の小臣、波蕩して之に居り、海に還る能はざるなり、〔君豈有斗升之水而活我哉〕王引之曰く、豈は猶ほ其のごとし、〔吳越之王〕褚伯秀曰く、王は當に是れ土の字なるべし、〔西江〕按ずるに、吳の都は大江の東に在り、故に江を呼びて西江と爲すなり、成玄英は以て蜀江と爲す、蜀と吳越と東西相距ること萬里、吳越に遊ぶ者安ぞ蜀江の水を激するを得んや、〔常與〕魚の常に相與にする者、卽ち水を謂ふなり、〔吾得斗升之水然活耳〕王引之曰く、然は猶ほ則のごとし、然活は則活なり、〔曾〕乃なり、〔枯魚之肆〕「釋文」に李云ふ、枯魚は猶ほ乾魚の如し、成玄英曰く、肆は市なり、

任公子爲大鉤巨緇、五十犗以爲餌、蹲乎會稽、投竿東海、旦旦而釣、期年不得魚、已而大魚食之、牽巨鉤、錎沒而下、騖揚而奮鬐、白波如山、海水震蕩、聲侔鬼神、憚赫千里、任公子得若魚、離

越之王、激西江之水而迎子、可乎、鮒臣忿然作色曰、吾失我常與、我無所處、吾得斗升之水然活耳、君乃言此、曾不如早索我於枯魚之肆、

【大意】人は當に緩急を審かにすべきを言ふなり、即ち天に禀けたる性を保つは、其最も急にすべきことなるに、徒らに外物を貪りて之を後にせんとするは、監河侯の邑入を待ちて莊周に貸さんとするに同じく、監河侯の邑入を待たんとするは、又莊周の吳越に遊びて轍鮒を救はんとするに同じ、皆緩急輕重を誤まれり、

【通釋】莊周家貧しくして、糊口の資に窮し、往きて監河侯の邸に至り、些少の粟を貸らんことを請ひたり、監河侯曰く、諾せり、但し暫く之を待て、歲の終りに至らば、封內の各邑より百姓の租賦を得んとす、我其の時子に三百金を貸さんとす、其れにて可からんと、莊周心に其無情を怒り、顏色を易へて曰く、周昨日當地に來る時、途中にて後より周を呼ぶ者ありし故、ふと聲する方を顧み視れば、車の通る跡の窪みて少しく水ある處に鮒ありて、我を呼びしなり、周問うて曰く、鮒魚や、子は何の爲めに我を呼びしぞ、鮒對へて曰く、我は東海海若の臣の波蕩して此に來り、海に還る能はざる者にて、甚だ窮困せり、君其れ僅か斗升の水にても有らば、我に貸與して我が生命を活しくれずやと、周曰く、諾せり、但し暫く之を待て、我將に南遊して吳越の王の所に至らんとす、吳越に至りたる上は、西江の水を激動して此の地に至らしめて、子を迎へ取らん、其れにて可からんと、鮒魚忿然として怒色を作して曰く、吾れ我が游泳すべきの水を失ひて、處るべき所なく、轍中の水にして涸るれば、吾將に枯死せんとす、今は只斗升の水にてもあらば、則ち活きるを得るなり、而るに君は吾命の危急に迫れるを思はず、吳越に至りたる上にて、西江の水を激して迎へ取らんなど、、氣永きことを言ふは、豈無情の甚しきに非ずや、西江の水を激して迎へ取るまでも無く、早く吾を乾魚屋の店頭に索むるに如かずと怒

なるも、忠孝なるも奸邪なるも、共に禍難に陷りて、之を逃るゝ所なし、怵惕恐懼して之に從事すと雖も、卒に成る所なし、其心の搖きて定まらざることは、容中に懸かれる旌の如く、意の如くなることあれば則ち慰喜し、意の如くならざれば則ち愁悶し、順境に遇へば則ち沈溺して樂み、逆境に遇へば則ち顚頓困苦す、必すべからざるの外物に執着して、利害の念、内に相摩すれば、凡べて其意を達すべきのことは、爲さゞる所無きことと、木の相摩擦して火を發するが如くし、世の庸衆人は、皆自ら生ずるの火を以て其性命の和を焚く、性の淸明なることと月の如きも、物欲の炎火に勝つ能はず、是に於てか性命の情全く毀損せられて、天理盡く滅亡するに至る、

【解義】〔螴蜳不得成〕螴蜳は解し難し、「釋文」に司馬云ふ、螴蜳讀で忡融と曰ふ、怖畏の氣を言ふ、成玄英曰く、猶怵惕の如しと、姑く之に從ふ、〔慰暋沈屯〕「釋文」に慰は鬱なり、暋は悶なり、司馬云ふ、沈は深なり、屯は難なり、成玄英は、慰を慰喜、沃を沈溺と爲す、今「成疏」に從ふ、〔生火甚多〕上文の木與木相摩則然を承け、利害の念内に相摩すれば、權謀術數爲さゞること無く、以て其性命を毀傷すること、木の自ら燃ゆるが如きを謂ふ、〔月固不勝火〕林希逸曰く、人の天に得る至和の理は、猶月の如し、唯物欲に昏まさる、其炎、火の如し、故に其月たる者之に勝つ能はず、遂に和を焚くに至ると、從ふべし、郭象月大火小を以て之を解するは、非なり、〔僓然而道盡〕「釋文」に僓音頽とあり、僓然は頹隳傷壞の貌くづれやぶるゝことと、道盡は天理滅盡するを謂ふ、

莊周家貧、故往貸粟於監河侯、監河侯曰、諾、我將得邑金、將貸子三百金、可乎、莊周忿然作色曰、周昨來有中道而呼者、周顧視、車轍中有鮒魚焉、周問之曰、鮒魚來、子何爲者邪、對曰、我東海之波臣也、君豈有斗升之水而活我哉、周曰、諾、我且南遊吳

【解義】〔木與木相摩則然〕兪樾曰く、「淮南子」原道篇にも亦兩木相摩而然と云ふ、然れども兩木相摩するも、未だ其然ゆるを見ず、下句に金與火相守則流と云へば、疑ふらくは此句も亦當に木與火に作るべし、下文に水中有火乃焚大槐と云ひ、又利害相摩、生火甚多、衆人焚和、月固不勝火と云へば、是れ此章多く火を言ふ、益々此文の當に木與火たるべきを知ると、按ずるに、木と木と相摩して能く火を生ず、本邦木曾山の檜相摩して火を發し、往々自ら燃ゆ、此れ其明證なり、本文のまゝにて義通ず、兪樾從ふべからず、〔金與火相守〕守は位を守り城を守るの守の如し、執りて離れざるを謂ふ、〔天地大絯〕「釋文」に絯音駭とあり、陸樹芝曰く、絯は束なり、天地篇に方且爲物絯とあり、是れ牽絆して解けざるの意、此に大絯と云ふは蓋し氣舒びずして紛亂するなりと、陸說從ふべし、〔水中有火〕「釋文」に司馬云ふ、電を謂ふなりと、雷電は多く雨を伴ふ、故に水中と曰ふ、〔焚大槐〕電火の爲めに樹木を焚くを謂ふなり、特に大槐と曰ふは、槐は能く火を取るの性を具ふるを以てなり、故に「淮南」氾論篇にも大槐生火とあり、

有甚憂兩陷而無所逃、螴蜳不得成、心若懸於天地之間、慰暋沈屯、利害相摩、生火甚多、衆人焚和、月固不勝火、於是乎僓然而道盡、

【大意】外物に執着すれば、爲す所の善惡に拘はらず、必ず禍難に陷る、其故は利害相摩して生ずるの心火を以て、性命の情を焚毀するを以てなるを說く、○以上三節を合して一章と爲す、第一節は、外物の必すべからざるを人事を以て證明し、第二節は、更に木金陰陽の火を生ずるを以て之を證し、第三節は、前二節を合し、外物の爲めに心を勞すれば、自ら火を生じて其の性を焚毀すること、木の自ら燃ゆるが如しと結び、人の自ら其の性を養ふことを忘れ、必すべからざるの外物に馳せて性命を毀傷するを戒めたるなり、

【通釋】性命の情を養ふ能はず、心を外物に馳せて、甚だ之を憂ふるときは、其の爲す所は、善なるも惡

〔伍員流於江〕伍員字は子胥、胠篋篇に見ゆ、夫差を忠諫して、夫差之を殺し、馬皮を取りて袋を作り、鴟鳥の形を爲し、伍員の屍を盛りて之を江水に浮ぶ、故に流於江と云ふなり、〔萇弘死於蜀〕萇弘は周の靈王の忠臣なり、亦胠篋篇に見ゆ、成玄英曰く、萇弘讒に遭ひ、蜀に放歸せらる、自ら忠にして讒に遭ふを恨み、遂に腸を剞きて死す、蜀人之に感じ、匱を以て其の血を盛る、三年にして化して碧玉となる、乃ち精誠の至りなり、〔化爲碧〕「呂氏春秋」には藏其血三年化爲碧玉」とあり、「太平御覽」の八百九に司馬を引て云ふ、萇弘忠にして流さる、故に其の血朽ちずして化して碧と爲るとあり、〔孝已憂〕「釋文」に李云ふ、殷の高宗の太子、成玄英曰く、後母の難に遭ひ、憂苦して死す、〔曾參悲〕「釋文」に李云ふ、曾參至孝、父の憎む所と爲り、嘗て糧を絶たる、而して後に蘇す、成玄英曰く、曾參至孝にして父母之を憎み、常に父母に打たれ、死地に鄕す、故に悲泣するなり、

木與木相摩則然、金與火相守則流、陰陽錯行則天地大絯、於是乎有雷有霆、水中有火、乃焚大槐、

【大意】木石金火陰陽を引き、外物の必すべからざるを證し、且つ以て人事に比す、

【通釋】木は本と火無き者なり、然れども木と木と相摩擦すれば則ち火を發して燃ゆ、金は至て堅き者なり、然れども之を守るに火を以てすれば、則ち溶解して流る、陰陽相和調すれば無事なるも、若し錯雜して舒ぶることを得ざるときは、天氣と地氣と大に紛亂し、是に於て雷と爲り霆と爲りて萬物を震動し、雨中に電火ありて下擊し、大槐を焚燒することあり、以上三種の火或は同類相摩するによりて生じ、或は二物相克するによりて生じ、或は陰陽の搏擊によりて生じ、其の生ずる所は同じからざるも、焚燒の災は則ち同じ、以て人の善惡忠孝奸邪同じからざるも、同じく禍害に罹るに比すべし、火患の防ぎ難きを見て益々人事の必し難きを見る、是れ皆務むる所の外に在るを以てなり、唯能く外を務めずして內を務むれば、死生の爲めに變ずることなし、

箕子狂、惡來死、桀紂亡、人主莫不欲其臣之忠、而忠未必信、故伍員流於江、萇弘死於蜀、藏其血三年而化爲碧、人親莫不欲其子之孝、而孝未必愛、故孝己憂而曾參悲、

【大意】外物の必ず可からざるを言ひ、善惡の其報を同くし、忠臣孝子の君父に信愛せられざりし人事を擧げて之を證す、

【通釋】凡べての外物は、皆當てになる者に非ず、善き者も必ずしも身を保つ能はず、さりとて惡者も亦禍を免るゝこと能はず、故に忠臣の龍逢は誅せられ、比干は戮せられ、箕子は佯りて狂人と爲りて僅に生を保つを得たり、又佞臣の惡來も殺され、暴君の桀紂も亡ぼされたり、外より來る應報には、一定の標準なきこと此の如し、且つ人君たる者は、皆其の臣の己に忠義を盡くさんことを欲せざるはなし、而るに忠臣は必ずしも君に信ぜらるゝ者に非ず、故に伍員は其の君の呉王夫差に殺されたる上に、其の屍を江に流され、萇弘は蜀に放たれて自殺せり、蜀人之を哀み、其の血を器物に入れて保存し、三年の後出して之を見れば、化して碧玉と爲れり、其の精誠なること此の如きも、君には信ぜられざりしなり、人の親たる者は、皆其の子の己に孝行を盡くさんことを欲せざるはなし、而るに孝子は必ずしも親に愛せらるゝ者に非ず、故に孝己は憂苦して死し、曾參は父に憎まれて悲みたり、父子は天性、君臣は義重きに、猶至忠至孝の愛せられず知られざるあり、況や世事萬端、關係の遠き者、何ぞ其の應報を當てにすべけんや、

【解義】〔外物〕郭慶藩曰く、文選嵇叔夜養生論の注に司馬を引て曰く、物事也、忠孝內也、外事咸不信受也と、「釋文」に無し、性命以外の事物皆之を外物と爲す、〔龍逢比干〕人間世及び胠篋篇に見ゆ、〔箕子〕大宗師篇に見ゆ、成玄英曰く、殷紂の庶叔なり、忠諫して從はれず、紂の害を懼れ、佯り狂して奴と爲る、〔惡來〕紂の佞臣なり、「史記」の殷本紀に云ふ、惡來有力、事紂、惡來善毀讒諸侯、武王伐紂、幷殺之也と

阻は礙なりと曰ふ、是れ玄英の見る所の本は阻に作りしなり、従ふべし、林雲銘の往くと爲して解するは非なり、〔言之無也〕前の議之所止に同じ、人知の知るべからざる所なるを以て、此に止めて其以上を言論せざるを言ふなり、〔言之本也〕本は猶始の如し、許多の言論此の私知を以て假定したる莫爲或使よりして生ずるを謂ふ、〔胡爲於大方〕成玄英曰く、胡は何なり、方は道なり、何ぞ以て大道を語るに足らんやと言ふなり、〔盡道〕盡は皆なり、窮極の義に非ず、

名言

凍者假衣於春、暍者反冬乎冷風、

生而美者、人與之鑑、不告則不知其美於人也、若知之、若不知之、若聞之、若不聞之、其可喜也終無已、人之好之亦無已、性也、聖人之愛人也、人與之名、不告則不知其愛人也、若知之、若不知之、若聞之、若不聞之、其愛人也終無已、人之安之亦無已、性也、

舊國舊都、望之暢然、雖使邱陵艸木之緡入之者十九、猶之暢然、

力不足則僞、知不足則欺、財不足則盜、

指馬之百體而不得馬、而馬係於前者、立其百體而謂之馬也、

邱山積卑而爲高、江河合水而爲大、大人合幷而爲公、

雞鳴犬吠、是人之所知、雖有大知、不能以言讀其所自化、又不能以意其所將爲、

死生非遠也、理不可覩、或之使、莫之爲、疑之所假、

道之爲名、所假而行、或使莫爲、在物一曲、夫胡爲於大方、

言而足則終日言盡道、言而不足則終日言而盡物、

外物第二十六

篇首の外物二字を取りて名づけたるのみにて、意義なし、篇中に言ふ所も、外物不可必の事のみに非ず、拘はるべからず、○凡べて十二章、

外物不可必、故龍逢誅、比干戮、

のみと、「此處の大公調の言ふ所は、精微杳茫にして、甚だ解し難く、禪家の語に類すれども、平心に之を考ふれば、前篇に屢見えたる說と同じく、萬物皆道より出でゝ道に入り、道は言ふべからず、言ふべきは道に非ずとの意を論じたるに過ぎざるなり、此の意を了して靜に之を讀めば、自ら瞭解する所あるべし、講義は到底其意を盡くす能はざるなり」、

【解義】〔季眞接子〕「釋文」に李云ふ、二賢人、成玄英曰く、並びに齊の賢人、倶に稷下に遊ぶと、郭慶藩曰く、接子は「漢書」の古今人表に捷子に作る、接と捷と字異にして義同じ、「爾雅」に接捷也、郭璞曰く、捷は相接續するを謂ふなりと、慶藩又曰く、「史記」孟子荀卿列傳の索隱に云ふ、接子は古の著書者の名號、〔莫爲〕莫は無と訓ずれども、莫爲は無爲と同じからず、物の起生廢死は皆偶然に出で、他に之を主宰する者無しとするの說なり、〔或使〕兪樾曰く、「禮」祭義の「鄭注」、「孟子」公孫丑の「趙注」並びに云ふ、或は有なりと、此文或と莫と對し、莫は無なり、或は有なり、「易」の益上九に、莫益之、或擊之と亦莫或を以て相對す、按ずるに、或使は玄妙の道ありて宇宙を主宰し、物を起生し廢死せしむるとの義に非ず、男女の交りによりて子を生み、病氣又は傷害によりて廢死するが如く、皆自己又は他物が之を死生せしむとの說なり、〔孰正於其情〕情は誠なり、眞理を謂ふ、〔孰徧於其理〕東條弘曰く、徧は當に偏に作るべし、字の誤りなり、或は解して周備と爲すは是に非ずと、按ずるに「成疏本」には偏に作る、〔不能以意其所將爲〕上文の例に依れば、意下に脫字あるに似たり、林雲銘は致字を脫すと爲し、東條弘は意下に一本解字あり、是なりと曰ふ、按ずるに解字なきを是と爲す、上文以言讀其所自化の讀字疑ふらくは衍ならん、下文の可言可意に觀て知るべし、〔斯而析之〕斯は割なり、「サク」と訓ず、詩經の斧以斯之の斯なり、析は「ワカツ」と訓ず、分析の析なり、〔精至於無倫〕精は細、倫は類なり、微細比類なきを謂ふ、〔不可圍〕其外を取り圍む能はざるなり、至大を謂ふ、秋水篇に至大不可圍とあり、〔終以爲過〕羅勉道は過を差失と爲す從ふべし、郭象の過去と爲し、成玄英の過患と爲すは共に是に非ず、〔不可忌〕成玄英曰く、忌は禁なり、〔不可徂〕「釋文」に徂一本阻に作ると曰ひ、成玄英も

其名はあり、名あり實あるは、共に物の存在するなり故に二説共に未レ免レ於レ物と曰ふなり、道は固より形質の實なく、又名づけ言ふべからざる者なれば、物の虚に屬し卽ち外に在り、道は强ひて言論するを得べく、又思慮することも得べけれども、之を言へば言ふほど愈々道と遠く離るゝに至る、故に道は到底人の言論思慮するを得べからざるなり、死生は皆道の化による者なれば、未だ生れざる者は、人之を禁止して生れざらしめんとするも、生れ出でゝ止むべからず、已に死したる者は、人之を阻礙して抑留せんとするも能はず、此の死生は人々の皆有る所にして、近く眼前に見、又自ら經來りし所なれども、死生の理は之を視る能はず、季眞の莫爲と曰ひ、接子の或使と曰へるは、此の人智にて知る能はざる所を、疑ふらくは此くの如き事ならんと假りに立てたる、疑惑より來りし議論なりとす、吾れ道の本初を觀察せんとするも、其既往は已に窮まり無くして、始まる所を知らず、又其未來の終りを尋求せんとするも、今後も止まること無くして、其終りを知らず、かく窮まり無く止まり無き者は、言論にて盡くす能はざる所なれば、言論は止めて言ふこと無かるべきなり、たゞ物の千變萬化して無レ始無レ止なると其理を同くするを知るのみ、彼の或使と莫爲とは、此の道の根本に由らず、物によりて立てたる説なるが故に、之を本として何とでも言論するを得べし、而かも其言論は物を離るゝ能はず、物と終始するのみにて、到底眞理に歸着せざるなり、之を要するに、道なる者は形而上に在り、本來無にして、之を形而下の有と爲し、之を名づけ之を言説し得べき者に非ず、之に反して、物は形而下の有なれば、如何に巧妙に論ずるも、之を推して無に歸せしむる能はず、道は本來無なれば、其道といふ名さへも、唯假りに名づけて行ふのみ、況や之を言論することの不可なるは、固より明かなり、而して彼の或使と莫爲との二道は、唯形而下の物の一偏に就て言ふのみなれば、大道に於ては何の得る所なく、何の功益も無き説なるのみ、故に若し言論して十分に眞理に徹底し得るならば、終日言論するも、盡く物ならざるはなし道と物との極處は、言論は之を載せ盡くす能はず、默して言はざるも亦之を載せ盡くす能はず、言を除非し默を除非し、心に於て其の極處を自得するに在る

以て、疑惑より之を說き、物に就きて立てたるのみにて、萬物の道に出づるを知らざる說なり、故に共に誤說たるを免れず、物は言論するを得べきも、道は言論すべからず、たゞ之を心に自得するに外ならずと、道と物とを比較し、反覆論辯して道を明かにす、〇少知問於大公調より此に至るまでの四節を合して一章を爲す、第一節は丘里之言を假りて、道の萬不同を合し萬物を統べて無名無爲なるを言ひ、第二節は、道なる名も、假りに名づけたるに過ぎざるを言うて、道の名に拘泥すべからざるを說き、第三節は、人知は唯物を極むるを得るのみにして物の起生する本原は道の化成する所に出で、人知の及ばざる所なれば、措て論せざるべきを言ひ、第四節は季眞の莫爲接子の或使二說の、皆徒らに知るべからざることを妄論して、遂に物を離れず、本原の道に在るを知らざる誤說なるを辨じ、時人の迷謬を覺醒す、畢竟死生は道の化に出づるを以て、濫りに之を論議することを止め、知らざるを知らずと爲して、天命に順應すべきを言ふなり、

【通釋】　物の起生する本原は、人智の知る可からざる者なりとの言を聞きて、少知は更に季眞接子二家の說を擧げて其當否を問うて曰く、季眞は物の起生廢死は皆偶然に出で、之を主宰する者無しと言ひ、接子は自己又は他物が之をせしむる者ありと言ふ、此の二說何れか眞理に合ひ、何れか合はざるや、大公調對へて曰く、雞の鳴き狗の吠ゆるは、是れ何人も皆見て知る所なり、今一步を進めて、雞は何によりて鳴き狗は何によりて吠ゆる樣に造化せられたるやといふに至れば、大智の人と雖も之を說明すること能はず、又此の後に何を生ぜんとするか、何を死せしめんとするか、道の爲さんとする所のことは、之を思慮して得る能はざるなり、道の至妙なることは、物を分剝して、至微至小類ひ無きの極に至り、之を大にしては、天地の如き、外より包圍すべからざる至大の物に至るまで、皆道の造化にあらざるはなし、而るに死生は物の之を使せしむるあるに由ると爲し、或は偶然にして主宰する者なしと爲すは、皆物に就て之を言ふに過ぎず、物を主宰し化成する所の道あるを知らざる議論なれば、終に過誤たるなり、猶之を詳言すれば或使の說は、物之を使しむと言ふなれば、實物あり、莫爲の說は、偶然に出づと爲すなれば、虛なれども、

運之相使」按ずるに、橋は卽ち橋起の橋、欲惡去就の情運爲し互に相制使するを謂ふなり、成玄英の五行運動遞に相驅役すと曰へるは、恐らくは非なり、「不隨其所廢不原其所起」按ずるに、廢は死を謂ひ、起は生を謂ふ、起の字上文少知の問ひの起に應ず、

少知曰、季眞之莫爲、接子之或使、二家之議、孰正於其情、孰偏於其理、大公調曰、雞鳴犬吠、是人之所知、雖有大知、不能以言讀其所自化、不能以意其所將爲、斯而析之、精至於無倫、大至於不可圍、或之使、莫之爲、未免於物而終以爲過、或使則實、莫爲則虛、有名有實、是物之居、無名無實、在物之虛、可言可意、言而愈疏、未生不可忌、已死不可徂、死生非遠也、理不可覩、或之使、莫之爲、疑之所假、吾觀之本、其往無窮、吾求之末、其來無止、無窮無止、言之無也、與物同理、或使莫爲、言之本也、與物終始、道不可有、有不可無、道之爲名、所假而行、或使莫爲在物一曲、夫胡爲於大方、言而足、則終日言而盡道、言而不足則終日言而盡物、道物之極、言默不足以載、非言非默、議其有極、

【大意】　此の第四問答は、季眞の莫爲と、接子の或使の二說は、皆物の起生する本原の知るべからざるを

治め、而して春夏秋冬の四時は、春は冬に代り、夏は春に代り、秋は夏に代り、冬は秋に代る、又春は夏を生じ、夏は秋を生じ、秋は冬を生ず、而して之を反面より見れば、春は冬を殺し、夏は春を殺し秋は夏を殺し、冬は秋を殺す、此の陰陽四時の消長推移によりて萬物生じ、萬物已に生ずれば、必ず情無きこと能はず希望や厭惡や、去らんとし就かんとするの情、是に於て盛んに起り、雌雄各々其の好惡する所によりて、或は分れ或は合すること常に有り、又物の世に在る間には、表面に安きことあれば、裏面に危きことあり、此に危きことあれば彼に安きことありて、常に相變易し、福は禍の倚る所、禍は福の基づく所にして、常に相生じ、前に緩なれば則ち後に急、前に急なれば則ち後に緩にして、常に相摩し、聚まること久しければ則ち必ず散じ、散ずること久しければ則ち必ず聚まり、常に相因りて成す、此れ皆其の名を指して其の實を求め、其の迹を按して其の精微を窺ひ知るべきなり、かく四時の順序よく循環して相治め、人情の欲惡去就雌雄分合の互に相制使して窮まれば則ち反り、終れば則ち復た始まるは、此れ固より物の有する所なれば物に卽きて之を推すべし、言論の以て盡くすを得る所、知慮の以て至るを得る所は、唯この形而下の物を極むるのみなり、故に道を知るの人は、死したる者の往く所を追隨して之を知らんとせず、又其の生るゝは何處より起り來れるかと尋求せず、何となれば物の死生廢起は道の自然に爲す所にして、人知の到底知るを得る所に非ざるを以てなり、故に此の死生の原は止めて言論することなかるべし、少知も亦之を知らんと欲すること勿れ、

【解義】〔相蓋〕兪樾曰く、蓋は當に讀んで害と爲すべし、「爾雅」釋言に、蓋割裂也とあり、「釋文」に曰く蓋舍人本に害に作ると、是れ蓋害古字通ず、陰陽或は相害し或は相治む、猶下句に四時相代相生相殺と云ふが如きなり、〔於是橋起〕「釋文」に橋は高勁、起る所の勁疾なるを言ふなり、章炳麟曰く、「爾雅」「釋文」に上句曰喬とあり、橋起は卽ち喬起なり、〔雌雄片合〕「釋文」に、片音判、又如字と、片合は分合に同じ、〔庸有〕成玄英曰く、庸は常なり、〔精微之可志也〕一本微字無し、成疏本有り、微字あるを是と爲す志は記なり、物は精微と雖も猶知る可きを言ふ、〔橋

其の至大なるに因りて、强ひて名づけて之を道と謂ふは則ち可なり、然れども已に道なる名あるも、乃ち有形の道を以て本來無名なる至大なる道に比するを得んや、則ち若し限りたる有形の道と、無名の道との大小を辨別すれば、譬へば猶狗と馬との如し、其の相及ばざること遠しと、老子の所謂道可道非常道、及び吾不知其名、字之曰道の義なり、

【解義】〔期〕限なり、〔號而讀之也〕「釋文」に李云ふ、讀猶語也と、成玄英曰く、世人語之、限曰萬物と是れ成は讀を以て曰と爲すなり、東條弘曰く、「詩」鄘風牆有茨の中冓之言、不可讀也の讀の字に同じと、

少知曰、四方之內、六合之裏、萬物之所生惡起、大公調曰、陰陽相照相蓋相治、四時相代、相生相殺、欲惡去就於是橋起、雌雄片合於是庸有、安危相易、禍福相生、緩急相摩、聚散以成、此名實之可紀、精微之可志也、隨序之相理、橋運之相使、窮則反、終則始、此物之所有、言之所盡、知之所至、極物而已、覩道之人、不隨其所廢、不原其所起、此議之所止、

【大意】此の第三問答は、人智の窮むるを得、言論の盡くすを得る所は、唯形而下の物に就て之を知るを得るのみにして、形而上の事は知るを得べからず、故に萬物の起生する本原は措て言論することなかるべきを謂ふ、

【通釋】少知又問うて曰く、四方の內、六合の中に在る所の無數の萬物は、果して何の處より生じ來るかと、大公調對へて曰く、陰と陽とは、日は東に生じ、月は西に沒するが如く、互に相照らし、又陽盛んにして陰を消し、陰盛んにして陽滅するが如く、互に相害し又陰は以て陽を濟し、陽は以て陰を濟すが如くに相

なし、今按ずるに殉は循なり、面は外形なり、前文の脈理によりて考ふれば、「萬物各自其理に循うて外形を異にするを謂ふなり、故に匹する所あり、差ふ所あり、或は曰く、此の四字衍文、刪去すべしと、〔有所正者有所差〕按ずるに、此の正の字亦匹字の誤りなるべし、此の二句は前の有所拂者而有所宜を反言したるにて、匹は拂に對し、差は宜に對す、若し然らず、正邪の正として讀みては、義を得難し、〔百材皆量〕「釋文」に度は居なり、〔木石同壇〕成玄英曰く、壇は基なり、

少知曰、然則謂之道足乎、大公調曰、不然、今計物之數、不止於萬物、而期曰萬物者、以數之多者、號而讀之也、是故天地者形之大者也、陰陽者氣之大者也、道者爲之公、因其大以號而讀之則可也、已有之矣、乃將得比哉、則若以期辯、譬猶狗馬、其不及遠矣、

【大意】此の第二問答は、道なる名は假りに名づけたる名にして、名は以て實を盡くすに足らず、名に拘はりて道を論ずべからざるを謂ふ、

【通釋】少知又問うて曰く、然らば則ち子の謂ふ所は之を名づけて道と謂はゞ、其全體を盡くすに足るか、大公調對へて曰く、道の名は以て之を盡くすに足らず、譬へば宇宙間の物の數を計ふれば、無限の多數にして、一萬に止まらず、而るに之を限りて萬物と曰ふは、萬は數の多き者なるを以て、假りに號づけて之を萬物と謂ふのみ、之と同じく、此の虛道妙理は本と自ら名無きなり、唯其の功用に據り、假りに强ひて名づけて道と爲すも、理に於ては未だ包括するに足らざるなり、其の故如何となれば、天地は上に覆ひ下に載する物之より大なるはなし、陰陽は物を生育す、氣之より大なるはなし、而して道は又此の大なる天地陰陽を包裹して、何れにも偏頗することなく、公平に之を統ぶる者なれば、其の至大なること知るべし、

爲大〕「釋文」に合水一本作合流とあり、兪樾曰く、水は乃ち小字の誤り、卑高小大相對して文を爲すと、〔是以自外入者—有正而不距〕是以は上文の合并而爲公を承け、以下其の公を爲す所以を詳說するなり、而の字は則と爲して讀む、天運篇に中無主而不止、外無正而不行、由中出者、不受於外、聖人不出、由外入者、無主於中、聖人不隱とあり、此二句と相似たり、兪樾曰く、正は匹字の誤り、則陽篇の正も亦當に匹と爲すべしと、說前に詳なり、就きて參照すべし〔天不賜〕「釋文」に賜は與なり、按ずるに、下文に君不私とあり、賜と私とを互用して其義を一にすれば則ち黨與偏私の意なり、〔五官殊職〕成玄英曰く、五官は古五行に法りて官を置くを謂ふなりと、「左傳」昭公二十九年、蔡墨が魏獻子に對ふる語中に曰く、故有五行之官、是謂五官、實列受氏姓、封爲上公、祀爲貴神、社稷五祀、是尊是奉、木正曰句芒、火正曰祝融、金正曰蓐收、水正曰玄冥、土正曰后土と、〔文武大人不賜〕前後文の例に照せば、文武の下に脫文あるに似たり、宣穎本には殊材の二字あり、然れども郭本已に無く、「釋文」「成疏」も皆然れば、其誤脫は魏晉以前に在り、宣本は蓋し後人の增竄に係る、〔禍福湻湻至〕湻湻を郭象は流行反覆と曰ひ、成玄英は流行の貌と曰ふ、至の字、古來の注家皆下句に屬ず、東條弘曰く、至の字は上に連ねて看る、禍福流行反覆して至るを言ふなり、故に拂る所あり又宜き所ありと、今之に從ふ〔有所拂者而有所宜〕「釋文」に拂は戾なり、郭象曰く此に於て戾と爲るも、彼に於ては或は以て宜と爲ると、按ずるに、上文の禍福湻湻至の句を承くれば、彼我及び前後を兼ねて說くを是と爲す、林希逸曰く、吉凶禍福の至る、倚伏常無し、或は拂逆する所あれども反て宜と爲る、塞翁の馬を得、馬を失ふの意なりと、從ふべし、老子曰く、禍兮福所倚、福兮禍所伏と、「淮南子」人間訓に、塞上之人、有善術者、馬無故亡而入胡、人皆弔之、其父曰、此何遽不爲福乎、居數月、其馬將胡駿馬而歸、人皆賀之、其父曰、此何遽不爲禍乎、家富良馬、其子好騎、墮而折其髀、人皆弔之、其父曰、此何不遽爲福乎、居一年、胡人大入塞、丁壯者引絃而戰、近塞之人、死者十九、此獨以跛之故、父子相保、故福之爲禍、禍之爲福、化不可極、深不可測也と、〔自殉殊面〕此の四字、諸說紛々、適從すべき者

瀰漫し、萬物を生死せしむるも、其名なく、道を體する大人も亦功の名づくべき無し、名無きが故に無爲なり、無爲は卽ち私意の爲す無きの謂にして、自然已むを得ざるの爲は爲さゞる無きなり、合幷して觀る者は此くの如きも、分ちて之を觀れば、四時の終りて復始まるが如くに、天運循環して、世事に變化あり、禍福流行反覆して至る、而して今に於て戾りて禍とする者の、後には宜き福と爲ることあり、我に於て禍とする者の、彼には福と爲る者あり、萬事萬物各自ら其理に循うて外形を異にし、日に來りて我に接す、我に匹して善く合ふ者あり、又差ふ者あるは、拂る所あり、宜き所あると同じ、大人は之を合幷して公を爲し禍福の反覆するも、萬事の殊面なるも、之を觀ること大澤の中に異種無數の土石木材の皆具はり在りて、以て澤の大を成すが如くにし、大山には大小巨多の木や石が雜はりて壇層を同くし、此が積累して大山を成すが如くに觀じ、異を合して大同を成す、是れ大人の德也、子が問ふ所の丘里の言も亦此と同じ、一人一家各異なる所あれども、合して之を觀れば、一鄕の言論と爲り、風俗と爲るなりと、小知は唯丘里の言を問ひたるのみなるに、大公調之を假りて大人の萬物を合幷して公を爲すの道を說く、故に表面は丘里之言を說明するが爲めに、大人之公を假りたるが如くなれども、實は小知の丘里之言の問を假りて、大人之公を說き、以下猶少知の問を發せしめて、漸次に道の玄妙を說くなり、

【解義】〔少知問於大公調〕成玄英曰く智照狹劣なる之を少知と謂ひ、道德廣大公正にして私無く、復能く群物を調順する、之を大公調と謂ふ、少知と大公調との二人を假設し、以て道理を論ずるなり、〔丘里之言〕原書には丘の一畫を闕きて丘に作り、或は邱に改めたるは、後世の人孔子の諱を避けたるなり、「釋文」に李云ふ、四井（一井は八家也）を邑と爲し、四邑を丘と爲す、五家を鄰と爲し、五鄰を里と爲す、古の鄕里井邑士風同じからざること、猶今の鄕曲各自ら方俗ありて物齊同ならざるが如しと、之を分てば、一人一家其言其俗各同じからず、而して之を合すれば、一鄕の風俗と爲り、公論と爲り、他鄕と自ら區別あり此を假りて問を設け、物各小異あれども、道より大觀すれば、萬物皆同じの理を論ずるなり、〔江河合水而

比於大澤百材皆度、觀乎大山木石同壇、此之謂丘里之言、

【大意】丘里の言を解し以て萬事萬物各自ら其理に循ひ外形を殊にすれども、匹する所の者も亦差ふ所あり、大人は之を合弁して一と爲し、大澤の百材、大山の木石と同一の觀を爲し、小異を合して大同を成すを說く、宣穎曰く、天下萬事萬物、萬變萬化、其異非巧歷所能數、然同是道而已、看不破則絲分縷析、各據而未有已、看得破、則一以貫之而已、借丘里之言、發出渾同之道、可謂卽小悟大と、

【通釋】少知といふ人が大公調といふ人に問うて曰く、丘里の言とは如何なる意なりやと、大公調對へて曰く、丘里は十姓の家、百名の人を合し、以て一の風俗を爲すなり、凡べて物は異なれる種々の物を合して、同と爲し、同を解散すれば又種々の異なれる物となる、之を喩ふれば、馬の耳は耳、目は目、口は口、鼻は鼻、鬣は鬣、脚は脚と、其百體を一々指して名づくれば、種々の異なりたる物に分解し了りて、馬なる名稱は無きことゝなる、而るに馬は依然として人の目前に繫がれあるは、其の耳目鼻口鬣脚等の百體を總稱して之を馬と謂へばなり、合散同異の理は此に同じ、是の故に丘山は卑き土石を累積して高きを爲し、江河は小さき水流を合して大と爲り、大人は天下萬物と己とを合弁して公を爲すなり、其の彼我を合弁して公を爲すは、萬物の外よりして入り來る者は、大人天性を保全して主と爲すが故に、毫も私心を執持することなく、之と同和し、大人の心より出だす所の者は、萬物必ずしも私心あるものゝみに非ず、多くは天性を保全するが故に、大人と匹配して其言行を距がず、相合弁して公を爲すなり、猶之を詳言すれば、春は暄く夏は暑く、秋は涼くして冬は寒く、四時各氣を殊にするも、天は其自然に任せて、何れにも偏より與する所なく、之を合弁す、故に四時善く循環して一歲成る、朝廷の五官、各其掌る所の職を殊にするも、君は恭默して其爲す所に任せ、何れの官にも偏より私する所なくして之を綜統す、故に官能其職を盡くして國治まる、文武各其用を殊にするも、大人は其一に黨與せず、故に全德身に備はる、萬物各其理を殊にするも、道は其何れにも偏私せず、故に道は宇宙間に

しと、靈公の同浴と史鰌の進所とは、二事にて同時に非ず、史鰌は外廷の大夫、安んぞ靈公が宮中にて妻妾と同浴するの所に闌入するを得んや、所は君の座所なり、同浴の所と爲す者あれども、非なり、〔搏幣而扶翼〕陸樹芝曰く、搏幣とは猶ほ幣を將ふと言ふが如しと、小臣をして代りて史魚が携ふる所の幣帛を取りて之を將はしめ、且つ其身を扶掖せしむるなり、〔沙丘〕地名、〔石槨〕槨の本字は椁、椁は廓なり、棺を納れて土中に埋む者、木にて造るを常とす、石を用ひたるが故に石槨を謂ふ、〔不馮其子靈公奪而里之〕郭象は子は胤嗣を謂ふなりと曰へるを、郭嵩燾之を非として曰く、石槨に銘あれば、古の葬者が子孫の能く馮依して以て其墓を保つこと無く、靈公得て之を奪ふを謂ふと、「釋文」に里は居處なり、一本に奪而埋之に作るとあり、錄して參考に供す、

少知問於大公調曰、何謂丘里之言、大公調曰、丘里者、合十姓百名而以爲風俗也、合異以爲同、散同以爲異、今指馬之百體而不得馬、而馬係於前者、立其百體而謂之馬也、是故丘山積卑而爲高、江河合水而爲大、大人合并而爲公、是以自外入者、有主而不執、由中出者、有正而不距、四時殊氣、天不賜、故歲成、五官殊職、君不私、故國治、文武大人不賜、故德備、萬物殊理、道不私、故無名、無名故無爲、無爲而無不爲、時有終始、世有變化、禍福淳淳至、有所拂者而有所宜、自殉殊面、有所正者、有所差、

對へて曰く、靈は是れ無道の君に謚すべき名なり、無道の君なりしが故に、靈公と謚せしなりと、次ぎに伯常騫曰く、靈公には三人の妻あり、之と同槽中に混浴せられ、無道なること甚だしきも、大夫史鰌が召對の爲めに君の處に進謁するときは、侍臣をして史鰌の幣物を持ちて之を扶けしめらる、靈公は其の慢らなること彼の如くに甚しきも、賢人を見るには又此くの如くに敬禮を盡くせり、故に亂而不損曰靈の謚法の文によりて靈公と謚せしなりと、次ぎに狶韋曰く、彼の靈公の薨去せられしとき、代々の衞君を葬りし墓地に葬らんことを卜ひたるに、不吉なりしを以て、沙丘に葬らんかと卜ひたるに、吉なりければ、沙丘の地を掘りたるに、數仭にして石の槨を見出だせり、石を洗うて之を視れば、彫り付けたる銘あり、其文に、不馮其子靈公奪而里之とありて、古に此に葬られし人は、其子孫の世話を受くる能はず、墓地荒廢して後に靈公なる者其場處を奪うて之に葬り居らるゝことゝ爲るとの意なり、されば彼の靈公の靈と謚せらるべきは、遠き古より前定し居りたることにて、其平生の行ひに由りたるには非ず、大弢伯常騫の二人は種々に附會すれども、凡そ人事は皆自然に前定しあるの理は、彼の三人の如き少知者は何ぞ之を知るに足らんやと、人の當に自然に順應すべきを謂ふなり、

【解義】〔大史大弢伯常騫狶韋〕　大史の大は音「泰」大史は官名、大弢と伯常騫と狶韋は三人の姓名にて、共に大史の官に在り、〔湛樂〕「釋文」に湛は樂の久しきなりとあり、陳壽昌曰く、湛は耽と通す、〔畢弋〕畢は網の一種、弋は絲を著けて射る矢なり、〔不應相侯之際〕「釋文」に應は應對の應なり、司馬云ふ、諸侯之際は盟會の事と、諸侯盟會の事あるも自ら出でゝ諸侯に應對せざるを謂ふ、〔靈公〕周公の謚法に亂而不損曰靈とあり、又德之精明曰靈とあり、共に靈公の無道と合はず、故に仲尼之を疑ふなり、〔是因是也〕上の是は謚の靈を指し、下の是は靈公の無道を指す、謚法には亂而不損曰靈とあれども、古來暴君は皆靈と謚するを例とす、故に其無道なるに因りて靈と謚せるなりと謂ふなり、〔同濫而浴〕「釋文」に濫は浴器なりとあり、同濫而浴は男女の混浴を謂ふ、〔史鰌奉御而進所〕姓は史、名は鰌、字は魚、衞の賢大夫なり、林希逸曰く、奉御は猶ほ今の召對と言ふが如

を用ふるも此の不知を逃るゝ能はざるを謂ふなり、
〔此所謂然與然乎〕然與然乎は諸家の解一ならず、郭象は自ら然りと謂ふ者天下未だ之を然りとせずと曰へり、按ずるに與は句中の語助にて意義なく、問辭に非ざれば、然與を善乎と同く「然るか」と讀むべからず、此の七字一句は、吾自ら以て然りと爲す所の者、其れ果して然るかと疑詞的に言ひ以て其の洵に然ることを確信して結べるなり、疏本には然與不然乎に作る、「發蒙」に曰く吾所謂不知之知、還是然乎不然乎と今前說を用ふ、

仲尼問於大史大弢伯常騫狶韋曰、夫衛靈公、飲酒湛樂、不聽國家之政、田獵畢弋不應諸侯之際、其所以爲靈公者何邪、大弢曰、是因是也、伯常騫曰、夫靈公有妻三人、同濫而浴、史鰌奉御而進所、搏幣而扶翼、其慢若彼之甚也、見賢人若此其肅也、是其所以爲靈公也、狶韋曰、夫靈公也死、卜葬故墓不吉、卜葬於沙丘而吉、掘之數仞、得石槨焉、洗而視之、有銘焉、曰、不馮其子、靈公奪而里之、夫靈公之爲靈也久矣、之二人何足以識之、

【大意】凡べて人事は自然に前定せる者にて、人の爲す所に由りて定まるに非ざるを謂うて前章の知らざる所を知るべきの義を明らかにす、

【通釋】仲尼が大史の官たる大弢伯常騫狶韋の三人に問うて曰く、彼の衛の靈公は日夜酒を飲み、湛り樂みて國家の政を聽かず、又田獵して網や矢にて禽獸を捕るを事として諸侯の交際にも應ぜず、一身の娛樂の爲めに內政外交共に荒廢せしめたる無道の君なり而るに之を諡して靈公と爲したるは何ぞやと、大弢

はざる者なり、然るに世人は皆其の智の知る所を尊びて、自ら智者なりと爲し、而かも其の人智知り得ざる所を恃みて然る後に始めて眞の知たるを知るなし〔此意は、前にも屢ありたる、人の踏む所の地は僅少なれども、踏まざる所の餘地を賴みて安しといへる喩と同じ〕卽ち眞理の無限なるを知らず、徒らに其の少知を恃みて己に之を知り盡くせりと爲すは大疑惑と謂はざるべけんや、されば、左樣なことを爲すを止めて爲さざるに如かず、如何に爲しても結局は其の知の知らざる所を恃みて、眞知と爲すの眞理たることを逃れ去るを得ず、卽ち此の眞理は終に動かすべからざるなり、さて此の説は吾自ら洵に然りとなして信ずる所なるか、果して然る乎、吾は誠に然りと確信する者なり、

【解義】〔蘧伯玉〕姓は蘧、名は瑗、字は伯玉、衞の賢大夫なり、〔行年六十而六十化〕行年六十にして六十化し、而かも自ら以て是なりと爲さず、有德の者は其の身を終るまで、敢て自ら以て是と爲さず、虛心の至なり、本城實卿曰く年と倶に新にして、善に遷るは湯盤の日新と同じく、儒家の大に尊ぶ所なれども、道家よりして之を視れば、是れ唯人知の至る所に至るのみにて、其の知らざる所は終に之を知る能はざれば、無用の察のみ、取るに足らざるなり、故に先づ之を擧げ、以下其の尊ぶに足らざる所以を明かにするなり、古來の注家皆蘧伯玉六十化の尊ぶべからざるを知らず、故に下文と扞格して通せざるを、强ひて之が解釋を下し、郭象の如きは、能順レ世而不レ係ニ於彼我一故也と曰ひ、順レ物而暢ニ物情之變一然也と曰ひ、我所レ不レ知、物有レ知之者一矣、故用ニ物之知一則無レ所レ不レ知、獨任ニ我知一、知甚寡矣、今不レ恃レ物以知一而自尊レ知、則物不レ告レ我と曰ひて、全く道家の旨を失ひ、或は又儒旨を以て之を解する者あり、爲めに全章の意義分明なるを得ざる也と、一說として錄す、〔可不謂大疑乎〕疑は惑なり、「發蒙」は曰く以其恃ニ知之所レ知、而後爲ニ眞知一此其所ニ以疑一也と、章炳麟曰く、疑は借りて癡と爲す、「說文」に癡不慧也、從レ疒疑聲とありと、郭象以下諸家、皆疑を字のまゝに解せんとするは非なりと、〔已乎已乎且無所逃〕已乎已乎は、知を用ふるは無益なれば之を休止すべきを謂ふなり、無レ所レ逃は、萬物の生ずる根、出づる門は人之を見る能はず、如何に知

篇に曰く、頗爲レ教而過レ不レ識、數爲レ令、而非レ不レ從、巨爲レ危、而罪レ不レ敢、重爲レ任、而罰レ不レ勝と、此と文義相似て、正に過レ不レ識に作り、高誘の注に過を訓して責と爲す、據て以て此文の誤りを訂すべし、過誤りて遇と爲り、又臆改して愚と爲りしのみ、〔民知力竭〕知力竭は知と力と共に竭くるなり、知竭は上の不識不敢を指し、力竭は不勝不至を指す、〔日出多僞士民安取不僞〕日出多僞は、上の匿爲レ物、大爲レ難、重爲レ任、遠二其塗一の事を指し、僞を爲すの本は上に在るを謂ふ林希逸本には安取の取を敢に作り、曰く政令一日僞レ於二一日一、士民安得レ不レ僞乎と、從ふべし、

蘧伯玉行年六十而六十化、未丁嘗不丙始レ於レ是レ之而卒詘乙レ之以非甲也、未レ知三今之所レ謂是之非二五十九非一也、萬物有レ乎生、而莫レ見二其根一、有レ乎出、而莫レ見二其門一、人皆尊二其知之所レ知、而莫レ知下恃二其知之所レ不レ知而後知上、可レ不レ謂二大疑一乎、已乎已乎、且無レ所レ逃レ此、則所レ謂然與然乎、

【大意】區々の人智は終に自然の偉大なるに如かざれば、宜く自然に從ひ無爲なるべきを勸むるなり、

【通釋】衞の蘧伯玉は、年歲を經行し、其齡六十に及ぶまでに、六十度變化せり、未だ嘗て始めは之を是とし、而して終りには之を斥けて非と爲さゞることあらず、年々此の如くにし、非を去り是に就きて之を新にし、六十歲までに六十度變化せしなり、されば此後とても猶變化して、他日に至り、今の是と爲す所の事を非とすること、今日五十九年間の事を非とすると同じきに至るも、亦未だ知るべからざるなり、洵に道の廣大深遠なることは測り知るべからず、萬物の生るゝことあるは人皆之を知るも、其生ずる本根は何人も之を見し者なし、萬物の出で來ることは人皆之を知るも、其の出で來る門は何人も之を見し者なし、此の根と門とは卽ち道にて、人知にては到底知る能

屆かざる罪として、退きて自ら責めたり、而るに今世の人君は此の如くならず、濫に人の性に反したる法律を作爲して、民の之を識らざるを責め、大に行ひ難き所の法令を作爲して、人の敢て之に從はざるを罪し、重く人民の任務を定めて、かの之に勝へざるを罰し、其行くべき道途を遠くして、民の至り得ざるを誅す、(重爲任と遠其塗との二句は、任重く途遠しの一事を分ちたるのみにて、二句一意、民力の勝へざる賦税を取らんとするを謂ふなり)、皆上に在りて政を爲す者の無理なり、上より無理なる法律を出し、無理なる賦税を取らんとすれば、民之に從はんとするも、智盡き力竭きて如何ともする能はず、之に從ひ之に應ずる能はざれば、責罰免れず、民責罰を懼るゝの情急なれば、則ち之に繼ぐに巧僞を以てして、苟も責罰を避けんとす、民の斯くの如く巧僞に趨くも、其本は皆上の政を爲す者に在り、嚴しき法律を定め重き賦税を取らんとして、日一日と巧僞の政を爲すが故に、士民も亦之を免れんが爲めに、巧僞に出でざるを得ざるなり、夫れ上より人力の勝ふる能はざることを強ひらるれば、則ち下民も巧僞に出でざるを得ず、人知の勝ふる能はざることを強ひらるれば、則ち詐欺に出でざるを得ず、貨財足らず、生活に窮すれば、盜まざるを得ず、されば盜竊の行はるゝは、士民自ら之を爲すか、上の君たる者の之を爲さしむるか、果して誰の罪として之を責めて可ならんか、

【解義】〔以得爲在民〕以下四句、正に湯武が己を罪し、「萬方罪あれば予一人に在り」と曰ふの意に同じ、〔一形有失其形者退而自責〕褚伯秀曰く、一形は當に是れ一物なるべし、傳寫の誤りなり、此二句の意は、伊尹か「匹夫も其所を得ざれは己推して溝中に納るゝが如し」と同じ、〔匿爲物而愚不識〕郭象曰く、其性に反するは匿なり、成玄英曰く、作る所の憲章、皆物性に反し、罪名を藏匿すと、「釋文」に、愚一本に遇に作る、俞樾曰く、下文の大爲難、而罪不敢、重爲任而罰不勝、遠其塗而誅不至は、罪と曰ひ、罰と曰ひ誅と曰ふ、皆之に加ふるに刑を以てするを謂ふなり、此に愚と曰ふは、則ち下文と一律ならず、「釋文」に曰く、愚一本遇に作ると、遇疑ふらくは過の字の誤ならん、「廣雅釋詁」に曰く、過は責なりと、其の識らざるに因て之を責むる、是を過不識と謂ふ、「呂覽」適威

を作る者に代りて言ふなり、榮辱以下は其の法を犯さゞるを得ざる所以の故を言ふと、從ふべし、林雲銘の莫を假莫之謂と爲し、其の乃ち盜を爲すこと毋かりしや、乃ち殺人を爲すこと毋かりしや問ふと曰ふは、是に非ず、

古之君人者、以得爲在民、以失爲在己、以正爲在民、以枉爲在己、故一形有失其形者、退而自責、今則不然、匿爲物而愚不識、大爲難而罪不敢、重爲任而罰不勝、遠其塗而誅不至、民知力竭、則以僞繼之、日出多僞、士民安取不僞、夫力不足則僞、知不足則欺、財不足則盜、盜竊之行、於誰責而可乎、

【大意】古の人君は、常に自ら罪して民を愛せしも、今の人君は之に反すれば宜く反省して己を責むべきを說く、○柏矩學於老聃の節と此節とを合して一章と爲す、前節は榮辱立ち、貨財聚まるより、人之に奔競爭奪して罪を犯すに至るを言ひ、後節は更に進みて、今の人君は嚴法重税を以て民を苦しむるが爲めに、民も止むを得ず、詐欺盜賊等の罪を犯すに至るを言ひ、罪人の出づるは皆政治の宜しからざるに本づくを論じ、上古聖人無爲の治に効はずして、法律賦税を設け、有爲の治を施すが爲めに、人心益々巧詐に趨き、天下愈々亂るゝに至るを明かにして、儒家法家の學の終に道家に若かざるを謂ふなり、「發蒙」に依れば、曰く此の章は人自ら是とすべからず、今人の病む所を立て、人の爭ふ所を聚むるは、執りて以て是とすべからざるを言ふなりと、

【通釋】古の人に君たる者は、理に合うたることを以て民に在りと爲し、理を失うたることを以て己に在りと爲し、正しきを以て民に在りと爲し、枉れるを以て己に在りと爲し、常に自ら罪して民を咎めず、故に一物も其所を得ずして死歿する者あれば、己の行

して曰く、子や子や、子は實に氣の毒なる人なり、天下には羅網を張りて人を罹らしめんとする大なる禍難あり、而して子は獨り先づ此の禍に罹れるなり、今の人に君と爲り政を施す者は、法を作りて曰く、盜を爲すこと勿れ、殺人を爲すこと勿れと、然れども爵位を設け貴賤上下の分を明かにしたれば、貴位を得て人の上に居るを以て榮と爲し、爵位無くして下賤に居るを以て耻辱と爲し、下なる者は之を得んと欲し、上なる者は之を失はざらんと欲し、皆是を以て病痛と爲す、貨財も人の需用するまゝにして、其所有者を定めざれば、人心安靜なれども、其所有者を定めて之を聚むる時は、人は皆富を欲して貧を厭ふが故に、互に之を得んことを爭ふなり、今の政を爲す者は、人の病む所の榮辱を立て、人の爭ふ所の貨財を聚め、之が爲めに人の身を窮困して休息する時無からしむるなり、而して盜を爲す勿れ、殺人を爲す勿れと曰ふも、人の之を犯して罪に罹り、辜磔の刑に行はるゝに至るも、豈に止むを得んやと、〔時政の宜きを得ざるを論して、上の人を責むるなり〕、

【解義】〔柏矩〕「成疏」に曰く、柏は姓、矩は名、懷道の士にして、老子の門人なり、〔天下猶是也〕猶是は所謂不出戶而知天下、不窺牖見天道の意なり、其外馳を止めて內脩を專らにせしめんと欲す、故に之を止むるなり、〔見辜人焉〕俞樾曰く、「釋文」に、辜は罪なり、李云ふ、應に死すべき人を謂ふなりと、此れ其義を失ふ、辜は辜磔を謂ふなり、「周官」に掌戮殺王之親者辜之の鄭注に、辜の言たる枯なり、之を磔するを謂ふと、是れ其の義なり、「漢書」景帝紀の改磔曰棄市の顏注に、磔謂張其尸也と、是れ古の人を辜磔する者は、必ず尸を市に張る、故に柏矩推して之を僵し、朝服を解きて之を幕ひしなり、〔推而强之〕「釋文」に、强字亦作彊とあり、彊は借りて僵と爲す、張りたる尸を推し、之を推して正臥せしむるなり、〔解朝服而幕之〕「釋文」に司馬云ふ、幕は覆ふなりと、磔刑に罹りたる人は蓋し士人なり、故に柏矩己の朝服を解きて之に被せ、其禮裝を復するは、罪の其の人に在らずして上に在るに示すの意なり、〔天下有大菑子獨先離之〕菑は禍なり、離は著なり、罹なり大菑は今の政治を謂ふ、下文に說く所を觀て之を知るべし、〔曰莫爲盜莫爲殺人〕東條弘曰く、是れ法

亦作瘭、瘭疽は瘡を病み、膿出づるを謂ふなりと、成玄英曰く、漂疽は熱毒腫なり、〔疥癰〕疥は和名は「タケガサ」一名「ヒゼン」膚に生ずる痒き細瘡なり、癰も亦疽の類なり、〔溲膏〕「釋文」に司馬云ふ、虚勞の人尿上に肥水沫を生ずるを謂ふ、今の醫の小便に蛋白の交ると言ふは是れなり、

柏矩學於老聃、曰、請之天下遊、老聃曰、已矣、天下猶是也、又請之、老聃曰、汝將何始、曰、始於齊、至齊、見辜人焉、推而強之、解朝服而幕之、號天而哭之曰、子乎、子乎、天下有大菑、子獨先離之、曰、莫爲盜、莫爲殺人、榮辱立、然後覩所病、貨財聚、然後覩所爭、今立人之所病、聚人之所爭、窮困人之身、使無休時、欲無至此得乎、

【大意】老聃の弟子柏矩、齊に遊びて、磔死の罪人を見て之を哭し、今の政を爲す者は法律を制し、盜を爲す勿れ、殺人を爲す勿れと曰ふも、人の病む所の榮辱を立てゝ之に奔馳せしめ、人の爭ふ所の貨財を聚めて之を爭ひ取らしめ、人皆之が爲めに窮困して休息する所なし、故に已むを得ずして罪を犯し、刑罰に觸るゝに至ると曰ひ、時政の宜しきを得ざるを責むるなり、

【通釋】柏矩と云ふ人、老聃に就て學べるが、ある時老聃に謂うて曰く、此より天下を巡遊せんと欲すと、蓋し各地の風俗を觀、物情を察せんとするなり、老聃之を止めて曰く、天下を巡遊することは止めよ、何處に行くも、此處と別に異りたることなしと、柏矩其意を解せず、又旅行せんことを請へり、老聃乃ち之を許し、問うて曰く、汝の巡遊は先づ何の邦より始めんとするやと、柏矩曰く、齊より始めんと欲すと、遂に往て齊に至り、市に人を磔にして尸を張れる者を見たり、柏矩尸を推し、之を僵して正臥せしめ、朝服を解きて之を尸の上に覆ひ、天に向ひて號泣して之を哭

張篇の多見其不知量也の多と同し、「マサニ」と訓ず、〔遁其天亡其神以衆爲〕郭象曰く、夫遁離滅亡以衆爲之所致也、若各至其極則何患也と、「釋文」に王云ふ、凡事所可爲者也、遁離滅亡皆由衆爲、衆爲所謂鹵莽也と、林雲銘は下の故の字を以衆爲に屬して讀み、曰く、以衆爲故とは其皆衆人の爲す所の故に溺るゝを言ふなりと、皆其義を得ず、章炳麟曰く、鄉射禮の主人以客揖の注に以猶與也とあり、書の平秩南僞の枚傳に、僞化也とあり、以て與とは雙聲、爲と化とは同部なり、以衆爲とは與衆化なり、此を天を遁れ性を離れ情を滅し神を亡すと謂ふと、此說從ふべし、〔爲性萑葦蒹葭〕「釋文」に、萑は葦なり、葦は蘆なり、蒹は廉なり、葭も亦蘆なりと、四種皆同類、水渚に生ずる穢草なり、兪樾曰く爲性萑葦蒹葭の六字にて一句と爲す、郭は蒹葦の下に於て注を出だして云ふ、萑葦は禾稼を害し、欲惡は正性を傷すと、此れ其讀を失ふなり、〔始萠以扶吾形尋擢吾性〕郭象曰く、形扶疎なれば則ち神氣傷し、欲惡を以て性を引けば當に止まらずと、兪樾曰く、尋は始と相對して義を爲す、尋の言たる寖尋なり、「漢書」郊祀志の注に、

晉灼曰く、尋遂往之意也と、始萠以扶吾形は、其始めは以て吾形を扶助するに足るか若きを言ふなり、尋擢吾性は寖尋既に久しければ、則ち吾性を拔擢するを言ふなり、郭解之を失すと、按ずるに郭解固より失す、而して兪解亦未だ得たりと爲さず、扶の字は本は抶に作りしを傳寫中形似たるが爲めに、扶に誤りたるならん、說文に、抶は挑なり、挑は撓なりとあり、形を抶するは、形を毀るなり、聲色臭味は皆人の欲する所、之が爲めに其形を毀り、遂に其性を擢亂するを言ふ、外物の害たる、形心共に毀壞す、未だ其形を助け、而して獨り其性のみを失はしむることあらず、本書中論ずる所歷々徵すべきなり、且つ天地篇に曰く、且夫失性有五、一曰、五色亂目、使目不明、二曰、五聲亂耳、使耳不聰、三曰、五臭薰鼻、困惾中顙、四曰、五味濁口、使口厲爽、五曰、趣舍滑心、使性飛揚と、此れ以て此二句の正解と爲すべし、卽ち郭兪二家の誤解自ら明かなり、〔並潰發不擇所出〕王先謙曰く、竝潰は奔潰なり、漏發は孔を穿ちて出づるなり、情欲の害、偏發して處所を擇ばず、精神既に敗れて形氣之に隨ふを言ふ、〔漂疽〕「釋文」に、漂本

き取らざりしかば、秋に至りて其實りかたも亦滅裂にして吾に報い、僅少なる穀物を收めしめたるのみにて、甚だ困難せり、因て其の次の年には前年の耕作法を改め、深く耕して熟く耰にしたれば、其の禾苗大に繁茂し、秋實多く、吾れ年中飽食するを得たり、是れ以て政を爲すに喩ふへし、政事の效果も亦必ず此と同じかるべし　子其れ之を愼めと、莊子之を聞て曰く、今世の人の、外其の形を治め、內其の心を理むるは、適に長梧封人の謂へる所の鹵莽滅裂に似たることあり、是れ又以て我が學に喩ふへし、今世の人は內外共に其天眞を遁れ、其の本性を離れ、其の情誠を滅ぼし、其の精神を亡ぼして、衆人と相與に率ゐて外物の爲めに化せらるゝなり、故に其の性を鹵莽粗略にする者は、天より稟けたる本性を斬斷し、欲惡の孽が代り生じ、萑葦蒹葭の如き穢草に喩ふへき欲惡萠生して、始めは吾が形を扶助するに足るが如きも、遂には吾が性を拔き去りて、全く天眞を失はしむるに至る、其の狀を喩ふれば、全身に毒腫を生じたるが如く、處々潰敗し、濃汁漏れ出でゝ、所を擇ばす、其の臭穢なること、見るに堪ふべからす、彼の瘭疽疥癰を病みて、體熱甚しく、小便濁りて、精質の分泌する者卽ち是れなり、人の形を治め心を理むるに鹵莽滅裂なれば、其效果の鹵莽滅裂なること亦此くの如し、愼まざるべけんや、

【解義】〔長梧封人問子牢曰〕「釋文」に、長梧は地名封人は封疆を守るの人と、縣令の類なり、蓋し齊物論篇の長梧子と同人ならん、巖井文曰く、問の字恐らくは謂の誤ならん、「釋文」に司馬云ふ、子牢は卽ち琴牢孔子の弟子と、郭慶藩之を駁して曰く、琴張は孔子の弟子なるも、經傳中に琴牢子牢に作れる者なし、たゞ「孔子家語」に琴張一名牢、字子開、亦字張、衞人也とあるも、「家語」は王肅の僞書なれば、據と爲すに足らす、琴張と子牢とは本一人に非ず司馬の此說非なり、〔鹵莽滅裂〕郭象曰く、輕脫粗略にして、其分を盡くさゞるなり、「釋文」に司馬云ふ、鹵莽は猶麤粗のごとし、淺耕稀種を謂ふなり、滅裂は其草を斷つなり、〔芸〕草を除くなり、〔變齊〕「釋文」に司馬云ふ、變は更むるなり、法る所を變更するを謂ふなり、齊は同なり、〔耰〕司馬云ふ、鋤なりと、土を掘りて種を覆ふなり、〔多見似封人之所謂〕按ずるに、多は論語子

曰ふは、共に本義を失ふに似たり、市南宜僚も孔子を以て邪人諂人とは爲さゞるなり、

長梧封人問子牢曰、君爲政焉、勿鹵莽、治民勿滅裂、昔予爲禾、耕而鹵莽之、則其實亦鹵莽而報予、芸而滅裂之、其實亦滅裂而報予、予來年變齊、深其耕而熟耰之、其禾蘩以滋、予終年厭飧、莊子聞之曰、今人之治其形、理其心、多有似封人之所謂、遁其天、離其性、滅其情、亡其神、以衆爲、故鹵莽其性者、欲惡之孽、爲性、萑葦蒹葭、始萌以扶吾形、尋擢吾性、並潰漏發、不擇所出、漂疽疥癰內熱溲膏是也、

【大意】此章は二節に分ちて看る、起首より終年厭飧までの第一節は長梧封人が政治を施すの愼まざるべからざることを、農業の實驗に喩へ、耕芸を鹵莽滅裂にすれば、秋實も亦鹵莽滅裂なりしも、其明年改めて深耕熟耰せしかば豐收ありたることを述べて之を戒め、莊子聞之以下の第二節は、此の話を取りて更に人の形を治め心を理むるに喩へ、今の人は自ら形心を鹵莽滅裂にするが故に、性情を滅亡して欲惡に亂され、惡瘡を病む者の、全身處々に膿汁流れ、內は熱して小便に蛋白交り出ると同く、形心共に損傷して、鹵莽滅裂と爲るを謂うて、之を戒むるなり、

【通釋】長梧の封人が、子牢に謂うて曰く、君は政を爲すに粗略にすること勿れ、民を治むるに輕忽にすること勿れ、皆善く心を用ひて愼重にせらるべし、然らざれば其結果亦必す鹵莽滅裂にして治まらざるべし、昔に吾れ農業を爲し、禾穀を種うるに之を鹵莽にして深く耕さゞりしかば、秋に至りて其實りかた亦鹵莽にして吾に報ひ、粗末なる穀物を生じたり、雜草の除き方を滅裂にし、唯斷ち切るのみにて、根より拔

聲は消滅して聞ゆること無けれども、其心は宇宙の窮まり無き所に遊び、其の口に言ふ所は世俗の人と同じけれども、其心は無爲を主とすれば、不言にして言ひ、言うて未だ嘗て言はざるなり、唯其言のみならす、其の心の持ち方は、すべて世俗の人と違うて、世人と事を俱にするを潔しとせず、故に下賤に居りて顯はれず、是れ陸上に在りて沈む者、卽ち大隱なり、當今楚人の道ありて隱るゝ者は、市南の宜僚ならんかと、子路之を聞き、其家に往き宜僚を連れ來らんと請ふ、孔子曰く、止めよ、彼の宜僚は、道を行はんと欲する丘を以て、徒に己の名聲を顯著にする者と爲し、又今度丘の楚に來りしことを知り、丘の楚王の聘に應せしを以て、陰に手段を運らし、楚王をして己を召さしめたる者と思へるが故に、彼は丘を以て佞知の人と爲さん、彼の如き全性葆眞の人は、佞知の人に於ては、其の言を聞くをも之を羞づ、而るを況や親く其の身を接見することは、尤も羞ぢて之を爲さゞるべし、されば疾くに避けて去り、家に居ること無からんと、子路往きて其の家を視れば、果して孔子の言の如く巳に逃れ去りて、其の室には何人も居らざりき、

【解義】〔蟻丘之漿〕蟻丘は山の名、漿は「釋文」に李云ふ、漿を賣る家なりと、漿は「說文」に酢漿也、一曰水米汁相將也とあり、「釋文」又司馬云ふ、逆旅の舍の菰蔣章を以て之を覆へるを謂ふなりと、菰も蔣も和名「マコモ」、司馬は蓋し漿を以て蔣の假借と爲すなり、但二說共に穩妥ならざれども、他に的說もなし、〔登極〕「釋文」に司馬云ふ、極は屋棟なり、之に升り以て觀るなりと、按ずるに、極に登るは、孔子の徒の來り訪ふを避くるなり、下文に其於佞人也、羞聞其言而況親見其身乎の句あるに視れば、孔子を觀ると爲すは、恐らくは是に非ず、〔稯稯〕「釋文」に音總、字亦作總、李云ふ、聚まる貌、〔心不屑與之俱〕「釋文」に、屑は絜なり、世を絜とせざるなり、〔陸沈〕水なくして陸上に沈むの義、隱者の山中巖穴に隱れすして、世俗の間に隱るゝ者を謂ふ、所謂大隱隱於市の類なり、〔市南宜僚〕市南宜僚丸を弄して兩家の難解けしこと、徐無鬼篇に見ゆ、〔以丘爲佞人也〕按ずるに、佞は才也、故に古人自ら謙して不佞と稱す此の佞人は才知を用ふるの人を謂ふなり、成玄英の用丘爲諂佞之人也と曰ひ、其於邪佞恥聞其言と

比し、其の大小懸隔の遠き、同日の論に非ざるを言ひ、惠王の聖人不レ足二以當一レ之の一語を駁して、大に戴晉人を揚げたるなり、

【解義】〔大人〕徐無鬼篇に曰く、生無レ爵、死無レ謚、實不レ聚、名不レ立、此之謂二大人一と、德の至大なる人の義なり、〔聖人〕成玄英曰く、聖人は堯舜を謂ふなり〔夫吹筦也猶有嗃也〕筦は管に同じ、「釋文」に、一本亦作レ管とあり、嗃は「釋文」に管聲也、又廣雅を引て曰く、鳴也と、成玄英曰く、嗃は大聲なり、〔吹劍首者吷而已〕劍首は「釋文」に司馬云ふ、劍の環頭の小孔を謂ふ也と、司馬云ふ、吷然は風の過ぐるが如き也、

孔子之レ楚、舍二於蟻丘之漿一、其隣有二夫妻臣妾登レ極者一、子路曰、是稯稯何爲者耶、仲尼曰、是聖人僕也、是自埋二於民一、自藏二於畔一、其聲銷、其志無レ窮、其口雖レ言、其心未二嘗言一、方且與レ世違、而心不レ屑二與レ之俱一、是陸沈者也、是其市南宜僚邪、子路請二往召一レ之、孔子曰、已矣、彼知三丘之著二於己一也、知三丘之適二楚也、以レ丘爲三必使二楚王之召一レ己也、彼且以レ丘爲二佞人一也、夫若レ然者、其於二佞人一也、羞レ聞二其言一、而況親見二其身一乎、而何以爲レ存、子路往視レ之、其室虛矣、

【大意】內に樂むことある者は外に慕ふこと無ければ、聰明嗜欲好惡の爲めに心を動かさざるを言ふ、

【通釋】孔子が楚王に聘せられ楚に往き、蟻丘と云ふ所の漿を賣る家に舍られしに、其隣家に夫婦僕婢共に屋極に登る者ありたり、隨行せる子路怪みて曰く、是の衆くの人の聚れるは何物なるやと、孔子曰く、是れは聖人の僕ならん、是の家の主人は、自ら下民の間に埋もれ、農業に從事して田畝の間に藏れ、其の名

こと、有るか無きかを定むべからざるを謂ふ、〔有辯乎〕辯は別なり、〔惝然若有失也〕「字林」に云ふ、惝は惘なり、成玄英曰く、惝然は悵恨の貌なり、

客出、惠子見、君曰、客大人也、聖人不足以當之、惠子曰、夫吹筦也、猶有嗃也、吹劍首者吷而已矣、堯舜人之所譽也、道堯舜於戴晉人之前、譬猶一吷也、

【大意】衆人中にありて、聖人と推稱せらるゝ者も、大人の前にありては、一吷の如く、殆と聲も無きを言ひ、無相無名にして、世人の窺ふを得ざる大人たるを說く、魏瑩與田侯牟約より此に至るまでの三節を合して一章と爲す、第一節は魏の惠王が齊に報する手段に就きて、刺客より兵戰、兵戰より王業、王業より道家に入り、遂に至人の戴晉人を引出し、第二節は戴晉人蝸牛角上蠻觸の戰ひを說きて、魏王萬乘の富の至小にして蠻觸に異ならず、王業戰勝の共に爲すに足らざるを知らしむ、第三節は、王戴晉人を歎稱して聖人よりも大也と爲し、惠施又更に進みて、堯舜の如き至小なる者は戴晉人と比論すべきに非ずと言うて、之を結ぶ、道の至大なるを明かにし、人世の至小にして、儒家の有爲の說の取るに足らざるを論ずるが、此章の主意なり、宣穎の評に曰く、一層進於一層、如雲之冉冉而起、至戴晉人所云則海濶天空、開人無限識量矣、晉人之論既妙、又得惠子末後一番浣染、愈見其妙也と、

【通釋】戴晉人既に辭して出で、惠子代り入りて君に見えたり、惠王曰く、子か進めし所の客は至大の德ある大人と謂ふべし、聖人の堯舜も以て客の德に當るに足らずと、大に客の德を稱したれば、惠子猶其の堯舜と比するを非として曰く、竹管を吹けは猶ほ嗃たる音聲を發すれども、劍首の環の小孔を吹けば、唯吷としてすうと風の過ぐるのみにて、音聲の聞くべき者無し、堯舜は世俗の人の譽むる所なれども、之を戴晉人の前に言ふは、譬へば猶ほ劍首一吷の極めて微小にして、耳にも聽き取れざる位の者なりと、〔戴晉人を簫鼓合奏の音樂に比し、堯舜を劍首の一吷に

有ルガ亡フ也、

【大意】大なる者は爭はず、彼の汲々相爭ふて物を容る能はざるは、畢竟其の心の小なるに因るを說く、

〔通釋〕戴晉人惠王に謁して曰く、蝸と謂ふ小蟲あり、王は之を知らるゝや否やと、王曰く、然り、之を知れりと、戴晉人曰く、蝸の左角に一國を成す者あり、其名を觸氏と曰ふ、蝸の右角に一國を成す者あり、其名を蠻氏と曰ふ、或る時此の二國相與に土地を爭うて戰ひ、戰死者は數萬人の多きに及び、勝ちたる方の軍は敗走せる敵軍を追擊すること十五日にして後に軍を反へしたり、との一奇談を話せしかば、王は之を信せずして曰く、噫其は虛言にして事實には非ざらんか、戴晉人曰く、否、是れ事實なり、臣請ふ君の爲めに詳言して之が事實たることを證せんと、因て問うて曰く、君は上下四方の天地は窮極ある者と意はるゝや、王曰く、上下四方は窮極なく至大なる者なり、戴晉人又問うて曰く、心を窮極なき至大の宇宙に遊ばすを知り、而して反て人迹の及ぶだけの中國を觀れば、有るが如く無きが如きの微小なる者に非ざるか、君曰く、客の言ふ所の如し、戴晉人又問うて曰く、海內人迹の通ずる中國の中に、魏なる一の諸侯あり、魏の封域の中に梁の都あり、又其梁の中に王あるなり、されば王の至小なることは、蝸牛角上に國する蠻氏の至小なると同じきか、將た此とは大小の別ありと謂ふかと、王曰く、至大無窮の上下四方より見れば、吾の至小なること、實に蝸牛角上の蠻觸に異なることなしと、是に於て始め虛言かと疑ひし者が事實と爲り、而して是迄萬乘の君と自負したる身は、忽ち蝸牛角上の肉眼にて見るべからざる蠻氏と同一と爲りたり、故に戴晉人既に辭して出で、君は惝然として何か失ふ所あるが如くなりき、卽ち公孫衍の說に從つて齊を伐つも、蠻觸の戰に過ぎず、季子の說に從つて王業を成すも、蝸牛角上に君臨するに過ぎず、皆至小にして爲すに足らざるを知りたればなり、

【解義】〔逐北〕「釋文」に、軍の走るを北と曰ふ、〔噫其虛言與〕成玄英曰く、言ふ所奇譎にして人情に近からず、故に噫の嘆を發し、其の實ならざるを疑ふなり、〔通達之國〕郭象曰く、人迹の及ぶ所を通達と爲す、今の四海の內を謂ふなり、〔若存若亡乎〕若存若亡は有るか如く又無きが如きなり、其微小なる

稱して萬乘之君と曰ふなり、〔甲〕「ヨロヒ」と訓ず甲冑を被りたる者の義とし、兵卒を謂ふ、〔拔其國〕其國は齊王の都を謂ふ、〔忌也出走〕忌姓は田、田忌は齊の將軍也、〔抶其背〕「釋文」に、三蒼に云ふ、抶は擊なりと、其字は齊王を指す、田忌を指す、〔季子〕、「釋文」に魏の臣、成玄英曰く、季は姓、魏の賢臣也、鍾伯敬曰く、季子は是れ蘇秦と、此は蘇秦の嫂が見季子位高金多也の一語より出でたる說ならんも、此の季子は遊說を以て齊を苦めんとするには非ず、兵を息め民を安んじて王業を成さんことを主張するを以て觀れば、是れ儒者なり、鍾說誤る、〔城者既十仞矣〕城は活字として讀む、兪樾曰く、十字疑ふらくは七字の誤ならん、城者既七仞なれば、則ち未だ十仞ならずと雖も、十仞を去ること遠からず、故に之を壞つは惜むべしと爲す、若し既十仞なれは、卽ち直ちに之を已成と謂うて可なり、當に既十仞と言ふべからざるなり、下文に曰く、今兵不起七年矣、此王之基也と、明かに是れ七仞を以て七年に喩ふ、其の字の誤りなること疑ひなし、〔胥靡〕徒役の人、罪人の勞役に服する者なり、〔華子〕魏の臣、姓は華、有道者なり、〔惠子〕惠施なり、〔戴晉人〕成玄英曰く、姓は戴、字は晉人、梁の賢者なり、

戴晉人曰、有所謂蝸者、君知之乎、曰、然、有國於蝸之左角者、曰觸氏、有國於蝸之右角者、曰蠻氏、時相與爭地而戰、伏尸數萬、逐北旬有五日而後反、君曰、噫、其虛言與、曰、臣請爲君實之、君以意、在四方上下有窮乎、君曰、無窮、曰、知遊心於無窮、而反在通達之國、若存若亡乎、君曰、然、曰、通達之中有魏、於魏中有梁、於梁中有王、王與蠻氏有辯乎、君曰、無辯、客出、而君惝然若

人濫に辛苦するのみ、此と同じく、今魏は兵を用ひざること既に七年、庶民安堵して其の業を樂む、此れ王業の基なり、之を繼續すれば、遂に政を天下に爲すを得んとす、然るに今衍は王を勸めて齊と戰はしめんとす、是れ十仭の城を七仭にして壞つに異ならず、庶民困苦して王業成らず、誠に惜むべきなり、彼の衍や禍亂を爲すの人なれば、其の說は聽從すべからずと、道家の華子、季子の王業の說を聞き、之を醜として曰く、彼の巧みに說きて齊を伐てと言ふ公孫衍は固より亂人なり、又巧みに王業の害なりと說きて、齊を伐つ勿れと言ふ季子も亦亂人なり、而して之を伐てと言ふ者も亂人なりと言ふ我は又亂人なりと、道家の無爲の化より言へば、王業の如きは是れ有爲にして、徒に民を擾すに足るのみ、故に季子を以て亂人と爲す、而して華子自ら不言無爲なる能はずして、世事を論じ、公孫衍季子を非とするは、道樞を得たる者に非ず、故に自ら己を亂人なりと言ふなり、惠王は華子の言を聞きて、從ふべき所を知らず、因て問うて曰く、然らば則ち如何にせば可ならんか、華子曰く、君其道を求められよ、道を求むるの外には他術なしと、敢て之を詳言せず、君をして自ら覺らしめんとするなり、此の時魏の卿たりし惠施は、華子の總てを非として道を求めよと言ひしを聞きて、至人の戴晋人を進めて王に見えしめたり、〔刺客より用兵、用兵より儒者、儒者より道家と、層々進め來りて求二其道一に到り遂に至人の戴晋人を迫り出すなり〕

【解義】〔魏瑩與田侯牟約〕魏瑩は惠王なり、魏は大梁に都す、故に「孟子」には梁惠王と稱す、田侯は齊君の姓なり、「釋文」に司馬云ふ、田侯は齊の威王なり、名は牟、桓公の子と、然れども「戰國策」及び「史記」に據れば、威王の名は因齊にして、牟に非ず、又田齊諸君の中に名牟なる者なし、桓公の名は午にして、牟と字相似たれば或は午の誤りならんか、然れども桓公は魏の惠王と時代同じからず、寓言にして名に拘はらずと爲すの外なし、〔犀首聞之而耻之〕「釋文」に犀首は魏の官名なり、司馬云ふ、今の虎牙將軍の若し公孫衍此官と爲る、故に犀首と云ふ、〔萬乘之君〕地方千里にして兵車萬乘を出だす、元は天子の畿內の地方千里あり、諸侯の地は此に及ばず、而るに後世兼並して、戰國の七雄は皆千里の地を有つ、故に魏王を

靡之所苦也、今兵不起七年矣、此王之基也、衍亂人、不可聽也、華子聞而醜之曰、善言伐齊者亂人也、善言勿伐齊者亦亂人也、謂伐之與不伐亂人也者、又亂人也、君曰、然則若何、曰、君求其道而已矣、惠子聞之而見戴晉人、

【大意】魏の惠王、齊の威王の約に背くを怨みて、讎を報せんとし、刺客を用ひんとせしを、犀首之を恥ぢて、攻戰を以て齊を擊破し、齊王を殺すを勸め、儒者の季子之を恥ぢて、王政を行うて齊を擊つ勿れと勸め、道家の華子又之を醜として、犀首も季子も共に亂人なりと言ひ、而して斯く言ふ華子自らも亦亂人なりと言ひ、王の問を起さしめて、道を求めよと勸むるなり、此一節は層々進め來りて、後の戴晉人を起す爲めの張本と爲すなり、

【通釋】魏の惠王が齊の威王と盟約したることあるに、齊の威王其約に背きたれば、魏の惠王大に怒りて將に刺客を齊に遣りて威王を刺殺さしめんとしたり、魏の犀首の官、卽ち將軍たる公孫衍、聞て惠王の行爲を恥ぢ、惠王に謂て曰く、君は萬乘の兵力を有する國の君なるに、堂々たる戰を以て怨みを報せんとはせず、匹夫の刺客をして怨讐を殺さしめんとせらるは何事ぞや、衍請ふ、兵二十萬を率ゐ、君の爲めに齊を攻め、其人民を捕虜にし、其牛馬を羈ぎて牽き來り、齊君をして憂悶して身熱し、其の熱が背に發して癰疽と爲らしめん、然る後に其の國都を拔かば、齊國の將軍の田忌は出でゝ走らん、然る後に我が軍進んで齊王の背を擊ちて、其の脊骨を折らん、此くの如くせば、齊王背約の怨みを報ずること十分にして、又萬乘の國君の擧として恥かしからざらんと、儒者の季子、犀首の說を聞き、其の戰を好み民を苦しむるを以て、之を恥ぢて曰く、譬へば十仞の城を築かんとして築くこと既に七仞、將に成らんとするに近づきて、則ち又之を毀壞すれば、城は終に成ること無く、徒役の

【解義】〔司御門尹登恒〕司御を官とし、門尹を姓とし登恒を名とすと解する者あり、之を三人と爲し、道によりて命じたる寓名なりといふ者あり、司御は官名、門尹登恒は伊尹の變名なりと爲す者あり、門尹は官名、登恒は姓名と爲す者あり、諸說紛々一ならず皆臆造にして根據あるの說に非ず、要するに義理に關係なければ、強ひて定むるにも及ばず、〔從師而不囿〕林希逸曰く、湯は尹を以て師と爲すと雖も、其の爲めに籠められざるなりと、師敎の範圍の內に束縛せられざるを謂ふなり、成玄英の從は任なり、囿は聚なり、虛淡無爲、師傅に委任し、終に積聚して己の功と爲さずと曰ふは、殊に其義を得ず、〔之名嬴法〕之は此と同じ林希逸曰く、之名は此名なり、嬴は餘なり剩なり、言ふは、此名の世間に在る、是れ剩法なり、猶長物と言ふがごときなり、〔得其兩見〕湯は無爲にして登恒は有爲、故に此の名を得たり、而して今又登恒に似たる者の出づるを見る、卽ち兩見を得るなり、〔容成氏〕容成氏の名、「莊子」「列子」「淮南子」「漢書」の藝文志等に見ゆ、其人蓋し三あり、一は黃帝の君と爲し、一は黃帝の臣と爲し、一は老子の師と爲す、但し此處の容成氏は、黃帝の臣にして曆を造りたる者と爲すべし、除日無歲は曆に就ての語なるを視て知るべし、〔除日無歲〕三百六十日を積みて歲を成す、日は內容にして歲は外の名なり、故に日を以て性に喩ふ、容成氏の語は此四字のみ、之を證として下に無內無外と斷言するなり、

魏瑩與田侯牟約、田侯牟背之、魏瑩怒、將使人刺之、犀首聞而恥之曰、君爲萬乘之君也、而以匹夫從讎、衍請受甲二十萬、爲君攻之、虜其人民、係其牛馬、使其君內熱發於背、然後拔其國、忌也出走、然後扶其背、折其脊、季子聞而恥之曰、築十仞之城、城者既十仞矣、則又壞之、此胥

之、從師而不囿、得其隨成、爲之司其名、之名嬴法、得其兩見、仲尼之盡慮、爲之傅之、容成氏曰、除日無歲、無內無外、

【大意】 虛中にして天を忘れて始めて天を得るに反し、名を得るに汲々たる時は終に天を知ざるを說く、○冉相氏以下の二節を合して一章と爲す、前節は、環中を得て隨成し、無意無心にして世俗と混同して性を失はざるを聖人と爲し、天を師とせんとするの心あるも猶不可なるを言ひ、後節は、湯は隨成を得て無爲にし、登恒を師として師に囿せられざるを言ひ、仲尼の知慮を盡くして名を取らんとするを不可なりとす、前章の以天爲師を承け、天を以て師と爲すは天を忘るゝに在り、天を師とせんとするの心あるべからず、全く虛心虛中にして道樞を握り、始めて能く天を師とするを得、外能く隨在以て化を成す、若し一たび名相に落つれば、則ち內先づ亡し、外何ぞ能く道に合はんや、是れ此章の主意なり、

【通釋】 殷の湯王、其の臣にして司御門尹の官たる登恒を得たり、登恒常に爲めに湯を輔佐して、王業を成さしめたり、而るに湯は登恒に從ひ、師とすれども之に束縛せられずして、虛心無爲にし、自然のまゝにして大成し、たゞ登恒輔佐の力によりて成りしとの名を司り、功を登恒に歸す、此の名たるや、世俗は以て賢知と爲し豪傑と爲せども、實は剩餘の無用物のみ、貴ぶに足らざるなり、今又此名を主とする者の、登恒の外に一人あり、併せて二人と爲るを見る、卽ち仲尼の知慮を盡くして諸侯の君の爲めに輔佐の力を致さんとする是れなり、然れども內の德無くして、徒に知慮を盡くすは、無用なり、容成氏が、日を除けば歲無しと曰へるは、眞理にて、內の性全くして始めて外に大成を得んも、內無ければ從つて外無し、名は虛名のみ、貴ぶに足らざるなり、此一節は本文に誤字脫文あるが如く、甚だ讀み難く、古來諸家の註も、皆强ひて解を下したるまでにて、從ふべき者なし、今其中にて聊か取るべき者を取り、卑說を參えて講說すること左の如し、但し猶强解たるを免れざれども、莊子の眞意は之を得たりと信ず、

を毀損するに同じきのみ、天を師とするの心ありて以て世に立ち事を爲すは、之を如何と爲す、是れ無爲の爲に非ずして、有爲の爲のみ、道に合ふ能はざるなり、彼の聖人は眞の虛心虛中にて、天あることを知りて之を師とせんともせず、又人爲あることも知りて之を避けんともせず、始め無く終り無く、死生終始を忘れて、世と共に逍遙無爲にして樂むのみ、而して其性は之を保全して毀損せず、事に應じ物に接して行ふ所は、周備して爲さゞる無けれども、自ら其性を壞敗せざるなり、此の聖人の爲す所に合はんとするには如何にすべきや、之を師とし學びては、有心有爲なれば、之に合ふを得ず、亦たゞ無意無心にして自然に之に合ふに至るべきのみ、

【解義】〔冉相氏得其環中以隨成〕冉相氏は三皇以前の無爲の皇帝なり、環中の字、亦齊物論篇に見ゆ、曰く、「樞始得其環中、以應無窮」と、環の中心、卽ち規の立脚の地なり、空虛にして又偏らず、圓環は之を中心として、回りて窮まり無し、故に以て萬物の本源たる道に喩ふ、隨成は自然に隨應して成るなり、之を大成と謂ふ、毀に對するの小成に非ず、齊物論篇に、道隱於小成より以下、成に就て詳論あり、參照すべし〔與物無終無始無幾無時〕按ずるに、終始は死生を謂ひ、幾時は歲月を謂ふ、死生を一にし、古今を忘れて、物と變化す、齊物論に見えたり、忽にして莊周、忽にして蝴蝶なるが如し、〔日與物化者一不化者也〕一は性を謂ふ、外形の物質は千變萬化して窮まり無く、而して其內の性は、之を保全して道と一となり、未だ嘗て變ぜざるを謂ふ、〔闔嘗舍之〕闔は何不なり、陳壽昌曰く、舍は止なり、人何ぞ此の眞空を體して是に止まらざるやと謂ふなり、〔與物皆殉〕外の形と內の性と共に毀壞するを謂ふ、齊物論篇に其形化、其心與之然、可不謂大哀乎とあるは此と同義なり、〔未始有始未始有物〕章炳麟曰く、始物相對して文を爲す、猶上の天人相對して文を爲すか如し、物は卽ち物故の物、正しくは當に殉に作るべし、「說文」に殉は終也とあり、始と終とは語相對す、〔與世偕行備而不洫〕成玄英曰く、替は廢なり、「釋文」に王云ふ、洫は壞敗なりと、按ずるに、不替不洫は皆性を指して言ふ舊解多く事に就いて言ふ、恐らくは是に非ず、

湯得其司御門尹登恆爲之傅

見聞聞者也と曰ふなり、〔以十仞之臺縣衆閒者也〕七尺を仞と曰ふ、十仞之臺は高さ七丈の臺なり、郭象曰く、衆の習ふ所は、危と雖も猶ほ閒なり況や聖人の危無きをやと、兪樾曰く、郭は閒を誤讀して閑と爲す、義に於て通ずべからず、此れ上文の見見聞聞を承けて言ふ、十仞の臺を以て衆人耳目の間に懸くれば、此れ人の共に見、共に聞く所、夫の丘陵草木の緍入して十の九を掩ふ者の如きに非ず、其暢然たる知るべしと、

冉相氏得其環中以隨成、與物無終無始、無幾無時、日與物化者、一不化者也、闔嘗舍之、夫師天不得師天、與物皆殉、其以爲事也、若之何、夫聖人未始有天、未始有人、未始有始、未始有物、與世偕行而不替、所行之備而不洫、其合之也、若之何、

【大意】 聖人の天を師とするは、其の實別に法るべき天なる者にあらずして、其の本性に循ふことなるを說く、環中の二字其の精神たり、既に齊物論に詳かなり、

【通釋】 古の聖王冉相氏は、環の中央の眞空にして偏らざる所、卽ち萬物の本源たる道を得、以て道の命ずるまゝに隨ひ、無意無心無爲にして運轉窮まり無く、以て其帝德を大成せり、冉相氏の民物に對するや終り無く始め無く、死生を一にし、古今を忘れ自然のまゝに任せて、己も物と共に逍遙するのみなり、此の冉相氏の如く、常に物と化して我なきは、唯其外のみ物と化して、內の性は外物の爲めに化せられざる者なり、卽ち天性を保全して、毫も之を毀損せざる者なり、今の人も、何ぞ冉相氏の如く環中に止まらざるや環中の妙は、眞空にして無意無心なるに在り、天は自然なれば、天を師として之に安んずれば善からんと信じて天を師とするは、猶是れ天を師とせんとするの心ありて天を師とする者にして、無意無心に非ざれば、眞に天を師とするを得ず、亦外物を逐うて其性

公閱休の聖德の盛んにして世人に異なるを言ひ、第三節、聖人は性を全くするのみにて、自ら其聖たるを知らず、毫も知を用ひざるを言ひ、第四節美人の喩を設けて更に前節の義を詳論し、第五節に至り、又久客の郷里を望みて悅ぶの喩を設けて、一旦外物に牽かれたる者も、猶本性を慕ふの心あるを言ひ、全德の聖人なる公閱休を楚王に見えしむれば、楚王の必ず暢然として喜び、本性に歸るべきを言ふ、此の性を失ひたる者が、聖人の德に化して本性を復するの效あることを言ふが、此章の主意にて、則陽夷節等は之を出すが爲めの假り物に過ぎず、篇首四句の叙事と、彭陽の二問とを除くの外は、全章皆王果の言なり、

【通釋】久しく旅行して他邦に放浪せし者が、歸り來りて舊の郷里の近郊に至れば、之を望見して暢然たる喜悅の情あり、たとひ丘陵や草木などが込み合うて、十分の九まで之を蔽ひ、僅に邑屋の一部分のみを望み得るだけにても、猶暢然として喜ぶに、況や嘗て童子の時に見し者を見、又久しく人傳に聞き居りし話を親戚故舊より聞くに於てをや、其喜悅果して如何ぞや、十仞の高き臺を、何ものも遮ぎらざる衆人の間に懸くるに於ては、誰か之を見て喜ばざる者あらんや、此一節は譬喩にて、舊國舊都は人の本性に喩へ、外物に牽かれて性を失ひ、徒に尊嚴にして暴威を振ふ楚王を、久しく他邦に放浪せし人に喩へ、久客の郷里を望みて暢然たるが如く、外物に牽かれたる者も、本性を戀ふの心はある者なるを言ひ、十仞の臺を以て公閱休に喩へ、本性のまゝにて少しも蔽はれざる公閱休を楚王に見えしむれば、王も必ず暢然として喜び、久客の郷に歸りしが如く、本性に歸るべしと言ふなり、

【解義】〔舊國舊都〕國も亦都邑なり、其人の舊と住せし郷邑を謂ふ、以て人の本性に喩ふ、〔望之暢然〕「釋文」に、暢然は喜悅の貌、〔雖使丘陵草木之緡入之者十九猶之暢然〕兪樾曰く、緡の字、「釋文」に司馬を引て云ふ、盛也、「郭注」に云ふ、合也と、義に於て倶に通ず、入之者十九を、「釋文」に謂見十識九也と曰ふ此れ未だ其義を得ず、入とは、丘陵草木の掩蔽する所の中に入るを謂ふなり、之に入る者十の九なれば、則ち其外に出でゝ望見すべき者は、たゞ十の一のみ、而るに猶暢然として喜悅を覺ゆ、故に之に繼で、況見

【大意】 美人の喩を設けて、聖人の聖たる所以は、其の性を全くするに在るを說く、

【通釋】 之を喩ふれば、生れながらにしての美人も、自らは其の容色を知らず、人より鏡を與へられて、始めて己の容貌を知れども、人が告げざれば、自ら己の人より美なることを知らざるなり、併し其の美なることを知るも知らざるも、聞くも聞かざるも、天の與へし形を禀けて人と爲りしことの喜ぶべきは、終に已むこと無く、又人よりして其形の美なるを愛好せらるゝことも亦已むこと無し、皆其性のまゝにすればなり、聖人も之と同じく、其の人を愛するや、人より之に名を與へて聖人と爲すのみ、若し人より之を告げざれば、則ち己が人を愛することを知らざるなり、併し之を知るも知らざるも、之を聞くも聞かざるも、聖人の人を愛することに於ては、終に已むこと無く、人の聖人の德に安んずることも亦已むこと無し、他なし、其愛は勉めて爲すに非ずして、性のまゝにする者なればなり、

【解義】 〔生而美者人與之鑑〕 郭象は鑑ハ鏡也、鑑レ物無レ私、故人美レ之、今夫鑑者豈知レ鑑而鑑耶、生而可レ鑑、則人謂二之鑑一と曰ひ、生而美者は鏡を指して言ひ、人を指さず、下文の人與二之名一と對すれば、此說長るに似たり、然れども與二之鑑一を以て鑑の名を與ふと爲すは强解に失し、且つ下の不レ知二其美一於人也の句に至りて窮す、美者は美人と爲し、人より之に鏡を與へて其容色の美なるを知らしむと解するを穩當とす、

舊國舊都、望レ之暢然、雖レ使下丘陵草木之緡入レ之者十九上、猶之暢然、況見レ見聞レ聞者也、以二十仭之臺一縣二衆間一者也、

【大意】 舊國舊都の喩を設けて久客の人、猶之を慕ふの心あるが如く、本性のまゝなる公閲休を楚王に見えしむれば、楚王も必ず暢然喜悅して本性に歸るべしと說き、譬喩を以て前の公閲休を結ぶなり、篇首より此に至るまでの五節を合して一章と爲す、第一節は、則陽夷節に因りて仕を楚に求むるより說き起し、佞人の夷節已に王を聽かしむる能はざれば、正德の公閲休に言はしむるに若くは無しと爲し、第二節

【大意】　物累を超脱し、大道に洞通して私智を卻け、天性のまゝに無爲にし、天を以て師と爲すのみなれば人より之を名づけて聖人と爲し、之に反し、人知を以て事を爲さんとすれば、人知は限りありて、爲し得ることは甚だ少きを說く、

【通釋】　道に達するの聖人は、身は人世の中にあれども、心は世外に超脱して、物累に繫縛纏綿せらるゝことなく、其大知は、內外精粗を盡くして、天道に洞通し、而して己は其の綢繆に達し一體に周盡するの聖人なることを知らず、何となれば、是れ卽ち其性のまゝなればなり、天の命ずる所を履み行ひ、自然に從うて作し、天を以て師と爲し、自ら聖人なることを知らず、人則ち從つて之を名づけて聖人と爲すなり、若し然らず、人の私智を以て、利害を憂慮して事を爲さんとすれば、其の行ふを得る所は甚だ少く、人智は限りありて、行ふ能はざること甚だ多し、其れ之を如何せんや、

【解義】　〔聖人達綢繆〕「釋文」に、綢繆は猶纏綿のごとし、成玄英曰く、綢繆は結縛なり、〔周盡一體〕精粗內外を包ねて天道に洞通するを謂ふ、「釋文」に一體は天なり、〔復命搖作〕按ずるに、復は履なり、搖作は逍遙として作すなり、天の命ずる所を履み、無爲にして作すを言ふ、〔憂乎知而所行恆無幾時其有止也〕知は智なり、無幾は少なきを謂ふ、有止は限りあるなり、或は幾時の二字を連讀する者あるは誤りなり、

生而美者、人與之鑑、不告則不知其美於人也、若知之、若不知之、若聞之、若不聞之、其可喜也終無已、人之好之亦無已、性也、聖人之愛人也、人與之名、不告則不知其愛人也、若知之、若不聞之、若不聞之、其愛人也終無已、人之安之亦無已、性也、

富貴を忘れて、自ら卑下に化せしむ、其の外物に於けるや、之に牽かれて性命を毀損すること無く、物を物として己の用に供し、以て娛樂を爲す、其の人に於けるや、自己と人と皆通じて一たるを樂み、和豫して彼我の界を爲さず、而して又能く己の性を保全して失はざるなり、其の德此くの如し、故に或は言はず語らざる中に、自ら人をして中和の氣に醉はしめて、鄙心を除き去り、人と並び立てるのみにして、無爲の中に自ら親和して父子の情宜に化せしむ、彼の公閱休はかゝる聖人の德ありながら、出てゝ仕ふるを欲せず、退隱を期して、江上と山樊とに安んじ、而して其の爲す所を純一閒靜にす、公閱休は世人の利祿を求め、榮達に志ざす者と異なること、是くの如く甚だ遠きなり、暴戾なる楚王に說くに此の正德の公閱休を以てするは、猶ほ凍者に春煖を假し、暍者に冷風を假すが如し、必ず其心を和化せしむることを得て、則陽の希望も達するを得ん、故に公閱休を待てと曰ふなりと、實は公閱休の正德無欲を擧げて、則陽の仕進に奔競するを諷するなり、

【解義】〔其於物也與之爲娛矣〕常人は、外物に牽かれて己の性を毀損すれども、聖人は物を物として物に物とせられず、故に之と娛樂を爲す、所謂與物爲春なり、〔其於人也樂物之通〕物我の隔てなく、相得て樂む、所謂和豫通而不失於兌なり、〔彼其乎歸居〕東條一堂曰く、其は期の訛り、彼は公閱休を指して言ふ、彼其乎歸居而一閒其所施の十一字を一句と爲す、言ふ、彼れ其の心退隱を期し、而して其の爲す所を純一閒靜にす、故に能く人を化すること此くの如しと、〔其於人心者若是其遠也〕按ずるに、人心者の三字連讀すべし、世人の利祿を求むるに心ある者を謂ふ、公閱休の性を保ち德を全くするは、此と遠きこと前述の如し、

聖人達綢繆、周盡一體矣、而不知其然、性也、復命搖作而以天爲師、人則從而命之也、憂乎知而所行、恒無幾、時其有止也、若之何、

はざれば、たゞ正徳あるのみ、故に下に聖人を說くなり、

【解義】〔則陽游於楚〕「釋文」に司馬云ふ、名は則陽字は彭陽なり、一に云ふ、姓は彭、名は則陽と、成玄英曰く、魯人、諸侯に游事し、後に楚に入り、楚の文王に事へんと欲すと、何に據るを知らず、〔夷節〕楚の臣なり、〔王果〕楚の賢人、〔何不譚我於王〕譚は談に同じ、李云ふ、說なり、〔揭〕「釋文」に司馬云ふ、刺すなり、〔樊〕「釋文」に李云ふ、傍なり、司馬云ふ、陰なり、「廣雅」に云ふ、邊なり、〔顚冥乎富貴之地〕「釋文」に司馬云ふ、顚冥は猶迷惑のごとし、其交り人主に結び、情富貴に馳するを言ふ、〔凍者假衣反冬乎冷風〕暍は「字林」に云ふ、傷暑なりと、淮南子に、夫人之事其神而嬈其精、營營然而有求於外、此皆失其神明而離其宅也、是故凍者假兼衣于春、而暍者望冷風于秋、夫有病於內者、必有色於外矣とあり、此處とほゞ同文同義なり、唯此處は非佞人正徳其孰何撓焉の一句を置きて紐と爲し、此の一節に於て夷節を說き、次節に於て正徳の公閱休を說く、

故聖人、其窮也、使家人忘其貧、其達也、使王公忘爵祿而化卑、其於物也、與之爲娛矣、其於人也、樂物之通而保己焉、故或不言而飮人以和、與人竝立而使人化、父子之宜、彼其乎歸居、一間其所施、其於人心者、若是其遠也、故曰、待公閱休、

【大意】以上は則陽の仕進を求むるを假り、公閱休に非れば、楚王に說くべき者無きを言ひ、聖人の必ず人を感化する功あるを論ずるの發端とす、故に以下詳に聖人を論ず、

【通釋】聖人は、其の窮して下に在るや、淡然として欲無く、奢靡を貴ばず、其所に安んじて、道德を以て榮と爲す、故に其家人も自ら之に化して、貧の苦しむべきを知らず、其の達して上に在るや、爵祿を輕んじて道德を重んず、故に王公をして其有つ所の爵祿の

かずとして之を辭し、因て公閲休の人と爲りは正德の聖人なるを叙し、又夷節の人と爲りは德無くして知あり、高貴の地に顚冥する佞人なるを叙し、次ぎに又楚王の人と爲りを叙し、楚王に說くには夷節の如き佞人か、公閲休の如き正德を以てするに非ざれば能はざるを謂ふ、而して重きは公閲休に在り、故に次節に更に之を詳說す、

【通釋】 則陽仕へて祿を求めんとするの志あり、楚に往きて夷節に周旋を請ひたれば、夷節は則陽を用ひんことを王に說きたれども、王は之を聽かずして、未だ謁見をも命ぜられざれば、夷節更に言ふ能はず、王の前を退きて家に歸りたり、則陽乃ち楚の賢人王果を訪ひ、之に謂つて曰く先生は我を登庸することを王に說き下さる樣に願はれまじきやと、王果曰く其事ならば、我よりも公閲休に言はしむるが善からむ、彭陽曰く、其の公閲休とは如何なる人ぞや、王果曰く、公閲休は隱士にて、冬は江上を行きて、水中の鼈を刺して取り、夏は山陰の涼しき處に休息し居りて、住居すべき家も無く、人の訪ひ來りて問ふ者あれば、此の江上と山樊とが卽ち予が宅なりと曰ふ、少しも世に求めなき淡泊無欲の聖人なり、此人ならば或は王に說くことを得ん、夫の夷節すら既に子を薦めて王に用ひしむる能はざるに、況や我は何ぞ子を王に說くことを得んや、我は又とても夷節には及ばざるなり、其故は、彼の夷節の人と爲りは、德無くして智あり、能く自ら屈して己を高ぶらず、之を以て善く人意に投合して、其交りを固くすること神の如し、彼は固より富貴の地位に迷惑し、物欲に溺るゝ者にて、其の人と交るにも、相助けて德を修むるに非ずして、相助けて德を損するのみ、是くの如きは我の能く及ぶ所に非ざるなり、彼の凍えたる者は、衣服を重ねて春を假り來れば痊え、暑熱に病む者は、冷風を生じて夏を冬に反へせば痊ゆ、彼の楚王の人と爲りは、其形は、尊大にして嚴かにし、苟も罪ある者は之を殺して赦さゝること虎の如し、故に楚王に說くには、前の喩の如く、尤も其病に適して快く感ずること、凍者の煖衣、暍者の冷風の如き者、卽ち佞人が才辯を以て之を奪ふか、正德の士が至道を以て之を屈服せしむるかに非ざれば、何ぞ能く楚王の心を撓めて吾說に從はしむるを得んや、而して夷節の佞已に之を撓ます能

羊肉不慕蟻、蟻慕羊肉、羊肉羶也、舜有羶行、百姓悅之、

鴟目有所適、鶴脛有所節、解之也悲、

風之過河也有損焉、日之過河也有損焉、請只風與日相與守河、而河以爲未始其攖也、恃源而往者也、

足之於地也踐、雖踐、恃其所不蹍、而後善博也、人之知也少、雖少、恃其所不知、而後知天之所謂也、

水之守土也審、影之守人也審、物之守物也審、

則陽第二十五

此篇大道は名づけ言ふべからず、人當に其の知らざる所に止まり、之を迹象に求むべからず、之を事物に求むべからず、必ず言默兩つながら忘れて、乃ち大道に當るあることを明かにするなり、

則陽遊於楚、夷節言之於王、王未之見、夷節歸、彭陽見王果曰、夫子何不譚我於王、王果曰、我不若公閱休、彭陽曰、公閱休奚爲者邪、曰、冬則擉鼈於江、夏則休乎山樊、有過而問者、曰、此予宅也、夫夷節已不能、而況我乎、吾又不若夷節、夫夷節之爲人也、無德而有知、不自許、以之神其交、固顚冥乎富貴之地、非相助以德、相助消也、夫凍者假衣於春、暍者反冬乎冷風、夫楚王之爲人也、形尊嚴、其於罪也、無赦如虎、非佞人正德、其孰能撓焉、

【大意】則陽仕を楚に求め、夷節之を王に言へども王聽かず、則陽更に王果に請ふ、王果自ら公閱休に若

すを謂ふ、下文の有照有樞有彼の三有字も亦助語と、〔循有照〕成玄英曰く、循順也、但順二其天然一智自明照と、齊物論篇の照二之于天一の照、及び葆光の光なり、庚桑楚篇の宇泰定者發二乎天光一の天光も亦此の照に同じ、〔冥有樞〕冥は冥合なり、樞は齊物論篇の彼是莫レ得二其偶一謂二之道樞一樞始得二其環中一の樞にして、道を謂ふなり、〔始有彼〕始は太初なり、彼は齊物論篇非レ彼無レ我の彼にて、道卽ち前の樞を指すなり、道は天地の創造せられざる始めよりして自ら存在するを謂ふ、〔不可以有崖〕崖は端崖なり、際崖なり、〔頡滑有實〕「釋文」に向云、頡滑謂二錯亂一也と、實は實用、卽ち前に擧げたる、七大是れなり、〔可不謂有大揚搉乎〕「漢書」の注に、揚擧也、搉引也と、天運篇に孰主二張是一孰綱二維是一孰居無レ事推而行レ之とあるは、亦此と同意、天地日月を揭揚して之を運行旋轉せしめ、萬物を造化する大作用を謂ふなり、此の大作用ある所より、其幽を發し其實を核して、道を知り、惑を解けと說示するなり、〔闔不亦問是已〕闔は盍に同じく、何とも訓し、又何不とも訓するなり、王引之曰く、闔不何不也、盍爲二何不一而又爲二何と、巖井文の不の字を衍文と爲すは誤なり、已は猶ほ耳のごとし、劉淇曰く凡問之餘聲揚以長、則爲二何邪何與一抑而短則爲二何已何耳一と、〔是尙大不惑〕尙は庶幾なり、劉淇曰く尙是心所二貴重一如二易高一尙二其心一是也、心所二貴重一卽是心所二冀望一故得二轉爲一庶幾一也と、又尙は猶なり、劉淇曰く心所二念尙一有二不レ絕之義一故得レ爲レ猶也と、東畡曰く大は大略なり、「宣注」には天下猶可二同明一此道一と、

名言

夫逃二虛空一者、藜藋柱二乎鼪鼬之逕一踉二位其空一聞二人足音一跫然而喜矣、又況昆弟親戚之謦二欬其側一者乎、

愛レ民、害レ民之始也、爲レ義偃レ兵、造兵之本也、

知士無二思慮之變一則不レ樂、辯士無二談說之序一則不レ樂、察士無二凌誶之事一則不レ樂、皆囿二於物一者也、

招世之士興レ朝、中民之士榮レ官、筋力之士矜レ難、勇敢之士奮レ患、兵革之士樂レ戰、枯槁之士宿レ名、法律之士廣レ治、禮樂之士敬レ容、仁義之士貴レ際、

農夫無二艸萊之事一則不レ比、商賈無二市井之事一則不レ比、

庶人有二旦暮之業一則勸、百工有二器械之巧一則壯、

錢財不レ積則貪者憂、權勢不レ尤則夸者悲、

狗不下以二善吠一爲上レ良、人不下以二善言一爲上レ賢、

意に說き、少しも危險を感ぜず、安全なるの義と爲すを穩當とす、〔知天之所謂〕謂は爲と通ず、天之所爲とは即ち下文に云はゆる大一大陰大目大均大方大信大定なり、〔大一〕道之所一即ち一氣の初め、渾沌として未だ判れざるを謂ふ、天下篇に至大無外、謂之大一と、是れ惠施の言なれども、亦道を指すなり、齊物論篇に天地與我並生、而萬物與我爲一とあり、故に下文に大一通之と曰ふなり、〔大陰〕至靜の象なり、道は至靜なるが故に、能く萬物を生ず、能く道の至靜を知れば、以て物の紛擾を解くべし、止水の能く物を鑑するが如し、故に下文に曰く、大陰解之と、〔大目〕亦道を謂ふなり、一方を偏視せず、宇宙を達觀す、故に大目と曰ふ、下文に大目視之とは是れなり、郭象の用萬物之自見亦大目也と曰ひ、林雲銘の分而有名謂之大目と曰ひ、胡文英の陰陽五行と曰ふは、皆是に非ず、〔大均〕即ち齊物論篇、休乎天鈞の天鈞なり、天鈞亦天均に作る、寓言篇に曰く、萬物皆種也、以不同形相禪、始卒若環、莫得其倫、是謂天均、天均者天倪也と、是なり、下文に大均緣之とあるは、自然の化に循ひ、生死出入して哀樂すべからざるを謂ふ、〔大方〕亦道を謂ふなり、秋水篇に吾長見笑於大方之家の大方に同じ、「釋文」に司馬云、大方大道也と、方に偏せず、六通四達す、故に大方と謂ふなり、之を心に體すれば、偏執することなし、故に下文に大方體之と曰ふなり、〔大信〕道は形無くして見るべからざれども、其行はるゝは甚だ信にして違ふことなし、齊物論篇に可行已信、而不見其形、有情而無形とあり、大宗師篇には夫道有情有信とあるは、即ち大信なり、此の大信によつて定むれば疑惑なし、故に下文に大信稽之とあり、稽は定なり、〔大定〕道は物の化を命じて自ら變化せず、故に之を名づけて大定と曰ふ、大浸稽天而不溺、大旱金石流、土山焦、而不熱の眞人は大定を以て其性を持すればなり、故に下文に曰く、大定持之と、以上七大の解、「郭注」「成疏」共に本書中に用ゐられたる義を取りて解を下さず、徒に己の意を以て妄に之を解釋し、意義通ぜざるを致す、今煩を避けて一々之を舉正せず、〔盡有天〕郭象の夫物未有無自然者也と曰へるは前後の文と意義接續せず、非なり、藤澤東畡曰く有天の有は助語、只天を謂ふ、盡有天とは能く天道を盡く

けて大方と曰ふ、此の大方を心身に體すれば、爲す所公平にして、毫も偏倚するの患なし、道は形無くして見るべからざれども、其行はるゝは眞實にして、毫も違ふことなし、人之によりて心を定むれば、疑惑あることなし、道は萬物の化を命じて、自らは大定して變ずることなし、人之によりて其性を保てば、死生によりて變ぜず、外物に動かさるゝことなし、此の七者は皆人智にて知る能はざる者にて、不知の知卽ち大知なる者なり、此の如くにして、能く天道を盡くし能く照らし明かなる天光に循ひ眞理に冥合し其の行爲の始めや受動的に彼より爲すに從ひて之を爲し行くときは其の道を難するや自然に解して別に手を下だして解せざる者に似たり、又能く其の道を知るや知らざる者に似たり、此の如くにして然る後に始めて道を知るなり、彼の自ら之を知りたりとする者は、實は未だ之を知らざるなり、則ち之を問うて知らんとするも、道は至大にして限りなければ、端緒の由りて入るべき者ありとすべからず、然れども又端緒の入るべき者無しともすべからず、其の入るへき端とは何ぞ、道は空漠の中に錯亂して知るべからざるが如くなれども、其錯亂の中に實用ありて、太古の前より今日に至るまで更代することなく存在し、甚しき長久を經れども虧損すへからざるなり、されば則ち道は徒に空漠なるのみに非ずして、又大作用の昭著なる者ありと謂はざるべけんや、何ぞ此の大作用の昭著なる所より道を問ふことを爲さずして、永く惑ひ居るや、此の顯揚して惑はざる所よりして道を知り、以て惑はざるの本性に歸復することを得ば、是れ尙大不惑の眞人たるなり、

【解義】〔足之於地也踐而後善博也〕成玄英曰く、踐蹍俱履蹈也、夫足之能行、必履於地、仍賴不踐之土、而後得行、若無餘地則無由安善而致博遠也、此擧譬也と、兪樾は踐字に就て異說を立てゝ曰く、兩踐字並當作淺、或字之誤、或古通用也、足之於地、止取容足而已、故曰、足之於地也淺然容足之外、雖皆無用之地而不可廢也、故曰、雖淺恃其所不蹍而後善博也、下文曰、人之知也少、雖少恃其所不知而後知天之所謂也、少與淺文義相近、若作踐則不可通矣と、兪說理あり、從ふべし、博は「釋文」に李を引て能行廣遠と曰ひ、諸解皆之に從へども、心廣體胖の廣の

生より此に至るの三節を合して一章と爲す、第一節は道の化によりて人は死生する者なれば、死生は元來一にして二ならずと說き、藥を以て之を喩へ、人事を以て之を證し、第二節は道を得る者は日に外物に接するも攖さるゝことなきも、道を得ざる者は外物の爲めに性命を毀損するの危險あれば、世に亡國戮民ありて絕えざるは、道を問ふを知らざるに由るを謂ひ、第三節、人は道の大作用中に在りて自ら知らず私知を傲れども、人知は至小なり、不知にして道の大を知るを得べし、之を知るは、大一大陰大目大均大方大信大定の七大の大揚搉よりして道の大作用を覗ひ以て其惑ひを解かば、大不惑の眞人となるを得んと、道を知るの方針を示めせり、故に此章の主意は、人の最も感じ易き死生より說き起して、道の恃むべく、人知の恃むべからざるを言ひ、道を知るの方針を示せるなり、

【通釋】 人の地上に在るや、立つにも行くにも、たゞ足を容るゝに足るだけの地を要するのみ、其の履む所の地は僅少なれども、他に履まざるの餘地多くありて、之を恃んで能く安全に行動するを得るなり、是の譬喩と同じく、宇宙間の事、人知を以て知り得べき者は誠に僅少に過ぎずして、知り得べからざる者甚だ多し、然れども其の知らざる所を恃んで安全に世に處するを得、天の大作用の種々に爲す所を知るを得るなり、天の大作用の爲す所を知るとは何ぞ、大一大陰大目大均大方大信大定の七ッの者は、道の本然なり、若し之を知るに於ては、至れり盡くせりと謂ふべし、萬物其の數多く、是非相反すと雖も、其の本は皆道の一なる所より出でたる者なり、故に大一を知りて、是非の通じて一たり、萬物の通じて一たるを知るべし、道は至て靜かなる者なるが故に、又之を名づけて大陰と曰ふ、能く道の至靜なるを知れば、由て以て物の紛擾を解くを得べし、道は宇宙に通じて視ざる所なし、故に又之を名づけて大目と曰ふ、能く此の大目を知りて通觀すれば、物我是非の偏見を去るを得べし、道の作用によりて物質は自然に變化して止むことなく、始まりては卒り、卒りては始まる、之を大均と曰ふ、此の大均を知り、之に緣り循へば、死生出入して哀樂すること無かるべし、道は六通四達して一方に偏執することなき者なり、故に又之を名づ

眞論、皆云劬而徇齊、大戴禮作叡齊、亦作慧齊、心之於徇也、卽心之於徇也、亦卽心之於慧也、目用在明、耳用在聰、心用在慧、知北游篇云、思慮恂達、耳目聰明、亦卽徇齊字と、殉を徇の假借と爲し、徇は慧なりと爲す、意義明通、用ふべし、〔凡能其於府也殆〕能は機能なり、耳目や心や、皆能なり、府は靈府なり、精神を謂ふ、凡べての機能は皆外物と接して相守ること審密なるが爲めに、精神を危くするを謂ふ、〔不給改〕陳壽昌曰く、不給猶不及也と、〔禍之長也茲萃〕郭象曰く、萃聚也と、成玄英曰く、凶災禍患增長而多聚之也と、

故足之於地也踐、雖踐恃其所不蹍而後善博也、人之知也少、雖少恃其所不知而後知天之所謂也、知大一、知大陰、知大目、知大均、知大方、知大信、知大定、至矣、大一通之、大陰解之、大目視之、大均緣之、大方體之、大信稽之、大定持之、盡有天、循有照、冥有樞、始有彼、則其解之也、似不解之者、其知之也、似不知之也、不知而後知之、其問之也、不可以有崖、而不可以無崖、頡滑有實、古今不代、而不可以虧、則可不謂有大揚搉乎、闔不亦問是已、奚惑然爲、以不惑解惑、復於不惑、是尙大不惑、

【大意】　道は宇宙間に錯亂して捉へ難きも、其實用あり、古今を通じて代らす、虧損なし、是を以て觀れば道の大作用の昭著なるを知るべし、是の大作用の永く惑はさる所よりして道を知り、以て不惑の本性に復らば、是れ尙大不惑の眞人たるを說く、〇得之也

能の爲めに精神を危くし禍敗を長ずるは易くして、之を本性に、復するの難きこと此くの如し、而るに世人察せず、反て耳目の聰明、心の知慧を以て己の寶と爲して、之を愛重するは悲むべきことならずや、故に君主としては其國を亡ぼし、民としては罪科を犯し其身を誅戮せらるゝ者ありて絶えざるは、是の耳目等の諸機能に引かれて、精神を外物に拘束せらるゝの害を究めざるに由るなり、

【解義】〔鶴脛有所節解之也悲〕節は適と同義、有所節は有所適を言ふなり、「呂覽」の情慾篇情有節の高誘注に節適也とあり、「考工記」に、工人是故厚其液而節其帑の鄭玄注に節猶適也とあり、鶴脛有所節は鶴の脛の長きは水を渉るに適するを謂ふなり、成玄英の枝節と爲すは是に非ず、「釋文」に司馬云、解去也と、此喩は駢拇篇の鳧脛雖短、續之則憂、鶴脛雖長、斷之則悲より來り、自然に循ひ、人知を加ふべからさるを謂ふなり、〔風之過河也有損焉〕林雲銘曰く、風之過三字句、河也有損、謂減耗其流也と、河は眞人に喩へ、風と日とは外物に喩へ、眞人は道を得、故に外物に應じて性命を毀損せざるを謂ふなり、〔以爲末始其攖也〕「宣注」は其を以て有の誤と爲せり、〔請只〕此二字、「郭注」「成疏」共に解なく「釋文」にも解なし、巖井文の衍文と爲すも其理無きに非す、胡文英は或説を引きて猶縱使と曰ふも、根據あるの説に非ず、但し本文のまゝにては讀む能はず、蓋し傳寫訛誤して此に至るならん今姑く胡説に依りて解す、〔水之守土也物之守物也審〕審は詳審なり、「成疏」の安定と爲し、水非土則不安、影無人則不見、物無造物則不立、故三者相守、而自以爲固、而新故不住、存亡不停、昨日之物於今已化、山舟替遁、昧者不知斯之義也と曰ひ、口義の定也信也と爲し、此三句是一意、天地之間、自然一定之理、決不可易也と曰ひ、深く解釋するは皆誤りなり、此三句には深意なく、たゞ其相守るの審密なるを謂ふのみ、而して上の二句は客にして下の一句が主なり、下文の耳目の物に引かれて殆きを言はんが爲めに、其の相守るの審密なるを言ふのみ、〔心之於殉也殆〕「成疏」に殉逐也、心逐無崖之知、欲不危殆其可得乎とあり、章炳麟曰く明聰殉詞例同、「説文」無殉、字但作徇、今字作徇、此假借爲侚也、說文侚疾也、史記五帝本紀、素問上古天

【通釋】　以下數箇の故曰及び故を用ひて前節の旨意を申論するなり、故に曰く、鴟の目は晝は見えざるも夜に於て殊に明かなれば、是れ夜に適するなり、鶴の脛は甚だ長けれども、水を渉るに便利なれば、是れ水を渉るに適するなり、故に之を斷ち切らば、鶴は必ず之を悲まん、故に自然に備はりたる者は、皆之に循うて、人智を加ふべからず、(是れ一喩)故に曰く、風の水面を吹き過ぐるや、河は風に水氣を取られて減損あり、日光の水面を照らし過ぐるや、河は水分を蒸發せられて減損あり、縱合ひ風と日とは相與に絶えず水面を守りて離れざるも、河は其の爲めに毫も攖されず、未だ嘗て水の減損するを覺えず、何となれば河は水源より滾滾として迭り來るを恃みて流るゝ者あればなり(是れ一喩)、眞人の物に應して窮まらざるも、亦其源あるを以てなり、源とは何ぞ、道是れなり、道の自然に從ひ、人智を用ひざるに在るのみ、但し道を得て其源を失はざるは、容易にあらず、前の風と日とが常に水面を守りて離れざるか如くに、水の土を守りて離れざることも、極めて詳審にして、微小の間隙にも入らざることなし、影の人を守りて離れざることも、極めて詳審にして、行くにも止まるにも起つにも座するにも、少しも從はざることなし、物と物との互に相守りて離れざることも、極めて詳審にして、互に相引き相用ひて間斷あることなし、故に人の目は其明を以て形を視ることの爲めに、物と相引きて心を外物に拘束せんとするの危險あり、耳は其聰を以て聲音を聞くことの爲めに、物と相引きて精神を外物に拘束せんとするの危險あり、心は其知慧を以て物の是非好惡を知ることの爲めに、物と相引きて精神を外物に拘束せんとするの危險あり、たゞ耳目と心とのみならず、凡べての機能は皆一の物なれば、其の精神の居る靈府を外物に拘束せんとするの危險あらざるはなし、此の危險を曉らずして、既に外物に拘束せられ了りたるときは、之を悔い改めんとするも、復だ及ぶべからず、其禍は日に長育して、益、積聚するの勢あり、其一旦拘束せられたる精神を本に反へし、禍を轉じて福と爲さんには、反視內聽して、修養の功を積むに繇る、而して其結果を得、本性に復するは、一朝一夕の事に非ずして、久しきを待て始めて本に反り性を復するを得るなり、耳目等諸機

所殘、窘迫退走、棲息於會稽山上也と、〔唯種也〕種は「釋文」に章勇反、越大夫名也、吳越春秋云、姓文、字少禽と、成玄英曰く、句踐大敗、兵唯三千、走上會稽山、亡滅非遠、而種密謀深知亡時可存、當時矯與吳和、後二十二年而滅吳矣、夫狡兎死良狗烹、敵國滅忠臣亡、數其然也、平吳之後、范蠡去越游乎江海、變名易姓、韜光晦迹、卽陶朱公是也、大夫種不去、爲句踐所誅、但知國亡而可以存、不知愁身之必死也字亦有作穜者と、

故曰、鴟目有所適、鶴脛有所節、解之也悲、故曰、風之過河也有損焉、日之過河也有損焉、請只風與日相與守河、而河以爲未始其攖也、恃源而往者也、故水之守土也審、影之守人也審、物之守物也審、故目之於明也殆、耳之於聽也殆、心之於殉也殆、凡能其於府也殆、殆之成也不給改、禍之長也茲萃、其反也緣功、其果也待久、而人以爲己寶、不亦悲乎、故有亡國戮民无已、不知問是也、

【大意】前述の理を申言すれば、鴟目も鶴脛も皆自然なれば各適する所あり、風の水面を吹き、日又之を照らすも、河は其の爲めに水を失ふを憂へざるは、源あればなり、以て道ある者の萬事に應じて其性を毀傷せざるを知るべし、唯し耳や目や心や其他の機能は、常に外物と接して其爲めに靈府の精神を外馳せしめんとするの危險あり、外馳は甚だ易くして、之を復するは甚だ難し、然るに世人察せず、反て耳目心思を以て己の寶と爲すは、悲むべからずや、世に亡國戮民の絶えざるは、此の耳目心思の危險を忘れて、之を不問に置くが爲めなり、

【通釋】人の死生は造物者の作用にして、道の變化に過ぎず、死と生とは元來一にして二ならず、たゞ其の觀る所によりて異なるのみ、故に形軀を得て性命の形軀に寓するを以て主とし、之を失うて性命と形軀と離るゝを以て死とすれども、又一方より觀れば、形軀を得たるを以て死とし、形軀を失ふを以て生とするを得べし、之を喩ふれは、醫者は藥を用ひて病を治し甚だ有効なれども、藥の實質を檢すれば、堇たり、桔梗たり、鷄廱たり、豕零たるのみ、固より藥と名づくべき者に非ず、されば用ふる所によりて或は藥となり或は毒となるのみにて、元より藥とも毒とも定まりたるに非ず、用ふる所により、或は有効となり或は無效となるのみにて、元より定まりたるに非ず、たゞ病に應じて之を主藥として用ひて效あるのみ、此外の藥も一々擧げて言ひ盡くし難きも、亦皆此類なるのみ、人の死生と雖も亦何ぞ此の藥の定め難きに異ならんや、故に人は一に道の自然に任せて浮遊すべきのみ、たゞ死生の一定すべからざるのみならず、凡そ天下の事亦皆然りとす、故に人智を用ひて得失を決めんとすべからず、人智の知る所は甚だ淺薄にして、全體を達觀すべからざれはなり、事實を以て之を證せんに、越王勾踐の呉王夫差と戰うて大敗し、殘兵三千を以て會稽山に立て籠もり、越の將に滅ひんとする時に於て、獨り大夫種は、越の今日の敗亡は他日の勝て國を存する所以なるを知り、勾踐を勸めて呉に降らしめ、後に果して呉を敗りて越を與したるは智なれども、越王の讒を信して其身を殺すの愁ふべき所以を知らざりしは、其智の淺薄にして賴むに足らざるを知るべし、

【解義】〔堇〕毒艸の名なり「釋文」に司馬云、烏頭也治風冷痺と、又川烏とも名づく、〔桔梗〕草の名なり「釋文」に司馬云、桔梗治心腹血瘀瘕痺と、〔鷄廱〕草の名「釋文」に司馬云、卽鷄頭也、一名芡、與藕子合爲散服之延年と、〔豕零〕草の名「釋文」に、司馬本作豕囊云、一名豬苓、根似豬卵可以治渴と、〔時爲帝者也〕郭慶藩曰く、帝者主也、言堇桔梗鷄廱豕零更相爲主也と、病の異なるに從ひ、各主藥として用ひらるゝを謂ふ、〔句踐也以甲楯云々〕句踐は越王なり、甲はヨロヒ、楯はタテ、兵卒の義として用ふ「釋文」に李云、登山曰棲と、成玄英曰く、越爲呉軍

多く不比を民と民と相親和せずと爲し、不利を眞人に利ならずと爲すは、莊子の意を得ざるに似たり、〔抱德煬和〕抱は保也、考證前に見ゆ、煬は溫也、煬和とは、和氣を內に藏して物と皆春なるを謂ふ、德充符篇の遊乎德之和の語と同義也、〔於蟻棄知於魚得計於羊棄意〕此三句の解、「郭注」「釋文」皆誤れり、「成疏」之を得たり、曰く、不慕羊肉之仁、故於蟻棄智也、不爲羶行敎物、故於羊棄意也、既遺仁義、合乎至道、不傷濡沫、相忘於江湖、故於魚得計と、此の三語は前の舜有羶行より發し來れる也、於蟻棄知は凡べての外物に誘はれざるを謂ひ、於羊棄意は、羊肉が蟻を聚むるの心なけれども、其の羶き臭あるを以て意ありと爲し、棄意とは眞人の仁義の羶行なきに喩ふる也、〔以目視目以耳聽耳〕己の目は自ら視るべからず、己の耳は自ら聽くべからず、是れたゞ反視內聽して外物に牽かれざるを謂ふのみ、此等の語を解するには心得を要す、理窟を以て論ずべからず、〔古之眞人〕最後の此一句は諸家多く後章の首に屬すれども、姚鼐の之を此章に屬し、覆言眞人以美之と曰へるは從ふべし、詠歎して贊美するの意あり、

得之也生、失之、死、得之、死、失之也生、藥也、其實菫也、桔梗也、雞廱也、豕零也、是時爲帝者也、何可勝言、勾踐也以甲楯三千棲於會稽、唯種也能知亡之所以存、唯種也不知其身之所以愁、

【大意】人の形軀を得て此世に在るを生とし、形軀を失うて此世を去るを死とすれども、又一方より觀れば、形軀を失ふを生とし、形軀を得るを死とも謂ふを得べし、死生の一にして二ならず、人智を以て定め難きことは毒藥の二物が用方によりて藥と毒とも一定すべからざるに同じ、故に人はたゞ道の自然に隨ひて、人知は一切之を用ふべからざるを說き越王の君臣の事に就いて禍福存亡の測るべからざるを言ひ人智の淺薄にして賴むべからざるを謂ふ、

でにて斷ち、或は其變也循までにて斷ち、或は不以人入天までにて斷つ、今姚鼐の說に從ひ、後の古之聖人を此意に屬し、覆言して眞人の德を歎美し以て一章を收束すと爲す、陳壽昌の說亦同じ、壽昌曰く、三稱眞人、以贊作收、恰與篇首三峯遙遙相映、章法既符、古韻亦合、明眼人當自辨之と、

【通釋】 上文の卷婁を承けて曰ふ、衆人に慕ひ聚まられば、其の爲めに勞苦して性命を保全する能はざるに至るを以て、神人は人民の來り歸するを喜ばず、反て衆の至るを惡めり、衆人の慕ひ至ることあるも之と親比せず、親比せざるときは仁義を以て衆人を愛利することあらず、斯く衆人に不比不利なるが故に、特に甚だ親む所の人も無く、特に甚だ疎んずる所の人も無く、唯己の德を保ち和を煬めて以て天下の自然に順ふのみ、此くの如きを眞人とは謂ふなり、眞人は之を物に喩へんに、蟻に於て云はゞ、蟻が羶き肉を慕ふが如き知を棄て去りて、外物を慕ひ好むことなし、魚に於て云はゞ、魚が江湖に相忘れ、洋々として遊ぶを以て其計を得たりとして無爲にし、羊に於て云はゞ、羶き臭ありて蟻を引寄する意を棄て去りて、特に人を仁愛すること無く、從て人に慕ひ聚まられて爲めに己の性命を毀損すること無し、知を棄て意を棄つるとは如何にするやと云ふに、目は外物を見ずして內自ら視、耳は外の聲を聞かずして內自ら聽き、心は外の事物に牽かれずして、內自ら心に復歸して性を保つなり、此くの如くなるが故に、眞人の心の平かなることは墨繩の如くに公平正直にして、又其の事變に應ずるには一に自然の理に循ひて、千變萬化無爲にして爲さゞるなし、之を要するに、古の眞人は天の自然の道を以て世に處し事物に應じ、人智の私を以て此の自然の天道の間に入らしむることなし、嗚呼是れぞ誠の古への眞人なり、

【解義】 〔神人惡衆至〕神人は眞人に同じ、此に首めに神人と曰ひ、後に此謂眞人と曰ふにて知るべし、たゞ眞とは其の假なきを言ひ、神とは其の測られざるを言ふ、其實は同じきなり、郭象が衆自至耳非舜好而致也と曰ひ、成玄英も亦三徙遠之以惡也と曰ひ、舜を以て神人と爲すは大謬なり、〔衆至則不比不比則不利也〕比は親み合ふなり、不比は眞人が衆と親比せざる也、不利は眞人が衆を愛利せざる也、諸家

ば、隈は曲深の處たるのみにして、畛内とも斷じ難し奎蹏に屬して說くを可とす、〔此以域進此以域退〕「成疏」に曰く、域境界也、蟲則逐豕而有亡、人則隨境而榮樂、故謂之域進退也と、自ら主たる能はずして、境と共に進退するを謂ふ、〔鄧之虛〕「釋文」に虛本又作墟とあり、鄧墟は地名、之は語詞也、〔擧之童土之地〕「釋文」に向云、童土地無草木也と、舜の居る所、人聚まりて都邑を成し、草木なし、故に童土之地と曰ふ、〔冀得其來之澤〕王先謙曰く望得舜來而施澤也と、

是以神人惡衆至、衆至則不比、不比則不利也、故無所甚親、無所甚疏、抱德煬和、以順天下、此謂眞人、於蟻棄知、於魚得計、於羊棄意、以目視目、以耳聽耳、以心復心、若然者其平也繩、其變也循、古之眞人以天待之、不以人入天、古之眞人、

【大意】　上文を反承して眞人は何事も天道の自然を以て之に應じ、一點の私知をも其間に加へず、故に其德甚だ深厚にして、人をして歎美止む能はざらしむるを說く、○前の有暖姝者の節と此節とを合して一章とす、前節は儒墨名家の如き區々たる學說に拘束せらるゝ暖姝と、俗士の富貴利達を貪り、恃むべからざるを恃みて外物と共に、進退死生する濡需と、仁義の行ひあるが爲めに衆人に慕うて來り聚まられ、其爲めに終身勞苦する舜の如き卷婁者との三者を擧げて、皆大道を知らず性命を保全せざる者なるを謂ひ、後節は之に反して眞人は衆人の慕ひ至るを惡み、人を愛利せず、知を棄て意を棄て、外物に役せられずして自ら其性命を保全し、善く世と推移するを謂ふ、眞人の道を知り天に順ふの貴ぶべきを言はんが爲めに、前の三者を擧げたるに過ぎず、三者の中にても、卷婁が主にして、暖姝と濡需とは引合に出したる客なり、故に後節の首めに是以神人惡衆至の句を用ひて、前の卷婁のみを承く、此章は古來諸家或は於羊棄意ま

焦かるゝを知らざるなり、此の蝨は豕に其身を寄寓せしめて封境と爲し、其外に出づる能はずして、其物と共に進退死生する者なり、人世の小區域に局束して富貴利達を樂み、終身宇宙の大を知る能はざる者は、此の蝨の如し、故に此の一種の輩を名づけて濡需者と謂ふなり、卷婁者とは舜が卽ち是れなり、羊肉は蟻を慕うて呼び寄せざるも、蟻が羊肉を慕うて聚り來るは、羊肉が羶きが故に、蟻之を好んで聚るなり、之と同じく舜は羶を行ひ卽ち仁義の行ひあるが故に、百姓之を悅ぶなり、故に舜の居る所、民慕ふて來り聚り、徙りて之を避くるも、愈聚り來りて都邑を成し、鄧墟に居る時に至りては、十萬家の民あり、是に於て帝堯、舜の賢德あるを聞き、之を其の都を成せる童土の地より擧げて曰く、願はくは舜の來りて仁惠の澤を萬民に施すを得んと、舜已に其都より擧げられ、堯に代りて天子と爲り、年も老い耳目の聰明も衰へたれども、萬機の政に忙はしくして、休めて歸ることを得ず、是れ仁義の爲めに知らず識らず人を引寄せ、遂に堯に用ひられて終身安んぜず、物の爲めに纏繞せられて性命を毀損す、此くの如き輩を名づけて卷婁者と謂ふなり、

【解義】〔暖姝〕「釋文」には暖柔貌、姝妖貌と曰ひ、成玄英は自許之貌と曰ひ、林希逸は淺見自喜之意と曰ふ、文字に拘はりては解する能はず、下文に言ふ所を以て其義を求むれば、林說之を得るに似たり、下の濡需卷婁と叶音也、〔濡需〕「釋文」に謂偸安須臾之頃とあり、下文に言ふ所の意と合す、成玄英の矜誇之貌と爲すは當らず、〔卷婁〕「釋文」に猶拘攣也とあり、「成疏」は謂背項俛曲向前、攣卷而傴僂也と曰ひ、口義は傴僂而自苦之貌と曰ひ、皆舜自ら苦むの形貌と爲して說けども、婁は摟と通じ、人を己に引き寄せる義と解すれば、最も能く下文の言ふ所と合す、〔自說〕說は悅に同じ、〔未始有物〕此語は齊物論篇に出で、又屢前の諸篇に見ゆ、天地萬物皆無より出で、虛無は道の本源也、未始有物は此の本源を指す、〔奎蹏曲隈〕「說文」に奎兩髀之間とあり、蹏は蹄に同じ、隈は「釋文」に向を引て股間也とあれども、郭慶藩は之を非として曰く、曲隈蓋謂胯內、淮南覽冥訓高注、隈曲深處、左僖二十五年傳杜注、隈隱蔽之處、是知言隈者皆在內曲深之謂と、慶藩の考證する所を觀れ

擇疏鬣、自以爲廣宮大囿、奎蹏曲隈、乳間股脚、自以爲安室利處、不知屠者之一旦鼓臂、布草操煙火、而己與豕俱焦也、此以域進、此以域退、此其所謂濡需者也、卷婁者舜也、羊肉不慕蟻、蟻慕羊肉、羊肉羶也、舜有羶行、百姓悅之、故三徙成都、至鄧之虛、而十有萬家、堯聞舜之賢、擧之童土之地、曰、冀得其來之澤、舜擧乎童土之地、年齒長矣、聰明衰矣、而不得休歸、所謂卷婁者也、

【大意】　世に暖姝濡需卷婁の三種の人あるを謂ひ、各々小區域に局限せられて大道に通ぜざるを說き、舜の仁義を爲すも亦其の三者の一たるを言ひ、以て仁義の鄙むべきを謂ふ、

【通釋】　世俗の人の識見の卑陋なる、大略之を分て三と爲す、暖姝と名づくべき者あり、濡需と名づくべき者あり、卷婁と名づくべき者あり、謂はゆる暖姝者とは、淺見自ら喜ぶの徒にして僅に或る一先生の學說を學べば、之を尊奉し、暖暖姝姝として自ら悅び、滿足して、既に微妙の理を極めたりと爲し、而して其學ぶ所は淺近取るに足らざる者にして、道の本源は未だ始めより物あらざる虛無に在ることを知らざるなり、是を以て此の一種の輩を名づけて暖姝者と謂ふなり、濡需者とは自ら矜りて分別淺き徒にして豕の身に寄生せる蝨卽ち是なり、蝨は豕の麤なる鬣を擇びて廣き家屋、大なる庭園と爲し、曲りて內に在る兩髀の間、蹏の內の入り込める處、乳房の間、股脚の邊などを擇びて、安樂なる家室、便利なる住處と爲して安心し居るも、屠者が一朝臂を奮つて豕を打殺し、草を布き火を操りて燒くときは、己の身も豕と共に

守りて人知の爲を爲さゞるなり、
【解義】〔畜畜然仁〕「釋文」に王云、郵愛勤勞之貌、〔後世其人與人相食與〕愛利を以て民を聚むれば、民の利を好むの心愈〻長じ、上又仁義を利用して篡奪を爲し、上下相率ひて墮落し、遂に人と利を爭うて相殺し相食ふに至るを謂ふ、「釋文」に將馳走於仁義、不復營農、飢則相食と曰ひ、成玄英が盛行偏愛之仁、乖於淳和之德、守內喪道之士、猶甚澆季、將來逐迹、百姓飢荒、倉廩既虛、民必相食と曰ひ、仁義を行ふが爲めに農を營まず、百姓飢荒す、故に人相食ふと爲すは、道家の意に非ず、又かゝる道理なし、此語又庚桑楚篇に出づ、玄英之を解して曰く、唐虞揖讓之風、會成篡逆之亂、亂之根本起自堯舜、千載之後、其弊不絕黃巾赤眉則是相食也と、稍此の疏に優るに似たり、〔捐仁義者寡利仁義者多〕捐は棄なり、捐仁義は仁義を施して之が報償を求めざるを謂ひ、利仁義は仁義を爲して私利を營むを謂ふ、捐と利との二字、皆仁義を行ふ者に係けて解すべし、諸家之を民に係けて解するは、恐らくは是に非ず、〔且假夫禽貪者器〕「釋文」に司馬云、禽之貪者、殺害無極、仁義貪者、傷害無窮と禽を字の如く禽獸と爲して讀むなり、藤澤東畡曰く禽貪貪如禽獸者と「發蒙」に曰く禽之貪者致害無極、禽貪之人、假之以爲盜竊資と章炳麟曰く、禽借爲廞、同得聲於今也、周禮故書以淫爲廞、說文廞讀若歆、樂記、聲淫及商注、淫貪也、楚語韋解、歆猶貪也、是禽貪二字一義と、是れ禽を廞の假借と爲し、廞は淫と通用し、淫に貪の訓あれば、禽も亦貪にして、禽貪の二字一義と爲すなり、亦一說と爲すべし、〔猶一覕也〕「釋文」に司馬云、覕暫見貌と、瞥と同音にして義も亦通ずるなり、一覕は譬喩なれば、斷制とは別事を擧ぐるを例とす、郭象の覕制也と曰ひ、斷制に相應せしめんとするは、恐らくは是に非ず、

有暖姝者、有濡需者、有卷婁者、所謂暖姝者、學一先生之言、則暖暖姝姝而私自說也、自以爲足矣、而未知未始有物也、是以謂暖姝者也、濡需者豕蝨是也、

天下也、而不知其賊天下也、夫唯外乎賢者知之矣、

【大意】 仁義は眞性を戕ひ、天下を誤る禍害の器たることを說きて堯は仁義の近効を見て遠害を知らず唯だ高く賢人に超絕し、仁義を忘るゝ至人は獨り之を知ると言ひ、有爲の政の無爲の治に若かざるを謂ふなり、

【通釋】 齧缺が出でゝ許由に途に遇ひ問うて曰く、子は將に何くに往かんとするか、許由曰く、帝堯を避けて逃れんとするなり、齧缺曰く、其は又何の故なるか、許由曰く、彼の堯は政を爲し、勤めて仁愛を施して民を聚めんとす、吾其天下の識者に笑はれんことを恐る、且其弊の窮まる所、後世に至り人民利を爭うて互に相殺し相食ふこと禽獸と同じきにも至らんか我れ其近くに居り之を旁觀するに忍びず、故に避けて逃れんとするなり、後の民を己の治下に聚むることは爲し難き事に非ず、民は利を好む者なれば、之を撫で愛すれば近き者親み、之に利益を與ふれば遠き者も至り、之を譽むれば勵み勵みて上の導くがまゝになれども、民の惡み嫌ふ所の不利危害を加ふれは、直に散じ去る者なり、故に民の好む所の愛利を施し、惡む所の危害を去れば、民は之を聚め難からざるなり、此の民を愛し民を利するは仁義より出づる者なるが、眞に民を愛して仁義を施し捐て、毫も報償を求むるの念無き者は少くして、仁義によりて自ら利せんとするの念を懷く者多し、故に世の仁義を行ふ者は、多くは眞に民を愛するの誠實の心無くして、僞仁僞義と爲らんとす、且つ貪欲禽獸の如き徒に仁義の名を以て其非望を遂げしむるの利器を假し與ふることゝならんとす、仁の末弊の恐るべきこと此くの如し、故に不自然なる仁義によりて、一人の決斷を以て天下を利せんとするは、之を喩ふれば、猶ほ物を熟視せず、チラリと見たるだけにて其情を極めんとするが如し、其の誤謬に陷るや勿論なり、彼の堯は賢人を用ひて仁義を施すの利あるを知るは、卽ち一瞥の觀察にて、賢人を用ふるの弊は仁義を利器として私利を營み、天下を賊害するの弊あることを知らざるなり、夫れ唯仁義を忘れ、高く聖賢の上に超絕せる者、卽ち至人は能く此の理を知り、自然の無爲を

るの恐れありて、防禦に難けれども、之を刖れは逃走するの恐れなきを以て、是に於て梱を刖り、齊國に至りて賣りたり、而るに梱を買ひたるは渠公といふ者にて、獸類を屠殺することを業とする人なりしかば、梱も苦役せられて其術を習ひ、禽獸を屠ることに從事せしが、毎日國君の食物と同等なる肉を食ひて一生を終りたり、〔九方歅の觀相も當りたれども、歅はたゞ其美食を得るのみを知りて、其の美食の來る所以を知らず、直に國君と同じ身分と爲るとせるは當らず、子綦の故なくして世俗の報償あるは、又必ず故なくして災厄に遭はんと言うて悲みしは能く當れり此の事實を叙するは、人知の觀相を以て禍福を占ふは、道を以て之を探るに如かざるを證明するなり、

【解義】〔適當渠公之街〕此句古來的解なし、釋文に曰く、街一本作術、或云、渠公齊之富室、爲街正、賈梱自代、終身食肉至死、一云、渠公屠者、與梱、君臣同食肉也と、成玄英更に之を敷衍して曰く、渠公齊之富人、爲街正、梱之既遭刖足、賣與齊國富商之家、代主當街、終身肉食也、字又作術者云、渠公屠人也、賣梱在屠家、共主行宰殺之術、終身食肉也と、又宣穎は渠公蓋齊所封國、如楚葉公之類、適當君門之街爲閽者、故曰與國君同食也と曰ふ、共に穩かならず、渠公を街正と爲し封君と爲すの說は、殊に與國君同食に緣遠し、今姑く屠者と爲すの說に從うて講ず、

齧缺遇許由、曰、子將奚之、曰、將逃堯、曰、奚謂邪、曰、夫堯畜畜然仁、吾恐其爲天下笑、後世其人與人相食與、夫民不難聚也、愛之則親、利之則至、譽之則勸、致其所惡則散、愛利出乎仁義、捐仁義者寡、利仁義者衆、夫仁義之行、唯且無誠、且假夫禽貪者器、是以一人之斷制利天下、譬之猶一覕也、夫堯知賢人之利

曰ふに從ふへし、〔吾未嘗爲牧若勿怪何邪〕「釋文」に爾雅云、牂牝羊也、奧西南隅、未地也、一曰、豕牢也、宎字又作窔、司馬云、東北隅也、一云、東南隅、鶉火地生鶉也、一曰、竈也と、此の二事は、物の生じ來るべき理由なくして生じ來るの怪むべきを謂ひて、梱の美食を得るに喩へ、其の怪むべくして祥と爲すべからざるを言ふなり、王先謙曰く、牂所自來牧也、鶉所自來田也、未田牧而有牂鶉、雖非如國君之取於民、亦必有由而至、汝未嘗一怪問何邪と、〔吾與之邀樂於天〕邀は徼に同じ、求むるなり、庚桑楚篇には交に作る、字異にして義同じ、此以下の數句、庚桑楚篇と略同じ、今一々解釋せず、彼是互に參考すべし、若是者、禍亦不至、福亦不來、禍福無有、惡有人災也の句は、彼に在りて此に無けれども、此意を以て解せざれば、此章の意を得難し、卽ち禍福のあるべき筈なくして、終身美食の福あれば、又人災あるを免れざるなり、故に子綦之を泣く、〔天地之誠〕逍遙遊篇には乘天地之正の語あり、大宗師篇には乘成の語あり、此篇の上文に應天地之情の語あり、文字異なるも義は皆同じ、相參照して讀めば、互に疏通して渙然氷釋する者あらん、

無幾何而使梱之於燕、盜得之於道、全而鬻之則難、不若刖之則易、於是刖而鬻之於齊、適當渠公之街、然身食肉而終、

【大意】梱は苦役しつゝも、其身は一生肉を食ひたる事實を叙し、前節の言を證す、○第一節は九方歅の梱を相して國君と同じき美食を得ると言うて賀し、子綦の反て之を悲むを叙し、第二節は子綦詳に其の悲む所以を説き、道に遊ぶ者には人世の禍福あるべからざるに、梱の美食の相あるは又之に伴ふ禍あるべきを言ひ、第三節は其後の事實を叙して前節を證し、九方歅が知を以てするの觀相は淺近にして、子綦が道を以て揆るの確實なるに如かざるを論ず、是れ此章の主意なり、

【通釋】其後幾何も無く梱をして燕の國へ旅行せしめたるに、途中にて强盜の爲めて捕へられたり、盜は梱の身を傷つけずして奴隸に賣らんとせば、逃走す

せず、道を樂みて天地の間に逍遙遊すれば、かゝる世俗の報償の來るべき筈なきなり、然るに梱が美食して身を終るの福ありとすれば、又之に伴ふの禍あるを免れず、故に之を悲みて泣くなりと、

【通釋】 子綦其の泣きし所以を說きて曰く、汝の淺近なる識見にては、我の悲む譯は識る能はざらん、汝は梱を祥善の相ありと爲せども、梱は何ぞ祥善と爲すに足らんや、梱はたゞ酒肉の美味が鼻口に入るに止まるのみ、而して其酒肉は何によりて來るかは汝は知る能はざらん、酒肉の來るべき筈なくして來るは、是れ怪むべくして賀すべきの事に非ず、譬へば吾れ未だ嘗て牧畜を爲さゞるに、牝羊が忽ち家の一隅に生じ、吾れ未だ嘗て田獵を好まざるに、鶉が忽ち家の一隅に生じたらば、何人も大に之を怪むべし、梱の國君と同じ美食を得るも、亦此の牝羊や鶉が故なく生じ來ると同じきに、汝は之を怪まざるは何ぞや、其の酒肉の來る筈なしと謂ふ所以は、吾の吾子と平生に逍遙無爲にして遊ぶ所は、世俗の間に非ずして天地と遊ぶなり、吾れ吾子と時に順ひ化に乘じて樂みを天に求め、田を耕し井を鑿りて食を地に求め、吾れ吾子と物を忘れて事を爲さず、吾れ吾子と智を忘れて思慮を費やし利害を謀圖することを爲さず、吾れ吾子と巧詐を以て怪異を爲さず、吾れ吾子と天地の誠卽ち道に隨ひ、外物を求むるが爲めに互に性命を亂すことを爲さず、吾れ吾子と全く從容として自然に任せ、自ら便宜の事を擇びて爲すことをなし、かく天地自然に任せて浮遊すれば、禍も無く福も無かるべき筈なるに、今や梱は汝の言ふが如き世俗の報償あらんとするは何ぞや、凡べて怪しき前徵あるは、其人に怪異の行ひあるが爲めなり、今吾と吾子とは一も怪行なきに怪徵あるは、是れ我と吾子との罪に非ずして、天より之を與へらるゝ者に似たり、故なく酒肉の報あれば、又故なく之が禍なきこと能はず、吾は是を以て泣くなりと、

【解義】 〔盡於酒肉入於鼻口矣〕 盡の字を成玄英は九方歅に係けて說き、方歅小巫、識鑒不遠、相梱祥者、不過酒肉味入於鼻口、方歅道術、理盡於斯、詎知酒肉由來從何而至、と曰へるは、妥當ならず、王先謙の直に上文の梱祥に係け、汝何謂梱祥邪、夫所謂祥者特鼻入酒肉之香、口入酒肉之味、二者盡之矣と

を嘲る一語、觀相家の語氣を寫し出して甚だ妙」

【解義】〔子綦〕成玄英は楚の司馬子綦と爲し、陳壽昌は南郭子綦と爲す、後說從ふべし、〔九方歅〕「釋文」に曰く、善相馬人、「淮南子」作九方皋と、善く馬を相し、兼ねて善く人を相するに似たり、〔孰爲祥〕成玄英曰く、孰誰也、祥善也、〔瞿然〕「釋文」に司馬云、喜貌、本亦作矍、字林云、大視貌、李云、驚視貌と、郭慶藩曰く、此瞿然與庚桑楚篇懼然皆驚駭之貌、瞿說文作䀠云、舉目驚䀠然也、〔子綦索然出涕〕釋文に司馬を引て曰く、索然涕下貌と、王先謙曰く、涕下連綿之貌と、成玄英曰く、方歅識見淺近、以食肉爲祥、子綦鑒深元妙、知其非吉、故憫其凶極、悲而出涕と、

子綦曰、歅汝何足以識之、而梱祥耶、盡於酒肉入於鼻口矣、而何足以知其所自來、吾未嘗爲牧、而牂生於奧、未嘗好田、而鶉生於宎、若勿怪何邪、吾所與吾子遊者、遊於天地、吾與之邀樂於天、吾與之邀食於地、吾不與之爲事、不與之爲謀、不與之爲怪、吾與之乘天地之誠、而不以物與之相攖、吾與之一委蛇、而不與之爲事所宜、今也然有世俗之償焉、凡有怪徵者必有怪行、殆乎非我與吾子之罪、幾天與之也、吾是以泣也、

【大意】子綦其の泣く所以を言うて曰く、九方歅は梱が君と同じ美食を得るを以て祥相と爲せども、其美食の何に由りて來るかを知らず、梱は何ぞ祥相と爲すを得んや、吾と吾子とは、常に世俗の務めに從事

むには古人の知識にて讀むを要す、〔知大備者無求無失無棄不以物易己也〕知の字下の十四字を管す、上文の如く天地の求むる無くして大備なるに由りて人も大備の大人と爲るには無求、無失、無棄、不以物易己ときは足るを知るを言ふなり、物を求むれば則ち己を失ひ、己を棄つ、故に不以物易己の一句を以て上の三項を束ぬるなり、

子綦有八子、陳諸前、召九方歅曰、爲我相、吾子孰爲祥、九方歅曰、梱也爲祥、子綦瞿然喜曰、奚若、曰、梱也將與國君同食、以終其身、子綦索然出涕曰、吾子何爲以至於是極也、九方歅曰、夫與國君同食、澤及三族、而况於父母乎、今夫子聞之而泣、是禦福也、子則祥矣、父則不祥、

【大意】九方歅が子綦の子梱を相して、終身國君と同じ美食を爲すの祥相ありと曰ひ、子綦反つて之を悲むことを叙し、以て後節子綦の議論を引起す、主意は後節に在り、

【通釋】子綦に八人の子あり、或る時之を前に列坐せしめ、人相を善くする九方歅を召して曰く、我が爲めに此八子の人相を觀て呉れ、何れの子が尤も祥善の相貌を有するかと、九方歅八子を熟視して曰く、この中にて梱といふ子が祥善の相ありと、子綦驚き喜びて曰く、如何なる祥相なるやと、九方歅曰く、梱は國君と同じ美食を爲して一生を終るの祥相ありと、子綦之を聞き、忽ち索然と涕を出し、泣いて曰く、吾が子は何故に此の如き悲慘の相あるにやと、九方歅怪み咎めて曰く、國君と同じ美食を爲すの地位に在れば、尊榮富貴にして、其の惠澤は親戚一同に及ばん況や親しく其父母たる人に於ては、其幸福殊に大なるべし、然るに夫子は之を聞きて泣かるゝは、是れ自ら幸福を禦ぎて取らざるなり、子の梱は實に祥善なれども、父の夫子は甚だ不祥の相ありと、〔此の子綦

すれども、聖人は無名無功にて、之を受くる者は何者か恩澤を施せるかを知らず、故に聖人は生きて世に在るも爵位あるヿ無く、死したる後にも謚せらることなく萬物を己の所有と爲さゞれは、實財聚まらず、帝王の名も立たず、此の無名無功なるこそ、卽ち眞の大なる者なるが故に、又之を大人と謂ふ也、狗は善く吠ゆるを以て良き狗と爲さゝるが如く、人も徒に言辯を善くするを以て賢者と爲さず、而るを況や善を以て大人と爲す能はざるは勿論也、さりとて大人と爲らんとするに意ありて勉むるも、之を大人と爲すには足らず、而るに況や之を德を保全したる人と爲す能はざるは勿論也、然らば則ち大人と爲るには如何にせば可ならんか、曰く、彼の備はれるの至大なる者は天地に若くはなし、此の天地は何を求めて斯る大備に至れるや、天地は自然に大にして求めて大と爲りたるに非ず、是に由りて之を觀れば、大備至大と爲るには、何物とも外に求むるヿ無く、又己に有する者は之を失ふヿ無く、棄つるヿ無く、外物を以て己の自然に有する性命に易へざるに在るを知る也、外物を求めんとすれば必ず己の性命を毀損する者なれば、天地の求むるヿ無くして大備なるに則りて、毫も外物を求めざれは、性命安固にして、自ら萬物皆備り、己に反視すれば至大にして窮盡なく、遂古の前より存して、萬世の後に至るまで摩滅するヿなし、是れ卽ち道の一なる所に同ずる者にして、大人の實情なり、

【解義】〔彼之謂不道之道云々〕郭象曰く、彼謂二子、此謂仲尼と、不道之道は卽ち不言之辯にして、共に一事なり、分ちて二と爲せば、前の孔子の席上演說も、後文の大人の說明も、皆了解する能はざるに至るべし、此節には前に屢出でたる語多し、故に一々之を解釋せず、〔名若儒墨而凶矣〕而は則と通ず、既に屢々前篇に見ゆ、無名は天地の初め、卽ち道之所一なり、故に聖人は名無し、儒墨各名を立てゝ相爭ふは、徒に道を亂すに足るのみ、故に斥けて凶と爲す、〔道之所一者德不能同也〕道降りて德と爲る、故に道の一なる所の根源は德の上に在り、德之に同ずる能はざるなり、〔海不辭東流〕東流は川を謂ふ、支那は東方に海あり、江河百川皆東流して海に入り、嶺南地方は戰國時代には未だ開けず、故に古人は海は必ず東に在り、川は必ず東流する者と信ずるなり、古書を讀

【大意】　此節は、前の孔子の言を承けて大人の道を說くなり、孫叔敖宜僚及び孔子の言行は道の本源の一なる所に同ずる者にて、天地を幷包し、澤天下に普及して、民之を知らず、實に至大にして、儒墨の區區論爭するが如きの比に非ず、故に之を大人と謂ふ、大人は言論を善くするを以て此地位に至るを得る者に非ず、唯天より受けたる性命を保全して、外物を求むること無く、物の爲に性命を毀損せざるに在るのみ、此くの如くなれば、萬物已に備はりて窮期無く、太古の前より萬世の後まで盡くること無し、是れ卽ち大人の實情なり、○前節と此節とを合して一章とす、前節は仲尼を假りて不言之言を叙し、後節は之を承けて、儒墨の爭辯は小にして取るに足らず、不言之言の言休乎知之所不知は至大にして、卽ち聖人卽ち大人なるを言ひ、更に進みて己の性命を保全し、外物を求めざれば、自ら大人と爲るべきを言ひ、通章言辯の無益なるを言うて、儒墨惠施を兼ね駁するなり、德總乎道之所一、而休乎知之所不知至矣の一句及び人不以善言爲賢而況爲大乎の句を以て骨子とす、

【通釋】　以下は莊子が前の孔子の語を承けて大人を論ずるなり、彼の二子の弄丸や甘寢秉羽にて難を解き戰を息めしは、卽ち無爲にして、之を形而下の道に非ざるの道と謂ひ、孔子の言へる所は、之を口舌にて言はざるの辯と謂ひ、共に道の本源に合せり、故に人の德能く全くして、道の一にして未だ分れざる本源に歸要し、言は人知の知る能はざる所に止まりて其外を言はざる二子及び孔子の如きは、至れり、盡くせり、復た加ふべからざる者なり、道の一なる所の本源は、たゞの德にては之に合同すること能はず、知の知る能はざる所は、たゞの辯にては之を言語に載する能はず、必ず不道之道不言之辯にして始めて之に同じ、之を擧ぐるを得るなり、彼の儒墨の如く、學派を分ち名を立てゝ敎を設くるは、徒らに是非を分ち、爭論を滋し、道德を亂すのみにて、凶なり、道の一なる所に合同する者は至大至廣にして、此の區々たる儒墨の比に非ず、之を喩ふれば猶海の如し、彼の海は水の東流して注ぎ來る者は、大小を論ぜす清濁を問はず、皆之を受けて辭せず、大の至りなればなり、聖人卽ち道の一なる所に同ずる者は、其德量亦至大至廣にして、天地を幷せ包ね、其恩澤は天下の萬物に普及

所以に非ず、「釋文」に又曰く、羽雲舞者之所執と、「淮南子」の主術篇に昔孫叔敖恬臥、而郢人無所害（用の誤）其鋒とあるは、此と同意、投兵は用ふる所無きを謂ふなり、〔丘願有喙三尺〕此句は郭象以下の注家諸説紛々として一ならず、喙を人の口と爲し、喙三尺を以て能言の具と信ずるを以て、孔子前に叔敖宜僚二子の不言の言の大功を說き、而して反て自ら喙三尺の能言の具あらんことを願ふは矛盾と爲る、故に種々に曲解すれども皆妥當を得ざるなり、獨り、陸長庚の說正鵠を得たり、曰く、凡鳥、喙長者、多不能言、如鸖雀之類と、されば喙は鳥嘴にて、人の口に非ず、長喙の鳥の鳴く能はざるが如くに、孔子も三尺の長喙を得て無言の人たらんことを願はるゝなり、「發蒙」は曰く三尺之長而後言、人何得有三尺之喙、是終不言也と然れども亦窮說たるを免れず、

彼之謂不道之道、此之謂不言之辯、故德總乎道之所一、而言休乎知之所不知、至矣、道之所一者、德不能同也、知之所不能知者、辯不能舉也、名若儒墨而凶矣、故海不辭東流、大之至也、聖人幷包天地、澤及萬世、而不知其誰氏、是故生無爵、死無謚、實不聚、名不立、此之謂大人、狗不以善吠爲良、人不以善言爲賢、而況爲大乎、夫爲大不足以爲大、而況爲德乎、夫大備矣、莫若天地、然奚求焉而大備矣、知大備者無求無失無棄、不以物易己也、反己而不窮、循古而不摩、大人之誠、

〔曰丘也〕東條弘曰く、曰上疑脫仲尼二字と、孔子は聖と雖も人臣なり、而して楚君の讌に臨みて將に言はんとす、禮無かるべからず、若し脫字ありとすれば、仲尼起席再拜等の數字を脫し、仲尼の二字に止まらざるべし、〔聞不言之言矣 未之嘗言〕不言之言は無爲之爲といふに同じ、未之嘗言は未だ之を人に語りしこと無きを謂ふ、韓文の未嘗敢以聞於人に同じ、此章の「郭注」は誤解多し、此の根本の句を誤解せるを以てなり、曰く、聖人無言、其所言者百姓之言耳、故曰不言之言、苟以言爲不言、雖言出於口、故爲未之嘗言と、たゞ文義に通せざるのみならず、殆ど莊子の學の大體をも知らざる者に似たり、〔市南宜僚弄丸而兩家之難解〕宜僚は善く丸を弄し、八箇は常に空中に在り、一箇は手に在りと云ふ、「釋文」に司馬を引て曰く、宜僚楚之勇士也、善弄丸、楚白公勝將作亂殺令尹子西子期、石乞曰、市南有熊宜僚者、若得之、可以當五百人、乃往告之、不許也、承之以劍、不動、弄丸如故、曰、吾亦不泄子、白公遂殺子西子期、歎息兩家而已、宜僚不預其患と あれば、宜僚は難に免れたるも、兩家の難は解けたりと謂ふべからず、然れども固と是れ寓言なれば、事實の相違の如きは言ふに足らず、〔孫叔敖甘寢秉羽而郢人投兵〕「釋文」に司馬を引て曰く、叔敖安寢恬臥以養德於廟堂之上、折衝於千里之外、敵國不敢犯、郢人投兵無所攻伐也、郢楚都也と、章炳麟之を非として曰く、叔敖封寢丘、事見呂覽異寶篇、呂覽云、寢之丘、地不利而名甚惡、又云、孫叔敖知以人之所惡、爲己之所喜、是以云甘寢爾、甘猶喜也、司馬以爲安寢恬臥、恬臥時豈可秉羽耶、曹參醇酒、汲黯臥治、亦非前世密勿之風也、楚莊王之箴民曰、民生在勤、是時蔿敖爲宰、安得恬臥以趣怠惰と、寢を地名と爲すは、一說として參考に供すべし、但甘寢と秉羽とは固より二事なり、平時多く甘寢し、覺むれば則ち羽を秉りて舞ふ、事を事とせざるを謂ふのみ、甘寢中に羽を秉りて舞ふが如きは、人の能くする所に非ず、司馬も亦之を言はず、炳麟の駁は理由無しと謂ふべし、又本文に楚王とのみありて莊王と言はず、叔敖王の時なるも、仲尼宜僚は後世の人なれば、未だ俄に莊王と斷定するを得ず、假令ひ莊王と爲すも、其の箴民の一語に據りて叔敖を恬臥するを得ずと曰ふは、莊子の寓言を解する

白公勝の叛せし時、令尹子西司馬子期を殺さんとし、又市南宜僚に迫りて叛に與せしめんとせしに、宜僚は丸を弄して上下しつゝ使者に接して、之に應ぜさりしかば、子西子期の二家も其難を免かるゝを得たり、孫叔敖の令尹と爲るや、何の施爲することも無く、安寢して快く睡り、覺むれば則ち羽を執り舞樂を爲して樂むのみ、而して敵國敢て來り侵かさず、戰爭無きが爲め、楚人は皆兵器を投棄して安居するを得たり、此の二子の少しも辯論を費やさずして能く禍難を解き戰爭を息めたるは、是れ即ち不言なり、不言の言の功の大なるは、他の千言萬語の能く及ぶ所に非ず、丘も常に二子の如くならんことを欲するも、未だ玆に至る能はず、願はくは三尺の長き喙を得て言ふ能はざる者と爲り、以て不言の言の妙に至ることを得んと、席上に在る二人の事に就て不言を說きたるなり、

【解義】〔楚王觴之〕「釋文」に李を引て曰く、觴酒器之總名也と、飲酒の器即ち「サカヅキ」には形容大小等にて種々の名あれども、之を總稱して觴と云ふ、而して此にては觴の字を活用して酒醮の義と爲すなり、〔孫叔敖執爵而立〕孫叔敖姓は蔿、名は艾獵、蔿賈の子にして、楚の莊王の時令尹と爲る、孔子未生の前に在り、爵も亦酒器にして、一升を受くる大杯なり、古人は飲まんとする時は先づ祭る、孫叔敖爵を執りて立ち、之を市南宜僚に授け、宜僚之を受け、酒を灑ぎて祭れるなり、〔市南宜僚〕市南に居りしが故に呼んで市南宜僚と曰ふ、宜僚は其名なり、「釋文」に哀公十六年、仲尼卒、後白公爲亂、宜僚未嘗仕楚、又宣十二年傳、楚有熊相宜僚則與叔敖同時、去孔子甚遠、蓋寄言也と、此に據れば、楚に二人の宜僚ありて、一は孫叔敖と時を同くし、一は孔子より後の白公勝の時の人とす、但し善く丸を弄せしは後の宜僚なれば、楚に仕へざるの此人と定むべし、固より所謂重言にして、有名なる三人を集めたるに過ぎず、時代も各異なれば、其の楚に仕へしと否とは問ふに足らず、〔曰古之人乎於此言已〕曰は楚王曰なり、諸家多く宜僚の言と爲すは誤り、古之人は孔子を稱するなり、林雲銘の古之人、宴會之間、常有言以相規、所以乞言於夫子也と曰ふは誤り、陸樹芝の贊仲尼非今人之見、而爲之乞言也と曰ふは是を得たり、

下文に若我而不有之の字あるに視れば、先の字疑ふらくは有の誤ならん、但し東條弘は下文の有の字を先の誤りならんと曰ふ、兎に角何れかに一定すべき字なり、〔彼故彌之〕胡文英曰く謂田禾以見子綦而炫彌于人と、子綦に遭うて教を受けたりと言うて誇りて人に示すなり、〔吾又悲夫悲人之悲者〕此句は上文に比すれば更に一境を進む、第二の悲は子綦が人を悲むなり、第三の悲は人を悲みし子綦を悲むなり、第一の悲は今の子綦が前の子纂を悲むなり、若し然らずして第三の悲を人に屬し、吾が人の外馳して自ら喪ふの悲むべきを悲める我を悲むと爲さば、上文の吾又悲夫悲人者と同義と爲りて、進境を見ず、非なり、

仲尼之楚、楚王觴之、孫叔敖執爵而立、市南宜僚受酒而祭、曰、古之人乎、於是言已、曰、丘也聞不言之言矣、未之嘗言、於是乎言之、市南宜僚弄丸、而兩家之難解、孫叔敖甘寢秉羽、而郢人投兵、丘願有喙三尺、

【大意】孔子楚に遊び、楚王酒醴を設けて之を饗し、言を乞はれしに由り、不言の言の妙を言ひ、席上に待せし孫叔敖が常に安眠し舞樂するのみにして戰を息め、市南宜僚が丸を弄して難を解きし事實に就きて之を説きしことを叙す、後節に大人の道を説かんが爲めに、先づ孔子を假り、二子の不言の言無爲の爲を叙して之を引き起すなり、

【通釋】孔子が楚に適かれしかば、楚王迎へて酒醴を設けられたり、其時楚の令尹孫叔敖は大杯を持ちて立ち、之を市南宜僚に授け、宜僚は之を受け、酒を灑ぎて祭れり、已に祭り畢りて、楚王孔子に謂うて曰く、先生の徳は今人に非ず、古の聖賢の類ならんかと平生思慕せし所なり、願はくは此の席上に於て一言の教を垂れよと、是に於て孔子起て曰く、丘は嘗て不言の言なる者を聞けり、其意玄妙にして尋常人の能く解する所に非ざるを以て、未た嘗て之を人に言はざりしも、今日は王の爲めに始めて之を言はんとす、

德を賣りて人の爲めにせんとするの心あらざらしめば、彼れ何に由りて之を受賣りすることを得ん、皆我の心を物に忘るゝ能はざるが爲めに此に至れるのみ、嗚呼我れ初めは世人の心を外物の名利に馳せて、自ら性命を喪失する者を悲みしが、田和の來訪せし後は、深く自ら悔ひて、人の自ら喪失するを悲みし我の、猶ほ己を忘れて人の爲めにするの念あるを悲みたり、既にして又人の性命を喪失するを悲みし我を悲むも、亦猶ほ己を忘れ物に徇ふを免れざる者なることを悲みたり、此くの此くして後は、日に漸く外物と疎遠になり、今は全く世と相忘るゝに至れり、故に形は枯木の如く心は死灰の如くに見ゆるなりと、初め山中に穴居したれば、身隱れたるなり、而して心未だ物を忘るゝこと能はざりしが故に、田和に知られて來り訪はれたりしも、後には心全く世と相忘れたれば、身は南伯に住して、猶枯木死灰の如きを得、莊子の學の隱居遁世して仙人となるを必せざるを知るべし、

【解義】〔南伯子綦〕此章の起手數句は齊物論篇首章の起手と略〻相同じ、而して齊物論には南伯を南郭に作る、伯と郭とは古聲相近し、故に字も亦通用するなり、又寓言篇には東郭子綦に作る、〔顏成子〕子綦の門人なり、齊物論及び寓言篇には顏成子游に作る、〔夫子物之尤也〕林雲銘曰く、物之尤言於人物之中稱爲最と、齊物論には何居乎に作る、〔形固可使若槁骸〕槁骸を齊物論篇には槁木に作り、庚桑楚篇には槁木之枝に作り、知北遊篇は此と同じく槁骸に作る、王先謙曰く、猶言槁枝也と、〔吾嘗居山穴之中〕即ち穴居なり、此一句は此章に於て緊要の句なるに、古來の注家皆匆々讀過して此に注意せざるは怪むべし、深山に穴居すれば、身を藏すること深きなり、而して其名猶彰はるゝは、吾が心に物を忘れざるに由る、苟も自ら物を忘るれば、身を藏せざるも猶能く世俗と疎遠なるを得、是れ此章の主腦なり、庚桑楚篇の首章と參觀すべし、彼章の兒子は即ち此の槁骸死灰なり、〔田禾一覩我〕田禾は即ち太公和なり、先祖の完、桓公の時より齊に仕へ、數世にして和に至り、遂に國を纂うて齊君と爲る、田齊の始君なり、〔齊國之衆三賀之〕三は多を謂ふ、三度慶賀するには非ず、三賀之は大に之を賀すと言ふが如し、〔我必先之〕

之衆三賀之、我必先之、彼故知之、我必賣之、彼故鬻之、若我而不有之、彼惡得而知之、若我而不賣之、彼惡得而鬻之、嗟乎我悲人之自喪者、吾又悲夫悲人者、吾又悲夫悲人之悲者、其後而日遠矣、

【大意】此章は、形を枯木の如く心を灰の如くするには、心を外物に留めず、人の爲めにするの念を絶ちて、全く世と相忘るゝに在るを謂ふ、南伯子綦初め山中に穴居したる時は、身隱れたれども、齊王の田禾が來り訪はれたるは、我の物を忘れず、人の爲めにするの念ありしに由る、因て深く之を悔い、猶層層進みて漸く外物を忘れ、世と遠ざかり、人の爲めにするの念を絶ちて、自ら性命を保全することを得て、枯木死灰の如くなるを得たるなり、心に物を忘れさへすれば、身を山中に隱すを要せざることを謂ふ、

【通釋】南伯子綦が几に倚りかゝりて坐し、天を仰いで息を吹き出し居たり、弟子の顏成子が其處に入り來り、子綦に見えて曰く、先生は人物中に於て第一等の方と信ずるが、今先生を見るに、形は枯木の如く心は死灰の如く、全く人間離れしたる樣なり、如何にせばかゝる枯木死灰の如くなるを得べきやと問ひたるに、子綦對へて曰く、吾嘗て山の巖穴の中に住居して、靜に自ら養ひたりしが、是時に於て、吾が有德の名あるを聞きて、齊王の田和が山中に訪ひ來りて我を見、其事を廣く國中に知らしめたれば、齊國の衆庶は皆大に王の賢者に見ゆるを得たるを慶賀せり、我之を聞きて深く自ら耻ぢたり、何となれば、田和の如き名利に馳せて君の國を簒へる者の我を來訪せるは、我に必ず先づ名利の念ありしが故に、彼之を知りて山穴に來りしならん、我に必ず吾德を賣りて人の爲めにせんとするの心ありしが故に、彼れ之を受賣りして、齊の衆庶大に之を慶賀するに至りしならん、若しも我にして名利の念あらざらしめば、彼何に由りて我の在ることを知るを得ん、若しも我にして吾

故謂之狙山也と、之は語助なり、〔恂然棄而走〕成玄英曰く、恂怖懼也と、東條弘曰く、恂與眴通、開目數搖視之容、德充符眴若皆棄之而走、是也と、眴は驚きて視るなれば、亦懼るゝと同義なり、〔深蓁〕成玄英曰く、蓁林叢也と、草木の盛んに茂れる處なり、〔委蛇攫搔〕委蛇は從容なり、「釋文」に三蒼を引いて曰く、攫搏也と、又曰く、搔又作搔と、〔敏給搏捷矢〕郭象は敏給の二字を王射之に連ねて句と爲し、敏疾也、給續括也と注す、是れ敏給を王に屬して言ひ、矢つぎ速の義に解したるなり、兪樾之を非として曰く、敏給二字同義、後漢書酈炎傳、言論給捷、李賢注曰、給敏也、是其證也、國語荀子亦並以敏給對言、然則郭以給爲續括、非古義矣、敏給當以狙言、謂狙性敏給能搏捷矢也と、敏給を狙のすばやきを言ふと爲す、從ふべし、又曰く、捷讀爲接、爾雅釋詁接捷也、是捷與接聲近義通、搏捷矢、卽搏接矢也、郭注曰捷速也、夫矢自無不速、又何必言捷乎と、捷を讀で接と爲すなり、〔命相者趨射之〕「釋文」に司馬を引て曰く、相者佐王獵者也と、又曰く、趨急也と、〔之狙也〕「釋文」に之猶是也、本或作是とあり、〔以敖予〕敖は傲に同じく、予は我なり、〔以至此殛也〕成玄英曰く、殛死也と、林雲銘曰く、殛應作極と、林說從ふべし、〔無以汝色驕人哉〕成玄英の勿淫聲色驕豪於世と解するは非なり、林雲銘曰く、色字所包甚廣、富貴則有驕泰之色、賢勞則有矜誇之色、施予則有恩德之色、尊上則有傲慢之色、是皆所以取禍者と、從ふべし、すべて心中得意の狀の顏色に表はれ出るをいふ、色を以て人に驕るすら不可なれば、言語行爲を以て人に驕るの不可なるは言はずして知るべし、〔以助其色〕「釋文」に本亦作鋤とあり、草を鋤き取るが如くに其驕色を除き去るをいふ、

南伯子綦隱几而坐、仰天而噓、顏成子入見曰、夫子物之尤也、形固可使若槁骸、心固可使若死灰乎、曰、吾嘗居山穴之中矣、當是時也、田禾一覩我、而齊國

射之、敏給搏捷矢、王命相者趨
射之、狙執死、王顧謂其友顏不
疑曰、之狙也、伐其巧、恃其便、以
敖予、以至此殛也、戒之哉、嗟乎
無以汝色驕人哉、顏不疑歸而
師董梧、以助其色、去樂辭顯、三
年而國人稱之、

【大意】 吳王狙山に獵せし時、一疋の猴の其敏捷なるを恃みて王に驕り、王の矢は能く之を搏みしも、從者に射られて死したり、王之に因つて顏不疑を戒め、其驕色を去らしむ、不疑歸り、董梧を師として其驕色を鋤去し、樂を撤し顯位を辭して、賢德の稱を得たることを叙す、

【通釋】 吳王嘗て出遊して、舟を大江に浮べ、其より江畔の狙山に登りて獵せられしに、衆多の猴は之を見て、懼れて皆其遊び居りし處を棄てゝ走り、深き林叢の中に逃げ入りたるに、一疋のみ留りて、人を懼れざるが如くに、樹林を攫みて上下し、或は身體を搔きなどし、吾は矢を搏むこと巧みなれば汝を懼れずとの意を王に示す者の如し、王因て之を射られしに、猴頗る敏捷にして、接き〳〵に射る矢を皆搏み取りて中らしめず、王乃ち從行の獵を助くる者に命じて、手早く之を射らしめられしかば、猴は遂に執へられて死したり、吳王側を顧み、其友人の顏不疑に謂うて曰く、是の猴は其巧みなるを誇り、其敏捷なるを恃みにして我に傲りたるが爲めに、斯る慘禍を取るに至れるなり、汝も此猴に鑑みて善く之を戒めよや、得意の狀を顏色に出だして人に驕ること無き樣にせよやと、顏不疑は山より歸りて後、董梧と云ふ賢人を師として學び、其驕り亢ぶれる顏色を除き去り、音樂を止め、顯榮の位を辭し、素朴にして深く自ら養へり、此くの如きこと三年にして、國中の人皆顏不疑の德を稱賛するに至れり、猴の其敏捷を誇りしが爲めに慘禍を取りしことを假りて、人の自ら賢とするを戒めたるなり、一篇の猿の說と倣して看るべし、

【解義】〔狙之山〕成玄英曰く、狙獮猴也、山多獮猴、

とを忘れて能く人に謙下すれば、人益之に服して、未だ人心を得ざる者あらざるなり、隰朋の如きは賢にして能く人に下るの德あり、其の國家の政を治むるに於ても、明察を事とせず、大體を綜攬するのみにして、聞かざることもあり、見ざる事もあり、斯くの如くにして始めて上に宜しく下に宜しからん、必ず臣に代るべき者を擇べとあれば、則ち隰朋は適當の人物ならん、○前節と此節とを合して一章と爲す、前節は鮑叔牙の廉潔にして反つて國政を治めしむるに適せざるを言ひ、後節は隰朋の簡粗にして反つて國政を治めしむるに適するを言ふ、鮑叔牙を以て儒敎に比し、隰朋を以て道家の敎に比し、儒敎の道家の敎に若かざるを謂ふなり、鮑叔牙は管仲の嘗て與に賈して利益分配に私せしも貪と爲さず、事を謀りて窮困せしも愚となさず、三たび戰うて三たび走りしも怯と爲さゞりしを視れは、鮑叔の人物は己に若かざる者は之を人に比せず、一たび人の過を聞けば終身忘れざるが如き狹量に非ず、此章はたゞ鮑叔を假りたるまでにて、事實に非ざるを知るべし、屈原の漁父辭は此章と同義にて、屈原の擧世混濁而我獨淸、衆人皆醉、而我獨醒は、鮑叔の潔廉にして罪を君に得るに同じく、漁父の聖人者不凝滯於物、而能與世推移は、隰朋の簡粗にして齊國の政に任ずるに適するに同じ、

【解義】〔上忘而下畔〕列子の力命篇には、畔の上に不の字あり、從つて輔ふべし、宣穎之を解して曰く、上忘とは、自ら其能に矜ず、故に己の上に居る者、之と相忘る、下不畔とは、汎く衆を愛す、故に己の下に在る者、之に畔くに忍びざるなりと、〔其於國有不聞也其於家有不見也〕成玄英曰く、叔牙治國、則不問物之小瑕、治家則不見人之過と、叔牙は隰朋の誤なるべし、且つ不聞不見を物瑕人過に係けて說くは大謬なり、林希逸は言其不察察也と曰ひ、陸樹芝更に之を詳說して曰く、聽非不聰、視非不明、而不事察察、宰相之度也と、

吳王浮於江、登乎狙之山、衆狙見之、恂然棄而走、逃於深蓁、有一狙焉、委蛇攫搔、見巧乎王、王

づ此一語を添ゆるなり、死は人の皆免るべからざる者なるを以て、死を諱ふて不諱と爲す、戰國策に公叔病卽不可諱、將奈社稷何とあり、此と同義なり、〔至於大病〕「釋文」に大病謂死也、〔其於不己若者不比之〕 成玄英曰く、庸猥之人不如己者、不比數之と、「列子」には不比之人に作る、人を以て比數せざるなり、王先謙曰く、下文又字蓋人字之誤と、從ふべし、〔上且鉤乎君〕「釋文」に鉤反也、亦作拘と、亦逆らふ意なり、章炳麟曰く、鉤亦逆也、說文丨下云、鉤逆者謂之丨、凡言鉤距者、亦有逆義、

公曰、然則孰可、對曰、勿已則隰朋可、其爲人也、上忘而下畔、愧不若黃帝、而哀不己若者、以德分人謂之聖、以財分人謂之賢、以賢臨人、未有得人者也、以賢下人、未有不得人者也、其於國有不聞也、其於家有不見也、勿已則隰朋可、

【大意】 桓公更に問うて、管仲隰朋を薦め、其人と爲り、上に忘れられて下に畔かれず、自ら責むること厚くして人を哀み、賢德ありて人に下る、故に能く人心を得、而して國政に於ては、大體を總べて、能く簡を以て治む、故に隰朋は臣に代りて宰相と爲すべし、

【通釋】 桓公又問うて曰く、鮑叔牙が不可なりとせば、他に何人に委任して可なるべきや、管仲曰く、必ず臣に代るべき者を擇べとあれば、則ち隰朋は適當の人物なり、隰朋の人と爲りは、上たる君には忘れられ下たる臣民には離畔せられず、常に其德の黃帝に及ばざることを愧ぢて、益々德を修め、人の己に及ばざる者を哀みて之を棄つることなし、自己の德を以て人に分ち、人を感化して皆性命を保全し道を得せしむる人を聖人と爲し、財物を人に分ち與へ、人をして安く生活を遂げしむる人を賢人と爲す、然れども自ら賢なりとして、傲然と民に臨みては、人益々服せず、未だ人心を得る者あらざるなり、自ら其賢なるこ

管仲有病、桓公問之曰、仲父之病病矣、可不謂云、至於大病、則寡人惡乎屬國而可、管仲曰、公誰欲與、公曰、鮑叔牙、曰、不可、其爲人潔廉善士也、其於不己若者不比之、又一聞人之過、終身不忘、使之治國、上且鉤乎君、下且逆乎民、其得罪於君也、將弗久矣、

【大意】管仲病氣の時、桓公管仲の死後代りて宰相と爲すべき人を問ひ、管仲之に對へて、鮑叔牙は潔廉の善士なれども、惡を嫉むこと甚しき故、上下に逆ひ、久しからずして罪を得んとすれば、鮑叔牙は宰相と爲して國政を任ずるには不適當なりと曰ふて之を排するなり、

【通釋】管仲が病氣の時、其君齊の桓公之を見舞ひ、因て問うて曰く、仲父の病甚だ重し、死に至らんも知るべからず、仲父若し死せば、寡人は誰に國政を委任して宜しからんと、管仲曰く、公の意は誰にか政權を與へんと欲せらるゝや、公曰く、我は鮑叔牙に與へんと欲すと、管仲對へて曰く、鮑叔牙は宰相として國政を任ずるには不適當なり、叔牙の人と爲りは清潔廉正の善士なり、然れども惡を嫉むこと太だ嚴にして、他人の自己の如くに潔廉ならざる者は、之を斥けて人並みとなさず、一たび人の過失を聞けば終身忘れず、かゝる性質の人なるが故に、之に政を任じて國を治めしむれば、上に於ては忠直を以て君の意に反き、下に於ては清明を以て百姓と逆らはんとす、斯くては叔牙は久しからずして罪を君に得んとす、君國の爲めにも宜しからず、叔牙の爲めにも宜しからざれば、鮑叔牙は宰相と爲さゞるを可とすと排斥したり、

【解義】〔仲父之病病矣〕管仲字は夷吾、桓公之を尊び、號して仲父と曰ふ、病病とは病極めて重きを謂ふ、〔可不謂云〕列子の力命篇には謂を諱に作る、從つて改むべし、管仲死後の事を問はんと欲す、故に先

り上げ、勢よく打降して、ビューと聲を出し、鼻端に觸れしに、郢人は其聲を聽きながら之を斲らせたり、後に之を檢すれば、附きたる白土は少しも殘らず、斲り盡くして、鼻には傷つかず、而して郢人も亦立ちたるまゝ泰然として動かず、容貌を亂さゞりき、宋の元君が此話を聞かれて、匠石を召し寄せ、汝は郢人の爲めに巧みに鼻端の白土を斲りたりと聞く、寡人の爲めに今一度之を斲りて見せよと曰はれたるに、匠石對へて曰く、臣は實に嘗て能く郢人の爲めに鼻端の白土を斲りたり、然れども此事は臣一人にて能く成し得るに非ず、對手たる郢人が泰然として動かざる精神ありしに賴るなり、而るに其の郢人は久しき前に既に死したれば、今は對手として臣の技を施すべき人なしとて之を辭したり、我の惠子に於けるも、匠石の郢人に於けると同じ、惠子の如き才敏の人の有りてこそ、之を對手として我の議論を發するを得れども、此くの如く既に墓中の人と爲り了りては、我が議論の對手とする者なし、今は吾も與に言うて妙論を發する能はずと、惠子は終身堅白の辨に拘はりて大道を得る能はざりしも、其質甚だ美なりしかば、莊子は常に之を說きて道を知らしめんとし、議論の對手として豪上の微言其他幾多の妙論を發したれば、其死に及びて深く之を惜みたるなり、○前章に惠子との議論あるに由り、後の事なれども、編者が此章を連ね記したるなり、

【解義】〔郢人堊慢其鼻端〕郢は楚の都なり、漢書の揚雄傳には獿人に作る、服虔云ふ、獿人古之善塗堊者、施廣領大袖以仰塗、而領袖不汚、有小飛泥誤著其鼻、因令匠石揮斤而斲之、と成玄英云ふ、堊白善土也と、卽ち壁に塗る白土なり、慢は「釋文」に本亦作漫、李云、猶塗也と、章炳麟曰く、慢借爲槾、說文槾杇也、所以塗也、故李訓慢爲塗と、慢を槾の借字と爲し、槾は杇なれば、活用して塗るの義と爲る、壁土の著きたることなり、〔使匠石斲之〕匠は大工、石は其名なり、屢前に出づ、〔聽而斲之〕王先謙曰く、祇是放手爲之之義、當局本極審諦、旁人見若不甚經心、故云聽耳、而郭象以爲瞑目恣手、失之遠矣と、郢人が運斤の聲を聽きつゝ匠石に斲らせたるをいふ、〔臣之質死久矣〕成玄英曰く、質對也と、宣穎曰く、質施技之地、謂郢人也と、

難し、本文に就て解釋し、蹢を前と同義とし、下文に連ねて一事と爲すも、通ずべきの理あり、林雲銘の說卽ち是なり、曰く、寄寄寓也、寄寓而蹢閽者、其孤弱可知、既無鬪具、乃敢立身岸上、以與舟人鬪、吾知其不能脫身於岸上、徒以取怨於舟人也と、又曰く、此喩惠子道既不足於己、又欲於是非荒昧之際、與人爭勝、不足以有濟、徒使與物不適而已と、意義大に明瞭なり、必ずしも强ひて分つて二事と爲さず、分てば反て意義明かならざるを覺ゆ、

莊子送葬、過惠子之墓、顧謂從者曰、郢人堊漫其鼻端、若蠅翼、使匠石斲之、匠石運斤成風、聽而斲之、盡堊而鼻不傷、郢人立不失容、宋元君聞之、召匠石曰、嘗試爲寡人爲之、匠石曰、臣則嘗能斲之、雖然臣之質死久矣、自夫子之死也、吾無以爲質矣、吾無與言之矣、

【大意】　此一章は惠子の才を稱して其死を惜みたるなり、匠石が斤を揮つて鼻端の堊を斲りしことを叙し、匠石を莊子に比し、郢人を惠子に比し、匠石が堊を盡くして鼻を傷つけざるの妙技は、郢人に泰然不動の精神あるに由りて爲し得たるなり、故に宋の元君の命を辭して應ぜざるは、其質とすべき郢人の既に死せるが爲めなりと言ひ、因て主意に入り、惠子既に死したり、我も今後復對手として吾の妙論を發すべき者なしとて、之を惜むなり、惠子は堅白の辨を以て鳴り、莊子虛無の學と異なれども、當時諸子中の傑物にて、莊子は常に之を對手として議論を鬪はせたり、故に深く其死を惜む、

【通釋】　莊子人の葬りを送りて郊外に出で、途にて偶、惠子の墓のある處を過ぎたり、其時莊子顧みて從者に謂うて曰く、嘗て一郢人あり、其鼻端に白土が附き、蠅の翼ほどの薄さにて、極めて僅少なりしが、匠石に之を斲り取ることを命ぜしかば、匠石は斧を揮

を闢きしなり、

【解義】〔齊人蹢子於宋者其命閽也不以完〕羅勉道曰く、蹢者蹢躅、行不進貌、禮記云、蹢躅焉、踟蹰焉と、蹢は行歩不自由の義、閽は門を守る人なり、古は刖者を以て守門の役に當つ、故に齊人其子の歸り來らんことを恐れ、以て閽と爲さんとするや、之を刖りて行歩不自由ならしめ、其身體を毀傷するを顧みざるなり、〔鈃鍾〕字林に云ふ、鈃似小鍾而長頸と、二物共に樂器の名なり、〔唐子〕「釋文」に謂失亡子也と、迷子のことなり、〔有遺類矣夫〕舊本皆有遺類矣にて句し、夫の字は下句の首に屬しあり、今兪樾の說に從つて之を改む、曰く、有遺類矣、當連下夫字爲句、有遺類矣夫、與襄二十四年左傳有令德也夫有令名也夫、句法相似と、是なり、舊注には此一句を唐子を求むることのみに係け、兪樾も求亡子而不出域、則其亡子不可得、必無遺類矣、故曰有遺類矣夫、反言以明之也と曰へども、恐らくは是に非ず、此一句は前に擧げたる三事に係け、齊人の爲す所皆輕重遠近の比類を失へるを斷ずと解すべし、又蹢子の喩の下に、郭象は此齊人之不慈也、然亦自以爲是、故爲之と曰ひ、「釋文」に司馬を引て、令形不全、自以爲是と曰ひ、鈃鍾の喩の下に、郭象は以愛鍾器爲是と曰ひ、「釋文」又此言賤子貴鈃自以爲是也と曰ひ、唐子の喩の下に、郭象は遺其氣類而未始自非、人之自是、有斯謬矣と曰ひ、齊人の三事を以て惠子の自ら是とするに喩へたりと爲す、是れ亦不可なり、自ら是とするの非なることは、前の魯遽の喩にて十分に言ひ盡くしあり、齊人の三喩は其の輕重遠近の比類を失へるを喩へたるのみ、有遺類矣夫の一句を唐子のみに係け、三事の斷語と爲さゞるより、遂に此の誤りに陷りたるなり、〔楚人寄而蹢閽者〕兪樾曰く、蹢當讀謫、揚雄方言、謫怒也、張揖廣雅釋詁、謫責也、楚人寄而謫閽者、謂寄居人家而怒責其閽者也、與下文夜半於無人之時而與舟人鬪、均是楚人之事、皆喩其自以爲是也と、王先謙之に從ひ、曰く、自來注家就本文解釋、與下文連爲一事、萬無可通之理、此蹢字緣上蹢字而誤、今斷從兪說と、兪王二家は蹢を謫と讀み、寄而蹢閽者と夜於無人之時與舟人鬪とを分ちて二事と爲す也、然れども此句は前の齊人蹢子於宋者と句形相同じければ、此一句を以て一事とは爲し

子の刖らるゝをも忍びて、之を宋國の門番と爲したるなり、其不慈も亦甚しと謂ふべし、而して其齊人が樂器の鈃や鍾を買ひ求めて攜へ歸るには、其の破損せんことを忘れ、善く之を束縛して保護の道を盡くす、其の器物を愛することは亦甚だ厚しと謂ふべし、齊人又其子が亡失して行衞不明となりたるとき、之を搜索するに、たゞ近く州鄕の中に求むるのみにて、境域の外に出て、遠く求むることをなし、此の三喩、第一の蹢子は、性命の重んずべき者を愛せずして之を毀損するに喩へ、第二の鈃鍾は、力を堅白に專らにして、貴ぶに足らざる者を貴ぶに喩へ、第三の唐子は、大道は淺近に在らず、堅白の爭辨は以て道を得る能はざるに喩ふ、故に之を總べ論じて曰ふ、此の齊人の如きは、事物輕重の類を失へる者あり、憫むべき人なるかなと、更に又一喩を設けて曰く、楚人の他國に寄寓して行步不自由の門番たる者は、其孤弱にして援けなきことを知るべし、而して夜半に於て身を岸上に立て、河中に泊する舟人と鬪へり、鬪ふとは雖も、楚人は固より岸を離れて舟に入ること能はざれば、唯岸上より惡罵を放つに過ぎざるのみ、且つ夜半なれば、明かに舟人を認め得るにもあらず、其惡罵の果して敵の短所に當るや否や知るべからず、又側に人なければ、其勝敗を決する人もなし、此くの如く唯敵を罵り、互に相怨むに至るまでの事なるに、自ら誇りて舟人は我に勝つ能はず、我は舟人に勝ちたりと言はゞ如何、惠子の儒墨楊秉と爭辨して自ら誇るは、此の蹢閽の舟人と鬪ふに異ならざるかと、前の三喩は其の輕重を失ふを咎め、後の一喩は勝たずして自ら勝ちたりと誇るを笑ふなり、

○射者非前期より此に至るまでの三節を合して一章とす、第一節は莊子先づ二難問を出して論端を發し、第二節は惠子の他を排して自ら是とするを嘲りて晉遽に比し、因て道の無爲を示して之を開けども、惠子猶固く自ら是として服せず、第三節由て莊子更に喩を設けて、惠子の輕重を誤り、道を求むるの術を知らざるを言ひ、更に喩を設けて惠子の自ら是として眞の是に至らざるは、猶ほ楚の蹢閽者が夜半に舟人と鬪ふが如しと言うて、其の堅白の辨の無益なるを示す、要するに此の一章は惠子の堅白の辨に溺沒して大道を知らざるを救はんとし、種々に喩を設けて之

君己」而は則に通ず、此一句は前に陳べたる事の由を說明するの語なり、何となれば則ち無は誠に有の本にして、萬有を民とすれば、無は其君の如き者なるが故に、衆弦皆之に從ひ、百姓皆之に從ふなり、我が虛無の道の貴きこと此くの如し、魯遽の徒に人を排して自ら是とし、而して其是とする所未だ必ずしも是ならざるが如きに非ず、惠子も亦徒に辯論を以て人に勝つことを務めて終に勝つ能はざるは、至道を知らざればなりと諷戒するなり、故に之に繼て曰く、且若是者邪と、〔且方與我以辯〕章炳麟曰く、與當也、亦敵也、左氏襄二十五年傳曰、一與一、天下篇、惠施日以其知與人之辯、亦同と、從ふべし、

莊子曰、齊人蹢子於宋者、其命閽也、不以完、其求鉼鍾也、以束縛、其求唐子也、而未始出域、有遺類矣夫、楚人寄而蹢閽者、夜半於無人之時而與舟人鬬、未始離於岑、而足以造於怨也、

【大意】 齊人其子を愛せず、宋に遣りて門番を爲し、其の刖らるゝを厭はず、而して樂器は甚だ之を愛護するは、物の輕重を失ふ、其失亡したる子を求むるに鄕域を出でざるは、近きに求めて遠きに求むるを知らざる者、是れ惠子の愛重すべき性命を毀損して堅白の辨を重んじ、道の淺近なる辨に求むべからざるを知らざるに同じ、又其の諸子と爭辨して自ら勝ちたりと誇るは、楚の寄寓せる蹢閽が、夜半人無き時に於て舟人と鬬ひ、岸を離れて舟に入らず、唯怨みを成すのみなるに同じ、眞に勝ちたりと謂ふべからざるに非ずや、

【通釋】 是に於て莊子又喩を設け、惠子の道を離れて性命を保全せず、徒らに强辨を弄して勝を爭ひ、事の輕重を失ふを悟らしめんとして曰く、齊人其子を憎み、之を宋に棄つる者あり、其の復歸り來らんことを恐れ、之をして行步不自由ならしめて宋國の門番と爲したり、門番は元來刖られし者を以て之を命ずる者にて、形體完全の人は之を爲さず、故に齊人は其

事他書に見えず、故に考正するに由なし、成玄英曰く、冬取千年燥灰、以擁火、須臾出火、可以爨鼎、盛夏以瓦瓶盛水、湯中煮之、縣瓶井中、須臾成氷也と、又林希逸曰く、冬寒之時、不以火而爨鼎、夏熱之時、以水而爲氷と、二說共に何に據るを知らず、今姑く林說に從ふ、淮南子には以冬鑠膠、以夏造氷の語あり、〔是直以陽召陽以陰召陰〕直は唯なり、林希逸曰く、其違時也若難矣、然冬至之日陽氣已生、夏至之日陰氣已生、以陽召陽則冬不寒矣、以陰召陰則不熱矣、雖似違時、有可召之理、故曰非吾所謂道、言其術末高也と、今之に從ふ、〔廢一於堂〕「釋文」に曰く、廢置也、〔音律同矣夫〕古來諸家皆夫の字を下句に屬するは誤りなり、堂室二瑟の音律相同じきが故に、相應じて聲を發するを謂ふなり、羅勉道は唐の時の事を引て此事の妄に非ざるを證す、因て左に譯載して參考に供す、唐の曹紹夔樂律を知る、洛陽に僧房あり、中磬日夜自ら鳴る、僧以て怪と爲し、因て疾を成す、紹夔僧と善し、來て疾を問ふ、僧之に故を告ぐ、俄に齋鐘を擊つ、磬復聲を作す、紹夔笑て曰く、明日盛饌を設くべし、當に爲めに之を除くべしと、僧其言の如くす、食畢り、紹夔懷中の錯鑪を出し、擊つこと數下にして去る、聲遂に絶ゆ、僧苦に其所以を問ふ、云ふ、此磬鐘律と合ふ、故に彼を擊てば此れ應ずと、僧大に喜び、疾隨て愈ゆ、又李嗣眞車鐸を得、之を振へば地中に應ずる者あり、之を掘りて鐘を得たり、蓋し此事あるなり、〔或改調一弦於五音無當也〕此れ莊子、魯遽が二瑟相應ずるの技よりして、瑟を借りて道を喩ふるなり、或は若と讀む、凡べて聲は五音の外に出づる者なし、五音の何れにも當らざる聲は、是れ無聲の聲なり、以て至人の無爲に喩ふ、〔鼓之二十五弦皆動〕無聲の弦、之を鼓するも固より聲なし、二十五弦皆動は、其他の衆弦亦皆無聲の聲を發するなり、以て至人無爲にして百姓徉狂、知らず識らず帝の則に從ふに喩ふ、陶淵明の無弦琴は蓋し此の意を取るなり、〔未始異於聲〕此五字、郭象以下の諸家、皆下の而音之君已に屬して讀めども、上の二十五弦皆動の句に屬して讀むを可と爲す、二十五弦皆動きて其聲皆同じきを言ふなり、舊讀に從へば、意義不明となり、許多の辭を費して牽合せざるべからず、諸家の說を點檢すれば、其穩當ならざるを知るべし、〔而音之

以て陽を招き、陰を以て陰を招きたるのみ、未だ以て奇と爲すに足らず、吾の道は此くの如き淺近なる者に非ず、吾今、子に吾が道を示さんとて、是に於て兩瑟を持出して調子を合せ、一瑟を堂に置き、一瑟を室に置き、魯遽が室中の瑟を鼓して宮音を發せしむれば、堂上の瑟も亦自ら宮音を發して鳴り、室中の瑟に角音を發せしむれば、堂上の瑟も亦自ら角音を發して鳴りたり、魯遽は此を以て吾道の至妙として誇れども、二瑟の音律相同じきを以て、相應じて聲を發するのみ、其の奇に似て奇に非ざるは弟子の技と同じきのみ、而るに自ら是として弟子を非とするは非なり、たゞ魯遽の爲す所のみならず、二十五弦中の一弦の調子を改めて、宮商角徴羽の何れにも當らざる聲、郎ち無聲ならしめ、之を鼓すれば他弦も之に應じ、二十五弦皆動きて無聲の聲を發して其聲皆同じ、而して五音に於て當らざれば、是れ一音を專主するに非ずして、衆音の君たるが故に、他弦皆之に應ずるのみ、惠子若し自ら是として他の學者を非と爲さば、猶此の魯遽の如き者にて、惠子の言ふ所も敢て他に勝りたるには非ず、而して尙更に其上の至道あるを知らざるなりと、惠子對へて曰く、今夫の儒墨楊秉は方に我に當るに辯論を以てし、相逆らふに說辭を以てし、相壓伏するに大聲を以てすれども、皆未だ吾を折きて非となし、勝を取る能はざるなり、然らば吾學の獨り是なること知るべきに非ずや、子以て如何と爲すと、

【解義】〔儒墨楊秉〕成玄英は儒姓鄭、名緩、墨名、翟也、楊名朱、秉公孫龍字也と曰へども、儒墨は學派の名なれば、當時の儒者必ずしも鄭緩一人に限るべからず、且つ墨翟は其年代莊子より前なれば、當時の墨徒は蓋し其弟子なるべし、東條弘曰く、秉舊說相傳へ、以爲公孫龍字、然楊墨皆是姓而非名、則秉亦非名必矣、豈孟子所謂子莫姓秉歟と、秉を公孫龍の字とするは確證あるにもあらず、東條氏の疑ひは理ありと爲す、然れども其以て子莫の姓と爲すは、亦臆測にて證據あるに非ず、疑を存して決定せざるを可と爲す、〔或者若魯遽者邪〕或者は若しくはと讀む、「釋文」に李を引て曰く、魯遽人姓名也と、又一云、周初時人と、〔冬爨鼎而夏造氷〕冬爨鼎のみにては、如何にして鼎を爨きしか、其奇なる所以を知る能はず、たゞ魯遽の

聲、而未始吾非也、則奚若矣、

【大意】前の問答を受けて本論に入り、今儒墨楊秉の四家と、惠子と合せて五の異學ありて相爭辯するが、果して何れか是なるか、若し他は皆非にして吾は是なりと曰はゞ、則ち魯遽の如きのみ、魯遽は其弟子の冬に火を以ひずして鼎を爨き、夏に水を以ひて氷を作るを奇とするに足らずと爲し、自ら一瑟を鼓して、他の瑟の同音を發するを以て、其道の至れる者となせども、同音相應ずるは理の常なれば、是も亦奇とするに足らず、一弦を改めて五音の何れにも當らざらしめ、之を鼓して二十五弦一時に鳴るの奇妙なるには如かず、而して魯遽は未だ之を知らざるなり、惠子の他の學派と相辯駁して勝を爭ひ、大道を知らざるは、唯魯遽の如きに過ぎざるに非ずやと論詰し、惠子之に對へて、他の學者我を辯駁すれども、未だ我を折伏せしむる能はざれば、吾學は獨り是なりと曰ふて屈せざるなり、

【通釋】前の問答に於て、惠子强辯して各人の是とする所を是とし、天下皆堯と爲るも可なりと曰へるに就き、莊子之を難じて本問題に入り、曰く、各人の是とする所皆是ならば、今天下に儒墨楊秉の四學派あり、之に惠子を加へて五と爲る、而して此の五學者の是とする所各同じからず、されば、是なる者一にして、他は必ず不是ならざるべからず、若し之を皆是なりとなさば、互に相爭辯するに及ばざる筈なり、果して此中の何れか是なるか、若し惠子自ら己を是として他の四家を不是と爲さば、是れ魯遽の他を非として自ら是とするが如き者に非ずや、其の是は眞の是に非ざるなりと、因て魯遽の事を述べて曰く、古に魯遽といふ學者あり、妙技を能くし、從ひ學ぶ者多し、其弟子の一人曰く、我は盡く先生の道を得たり、吾能く冬の寒き日に火を以ひずして鼎を爨きて物を煮、又夏の暑き日に能く水を以て氷を造るを得、先生の道此くの如きのみと、魯遽之を斥けて曰く、冬の極寒は冬至の後にて、陰氣漸く衰へ、陽氣の暗に發生しつゝある時にして、夏の酷暑も亦夏至の後にて、陽氣漸く衰へ、陰氣の暗に催しつゝある時なり、故に此の冬に火を以ひずして鼎を爨き、夏に水を以て氷を造るは、奇なるが如くなれども、唯暗に生じつゝある陽を

天下に公定の是あるにあらざるなり、而るに人々各自に其の是なりと思ふ所を以て是と爲さば、天下の人は皆堯と同じき聖人と爲る、是れ猶聖人と謂ふを得べきかと、惠子曰く可なりと、〔莊子の此の二問は皆對ふるに不可を以てすべき筈の者なり、而るに惠子の之を知りつゝ反て可と對ふるは、蓋し莊子の此に據りて發せんとする難問の口を塞ぎ、且つ惠子は堅白同異の大家なれば、詭辯を弄して其不可を可とすること難からざるを以てなり、莊子も亦之を知る、故に措て較せず、直に次ぎの本論に入る〕、

【解義】〔射者非前期而中〕成玄英曰く、期謂準的也と、郭象曰く、不期而中謂誤中者也と、其意猶分明ならざれども、玄英之を疏して無期準而誤中一物と曰ふを觀れば、準的に中るに非ずして他物に中ると爲すに似たり、從ふべし、然らざれば後の問と合はず、各是其所是は眞の是に非ず、非前期而中は的中に非ず、莊子の意此の如し、然るに羅勉道は偶爾幸中と曰ひて、偶然幸にして的に中ると爲し、後の注家之に從ふ者多し、皆是に非ず、

莊子曰、然則儒墨楊秉四、與夫子爲五、果孰是邪、或者若魯遽者邪、其弟子曰、我得夫子之道矣、吾能冬爨鼎而夏造冰矣、魯遽曰、是直以陽召陽、以陰召陰、非吾所謂道也、吾示子乎吾道、於是乎爲之調瑟、廢一於堂、廢一於室、鼓宮宮動、鼓角角動、音律同矣、夫或改調一弦、於五音無當也、鼓之二十五弦皆動、未始異於聲、而音之君已、且若是者邪、惠子曰、今夫儒墨楊秉、且方與我以辯、相排以辭、相鎭以

の四句を收む、〔權勢不尤則夸者悲〕此の一句は士の九句を收む、尤は甚なり、人に拔き出るを謂ふ、夸者は虛名を貪る人を謂ふ、〔勢物之徒樂變〕此の一句、又前の二句を收む、勢は權勢、物は錢財なり、〔此皆順比於歲不物於易也〕此の二句は士民の勢物に溺るゝの斷語なれども、字句甚だ解し難し、恐らくは誤脫若くは衍文あらん、故に諸解皆牽强にして從ふべき者なし、今一々玆に擧げず、唯陳壽昌の說稍優るを覺ゆ、曰く、此皆順比歲時之序、以期發榮滋長於其間、碌碌因時、囿於形器、不能神其物、而自居於變易不測之地者也と、今姑く之に從ふ、又巖井文は歲物間、恐衍一不字、言順時變易、而常爲物役也と、參考に供すべし、

馳其形性、潛之萬物、終身不反、悲夫、

【通釋】自己の身と性とを出し馳せて、之を種々の外物に潛め入れ、身を終るに至るまで其儘にて、反歸して之を自己の有と爲さず、其愚陋此くの如し、深く悲歎すべきなりと、以て全章を結ぶ、

莊子曰、射者非前期而中、謂之善射、天下皆羿也、可乎、惠子曰、可、莊子曰、天下非有公是也、而各是其所是、天下皆堯也、可乎、惠子曰、可、

【大意】莊子、惠子の辯を以て、人に勝つことを務めて、道を離るゝを正さんと欲し、先づ的を定めざる射の喩を設けて暗に之を詰り、次ぎに天下に公是無きに人々各自ら其是とする所を是とすれば、天下の人皆堯と謂ふも可なるかと問ひ、惠子强辯して二問共に之を可と曰ひ、以て莊子に口を開かざらしめんとす、

【通釋】莊子が惠子に謂うて曰く、弓射る者が前より中つべき的を定めずして、矢が何處にても中りさへすれば之を射術を善くする人と謂ふを得べければ、天下の人皆羿と同じき善射と爲る、是れ猶善射と謂ふを得べきかと、惠子曰く可なりと、莊子又曰く、

引て善治民也とあり、成玄英は治理四民、甚能折中、斯人精幹局分、可以榮官と曰へども、陸樹芝の上非天民、而在民之中者也と曰ひ、一官一職の任に適する材能ある士と爲す、之を的解とすべし、〔筋力之士〕力あること虎の如き孟賁烏獲の類を曰ひ、〔勇敢之士〕は力の有無を問はず、心氣剛勇にして懼るゝことなき藺相如魯仲連の類を曰ふ、「成疏」に武勇之士云々と曰へるは、筋力の士と區別なきに似たり、〔枯槁之士宿名〕枯槁之士は祿仕せず隱居して其道を樂むの人なり、貧賤にして粗食に安んず、故に容貌枯槁するなり、宿名は兪樾曰く、宿讀爲縮、國語楚語縮於財用則匱、戰國秦策縮劍將自誅、韋昭高誘注竝曰、縮取也、枯槁之士縮名、猶言取名也、「釋文」曰、宿積久也、于義未安、又引王云、其所寢宿唯名而已、更爲迂曲、由不知宿爲縮之假字耳と、宿を縮の假字と爲し、縮に取るの訓あるにより、宿名を名を取ると解す、從ふべし、〔禮敎之士〕〔仁義之士〕共に儒敎の徒なれども、前者は子弓荀卿の如き禮を以て外より治むる學者を指し、後者は子思孟子の如き、內の四端を擴充して外に及ぼず學者を指す、〔貴際〕郭嵩燾曰く、謂相與交際、仁義之用、行乎交際之間者也、鄭康成禮記中庸注、人也、讀如相人偶之人、以人意相存問之言、故人與人比而仁見焉、仁義之士所以貴際也、釋文貴際謂盟會事、誤と、從ふべし、以上九種の人は士に就て言ひ、以下の農夫等四種は民に就て言ふ、〔農夫無草萊之事則不比〕萊は廢田の草を生ずるなり、草萊の事は草萊を開墾して耕種する事を謂ふ、兪樾曰く、比通作庀、用禮之內云比者、先鄭皆爲庀、是也、國語韋注亦曰、庀治也、農夫惟治草萊之事、故無草萊之事則不庀、商賈惟治市井之事、故無市井之事則不庀也、「郭注」曰、能同則事同、所以比、是以本字讀之、非是と、比を庀に通じて治と訓し、農夫は開墾耕種の事に非ざれば治めずと解す、從ふべし、〔市井〕成玄英曰く、古者因井爲市、故謂之市井也と、市場にて賣買することを謂ふ、〔庶人有旦暮之業則勸〕庶人は農工商の總稱也、農工商以外に又庶人あるに非ず、但前に無—則不比の二句對を爲し、後に有—則勸の二句を對と爲さんとし、特に一句を増すのみ、故に旦暮之業は又耕種賣買工藝を總稱するなり、〔錢財不積則貪者憂〕此の一句は民

執り革甲を着けたる軍人は、戰事あるを樂み、隱居して仕へざる枯槁の高士は、名譽を取るを務め、法律を講究するの士は、其條規を格守して治術を廣めんことを思ひ、禮義節文の教を守る士は、容儀を敬飾し、仁義を施すを務むる士は、人との交際を以て重しと爲す、又下民に於ては、農夫は開墾耕種に力めて、其事無ければ敢て他事を治めず、商賈は市井の賣買に力めて、其事無ければ敢て他事を治めず、庶民は朝夕に爲すべきの業あれば、則ち自ら勉勵し、種種工藝に從事する人は、器械の巧妙なる者ありて製作精良なるを得れば、則ち其氣愈〻壯盛也、金錢財寶積んで多きを致さゞれば、則ち貪りて多欲なる人は憂ひ、權勢盛んにして人に過ぎざれば、則ち驕り亢ぶる者は悲む、而して此の權勢錢財に熱中する者は共に事變あるを樂み、變に乘じて其欲する所を攫取せんとし、又爲すべきの時に遭へば、それ〲人に用ひられて務めに服し、安靜にして無爲なること能はざるなり、權勢錢財は身外に在る物にて、士民共に之に囚はる、故に之を斷じて曰く、以上擧ぐる所の士民は、共に歲時變遷の序に順比して、勢利を其間に貪り、以て外物に囚はれて、自己が物を使役し、變易不測の地に居る能はざる者なり、○知士無以下、此に至るまでの三節を合して一章と爲す、第一節は知辯察等自己の身に備はる外物の爲めに使役せられて、其性を失ふ者を擧げ、第二節は士と民とに分ち、士は外物の權勢を貪るが爲めに、民は外物の錢財を貪るが爲めに使役せられて其性を失ふ者を擧げ、第三節に至り、其性を萬物に潛め入れて終身反らざるを歎じて之を惜む、要するに、心を外物に役し、性を失ふ者を論じて之を悲むなり、

【解義】〔招世之士興朝〕招世の解、成玄英は推薦忠良、招致人物之士、可以興於朝廷也と曰ひて、人物を招致すと爲し、王先謙も之に從うて招致世人、相與共濟此務、興其朝者也と曰ひ、林希逸は之と大同小異にて、立招士、而爲名於世、即好名者也と曰ふ、又羅勉道は以天下爲己事、如招攬之也と曰ひて、天下を招き攬ると爲す、皆下の筋力勇敢等と對せず、恐らくは非なり、林雲銘曰く、招搖於世、以自見者也と、高く揚りて世に顯はることあるを好むの人と爲す、此說從ふべし、興朝は林希逸の立於朝廷之上也の說に從ふ、〔中民之士榮官〕中民は「釋文」に李を

も容るゝ能はず、故に勢自ら嚴急に至るなり、淩誶は人を淩ぎ問訊することにて、豫審判事の爲す所の如き是れなり、〔囿於物者也〕囿は限域ありて其以外に出づる能はざるの意あり、故に囿於物を今の通用語にて言へば、物に囚はれたる者の義、卽ち其眞性を失ひたる者なり、

招世之士興朝、中民之士榮官、筋力之士矜難、勇敢之士奮患、兵革之士樂戰、枯槁之士宿名、法律之士廣治、禮樂之士敬容、仁義之士貴際、農夫無草萊之事則不比、商賈無市井之事則不比、庶人有旦暮之業則勸、百工有器械之功則壯、錢財不積貪者憂、權勢不尤則夸者悲、勢物之徒樂變、遭時有所用、不能無爲也、此皆順比於歲、不物於易者也、

【大意】　招世之士は大才、中民之士は中才、共に文官なり、筋力勇敢兵革は共に剛勇の士にして、武官なり、枯槁の隱者と法律の煩瑣と對し、禮樂仁義は儒敎の徒、此等朝野の士は、共に其身分及び學ぶ所に囚はれて權勢を貪り、農工商の民は又各其業とする所に囚はれて錢財を貪る、士民共に事變を樂み、時に遭ひて爲す所ありて權勢錢財を取らんとし、以て無爲なること能はず、是れ皆歲時變遷の序に順化して物に使はれ、自ら主となりて物を使役し、變易不測なることと能はざる者なり、

【通釋】　高く揚りて世に顯はることを好むの士は、朝廷に立ちて政務に膺り、一官一職に適する材能ある中等の士は、官位あるを以て榮譽と爲し、筋力の强き壯士は、人の勝へ難き所に勝へて、自ら以て矜りと爲し、勇氣の强き士は、患禍に遭うて愈〻奮ひ、兵器を

牽强の説を爲す、成玄英の夫牧養蒼生、實非聖人務、理雖如此、猶請示以要言と曰ひ、陸樹芝の子自不屑爲天下、願教我所以爲天下と曰ひ、及び前に擧げたる王先謙の説の如き、皆誤る、此の黄帝の再問は、前に童子の答へたる意を了解する能はざるより來るなり、誠の字を翫味すれば、童子の予又奚事焉を黄帝は非吾事と誤解したるを知るべし、〔再拜稽首〕拜は兩掌を組合せ、頭を垂れて心に至り、手に達するを云ふ、稽首は兩手を組合せたるまゝ下げて地に達し、從て體を屈し頭を垂れて手の上に達するをいふ、〔稱天師而退〕天師は卽ち大宗師なり、黄帝至道の要を了解して、更に大隗を見ることを求めずして退き去る、蓋し童子と大隗とは一にして二、二にして一なり、郭象曰く、師夫天然而去其過分、則大隗至也と、亦此意なり、

知士無思慮之變則不樂、辯士無談說之序則不樂、察士無凌誶之事則不樂、皆囿於物者也、

【大意】智謀ある人、辯舌の能き人、明察の人は、各其材能の爲に使はれ、思慮すべき事、談論すべき事、凌誶すべき事なければ、其心樂まず、是れ皆自己の身に有する物に囚はれたる者なり、

【通釋】智謀あるの士は、思慮を費やすべき事變なければ、則ち其心樂まず、辯舌の能き士は、談說を用ふべき端序なければ、則ち其心樂まず、明察嚴急の士は、人と相凌ぎ、訊問して人の隱秘を訐き出すの事なければ、則ち其心樂まず、此の三種の人は、其身に知辯察の能あるが爲めに、反て之に使はれ、自己の利益とも名譽とも爲らず、又自己の爲すに及ばざる事にても、好んで思慮を運らし辯論を戰はし、人を凌ぎ問訊して隱秘を訐くの事を爲す、知辯察は無形の能なれども、身に屬する者にて、性命より之を視れば、亦一の外物たるを免れず、故に之を斷じて、是れ皆外物に囚はれて自ら主たる能はざる者なりと曰ふなり、

【解義】〔察士無凌誶之事則不樂〕兪樾曰く、禮鄉飲酒鄭注、察猶察察、嚴殺之貌、老子俗人察察河上公注、察察急且疾也、察有嚴急之意、故以凌誶爲樂と、察の字に嚴急の意ありと爲す、明察の士は人の小過を

て自ら足り、民の眞性は耕して食ひ、織りて衣て自ら足る、擲飾を施し、鞭策を加へ、之を馳驟整齊するが如きは、徒に馬を害するに足るのみ、仁義を施し忠孝を勸め、之を束するに禮樂制度を以てするが如きは、徒に民を害するに足るのみ、人民の害を去るは、卽ち是れ已むを得ざるに出でたる爲にして、無爲の爲なり、無爲の爲は天に合す、之に反し、聖知を用ふるの爲は有爲の爲にして、人に出づ、天に合する無爲の爲なれば、天下自ら治まれども、人に出づる有爲の爲は徒に天下を擾亂するに足るのみ、前章の魏の武侯が愛民而爲義偃兵としたるが如きは、卽ち有爲なり、而して此の無爲にして自ら天下を治まらしめんとするには、先づ自ら其聖知を去りて性命を保全せざるべからざるなり、故に後の牧事の喩は、前の襄城の野に遊びて病を治するの喩と同意なれども、前喩は其根本を云ひ、後喩は其用を言ひて解し易からしめしの差あるのみ、〇此の牧馬の比喩は、前の馬蹄篇の意と略相同じ、參照して讀むべし、

【通釋】 黄帝は牧馬の童子が爲天下亦若此而已、予又奚事焉と曰へるの意を解する能はず、誤つて我は牧馬を以て事と爲す者なり、天下を爲むるが如きは吾が事に非ざれば知らずと曰へるかと聞き取りたる者の如し、因て又童子に謂うて曰く、子は帝王に非ざれば、天下を治むることは、誠に子の事業には非ず、然りと雖も子は有道者なれば、必ず之を知らん、請ふ天下を治むるの道を問はん、願はくは之を示せと、小童は既に前に十分に答へたるを、黄帝の解し得ずして更に問ふを以て、辭して對へざりしかば、黄帝尙慇懃に推して之を問へり、是に於て小童其の解し易からんが爲め、又馬を以て之に喩へて曰く、かの天下を治むることは、何ぞ馬を養ふことに異ならんや、馬を養ふには人知を用ひて馬の世話を爲さず、たゞ馬の害と爲る者を取り除くまでの事なり、天下を治むるにも、聖智を用ひて仁義禮樂等の分外の世話を爲さず、たゞ人民の疾苦する所の害を除き去ることを爲せば可なりと、是に於て黄帝大に喜び、再拜稽首し、足下は實に天師なりと稱して退きたり、

【解義】 〔夫爲天下者則誠非吾子之事〕前節に於て童子既に黄帝の問に答へ了れり、復た問ふべきこと無き筈なり、而して黄帝更に之を問ふ、故に注家多く

黄帝の所謂聖は童子の所謂病なり、今其病痊ゆるは、卽ち聖知を去りて性命を保全するに喩ふるなり、〔遊於六合之外〕襄城の野は廣漠なれども、猶方の内に在りて、其廣さ限りあり、六合の外に遊ぶに至りては、混茫の一氣に遊びて造物者と友たり、更に六合の能く限る所に非ず、無爲の極なり、〔予又奚事焉〕夫爲天下亦如此而已矣、予又奚事焉の語は前後に在りて、亦同意義なり、然るに王先謙は前には不必更欲多事と注し、後には言非我所事と注せるは、蓋し後節に黄帝の爲天下者、則非吾子之事の語あるに縁るならん、然れども同文の語を強ひて異義に解するは非なり、

黄帝曰、夫爲天下者、則誠非吾子之事、雖然請問爲天下、小童辭、黄帝又問、小童曰、夫爲天下者、亦奚以異乎牧馬者哉、亦去其害馬者而已矣、黄帝再拜稽首、稱天師而退、

【大意】黄帝前節の意を解せずして更に問ふにより、童子又天下を治むるを馬を牧ふことに喩へ、馬を牧ふには馬を害する者を去るのみ、天下を治むるも亦民を害する者を去るのみと曰ひ、聖知を用ひず、無爲にして自然に任ずべきを敎へたれば、黄帝大に悦び、再拜稽首し、天師と稱して退きたり、○黄帝將より此に至るまでの三節を合して一章とす、第一節は黄帝と牧馬の童子の事を敍し、聖知の無益にして無爲の效あるを喩へ、第二節は童子の對へを敍し、天下を治むるを病を治するに比して性命を保全して無爲の治を爲すべきを說き、第三節は更に牧馬に喩へて、聖知を用ひず、たゞ其害を去るべきを敎へたり、之を要するに、前章徐無鬼が、仁義偃兵の有害なるを說き、胸中の誠を修め、天地の情に應じて攖す勿れと敎へたると同主意にして、語を換へ比喩を以て覆說したるのみ、牧馬の喩は尤も人牧たる者の心得べき眞訣にして、元の耶律楚材の、與一利不如除一害の語は此に原づくなり、馬の眞性は草をかみ水を飮み

りて襄城の野に遊べ、則ち病自ら癒えんと、故に此くの如く馬を牧養して此の野に遊び居るなり、至人の言虚しからず、今は病少しく癒えたり、予は又將に塵俗の外に出でゝ造物者と共に遊ばんとするなり、彼の天下を治むることも亦此くの如くならんのみ、此上又何ぞ爲すべきの事あらんやと、〔無爲にして自然に任せ、有爲を以て民を擾すこと無ければ、天下自ら治まるを謂ふなり、〕

【解義】〔亦若此而已矣〕此の字は近く物を指す字なり、故に小童自身及び現に小童が立つ所の襄城の野を指して、吾が襄城の野に遊びて病自ら癒ゆるが如きのみの意となすべし、下文に言ふ所を見て自ら明かなり、成玄英の欲脩爲天下、亦如治理其身、身既無爲、物有何事、故老經云、我無爲而民自化と曰へるは、説て未だ詳ならず、或は馬を牧ふを指すと曰ふは、後節を探りて其文意を混じたる説にて誤り、此節には牧馬の意なし、或は病を治するを指すと爲し、或は襄城の野を指すと爲すは、皆一偏を得て全體を得ず、〔遊六合之內〕六合は上下四方なり、卽ち方の內にて、塵俗の裡に居り、世間名利の事に奔走するを言ふなり、成玄英の六合之內謂囂塵之裏也と曰ふは、之を得たり、而して玄英又我少遊至道之境、棲心塵垢之外、而有眩病、未能體眞と曰へるは、自家撞着の説なり、〔予適有瞀病〕「釋文」に李を引て曰く、瞀風眩貌と、目の眩するは心の亂るゝに由る、以て性命を毀損するを喩ふるなり、〔長者〕年長の人なり、又有道の意を兼ぬ、〔若乘日之車而遊襄城之野〕若は汝なり、「釋文」に司馬を引いて曰く、以日爲車也と、郭象の日出而遊、日入而息、を曰ひ、成玄英の日新以變化と曰ふは、皆日の車に乘るの意に適切ならず、林雲銘曰く、遊於有方之內、爲物所構、漸覺瞀昧也、欲已之則莫若以明、故乘性中之慧日而遊於無障礙之處也と、雲銘は日を以て性に喩へ、天に稟けたる眞性に從ふことゝ解するなり、此説從ふべし、襄城之野は廣漠にして障礙なく、徬徨して倚無き處なり、此に遊ぶは、人世の拘束を脱し、外物に偏倚することなく、無爲逍遙するに喩ふるなり、前章に謂ふ所の修胸中之誠は此の乘日之車と同じ、〔今予病少痊〕「釋文」に李を引いて曰く、痊除也と、疾の癒ゆるをいふ、黄帝は遊んで迷ひ、童子は遊んで痊ゆ、則ち

人化したる名と看るべし、具茨は山の名なり「釋文」に司馬を引て曰く、在二滎陽密縣東一、今名二泰隗山一と、〔襄城之野〕襄城は地名なり、成玄英曰く、今汝州有二襄城縣一、在二泰隗山南一と、〔七聖皆迷〕聖知の字屢前篇に見ゆ、此の聖の字亦知と爲して讀むべし、黃帝以下の七人は皆聖人有爲の人なり、故に迷うて路を失ふ、七竅鑿たれて渾沌死すると同意、知の道を得べからざるを喩ふるなり、郭象曰く、聖者名也、名生而物迷矣、雖レ欲レ之乎二大隗一其可レ得乎と、迂解と云ふべし、〔無所問塗〕塗は途に同じ、道路なり、〔大隗之所存〕存は在なり、所在は所居と云ふに同じ、

小童曰、夫爲二天下一者、亦若レ此而已矣、又奚事焉、予少而自遊二於六合之內一、予適有二瞀病一、有二長者一敎レ予曰、若乘二日之車一而遊二於襄城之野一、今予病少痊、予又且二復遊二於六合之外一、夫爲二天下一亦如レ此而已、予又奚事焉、

【大意】小童黃帝に對へて、天下を治むるも亦予の襄城の野に遊びて病を治するが如くせんのみ、予初め六合の內に遊びて病に罹り、長者の敎に從ひ、日の車に乘りて此野に遊び、今は病少しく癒えたれば、更に六合の外に遊ばんとすと曰ひ、世俗の裡に居り、知を用ひては、性命を毀損し、知を用ひず無爲逍遙すれば、以て性命を保全すべきを喩へ、天下を治むるも亦此と同じく、知を用ひず無爲にして民物を擾すこと無ければ、天下自ら治まるの意を謂ひたるなり、

【通釋】小童對へて曰く、彼の天下を治むることも、亦此くの如くならんのみ、此外又何ぞ爲すべきの事あらんや、此くの如きのみとは、襄城の野に遊び、無爲にして病自ら癒ゆるが如きのみの意、又何ぞこれを事とせんとは、禮樂法制等の多事を要せんやの意なり、小童又語を續ぎて曰く、予年少の時より塵俗の裡に居り、知を用ひて世の名利に奔走せしが、適心亂れて目まひを病みたり、幸に一年長者ありて予に敎へて曰ふ、汝自然に光明なる日の車（性を謂ふ）に乘

べし、

黄帝將見大隗乎具茨之山、方明爲御、昌寓驂乘、張若謵朋前馬、昆閽滑稽後車、至於襄城之野、七聖皆迷、無所問塗、適遇牧馬童子、問塗焉、曰、若知具茨之山乎、曰、然、若知大隗之所存乎、曰、然、黄帝曰、異哉小童、非徒知具茨之山、又知大隗之所存、請問爲天下、

【大意】 黄帝が大隗を具茨山に訪はんとし、聖知の臣六人と共に往きしに、襄城の野に至り、路に迷うて行く能はず、馬を牧へる童子に遇うて之を問へるに、具茨の途を知り、又大隗の居る所をも知れるより、驚いて聖人と爲し、之に天下を治むるの道を問へり、

【通釋】 黄帝軒轅氏、大隗が具茨と云ふ山に居ると聞き、之を訪はんが爲めに出かけたり、時に其臣の方明が御者となりて車の左に坐し、昌寓は驂乘となりて右に坐し、張若謵朋の二人は馬車の前に走りて前導者となり、昆閽滑稽の二人は車の後に從へり、かくて襄城の野まで往きしに、黄帝を始め七人の多知なる人々、皆途に迷うて具茨に往く能はず、城外の廣き野のことゝて、途を問ふべき人も居らず、甚だ困難せり、たま〳〵一人の馬を牧養する小童に出遇ひたれば、之に問うて曰く、汝は具茨と云ふ山に往く途を知れるや、童子曰く、之を知れり、黄帝又問うて曰く、然らば汝は大隗の居る所を知れるや、童子曰く、之を知れりと、黄帝驚て曰く、こは不思議なる小童かな、たゞ具茨山の途を知るのみならず、又大隗の居る所をも知れり、是れ必ず道を知るの聖人ならん、天下を治平にするには如何にせば可ならんか、請ふ之を教へられよ、「七聖の聖知は途に迷ひ、朴實無知の童子反て之を知る、聖知の道を得る能はざるを喩ふる也、」

【解義】 「將見大隗乎具茨之山」「釋文」に曰く、崔本作泰隗、或云、大隗神名也、一云、大道也と、道を假に

之を全くし、濫に民を擾亂すること勿れ、此くの如きのみ、君にして性を修めて無爲なれば、民は已に死亡を免れて自然を樂むを得るなり、君又何ぞ仁義偃兵を爲すを用ひんや、○徐無鬼見武侯より以下三節を合して一章とす、第一節は武侯驕傲の辭に對へて、反つて君の形神の病を勞はんと欲すと言うて其病を説き、第二節にて武侯が仁義偃兵を以て二病を治せんとするの害あつて益なきを論じ、第三節に至りて、始めて胸中の誠を修めて天地の情に應ずるの治方を授く、之を要するに、第二節の僞の字と第三節の誠の字は、此章の眼目にて、僞を排して誠を勸むるなり、誠を勸むるは卽ち之を導きて道に入らしむるなり、○此章第一節の前半は前章の第一節とほゞ同くして、共に徐無鬼が始めて武侯に見へし時の事なり、而して前章は狗馬を相するの談にして、此章は仁義偃兵の談なるは何故ぞや、一時の事とすれば事實合はず、一を再見の時の事とすれば、首節の語は再見の辭に非ず、莊子には寓言多ければ、此くの如きの齟齬は固より怪むに足らざれども、相違せる事實を幷記して人を怪ましむる筈なし、蓋し徐無鬼を假りて道を説きたる二章のものと別篇に在りしを、後人のこゝに集めたる者ならん、

【通釋】　君若し如何にもして民を休養し、己の二病を治せんと欲せらるゝならば、たゞ內に於て己が胸に備はる所の本然の誠を修め、以て天地公平無私の誠心に應和し、仁義偃兵等の僞を爲して、濫に人民を擾亂すること勿れ、此くの如くなれば、世は自ら無事にして、彼の人民は已に横禍に罹りて死亡するの難を免かるゝを得て、生命を全くし自然を樂むを得れば、其れにて十分なり、君又何ぞ兵を偃め仁義を施すなどの有害無益の事を爲すに及ばんや、是れ此章の主意也、

【解義】　〔君若勿已矣〕勿已は孟子の無以則王乎の無以に同じ、君が必ず二病を治せんと欲して已まざればなり、〔脩胸中之誠而勿攖〕胸中は外に向つて仁義を施し兵を偃するに對する語なり、胸中之誠は人の天より禀けたる性命にして、之を脩めれば無爲と爲る、攖は擾なり、攖の字を成玄英は人民に係けて、無勞作法攖擾黎民と曰ひ、林雲銘は心に係けて、不攖觸於其中焉と曰ふ、林説は誤る、成説に從ふ、

諸注家皆心中の事と爲して說けども、斯くては上文の愛民害民之本也、爲義偃兵造兵之本也の說明なく、文章支離滅裂して意義接續せず、恐らくは非なり、章炳麟曰く、伐與敗同、說文、伐一曰敗也、劉昌宗音周禮大司馬大行人輈人伐字爲房廢反、是卽讀伐如敗也、成固有敗、言有成者必有敗也と、諸家多く伐を攻伐として解すれども、意義通ぜず、章說に從ひ敗と爲して讀むべし、庚桑楚篇に其成也毀也の語あり、齊物論其他の諸篇にも此に類する語多し、毀を換へて伐と爲したるは、戰爭に因みてなりと、「君亦必無盛鶴列云々」此處五箇の無の字を、古來諸家皆禁止の辭と爲す、然れども斯くては敵來れども戰はざることゝなり、下文の殺人之士民云々、其戰不知孰善云々の句、由て出る所なく、且つ亦の字用を爲さず、之を反語と爲し、應戰して勝を求むるに至る無からんやと解すれば、上文の偃兵造兵之本也の意も明かとなり下文とも意義通暢して礙る所なし、又林希逸は麗譙を宮樓の門、錙壇を祭祀の地と爲して曰く、君之用心若與物鬭、則一室之內皆若步兵騎卒列陣於前、無非爭奪之境界也、釋氏所謂一切唯心造是也と曰ひて心と心との戰鬭と爲し、之に從ふ注家多けれども、前後の文と分離して意義通ぜざれば、實戰の準備と爲して解するを可とす、鶴列は兵陣を謂ふ、徒は步卒、驥は軍馬なり、郭嵩燾曰く、史記陳涉世家、戰譙門中、顏師古注、門上爲高樓以望遠、樓一名譙、「說文」封土曰壇、錙壇之宮謂軍壘也と、此の說從ふべし、卽ち譙は城門上の望樓なれば、盛鶴列於麗譙之間とは兵陣を城門內に布くことゝなる、「藏逆於得」逆は非理也、得は捷利を求むる也、捷利を貪るが爲めに、非理の念を胸中に蓄ふるを謂ふ、下の機巧智謀戰鬭を以て勝たんとするは皆逆を以てする也、

君若勿已矣、修胸中之誠、以應天地之情而勿攖、夫民死已脫矣、君將惡乎用夫偃兵哉、

【大意】前節に於て十分に仁義偃兵の害ありて益なきを論じ、此に至り始めて二病を治するの方を授くるなり、其方は他なし、自ら胸中の誠卽ち性を修めて

亦必ず兵陣を城の望樓の間に列ねて戰備を脩むること無きを得るか、人馬を壘塞に配置して守備せしむること無きを得るか、敵を卻け捷利を得んことを欲するに專らにして、胸中に非理の念を蓄ふるに至ること無きを得るか、巧計を以て勝たんとすること無きを得るか、奇謀を以て勝たんとすること無きを得るか戰鬪を以て勝たんとすること無きを得るか、恐らくは皆之を免るを得ざるべし、則ち是れ仁を施し民を愛するが爲めに、民を害するの外敵を招き、義を爲し兵を息むるが爲めに、卻て戰爭を開くに至るに非ずや、拙者が民を愛するは民を害するの始め、義を爲し兵を偃むるは兵を造るの本と曰ふは、是の故を以てなり、彼の人の士民を殺し、人の土地を兼幷して、其私欲を養ひ、其心を悅ばしむる者は、たとひ戰ひには捷利を得たりとするも、眞人が天地の心を以て之を視るときは、其戰ひは何れか善にして何れか非なるか、何れが勝ちて何れが敗れたるかを知らず、双方共に天意に違ひ、双方共に失敗に終りたるに外ならず、故に君は自ら辯護して、我れ仁義の政を施し、其爲め隣國の濫りに來り侵すにより、已むを得ず應戰したるのみなれば、我には惡なしと思はるべけれども、君も亦民を害し戰鬪したる上は、其の天意に背けることは敵と同じくして、共に敗者たるなり、故に民を愛し義を爲し兵を偃むるも、天意に合して君の二病を治する能はず、其根本たる仁義を爲さんとするの心が、既に誤りて道と離るればなり、

【解義】〔愛民而爲義偃兵〕民を愛するは卽ち仁なり、上の苦二一國之民一に對するが爲めに、特に愛の字を用ふ、爲義偃兵は愛民の手段なり、「釋文」に偃息也とあり、兵を息めて戰爭を爲さゞるをいふ、〔君雖爲仁義幾且僞哉〕庚桑楚篇に至義不レ物、至仁無レ親とあり、眞の仁義は物我の隔て無く、知らず識らずに之を爲すなり、今仁義を美事なりとして之を爲すは、爲すの心ありて爲すなれば、僞に陷るを免れず、其の遂に民を害し隣國と戰ふに至るも、皆な僞より生ずるなり、故に僞の一字は武侯の道を離るゝ病根にして、徐無鬼之を救ふに誠を以てす、下文の脩二胸中之誠一の誠の字は、此の僞の字と正に相對す、〔形固造形成固有伐變固外戰〕此の三句は僞仁僞義より遂に隣國と戰ふに至るの順序を論述したるなり、本城賁曰く古來

に背ける者にて、其勝敗の如何、原因の如何は問ふ所に非ず、故に君の仁義偃兵を以て天意に合し形神の病を治せんとするは不可なり、

【通釋】武侯徐無鬼が形神二病の說を聞き、心に感ずる所あり、深く己が爲す所の非なるを知り、病狀を語らず、直ちに病を治するの術を求めんとし、又無鬼に對する前の驕傲の態を改め、敬を起して之に問うて曰く、我は先生を見んことを欲せしこと年久し、今先生幸に來りて敎へらる、何の欣びが之に過ぎん、我は此の形神の病を免れんが爲めに、從前の爲す所を改め、仁を施して人民を愛護し、政は必ず義に由りて爲し、兵を息めて戰爭を爲さゞらんと欲す、此くの如くせば以て天意に合し病を治するを得べきや如何と、徐無鬼對へて曰く、是の仁義にては、天意に合するを得ず、君の病を治すべからず、民を愛するは仁に似たれども、其結果は却て民を害するに至れば、民を愛するは是れ民を害するの始めなり、義を爲し兵を息むるは、世を平かにし民を保安すべきに似たれども、其結果は却て兵を造り戰亂を招くに至れば、義を爲し兵を息むるは是れ兵を造るの本なり、君は此の仁義偃兵よりして民を保安し、其養ひを豐にし、以て平等の天意に合し、自ら其病苦を治せんとすれば、則ち恐らくは其目的を成就すること能はざらん、其故は、凡べて善事を爲し美名を成さんとするの心は、喩へば諸惡を入れたる器物の如し、惡は必ず此の裡より出づる者なり、君は仁義を爲さんとするも、心に之を美事なりとして爲せば、恐らくは、徒に僞仁僞義となりて、眞の仁義とは爲らざらん、眞の仁義は自ら其仁義なるを知らず、民も亦仁義を施さるゝを知らざれども、僞仁僞義は心に之を爲さんとするの形あれば、又固より仁義を行ふの形迹あり、遠方の民皆仁義の政を悅び、心を歸して君に服從せんとす、是れ君の志將に成功せんとするなり、然れども有形の成には又必ず敗を作ひ、眞の成を得る者に非ず、是れ迄仁義を施さゞりし魏國が俄に變じて仁義を施し、民心を歸服せしむる時は、四隣の諸侯は其の己の國に害あるを以て、必ず外より攻め來りて戰を挑むに至らん、隣國の兵既に國境に迫れば、君はたとひ兵を息めて用ひざらんと欲するも、遂に之に應じて戰はざるを得ざるに至るべし、君はかゝる場合に立至るも、

ち上の勞君之神與形の神なり、下文の夫神者の神も亦同じ、成玄英の許與也、夫聖主神人、物我平等、必不多貪滋味而自與焉と曰へるは、神を神人と爲し、上文と應ぜず、文辭滅裂す、〔唯君所病之何也〕此句解し難し、古來諸家各說を異にし、亦皆適從すべき明解なし、本城鷹峰曰く夫姦病也までは無鬼の意を以て推して武侯形神の病を論じ、此の一句直に武侯に迫り、君の此の二病によりて困苦せらるゝの實狀果して如何、願はくば之を聞くを得んと問ふなり、

武侯曰、欲見先生久矣、吾欲愛民而爲義偃兵、其可乎、徐無鬼曰、不可、愛民、害民之始也、爲義偃兵、造兵之本也、君自此爲之、則殆不成、凡成美惡器也、君雖爲仁義、幾且僞哉、形固造形、成固有伐、變固外戰、君亦必無盛鶴列於麗譙之間、無徒驥於錙壇之宮、無藏逆於得、無以巧勝人、無以謀勝人、無以戰勝人、夫殺人之士民、兼人之土地、以養吾私與吾神者、其戰不知孰善、勝之惡乎在、

【大意】武侯仁義を施し兵を偃せて天意に合し、以て己が形神の病を治せんと曰ひ、徐無鬼は民を愛するは民を害するの始めにして、兵を偃するは兵を造るの本なれば、共に不可也と曰ひ、其理由を陳して曰く、仁義を美事なりとして之を爲すは僞仁僞義也、其爲めに仁義に形迹ありて、遂に隣國諸侯の來り寇するに至る、勢ひ此に至れば、君は兵を偃せて用ひざらんと欲するも能はず、應戰して之を拒がざるを得ざるべし、戰事は捷利を期するが常なれば、君も理非を顧みるに遑あらず、天地平等の心を以て之を視れば、戰うて人を殺し土地を幷せ其心を悅ばすは、皆天意

るなり、孟子常に好んで此術を用ふ、故に夫姦病也、故勞之は上を結び、唯君所病之何也は下を起すなり」、

【解義】〔食芧栗〕郭慶藩曰く、芧即橡也、一名栩、一名柔、一名采、其實謂之樣、今書傳、樣皆作橡、芧柔杼三字通、此篇芧栗、山木篇作杼栗と、則ち芧は橡の實なり、又齊物論篇に狙公賦芧とあれば、芧は山中の果實にて、狙猴の好んで食ふ者とす、人の常食と爲すべき者に非ず、〔厭葱韭〕厭は足なり、滿足するなり、厭き惡ふの意に非ず、「成疏」の年事衰老、勞苦厭倦、豈不欲求於滋味以養頽齡乎と曰へるは、厭字を誤解し、且つ本文の語氣を失す、〔以賓寡人久矣夫〕「釋文」に本或作擯、司馬云、擯棄也、李云、賓客也とありて、兩説を掲ぐれども、司馬に從ひ棄と訓ずるを可とす、下目に視て相手にせざるとなり、寡人は寡助の義、諸侯自ら謙するの稱なり、老子に王侯自稱孤寡と云へり、〔其寡人亦有社稷之福邪〕上の二句は無忌に就て言ひ、此の一句は武侯自身に就て言ふなり、社稷は猶ほ國家といふが如し、社は土の神稷は穀の神、國は土國に資りて人民を養ふ、故に國君社稷を祀る、遂に國の義と爲る、「禮記」祭義に建國之神位、右社稷而左宗廟とあり、「白虎通」に王者所以有社稷何、爲天下求福報功、人非土不立、非穀不食、土地廣博、不可徧敬也、五穀衆多不可一一而祭也、故封土立社、示有土尊、稷五穀之長、故封稷而祭之也、〔君曰何哉〕本城鷹峰曰く此の君の字恐らくは衍文ならん、かゝる問答の急なる處には人名を略するは文の常なり、故に答にも無鬼の名なし、且つ前後皆武侯曰とあれば、若し人名ありとすれば、亦必ず武侯曰と書すべく、こゝのみ君と改むる筈なし、以て無識者の妄增なるを知るべしと、〔登高不可以爲長居下不可以爲短〕此の二句は喩にて、居る所の高下を以て身の長短を定むべからざるを言ひ、以て君民位の異なるを以て人に貴賤ありと爲すべからざるに喩へ、然る後事實に入りて武侯を咎むるなり、成玄英の登高位爲君子、不可樂之以爲長、居卑下爲百姓、不可苦之以爲短と曰へるは、正喩を混雜して文意を失ふに似たり、從ふべからず、〔夫神者不自許也〕陸樹芝曰く、神者心之神明也、厲民自養神明之內畢竟難安、是不自許也と、此説從ふべし、神は即

と形と皆之が爲めに病むが故に、我之を勞はんとするなりと說明し、以て下節を起す、

【通釋】　徐無鬼來りて魏の武侯に謁す、武侯曰く、先生は世を避けて山林の中に隱居し、橡實栗などを食ひ、葱や韭に滿足して出て來らず、寡人を俗物とし棄てゝ顧みざりしは久しきとなり、而るに今自ら山を出でゝ此に來りしは、年老いて山林の勞苦に堪へざるが爲めか、酒肉の滋味を寡人に求めて衰軀を養はんとするが爲めか、或は然らずして、善言嘉謀を以て我國を利するあらんが爲めに來られしにて、寡人も亦社稷の幸福あるかと、徐無鬼曰く、無鬼は貧賤の家に生れて、未だ嘗て君の酒肉を飮食したることあらず、從て其味ひをも知らざれば、之を求めんとするの意なし、今我の來りしは、將に君を慰勞せんが爲めなり、君の問はるゝ如き事の爲めに非ずと、武侯之を聞き、怪みて曰く、何故にかく言ふや、寡人に就て何事を勞はんとするや、無鬼曰く、君の精神と形とを勞はんとするなり、武侯又問うて曰く、其の精神と形とを勞はんとすとは如何なる意味なるぞ、徐無鬼乃ち徐ろに之に對へて曰く、天地の萬物を養ふは公平均一にして厚薄あることなし、高き處に登りたりとて身丈け長しとすべからず、低下の地に居りたりとて身丈短しとすべからずと同じく、地位の高下によりて人に貴賤の差あるに非ざれば、其養ひも亦厚薄あるべからざる筈なり、天より見れば、君侯も庶民も皆同じ人類なり、而るに君は獨り大國の主となり、重き租稅を課して人民を苦め、以て聲色香味を貪りて耳目鼻口の慾を恣にし居らるゝは、天地の意に違へり、自ら顧みて其良心に問はゞ、心神は必ず此を以て是と爲さず、其の外慾を恣にするを許與せざるべきなり、彼の心神は衆と和平にすることを好みて、人を苦め自ら私するの姦を惡む者なり、而して君の今の行ひは卽ち人を苦め自ら私するの姦にて、心神之を惡めば則ち心神に病あり、耳目鼻口の形が心神に惡まるれば、則ち形病むなり、形神共に病む、故に我將に之を勞はんとするなり、唯君の此病によりて自ら困苦せらるゝこと如何の狀ぞ、願はくは之を聞くを得んと、〔武侯は凡庸の君に非ず、民を苦め自ら私するの非を知る、故に無鬼既に其問ひに答へて、又自ら問を發し、其答を得て、由て之に導きて道に入らしめんとす

「釋文」に司馬を引て曰く、杜塞也、逕道也と、郭慶藩曰く、藜蒿也、藋卽今所謂灰藋也、爾雅拜商藋、郭注商藋似藜、案、藜藋皆生於不治之地、其高過人、必排之而後得進、故史記仲尼弟子傳曰、排藜藋、此言杜乎鼪鼬之逕、亦極謂其高也と、則ち藜は蒿、藋は藜の種類、共に高さ人に過ぐるの草なり、鼪鼬は共に和名「イタチ」、谷中にはたゞ鼪鼬の通行する小逕あるのみなるを、藜藋又之を塞きて行き難し、極めて其荒涼にして居るに堪へざるを謂ふなり、〔踉位其空〕踉は音「ラフ」踉蹌、徐行の貌、踉蹌として其空谷中に居るを謂ふ、〔跫然〕「釋文」に崔を引いて曰く、行人之聲と、人の歩行する足音なり、〔謦欬其側者乎〕「釋文」に李を引て曰く、謦欬喩言笑也と、謦は咳の聲なり、咳聲の小なるを謦と曰ひ、大なるを欬と曰ふ、但し此にては釋文に從ひ、言笑の義と爲すべし、

徐無鬼見武侯、武侯曰、先生居山林、食芧栗、厭葱韭以賓寡人、久矣、夫今老邪、其欲干酒肉之味邪、其寡人亦有社稷之福邪、徐無鬼曰、無鬼生於貧賤、未嘗敢飮食君之酒肉、將來勞君也、君曰、何哉、奚勞寡人、曰、勞君之神與形、武侯曰、何謂邪、徐無鬼曰、天地之養也一、登高不可以爲長、居下不可以爲短、君獨爲萬乘之主、以苦一國之民、以養耳目鼻口、夫神者不自許也、夫神者、好和而惡姦、夫姦病也、故勞之、唯君所病之何也、

【大意】 前章と同じく、武侯の問ひより反對に我將に君を勞はんとすと言ひ、其の一國の民を苦めて自ら私し、耳目鼻口の樂みを恣にするは卽ち姦にて、神

如何と思ふや、此の喩の意は、人は元來道より生れ出でたる者なれば、道は人の本なり、利欲の爲めに道と離るゝも、道を慕ふの心は常に在り、離るること久しければ之を慕ふの心益〻深きは、越の流人の鄕人を慕ふと同じ、唯人自ら知らざるのみ、今吾が武侯に話せし狗馬を相するの談は、精神を全くし物外に超然たる至道の妙旨を寓せたるものなるが故に、虛空に逃れし者の忽ち兄弟親戚の情話を聞くを得たると同じく、大に悅びて笑はれしなり、其の悅びの甚しきに視て、子等が今日まで眞人の言を吾君に聞かせざりしことの久しきを知るなり、詩書禮樂や金板六弦や事功やは、徒らに越人の言語のみ、鼪鼬の往來のみ、君の爲めに齒を啓かざりしは、豈に當然の事ならずやと言うて、女商等の久しく眞人の言を進めざりしを咎めしなり、

【解義】〔子不聞夫越之流人乎〕「釋文」に曰く、越遠也、司馬云、流人有罪見流徙者也と、越を遠の義と爲す、然れども越之流人とあれば、越は地名と爲すを可とす、卽ち今の福建地方にて、戰國時代に於ては、王化の及ばざる未開の地たりしなり、流は一の刑罰の名なれども、此處にては必ずしも有罪見流徙者と爲すに及ばず、林希逸に從ひ、廣く去國流落之人と爲すべし、或は君命を奉じ、或は戰亂を避け、或は商利を逐ひ、或は仇を逃れ罪を畏れ、或は苛政に遭ひ貧窶の爲めなど、すべて鄕を去りて遠く南越に流落する人を指す、而して貶謫流徙の者固より亦其中に在り、〔去國數日〕國は城邑に同じ、全境を總ぶるの稱に非ず、鄕里を出發して數日の後をいふ、下の國中の國亦同じ、〔見所嘗見於國中者喜〕者喜の間、恐らくは而の字を脫せるならん、前後の句には皆而の字あり、此のみ省略する筈なし、且つ此處の而の字は皆則と爲して讀み、接續の詞とせず、尤も無かるべからざるなり、〔及期年也見似人者喜矣〕期年は周年なり、全一年なり、成玄英曰く、似人者似鄕里人者也と、〔滋久滋深〕滋は愈なり、〔逃虛空者〕「釋文」に司馬を引いて曰く、故壞冢處爲空虛也と、成玄英曰く、時遭暴亂、運屬飢荒、逃避波流於虛園宅、唯有藜藋野草柱塞門庭と、蓋し司馬は虛を墟と爲し、廢墟の空地と爲し或は無人の廢園宅と爲せるも、林希逸の空谷と解したるを可と爲す、〔藜藋柱乎鼪鼬之逕〕

れば久しき程、道を慕ふの心の逾深きに喩へ、空谷無人の地に在る者の俄に兄弟の情話に接して大歡喜するを以て、武侯久しく道を聞かざるが故に、無鬼の狗馬の談に悅びて笑ひしに喩へたる也、○以上の四節を合して一章とす、第一節武侯の慰勞に對して、徐無鬼我則勞於君と曰ひ、性命耳目の二病を陳して武侯を驚き迷はしめて發端し、第二節に於て狗馬の鑑定談を爲して、其迷ひを覺まし、誘きて道に入らしむ第三節は女商との問答にて下を引き起し、第四節は比喩を設けて武侯の悅び笑ひたる所以を言ふ、全章の主意は、人は到底道と離るべからず、久しく離れたる者にても、復び道に歸するを得る者なることを明かにする爲めに武侯を取りて之を論じたるなり、人を導き道に入らしむるに於て尤も有益の章といふべし、

【通釋】　徐無鬼乃ち喩を設けて武侯の悅ばれし所以を言うて曰く、子は彼の遠く南方未開の越の地方に流落する人の事を聞かざるか、鄕國を去りて南行すること數日の後の頃、忽ち舊の知り合ひの人に逢へば則ち喜ぶ、更に日を積みて十日を經、一ヶ月を經たる後は、鄕を思ふの心漸く深ければ、知り合ひの人に非ざるも、鄕國にて顏に見覺えのある人に逢へば則ち喜ぶ、一年の久しきを經るに及びては、見覺えの有る人に非ざるも、其の少しく鄕里の人に似たる人に出逢へば、之を見て大に喜ぶなり、異鄕異俗の地に流落して、日を經るに從ひ、思慕の情の益切なるは、國を去り鄕人を離るゝこと益々遠く日を經ること益久しきに從ひ、鄕人を慕ふの心益々深く切なるが爲めに非ずや、越は異俗なれども、猶ほ人の住する地なり、彼の戰亂若くは其他の故を以て、逃れて無人の空谷に居る者に至りては、更に越の流人の比にあらず、其地は草木繁茂して、僅に鼪鼬などの往來する小逕あるのみなるに、其れすら丈高き藜藋生ひ茂りて之を塞ぐ、かゝる荒凉の境なるに踉踉として、其の谷中の無人の地に居り、寂寥に堪えず、是の時に於ては人を慕ふこと益々切にして、其の鄕人たると他鄕人たるとを問はず、之を見んことを願ひ、未だ其形を見るに至らず、ただ人の步行の足音を聞くのみにて則ち喜ぶ、而るを況や此際忽ち兄弟親戚の其側に來りて言笑することあるに於てをや、其の歡喜の果して

悅と爲して讀む、故に「釋文」に音悅とあり、其餘は皆辨說の說なり、〔橫說之從說之〕從は縱に同じ、成玄英曰く、橫遠也、從近也、武侯好武而惡文、故以兵法爲從、六經爲橫也と、胡文英曰く、橫說之謂鋪陳其事、從說之謂揚厲其說と、諸家多く此二說を取れども、共に非なり、林希逸の說獨り從ふべし、今左に之を譯載せん、曰く、從橫は反覆して鋪說するの意也、詩書を橫となし六弢を從と爲すに泥むべからず、〔金板六弢〕「釋文」に司馬崔云、金版六弢皆周書篇名或曰、秘讖と、林希逸曰く、此書藏於朝廷、故曰金版、猶曰金匱石室之書也と、書籍は通常竹簡に漆書すれども、六弢は貴重の書なるが故に、特に金板に鐫めありと解すべし、書名と爲すも亦通ず、たゞ猶曰金匱石室之書の金匱石室は宗周天子の書庫なり、天子の藏書なれば、魏國に在るべき筈なし、從ふべからず、六弢は「釋文」に本又作六韜、謂太公六韜文武虎豹龍犬也とあり、文韜武韜虎韜豹韜龍韜犬韜を總稱して六韜と曰ふ、太公の兵書なり、〔啓齒〕司馬彪曰く、笑ふ也と、大に笑へば則ち口開きて齒啓く、〔吾直告之吾相狗馬耳〕直は唯なり、古書例多し、其の說、王引之の經傳釋詞に見ゆ、「タヾチニ」と讀むべからず、

曰、子不聞夫越之流人乎、去國數日、見其所知而喜、去國旬月、見所嘗見於國中者喜、及期年也、見似人者而喜矣、不亦去人滋久、思人滋深乎、夫逃虛空者、藜藋柱乎鼪鼬之逕、踉位其空、聞人足音跫然而喜矣、而況乎昆弟親戚之謦欬其側者乎、久矣夫莫以眞人之言謦欬吾君之側乎、

【大意】　徐無鬼喩を設けて、君が狗馬を相するの談を悅ばれし理由を示すなり、越の流人の日久しく地遠ざかるに從ひ、鄕を慕ふの情逾〻深く、從來疎遠の人をも喜ぶに至るを以て、道を聞かざること久しけ

ば性命の情以て固く、收視返聽すれば、耳目の用疲れず、內外の病皆愈ゆべきを知る、是れ武侯の大に悅びて笑ふ所以なり、宣穎は曰く以狗馬之眞動人之眞、是從武侯之所好通之と、

徐無鬼出、女商曰、先生獨何以說吾君乎、吾所以說吾君者、橫說之、則以詩書禮樂、從說之、則以金板六弢、奉事而大有功者不可爲數、而吾君未嘗啓齒、今先生何以說吾君、使吾君說若此乎、徐無鬼曰、吾直告之吾相狗馬耳、女商曰、若是乎、

【大意】　女商武侯の悅び笑ふを見て、吾が君は吾れ之に說くに聖經を以てし、兵法を以てするも、又功業を奏して君國に益するも、未だ嘗て笑はれしことなきに先生は何を說きて、斯くも悅び笑はしめしやと、徐無鬼に問ひ、無鬼は狗馬の鑑定談を爲せしのみと答へ、女商猶疑うて更に問ふなり、

【通釋】　談了りて、無鬼辭して出でたり、後に女商無鬼に問ふて曰く、先生は獨り如何なる事を以て吾が君に說かれしや、吾の是までに吾が君に說きし所の者橫に說くには詩禮樂孔子六經の文を以てし、縱に說くには金板に書したる太公の兵法六韜を以てし、文武兩道說き進めて遺すことなし、又內政外戰の事を奉じて大に功ありしことも多くして數ふべからざるなり、而るに吾君は未だ嘗て悅びて笑はれしことあらず、今先生は如何なる事を以て吾が君に說きて、吾が君をして悅び笑ふこと此くの如くならしめしやと、徐無鬼對へて曰く、吾は唯君に吾の狗を鑑定し馬を鑑定することを話せしのみなりと、女商更に其れだけの事なりやと曰ひ、猶疑うて之を問ふなり、

【解義】　〔先生獨何以說吾君乎〕　女商已に君を悅ばしむる能はず、其他の群臣も亦然り、而して唯徐無鬼のみは之をして悅びて大に笑はしめたり、故に獨の字を用ふ、說は、「釋文」に司馬作悅とあり、非なり、此の一節中六箇の說字、最後の使吾君說の說のみは

で食ひ、腹の満てる間は捕へざるを言ふ、〔若亡其一〕「釋文」に曰く、一は身也、謂精神不動、若無其身也と、又曰く、言喪其耦也と、齊物論篇に嗒焉似喪其耦、及び吾喪我とあるは、亡其一と同意なり、蓋し性は人の主なり、故に性より指して身を其一と謂ふなり、林希逸曰く、一生之性也、其生也如死狗然、故曰若亡其一、猶鷄之似木雞也と、紀渻子の木雞（前篇に見ゆ）に似るが如しと爲すは甚だ善し、然れども一生之性也と爲せるは、恐らく不可なり、木雞は前の達生篇に見ゆ、〔直者中繩—圓者中規〕「釋文」に司馬を引いて曰く、直謂馬齒、曲謂背上、方謂頭、圓謂目と、成玄英も之に從へり、林希逸は馬之中規矩繩墨、言其身件件合法、故借方圓曲直以言之、不必就馬身上泥而求之と曰ひ、必ずしも齒背頭目に配するを要せずと爲せしは、少しく司馬に異なれども、其の馬身に就て言ふは同じ、林雲銘曰く、言其動合渠度也、舊分齒背頭目、太泥了と、馬の歩行動作に就き、其の馳驟し折旋するの正しき、皆鉤繩規矩に合ひ、法則に稱ふを言ふと爲せるなり、上の狗の三等及び下の天下馬、皆其動作に就いて言ふを觀れば、國馬のみ形體に就いて言ふの理なし、司馬の説誤る、〔若卹若失〕「釋文」に若失の二字を出し、音逸、司馬本作佚とあり、失に作るを宜しとす、「釋文」又李頤を引いて曰く、卹失皆驚悚若飛也と、成玄英曰く、眼自顧視、既似憂虞、蹄足緩疏、又如奔佚と、皆文字を逐うて强ひて解を下せるにて穩當ならず、胡文英曰く、卹如卹焉若有亡之卹と、是れ卹を以て物を亡失せし時の有様の形容と爲す、從ふべきに似たり、〔超軼絶塵〕成玄英曰く、軼過也、馳走迅速、超過群馬、疾若迅風、塵埃遠隔と、馬馳すれば塵起る、而して塵の起る間に馬は已に遠く前方に在り、故に絶塵と曰ふ、其馳するの極めて神速なるを言ふなり、田子方篇には奔逸絶塵とあり、〔武侯大説而笑〕武侯は蓋し凡庸の君に非ず、唯富貴に居り、俗世の名聲驕奢に習うて、未だ道を聞かざるのみ、徐無鬼之を知る、故に先づ我則勞於君、君有何勞於我と曰ひて内外病の説を進む、武侯果して悵然として之を思ひ、而して未だ其の所以を解するを得ず、今、上狗天下馬の神を凝らし氣を守るの旨を聞いて、少しく至道の妙を味ふを得、性を全くし眞を保て

が狗の品質を鑑定するに若かず、馬の品質鑑定は尤も得意とする所なれば、請ふ更に之を申上げん、其馳驟行動に於て、直行するときは、眞直にして墨繩に合ひ、曲るべきときには眞曲にして鉤に合ひ、方なるべきときには、正しく直角に折れて矩に合ひ、圓く旋るべきときには眞圓に旋りて規に合ふ、此の如く善く訓錬せられて法則に協ひし馬は、是れ一國に於て優れたる馬にて、國馬と稱する也、然れ共國馬は未だ天下に於て優れたる天下の馬に及ばざる也、天下の馬なる者は、自然に完全なる材料を具有し居りて、訓錬服習するを要せず、而して其の外觀に於ては、沈靜して憂ふる所ある者の如く、失ふ所ある者の如く、又物我を同視して、其身を忘れたる者の如し、是くの如き馬は、一旦馳せ出すときは、他の群馬を飛び越して奔り、其迅速なること塵を絶ちて、塵埃なき處を行くが如く、又其遂に何處まで馳せ行くか、其止る所を知らざるなりと、蓋し國馬は國士に喩へ、天下の馬は有道の眞人に喩へて、無鬼自ら之に居るなり、而して又上質の狗と天下の馬との、精神を全くして、形體の外に超然たることは、道の至妙なることを之に寓せて說きたるに、武侯は是に於て、前に無鬼に性情耳目內外の病を聞きて、悵然沈思すれとも未だ考へ得ざりし所を得て、無鬼の我將勞君、君有何勞於我と言ひし譯も分りたれば、武侯は大に悅びて笑はれたり、

【解義】〔嘗語君吾相狗也〕嘗は試なり、相は相人の相にて、之を視て品質の善惡を定むること、卽ち鑑定なり、無鬼が相する所の狗は、蓋し獵犬を謂ふ、〔執飽而已〕「成疏」は執守情志唯貪飽食と曰ふ、是れ飽きて足るまで食はんとの志を執り守り、甚だ貪るを言ふなり、而して「釋文」に司馬を引いて曰く、以執字絕句、云放下之能執禽也と、「執り飽きて止む」と訓讀し、之を野に放てば、能く禽を搏ち執つて、飽くまで食ふを言ふ、此說亦通ず、〔是狸德也〕「釋文」に曰く、謂貪如狐狸也と、是れ狸を字の如く「たぬき」と爲したるなり、兪樾曰く、廣雅釋獸狸貓也、貓之捕鼠、飽而止矣、故曰、是狸德也、秋水篇曰、騏驥驊騮、一日而馳千里、捕鼠不如狸狌、此本書以狸爲貓之證、御覽引尸子曰、使牛捕鼠、不如貓狌之捷、莊子言狸狌、尸子言貓狌、一也と、此の狸を貓と爲して讀むを宜しとす、釋文誤る、貓の鼠を捕つて飽くま

言に感ずる所ありて自ら恨みて傷悲するなり、郭象の不說其言と曰へるは、全章の意を得ざるの說なり、取るに足らず、

少焉徐無鬼曰、嘗語君吾相狗也、下之質執飽而止、是狸德也、中之質若視日、上之質若亡其一、吾相狗又不若吾相馬也、吾相馬、直者中繩、曲者中鉤、方者中矩、圓者中規、是國馬也、而未若天下馬也、天下馬有成材、若卹若佚、若喪其一、若是者、超軼絕塵、不知其所、武侯大說而笑、

【大意】無鬼其の狗馬の鑑定を語げて曰く、狗の下質は、唯飽くを求むるのみ、中は常に功を立てんことを思ひ、上は性情を保ちて自然に安んじ、其身を忘るゝ者の如し、馬の國馬は、馳驟折旋一々法に合ひ、天下の馬は天成の材力ありて、訓練を待たず、精神靜定して、其身を忘るゝ者の如し、而して其奔馳することは、國馬遠く之に及ばずと、以て暗に前の武侯の語に答へ、兼ねて道の至妙なることを諷せしかば、武侯は大に悅びて笑はれたり、

【通釋】兩人默して對坐すること少時の後、徐無鬼話頭を轉じて曰く、君の悅び玉はざるや否やを知らざれ共、試みに吾の狗の品質を鑑定することを、申上げんとす、性質下等の狗は、甚だ貪つて飽食するのみ飽けば則ち止めて復働くことなし、是れ猫の性と同じき者なり、中質の狗は、意氣高遠にして、常に日を望むが如く首を仰げ、飽くことを求めずして、大に禽を捕へんとす、上質の狗は、神氣靜定して、其身あるをも忘れし者の如し、〔蓋し下質は人の祿を求むるが爲めに仕ふる者に喩へ、中質は人の豪邁にして、功業を立て名聲を成さんとする者に喩へ、上質は人の性命を保全し、形體を外にして、世に求むる所なき者に喩へ、暗に自ら比して、武侯の苦於山林之勞、願乃肯見於寡人の輕侮の語に答へたるなり〕、されど、吾

の容貌甚だ衰弱して疲れ病あり、思ふに久しく山林
に居りて樵牧の勞に苦み、其勤苦を厭ふが故に、是ま
で交りを避け居りし俗界に降り來りて寡人に謁見す
るかと、〔此語は、慰勞する中に、先生の來りしは我に
就て祿養を求めんとするかとの語氣ありて、頗る之
を輕侮するの意見ゆ、能く貴人驕傲の狀を寫せり〕、徐
無鬼之に對へて曰く、君は我を慰勞せらるるとも、我
こそ君を慰勞せんとするなり、我には病なければ、君
は何も我を慰勞せらるゝ筈なし、其故は、君若し嗜欲
する所を十分に滿たし遂げ、好き嫌ひを增長して意
のまゝに爲さんとせらるれば、其爲めに性命の實は
亂されて、必ず病むことならん、之に反し、若し嗜欲
を退け好惡を引き去りて、性命を保全せんとせらる
れば、其爲めに耳に音樂を聽き目に美色を見るの樂
み無くして、耳目は必ず病むことならん、外を恣に
せんとすれば內病み、內を保たんとすれば外病み、內
外何れか困苦すればこそ、我は君を慰勞せんとする
なり、我には病なし、君は何も慰勞せらるゝ筈なしと
〔後の相狗相馬の談は、此の武侯の病を去るの治術な
り、且つ先づ對手の意外に出でゝ一驚を喫せしめ、然
る後に吾が言はんと欲する所を言へば、甚だ聽かれ
易し、戰國遊說の士常に此くの如し、是れ人を說くの
要訣なり、是に於て武侯は悵然と傷み愁ふる者の如
くにして、默して對ふる無かりき、蓋し無鬼の言深く
其心に當ることありしなり〕

【解義】〔徐無鬼因女商見魏武侯〕徐無鬼、姓は徐、
名は無鬼なり、「釋文」に曰く、緡山人、魏之隱士也と、
女商、姓は女、名は商、魏の宰臣なり、武侯名は擊、文
侯の子なり、〔山林之勞〕此の一節中六箇の勞の字、
此の一字のみ勞苦の義にして、他の五箇は皆慰勞也、
〔盈耆欲長好惡〕盈は滿なり、耆は嗜に同じ、盈耆欲
は美衣豐食音樂好色を恣にするを謂ひ、長好惡は安
逸を好み勤苦靜正を惡み嫌うて意のまゝにするを謂
ふ、〔性命之情病矣〕性命は人の天より受けたる德を
謂ふ、情は誠なり、實なり、數〻前篇に見ゆ、病は之を
毀損するを謂ふ、但し下句の耳目病矣の病は樂ます
の義と見るべし、〔黜耆欲擊好惡〕黜は退なり、擊は
「釋文」に崔譔を引いて曰く、引去也と、音「ケン」、「超
然不對」「釋文」に司馬彪を引いて曰く、超然猶悵然
也とあり、而して「說文」に悵望恨也とあれば、無鬼の

は卽ち神なり、順心は徹志之勃、解心之謬なり、〔有爲也欲當〕爲は前の性之動謂之爲、爲之僞謂之失の爲にして、當は每發而不當の當なり、當は道に合するを謂ふ、不當は卽ち失なり、〔不得已〕此の三字は數〻前篇に出でたる文字にして、老莊學の要旨なり、此篇に於ても、結尾に於て之を出だし、人は宜しく知を用ひずして不得已の無爲に從ふべきを論ず、故に篇中、知の小にして用ふるに足らざるを言ひ、生死を論じて不得已して生れ、不得已して死し、安んじて化に從ひ、之が爲めに哀樂すべからざるを言ふなり、生死且つ然り、況や其他をや、

徐無鬼第二十四

此篇も亦天を知り人を知り、知を去りて眞に任ずべきを論ず、分つて三章と爲す、篇首の三字を摘出して名としたるのみにて、意義なし、

徐無鬼因女商見魏武侯、武侯勞之曰、先生病矣、苦於山林之勞、顧乃肯見於寡人、徐無鬼曰、我則勞於君、君有何勞於我、君將盈耆欲長好惡、則性命之情病矣、君將黜耆欲掔好惡、則耳目病矣、我將勞君、君有何勞於我、武侯超然不對、

【大意】徐無鬼が魏の武侯に見え、武侯の之を勞ひしに對へて、我は病無ければ、君に勞はるゝ筈なし、君こそ嗜欲好惡に纏束せられて病あれば、我之を勞はんとすと曰うて、先づ武侯を驚かすなり、

【通釋】隱士の徐無鬼が魏の臣女商の披露に因りて魏君武侯に謁見したり、徐無鬼は是まで山中に隱棲し居りて俗界に交らざりし故、武侯が之を見んと欲するも、見るを得ざりしに、今無鬼自ら謁見を求め來りしかば、武侯は悅び且つ得意の色あり、曰く、先生

發することあるも、私情より發するに非ずして、心に怒らざれば、其怒りたるや、自然に發し、已を得ざる者にて、怒らざるに出でたる怒りなり、侮られて怒らざる者の怒りなり、此怒りはいくら多くとも害なし、此と同じく、爲すことあるも、毫も私知を用ふることなければ、其爲たるや、自然に發し、已むを得ざる者にて、無爲に出でたる爲也、動て爲す所を知らざるの爲なり、此爲はいくら多くとも害なし、此に至らんとするには、外物に胸中を亂されず、靜正虛明ならんことを要す、而して其靜ならんことを欲すれば、則ち氣を平かにし、前に述べたる四六の害を入るべからず、我心の神明と合せんことを欲すれば、則ち心を和順にして、外物に糾繆せらるべからず、世に處し事を爲すありて、其が道德の外に出です、皆正當ならんことを欲すれば、則ち已むを得ざるの範圍に緣り順ふべし、已むを得ざるは人知を用ひざる自然の爲なれば、其爲す所皆正當にして、聖人の道に合するなり、

【解義】〔出怒而不怒則怒出不怒矣〕此の二句は客なり、前の侮之而不怒の怒を受けて、後の無爲を引起すなり、四箇の怒の字に內外の別あり、第一第三の怒は言行に現出したる怒りにして、第二第四は心中の怒りなり、心中に怒りあれば、是れ情に制せられたる者なれども、心に怒らざるの怒りは、情を去りたる不得已の怒りなり、此處諸家誤解多し、陸樹芝の若當可怒之時、心已出於怒、而强制不怒、則雖不怒而怒之之心自在也、怒不卽存於不怒之中乎と曰ひ王先謙の出於人所怒之事、而我不怒、則有時而怒、仍自不怒出、此孟子所謂文王一怒、武王一怒也と曰ふが如き、皆莊子の宗旨に非ず、此の句の誤解は、又施ひて下の無爲の句に及ぶ、故に特に擧げて之を示す、〔出爲無爲則爲出於無爲〕此の二句主なり、四箇の爲の字、亦內外の別あり、第一第三は動作に現出したる爲にして、第二第四は心中の爲なり、中に爲さんと欲する心あるは、是れ知に束縛せられたる者なれども、中に爲さんと欲する心なければ知を去りたる不得已の爲なり、不得已の爲は、爲さざる無しと雖も猶是れ無爲なり、〔欲靜則平氣〕靜は前の正則靜、靜則明の靜なり、又上文に云へる字泰定なり、平氣は不盪胸中なり、〔欲神則順心〕欲神は心に神明あらんことを欲するなり、前の發乎天光及び天助之

雖反覆讋我、而我不答、正侮之而不怒之實也と、是れ讋を讋と通じて、言不止、若くは忌也の義を取り、多言を加へて侮辱するの意と爲すなり、其他一々列擧し難し、要するに諸解皆望文生義に非ざれば則ち牽强附會を免れず、疑ふらくは此處には誤脱あるならん、されば强ひて解釋せざるを可と爲す、今姑く胡文英の説に從ふ、但し此説も稍々他説に優るを覺ゆるのみにて、之を的確と信ずるには非ず、而の字は則に通じて讀む、

出怒不怒、則怒出於不怒矣、出爲無爲、則爲出於無爲矣、欲靜則平氣、欲神則順心、有爲也而欲當、則緣於不得已、不得已之類、聖人之道、

【大意】　前節の侮之而不怒を承け、不怒の怒より無爲の爲を説き起す、不怒の怒無爲の爲は、皆已むを得ざるに出でゝ、自然に合する者なり、故に終に有爲にして其爲の正當ならんことを欲すれば已むを得ざるに緣る、已むを得ざるの類は、何事にても皆聖人の道なりと斷じ、前の聖人工乎天に應じて此章を結ぶ

○羿工乎中微より此までの三節を合して一章と爲す第一節は天と人との分を明かにして、聖人卽ち全人を論じ、第二節は事實を擧げて之を證明し、常人の知工は好む所ある者に及ぶのみにて甚小なれども、聖人は無名にして反つて天下を籠罩し、人を忘れて天に合するを言ひ、第三節は無爲の爲を論じ、人の世に處し、有爲にして當らざること無からんことを欲すれば、已むを得ざるに緣るべきを言ひ、已むを得ざるの爲は天と合するの爲なれば、卽ち無爲にして聖人の道なりと斷じて此章を結ぶ、故に此一章は、人爲の知巧を去りて天と合する聖人の無爲に入るべきを論じたるなり、不得已の三字は此一章の首腦、又全篇の首腦にして、庚桑楚の章の能兒子乎は卽ち不得已に外ならず、其他、語語、前の諸章に照應じて之を結ぶ、故に此一章は又全篇の總收結と謂ふべし、

【通釋】　侮られて怒るの怒りの如きは、是れ情より發するの怒りなれども、茲に人あり、時として怒りを

とは容易に之を得たるを謂ふまでにて、重要の意味あるに非ず、尙後の所好の解を參考すべし、〔以其所好籠之〕此節の「郭注」「成疏」「陸釋」皆誤る、其の所好の二字を誤解せるを以てなり、陳壽昌の說獨り正鵠を得たり、曰く、因伊與百里本有志於王覇之業、故得投其所好以爲籠耳、人也、非天也と、崔の好む所は餌、伊尹百里奚の好む所は王覇の功業に在ることは明白の事實なるが故に、本文中に特に之を出ださず、此に所好の二字を點明せるのみ、而るに之を察せずして、反つて庖人と五羊皮とに拘はりて無稽の說を造るに至るなり、〔介者移畫外非譽也〕郭象曰く、畫所以飾容貌也、刖者之貌、既以虧殘、則不復以好醜在懷、故移而棄之と、郭は蓋し畫を美服、移を移と解したるならん、既に刑せられて一本足となりたる上は、美服を纏うて容貌を修飾するに意なしと言ふなり、崔譔は曰く、移畫不拘法度也と、兪樾之を判して曰く、當從崔說、漢書司馬相如傳注、痑自放縱也、與此移字義同、穀梁桓六年傳、以其畫我、公羊傳作化我、何注行過無禮謂之化、畫義蓋同、人既刖足、不自顧惜、非譽皆所不計、故不拘法度と、崔說を取り、移を放縱、畫を無禮の義と爲し、既に刑罰を受け、身體まで毀傷せられたる上は、世の毀譽を度外にして、易く法度を犯すと解するなり、本文外に非譽也を以て移畫の理由と爲すより見れば、崔說大に適切なるを覺ゆ、故に今之に從ふ、非譽は譏譽に同じ

〔胥靡〕「釋文」に司馬を引て曰く、刑徒人と、〔復謵不餽而忘人〕「釋文」に餽元嘉本作愧とあり、復謵不餽の四字は、古來諸家の說紛々一ならず、郭象の不識人之所惜と曰ふの本文を解せざるを始め、陸成二家の如きは徒に字を逐うて之を解し、前後文と接續せず別の說話と爲り、文章を滅裂せしむるのみ、林希逸は曰く、復反覆也、猶易之反復道也、謵習熟也、不餽者不以遺予於人也、言此道在己、不是賣貨、但知爲己而無爲人之心、則忘人矣、忘人則在我者純乎天矣、故曰天人、謵與習同、徐無鬼篇有曰、我必賣之、彼故鬻之、觀此可知不餽之意と、郭嵩燾は曰く、說文讋失氣言也、謵言讋謵也、復謵謂人語言慴伏以下我、以物與人曰餽、以言語餉人亦曰餽、不餽謂不報謝、外非譽遺死生忘己者也、復謵不餽忘人者也と、胡文英は曰く、復反覆也、謵讋通、餽遺也、人

し、共に其力に頼りて王覇の業を成したり、然れども是れ羿の雀を得ると同く、伊尹と百里奚と皆固と功業を建てんと欲するの心ありて殷湯秦穆に近づき來れるによりて之を得たるのみ、天下の聖賢は此二人のみにあらざるなり、故に禽獸にせよ、人にせよ、其の好む所の物を以て之を誘ひ、引寄せて籠に入るゝに非ざれば得る能はず、誘ふべき好物なき者にして、之を捕へて籠中に入れ得べき者は有ることとなし、一旦刑罰を受けて刖られたる者の、法度に拘はらず、放縱にして輕々しく罪を犯すは、其身既に毀損せられたる所謂前科者なれば、自重心に乏しく、世の誹譏と名譽とを度外して之を顧みざればなり、罪囚の懲役人が高き危險なる處に登りても懼れざるは、其心既に死と生とを忘るれば也、此くの如く介者胥靡すら非譽を外にし死生を遺るれば、常人の爲さゞる所、爲す能はざる所を爲して、人に束縛せらるゝことなし、刖者胥靡は刑罰の爲めに非譽を外にし死生を遺るゝ者なれば、猶言ふに足らず、受刑者に非ずして、人の最も重んずる毀譽榮辱を外にし、反復して屢惡言を加へ、侮辱せらるゝことあるも、肯て之に答へず、棄てゝ顧みざる者の如きは則ち是れ人知を以て爲す所のすべての事を忘れたる者なり、人知を忘れて、一切の事盡く自然に任すれば、天人卽ち形は人なるも其心は天に合するの人と爲る、故に之を尊敬すれども喜ばず、之を侮辱すれども怒らず、毀譽榮辱を以て心を動かさゞることは、唯人を忘れ天和と同一に爲りたる人のみ然りと爲すなり、既に毀譽榮辱を度外にし、人知を斥けて忘るゝ者は、是れ天下を以て籠と爲すの大度量あり、而して名無きの聖人なり、豈堯舜湯武秦穆輩人工に拘々する者の比すべき所ならんや、

【解義】〔湯以胞人籠伊尹〕「釋文」に胞本又作庖とあり、盧文弨は胞與庖通と曰ひ、禮記の注を引て之を證せり、籠はたゞ得るの意と爲して見るべし、前文以天下爲之籠の籠を受けて面白く用ひたるのみ、伊尹及び百里奚の事は孟子其他の書に見えて、人の皆知る所なれば解を略す、たゞ一言せざるべからざるは「釋文」に伊尹好廚、故湯用爲庖人也、百里好五色皮裘、故因其所好也とあり、後の諸家多く之に從へども、此說は後文に以其所好籠之の語あるに拘はりたる說にて、根據なき妄說なり、庖人と五羊皮

作り出せる吾天なり、故に全人は之に牽はず、人は卽ち拙乎人の人にて、知術技巧を謂ふなり、

一雀適羿、羿必得之、威也、以天下爲之籠、則雀無所逃、是故湯以胞人籠伊尹、秦穆公以五羊之皮籠百里奚、是故非以其所好籠之而可得者、無有也、介者移畫外非譽也、胥靡登高而不懼、遺死生也、夫復謵不餽而忘人、忘人因以爲天人矣、故敬之而不喜、侮之而不怒者、唯同乎天和者爲然、

【大意】 羿の善射も來り近づかざるの雀を得る能はず、天下を以て籠と爲せば、天下の雀皆籠中に在り、是れ工乎人の功は甚小にして、工乎天の功は甚大なり、般湯秦穆の伊尹百里奚を得たるは、以て羿の雀を得るに比すべく、物の好む所を以て之を誘致して得るのみにて、其功甚小なり、故に好む所なき者は、介者胥靡の如き者と雖も、復謵譽死生を以て之を畏す能はざるなり、夫人を忘れて天和に同ずる者は工乎天にして、卽ち天下を以て籠と爲す者なりと、事實を擧げて前節を證するなり、

【通釋】 若し一羽の雀が羿の前に適くことあれば、羿は必ず射取りて之を逃すことなし、其射術の威力に由るなり、蓋し雀の人に來り近づくは其の好む所の餌食を求めんが爲めにして、羿の必ず之を得るは、其善射の威稱すべしと雖も、雀にして來り近づかざれば、其善射を施すに由なかるべし、故に羿が得る所の雀は僅々限りあるなり、射技は善くせずとも、天下を以て一の大なる鳥籠と見做し居れば、天下の雀は一羽も殘らず籠中に在りて逃れ出づる所なし、是れ卽ち聖人工乎天而拙乎人なるものなり、是の故に般の湯王や秦の穆公は人を擧げ用ゆるに工みにして湯は庖廚を掌る微臣中より伊尹を得て輔相と爲し、穆公は五疋の羊と交換して百里奚を得て國政を委任

聖人なり、郭象の意蓋し此くの如し、大に本文の意を得たり、後人之を取らず、反つて本文を誤解し、聖人と全人とを分ち、全人を以て聖人よりも尚一層上等の人と爲す、陸樹芝の聖人因任自然能全其天矣、而未能自忘其天、使人幷忘其天、是拙于人也、惟全人則自葆其天、而幷不自知其葆乎天、使人亦相忘于其天、是工于天而卽拙于人矣、聖人皆造其極、而全人又聖人之至、如清任和皆聖、而集大成者乃其全也と曰へるが如き是れなり、其他玄英及び林希逸王先謙の如きも、皆陸氏と同く誤解たるを免れず、若し聖人全人を分ちて等級あるの稱と爲すときは、此章の末尾に有爲也欲當、則緣於不得已、不得已之類聖人之道とある聖人と撞着して解すべからざるに至る、本書中往々聖人を至人神人の下位に置きて立論することあれども、此は世俗に稱する堯舜孔子等を指して、其の知を用ひ天眞を毀ふを譏りたるにて、此章の如き全性葆眞して工乎天なる聖人を譏ることなし、王先謙の聖人謂堯舜以下、全人謂伏羲以上と曰ふは、本文中の何を認めて堯舜の有爲に類すと爲すか、本文の聖人には毫も知を用ひて天眞を毀ふの事なきに非ずや、且つ文章上より見るも、前後矛盾して文を成さゞるに至るをや、妄解も亦甚しと謂ふべし、「惟蟲能蟲惟蟲能天」「釋文」に一本唯作雖、下句亦爾とあり、郭慶藩は之を取りて曰く、兩唯字、當從釋文作雖、唯古或借作雖と、此說に從へば、雖蟲能蟲、雖蟲能天と訓し、微なる蟲と雖も、蟲たるの自然の性に安んじて其他を知らず、其の性に安んじて知らざる所が、蟲たりとは雖も能く天に合するなりと、意義亦通ず、姑く錄して參考に供す、「全人惡天惡人之天」惡の字は、「成疏」を始め諸家多く「ニクム」と訓ず、是れ釋文に烏路反とあるに從ふなり、然れども天は卽ち道なり、自然なり、全人天を惡むの理なし、故に多く言を費やして牽强し、猶人を首肯せしめ難し、郭崇燾曰く、惡當爲汪胡切、與烏同、釋文烏路反者誤と、陳壽昌も亦曰く、惡何也、惡在爲天、惡在爲由人之天、謂皆不知而任之也と、此說殊に平易明瞭にして意義を得たるを覺ゆ、故に之を取る、「吾天乎人乎」吾の字人の字の上、共に惡のあるべきを省略したるなり、儒敎に於ても天を尊みて道の本源となせども、老莊の所謂天に非ず、是れ儒家自ら

夫の天に工にして、又人知を用ひず拙に安んじて、人の天良を全くすることは、唯全德の人のみ之を能くするなり、彼の蟲は能く蟲の性に率ひて、飛ぶべき者は飛び、爬ふべき者は爬ひ、鳴くべき者は鳴き、敢て他に倣うて其本能を毀ふことなし、是れ蟲は能く蟲の天に率ふなり、人にして妄に私知を用ひ、矯僞日に起りて、天に率ふこと能はざるは、蟲にだも若かずと謂ふべし、全人は蟲の天に安んずると同じく、知らず識らず天に合するなり、何ぞ天に率ふを知らん、又何ぞ自ら天に率はんと欲するの心あらんや、況や眞の天にあらずして、人の自ら認めて天となせる僞天に率はんや、又況や人の知巧に任せんや、常人と全人との別、一に人と天とに在るのみ、

【解義】〔羿工乎中微〕成玄英曰く、羿古之善射人、工巧也と、又曰く、羿彎弓放矢、工中前物、盡射家之微妙と林希逸も亦曰く、微妙也、射之中、至於微妙と、是れ工於中微の四字を中ることとの微なるに工みと讀まざるべからず、陸樹芝の羿の射能中微物と曰ひ、微小の義と爲すの穩なるに若かず、〔拙乎使人無己譽〕逍遙遊篇に聖人無名の語あり、又此篇の前文にも券內者行乎無名とあり、此節を解するには、此語を念頭に置くを要す、聖人は盛德あれども人をして之を知らしめず、故に名無し、是れ天に工なるなり、羿、射技を善くし、從つて善射の名あれば、是れ人に工にして天に拙なるなり、參〔工乎天而俍乎人者惟全人能之〕郭象曰く、工於天即俍於人矣、謂之全人、全人則聖人也と、解し得て甚だ的確と謂ふべし、たゞ語甚だ簡約なるが爲めに「成疏」には、俍善也、全人神人也、夫巧合天然、善能晦迹、澤及萬世、而日用不知者、其神人之謂乎、神人無功、故能之耳と曰ひて、全く郭注の意を失へるに似たり、因て左に正しく郭注の意を敷衍すへし、俍は「釋文」にて音良とあり、音同じければ其義亦同じきは訓詁の正則なり、故に俍は孟子の良知良能の良と同意義に訓み、人の自然に具有する德なり、性なりとす、拙乎人の技術に拙なるを轉じて其技術に拙なる所が乃ち人の德性を保全して之に率ふ者なりと爲し、改めて俍乎人と爲すなり、其の德性を保全して之に率ふは又即ち工乎天なるなり、郭の工於天即俍於人矣と曰ふは是を以てなり、全人は全德の人、德性を保全するの人は即ち

故不レ亂ニと曰へるは正面より此意を說きたるなり、以不得已と无非我とは、語異にして其意同じく、從て德と治とは彼我內外の相反するが如くなれども、其實は亦相順ふなり、

○蹍市人之足の節より此に至るまでの三節を合して一章とす、第一節は世俗貴ぶ所の仁義禮知信は道德を失ひたるより生ずる者にて、其至れる者に非ざるを言ひ、第二節は志心道德を養うて至仁至義至禮至知至信、即ち無爲にして爲さゞる無きに至るには、之が害と爲る者を除去すべきを言ひ、第三節は人の道德を失ふは、要するに知を用ひて外物と接するに由るを言ひ、動くに已むを得ざるを以てすれば是れ即ち無爲にして爲さゞる無き者、又即ち德なりと斷じ、暗に仁義禮知信の至れる者も、亦此の動くに已むを得ざるを以てするに外ならずと論結するなり、

羿工ニレ乎中ニレ微ニ而拙ニレ乎使ルニレ人無ラ一レ已ニ譽ニ、聖人工ニレ乎天ニ而拙ニレ乎人ニ、夫工ニレ乎天ニ而俍ニレ乎人ニ者、唯全人能レ之、唯蟲能レ蟲、唯蟲能レ天、全人惡レ天、惡ンソ人之天、而況ヤ吾天乎、人乎、

【大意】　羿の射を善くするは人工にして、聖人の名なきは天工なり、然るに人は羿の技巧を稱するを知りて、無名の聖人と爲ることを希はざるは、蟲の能く其天性に安んじ、知巧を用ひて他に倣はざるにだも若かず、彼の聖人即ち全人は知らず識らず天に安んずるのみにて、天に安んぜんとするの念すらもなし、況や吾天をや、況や人知をや、此一節先づ天人の分を明かにし、聖人即ち全人を論じて後を起すなり、

【通釋】　羿は古の弓射ることを善くせし人にて、如何ほど微小なる物にても能く射中てることには巧妙なれども、羿に斯の妙技あれば、從つて世人皆之を譽めて射を善くするの人と爲す、羿は人をして其善射を忘れ、己を譽むること無からしむる能はず、聖人は自然に安んずるを以て、能く其天を全くして、人をして其盛德を譽めしめざれども、羿の射を善くして能く微物に中つるの技巧に及ばず、是れ羿は人に工にして天に拙く、聖人は天に工にして人に拙きなり、

と爲すとの解釋は從ふべからず、其の玄英と同じく、道を人の履行する所の道と爲し、且つ德を以て道よりも尊しと爲す者に似、道之可道、非常道、及び道降而後德の語と全く相反すればなり、〔生者德之光也〕德は得なり、人の道を天に受けたる者を謂ふなり、成玄英の天地之大德曰生、故生化萬物者、盛德之光華也と曰へるは、德と道とを混じて一と爲す者に似たり、故に取らず、〔性者生之質也〕性は德と名異にして實同じき者なり、其の天より得るよりして之を德と謂ひ、生れて身に具有するよりしては之を性と謂ふのみ、玄英の質本也、自然之性者、是禀生之本也と曰へるは、是を得たり、〔性之動謂之爲〕此の爲は未だ僞を加へざる前の爲なれば、性の物に感じて自然に動く者を謂ふ、即ち爲して爲さず、無爲にして爲さゞる無き者なり、性は固より物感じて動くべき者なり、成玄英の感物而動、性之欲と曰へるは、自然と爲と僞を加へたる有爲とを混雜したる説にて、非なり、〔爲之僞謂之失〕僞は詐若くは欺と異なり、人爲を加へて自然を矯むるを謂ふなり、段玉裁曰く、僞矯也矯其本性也、凡非天性、而人作爲之者、皆謂之僞、故爲字、人傍爲、亦會意字也と、こゝにては性の自然の爲に知を加へて分外に爲すあるを謂ふ、〔知者接也謨也〕謨は謀なり、前の齊物論篇に與接爲構、日以心鬪の語あり、こゝの接は即ち與接の接にして、謨は即ち以心鬪なり、彼是相參照して讀めば、意義自ら瞭然たらん、〔知者之所不知猶睨也〕睨は「説文」に衺視也とあり、又斜視とも曰ふ、横目にて視ることなり、王先謙曰く、雖智者有所不知、如目斜視一方、故不能徧、是以用意而偏、不如寂照と、勉めて知を用ふと雖も、知る所猶限りあり、知らざる所甚多きに喩へて、知を用ふるの無用なるを言ふなり、〔動以不得已之謂德〕不得已は爲さゞるべからざるを爲すの意にて、知を用ひて、分外に爲すことなきを謂ふ、知を用ひざれば、則ち眞性を保して自ら動くなり、故に謂德といふ、不得已の三字は屢前篇に出で、又此篇の結尾にも有爲也欲當、則緣於不得已、不得已之類、聖人之道とあり、此と相照應す、〔動无非我之謂治〕我は外物に對するの稱にて、眞我即ち德性を謂ふなり、郭象の動而效彼則亂と曰ふは裏面より説き、玄英の率性而動、不捨我效物、合於正理、

べからざる者なり、唯人之を得て德と爲し、德に依りて行ひ、無爲にして爲さゞるなし、其流行に由りて道を知るを得るなり、即ち道は德の流行布陳する者即ち是なり、而して此の無爲の德は、原と生れ出るの前に禀受し、德ありて然る後に生るゝ者なれども、生れ出でゝ後に、德始めて見るべし、則ち生は德の外に光り輝きたる者即ち是なり、既に生れて、德の人に具有する者を名づけて性と謂ふ、故に生命あり身體あるの人は其外形にして、性は其内の主宰なる本なり、實質なり、此の性の外物に感じて動くことある、之を名づけて爲と謂ふ、感じて動くは性の能なれば、決して不可なけれども、其の動くに際して、私意を之に挾み知を其間に用ふるに至れば、其爲や眞の爲に非ずして僞と爲る、之を失即ち德を失ふと謂ふなり、之を要するに、人をして德を失はしむるは、知あるが爲めなり、知あるが故に、外は物に接して之と對峙し、内は心に謀略を運らして之と相闘爭するなり、然れども人知には限りあり、知者いか程知を用ひて至らざるなしと雖も、其知る所は甚少くして、知らざる所は甚多し、之を喩ふれば、横目づかひして或る一方のみを視る者の全體を通觀する能はざるが如し、されば性の動くに際して知を用ふるは無用の事なり、害ありて益なし、已を得ざるに至りて動き、已むを得ざるだけを動くに止めて、一點の私意私知を挾むことなければ、其動きて爲すは即ち無爲にして、是れ之を本來の德と謂ひ、動きて爲す所皆我が德に依り性に率ふに非ざるは無く一毫も我眞性を捨てゝ外物に牽かるることなきを、即ち治と謂ふなり、治は人を治むる樣に聞こえて、德とは其名相反すれども、動きて爲す所皆我が眞性に率ふに非ざる無きは、即ち自己の德性を治むることにて、治むるの最も大なる者なり、故に實は德と相順うて背反することなきなり、

【解義】〔道者德之欽也〕成玄英は欽の字を欽羨、欽慕の義と爲して曰く、道是所脩之法、德是臨人之法、重人輕法、故欽仰於道と、此くの如きは道家獨り自ら善くするの旨意に非ず、兪樾曰く、「說文」广部、廞陳輿服於庭也、「小爾雅」廣詁廞陳也、此欽字即廞之假字、蓋所以生者爲德、而陳列之即爲道、故曰德之廞也と、兪氏の欽を以て廞の假字と爲し、陳と解するは從ふべし、唯蓋所以以下の德の陳列するを道

能の六の者は、通じて一と爲す能はざるの敝にて、道の塞がるゝは皆之に因るなり、故に必ず之を撤退し、之を解除し、之を除去し、之を通達せざるべからず、此の四種の六害皆除かれて我が胸を動亂せられざるときは、則ち心神自ら平正なり、平正なるときは則ち自ら安靜なり、安靜なるときは則ち自ら淸明なり、淸明なるときは則ち自ら空虛なり、空虛なるときは則ち道こゝに集り、萬事に接應して障礙なし、是れ前に屢いふ所の無爲にして爲さゞる無き者なり、此に至りて始めて仁義禮知信の至れる者と謂ふべく、彼の儒者の喋々する所の者の如きは、徒に外形に拘束せられて其至れる者に非ざるなり、

【解義】〔徹志之勃〕徹は撤と同じく、勃は悖に同じ古字通用するなり、悖は亂なり、「釋文」に本又作悖とあり、〔解心之謬〕「釋文」に謬一本作繆とあり、從ふべし、繆は綢繆の繆にて、纏ひつくことなり、故に「成疏」の繫縛なりと解せるは、之を得たり、林雲銘は字の如く讀みて、差謬なりと爲せども、かくては解の字用を失ふ、故に取らず、〔不盪胸中〕郭象曰く、盪は動なりと、「釋文」に本亦作蕩とあり、

道者德之欽也、生者德之光也、性者生之質也、性之動、謂之爲、爲之僞、謂之失、知者接也、知者謨也、知者之所不知、猶睨也、動以不得已、之謂德、動無非我、之謂治、名相反而實相順也、

【大意】先づ道德性爲の何物なるかを辨じ、爲の僞して德を失ふは私知を用ふるに由るを言ひて知の弊を論じ、動くに知を用ひず、已むを得ざるを以てすれば、是れ卽ち德、性に率うて動き、動きて我に非ざる無ければ、是れ卽ち治、治と德とは、其名相反して實は相順ふを言ひ、前節四六の累を去るの說を約論して之を明かにしたるなり、

【通釋】前節に論じたる四六の累は、志心道德に分屬すれども、志心の累を去るは、其實皆道德を全くするが爲めなり、故に此節に於ては、上文を承け倒に論じ入りて曰く、道は見るべからず聞くべからず捉ふ

煦、以體曰嫗とあり、〔大親則已矣〕大親は父母なり、子父母の足を蹍むも、辭謝せず煦嫗せざるをいふ其の至親なるを以てなり、成玄英は父蹋子足と爲しれば諸家多く之に從へども、首めに蹍市人之足とあれば蹍兄之足といひ蹍大親之足といふべきを省略したるのみ、成説は文に於て穩ならず、〔至信辟金〕辟は「釋文」に除也とあり、棄除して用ひざるを云ふなり、郭象曰く、金玉小信之質耳、至信則除矣と、至信は心に在り、外物を假らざるなり、

徹志之勃、解心之繆、去德之累、達道之塞、貴富顯嚴名利六者、勃志也、容動色理氣意六者、繆心也、惡欲喜怒哀樂六者、累德也、去就取與知能六者、塞道也、此四六者不盪胸中則正、正則靜、靜則明、明則虛、虛則無爲而無不爲也、

【大意】至禮至義至知至仁至信に至らんとするには志を亂すべき勢利を撤退し、心を繫縛する、人に悅ばれんとする外飾の念を解除し、德を累はすの情を去り、道を塞ぐの分別知慮を通ずれば、胸中自ら正靜虛明にして、無爲にして爲さゞるなきの境に至る、是れ即ち至禮至義至知至仁至信なり、

【通釋】此の至禮至義至知至仁至信に至らんとするには、志の亂れと爲るべき者を撤退し、外飾の心に纒ひ繫る者を解除し、德の患累と爲る者を除去し、道の塞がるゝを通達するを要す、されば之を如何にして宜きかと云はんに、貴や富や高顯や尊嚴や名譽や利祿やの六の者は、衆人の上に立ちて誇るべき者にて、人の志を悖亂する者なり、容貌や動作や顏色や言辭や氣調や憶意やの六の者は、他人に悅ばれんとする外飾の修飾にて、人の心に綢繆して、之を繫縛する者なり、厭惡や欲望や欣喜や憤怒や悲哀や歡樂やの六の者は、情志の物に觸れて動く者にて、之を發するまゝにして禁せざれば、心德の患累となる者なり、去らんか就かんか、取らんか與へんかの迷ひ、及び知慮技

蹍市人之足、則辭以放鷔、兄則以嫗、大親則已矣、故曰至禮有不人、至義不物、至知不謀、至仁無親、至信辟金、

【大意】足を蹍むの一喩を設けて、市人兄弟大親三種の人に於て、之に對する禮の各異なるを說き、因て古語を引き、世俗貴ぶ所の仁義禮知信の皆至れる者に非ざるを謂ひ、以て下文を引起す、

【通釋】若し誤つて一面識なき市中の人の足を一寸蹍みたるときは、自分の粗忽不注意より出でし事にて誠に相濟まず、何卒許されたしなどゝ、辭を盡くして陳謝すれども、兄の足を蹍みたるときは、撫でさすり、又は息を吹かけ煦めて痛みを去らしむるのみにて、言辭にて陳謝することとなし、兄弟よりも尙一層親しき間柄なるときは、一寸足を蹍みたりとて、煦嫗もせざれば陳謝もせざるが人の常情なり、是れ愈〻疎なれば愈〻敬を飾り、愈親しければ愈〻敬を忘る、情の親みの至りは自ら相孚すればなり、故に古語に、禮の至りは、人と己との別を忘れ、人を視ること己の如くして揖讓を爲さず、儀文を用ひず、義の至れる者は、吾心の思ふまゝに行うて、事物に就て其宜きを度らず、知の至れる者は、事の至るがまゝに之に應じ、豫め之に應ずるの謀計を用ひず、仁の至れる者は、天の萬物に於けるが如くにして、特に相親愛することなし、信の至れる者は、金玉を質として之を證するを待たず、故に金玉を辟除して用ひずと曰へり、世俗の貴ぶ所の仁義禮知信は、皆其至れる者に非ず、人を疎遠にする外飾に過ぎずして、徒に道德を累はす者なり、

【解義】〔蹍市人之足則辭以放鷔〕「釋文」に李頤曰く、蹍蹈也、又「廣雅」に曰く、履也と、放鷔は粗忽不注意の意、「廣雅」に鷔妄也とあり、林希逸曰く、與市人行而蹍蹈其足、則必以放傲自責而辭謝之と鷔を以て傲の假借と爲すに似たり、此說從ふべし、蹍足の一喩は、禮は親みの薄きに生ずるを言はんが爲めに設けたるなり、故に下文直に故曰至禮有不人と以て受け、遂に他の義知仁信に及ぶ、〔兄則以嫗〕宣頴曰く兄の足を蹍めば、則ち必ずしも辭して罪を引かず、但煦嫗して之を憐むのみと、「禮」の樂記の注に以氣曰

の供物と共に之を神前に享するなり、〔觀室者周於寢廟又適其偃焉〕寢は正寢、廟は祖先宗廟の在る所なり、郭注に偃謂屛厠とあり、桂馥曰く、屛當爲庰と、庰偃は便所なり、寢廟の二者は家中の最も貴き所なれば、首として之を周觀し、次ぎに便所の如き褻れの處までも遺さず往き觀て、始めて觀室を盡くせりとなす、此の二喩、膍胲及び庰厠を以て移是に比し、移是の言ふべき所にあらざれども、亦知らざるべからざるに喩ふるなり、諸家多く二喩中に就き、是の時として膍胲に移り、時として庰厠にも移り、是の在る所の一定せざるを言ふと爲すは是に非ず〔以己爲質〕成玄英曰く、質は主なり、妄に名實を執り、遂に己を以て名實の主と爲して是非を競ふなりと、蓋し儒墨諸子を指すなり、〔使人以爲己節〕節の字、陸德明は名節と爲し、成玄英は至操と爲し、林希逸は節度と爲し、王先謙は節義と爲す、皆穩妥ならざるに似たり、林雲銘の使人皆取則焉と曰ひ、胡方の將身任世教、以己樹人之準則と曰ふは、節を以て則と爲すなり、文義共に宜きを得たるを覺ゆ、故に今之に從ふ、〔以死償節〕「廣雅」に云ふ、償報也復也と、堅く己が是とする所の準則を守り、身を殺しても、其則に背かざるなり、所謂殺身成仁もの卽ち是れなり、〔以徹爲名〕徹は通なり、通達して上位に在るを以て名譽と爲すを謂ふ、此四句は、知愚榮辱皆自ら主たる能はず、外來の物によりて之を定むるを謂ふ、故に「郭注」に不能隨所遇而安之と曰ふ、〔移是今之人也〕移是は前述の如く、有生に執滯して大道を知らざる者、今の世俗の人卽ち是なり、今之人の三字は、前節の古之人に反應して此の一章を結ぶ、上節には古之人を最初に置き、此節は今之人を最後の結尾に置く、文章變化の妙を見るべし、〔蜩與學鳩同於同也〕「釋文」に曰く、學本或作鷽、音同とあり、又內篇逍遙遊に、蜩與鷽鳩笑之曰、我決起搶楡枋、時則不至而控於地而止矣、奚以之九萬里而南爲とあり、此文に據り二蟲共に高く飛ぶ能はず、決起して僅に楡枋に搶るを得るのみ、而して大鵬の九萬里にして南するを譏る、今人の陋劣卑見にして大道を知らざること、亦此の二蟲に同じ、陳壽昌曰く、其卑見與微蟲小鳥何異、蜩與鷽鳩同、而人又與之同、故曰同於同也と、能く文意を得たり、

有生に執滯して、是非榮辱の外に出づる能はざるは、彼の蜩と鷽鳩との二蟲か九萬里を飛び北冥より南冥に至るを譏り、蜩も僅に楡の枝まで飛び鷽鳩も亦同く楡の枝まで飛び得るを以て、共に之を飛ぶの至りと爲し、是に滿足するに同じ、其小知にして大道を知らざる、豈憐むべからずや、

道通ニ其分一也より此に至るまでの四節を合して一章とす、第一節、道は彼我、成毀の分るゝを通じて一と爲すを言ひて、死生の齊しきを論じ、第二節は死生の本源は道に在りて人爲に由らず、其道は無有にして、聖人は心を此に藏するを言ひ、第三節は、古の聖人の至知を言ひて、道通ニ其分一也に應じ、第四節は、今人の道を知らず、私知を師とし是非を分つを言ひ、亦道通ニ其分一也に應じて之を結ぶ、畢竟齊物論の餘論なり、

【解義】 〔有生黬也〕 黬は釋文に字林を引て釜底黑也と爲す、竈烟の凝集して釜底に附きたる黑煤、俗になべずみのことなり、人の生れて形あるは、黬の自然に釜底に附きて一時形を成せると同じきをいふ、〔披然曰移是〕 披は分散なり、此一句甚だ解し難し、古來諸家の說亦紛々として一ならず、而して此一句は重要なる句にして、此句の解釋の異なるに因りて、下文の解釋皆異ならざるを得ざるなり、今姑く郭象の既披然而有レ分、則各是ニ其所一レ是矣、是無ニ常在一、故曰レ移に從うて之を敷衍す、然れども郭の意果して通釋に敷衍したる所と同じきや否や、是れ亦未だ知るべからざるなり、〔雖然不可知者也〕 前文に非レ所ニ言也とあり、而して雖然を以て之を翻へしたれば、次ぎには移是の言ふべきを言ふ筈なるに、反つて不可知者也とありては、雖然の字は無用に歸し、且つ下文の二喩も無用と爲り、請嘗言移是以下の說明も、不可知者也とは矛盾す、巖井文の可知間恐脫ニ一不字一と曰へるは大に理あり、故に今之に從ふ、〔臘者之有膍胲〕 臘は冬至の後の第三の戌の日の祭りの名なり、農成を報ずるの大祭にて、物を備へて祭る、膍は「釋文」に司馬を引て曰く、牛百葉也と、「韻會」に曰く、百葉牛肚也、一曰、五藏總名と、「正字通」に李時珍曰く、膍言ニ其有ニ比列一也、牛羊食ニ百草一與ニ他獸一異、故其胃有ニ脾有ニ蜂窠一亦與ニ他獸一異也と、されば膍は牛の腹中の諸臟を云ふなり、胲は足の大指なり、膍胲の二者は微物なれども、臘の祭りを行ふ者は、之を棄てずして、他

形を成せるのみ、永久不滅の者には非ず、釜底に群りて附着したる鍋墨と同く自然に生じたる人も、鍋墨の披然と飛散するが如く、個々別々に分る丶は、各我を是として彼を非とし、是は各自の間に移動して一定なし、之を移是と謂ふなり、嘗に移是を言はんに、移是は人々の私心より出でたる者に過ぎず、極めて陋劣にして言ふに足るべき者にあらず、陋劣にして言ふに足らざる者なれども、亦人として知らざるべからざる者なり、(本文の不可知者也の可字の下に不字を増てし不可不知者也として講ず、説は解義に詳なり)其故は譬喩を設けて之を説明せん、歳末の臘の祭を爲す者は其供物に牛の百葉や足の大指までも備へて祭りを行ふ、牛の百葉や足の大指の如き微物は棄散すべき者なれども、臘の祭には必要にして棄散すべからざるなり、是れ一喩、又家屋を觀る者は、先づ正寢や祖先を祭りある奥の宗廟等の首たる部分を周く觀畢りたる後には、又厠の如き褻き處にまで往きて之を觀、然る後、家の全體を觀たりとなすなり、是れ二喩、移是の陋劣なれども知らざるべからざるは、猶この臘者の膍胲を棄てず、家を觀る者の厠をも遺さゞるが如し、是の理由を以て移是を擧ぐなり、請ふ嘗に移是を言はん、彼の移是して是非を爭ふ者は、其生れ來れる前の天門の無有は之を知らず、既に生れて形ある上に據りて之を本と爲し、又大宗師たる道を以て師と爲すべきを知らずして限りあり僅少なる人の私知を以て師と爲し、この私知に因て是非を乘せ、事々に就き是非を分ちて、是非益々多く、是非の起るよりして、其結果として、仁義忠孝等種々の名を命じ、名によりて實行を求めんとす、名實の説起るよりして、各自ら是とし、我を以て是非の主と爲し、天下の人をして盡く我の是とする所を法則と爲さしめんとし、其の之を執り守るの堅き、死を以て法則と定めたる所を實行せんことを力め、時として之が爲に身を殺すを辭せず、所謂殺身成仁者なり、世に用を爲す者を以て知と爲し、世用に供せられざる者を以て愚と爲し、通達して上位に在るを以て名譽と爲し、貧窮して卑賤に存るを以て恥辱と爲すなり、道を知る者の無用を貴びて有用を厭ひ、貴賤榮辱を齊一にすると相反す、則ち移是者は澆季の今之人にして古の道を知る人に非ざるなり、今人の大道を知らず、

「釋文」に見えざれば、後人の臆改なるかも知るべからず、姑く記して參考に供す、〔昭景也著戴也〕昭屈景は楚の公族の三姓なり、屈原三閭大夫と爲りて三族を掌りしは即ち是れなり、此文對句を成すが爲めに、屈を略して昭景の二を擧げしのみ、公子の孫冠禮を行ふとき、其祖父即ち公子の字を以て氏と爲すは周時代の定制なり、昭景の二氏は皆其始祖公子の字を戴きて氏と爲せる者なり、故に昭景や著戴なりと曰ふ、〔甲氏也著封也〕王先謙曰く、甲は中の誤りと此一族は封ぜられし邑を以て氏と爲す、故に甲氏や著封なりと曰ふなり、始祖の字を取り、封邑を取るの一に非ざるあれども、其の本宗より出でしは同じきなり、三聖の所説同じからざれども、其の道を知るは一なり、

有生黬也、披然曰移是、嘗言移是、非所言也、雖然不可知者也、臘者之有膍胲、可散而不可散也、觀室者周於寢廟、又適其偃焉、爲是擧移是、請嘗言移是、是以生爲本、以知爲師、以乘是非、果有名實、因以己爲質、使人以爲己節、因以死償節、若然者、以用爲知、以不用爲愚、以徹爲名、以窮爲辱、移是今之人也、是蜩與學鳩同於同也、

【大意】古之人の道を知るに反し、今之人は道を知らず、有生に據りて本と爲し、私知を師とし、各自に是非を分ちて相爭ひ、其結果名實の説を生じ、自己の主張する所を以て法則と爲し、人をして皆之に由らしめんとして、終に身を以て之に殉するに至る、之を名づけて移是と曰ひ、其分別して競ひ求むる所、聖人と全く同じからざるを言ふて之を憐む、

【通釋】人の此世に生れ出づるは喩へば釜の底に附着する鍋墨の如き者なり、自然に氣の聚まりて、一時

に所謂道通其分なり、之を喩ふれば、楚國に於ける公族の、皆君と同宗なるが如し、唯其言ひ方の異なるは同じ公族なれども、昭氏と景氏とは其出づる所の公子の字を戴き著はして姓と爲し、甲氏は其封ぜられたる邑を著はして姓となせるの異なるありて、一に非ざるが如きのみ、

【解義】〔古之人其知有所至矣〕古之人は卽ち上節の聖人を指す、此一句は下の三樣の人を統べて言ふなり、知有所至は卽ち道を知るなり、此より以爲有物矣までは、內篇の齊物論に出づ、次句の惡乎至は問を設けて下を起すの語、以爲未始有物矣の句は一聖人の宇宙觀、至矣盡矣弗可以加矣は之を評論するの語なり、〔其次以爲有物矣〕其次とは排列の順次を云ふのみにて、爲未始有物と觀ずる者最も道を得、其次ぎは未だ道を知るに至らず、又其次ぎは更に道を離るゝこと一等と爲すには非ず、上文の其知有所至の句、及び下文の是三者雖異公族也云々に視て、其皆道を得たる聖人なるを知るべし、成玄英の其次以下未達眞空と曰ひ、陸樹芝は至者大宗之師、次者亦大宗之友也、師以造道之極則言、友以進道之方法言也と曰へるは、皆非なり、〔將以生爲喪也以死爲反也〕成玄英曰く、喪失也、流俗之人、以生爲得、以死爲喪、今欲反於迷情、故以生爲喪、以其無也、以死爲反、反於空寂、雖未盡於至妙、猶齊於死生と、この說大抵之を得たり、たゞ雖未以下の二句の非なるは、前に言へるが如し、此の二句は、以爲有物の意を解說せるなり、〔是以分已〕言ふ是れ生死の分ある現在上より觀たる說のみと、前の爲有物の聖人の宇宙觀を評論せし語なり、諸家多く「是を以て分るゝのみ」と讀み、或は以を已と同じと爲し、「是れ已に分る」と讀むは共に是に非ず、〔孰知有无死生之一守者〕成玄英曰く、誰能知有無生死之不二、而以脩守者と、是れ孰知有無死生之一守者と讀むなり、然れども內篇の「大宗師」に孰能以無爲首、以生爲脊、以死爲尻、孰知死生存亡之一體者、吾與之友矣とあると文字少く異なれども、同意義の文なれば、一守の二字を分割するは是に非ず、陸樹芝の雖分生死之分、而守之若一と曰へるは、能く文意を得たるに似たり、而して東條一堂曰く、文如海本には守を宋に作ると果して此くの如くなれば、文義甚だ穩かなれども、

以分已、其次曰始無有、既而有生、生俄而死、以無有爲首、以生爲體、以死爲尻、孰知有無死生之一守者、吾與之爲友、是三者雖異、公族也、昭景也、著戴也、甲氏也、著封也、非一也、

【大意】・聖人の無有に藏して死生を一にするを詳言し、三說の異なるに似て、實は同じきを譬喩を以て說明す、

【通釋】　前節の聖人藏乎是を承けて言ふ、古の道を得るの聖人は、其知至極する所ありたり、其至極する所とは何如なる地位に至れるや、曰く、聖人は心を無有に藏するが故に、萬物の皆無より出づるを知り、有を以て有と爲さず、實は未だ始めより物あらず、森羅萬象、有るが如くに見ゆるは、皆其眞にあらず、無有こそ其本眞なりと知るなり、此くの如く觀ずるは、是れ道の玄妙を知れる者にて、其知は至れり盡くせり、

復た此上に出づる者あらざるなり、其次ぎの聖人は、之に反して物ありと爲す、是れ現在に觀たる上にて言ひ、道の本源に遡りて、無有より出づるに就いて言へるにあらず、但し又物に執滯したる見には非ず、故に世俗の人は生まるゝを以て得たりと爲し、死するを以て失ふと爲せども、此人は反つて生まるゝを以て其眞より失はれたりと爲し、死するを以て眞に反へると爲す、是れ生死を一にし、生を悅ばず、死を惡まず、たゞ現在の物ある上より觀、生死を分ちて說きたるまでにて、道の玄妙は固より之を知れるなり、其次ぎは、始めは無有なれども、既にして無有より出でて肉體を受けて生あり、生れたりと見る中に、俄に又死して無有に歸すと觀ず、之を喩ふれば、最初未生以前の無有を以て頭首と爲し、生れ出でゝ世に在る間を以て胴體と爲し、死して復た無有に歸するを以て尻と爲すなり、此人言ふ、孰か有と無、死と生との、一と爲して守るべきを知る者あるか、若し其人あらば、吾之と友と爲りて、共に道を樂まんと、此の三樣の人は皆古の聖人、道を知るの至れる者なり、其言ふ所は各異なれども、其要旨は共に無有に歸して、皆同じ卽ち前

有、實有此身、推索因由、竟無處所と、實を以て形體實質ありて生死する人及び物と爲し、處字は其因由卽ち生死出入せしむる道の存在と爲す、今之に從ふ、〔有長而无乎本剽〕「釋文」に剽、本亦作標、同と曰ひ又崔譔の説を引て曰く、末也と、而して盧文弨曰く、摽當作標と、標は小枝にて、數前篇に見えたり、〔有所出而无竅者有實〕前文に照らせば、出字は本に對して竅に對せず、竅字は入に對して出に對せず、故に此句疑ふらくは、脫文又は誤字あらん、因て嚴井文は而下恐脫一入字と曰ひ、陸樹芝は呂氏の說に從ひ、有所出の下に而無本者有長、有所入の九字を脫すと爲し、九字を補入して文義方に全しと曰ふ、下文の二句直に之を承くるとすれば、此說最も妥當なるに似たり、而して陳壽昌は有所出而、無竅者無實の九字を以て衍文と爲す、この說亦通ず、姑く諸說を列擧して參考に供す、〔宇宙〕「三蒼」に云ふ、四方上下爲宇と、宣穎曰く上下四方不可指其一處と、古往今來不可得其始終、往古來今曰宙と、〔天門〕陸樹芝曰ふ、居室の出入は必ず門戶に由る、得て見るべし、死生の出入の若きは、則ち造化其機を握り得て見るべからず、故に天門と曰ふ、郭象曰ふ、猶ほ衆妙之門と云ふがごとしと、衆妙之門は老子に出づ、〔有不能以有爲有必出乎無有〕此の十二字、郭象は有不能以有爲有を一句と爲し、必出乎無有を又一句と爲し、注して曰く、夫有之未生、以何爲生乎、故必自有耳、豈有之所能有乎と、成玄英又之に疏して有既有矣、焉能有有、有之未生、誰生其有、推求斯有竟無有也と曰ひ、諸家多く之に從へども、牽强を免れず、意義又頗る明かならず、林希逸は有不能以有爲の六字を一句とし、有字を下に屬して、有必出乎無有を又一句と爲して曰く、有不生於有、生於無、故曰有不能以有爲、有必出於無有と解し得て簡明且つ穩當なるを覺ゆ、故に今之に從ふ、

古之人、其知有所至矣、惡乎至、有以爲未始有物者、至矣、盡矣、弗可以加矣、其次以爲有物矣、將以生爲喪也、以死爲反也、是

ることとなし、而して能く萬物を生出し、又能く萬物を藏入す、誠に奇妙不可思議の至りなり、此の奇妙不可思議なる者卽ち道は、能く實質ある人及び萬物を生出すれども、而かも道は何處に在るか何處に處るか、其の存在を知ることとなし、又此の人物の生死出入は、太古の始めより今に繼續して、今後又幾何繼續すべきか知るべからざれば、道なる者は、永久に存在して何時が始めたり、何時が終りなるか知るべからず、其本末は無き者なり、猶之を說明すれば、萬物を生出することは絕えず之を爲して、何處より出だすか知るべからず、之を出だすの竅なき者卽ち道は、能く實體ある物を生じて有らしむ、實體ある物を生じて有らしむれども、其道の存在する場所を知るべからざるは、道は廣大無邊の宇內に彌滿する者なればなり、又道は永久に涉る長さのみあつて本末の無きは、是れ卽ち宙なり、この宇宙の間に於て、萬物生ずるあり、死するあり、出づるあり、入るありて、絕えず出入すれども、何處より出入するかを知らず、人は之を知るを得ざれども、必ず出入する所あらざるを得ず、之を名づけて天門と謂ふなり、天門と曰へば、巍々たる高大なる門の如くなれども、實は無形にして、無有卽ち有ることとなきなり、萬物は凡べて皆この無有の天門より出づる者にて、無有に非らざる有形の物は、一として出入生死せしむるを爲す能はず、有形の物は必ず無有より出づるなり、但し無有と名づくれば、既に無有なる一物あるが如くなれども、無有なる者は、其名の如く一も有ること無き者なり、是れ道の至妙なる所にして、聖人は常に心を此の虛無なる處に置くなり、故に能く其身を忘れ、親を忘れ、世事を遺外し、物外に逍遙し、無爲にして而かも爲さゞる所なきなり、

【解義】〔出无本入无竅〕陸德明の「釋文」に曰く、出は生なり、入は死なり、本は始なり、竅は孔なり、〔有實而無乎處〕實の字を林希逸及び林雲銘は生死の實理と解し、希逸は實理雖有、而無方所之可求、故曰無乎處と曰ひ、雲銘は生死本有實理也、而未生之前、既死之後、果有何處安着と曰ふ、實字の解は同じけれども、處の字の解は同じからず、希逸は實理の在り場所と爲し、雲銘は生前死後の物の在り場所と爲す、共に穩かならざるに似たり、成玄英曰く從無出

の類は皆有なり、卽ち吾人も亦有なり、生も亦有なり、此等は皆須臾にして無に歸する者なり、而るに暫く存する所の有形の上に有形を累積して備はれりとするは其迷妄笑ふべきの甚だしきなり、猶氷島の上に氷屋を築き、得意になりて悦ぶ者の、一たび暖潮に遭へば忽ち島と家と共に消釋するを知らざるが如し

〔出而不反見其鬼〕鬼は歸なり、人の死したる者を鬼と爲す、故にこゝにては鬼を死の義とす、郭象は不反守其分內、其死不久と注し、「成疏」も此意を敷衍すれども、莊子の死生を一にすることは「齊物論」蝴蝶の夢の喩にても明白なり、死を以て悲むべき者と爲さず、且つ分內を反守するも死し、分外に馳するも亦死す、死は到底人の免るゝを得る所に非ず、郭注は未だ莊旨に徹底せざる者に似たり、陸樹芝は此以下以死生之通爲一、言之と曰ひ、其解頗る明斷なり、故に通釋之に從つて說き、郭注を取らず、

出無本、入無竅、有實而無乎處、有長而無乎本剽、有所出而無竅者有實、有實而無乎處者宇也、有長而無本剽者宙也、有乎生、有乎死、有乎出、有乎入、入出而無見其形、是謂天門、天門者無有也、萬物出乎無有、有不能以有爲有、必出乎無有、而無有一無有、聖人藏乎是、

【大意】前節に死生の通じて一たるを言へるより本節は進みて、死生する所以の本源に論及し、死生は道に由りて、人爲に由るにあらず、本節は道は其廣大永久なるよりして之を宇宙と名づけ、又物を出入するよりして之を天門と名づくれども、元來無有にして虛無なり、而して聖人は此の虛無に心を藏して之を宗とするを言ふ、

【通釋】人を始めとし、萬物盛んに世に生れ出づれども、其出づるや、根本ありて然る後に枝葉あるが如きの本あることなし、又生れ出でたる物は、皆死して何處にか入るには相違なきも、其の入るべき竅もあ

て以て成と爲して喜ぶ所の者も、卽ち悲むべき毀と同一なり、何ぞ成毀の分ちあらんや、世人の之を分つは惑ひなり。此の彼我成毀を分つを惡む所以は何ぞや、人心既に彼と我とを分つときは、則ち其私心に於て、我を是として彼を非とし、彼を毀りて我を成し、我に備はるを求むればなり、備を惡む所以の者は何ぞや、有形の物の多きを以て備はると爲し、有形無形の一なることを知らざればあり、凡べての有は皆無に歸する者にて、成と毀とは同一なるを知らずして、備はる有形の物にのみ求むるは、道を離るゝこと遠し、故に道を知る者は之を惡むなり、道既に通じて一たり、故に今分の最も大なる死と生とに就て、其通じて一たるを言はんに、人一たび造化の大機より出でゝ生れたる上は、固より鬼に非ざるなり、然れども其の出でゝ一往反らざるを觀れば、卽ち其遂に必ず死して鬼と爲るを見るべし、蓋し機より出で、生れて人と爲り、而して往きて歸る所を得るは、卽ち死を得るの謂なり、死は寂滅に似たり、全く亡びて盡きたるに似たり、然れども一たび伸びたる者は又必ず屈するは、物理の自然なれば、屈したる者は又必ず伸ぶ、何となれば其實の未だ滅びざる者あればなり、人の死も、形は滅すれども、其實の性命は死によりて滅せざれば、再び機より出て、形を得て生るゝことあるべし是に由りて之を觀れば、鬼と人とは一なり、この理は他のあらゆる有形の者の、有よりして無にゆくを觀れば、卽ち無形の者の、無よりして復た有にゆくことの、一定易ふべからざるの眞理なるを知るべし、

【解義】〔道通其分也其成也毀也〕郭象は成毀無常分、而道皆通と注し、分の字を本分身分等の分と爲し分つと訓せず、故に「釋文」に符問反、注及下皆同とありて去聲に讀む、然れども下文の成毀の一なるを言ひ、有無の一なるを言ひ、死生の一なるを言ふを觀れば、成と毀とを分ち、有と無とを分ち、生と死とを分つを通ずと解するを以て、本文の意を得たりと信ず、故に今林希逸の説に從ひ、音方云反とし、平聲に讀む希逸曰く、成毀二事、分而爲二、以道觀之、一而已矣故曰道通其分也、人心既分彼我、則於其私也、必求備、故曰其分也以備、凡有皆歸於無、而私於求備者、但求其有、知道者惡之、故曰所惡乎備者、其有以備と、〔其有以備〕有は有形の物なり、富貴榮壽

ざるなり、「釋文」に魁は安なり、一に曰く主なりとあるは、未だ愜はざるに似たり、〔與物且者其身之不能容〕兪樾曰く、且は卽ち苟且の且なり、「詩」の東門之枌篇の穀旦于差とあるを、韓詩に旦を且に作りて云ふ、苟且なりと、是れ重言すれば苟且と爲し、單言すれば且と爲るなり、上文の與レ物窮者の「郭注」に窮は終するを謂ふとあり、是れ窮を窮極の義と爲すなり、苟且は窮極と義正に相反す、「釋文」に且始也と曰ふは是に非ず、〔不能容人者无親〕親は親愛なり、本城賁曰く、親は父母を謂ふ、父母も亦是れ人にして、外物なり、性命を保全する者は己の爲めにし、父母と雖も亦之を心に容れず、故に无親と曰ふ、亦一說として存すべし、注疏以て人と親愛の情なしと爲す、莊子の旨を失す、〔兵莫憯於志鏌鎁爲下〕郭慶藩曰く、憯は慘と同じ、「說文」に慘毒也、字或作レ憯とあり、陸德明曰く鏌鎁は良劍の名、〔寇莫大於陰陽云云〕「成疏」に曰く、心に得喪を爭ひ、喜怒胸中に戰へば、其寒凝氷となり、其熱燋火となる、是れ陰陽の寇なり、夫の勍敵巨寇は猶之を逃るべし、而して兵の胸中に起るは如何之を避けんや、或曰く、陰陽の下に枹鼓爲レ小の一句を脫すと、淮南子に見ゆ、

道通二其分一也、其成也毀也、所レ惡乎分者、其分也以備、所三以惡二乎備者、其有以備、故出而不レ反見二其鬼一、出而得、是謂レ得レ死、滅而有レ實、鬼之一也、以二有形者一象二無形者一而定矣、

【大意】道は彼我成毀の分を通じて一と爲す、其所以は、分の害は備に在り、備の害は有形無形の一たるを知らずして、有形に拘はるに在るを言ひ、遂に死と生との一たるを論ず、

【通釋】世人より觀れば、毎事毎物に種々の分ちあり、彼我あり、貧富あり、貴賤あり、榮辱あり、殀壽あり、死生あり、而して富や貴や榮や壽やは以て成と爲し、貧や賤や辱や殀やは以て毀と爲し、或は喜び或は悲む、然れども道を以て之を觀れば、此の成と毀との分ちを通じて、皆一と爲すなり、世人の觀

く人を殺す者なれども、志より慘毒なるはなし、鏌鎁は良劍なれども、之に比すれば下位に在り、何となれば、鏌鎁はたゞ人の肉體を斬殺するのみなれども、志は人身の主たる性命を毀害する者なればなり、寇敵は殘逆恐るべき者なれども、利害得喪を爭うて或は烈火の如く或は凝氷の如くなる陰陽を更に恐るべき大寇敵とす、何となれば、兵器を執て犯し來れる寇敵は、土地貨財を棄てゝ逃走すれば、其難を免るゝを得れども、陰陽の寇敵は吾心に附隨して離れず、天地の間に之を逃るべき所なければなり、陰陽は此の如く恐るべき大寇敵なれども、其本を推し尋ぬれば、陰陽が敢て人を賊害するに非ず、心が外物を逐うて之を得んことを勉むるが爲めに生ずるにて、陰陽の大寇敵は自己の心が實に之を爲さしむるなり、○宇泰定より此に至るまでの三節を合して一章とす、宇泰定の第一節は、道を得るは心の安定に在るを言ひ、備物以將形の第二節は、人爲を以て掩飾するの無益なるを言ひ、劵內者の第三節は、道を得ると得ざるとの別は、心の向ふ所によりて定まることを言うて、之を決斷するなり、

【解義】〔劵內者行乎無名〕崔譔曰く、劵は分明なり陸樹芝曰く、內は心なり、「成疏」に曰く、無名とは道なり、道を履みて分內に爲す者は、行ふと雖も名迹なし、「發蒙」に曰く劵契也、契合于內者、知止其所不知、學學其所不學、是行于無名也と諸說皆通ず、今崔成を用ふ、〔劵外者志乎期費〕陸樹芝曰く、外は物なり、「發蒙」に曰く契合于外者要有知有學有爲是志于期費也と、兪樾曰く、「荀子」の書、每に綦字を用ひ、窮極の義と爲す、「王霸篇」目欲綦色、耳欲綦聲の楊注に曰く、綦極也と、亦或は期に作る、「議兵篇」に曰く、己朞三年、然後民可信也、「宥座篇」に曰く、綦三年而百姓往矣と、是れ期と朞と通ずる也、期費は極費なり、費は財用を謂ふなり、「呂覽」の安死篇の非愛其費也の高誘注に曰く、費財也とあり、期費の義は其財用を窮極せんとするを謂ふなり、故に下文に曰く、志乎期費者惟賈人也と、〔行乎無名者唯庸有光〕「成疏」に曰く、庸は用なり、心を無名の道に游ばす者は、其用ふる所の智日に光明あるなり、〔人見其跂猶之魁然〕魁は大なり、郭崇燾曰く、魁然自ら大とし、人は其踶跂を以て行くを見れども、自ら知ら

猶之魁然、與物窮者、物入焉、與物且者、其身之不能容、焉能容人、不能容人者無親、無親者盡人、兵莫憯于志、鏌鋣爲下、寇莫大於陰陽、無所逃於天地之間、非陰陽賊之、心則使之也、

【大意】泰定して天光を發すると、物を逐ひ僞飾して性命を毀損するとの別は、一に心の向ふ所によりて決するを言ふ、

【通釋】内の心を修めて之を分明にし、光曜あらしむる者は、其爲す所皆自然にして名迹なし、之に反して外の物を志して之を分明にし紛紜馳逐する者は、財用を窮極し博く取り廣く求むることに志ざすなり、心を無名の道に游ばして自然に合する者は、心に天光を發して、其用ふる所の智日に光明あれども、期費に志ざして分外の利名を博取廣求することを勉むる者は唯商賈の心を勞し知慮を盡くして利益を貪ると

同じ、其本心を失うて危險なるの狀、人よりは、一足にて立ち、今にも仆れんとするが如くに見ゆれども、其人自身は猶獨り魁然たる傑物なりとして得意になり、毫も其危きことを知らず、誠に憐むべきなり、此の如く外物を馳逐して終始心を之に專らにする者は外物が既に其人の虛靈の府に入りて心の主となるに至る、之に反して、物と苟且し、物を視ること甚だ輕く性命を保全するを專らとする者は、啻に外物をして自己の心に入り擾らしめざるのみならず、己の一身とても亦物なれば、之を心を入るゝ能はず、何ぞ能く人を入れて之を仁愛し、之を保護することを爲さん、既に人を入るゝ能はずとすれば、父母兩親とても亦人なれば、兩親をも心に入れず、之を無視するなり既に兩親をも無視する者なれば、天下の人を盡くして何人をも心に入るゝことなく、己の性命を保全し、心に天光を發して獨立獨行、無爲にして爲さゞる所なきの至人たるなり、至人と爲ると賈人と爲ると、性命を保全すると己を物に支配せらるゝとの別は、唯心を内に向はしむると外に向はしむるとの分岐に在るのみ、甚だ懼るべきなり、兵器の種類は多く、皆能

はざれども、鬼神代りて之を誅罰す、靈臺を持するの道を知らず、人僞を以て掩飾する者の、發する毎に愈〻當らざる所以なり、即ち前に所謂有不即是者、天鈞敗之とは即是なり、又若是而萬惡至者皆天也而非人とは即是なり、人事に明かにして不善を顯明の中にも爲さず、鬼神に明にして不善を幽閑の中にも爲さゞる者にして、然る後に始めて意のまゝに行うて誅責を受くることとなし、是れ即ち心宇泰定して天助を得るの至人にして、知止乎其所不能知を知りて、毫も知慮を用ひず、學ぶ能はざるを學び、行ふ能はざるを行ひ、辯ずる能はざるを辯せんことを勉めざる者なり、

【解義】〔備物以將形〕陸樹芝曰く、將は不遑將父の將にて、猶ほ養のごとし、物を備へて形を養へば、則ち以て生を養うて內刑に免るべし、〔藏不虞以生心〕藏は藏弃して遺てず、虞は臆度の謂なり、不測の禍あらんことを慮り、豫防の心を長生して、怠ること無きをいふ、〔萬惡至者皆天也〕宣穎曰く、惡は災患を謂ふ、「成疏」に曰く、文王羑里に拘せられ、孔子匡人に厄せらるゝが若し、〔不足以滑成〕滑は濁亂なり、成は成全なる天性を謂ふ、〔不可內於靈臺〕內は入なり、郭象曰く、靈臺は心なり、「義海」に曰く靈臺喩心之虛徹高明と、兪樾曰く、不可の上に當に萬惡の二字あるべし、「文選」廣絕交論の李善注に此文を引き、萬惡不可內於靈臺に作ると、今取らず、記して參考に資す、〔靈臺者有持而不知其所持而不可持者也〕洪慶善曰く、心を持するには道あり、苟も其之を持する所以を知らざれば、則ち復た持すべからざるを言ふ、兩の而字は則と作して觀る、〔不見其誠內而發〕「成疏」に曰く、自ら其內を照らさずして外馳するを謂ふ、〔業入而不舍〕業は既なり、三者の人僞既に入りて心中に據り、之に糾纏せられて棄て去る能はざるを云ふ、〔鬼得而誅之〕鬼は鬼神、天を指す〔明乎人明乎鬼然後能獨行〕「成疏」に曰く、幽顯二途分明にして、譴無く、物を犯さず、故に能く獨行して懼れざるなり、

券內者行乎無名、券外者志乎期費、行乎無名者、唯庸有光、志乎期費者、唯賈人也、人見其跂、

不可內於靈臺、靈臺者有持、不知其所持、而不可持者也、不見其誠已而發、每發而不當、業入而不舍、每更爲失、爲不善乎顯明之中者、人得而誅之、爲不善乎幽閒之中者、鬼得而誅之、明乎人、明乎鬼者、然後能獨行、

【大意】　前の天鈞敗之を承けて之を詳說し、人爲を以て掩飾するの無益なるを言ふ、

【通釋】　衣食住に要する諸物、一も缺くる所なく、十分に具備して以て其形體を奉養し、常に不測の禍あらんことを恐れ、之を豫防して心に怠ること無く、又中心恭敬の念を存し、推して人を敬し、以て交際する所の人に於て盡く敬せざる無し、此くの如く生を養ひて身體を健全にし、豫防して不測の禍を止め、恭敬を以て人に接して交際を好くすれば、人爲の良法を盡くせる者にて、禍害の至ること無かるべき筈なるに、猶は衆多の禍害並び至るは、皆れ皆天より禍害を降せるにて、人より來るには非ず、卽ち天鈞之を敗るなり、故に人爲にては到底禍害を免れ得る者に非ざるを知るべし、されば前の備物以將形と藏不虞以生心と、敬中以達彼との三者は皆無益の事なれば、此を以て吾が完成の天性を亂すに足らず、心の中に入るべからざるなり、靈臺卽ち心は之を操持するの道あり、其操持する方法を知らざれば、則ち操持すべからざる者なり、靈臺操持の道とは何ぞ、他なし前に言ふ所の泰定是れのみ、泰定すれば則ち心に天光を發し、眞吾を內照して已に誠あり、心未だ泰定せず已に誠あるを見ずして、妄に外に發して事を爲せば、爲す所の事ごとに皆當らず、之に加ふるに彼の三者が既に靈臺に入り、人僞糾れ纒ひて之を棄つる能はざれば、知慮を用ひて事每に屢變更し、自ら掩飾して外物に接して失敗を爲すのみなり、言行を以て不善を人世顯明の中に爲す者あれば、人刑罰を加へて之を誅す、濫に知慮を用ひて人の知らざる心中幽閉の處に於て不善を爲す者あれば、人は刑罰を加ふる能

其徳を成さしむ、既に人に捨てらるれば、人を離れて天に合したる者なり、玆に人民と謂はずして之を天民と謂ふ、天に助けらるれば、天と其徳を一にして克く肖る者なり、故に之を天子と謂ふなり、識らず知らずの間に宇宙を主宰する天の子たれば、眞の天子にして、彼の黄帝堯舜の如き人民の歸往するが爲めに上位に在るの天子と同じからざるなり、之に反し世の學者と稱する者は、人として學ぶ能はざる所のことを學ばんとする者なり、行者と稱して實行を事とする者は、人として行ふ能はざる所のことを行はんとする者なり、辯者と稱して言論を好む者は、人として辯ずる能はざる所のことを辯せんとする者なり皆分外に馳せ、人知の限りあるを知らず、故に終身之を學び、終身之を行ひ、終身之を辯ずと雖も、一も得る所あることなし、人の知は限りあるを知り、其の知る能はざる所に止めて、其以上を學ばんとせざる者は、是れ至極の知者なり、若し此の知止乎其所不能知に卽かずして、濫りに之を學び之を行ひ之を辯せんとする者あれば、是れ天理に違ふ者なるが故に、天鈞卽ち造化が之を許さず、必ず失敗に歸せしむる者とす、所不能學、所不能行、所不能辯は皆道を謂ふなり(道の學びて得る能はざることは、前篇屢之を論ぜり)

【解義】〔宇泰定者發乎天光〕宇は心胸なり、心胸泰然として定まれば、天然の光輝を發見して眞意を照見す、陸樹芝曰く、天光は天然の光なり、卽ち「齊物論」、以明の明にして謂はゆる葆光の光なり、天光を發すれば、則ち人にして天なり、〔有恒者人舍之天助之〕舍は棄なり、天と其悠久を同くして恒あれば、則ち人を離れて獨たり、故に世俗之を棄て、來りて纏繞する者なし、舊解多く舍を宿舍とし、人民に依賴し歸止せらるゝの義とす、庚楚子不釋然の意と矛盾す、故に今取らず、〔天鈞敗之〕齊物論に休乎天鈞とあり、又寓言に、始卒若環、莫得其倫、是謂天均、天均者天倪也とあり、造化を謂ふなり、其の義齊物論に已に詳なり、

備物以將形、藏不虞以生心、敬中以達彼、若是而萬惡至者、皆天也、而非人也、不足以滑成、不

て君と爲さんとして之を辭するより、南榮趎が道を學ばんとするを起し、遂に遙に老子を訪ひ來りて、苦心の極、終に至人の德を聞くを以て結ぶ、

【解義】〔能兒子乎〕郭象曰く、能く聞て學ぶ者は、自ら至るに非ず、苟も自ら至らざれば、則ち至言を聞くと雖も、適に以て經と爲すべし、何ぞ至るを得べけんや、故に學ぶ者は至らず、至る者は學ばざるなり、〔禍亦不至福亦不來〕禍福は失得に生じ、人災は愛惡に由る、今槁木死灰の如くなれば、無情の至りなり、則ち愛惡失得自りて來るなし、

宇泰定者、發乎天光、發乎天光者、人見其人、人有修者乃今有恒、有恒者、人舍之、天助之、人之所舍、謂之天民、天之所助、謂之天子、學者學其所不能學也、行者行其所不能行也、辯者辯其所不能辯也、知止乎其所不能知至矣、若有不即是者、天鈞敗之、

【大意】道は心の安定を以て得べく、學びて得べきに非ざるを言ふ、

【通釋】心宇の安らかに靜定せる者は、天然の光輝自ら發見する者とす、故に其心より發して內自ら照らすに、天然の智光に由りて人智に由らず、天光を發する者は、即ち聖人即ち至人なり、而るに凡庸の人は聖人を測る能はず、其の同く衆庶の間に在るを見て亦自己と同じき人たるを知るのみにして、天光を發して內照するの德あるを知らざるなり、人の心を靜定して道を修むることある者にして始めて天と其悠久を同くし、常德ありて變せざるに至る、是れ即ち謂はゆる宇泰定なり、其常德にありて變せざる者も、凡人より見れば、自己と同一なる人なるが故に之を捨てゝ敢て尊敬する者なく、敢て之を累はすに治平の事を以てする者なし、而して天は之を助けて

が心を擾亂せらるゝに至らず、たゞ衆人と與に怪異を爲さず、相與に謀議を凝らして事を爲さず、すべて私心を絶ちて、翛然として物に累らはされず、侗然と無知にして、世間に往來するなり、前に言へる所は衞生の經を謂へるのみにて、至人の德には非ず、

【解義】〔至人之德〕德は純全の本體、衞生は則ち其病を去る所以なり、〔相與交食乎地而交樂乎天〕兪樾曰く、徐無鬼篇に云ふ、吾與之邀樂於天、吾與之邀食於地とあり、此と文異にして義同じ、交は卽ち邀なり、古字たゞ徼に作る、文二年の「左傳」に、寡君願徼福於周公魯公とあり、此に邀食乎地邀樂乎天と云ふと語意正に相似たり、邀に作る者は後出の字、交に作る者は假借字なり、「詩」の桑扈篇に彼交匪傲を「漢書五行志」に匪徼匪傲に作る、卽ち其例なり、〔不以人物利害相攖〕攖は擾亂なり、

曰、然則是至乎、曰未也、吾固告汝曰、能兒子乎、兒子動不知所爲、行不知所之、身若槁木之枝、而心若死灰、若是者、禍亦不至、福亦不來、禍福無有、惡有人災也、

【大意】老子終に至人の德を說く、

【通釋】南榮趎曰く、然らば則ち今言はれし所は是れ至人の德の至りたるや、老子曰く、是れ猶未だ至人の德の至りならず、向きに我れ汝に能く兒子たれと曰ひたり、更に兒子に就て之を說かん、かの赤子は自ら動きて自ら爲す所を知らざるが如く、至人は自ら行きて何處に往くことを知らず、其身槁木の枝の如くにして、其心は全く火氣の無き灰の如し、前の衞生の經に於ては、赤子と爲るを學ぶに意あれども、此の至人の德は自然に赤子たるにて、天眞の全き者なり、此くの如くなれば、則ち死生已に變なし、更に禍の來ることもなく、福の來ることも無し、已に禍福の天より來るなければ、何ぞ更に人の災害あらんや、是をこそ眞の至人とは云ふなり、○篇首より此に至るまでを連ねて一文とす、先づ畏壘の民の庚桑楚を尊貴し

爲すなり、楊子の見る所の老莊皆曖に作るを知るべし、〔終日握而手不掜共其德也〕兪樾曰く、「說文」に掜字なく、角部に觬角觬曲也とあり、疑ふらくは卽ち此の掜字ならん、角を以て言へば、則ち角に從ひ、手を以て言へば則ち手に從ひ、觬を變じて掜と爲す、字の孳乳浸く多き所以なり、終日握而手不掜とは手拳曲せざるを謂ふなり、崔譔曰く、共は壹也、宣穎曰く、共は拱に同じ、王先謙曰く、赤子終日捲握す、而して物を握り以て其手に拱握するを必せず、乃ち德性固より然るなり、蓋し諸家皆共を下に屬して「其德を共にす」と讀み、宣王二氏は掜と共とを屬けて「手掜共せず」と讀む也、〔終日視而不瞚偏不在外也〕「釋文」に瞚又瞬に作る、同音、瞬は動也、宣穎曰く、外に偏向する所なく、視るも猶視ざるが如き也、〔與物委蛇而同其波〕委蛇は無心にして委曲に隨應する也、同其波は物波たては己も亦波たつ、老子の所謂和光同塵也、

南榮趎曰、然則是至人之德已乎、曰非也、是乃所謂氷解凍釋者、夫至人者、相與交食乎地而交樂乎天、不以人物利害相攖、不相與爲怪、不相與爲謀、不相與爲事、翛然而往、侗然而來、是謂衞生之經已、

【大意】　至人の德は衞生の經に異なるを言ふ、

【通釋】　南榮趎曰く、然らば則ち從前の心を改めて是の衞生の經に依り、兒子と同樣になれば、卽ち至人の德に合ふか、老子曰く、否、然らず、汝は久しく仁義に拘束せられ居りしを、今衞生の經を聞いて、始めて其拘束を免れたり、譬へば猶冬日の嚴寒によりて凍結したる氷が、春日の溫暖に逢ひ、解けて元の水と爲りたるが如き者なり、外力によりて水と爲りたるにて、自ら能く水と爲りたるに非ず、汝の拘束も外力の爲めに解けたるにて、自然に解けたるに非ざれば、未だ至人の德に合ふに及ばざるなり、さてかの至人なる者は、必ずしも山林に入らず、衆人と與に地に生ずる食物を取りて之に安んじ、衆人と與に天惠に浴して之を樂み、人物利害の中に生存しながら、爲めに我

きか、龜卜著筮を假るを待たず、道を履めば則ち吉にして物に徇へば則ち凶なるの理を知るか、能く分際に止まることを知るか、能く足ることを知りて已むを得るか、他人の心に效ふことを棄てて己の道を求むるに急なるを得るか、能く翛然として物に累はさるゝことなきか、能く侗然たる無知にして博識を求むること無きか、能く氣を專らにし柔を致すこと赤子の如くなり得るか、以上列擧する所、皆朴に返り淳に還るの道なり、更に最後の兒子に就て之を詳說して曰く、赤子は終日啼き續くれども咽喉嗄れざるは、聲の自然に任せて喜怒の念なく、其氣至て和すればなり、赤子が終日手を握り居るも、手指の屈曲して復た伸びざるに至らざるは、手の自然に握るに任せて、物を握り持つの意思無ければなり、赤子が終日目を開いて物を視るも、少しも瞬がざるは、目の自然に見るに任せて、心の外物に偏り向ふこと無ければなり、此の赤子の無心無念なるが如くに、足の自ら行くに任せて、心には何處に往くを知らず、居るに體を縱恣にして之に任せ、心に何事を爲すかを知らず、淡泊無心に物と隨應して、迹を混じ其波流を同くして、獨り自ら異にすることを爲さず、是れ卽ち衞生の經にして、生形を全くし深眇に藏するの法これに外ならず、

【解義】〔能抱一能勿失〕此の數語は老子と互に表裏發明すべし、焦竑曰く、能抱一能勿失は卽ち「道德經」の所謂載營魄抱一能勿離なり、無卜筮而知吉凶」は卽ち不出戶知天下、不窺牖見天道なり、能く止まるは卽ち知止なり、能已は卽ち知足なり、舍諸人而求諸己は卽ち明自勝者强なり、翛然は卽ち氾兮其可左右なり、侗然は卽ち渾兮其若濁なり、兒子は卽ち專氣致柔能嬰兒なる也、〔能無卜筮而知吉凶乎〕王念孫曰く、吉凶當に凶吉に爲るべし、一失吉韻と爲り、止已己韻と爲る、「管子」心術篇に、能專乎、能一乎、能無卜筮而知凶吉乎とあり、是れ其證なり、〔翛然〕累はさるゝ所なき貌、〔侗然〕無知の貌、〔兒子終日嗥而嗌不嗄〕嗥は號と音通、ナクと訓す、嗌は咽喉なり、兪樾曰く、「釋文」に嗄本作嚘、音憂となり、當に之に從ふべし、「老子」の終日號而不嗄を、傅奕本には㰸に作る、卽ち嚘の異文なり、「揚子大玄經」に夷次三日柔、嬰兒於號、三日不嚘とあり二宋陸王本皆是くの如し、蓋し柔と嚘とを以て韻と

【大意】 南榮趎自ら心の病狀を陳して衞生の經を問へるなり、

【通釋】 老子南榮趎を內外韄にして復た之を如何ともする能はずと言ひて 趎を抛げたるを以て、趎は病人の譬を設けて自ら其心狀を說きて曰く、邑里中に病人あるとき、同里の人が見舞に往きたるに、病人自ら其病の狀況を委細に陳述せり、此の如く自ら病の病たることを知る者は、其病輕くして猶ほ未だ眞の病に至らざる者なり、病の身に在るを知らず之を言ふ能はざる者こそ眞の病者なれ、趎の若きは、初め身の病あるを知らざりしも、夫子より大道を聞くに及びて、始めて其病を知りて悲愁するは、譬へば猶藥を飮みて反つて病を加へたるが如し、今趎自ら病狀を言ひ得ることかくの如くなれば、趎の病は猶未だ甚だ深しと謂ふべからず、請ふ夫子遂に趎を敎へよ、趎は衞生の常法を聞かんことを願ふなりと、病の譬を承けて衞生と云へるにて、卽ち全形抱生して身を深眇に藏するの法を問ふなり、

【解義】「願聞衞生之經而已矣」衞生は卽ち抱生なり、後世衞生の熟字は此より出づ、經は常なり、已は止なり、〔加病〕元嘉本に知病に作る、

老子曰、衞生之經、能抱一乎、能勿失乎、能無卜筮而知吉凶乎、能止乎、能已乎、能舍諸人而求諸己乎、能翛然乎、能侗然乎、能兒子乎、兒子終日嘷而嗌不嗄、和之至也、終日握而手不掜、共其德也、終日視而不瞚、偏不在外也、行不知所行、居不知所爲、與物委蛇而同其波、是衞生之經已、

【大意】 老子衞生の經を說く、

【通釋】 老子曰く、衞生の經は左の如し、能く純一なる性を保持するか、能く其性を自得して失ふことな

知るを以て、其貴ぶに足らざるを悟り、日日自修して其好む所の道德を招き來らしめ、惡む所の仁義を除き去らんと勉むること十日に及べども、猶未だ盡く仁義を去りて道に契合すること能はず、是を以て自ら悲愁して再び老子に見えて敎を請へり、老子曰く、汝自修して心を洗濯し水を洒ぎて汚穢の仁義を除去するの工夫已に熟したるや否や、今其容色を見るに、鬱々乎として憂愁を帶び、而して其中より津津と漏れ出るの氣を見るに、猶かの惡むべき者の未だ全く去り盡くさざる者あり、是れ掃除未だ行屆かざるなり、外に在る耳目の聲色の爲めに制縛せられたる者は、耳目を纏繞して把捉すること能はざれば、內に鍵かけ、之を拒ぎて內に入らしめざるを要す、內に在る心が名利に制縛せられたる者は、心を纏繞して把持すること能はざれば、外に鍵かけ、之を拒ぎて外に出てざらしむるを要す、斯くすれば內外相通せずして、之を救濟するを得れども、外の耳目と內の心と互に制縛せられたる者は、其病深くして、道德ある者と雖も之を把持して救濟する能はざるなり、而るを況や未だ道德を心に得ず、纔に道德に依り沿うて行ふ者に於ては、之を敎化する能はざるは固よりなりと、內外韄者は南榮趎を指し、道德は老子自ら指し、放道而行者は庚桑楚を指し、南榮趎の病深くして敎へ難きを言うて之を激勵したるなり、

【解義】〔津津乎〕「釋名」に津進也、汁進出也とあり〔外韄者不可繁而捉〕「三蒼」に云ふ、韄は佩刀の靶韋なりと、因て繫縛の義に活用す、兪樾曰く、繁疑ふらくは繫字の誤ならん、繫俗に繳に作る、「漢書」司馬相如傳の如淳注に云ふ、繳繞猶纏繞と、此れ繫而捉と繆而捉とを以て並言し、繫は繫繞を謂ひ、繆は綢繆を謂ふ、「廣雅釋詁」に繫と綢繆と竝びに纏と訓ず、是れ其義一なり、繫繁形似て誤りを致すのみ、

南榮趎曰、里人有病、里人問之、病者能言其病、然其病病者、猶未病也、若趎之問大道、譬猶飲藥以加病也、趎願聞衞生之經而已矣、

諸海也、汝亡人哉、惘惘乎汝欲反汝情性而無由入、可憐哉、

【大意】　老子前の與人俱來の言を說明し、且つ南榮趎の道を求めんと欲し、猶知仁義に拘束せられて迷惑するを憐む、

【通釋】　老子曰く、さきに吾汝の眉睫の間を見て、汝か心中に巨多の疑問を挾みて來りしを知り得たり、故に何ぞ人と偕に來るの衆きやと曰ひしなり、今汝が三言を擧げて問ふによりて、前の吾言の誤まらざりしを信にせり、汝は知仁義を以て人の爲めにせんとし、又道を求めて我が爲めにせんと欲し、兩者の間に迷うて失神し、宛も父母を喪へる者が、竿を揭げて目標と爲し、茫茫たる廣き海に之を求めんとするが如し、必ず之を得べからず、又逃走者が外に出奔し、常に故鄕を慕ひて終身憂愁しながら、返るを得ざるが如し、何となれば汝は其情性の本に返らんと求めながら、猶區區たる知仁義に拘束せられ、之を棄つる能はずして其性を失ふを以て、迷惑して道に入るに由し無きなり、豈憐むべからずや、

【解義】　〔向吾見若眉睫之間〕向は一本に嚮に作る、義同じ、睫は目毛なり、〔若規規然〕若は汝なり規々然は失神の貌、一に云ふ細小の貌、〔惘惘乎〕憂愁して自得せざるなり、

南榮趎請入就舍、召其所好、去其所惡、十日自愁、復見老子、老子曰、汝自洒濯、孰哉、鬱鬱乎、然而其中津津乎猶有惡也、夫外韄者、不可繁而捉、將內揵、內韄者、不可繆而捉、將外揵、外內韄者、道德不能持、而況放道而行者乎、

【大意】　南榮趎自修功無きを愁ひて、再び老子に謁し、老子其病の深く敎へ難きを言うて之を激勵す、

【通釋】　南榮趎請うて老子の屋舍を借りて之に寓居し、既に老子の言によりて仁義の爲めに迷惑するを

は問を聞に作る、郭慶藩曰く、問は猶ほ聞の如し、問聞古通用す、

老子曰、何謂也、南榮趎曰、不知乎、人謂我朱愚、知乎、反愁我軀、不仁則害人、仁則反愁我身、不義則傷彼、義則反愁我己、我安逃此而可、此三言者、趎之所患也、願因楚問之、

【大意】 南榮趎始めて疑ふ所の三言を擧げて老子に問ふ、

【通釋】 老子曰く、汝が問はんと欲するは何の言なるぞと、是に於て南榮趎心漸く定まり、徐に問うて曰く、吾が知を去りて無知となるときは、人よりして我を名づけて朱愚卽ち白癡純愚と謂ふ、之に反して知を運らして世に立ち事に當れば、身を危くするの禍を致して我身を愁苦せしむ、又仁を去りて不仁を爲せば、自己には利なれども、人を害すること甚し、之に反して仁を施し物を利すれば、煩累多くして吾身を愁苦せしむ、又義を棄てて不義を行へば、自己は益するも、人に損傷を加ふること甚し、之に反して義を行ひ事事宜きに適せんとすれば、心を外に馳せて我身を愁苦せしむ、此の人を損害し我を愁苦するの患は、如何にして之を免るゝを得べきか、此の知仁義の去否に就ての三言は、實に趎の患ふる所なり、願はくは庚桑楚の弟子たるの緣故によりて之を問はんと、

【解義】 〔人謂我朱愚〕 陸樹芝曰く、朱字は衍文、或は趎字の誤ならん、郭崇燾曰く、「左傳」襄公四年傳の杜注に短小を朱儒と曰ふとあり、朱愚は蓋し智術短小の謂ならん、蘇輿曰く、朱愚は猶顓愚の如し、朱と顓とは雙聲字なりと、今蘇說に從ふ、〔義則反愁我己〕 我己は我身と云ふに同じ、前に我軀我身と曰ひ、此に我己と曰ふ、三項皆字を異にして義同じ、

老子曰、向吾見若眉睫之間、吾因以得汝矣、今汝又言而信之、若規規然若喪父母、揭竿而求

卵」越雞は小雞なり、一說に荊雞なり、伏は卵を翼下に覆うて孵化すること、鵠一本に鶴に作る、〔魯雞〕大雞なり、後世には蜀雞と云ふ、〔其德非不同也〕「成疏」に云ふ、雞に五德あり、頭に冠を戴くは禮なり、足に距あるは義なり、食を得て相呼ぶは仁なり、時を知るは智なり、敵を見て能く拒ぐは勇なり、

南榮趎贏糧、七日七夜至老子之所、老子曰、子自楚之所來乎、南榮趎曰、唯、老子曰、子何與人偕來之衆也、南榮趎懼然顧其後、老子曰、子不知吾所謂乎、南榮趎俯而慚、仰而歎曰、今者吾忘吾答、因失吾問、

【大意】南榮趎初めて老子を見、老子奇言を以て、先づ南榮趎を驚かす、

【通釋】是に於て、南榮趎糧食を擔ひ、七日七夜の間旅行して、老子の住所に至り、之に謁見したり、老子曰く、子は庚桑楚の所より來りしか、南榮趎對へて曰く唯、唯は敬應の聲なり、老子又曰く、子は何ぞ多人數と俱に來れるやと、南榮趎は只一人にて來れるに斯く言はれしを以て、驚きて眞に我が後に從ひ來りし者あるかと思ひ、首を回らして其後を顧みたり、老子之を見て曰く、子は今吾が言ひたる意を解せざるかと、蓋し老子南榮趎の多くの疑ひを抱きて來りし顏色を見て、態と此の奇言を發して之を驚かし、後に己を信じて敎の入り易からしむる素地を作りしなり斯く言はれても南榮趎は猶ほ其意を知るを得ざるを以て、頭を低れて自ら慚ぢ、又頭を擧げて歎息して曰く、今吾は心茫然として、何と答へて宜きか、其答ふべき言を忘れ、又併せて先生に問はんと欲せし事をも忘れたりと、驚懼惶惑の狀見るが如し、

【解義】〔贏糧〕「方言」に贏は儋なり、齊楚陳宋の間之を贏と謂ふとあり、〔懼然〕郭慶藩曰ふ、懼然は卽ち瞿然なり、蓋し驚く貌、其正字は䀠に作る、「說文」䀠の下に、目を擧げて驚くは䀠然なりとあり、䀠は正字にして、瞿懼は皆借字なり、〔因失吾問〕元嘉本に

すれども能はず、聾者の耳狂者の心に於けるが如し故に今夫子我を敎へて汝の形を全くし、汝の生を抱ち、汝の思慮をして營々たらしむる勿れと曰はれ、趎は勉めて道を聞かんとすれども、徒らに夫子の聲の吾耳に達するのみにて、吾心に之を通じて悟らしむること能はざるなり、嗚呼之を奈何せん、

【解義】〔心之與形〕心は心臟なり、古人は人の精神は心臟に在りと信じ、心を「コヽロ」の義に用ひたり、心の字は卽ち心臟の形象なり、〔形之與形亦辟矣〕上の形は耳目を指し、下の形は心を指す、辟は相著くなり、

庚桑子曰、辭盡矣、曰、奔蜂不能化藿蠋、越雞不能伏鵠卵、魯雞固能矣、雞之與雞、其德非不同也、有能與不能者、其才固有大小也、今吾才小、不足以化子、子胡不南見老子、

【大意】庚桑子自ら才小にして敎ふる能はずと謙して南榮趎に老子に學ぶを勸む、

【通釋】庚桑子曰ふ、我の汝に敎へんとする所は前に言ひたる全形抱生云々の數語にて既に盡きたり、此上に復た敎ふべき者なし、古語に曰ふ、小蜂は豆の葉に生ずる大青蟲を化して己の子と爲す能はず、越雞は小にして鵠の卵を孵化する能はず、而して魯雞は形大なるが故に、固より鵠卵を孵化し能ふと、越雞も魯雞も共に雞なれば、其德は同じからざるに非ざるなり、而るに斯く能くすることゝ能くせざることゝあるは、其才に固より大小あればなり、今吾の才は小にして、子を敎化して道に至らしむること能はず、子何ぞ南に往きて吾師老子に謁見して敎を受けざるや、老子の才は魯雞の如し、必ず能く子を化して道に至らしめんと、

【解義】〔曰奔蜂不能化藿蠋〕或は曰ふ、曰の字は衍文ならん、又一說に、成語を擧ぐるが爲めに加ふるなりと、奔蜂は小蜂なり、一に云ふ土蜂なりと、藿蠋は豆藿中の大青蟲なり、奔蜂は能く桑蟲を化して己の子と爲せども、藿蠋を化する能はず、〔越雞不能伏鵠

る丶堯舜を小とし身を深眇に藏するの地位に至り得べきや、庚桑子對へて曰く、物を逐はずして汝の形骸を全くせよ、其分内を守り汝の精神を安定して之を保持せよ、斯くして精凝り形逸して、復た知を役し思慮を擾すこと勿れ、此くの如くすること三年に及ばば、則ち能く仁を捐て知を棄て亂本を去りて身を深眇に藏するの意を悟るべしと、

【解義】〔南榮趎〕南榮は姓、趎は名なり、「漢書」の古今人表には南榮疇に作り或は儔に作り又壽に作る「淮南子」脩務訓には疇に作る、〔蹵然〕驚悚の貌、〔抱汝生〕兪樾曰く、「釋名」に抱保也相親保也とあり是れ抱と保と義相通ず、抱汝生は保汝生なり、〔營營〕心の動き亂れて定まらざるを云ふ、

南榮趎曰、目之與形、吾不知其異也、而盲者不能自見、耳之與形、吾不知其異也、而聾者不能自聞、心之與形、吾不知其異也、而狂者不能自得、形之與形、亦辟矣、而物或間之邪、欲相求而不能相得、今謂趎曰、全汝形、抱汝生、勿使汝思慮營營、趎勉聞道達耳矣、

【大意】南榮趎道を聞くに勉むれども得難きを言うて、自ら歎息するなり、

【通釋】目の形たる人々皆同く、吾其異なるを知らざるなり、而るに盲者は目ありながら自ら物を見ること能はず、耳の形たる人々皆同く、吾其異なるを知らざるなり、而るに聾者は耳ありながら自ら聲を聞くこと能はず、心の形たる人々皆同く、吾其異なるを知らざるなり、而るに狂人は心ありながら自ら事理を悟り得ること能はず、耳目と心とは共に一身に在りて互に相著き連なれり、而るに吾耳と心との間には何物がありて隔つるにや、耳は聞く所を心に知らせんとすれども能はず、心は耳の聞く所を知らんと

る庭園に蓬蒿の如き雜草を植ゑて荒蕪せしめんとするに同じ、其の賢を尊び能に授くるは、髪の毛を一本づゝ選びて櫛を入れ、米を一粒づゝ數へて炊くが如し、誠に微細なる所にこせ〳〵と心知を勞する者なり、此くの如き小細工にては何ぞ以て一世を濟うて安全ならしむるに足らんや、たゞ世を濟ふ能はざるのみならず、又大害あり、賢者を擧げ用ふれば、民互に競爭して勝を求めんとして相傷害し、才知ある者を任用すれば、民愈〻知を研きて互に相欺き相盜むに至る、故に此の賢とか知とかの數物は以て民心を厚くするに足らず、反て民心を薄くする者なり、民の利を好むことは甚だ勤むる者にて、爲めに子として父を殺す者もあり、臣として君を殺す者もあり、白晝に盜賊を爲し、日中に牆を破りて人家に侵し入るの甚だしきに至らんとす、吾今明かに汝に大亂の根源を語らん、其源は堯舜の間より生じて、其末弊は千世の後に遺存す、千世の後に至らば、其れ必ず人と人と互に相食ひ合ふの殘忍をも敢てするにも至らん、汝は堯舜を聖人として引證すれども、斯く大亂の根源たる人なれば、之に效ふには足らざるなり、

【解義】〔是其於辯〕其は堯舜を指す、辯は辨と通用し、別なり、是非善惡賢愚貴賤貧富等を分つを云ふ、老莊の道は此等を齊くして分たず、〔日中穴阫〕阫は培と同じ、「淮南子齊俗篇」鑿培而遁之の高誘注に曰く、培屋後牆也と、

南榮趎蹵然正坐曰、若趎之年者已長矣、將惡乎託業以及此言邪、庚桑子曰、全汝形、抱汝生、無使汝思慮營營、若此三年、則可以及此言也、

【大意】南榮趎道を學ぶの方を問ひ、庚桑子之に略答す、

【通釋】弟子中の南榮趎なる者、深く庚桑子の言に感動し、蹵然と驚き懼れたる有樣にて、坐を正しくして曰く、趎の年齡の如きは已に長じたり、精神已に暗昧となれり、然れども今より發憤して道を學ばんとす、如何なる心掛を以て學業に從事せば、夫子の言は

ふことなく、獸は如何ほど高き山にても厭ふことなく、愈〻高く愈〻深からんことを願ふなり、有道の士の其の天より稟けたる身體及び性命を全くして之を毀損せざらんとする人も、亦此の鳥獸の如く、世に出で人に接すれば禍害を蒙るの恐れあるを以て、高位名聲を避け、其身を深く隱藏して人に知られざらんことを欲するなり、故に我は此地に君たるを欲せず、

【解義】〔函車之獸〕函は含と音通なり、車を口中に含み得るの獸にて、其巨大なるを云ふ、〔介而離山〕介は獨なり、「方言」に獸無偶曰介とあり、〔碭而失水〕碭は蕩の假借なり、跌宕して誤つて水を失ひ、地上に在るをいふ、〔藏其身也不厭深眇〕眇は微なり、深眇は深く微にして見難きをいふ、此一句は庚桑楚の守る所なり、所謂偏得にして大道に達せざる所乃ちこゝに在り、

且夫二子者又何足以稱揚哉、是其於辯也、將妄鑿垣墻而殖蓬蒿也、簡髮而櫛、數米而炊、竊竊乎、又何足以濟世哉、擧賢則民相軋、任知則民相盜、之數物者不足以厚民、民之於利甚勤、子有殺父、臣有殺君、正晝爲盜、日中穴阫、吾語汝大亂之本、必生於堯舜之間、其末存乎千世之後、千世之後、其必有人與人相食者也、

【大意】一層を進めて、弟子の引きし堯舜の治は大亂の本にして、取るに足らざるを辨駁す、

【通釋】又汝は堯舜の賢を尊び能に授くるを引きて證と爲せしも、彼の二人の如き者は何ぞ聖人として稱贊するに足るの人物ならんや、堯舜は仁義を崇び、因て善惡を分ち、是非を分ち、賢愚を分ち、貴賤を分ち、斯く物に辨別を立てゝ人性の自然を損ふは、世の濁亂を促す者にて、譬へば人家の垣を破りて清潔な

溝中に於て擅に往復周圍して之を樂む、高さ六七尺位の小丘には、大獸は其身體を隱くすことも能はざるが故に此に棲まざるも、小狐は反つて之を善しとして住居するなり、今先生自ら老子の敎に背き老子に及ばずとて之を厭はるれども、其の老子に及ばざる所が反つて畏壘の如き僻邑に君として適當なるなり、且つ賢者を尊貴にし材能ある人に位を授け、善ある人は先づ用ひて其れに利祿を與ふるは、古の堯舜よりして其の爲す所皆此くの如し、而るを況や畏壘の百姓に於て、何ぞ先聖の爲す所に倣はざるを得んや、先生幸に此理を思うて、百姓の請ひに聽從して、此地の君と爲られよ、

【解義】〔尋常之溝〕八尺を尋と曰ひ、尋の倍を常と曰ふ、尋常の溝は則ち「周禮」洫澮の廣深なり、洫は廣さ深さ共に八尺、澮は廣さ二尋、深さ二仞、洫澮は共に田間の小溝なり、〔鯢鰌爲之制〕鯢は小魚にして脚ある者、鯨鯢の鯢に非ず、制は折なり、身を曲折し自由に遊泳するを云ふ、〔步仞之丘陵〕六尺を步と爲し、七尺を仞と曰ふ、廣さ一步高さ一仞の小丘なり〔蘖狐爲之祥〕蘖狐は小狐なり、祥は善なり、小狐は小丘を以て棲むに善しと爲すなり、〔先善與利〕亢倉子には「糈善就利」に作る、〔以然〕以は已と同じ、

庚桑子曰、小子來、夫函車之獸、介而離山、則不免於罔罟之患、呑舟之魚、碭而失水、則蟻能苦之、故鳥獸不厭高、魚鼈不厭深、夫全其形生之人、藏其身也、不厭深眇而已矣、

【大意】形生を全くせんとする人は其身を深く藏して、世事に接せざるを言うて、畏壘の君と爲るを謝絕するなり、

【通釋】庚桑子弟子の言ふ所を駁して曰く、小子來り進め、車を口に含むほどの大獸にても、單獨になりて山を離れ出づれば、獵夫の網にかゝるの禍を免るゝ能はず、舟を一ト呑みにするほどの大魚にても、飛びはねて水を出で地上に在れば、小蟲の蟻が能く之を苦む、故に鳥は栖を造るに如何ほど高き枝をも厭

下に不レ釋二然於一老聃之言一とあるに照らせば、南面は老子の居る方に向ふなり、不二釋然一とは心に憂あつて消釋せず、意樂まざるなり、〔弟子〕畏壘の人の敎を受くる者にて、後の南榮趎も此中に在るなり、〔正得秋而萬寶成〕兪樾曰く、正得レ秋の得の字は下文の豈无レ得而然一哉に涉りて入りたる衍文ならん、「易」說卦の兌正秋也、萬物之所レ說也の疏に正秋而萬物皆說成也とあるは、卽ち此文に本づくなり、且つ正秋而萬寶成にて文義已に足れり、必ずしも得字を加へずと、「成疏」に、天地は萬物を以て寶と爲す、故に萬寶といふとあり、元嘉本には萬實に作る、〔尸居環堵之室〕尸は死尸なり、死尸の寂然泊然たるが如くに、少しも動かずして居るを尸居といふ、一丈を堵と爲す、環は旋なり、四面各一堵なるを環堵と爲す、卽ち方丈室にて、小室を云ふ、〔如往〕如往は重語にして如も亦往くなり、〔竊竊〕察察に同じ、知を用ふるをいふ、〔俎豆〕俎は肉を載する者、豆は脯を盛る者、共に祭りの器具なり、前の尸祝社稷を承けて、尊奉して君と爲すの意とす、〔我其杓之人邪〕杓音的、標的卽ち「マト」なり、天道の知らず識らずの間に行はるゝが如く、至人の德の顯はれて人の歸往する所を知らざるが如くなる能はず、尊奉して君と爲さんとせらるゝは則ち標的と爲るなり、〔不釋於老聃之言〕老聃は功成りて居らず、長じて宰せずと云へるに、今楚の畏壘の君と爲れば其言に背く、故に釋然たる能はずして樂まずとなり、

弟子曰、不レ然、夫尋常之溝、巨魚無レ所レ還二其體一、而鯢鰌爲二之制一、步仞之丘陵、巨獸無レ所レ隱二其軀一、而孽狐爲二之祥一、且夫尊レ賢授レ能、先レ善與レ利、自レ古堯舜以然、而況畏壘之民乎、夫子亦聽矣、

【大意】弟子庚桑楚に畏壘の君と爲るべきを勸む、

【通釋】弟子聽かずして曰く、先生の畏壘の君と爲るを欲せざるは非なり、之を譬ふれば、八尺や十六尺位の小溝には、鯨の如き大魚は身動きすることも能はざるが故に、此に在らざるも、鯢や鰌の如き小魚は

庚桑子聞之、南面而不釋然、弟子異之、庚桑子曰、弟子何異乎予、夫春氣發而百草生、正得秋而萬寶成、夫春與秋、豈無得而然哉、大道已行矣、吾聞至人尸居環堵之室、而百姓猖狂不知所如往、今以畏壘之細民、而竊竊然欲俎豆予於賢人之間、我其杓之人邪、吾是以不釋於老聃之言、

【大意】庚桑子、畏壘の民の己を尊奉して君と爲すを悦ばざる理由を言ふ、

【通釋】庚桑子は畏壘の人民が己を尊奉して君と爲さんとするを聞き、南に向つて坐し、心に釋けざる所ありて樂まざる色あり、君主とせらるゝは人情の皆悦ぶ所なるに、庚桑子の獨り樂まざる色あるを見て、弟子之を怪みて其故を問ひたるに、庚桑子答へて曰く、弟子は何故に我の君とせらるゝを樂まざるを異むや、試みに天地生育の狀を見よ、春氣發すれば、凡百の草皆萠生し、秋に至れば萬物實を結びて成熟す、是れ春と秋とが自ら之を爲すに非ず、天地自然の氣を得て生成の功を成すに非ずや、されば知らず識らずの間に天地化育の大道は已に其間に自ら行はれて萬物之を知らざるなり、又至人は其身環堵の室とて、至小の室に隱居して、爲す所なきも、其德自ら百姓に及び、百姓皆悠々自得して其生を樂み、而して何人の德によりて之を致せしやを忘れて、之に歸往するを知らずと聞けり、然るに今畏壘の細民が其地の大穰を以て我の德なりと爲し、我を世の賢知の人と同樣にして尊奉せんとするは、是れ吾德の未だ至らざる所あるが爲めなり、我は猶ほ物の標的と爲る小人物たるを免れざるか、斯くては老聃の敎旨に背くを以て吾は此地の人に尊奉して君とせらるゝを樂まざるなりと、

【解義】〔南面而不釋然〕前に北居畏壘之山とあり

民相與言曰、庚桑子之始來、吾灑然異之、今吾日計之而不足、歲計之而有餘、庶幾其聖人乎、子胡不相與尸而祝之、社而稷之乎、

【大意】 畏壘の民庚桑楚の德化の效を稱し、之を尊んで君と爲さんとするを言ふ、

【通釋】 老聃の弟子に庚桑楚といふ人あり、老聃の道の一偏のみを得て、北の方畏壘といふ山に住居し、其臣僕の分明に知を飾る者は之を棄て去り、其婢女の物を扶助して仁を爲す者は之を遠ざけ、たゞ淳朴なる者のみと居り、外飾せずして勞働する者のみを使役せり、此くの如くして居ること三年に及び、畏壘の民其風に感化せられ、仁知を去りて專ら力耕したれば、諸穀大に豐穰せり、是に於て畏壘の民共に相談じて曰く、庚桑子の先年始めて此地に來りし時に於て、吾は早く已に其の常人に異なる所ある人と思ひしが、今果して然り、庚桑子の此地に及ぼせる效を視るに、日々如何程と計ふれば足らざれども、一年の久しきに及びて之を計ふれば大利益あること此くの如し、されば彼の庚桑子は殆ど聖人ならんか、何ぞ一郷の人々共に之を尊敬して此地の君と爲さゞるやと、

【解義】 〔老聃之役〕 老子の弟子なり、古人の師に事ふる、其使役に供し、艱危を憚からず、故に弟子を役と稱す、〔庚桑楚〕 庚桑は姓、楚は名なり、「列子」の仲尼篇には亢倉に作る、〔畏壘〕 山の名なり、魯に在り、〔其臣〕 臣は僕隷なり、〔畫然知〕 畫然は分明の貌、卽ち分明に他人と異にして己の知あるを飾るをいふ、〔挈然仁〕 挈は提挈にて、手を牽きて人を助くる仁愛をいふ、〔擁腫〕 質樸にして醜なる者、〔鞅掌〕 容儀を飾らず、勞力する者、〔畏壘大壤〕 壤は穰に通ず、豐穰なり、〔灑然〕 驚き怪む貌、〔日計之而不足歲計之而有餘〕 小利近功無く、久くして方に其大益あるを見るを言ふ、〔尸而祝之社而稷之〕 尸は祭の主、卽ち神位に立つ「カタシロ」、祝は祭を司る者なり、社は土の神、稷は穀の神なり、故に尸祝し社稷するは、神の如くに之を尊敬して君と爲すの意なり、

雜篇

凡べて十一篇あり、莊周の自ら作りたる者に非ざるは言を待たず、且つ文理淺薄にして、道に深からざる者の作かと疑はしとして、郭象は外篇の外に又雜篇なる名目を立て、此十一篇を收めたる者と覺ゆ、故に後世莊子を解する者、雜篇に至りては、往々闕きて省みざる者あり、而も其內亦精言妙理、內篇と互に相發明するに足る者あり、卽ち古之人、其知有ㇾ所ㇾ至矣の一段、冉相氏の一段、罔兩問ㇾ影の一段等の如き是れなり、又寓言及び天下兩篇の如きは、著作の意を見るに足るべき妙文にして、寓言篇は莊周の自序、天下篇は莊周の遺書を編纂したる者の序なりとする學者あり、雜篇の中に在りと雖も決して之を輕視すべからざるなり、且從來の注家多く內篇外篇に詳かにして、雜篇は疎略に涉り、甚きは全然舍て講ぜざる者あり、近世の講義錄類に於て尤も此の弊あるを免れず、今本解は竊に其の闕漏の幾分を補はんことを期せしを以て時に解釋の詳密に傾ける者あり、亦前兩篇と重複の嫌ありて、必しも精釋を要せざる者は既に(其篇に見ゆ)の註を以て略せる者あり、讀者請ふ之を諒せよ、

庚桑楚第二十三

首句中の三字を取りて篇の名としたるのみにて、其の意義なきこと、外篇の例に同じ、○本篇は老子の意を明らかにしたる者なり、初めに庚桑楚と南榮趎との問答を設け、庚桑楚の得る所は形骸を外にし聖知を棄絕するに止まり、此の以上に於て南榮趎を化する能はざるを言ひ、是に於て老子乃ち無爲にして爲さゞる無きの道を以て之に告ぐるなり、宜しく老子の注釋として讀むべし、

老聃之役有ニ庚桑楚者一、偏得ニ老聃之道一、以北居ニ畏壘之山一、其臣之畫然知者去ㇾ之、其妾之挈然仁者遠ㇾ之、擁腫之與居、鞅掌之爲ㇾ使、居三年、畏壘大壤、畏壘之

至理の言、至爲は至理の爲、言を去り爲を去るは、卽ち是無將無迎の境に遊ぶ者にして、要するに皆自得するものを云ふ、至言以下則淺矣までは「列子」黄帝篇にも見えたり、〔齊知之所知則淺矣〕知る所に由りて知り得たる者は、卽ち學問の力を假りたる者のみ、故に淺しと云ふなり、彼の所謂賢を見て齊しからむ事を思ひ、己を捨てゝ物を效ひ、知を運らして道を訪ふの類、道に造詣深き者の所爲にあらず、自得するにあらざればなり、齊は「ヒトシクス」と訓ず、物の長短なく揃ひたるの義、參差の反なり、卽ち我が智の知る所を以て都べて知らざるなきやうに揃へむとするの意なり、尙ほ云はゞ、我の知識をして衆人と甚相遠からざるやうにするを云ふ、此の「知」の字は、首章の知北遊の「知」の字と對照せば大に得る所あるべし、要するに、此の章の意、人をして知と故とを去り、至道の眞を體せしむるを云ふ、

名言

道不レ可レ致、德不レ可レ至、仁可レ爲也、義可レ虧也、禮相僞也、

生也死之徒、死也生之始、孰知二其紀一、

天地有二大美一而不レ言、四時有二明法一而不レ議、萬物有二成理一而不レ說、

昭昭生二於冥冥一、有倫生二於無形一、精神生二於道一、形本生レ於レ精、

人生二天地之間一、若二白駒之過一レ郤、忽然而已、

解二其天弢一、墮二其天袠一、紛乎宛乎、魂魄將レ往、乃身從レ之、乃大歸乎、

明見无レ値、辯不レ若レ默、道不レ可レ聞、聞不レ若レ塞、

物レ物者與レ物無際、而物有レ際者、所謂物際者也、

道不レ可レ聞、聞而非也、道不レ可レ見、見而非也、道不レ可レ言、言而非也、知二形形之不一レ形乎、道不レ當レ名

不三以レ生生二死、不三以レ死死二生、死生有レ待邪、皆有レ所二一體一、

有二先二天地一生者一物耶、物レ物者非レ物、物出不レ得レ先レ物也、猶其有レ物也、猶其有レ物也無レ已、

無レ有レ所レ將、無レ有レ所レ迎、

聖人處レ物不レ傷レ物、不レ傷レ物者、物亦不レ能レ傷也、

哀樂之來吾不レ能レ禦、其去不レ能レ止、

至言去レ言、至爲去レ爲、

宿のごとし、人にして外物の旅宿となるは、豈悲しからずや、萬物常に在りて吾が身常ならず、故を以て其の相値ふを喜びて、又其の留むる能はざるを悲しむは、益なき事なり、今の人唯今日の遇ふを知りて、他日の遇はざるを知らず、唯今日の能く遊び能く樂むを知りて、他日の能はざるを知らず、是人世無常に達せざるの說なり、それ是の無知無能といふ者は固より人の免れざる所なり、然るに、今務めて人の免かるゝ能はざる所を免かれむとすとも、いづくんぞ得べけむや、其の工夫の拙く、其の心の勞する事、又自から悲しむのみなり、此の故に、至理の言は言の言ふべきなく、至理の爲は爲すべきなし、唯其の自化に順ひ自然に聽いて、必ず其の知の知る所を齊しうして、知らざる所なからむと欲するは、其の知も亦深からず、畢竟其の知の知る所を以て、其の知の知らざる所を養ふを知らざるが故なりといふなり、

【解義】〔直爲物逆旅耳〕逆旅は疏に客舍也と見え、「左傳」僖公二年保于逆旅、注客舍也と見えたり、窮達の來るも禦ぐ能はず、哀樂の去るも禁ずる能はず、然るに凡俗の人は此の趣を了解せざるが、譬へば彼の客舍が物の停まる所となるがごとく、妄を以て眞となすは、深く悲歎すべしとなり、〔夫知遇而云云〕人の智に明闇あり、故に知るを得るものと知るを得ざる者とあり、畢竟知慮には各涯分あるを云ふ、〔知能能而云云〕藤東蔭曰く知能の知恐らくは衍と人の能に巧拙あり、能くせざる所は强ひて能くする能はず、人の能くする所亦限あり、是に由りて之を觀れば知ると知らざると能くすると能くせざると當に自然に付すべきなり、譬へば鳥の飛び、魚の游ぎ、蜘蛛の網を張り、蠶の繭を作る皆其の自然に率ひたるものにて其の性にあらざるなきがごとし、〔無知無能者云云〕我の知る所、彼或は知らず、彼の能くする所、我或は能はず、各分あるものなり、卽ち凡そ人は聖人にあらざるよりは、萬能なる能はず、故に知不知能不能稟生同じからず、機關各異なり、是一般人間の固より免るゝ能はざる所なりとなり、〔夫務免乎人之所不免者云云〕人の免れざる所の者は、分外智能の事とす、然るに、凡人は其の本分に安んずる事能はず、故に努めて之を免れむとするは、愚惑の甚しき者、深く悲しまざらむやとなり、〔至言去言云云〕至言は

るの意なり、

山林與、皐壤與、使我欣欣然而樂與、樂未畢也、哀又繼之、哀樂之來、吾不能禦、其去弗能止、悲夫、

【大意】　此には、是非は本來定在なく、皆人心の造す所に由りて、物と相順ひて内に役せらるゝを說く、

【通釋】　凡そ人の煩悶あれば、休樂を欲せざるものなし、一旦山林の景を見、皋壤の望に接すれば、欣然として快樂となす、既に樂しみて幾何ならざるに、今に感じ昔を傷めば、又哀みなき能はず、所謂、情事に隨ひて遷り、感慨之に係るといへるがごとき是なり、故に曠然として怡む中にして、又泣然として泣下るものあり、是故なくして樂しみ、故なくして哀む、哀みと樂みの行きかふ事を、吾が力之を禦ぐ能はず、又止むる能はず、悲しいかな、是に於て知る、世上の哀樂は計るに足らざるをといふなり、

【解義】　〔山林與皐壤與〕　山は高山、林は高林なり、皐は澤なり、「詩」に鶴鳴于九皋と見え又、「文選」上林賦に、亭皋千里、注に澤也と見え、又「廣雅」に皋池也と見えたり、皐は皋と同じ壤は「成疏」に與壤と見えたれば猶天地を天壤蓋壤といへるがごとく、地の意に用ゐたるなるべし、「莊子因」に曰く古藏本皐壤句下有與我無親四字、と、

世人直爲物逆旅耳、夫知遇而不知所不遇、知能能、而不能所不能、無知無能者、固人所不免也、夫務免乎人之所不免者、豈不亦悲哉、至言去言、至爲去爲、齊知之所知則淺矣、

【大意】　此には人の知能の及ばざる所を强ひて及ぼさむとする事の悲むべきを言ひて、心を自然に遊ばしむべきを說く、

【通釋】　上文に於て哀樂の去來する所由を案ずれば世人は皆身を以て直に外物に寄寓せらるゝ宛も旅

也と見えたり、廣大なる家屋の義、邦語に「ミヤ」と云ふは、敬稱なり、〔湯武之室〕湯は殷湯王、武は周武王、室は「說文」に實也從宀至聲、室屋皆從至、所止也と見え、段注に室屋者人所至而止也、と見え、又「釋名」に人物實滿其中也と見えたり、邦語に「ムロ」と云ふ、〔君子之人〕三皇五帝三王の類は、皆囿圃宮室などいひ、君子には人と云ふ、以上狶韋氏以下湯武之室に至るまでに就いて兩說なり、「郭注」には、言夫無心、而任化、乃羣聖之所游處と見えて、「成疏」にも狶韋、軒轅、虞舜、殷湯周武並是聖明王也、言無心順物之道乃是狶韋彷徨之苑囿、軒轅遨遊之園圃、虞舜養德之宮闈、湯武怡神之虛室、斯乃羣聖之所游而處之也と見えて囿圃宮室を汎く場處の義に解したり、陸樹芝宣穎等は囿大於圃、圃大於宮、宮大於室、言世遞降、而所遊亦遞降也と解せり、王先謙は曰く世愈降則所處愈順、聖人順時而安之と、〔君子之人云云〕君子之人以下況今之人乎までも「郭注」には夫儒墨之師、天下之難和者、而無心者、猶故和之、而況其凡乎と見えて「成疏」にも夫儒墨之師、更相是非、天下之難和者也、而聖人君子猶能順而和之、況乎今世人、非儒墨之師者也、隨而化之不亦宜乎と見えて、和し難き者も聖人が能く和するの事とせり、然るに、彼の「副墨」以下諸書には古之人若狶韋黃帝有虞湯武數聖之學、皆能自成一家、故曰囿圃宮室、與彼儒墨之中抗顏稱師者、皆不能與物俱化、但見是是非非互相溷濁、何況今人、抑何佐其然乎と見えたり、〔故以是非相韲也〕韲は音「セイ」、「クダク」と「マヅル」「ナル」との諸義に用ゐらる、本條は「郭注」及「成疏」に和也と見え、莊子音には、「アヘモノ」の意として、五味相奪、而後可以爲韲、故曰相韲と見えたり、既に大宗師篇に、韲萬物而不爲義の、司馬注に碎也と見え、又天道篇に韲萬物而不戾、注に變而相雜、故曰韲と見えたり、〔聖人處物不傷物〕聖人は以上の群聖君子師人の相是非軋轢するがごとくならず、物性の安んずる所に任せて、是非の心なし、卽ち物と化するなり、〔不傷物者云云〕既に物と化すれば、物も亦傷る事能はず、累はさるゝ所なし、所謂一も化せざるものなり、〔唯無所傷者云云〕其の心物に累はされずして、始めて人と相將迎する事をなす、是聖人にあらざれば、之に當る能はず、所謂唯聖者之を能くす

也、求多、相勝也、莫多、則不求相勝也、必與之莫多、言至道之人、必與物不求多以相勝也と見えたり、

狶韋氏之囿、黃帝之圃、有虞氏之宮、湯武之室、君子之人、若儒墨者師、故以是非相𩐈也、而況今之人乎、聖人處物不傷物、不傷物者、物亦不能傷也、唯無所傷者、爲能與人相將迎、

【大意】此には、上文を受けて、古今其の敎を有する者、互に相爭へども至道體得の聖人のみは無心至順なれば、超脫する意を說く、

【通釋】古より今に至るまで、其の敎旨を立てゝ一家をなす者、敎を其の徒に示し各守る所あり、以て一家をなす、故に狶韋氏には、狶韋氏の囿あり、黃帝には黃帝の圃あり、虞舜には虞舜の宮あり、般湯王周武王に湯武の室あり、而して君子の人若くは、儒家墨家等諸家の師たる者は皆各一家を成せる樣なり、而して其の敎大小廣狹の異ありといへども、自から窠臼を作して自から善とするは相同じ、然れども各、相是非して軋轢するは古人と雖ども既に此のごとし、況や今日の人に於てをや、益〻多く益〻甚しく物と化して傷らざるものはあらず、然るに、聖人は能く物に處して物を傷らず、故に物も亦傷る能はず、傷らざる者は物と化して是非同異の外に相忘れて相軋轢せずして、無事の境に化す、之を無將を以て之を送り、無迎を以て之を迎ふるものなりとなり、

【解義】〔狶韋氏の囿〕狶は音「キ」狶又狶に作る、三皇以前の帝號、既に外物篇に、且以狶韋氏之流、觀今之世と見えたり、囿は音「イフ」、「說文」に苑有垣也と見え、又、「呂覽」重已に、花囿園池、注に小曰囿、大曰苑と見え、其の他異說多し、姑らく「ヒロキソノ」とす、〔黃帝之圃〕圃は音「ホ」「ハタ」なり「說文」に種菜曰圃、從口甫聲と見え、「周禮」大宰二に園圃毓草木、注に樹果蓏曰圃と見えたり、〔有虞氏之宮〕虞は舜帝の發祥地の名、有は美稱、有虞と熟して氏の名とす、宮は「釋明」に宮穹也、屋見垣上穹隆然

して外化せざるものなり、それ物と同化して、其の痕跡なき者は其の實は一箇の物の爲に化せられざるものあり、故に能く物をして我が德に化せしむ、畢竟彼の化する者は卽ち化せざる者の流行なるのみ、乃ち聖人は無心なるが故に、物に隨ひて流轉して兩つながら其の胸中に滯り無ければ安くにか化する、化せざるとか云へるが如き區別あらんや卽ち一の化せざるものあり、萬事萬物と化せず、故に能く萬物を化するに足る、安くにか內心を以て外物を逐うて相順ふことあらんや、たとひ外物に暫く相順ふとも、亦能く其の分を守りて外物の來り投じて本分の外は多きを增すこと無し、能く之を體すれば無心の境に遊ぶを得とあり、

【解義】〔顏淵問乎仲尼曰〕顏淵は孔子の高足弟子既に屢〻前篇に見ゆ、〔無有所將云云〕將は送なり、「オクル」と訓ず爾雅釋言に將送也と見え、「詩」鵲巢に百兩將之と見えたるの「オクル」にて、說文に帥也とあるの義に由りて、其の物を帥ゐて先方へ連れゆく意と見るべし、送らず、迎へず、應じて藏せぬ事、明鏡の懸るがごとくなるは、聖人淸白の心性なり、此顏子が遊ばむとする境なり、故に其の所由を問ふとなり、〔外化而內不化〕外形は物に順ひて化すれども內心は寂然として動かざるを云ふ、卽ち內を守りて外を忘るゝなり、「宣注」に與物偕逝、天君不動と見えたり、〔內化而外不化〕內心物に觸れて變じ、外形物と相競ふを云ふ、卽ち外を守りて內を廢するなり、「宣注」に心神搖徙凝滯於物と見えたり、〔與物化者云云〕不化者とは一箇の化せざる者ありて存するを謂ふ、是に古の內化せざる者を再び言ふにて常に無心なれば物に化せられず、故に能く物をして我が德に化せしむるを得となり、尙云はゞ人の胸中必ず淫せず移らざる者ありて、然して後富貴を輕んずべく、必憂へず懼れざる者ありて然して後死生を能くす、是物と化するものは一も化せざる者と云ふなり、〔安化安不化〕此の二句は詰問の辭、化すると化せざるは意に係けざるなり、〔安與之相靡〕「成疏」に靡順也と見えて「シタガフ」の義、無心にして其の自化に任かすものにて、送迎して之に順ふにあらずとなり、〔心與之莫多〕物と相順ふと雖ども、各分に止まりて性外を加ふることなきをいふ、林雲銘曰く多求多

化は相離る可からざる關係と爲れば、物の先と爲るを得ずとなり、「宣注」に一有物出、已涉形器、不得爲先乎物者矣、〔猶其有物也〕造化は卽ち道にして道は虛無なれば本と物あるに非らず、但上句の如く物出不得先物也より宛かも一種の物(無形)あるが如し故に猶有其物也と曰へるなり、〔猶其有物無已〕上句の猶有其物の狀情千古萬古無窮の久に傳へて止息せざるを謂ふ、〔聖人之愛人云云〕聖人の心本と虛無を體し、愛憎好惡の偏なし、而かも其の人を愛し終に已む無き者は亦有物無已の義に鑑みて、之を爲す也、天地に先ちて生ずる造化の當初の虛無を法則と爲すに非らずとなりと、藤東畡曰く聖人制禮樂所因所損益法天而維持世運と、

顏淵問乎仲尼曰、回嘗聞諸夫子曰、無有所將、無有所迎、回敢問其遊、仲尼曰、古之人外化而內不化。今之人內化而外不化、與物化者、一不化者也、安化安不化、安與之相靡、必與之莫多、

【大意】此には、顏淵が孔子に無心の境に遊ぶの所由を問ひしに、孔子の答へられしを說く、

【通釋】孔子の高弟顏淵孔子に問うて曰はく、回嘗て之を夫子に承はりし事あり、聖人が外物に對しては明鏡の妍媸を藏せざるがことく、之を送る事もなく、迎ふる事もなし、而も其の物を化して乖かず、無心なりと承はりぬれど、いかにせば、其の地位に達すべきか、いまだ其の理を曉らねば請はくは其の所由を告け給はむ事をといふ、孔子曰はく、上古の人は純樸道に合する者多ければ、外物の爲に希望を起さず、欣厭を生せず、來れば之と應じ、去れば意を遺すことなく、其の心淸徹なり、譬へば鏡の鏡と相對するがごとく、一點の翳影なし、されば其の外に發する所行は物事に因て化し易はれども心は外物と倶に化する事なし、然るに、今の世の人は內心に欣厭の心を抱き事物を逐ひて內心既に外物に轉化せらる、而も表面には言說威儀を飾りて、昂然として人に對す、此內化

宛かも父から子、子から孫と生々息まざるが如く、千古萬古より無限に亙りて天地造化の事は已まざるなり、彼の聖人の人を愛することが終に已まざる者は、矢張り上述の理由なるに基きて、本と虚心にして何等愛情の觀念無きなれども、既に人と爲りて斯の世に生れたる以上は、胥共に助け助けられつゝ立ち行くよりして人を愛するなり、

【解義】〔仲尼曰已矣未應〕已は音「イ」、「ヤム」と訓ず、それ限りにやむの意、未は無なり「ナカレ」と訓ず孔子更に其の意を述べ、且つ冉求を戒めて、答をなすを得ざらしめむとて已矣未應矣と云へるなり、應の意義は既に上條に述べたり、〔不以生生死云云〕此の次の不以死死生の二句は上文「未有子孫而有子孫」を承けて言へり、さて人の世に處るや、生あれば必ず死あり、然れども、已に生あるを以て人の死者をして生せしむるにあらず、又已に死あるを以て人の生者をして死せしむるにあらず、猶未だ彼の子孫に至りて獨り自ら子孫あるに非ずして此の父祖なる軀殼あれば必ず子孫あるがごとし、極めて對待的關繫を有せり、然れども、分解して云へば、子孫は自から子孫軀殼は自から軀殼、初より相待つあるに非ず、死生も亦然り各自から生は生にして死は死と一體を成せり、豈待ちて然るにあらずと也、〔死生有待邪〕死と生とは、各、獨化にして相待つ事あるかと疑問の辭なり、〔皆有所一體〕死と生とは各自から一體を成して、相待たずと斷決の辭なり、一體は、林雲銘曰く「猶一本也、卽一理也、」と見えたり、岡松甕谷曰く所下著脫一字、或是得字と、〔有先天地生者物邪〕「宣注」に反喚一句と見えたり、人の死生は生者自から生し、死は自から死し、古より今に至るまで相繼ぎて絕ゆる事なし、所謂古今終始なき者なり、それ人の死生より是のごとし、而して復、所謂造化と云ふ者あり、造化は天地に先だちて生ず、名づけて物となすべからす、之を天地に先だちて生ずる者ありと云ひ、又物ならむやと云ふなり、〔物物者非物〕物物者は造化を謂ふ、造化は能く萬物をして其の形を成すを得しむ、是固より形而上にありて、物と類を爲す者にあらず、故に「物物者非物」と云ふなり、〔物出不得先物〕造化は物を物として物に非れども、既に物を物とすれば是れ造化の分體物に移りて出づるなり、換言すれば物と造

生者、物邪、物物者非物、物出不得先物也、猶其有物也、猶其有物也無已、聖人之愛人也、終無已者、亦乃取於是者也、

【大意】此には、冉求の對へを止めて、無より有に之き、聖人の人を愛する自然の運に順ふを說く、是第三節なり、

【通釋】孔子の語に對して冉求未だ答ふる事あらざる際に、孔子は其の答をなさむとするを止めて、更に重ねて曰く汝已めよ應ふる無れ、汝天地の先を知らむとせば、物の生死を觀て、知るべし、それ物の生ずるも死するも天地の所爲たり、生あれば必ず死あり、死あれば必ず生あり、生と死とは固より對し待つ者なり、然れども、物は己の生ずるが爲めに他の死する者を死と共に生ぜしむることを得ず、亦己が死するが爲めに他の生ずる者を死せしむることを得ず、此に由りて觀れば彼の死と生とは相互に對し待つこと有らんや、生と死とは皆夫れ〳〵に一體なる場合がありて相互に待ち合ふ者にあらず、生と死と各、一體と爲りて働く處あり、されば物の生死は自然に相分かれて働くものとすれば、萬物を造り出だせる造化は、果して如何にして存在するか、天地に先だちて生ずる者あり、是れ物なるか、一面より觀て既に生と云へば、成程物たるに相違なかるべし、然れども其實是れ道にして物にはあらず元來萬物を各々夫れ〳〵に物を造り上ぐる物は萬物中の物にあらずして物外に立ちて超越せる者ならざるべからず、若し物がありて天地を造り上ぐるとすれば、卽ち造る者造らるゝ者共に均く同一の地位にあり、豈に獨り天地に先だちて立つことを得んや、唯だ其れ物外に超越せる道なればこそ之に先だちて萬物の根本たるを得るなり、然しながら道も萬物を生するが爲めに出でたる以上は、萬物を伴ひ率ゐて行かざるべからず、固より宇宙間にありて萬物より道のみが獨り先だつことを得ず、宛かも前に述べし彼の生と死とは對待的の一面を有すと共に、一面より觀れば然らざるに似たるが如し、道既に物と伴ひ行くとすれば、矢張り道には道的一種の物あるが如し、此の道的一種の物あればこそ、亦

之、今之昧然也、且又爲不神者求邪、無古無今、無始無終、未有子孫而有子孫、可乎、

【大意】此には、古猶ほ今のごとしの意を反覆して、有の無に會すべきを説く、是第二節なり、

【通釋】冉求の再問に對して、孔子の其の理由を説かるゝやうは、昔の昭然として解せられたるがごとく思ひしは、汝が初問の時、胸中廓然として一物もなかりしかば、爾の虛心敎を受くるに方り心靈なるが故に、其の虛靈の心稍〻領悟を覺し、靈光乍ち露れたるなり、然るに、久しうして愈〻思ひて愈〻塞がり、虛靈の天反りて障碍を生じて、本體を遮障す、故に昧然たらしむ、譬へば雲破れて月光閃きたりしに、頃刻の間、乍ち浮雲に蔽はれて、暗然たるがごとし、此の神ならざる者より之を求むるが爲なり、天地は日に新にして變ず、故に古今始終の別あるなし、子孫の未だ有らざるより、子孫あるの理ありといひて可ならむや、決して然言ふべからずとなり、

【解義】〔神者先受之〕虛心以て命を待つ、斯卽神受默契なり、〔且又爲不神者求邪〕不神とは形迹徵象を謂ふ乃ち始めは虛心以て問ひしかば、心靈直に之を受けて昭然明白なりしに、終には言を開いて未だ全く悟らず、中心に或る物あり、之に凝りしが爲に心靈ならず、故に昧然閉塞せり、〔無古無今云云〕總べて一氣の化なるを謂ふ、〔未有子孫而云云〕それ人、故なくして後あるを得ず、父ありて子あり、子なくして孫あるを得ず、是のごとくなれば、天地も先に無くして今あるを得ざるを知るべし、既に今有るを觀は天地未だ有らざる前に立ちて天を生じ地を生ぜし者あるを遡りて推知すべしとなり、郭嵩燾は曰はく、天地運行而不息、子孫代嬗而不窮、浸假而有子孫矣求之未有子孫之前、是先自惑也、天地大化之運行無始無終未有天地、於何求之、故曰、古猶今也、相與爲無窮之詞也、と見えたり、

冉求未對、仲尼曰、已矣、未應矣、不以生生死、不以死死生、死生有待邪、皆有所一體、有先天地

昧然、敢問何謂也、

【大意】此には、冉求が孔子に未だ天地あらざる以前の時知るべしやと問へるに對して、其の知るべき意を說く、三小節に分ち見るへし、

【通釋】孔子の弟子冉求其の師孔子に問ひて曰はく未だ天地あらざる時知るべしやと問ふ、答へて曰はく之を知るべし、天地あらざる時や古し然れども古より今に至るまで其の天地たるもの、常に存して未だあらざるの時なし、それ變化日に新なるに由りて見れば、今もなく古もなし、是知るべきにあらずやと冉求之を問ひて退きて明日復孔子に見えて曰はく、昨日吾問ひて其の答を得て、昨日は心中明に之を領會したりしが、今は昧然として解し難きに至れり、敢へて其の故を問ふとなり、

【解義】〔冉求問於仲尼曰〕冉は姓、求は名、孔子の弟子、德行を以て聞えたり仲尼は孔子の字なり、〔未有天地可知邪〕未だ天地あらざるの先、人にありては則ち思慮未だ起らず、鬼神有るなきの時、本吾が思を致し、吾が喙を容るべからず、冉求故に驟に此の疑問を提けて問ふことを爲す、蓋し答をなすに難るべしとせるならむ、故に可知邪と云へり、〔仲尼曰可古猶今也〕而るに、孔子は直に知るべしと斷言す、蓋し亦今日に因りて古を推し、姑らく是を以て證となし、冉求をして自から悟らしめむと欲せるなり、蓋し今日の今は卽ち往日の古なり、未だ今ありて古なき者あらず、故に孔子言ひ難き中に就きて姑らく其の言ふべきの端を發したるなり、「老子」〔有物混成章〕に、有物混成、先天地生、寂兮寥兮、獨立而不改、周行而不殆、可以爲天下母、吾不知其名、字之曰道、强爲之名曰大、大曰逝、逝曰遠、遠曰反、故道大、天大地大、王亦大、域中有四大、而王處一焉、人法地、地法天、天法道、道法自然、と見えたると相發明すべし、〔冉求失問而退云云〕冉求少し領會せるありと雖ども、徹底せず、故に復問ふなり、〔昔日吾昭然云云〕明日復孔子に見えて曰はく、昨日や昭然解せるごとくなりしに、今日は昧然として迷へるは敢へて問ふ何の故ぞや、其の初めて問へるの時大略覺れるがごとくなりしに久うして愈、思へば、愈、塞がりたり、此に於て孔子其の故を語り給ふなり、

仲尼曰、昔之昭然也、神者先受、

子」知北遊篇、大馬之捶鉤者年八十矣而不失毫芒、註大馬、大司馬也、捶鉤者、爲司馬捶劍也、江東三魏之間謂鍛爲捶、劒一名鉤、郭象曰、玷捶鉤之輕重、無毫芒之差、玷音點、捶音朶、捶、蓋郭象註、正韻改玷爲敁、指玷捶爲莊子語也、と見えたり、〔子巧與、有道與〕司馬が其の年老いて捶鍛愈精しきを怪しみて、子が性質の巧なるか、抑別に道術ありて然るかと問ふなり、〔曰臣有守也〕守とは守り持つ所の意、妄りに其の神を用ひざるを云ふ、王念孫は、守は道の字なりとて曰はく、守即道字、達生篇、仲尼曰、子巧乎、有道耶、曰、我有道也と、是其證なり、道字古讀若守、故與守通、九經中用韻之文、道字、皆讀若守、「楚詞」及老莊諸子、並同、秦會稽刻石文追道高明、「史記」秦始皇紀、道作首首與守同音、「說文」道從辵、首聲、今本無聲字者、二徐不曉古音而削也、と見えたり、〔非鉤無察也〕鉤を槌するのみに熱心して他を觀察する事なしとなり、達生篇に出でたる吾處身也、若厥株拘、吾執臂也、若槁木之枝、雖天地之大、萬物之多、而唯蜩翼之知と云へるに似たり、〔是用之者假不用者也〕捶鉤の一事のみに志を用ひて分れず是皆不用を假りて用をなすものなり、蓋し用とは技を云ひ、不用とは神を云ふなり、〔以長得其用〕知を餘物に用ひざるが故に、老いて後其の用を得るを云ふ、所謂無用を積んで、大用を得る者なり、〔而況乎云云〕それ不用を假りて用をなすすら年を終ふるを得、況や不用を以て用の神となすに於ては往くとして用ひざる者なしといふなり、〔物孰不資焉〕不用を資りて以て其の用をなす、萬物皆然り、聖人は無心にして、天下の自爲を用ひて萬物其の用を資るを云ふ、此の章は「淮南子原道訓」にも見えたり、さて又達生篇にも養生を主とせる同意の文あり、參看すべし、

冉求問於仲尼曰、未有天地可知邪、仲尼曰、可、古猶今也、冉求失問而退、明日復見曰、昔者吾問未有天地可知乎、夫子曰、可、古猶今也、昔者吾昭然、今日吾

量を稱るに少許の差もあるなし、大司馬は其の年老いて鍛錬愈〻精しきを怪しみて、其の巧妙なるには、別に道術あるか、抑〻性質の巧かと問ふ、答へて曰はく、臣は別に術あるなし、唯守る所あり、少年以來專ら精しく之を好み、鍛錬の外に觀察する所なく、習ひ以て性となり、遂に斯に至れり、といふ、莊子曰はく、是の老工の老に至りて、其の鍛捶の用を得意とするに至れるは、心を他物の視察に用ゐざるに由れるなり、それ不用を假りて用となすも、尙ほ年を終ふるを得、況や至道體得の聖人用もなく不用もなきに於てをや、故に能く大用を爲す、萬物の其の用を資りて匱しからざる亦宜ならずやといふなり、

【解義】〔大馬之捶鉤者〕大馬は官の名、楚の大司馬なり、捶は音「タ」「スヰ」の兩音あり、疏に打鍛也と見え、又釋文に、司馬郭云、捶者玷捶鉤之輕重而不失豪芒也、或說云、江東三魏之間、人皆謂鍛爲捶音字亦同、郭失之、今不從此說也、と見えたり、按ずるに鉤は「成疏」に腰帶也と見え、「正義」及「宣注」に劍也と見え、又「正字通」に鉤、帶鉤以金爲之又古兵有鉤有鑲、皆劍屬、引來曰鉤、推去曰鑲、按ずるに鉤は腰帶の端に在る鉤にて、約むる用とする者、銅にて作る國語に之を「カゴ」と云ふ物なるべし、之に鉸の字を當てたり、若し然りとせば、疏に腰帶也と見えたるは精しからず、而して劍の名とせるものは、「康熙字典」に、今凡刀柄鞍首皆有釘鉸と見えたるの類にて、劍の附屬具の事ならむと思はる、「箋註倭名類聚抄」に、按古革帶端有鉤、以束之、所謂帶鉤是也、靈異記云、盜寺銅作帶銜賣者、亦是以其所餘、插之腰間、後世呼爲上手者、其遺制也、河內國道明寺藏古革帶、傳云菅贈大相國公道眞遺物、古制可見、今世革帶無鉤、其製與古不同、若鞍具至今亦鉤と見えたり、大司馬家の工人少うして善く帶鉤を鍛ふなり、〔年八十矣云云〕年八十にして帶鉤を鍛ふ、彌〻巧にして其の帶鉤の重さを手加減にて權るに、一厘一毛の差失なしとなり、「郭注」に拈捶鉤之輕重而無豪芒之差也、と見え、「成疏」に謂能拈捶鉤、權知斤兩之輕重無豪芒之差失也と見えたり、拈は釋文に玷に作る、但し「正字通」に敁或作拈、敠稱量、韻會引「莊子」玷捶玷音點、並非、別詳支部敠註と見えて、敠の條に云はく、舊註音掇、敁敠知輕重也、又音切、皮斷也、按「莊

問」兪樾曰はく、「淮南子」道應篇光曜不」得」問、上有」無有弗」應也五字、當」從」之、惟無有弗」應、故光曜不」得」問也、此脫」五字」則義不」備と見えたり、〔而孰視其狀貌〕孰は音「ジュク」、熟の古文、正しくは孰と書くべし、「說文」に、食飪也、從」丮臺」、「朱注」に從」丮從」臺會意、物毫可」丮而食」之、字亦作」熟」加」火と見えたり、其の無有の狀貌をつく〴〵と見るなり、「淮南子」には就視に作れり、〔窅然空然〕窅は音「エウ」深遠の貌但し逍遙遊篇に窅然喪」其天下」焉、「李注」に猶」悵然」と見えたるとは別義なり、「正義」に無無之狀と見えたり、〔終日視之而不見云云〕妙境は視聽の及ぶ所にあらず、故に狀貌を熟視すれば唯空寂なるなり、視之以下不得也までの三句は、「老子」に出づ、〔其孰能至此乎〕孰は「タレカ」と訓ず、誰かの意と同じ、光曜ありて其の質なし、是有をして空に歸せしめし後には唯無のみあるを云ふ、〔而未能無無也〕唯無のみの域に至れりと雖ども、尙ほ未だ光曜と其の質とを合して脫然兩つながら忘れて、此の無を幷せて、亦之を遺る能はざるを云ふ、〔及爲無有〕無の地に達すれども未だ無を無とする能はざれば、我は猶有の意を脫する能はずとなり、〔何從至此哉〕如何にして此の空寂の視ず聽かざるの境に至らむやとなり卽無無の域に至れるを云ふなり、「淮南子」道德訓には、文少異あり、予能有」無矣、未」能」無」無也、及」其爲」無無、又何從至」於此」哉に作れり、

大馬之捶」鉤者、年八十矣、而不」失」毫芒、大馬曰、子巧與、有」道與、曰、臣有」守也、臣之年二十而好」捶」鉤、於」物無」視也、非」鉤無」察也、是用」之者、假」不」用者也、以長得」其用、而況乎無」不」用者乎、物孰不」資焉、

【大意】此には大司馬の帶鉤を鍛ふ者の言に依りて道の自然を用ゐるべきを說く、

【通釋】楚の大司馬の工人にて帶鉤を鍛ふ者、八十に至れども帶鉤を鍛ふ事精巧なり、手を以て劍の重

希逸曰く宇宙可見者也、故曰外、太初不可見者也、故、曰內と、王先謙曰く不知事理在六合不知道本在己身、と〔是以不過乎崐崙云云〕崐崙は支那の西北方の高山の名、「水經」に山在西北、去嵩高五萬里、地之中也、高萬一千里、河水出其東北陬、屈從其東南流、入渤海、と見えたり、太虛は虛空なり、崐崙は大高山、「宣注」に道在虛、要は道は虛無なれば、俗見に囚はるゝ時は、未だ世外に超絕して、眞味を知る能はず初中一物の其の間を遮隔すること、宛かも崐崙山を越えて大虛に遊ぶ能はざるが如しとなり、

光曜問乎無有曰、夫子有乎、其無有乎、光曜不得問、而孰視其狀貌、窅然空然、終日視之而不見、聽之而不聞、搏之而不得也、光曜曰、至矣、其孰能至此乎、予能有無矣、而未能無無也、及爲無有矣、何從至此哉、

【大意】此には、光曜無有の問答に托して、無の境を出でて無無の域に至るを道の至極とせるを說く、

【通釋】光曜と名づくる智者が、無有と名づくる者に對して、道は有か無かと問ふに、無有之に應せさりしかば、光曜再び問ふ事を得ずして其の狀貌を熟視するに空寂たり、かくて終日之を視れども見ず、心を留めてよく聞けども聞かず、平手を以て搏てども手答なし、此に於て光曜曰はく、嗚呼至道を窮めたるかな、何人か能く此に至らむや、予は能く無の境に至るを知れり、然れども、未だ其の無を無とするの境に至らず、我猶無と云ひつゝも有の字の內に在り、何によりて此の無無の境に至らんやと歎じたりとなり、

【解義】〔光曜問乎無有曰〕光曜とは、能く視るの智にして、無有とは觀る所の境を云ふ、而して智は能く物を照す故に、假に光曜と名づけ、境は空寂を體するが故に假に無有と名づく、然して智に明なると、暗きとあり、境に淺きと深きとあり、故に智を以て智境に問ふとなり、畢竟人化したる寓名なり、〔光曜不得

問窮、若是者、外不觀乎宇宙、內不知乎大初、是以不過乎崑崙、不遊乎大虛、

【大意】 此には、無爲が道を知れりといふの非なるを言ひ、併せて泰清の道を問ふも未だ是ならざるを説く、

【通釋】 無始が曰はく、道は名言の上に超越する者なれば、問答を以て知るべからず、故に道を問ひて道を答ふる者は、實に道を知らざる者なり、彼の道を問ふ者も亦道にあらず、抑、道を體し言を離るれば何の問ふべきもなく、應ずべきもなし、理に於いて問ふべきなくして强ひて之を問ふは、是空を責むるなり、所謂影を捉ふると同じ、理に於て應ずべきなくして强ひて之に應ずるは乃ち中心に未だ道を得ざるなり、若し理外の心を以て空內の智を待つ者は外に天地四方を識らず、內には己が身の妙本を知らざるものなり、それ崑崙は支那の最も高山とする所、太虛は是深元の理なり、苟くも名言に滯りて猶疑惑の應問を存する者は、是未だ高遠を超越して深元に逍遙する者にあらずとなり、

【解義】〔無始曰云云〕上文を一旦言ひ切りて、更に申ねて言ふなり、道を問ふとは知らざる故に問ふなり、之を問ひて應ずるは道にあらず、應ぜざる以上は問ふとも何の得る所もなし、されば、之を問ふとも道は終に聞くを得ずとなり、〔道無問問無應〕道は名言を超越したれば、問ふべきものにあらず、又答ふべきにもあらずとなり、〔無問問之是問窮也〕理の問ふべきなくして强ひて問ふはこれを空を責むる者といふなりとなり、窮は「成疏」に空也と見え、「叢玄」に窮與穹通、空也とも見えたり、空とは「ムナシキ」なり、卽ち中に物なくして所謂「カラ」なるを云ふ、〔無應應之是無內也〕理の應ずべきなくして强ひて之に應すれば、乃ち外に徇ふ者なり、故に無內也と云ふ、〔以無內待問窮〕應ずべからざる者を以て聞くべからざる者を待つを云ふ、〔若是者云云〕理外の心を以て空內の智を待つ者は外には宇宙を觀ず、內には大初を知らずとなり、宇宙とは「成疏」に、天地四方曰宇、往古來今曰宙と見え、又大初道本也と見えたり、

而非也、知形形之不形乎、道不當名、

【大意】此には不知の知を眞の知とするを說く、

【通釋】泰清が無始に問ひて無始が深淺內外の旨を以て答へしが、亦未だ兩邊を免かれざるを以て、是に於いて泰清は中途にして自から知と不知とが皆眞知より出づるを歎ず、無始の無始たる所卽是なり、因りて無始が見聞言語形名問答の得て及ぶ所にあらざるを推究すれば、始めて究竟の地位に達す、それ能く萬物を形色するものは固より形色にあらず、之を形形之不形と云ふ、道は道の名あれども竟に物なし、故に之に名づくれば道と名と對立して、本然の眞を離る、要するに道は名言すべからずとなり、

【解義】〔於是泰清中而歎曰〕於是の二字疑ふべし、或は曰く衍文削るべし、岡松甕谷曰く、發端之初著於是兩字、從無有是例、莊生好奇弄筆、爲此語而與前一節相呼應、最見其巧也と、今按ずるに終に衍文と爲すに如かず、中は中途なり、泰清が中途にして嗟歎せるは、不知は乃ち眞知なる由を悟れるを以てなり、宣注は中の字を仰の字の誤と爲す、〔孰知不知之知〕眞知の至りて希なるを云ふ、所謂る知者は言はず、言ふ者は知らざるの謂なり、又知を忘れて後に闇に道と會ふといへるを發明すべし、〔道不可聞云云〕道は聲もなければ、耳を以て聞くべからず、耳もて聞くは道にあらざるを云ふ、〔道不可見云云〕道は色なければ、眼を以て見るべからず、眼もて見るは道にあらざるを云ふ、〔道不可言云云〕道は名なし、言說を以てすべからず、言說もて知るは道にあらざるを云ふ、〔知形形之不形乎〕萬物は道に由りて成り、道は形なきを謂ふ、〔道不當名〕形に就きて道を求むれば道を得る事あるべからず、以て道の名言すべからざるを知るべし、老子（首章）に道可道非常道、名可名非常名と云へり、以て參看すべし、

無始曰、有問道而應之者、不知道也、雖問道者亦未聞道、道無問、問無應、無問問之、是問窮也、無應應之、是無內也、以無內待

隷たり、約は合聚の意卽ち生たり、散とは分散の意、卽ち死なり、此吾が道を知る所以の名數なりとなり、「淮南子」に吾知道之可以弱、可以強、可以柔、可以剛、可以陰、可以陽、可以窈、可以明、可以包裹天地、可以應待無方、と見えたると同意なり、

泰清以之言也、問乎無始曰、若是則無窮之弗知、與無爲之知、孰是而孰非乎、無始曰、不知深矣、知之淺矣、弗知內矣、知之外矣、

【大意】此には、爲窮が道を知らざるは是にして、無爲が道を知れるの非なるを說く、

【通釋】泰清は無爲の言を以て無始に問へるやう、無窮が知らずと云へると無爲が知れると云へると孰れか是にし孰れか非なる、其の是非を定めよと請ふ、無始曰はく、知らざれば理に合す、故に深し、之を知れば道に乖く、故に淺し、是知らざるは自得にして內なり、知れるは道と二となれば外なりと云ふとなり、

【解義】〔問乎無始〕至道は寂寞無爲、終りなく始めなし、故に無窮と無始とに寄せて其の名を爲れるなり、卽ち無始は寓名なり、〔不知深矣云云〕此の文首章知北遊の三節と似て非なりとて、「解莊」に辯じて云はく、無爲謂之不言、狂屈之中忘、黃帝之答之、各有差別、其曰玄水、曰白水、曰帝宮、可以觀其他位之不同也、此段則不然、自初在泰清之地位、而自問自答也、夫無窮之體、不可窮、此乃不知之地位、而泰清未發問之先、是也、無爲而無不爲、則不思索、而出天然之作爲者、皆無也、此泰清自知之地位是也云云と見えたり、姑く參攷として錄す、〔弗知內矣云云〕內とは眞性に止まるを云ひ、外とは外物に蕩するを云ふ、

於是泰清中而歎曰、弗知乃知乎、知乃不知乎、孰知不知之知、無始曰、道不可聞、聞而非也、道不可見、見而非也、道不可言、言

形に視、吾の聽に返つて無聲に聽くとなり、〔於人之論者云云〕若し人と道を論じて之を冥冥と云ふは強ひて名づけたるものにて道にあらずとなり、即ち冥冥と謂はむには萬物皆道に由りて成れり、若し又之を昭昭と謂はむか、則ち竟に其の形を見ず、道の名づくべからざる所以、以て知るべきにあらずや、冥冥は無なり、

於是泰清問乎無窮曰、子知道乎、無窮曰、吾不知、又問乎無爲、無爲曰、吾知道、曰、子之知道、亦有數乎、曰、有、曰、其數若何、無爲曰、吾知道之可以貴、可以賤、可以約、可以散、此吾所以知道之數也、

【大意】此には、泰清が弇堈の言を聞きて、無窮に問ひ、更に無爲に問へるに對して知るは乃知らず、知らざるは乃ち知るの意を説く、泰清無窮無爲は皆名を托せるなり、實に其の人あるにあらず、

【通釋】上に弇堈の語るを泰清が聞きて無窮に問うて曰はく、子は道を知れりやと云へば、無窮知らずと答ふ、又無爲に問ふ、無爲答へて曰はく、吾は道を知れりと云ふ、然らば子が道を知れるは名數ありや否や、如何、予が爲に略述せよと云へば、無爲答へて曰はく、吾が思ふ、道は高下巨細統ぶる所なし、例へば、帝王たり、僕隷たり、或は生れ、或は死する等の極まりなきがごとし、といふ、

【解義】〔於是泰清問乎無窮曰〕於是は前の事を受けて下の事を起すなり、泰清と無窮とは寓名、其の謂は、泰は大の義、道は宏曠清虚窮まりなし、故に泰清と無窮とを以て名とせるなり、而して泰清が道を問へば、無窮は知らずと答へ、以て道は亦言知を以て求むべからざるを明さむとするなり、〔又問乎無爲〕無爲も亦寓名なり、〔子之知道亦有數乎〕數とは道の變化定まりなきの中に於て歴歴として言ふべきものを謂ふ、貴賤約散皆以て歴數すべきものなればなり、〔吾知道之可以貴云云〕貴とは帝王たり、賤は僕

たり、荷甘が其の師の亡すと聞きて戸を排して入れるなり、〔嚗然放杖而笑〕嚗は音「ハク」又音「ボウ」の兩者あり、嚗然とは杖を投げ出す聲なり、俗言の「ボン」と投げ出すなどの意、杖を投げ出して笑ふは最初其の師の死せるを聞きて杖を小掖に挾みて起ち上りしが、其の次に死の驚くに足らざるを悟りし故に、杖を放ちて笑へるなり、兪樾は擁杖而起の上の「隱几」の二字は衍文ならむとて云はく、既言擁杖而起、不當言隱几、疑隱几字、涉上文神農隱几闔戸晝瞑而衍と云へり、〔天知予僻陋慢訑〕天とは老龍吉を指す、其の自然の德ありと云ふより之を呼んで天と云へるなり、莊子の書多く尊敬する人を稱して天と曰ふ其の義既に前に解せり、予は神農の自稱、僻陋は片寄りて下劣なるの意、慢は音「バン」「ベン」の諸音あり「オコタル」と訓ず、訑は釋文に音「タン」「テン」の兩音あり、「正字通」には、音夷欺也「莊子」天知予僻陋慢訑「楚辭」或忠信而死節、或訑謾而不疑と見えたり、〔夫子云云〕夫子とは老龍吉を指す、成玄英の說に依れば狂言猶ほ至言と云ふがごとし、之を「狂言」と云ふは、至言は世人の解する所にあらず、故に至言を狂といふなり、我が師老龍吉は我が僻陋慢訑專ならざるを知りて吾が徒を棄てゝ死せるならむ自今以後至言を振ひて我が心を開發するものなしと云ふなり、〔弇堈弔聞之曰〕弇は音「エン」、堈は音「カウ」李頤の說に依れば弇堈は其の姓、弔は其の名、體道の人にして、隱者なり、宣注は弇堈を人名と爲し弔を來弔と解せり、今後說を用ふ、〔夫體道者云云〕至道を體せる人は、世間の重んずる所にして、賢人君子の宗主とする所たり、物の歸著する所を繫焉と云ふ、疏に繫屬也と見えたり、「カヽル」と訓ず、「ムスビツナグ」の意〔今於道秋毫之端萬分云云〕今神農の至道に於けるは、秋毫の末端は微細なるが其の一毫を分ちて萬分一となしても猶其の一に居る能はずとは、極めて其の得る所の少なきを云ふ、〔而猶知藏其狂言而死〕其の神農すら龍吉が其の至言を藏め隱して死せるを知るとなり、〔又況夫體道者乎〕況やかの至道は言論の及ぶ所にあらねば至道を抱ける人は密にして無言のごとくにして自から人心を啓發するに足るとなり、〔視之無形云云〕至道は言辯の外にあるを以て體道の人は昏々默々吾の視を收めて無

言にあるを說く、

【通釋】 婀荷甘は神農と與に同じく老龍吉に學を受けたり、老龍吉は道に志せる人なり、さて神農は、机に凴り、戶を闔ぢて白晝眠りて目を閉ぢて居たり、(是道を學ぶの人の心神凝靜門を閉ぢ、机に凴りて默を守りて瞑目してありしなり)、時に婀荷甘、戶を押開き、中に入り來りて老龍夫子死せりと云ふ、神農几に凴りてありしが杖を小掖に抱へて、立上りしが忽にポンと其の杖を投け出して笑ひぬ、(是神農は吉が死せりと聞き驚きて杖を抱へたりしが更に思へば死は哀むに足らざるを知りて、杖を擲ちて大に笑へるなり)其の言に曰はく、我が師老龍夫子は、予が性質の偏僻にして少量に、而も物事放縱にして專ならぬが爲に、予を打捨てゝ死ぬるなるべし、今先生(婀荷甘を指す)は予が至言を發するに用なしとて死せるかと云ふを、隱者弇堈は龍吉が死を來り弔ひしが之を聞きて曰ふやうには、至道を體得せる哲人は世間共に重んじ、賢人君子の仰ぎて宗とする所のものなり、今神農の至道に於けるは猶秋毫の端の萬分の一にも及ばざるがごとし、然るに今其の至言を言はずして、吉が眞に歸せるの意を默識せり、況やかの眞に至道を體得せるものに於てをや、默して言ふことあらず、それ至道は虛無、之を視れども色なく、之を聽けども聲なく、絕視絕聽なり、故に之を論じて、冥冥と云ふ、然れども之を名づけて冥冥と云ふ以上は既に眞道にはあらざるなりといふ、言論を以てするの非なるを云へり、

【解義】〔婀荷甘與神農同云云〕婀は姓荷甘は字なり、神農は既に上篇に見ゆ、此の二人同じく老龍吉に就きて道を學せしなり、龍吉も亦號なり、蓋し道を知れる人ならむ、荷は釋文に本作苛と見えたり、〔神農隱几闔戶晝瞑〕隱は「ヨル」と訓ず憑の意、闔は「トヂテ」と訓ず、兩方の扉を合せて閉づるなり、瞑は音「ベイ」「ネルム」と訓ず、眠と同じ、「說文」に翕目也、從目從冥、「朱注」に字亦作眠民冥雙聲、「楚辭」招魂然後得瞑、注臥也、「文選」養生論、內懷殷憂則達旦不瞑、注、古眠字と見えたり、此に神農が眠れるは心神凝靜、默を守りて眠れるなり、〔婀荷甘日中云云〕奓は音「シャ」「サ」又音「タ」、三音あり、「オシヒラク」と訓ず、司馬注に開也と見え、「正義」に推開也と見え

なれど、際ある所に於いて見るを得るとなり、〔際之不際者也〕道は際する所に現はると雖ども、之を究むれば卽ち不際なる者なりとなり、〔謂盈虛衰殺〕・盈虛衰殺の三字其の上に各々謂の字を加へて看るべし一説に、謂は爲と古字通用すと、盈とは富貴を云ひ、虛とは貧賤を云ひ、衰は老を云ひ、殺は病を云ふ、是皆際なり、殺の音「サイ」と讀めば、降或は減削の意となる、〔彼爲盈虛非盈虛〕彼とは道を謂ふ、道が盈虛を爲して道は與からざるを云ふ、盈虛は富貴なり、〔彼爲衰殺非衰殺〕道が衰殺を爲して衰殺卽ち道にあらざるなり、衰殺は老疲を云ふ、〔彼爲本末非本末〕道は本末を爲して本末卽ち道にはあらざるなり本末は終始を云ふ、〔彼爲積散非積散〕道は積散を爲して積散卽ち道にはあらざるなり、積散は聚散に同じく死生を謂ふ、

妸荷甘與神農、同學於老龍吉、神農隱几闔戶晝瞑、妸荷甘日中奓戶而入曰、老龍死矣、神農隱几擁杖而起、嚗然放杖而笑曰、天知予僻陋慢訑、故棄予而死、已矣、夫子無所發予之狂言而死矣夫、弇堈弔聞之曰、夫體道者、天下之君子所繫焉、今於道秋毫之端、萬分未得處一焉、而猶知藏其狂言而死、又況夫體道者乎、視之無形、聽之無聲、於人之論者、謂之冥冥、所以論道而非道也、

【大意】此には神農が晝瞑したるを、其の學友妸荷甘が立入りて、其の師老龍吉が死せりといひしに對して、神農が答へたる語を、弇堈が聞きて道を論ずるは、道にあらざる理由を述べたるを假說して、道の不

虛、非盈虛、彼爲衰殺、非衰殺、彼爲本末、非本末、彼爲積散、非積散也、

【大意】此には道は物の中に見るを得れども、道の指定すべからざるを說く、

【通釋】物を物と爲す者は道なり、それ道は物に在ることなく、在らざるなし、故に己の知力を用ゐずして物の自知に任ずれば上下冥合して邊際なし、道と物と邊際なきを、而も一物邊際あれば所謂物際にして之を道とは謂ふべからず、所謂人民、禽獸、草木、蟲魚、螻蟻、稊稗、瓦甓、屎溺等是なり、然れども物を物とするとはいへ、物を離れて別に在るにあらず、故に不際の際、際の不際とはいふなり、尙云へば、道は本來際なきも際する所に見え、際する所に見ゆと雖ども、而も之を究むれば、則ち不際の者なりといふなりそれ物に際あり、而して彼の富貴といひ、貧賤といひ老といひ、病といふがごとき、是皆際なるが、道は彼の富貴貧賤を爲せど、而も道を謂つて富貴貧賤となすは非なり、道は能く老病をなせど、老病を以て道とする能はず、終始生來死去も亦復此のごとし、是に由りて之を觀れば、富貴、貧賤、老病、終始、生來、死去等道は物の中に主たりと雖ども、仍ほ道の外に出づ、如何ぞ、期して言ふを得むや、道は富貴、貧賤、終始、生死の中に寓すれども、富貴、貧賤、老病、終始、生死の中にあらず、能く此の富貴、貧賤、老病、終始、生死をなして、其の迹なし、是の故に物にあらざれば、道を顯にする事なく、道にあらざれば以て物を成す事なし、物は道を以て成り、道は物を以て顯はる、されば道の外に物なく、物の外に道なし、人の道に於けるや、能く此の理を推究すれば、則ち道は他に求めずして自から我に固有せるを知るべしとなり、

【解義】〔物物者與物無際〕物を物とするとは道を指して云ふ、物と際無しとは物の在る所は卽ち道の在る所にして、倶に邊際なしとなり、際は「カギリ」と訓ず、「成疏」に際崖畔也と見え、又「小爾雅」に際、界也と見えたり、〔而物有際者云云〕道は物と際なし、而も一物は各邊際ある者は所謂物際のみ、之を道とは謂ふべからずとなり、〔不際之際〕道は本來不際

かとなり、〔漠而淸乎〕 漠は音「バク」、「正字通」に沖漠澹靜貌、與寞莫義同と見えたり、寂寞なれば、擾れず、自から淸に至るとなり、郭慶藩は、漠は淸の意にして、複語とし云はく、案、漠而淸、漠亦淸也、古人自有複語耳、「爾雅」漠、察淸也、樊注漠然淸貌、漠亦通作莫、昭二十八年「左傳」德正應和曰莫、杜注莫然淸靜也と云へり、〔調而閒乎〕 調和すれば戾らず、自から閑に至るとなり、閒は自適の意、〔寥已吾志〕 寥は音「レウ」、廫と同じ「ムナシ」の意、廫「說文」に空虛也、「朱注」に、字亦作寥、作謬、「廣雅」釋詁寥深也、藏也、「老子」寂兮、寥兮、注、寥者、空無形、と見えたり、「郭注」に寥然空虛と見えたり、研究して前の澹而靜以下の境に至れば吾の志寂寥として感なく一物なしとなり、〔無往焉而云云〕 志は心の之く所なり、志已に寂寥なれば往く所なし、往く事なきが故往くとして其の至る所を知らずとは動靜ともに無心なれば物に因つて動く故に其の至る所を知らざるなり、「郭注」に有往焉、則理未動、而志驚矣と見えたる驚の字は、「釋文」に本亦作鶩音務と見えたるを、郭慶藩は之に從ひて曰はく、案、郭注有往焉、則理未動而志已驚矣、驚字頗費解義當從釋文作鶩是也、鶩與馳同義、注言未動、而志已先馳也、志不得云驚、驚鶩字形相近因誤、淮南馳騁若鶩、鶩又訛爲驚、と云へり、〔去而來不知其所止〕 去るに任かし來るに任かして止まる所を知らず、〔吾已往來焉而云云〕 往來する事知に由らず、往來するも純に神を以て行くが爲に、其の終る所を測る能はず、卽往來は自然の常理いかんぞ終る所あらむやとなり、〔彷徨乎馮閎大知入焉云云〕「成疏」に彷徨是放任之名、馮閎是虛曠之貌、入謂契會也と見え、「釋文」に馮宏皆大也、郭云虛郭之謂也と見えたり、大聖知の人の能く宏大なる深理を會得して、逍遙自適せば其の窮する所を知らざるべしとなり、所謂、子と無何有の宮に遊び、同合して終窮する所なきを論せむかと云へるの意、大知入焉とは、「覈玄」に無心而任物、謂之大知と見えたり、

物物者與物無際、而物有際者、所謂物際者也、不際之際、際之不際者也、謂盈虛衰殺、彼爲盈

ば周とあまねく、徧とあまねく、咸とこと〴〵くなるも、三字の字は、異なれども、其の義は同じに於て、大言する小言するも同じきを知るべし、今試みに、虛無の中に遊び、萬を合せて一となし、窮極する所なきの學を論ぜむか、試みに所作する所なからむか、其の中に定まりて動く事なからむか、寂寞にして擾かざらむか、和にして自適せむか、此の時に當つて吾が志寂寥として感なし、志已に寂寥たれば、往く所なきに似たり、然りと雖ども、其の至る所を測る能はず、若しくは吾が志往く所ありて復來るとも亦止まる所を知らず、若しくは吾が志既に往きて來るの後、亦其の往來の究竟何處に歸せむを知らず、吾の志は唯宏大の理を會得せば無心にして物に任ずるを得て、其の道の窮極なきを知るを得むとなり、

【解義】〔汝唯莫必〕東郭子よ唯道の何處にあると指定するを止めよ、何處にありと指定する時は一端に限ればなり、〔無乎逃物〕道は萬般の物の中に在りて物と相離るべからざるを云ふ、〔至道若是云云〕至道は卽ち理を云ひ、大言は敎を云ふ、理既に物に離れざれば敎も亦普偏なりと云ふなり、〔周徧咸三者〕周は「アマネシ」と訓ず、徧も同訓咸は「コト〴〵ク」と訓じ、或は「ミナ」と訓ず、周は俗に一面(メン)と云ふ意、其の一面の中にて一々細かに手の屆き盡すを云ふ、徧は何處も彼處も、何も彼もといふ意、周に比すれば狹く、一反通り行き渡るを云ふ、咸は「コト〴〵ク」、或は「ミナ」と訓ず、あまねく盡くの意、皆よりは其の意狹し、是字の意義なり、此の故に、三字は同字にはあらざれども、其の義は異ならずとは、至道の物を離れざるを重ねて明しさて周徧咸三字の異なる事ありといへども、其の實理の旨歸は同一なるを云ふなり、指は「荀子」王覇に明㆓一指㆒の注に指指歸也と見えたり、〔嘗相與〕嘗は「コヽロミニ」と訓ず、試なり、無何有之宮とは至道のある所の意、無何有とは一物の有る事無しの義より造れる語、卽至道の鄕に逍遙するを云ふ、〔同合而論無所終窮乎〕實旨既に一なれば同合して論ずれば、冥理に合す、故に終始なく、窮極もなしとなり、〔嘗相與無爲乎〕試みに無爲の域に處らむかとなり、〔澹而靜乎〕以下三句は總べて無爲の功能を歎ずるなり、澹は恬澹(テンタン)の澹にして心の安く定まりたる事、心安く定まれば自から靜に至らむ

は人の名に用ゐたり、監市は市街販賣の事を監視する者なり、履豨とは豨は大豕なり、履むは足を以て豕の臀部を蹴て其の肥瘠を驗するなり、此のごとくするは豕體の輕重を知るを得るとぞ、正獲が監市に大豕の斤量を問ふに卑賤の者に問ふ時は比況愈〻下りて説明愈明なりといふなり、〔毎下愈況〕況は比較の意、莊子の言ふ所は東郭子の怒りて應ぜざるは先に問ふ時に自己の胸中に見定めたる見地ありて問ふが故に、其の問ふ所の本旨を得ず、然れども、彼の司市の官人が監市に大豕を履みて其の體重の如何を問ふ事を觀ずや、原來大豕の肥瘠は知り難し、故に其の股脚の間の肥え難き所を踏まば、全體皆類推するを得、是即卑近の一端に於て、比較すれば、益〻比較に便なるは、猶ほ道は如何なる所にもあらざるなきがごとく、下なるものより之を推せば高き者は自から見るを得るにあらずやと云ふなり、

汝唯莫必、無乎逃物、至道若是、大言亦然、周、徧、咸、三者、異名同實、其指一也、嘗相與遊乎無何有之宮、同合而論無所終窮乎、嘗相與無爲乎、澹而靜乎、漠而清乎、調而閒乎、寥已吾志、無往焉而不知其所至、去而來、不知其所止、吾已往來焉、而不知其所終、彷徨乎馮閎、大知入焉、不知其所窮、

【大意】莊子尙ほ東郭子に、至道は唯其の一端を指定する事を止めて、試みに虚無の中に遊ばゝ道の無邊なるを知るべしと説く、

【通釋】莊子更に重ねて曰はく、汝東郭子よ、汝は唯何物か是道なると期すべからず、天下に道を逃るゝの物あるべくもあらず、何にも皆道は存在せり、汝は我が以前に告げたる螻蟻稊稗、瓦甓屎溺の四言を以て瑣小なりと思へれど、大言の理と雖も亦此のごときに過ぐるを知らざるか、今言語の中に就きて云は

かと荘子に問ふ、荘子答へて曰はく、道は如何なる處にもあらざる事なしと、東郭子は更に其の在る處を指示せよと云ふ、荘子曰はく、螻蟻にありと、蓋し螻蟻は知あれども至つて微小なる蟲なれば東郭は之を怪みて、如何に下等なる物かなと云へば、荘子は答へて道は稊稗にありと云ふ、稊稗は知なくして生あるものなれば、東郭子大に怪みて何ぞ其の愈下等なるものを擧げらるゝ事かなといへば、更に答へて道は瓦にも甓にもあらざる事なしといふ、瓦と甓とは既に生なくして只形のみあるもののみ、此に於て東郭子愈不審に堪へずし如何に愈甚しく下等にはあるかなと云ふに、荘子は又答へて道は糞にも小便にもありといふ、糞と小便とは其形こそあれ、其の臭腐なるは皆人の惡む所のものなれば、今之を聞きて瞋りて應へず、荘子曰はく、抑ゝ君の道を問ふや質問の要義を得たらず、市街販賣の事を監督する獲といふ者が、狶を屠る者に豕の肥瘠を問ひしに、屠者は其の臀を蹴る事を答へたりといふは、其の答ふる所のいかに下等ならずや、然れども其の質問の要を得たればこそ屠者は其の下等なるものを以て況へたるに、是反つて其の要を得たるものなりといふなり、

【解義】〔東郭子問於荘子曰〕東郭子は無擇の師、東郭順子なり、其の都城の東の郊外に居るによりて東郭子と稱す、子は男子の美稱、〔道惡乎在〕惡乎「イヅクニカ」と讀む、何處にあるかと云ふなり、〔期而後可〕其の所在を指定して可なりといふなり、〔在螻蟻〕螻は音「ロウ」「ケラ」支翅類中の昆蟲の名蟻は「アリ」、膜翅類中の昆蟲の名、いづれも微少なる蟲の例として引證せるなり、〔在稊稗〕稊は音「テイ」、「イヌクロビエ」なり、野生の稗なり、「爾雅」注に似稗布地生と見えたり、稗は音「ハイ」、「ヒエ」なり、「說文」朱注に按稗人所種、實小可食、蒴則野生米、尤小、人不食之と見えたり、〔在瓦甓〕瓦甓は音「グワ、ヘキ」、甓は本「甓」に作れり、瓦は「カハラ」なり、甓は「シキガハラ」なり、〔在屎溺〕屎は音「シ」「クソ」なり、溺は音「ネウ」、小便なり、屎は本或は「失」に作る、溺は「ユバリ」小便の事に用ゐる時は尿と音義同用す、〔固不及質〕質は疏に實也と見えたり、東郭子の問ふ事は眞に及ばずといふなり、〔正獲之問於監市履狶也〕正は官名今の市令なり、獲は下賤の稱、此に

道の窅然言ひ難きの意を論ぜり、是を第二小段と爲す、而して以上は共に汎く萬物の上に就いて、道は不見の地に居て、造化の根本と爲り、其の昭昭有倫なる者皆倶に道の寄迹たるに過ぎざるを云へり、是を第一大段と爲す、中國有人焉より王之所起也に至るまでは、有倫生於無形の義を陳べて、道の窅然言ひ難きを論ぜり、是を第一小段と爲す、人生天地より乃身從之、乃大歸乎に至るまでは昭昭生於冥冥の義を陳べて道の窅然言ひ難きを論ぜり、是を第二小段と爲す、而して以上は共に專ら人身の上に就いて、道は不見の地に居て、造化の根本と爲り、昭々有倫なる者皆倶に道の寄迹たるに過ぎざるを言へり、抑も以上の如く理路井然に言次秩然として説き來るときは、曩きの道之窅然難言哉と云へる者、亦或は左程の難解の議論に非る哉の疑ひ生ぜざるとせず、是に於て筆路旋轉して本旨に立ち還りて不形之形云々を以て形而上の道と形而下の物とは其の根柢に於て、皆是れ共通の一理たることは何人も同く知る所なりと點明し、此の如き議論は亦左程骨折りて言ふまでも無くして、苟に至道に志ざす者の務むる所に非らざるを言ひ、以て學者の斯の陋見を脱却して益、道に進まんことを希望し、明見難値云々の法語を提列し、宜く沈默して聰明を黜け、聖智を塞ぎ、然る後ち道の眞意に達し得べきを説き、以て全篇の歸結と爲せり、論旨文法相待ちて精微を闡明す、讀者宜く反覆沈潛の間に於て自ら其の餘師あるを發見すべきなり、

東郭子問於莊子曰、所謂道惡乎在、莊子曰、無所不在、東郭子曰、期而後可、莊子曰、在螻蟻、曰、何其下邪、曰、在稊稗、曰、何其愈下邪、曰、在瓦甓、曰、何其愈甚邪、曰、在屎溺、東郭子不應、莊子曰、夫子之問也、固不及質、正獲之問於監市履狶也、每下愈況、

【大意】東郭子の問道に對して、莊子の答へたるを記して、道のあらざるなきを説く、

【通釋】東郭子が問ふ、所謂虛通至道は何處にある

〔彼至則不論〕彼の道に至れる人は忘言得理の者なれば論説すること無し、若し之を論説する者なれば未だ道に至らざる人と知るべしとなり、

明見無値、辯不若默、道不可聞、聞不若塞、此之謂大得、

【大意】此には至道を體得せむには、多聞を棄てゝ靜默以て得べきを説く、

【通釋】道は本來形ち無し、故に又如何に之を明らかに見んと務むるとも相値ふを無し、されば喋々と辯論せんよりは沈默するに若かず、道は本來聲なし、故に耳にて聞くべからず、されば屑々と聞取を務めんよりは、耳を塞ぎて聞かざるに若かず、此の如く智を閉ぢ聰明を役せざるときは自然に道の本眞に冥契せん、此を大に道を得たる人と謂ふべしとなり、

【解義】〔明見無値〕値は音「チ」「アフ」と訓ず、「成疏」に値會遇也と見えたり、値は本來「アタル」と訓ずる字なれば、「直」の字も通用して、其の時節に折しも「アタル」といふ意なれど、大概は其のすぢにあたりて行くの意に用ゐる、道を顯著なるものに求むれば値はず、闇に於て至るといふなり、〔辯不若默〕齊物論篇に、大辯不言と見えたると相發明すべし、〔道不可聞〕道は不言に在れば、唯默して得べきを云ふ、〔聞不若塞〕多聞を以て道となすは耳を塞ぐに若かずといふなり、〔此之謂大得〕默して耳を塞げば奔逐する所なし、故に大に道を得となり、「林雲銘」は大得猶深造也と云へり、

【備考】本章は孔老の問答に假托して作者の道觀を説きたる文なるが、論旨頗る幽玄に渉り、文章亦較難解の感あれば、今左に其の大義を述て參考に資せん、本文の主旨は老子が開口初番に夫道窅然難言哉と云へる一語に在り、全文は要するに窅然たるを説明するに過ぎず、蓋し先づ夫道窅然難言哉の一句を以て、道の奧深にして容易に知り難きを示して、聽者の注意を喚醒し、次ぐに昭昭生於冥冥、有倫生於無形の二句を提明し、而して精神生於道より萬物不得不昌、此其道與に至るまでは昭々生於冥冥の義を陳べて道窅然言ひ難きの意を論せり、是を第一小段と爲す、且夫博之不必知より萬物皆往資焉、而不匱此其道與に至るまでは有倫生於無形の義を陳べて

大歸は死を云ふ、太宗師篇に出でたり、前に造化より出でて、今は造化に入る、恰も久しき旅行者が自家に赴くがごとく、誰か樂しまざらむや、然るに噭々然として之を號ぶ者は何するものぞやとなり、以上生死原來異觀なきを言ふ、

不形之形、形之不形、是人之所同知也、非將至之所務也、此衆人之所同論也、彼至則不論、論則不至、

【大意】 此には、至道を求むる者は辯論を棄てゝ靜默して得べきを說く、

【通釋】 人の未だ生ぜざるや、本來其の形あらず、一旦生るればこゝに生あり、然れども生や本來自然に出づ、故に生を自然に養ひて形を守らざれば、則ち能く其の形を存す、之を不形之形といふ、若しそれ生を營み、形を守れば、則ち還つて其の生を敗る、之を形之不形と云ふ、是一般に人の知る所なり、然れども、之を知ると雖ども、然も其の自形に任ずる能はざる時は、反りて之を形す、故に敗るゝもの多し、是卽ち人間の卑近の事、其の眞に至らむとする者未だ嘗て此に從はず、是亦衆人の論ずる所なり、然れども學んで至らむと務めざるが爲に至る能はず、此の形質の有無、死生の來往等は衆人の同じく論ずる所なり、彼の至聖の人は忘言にして理を得、故に論說する所なし、若し之を論說すれば、則ち道に至る事なし、

【解義】〔不形之形〕至道は無なり、無よりして化して生ず、之を形せずして形すと云ふ、「宣注」に不形者形所自出、卽昭昭生於冥冥也と〔形之不形〕已に生じたるものゝ有より化して死すれば無に歸す、之を形すれば形あらずといふ、「宣注」に形者不形所爲、卽有倫生於無形也、宣說に依れば此の二句不形は之れ形し形は之れ不形よりすと讀むべし〔是人之所同知也〕衆人皆無形より形を生じ、有形より復形質なきに至る事は、衆人の知る所たりとなり、〔非將至所同論也〕以上の事を知るは、將に道に至らんとする者の務むる所にあらず、此れ以上の如き卑近なる談話を一掃して下述の如くならんを望みたる辭なり、

に赴くがごとくなるべきを悟らざるはいかにといふなり、

【解義】〔若白駒之過郤〕白駒は駿馬なりと、或は云はく日を云ふと、「郤」は本「隙」に作る、隙は孔なり、「ヒマ」と訓ず、「郤」は「隙」の假借字なり、駿馬の孔隙を過ぐるは倏忽の間に過ぐるを喩ふ、「正義」には、白駒隙中之光、日所照也と見えたり、但「禮記」三年問に三年之喪、二十五月而畢、若駟馬之過隙と見えたれば馬とする説の古きを見るべし、又日といふ説に據れば、日影の孔隙を過ぐるなり、亦通ずべし、但し其の喩の意は人生歳月の迫促惜むに足らざるを云ふ〔注然勃然莫不出〕「正義」に興起貌と見えたり、生るる形容を云ふ、〔油然漻然〕「正義」に歸虚貌と見え、又「莊子考」に油由同、油然、無所違忤之貌、漻寥同、漻然靜寂之貌と見えたり、漻は「釋文」に音流「李注」には音、礫と見えたり、死する貌に云ふなり、出づると入るとは生と死とを云ふ、〔生物哀之〕死者に對して生けるものを生物と云ふ、即ち其の死するや生ける者に哀まるとなり、〔人類悲之〕物に別つが爲に人類といふ、人にありては死すれば同類に悲しまるといふなり、而して其の哀まるゝも悲しまるゝも死者は知らず、〔解其天弢墮其天袠〕弢は音「タウ」、弓を入るゝ嚢なり、韋を以て作れり、又韔、韣、鞬等の字を用ゐる、袠は音「チツ」、衣を入るゝ嚢なり、「帙」の字をも用ゐる、人の是を執り非を競ひ生を欣び死を惡むが爲に、之に包裹せらるゝは、物の弢袠に包裹せらるゝがごとし、故に天然の弢袠と云ふなり、今若し既に是非を一にし生死を忘れむには、天然の弢袠を解脱するなり、「宣注」には人有軀殼、如天以弢袠拘之、今死則如解弢墮袠と見えたり、〔紛乎宛乎〕「正義」に、紛綸宛轉並適散之貌と見え、「郭注」に變化絪縕と見えたる、絪縕は氣の立騰る貌なれば、下の魂魄の將に往なむとするの形容にて、神氣離散の意なるべし、〔魂魄將往〕魂魄は音「コン、パク」「タマシヒ」なり、「左傳」昭公七年傳に、人生始化曰魄、既生魄、陽曰魂と見えたり、蓋し天然に生物の肉身に宿りて精神の作用を掌り、生命の存續を保つものにて、古來多く肉身を離れて存在し得るものとせり、人の死なむとするや、魂魄は天に往き、骨肉は土に歸す、故に次に乃身從之といふなり、〔乃大歸乎〕

り起るも亦此の理を越えず、所謂和光同塵唯是のごときのみ、

【解義】〔果蓏有理〕桃李の實の類を果と云ひ、瓜瓠の實のごときを蓏と云ふ、此等草木の實も生熟榮枯各〻其の理ありて種類亂れざるを云ふ〔人倫雖難〕人倫は人類と云ふがごとし、人類に智慧の變ある故に難あり、難は等列の辨別し難きを謂ふ、乃ち貴賤尊卑齊しからざるがごときを指す、〔所以相齒〕齒は次なり順序立てること、王先謙曰く人之倫雖難齊、其所以生者自相齒次と、〔聖人遭之而不違〕聖人は其の當然に順ひて應ずる事なきを云ふ、〔過之而不守〕其の自然に任せて留戀する事なきを云ふ、〔調而應之德也〕其の間に調和して以て應をなす上德なりとなり、〔偶而應之道也〕偶然相値うては己を虛しうし以て應ずる道の天に合するものなりとなり、〔帝之所興云云〕人類の責は帝王より大なるはなし、然して帝王たるべき者は亦此の調偶の道に止まるといふなり、

人生天地之間、若白駒之過郤、
忽然而已、注然勃然、莫不出焉、
油然漻然、莫不入焉、已化而生、
又化而死、生物哀之、人類悲之、
解其天弢、墮其天袠、紛乎宛乎、
魂魄將往、乃身從之、乃大歸乎、

【大意】此には、人類の生死無常なれば、唯眞に道を得たる者は、乃ち能く眞性に反る由を說く、

【通釋】人が天地の間に生存するは、俄頃の間にして、其の迅速たる駿馬の孔隙を過ぐるがごとく、倏忽のみ、何ぞ云ふに足らむや、而して世間萬物の相與に恆なきや變に從ひて生じ化に順ひて死せざるなし、物の初めて生ずる本來無なるが有なり、又化して死すれば是既に有なりしが無なるなり、共に一理にして造物に委すれば何ぞ心に係くるに足らむや、然るに、人類の以て悲哀となすは、是愚惑ならずや、唯至人は能く此の天然の束縛を脫却して、自身に適し、心を其の間に用ゐる事なく、恰も旅人が旅より我が家

國設有二一人一焉と、〔非陰非陽〕萬物は皆陰陽の氣を受けて生る、然るに此の人に限り陰陽の範圍外に立つとの意にて、元と造化の友たる者にして、造化の支配を受くる者に非るを謂ふ、「覈玄」には曰く刻意篇稱二聖人一云、靜而與レ陰同レ德、動而與レ陽同レ波、因知名レ靜邪動能應レ時、稱レ動邪常處二虛靜一謂二之非レ陰非レ陽也と、〔將反於宗〕宗とは本根の意、齊物篇に謂ゆる未始有物の根宗なり、眞性といふに同じ、眞性に反れば卽ち德と道と冥合す、要するに、死生を逐はざるなり、〔生者喑醷物也〕「成疏」に喑醷氣聚也と見え、「釋文」に音蔭、郭音闇、李音飮、と見え、醷は「釋文」には「アイ」「アン」「タン」の諸音あり、皆聚氣貌と見えて、人生は氣の聚合なりと云ふ、一說に久しく貯へたる梅漿なりといふ、「莊子因」に醷梅漿也、喑久醞レ之也と見え「解莊」には循本を引きて云はく、醷「禮記」注、醷梅漿也、喑久醞レ之也、漿雖二久喑一能得二幾時一と見えたり、〔須臾之說也〕死生猶未だ殊にするに足らず、況や壽夭の間に於てをや、實に俄頃の間に過ぎずとなり、〔奚足以爲堯桀之是非〕人生既に云ふに足らず、況や是非の論に於てをや、眞性に反りて死生を相忘

る、に若かずとなり、

果蓏有レ理、人倫雖レ難、所二以相齒一、聖人遭レ之而不レ違、過レ之而不レ守、調而應レ之德也、偶而應レ之道也、帝之所レ興、王之所レ起也、

【大意】此には果蓏と人倫とを對照して、帝王の治は無爲なるを說く、

【通釋】桃李の果も瓜瓠の蓏も至微なりと雖ども、其の生ずるに時あり、種うるに種あり、結ぶ所大小前後ありと雖ども、古より今に及ぶまで、其の類雜はらず、所謂瓜の蔓に茄子は成らず、是至然の理の存するに非ずや、人類の中には親疏尊卑等の階級位列の辨別に困難を感ずれども、其の生誕の先後に於て、自然齒次順序あり、亦皆眞理中の一物に過ぎず、果蓏の理存するに異なる事なし、されば、聖人は之に遭遇するとき、之に順ふべく、過ぐるときは共に推し移りて頑固に執り守らざるべし、感に隨ひ、應に隨ひ、相與に和合してあらむは道德の自然なる者なり、帝王の興

り、匱は音「キ」「トモシ」と訓ず、ありしものゝ空しくなる意、「禮記」月令に則財不匱、注乏也、又「詩」既醉に孝子不匱、傳に竭也、又「漢書」注に空也盡也など見えたり、〔君子之道彼其外與〕君子道は物の中に貫くと雖ども、又物の外に行なはるゝあるを云ふ、蘇輿曰く運量萬物、猶有治化之迹、故曰外と〔萬物皆往資焉云云〕萬物皆至道に資りて始まり、資りて生じ、終窮ある事なし、之を道の至極とすとなり、資は「トリテ」と訓ず、「廣雅」に資操也、と見えたり、「易」乾彖に大哉乾元、萬物資始と見えたり、〔此其道與〕物皆往きて資り以て始まり以て生ず、其の功窮まりなし、然して道と物とは本一物にあらず、然れども、道を離れては物なし、故に此其道かと擬議の詞を置けるなり、以上道の本體を言へり、蘇輿曰く萬物往資猶易資生資始之資、此天地自然之功用也、故曰道と、

中國有人焉、非陰非陽、處於天地之間、直且爲人、將反於宗、自本觀之生者、喑醷物也、雖有壽天、相去幾何、須臾之說也、奚足以爲堯桀之是非、

【大意】此には人身に就いて至道の奇迹を說く、

【通釋】支那本土九州の地に或る人あり、陰とも就かず、陽とも就かずして此の天地の間に形を置きて只姑く人と爲りて生れ、今や將に萬物の始に反らむとす、始に反れば則ち其の德冥々と合してあり、若其の始より人生を觀察すれば、唯其の形のなきのみならず、抑ゝ生もあらず、唯生もあらざるのみならず、抑ゝ氣といふものなし、氣動けば則ち生あり、生は氣の聚合なり、猶梅漿を久しく醞へおくに同じ、幾時か久しきを得む、人の天地の間に在る亦此の聚氣のごし、一生の內百年の中假令壽命の長短はありとも、唯頃刻の間のみ、何ぞ堯といふ聖帝を是とし、桀といふ惡王を非とする、嘵嘵の說を要せむや、結局堯と桀とは是非あれども、心を萬物の始に遊ばしむるときは何等の物もなし、全く虛無なる者なり、

【解義】〔中國有人焉〕中國は中華と同じく、支那本土の稱、九州に同じ、「發覆」に曰く此莊子自謂也、中

【大意】此には、天地自然の道を以て、物の本根となす所以を說く、

【通釋】今の博く經典を讀みて道を求むる者の類、博學なりといふとも、之を以て道を知れる者といふべからず、又宏辯にして詞を飾る者も、必ずしも智慧ある者といふべからず、故に聖人は智慧を棄斷して之を自然に附せり、若しそれ、博學知辯なりとも其の爲に明を益すにあらず、沈默無言なればとて、其の爲に損するにあらず、所謂不增不減無損無益なれば、聖人は保ちて之を愛す、抑、至道の深大なる大海の尾閭（尾閭は海水漏泄の處と云ふ）が泄して耗せず、百川が之に注ぎて淵を增さざるがごとし、巍巍乎と廣大にして窮まりなければ、終りもなく始もなく、日に新に變化して盡くる事を知らず、聖人は萬物の自から爲すを運用して窮まらず、君子は之を身に取りて足らざる事なし、之を君子の道といふ、君子の道は、決して遠きにあらず、近く內心にあり、天地間の庶物皆此の至道を禀けて生じ、之に資りて以て始まり、宇宙に亙りて終窮を見ず、是天地自然の、造物の本根となす所以なり、此の段は以て天は人にあらざれば成らざるの意を點出して更に周密なりとすといふなり、

【解義】〔且夫博之不必知〕是亦老子の言とす、博とは知らざる所なきを云ふ、知らざる所なき人も必しも知者にはあらずとなり、〔辯之不必慧〕辯の巧みなるものも必しも知慧ある者と限らず、「老子」（信言不美の章）に、善者不辯、辯者不善、知者不博、博者不知、と云へるに同じ、〔聖人以斷之矣〕聖人は知辯を棄てゝ用ゐずとなり、「老子」（棄智の章）に絕聖棄智民利百倍とあると同意なり、〔若夫益之云云〕各其の正分を保たしめて智慧を用ゐざるの意を云ふ、〔聖人之所保也〕聖人は至道を妙體す、故に保ちて之を愛するなり、上文聖人以斷之矣と對して看るべし、〔淵淵乎其若海〕淵淵乎は深き貌なり、「小爾雅」に淵深也、と見え、「詩」燕々に其心塞淵と見えたり、道の深大なるを云ふ、〔巍巍乎云云〕「成疏」に巍巍高大貌と見えたり、高大を歎美する語なり、字又「魏」に作る、「論語」に巍巍乎、舜禹之有天下、「何晏集解」に巍高大也と見えたり、終りて復始まり端なきを云ふなり、〔運量萬物而不匱〕萬物の自から爲すを用ゐて己を役せざるが爲に用ふれども、窮まりなきな

見え、「正義」には邀如邀諸路之邀と見えて、「アフ」とか、「ムカフ」とか訓じたれど、兪樾は「シタガフ」の意に訓じたるが穩當なるがごとし、其の說に曰はく、說文無邀字、彳部徼循也、卽今邀字也、又曰循行順也、然則邀亦順也、邀於此者猶言順於此者、「郭注」曰、人生遇此道、是以遇訓邀、義既迂曲、且於古訓無徵、殆失之矣と、然れば、此の至道に順ふ者は の意と見るべし、〔四肢彊、思慮恂達〕四肢は兩手と兩足との稱、肢は胑に同じ、胑を本字とす、「說文」に胑體四胑也、從肉只聲、「釋名」に胑枝也、似木之枝格也、「朱注」に「孟子」四肢之於安逸也、「荀子」如四胑之從心、「易」の文言に暢于四支、以支爲之、「孟子」に爲長者折枝、以枝爲之と見えたり、彊は「說文」に弓有力也、「詩」載芟、侯彊、侯以、傳に彊力也と見え、「書」皐陶謨彊而義、傳に無所屈撓也など見えて、强の本字なり、强は彊の假借なれど、後には多く强の字を用ゐたり、恂は疏に通也と見え、「林注」に恂達通達也と見えたれど、諸字書には通の義見えず、或は徇循に通じ、「シタガフ」の義より通に假れるにや、姑く舊疏に據る、〔其用心不勞〕無心の心は用ゐて勞せず自然に順ふを云ふなり、〔其應物無方〕不應の應は應じて方所なきなり、〔是其道與〕與は歟の古文、「論語」に然非與、皇侃疏に不定之詞と見え、「漢書」王嘉傳に、材難不其然與、注に讀爲歟、經史多以與爲之と見えたり、天地日月萬物皆道を得ざれば能はずと、況や人に於てをやと、いひて以て道の功用の大なるを述べ、さて歟といふ擬議の詞を用ゐて、以て道の言ひ難きを知らしむ、「老子」に、天得一以淸、地得一以寧、萬物得一以生といへる卽是の謂なり、

且夫博之不必知、辯之不必慧、聖人以斷之矣、若夫益之而不加益、損之而不加損者、聖人之所保也、淵淵乎其若海、巍巍乎其終則復始也、運量萬物而不匱、則君子之道、彼其外與、萬物皆往資焉不匱、此其道與、

其來無迹、其往無崖、無門無房、四達之皇皇也、邀於此者、四肢彊思慮恂達、耳目聰明、其用心不勞、其應物無方、天不得不高、地不得不廣、日月不得不行、萬物不得不昌、此其道與、

【大意】此には、物の生死の尋逐すべきなきに就きて、至道の大を逃べて、其の道を得べきを說く、

【通釋】大凡陰陽の聚結に由りて物の生ずる時は、亦死なき能はず、然して其の來るや何處より來れるを知らず、其の去るや何處に止まるを知らず、人の住む居室には出入の門もあり、安居する房もあり、然るに、唯太虛の間には、皇々と廣大なるのみにて、萬物を大通す、恰も大路の四通八達なるに似たり、凡そ至道の物を物する此のごとし、故に人々能く循ひて眞理を會得せば、則ち百體安康にして四肢强健思慮の通達すること、物を視聽く事聰明に、無心の心は用ゐれども勞する事なく、不應の應は無方に應ぜむ、今それ天地は虛通に賴りて高く廣し、日月も至道に資りて運行し、萬物は之に依りて次第に文明に趣きぬるは、是實に大道の功用なりとなり、

【解義】〔其來無迹〕物の生れて來るや、何處より來れりといふ跡方なしとなり、迹は音「セキ」、說文に步處也と見え、「正字通」に凡有形、可見者、皆曰迹と見えたれば、跡方の意なり、「老子」善行に無轍迹と見え、天運篇に六經先王之陳迹也など見えたり、「干祿字書」跡迹竝正、と見え、「正字通」に「正譌」以跡爲俗、「韻瑞」以蹟同跡竝非と見えたり、〔其往無崖〕其死するや往くと雖も崖際なしとなり、「林雲銘」は言造化之去來、無地可尋逐也と見えたり、〔無門無房〕門は人の出入する所、房は人の住宿する所、以て造化の出づる所歸する所を知らざるに喩ふ、〔四達之皇皇也〕四達は、道路の四方に通ずる事、四辻なり、皇は「冣玄」に皇大也と見え、「莊子考」に道之在于兩間、旁流無所不至、故曰四達、皇皇廣大之貌と見えたり、死生の去來に任せたるが恰も通衢四達の大のごとしとなり、〔邀於此者云云〕邀は「成疏」に遇也と

也と見えたり、「莊子考」に精神の精字は下文に因りて攙入したるにて、衍文なるべしといへり、〔掊擊而知〕汝の聖智を打破するなり、智を捨てゝ虛心平氣になるなり、掊は音「ホウ」「ウツ」と訓ず、打破らむとしてうつの意、〔夫道窅然難言哉〕窅は音「エウ」「フカシ」と訓ず、深遠の貌、卽ち至道は深遠にして言辯し難しとなり、〔將爲汝言其崖略〕「成疏」に崖分也と見え、又林雲銘曰く崖邊際也、崖略者謂深妙者難言、只言其邊際粗略者而已と見え、「叢玄」に崖略云大凡と見えたり、大略の意なり、〔夫昭昭生於冥冥〕昭昭は明白に見るを得べき者は、奧深く見難き中より成るとなり、昭は「アキラカ」と訓ず、明の字よりも義狹し、冥は暝と同字なり、「クラシ」と訓ず、くらくしてはかり知り難き意、道理の遠深にして定かに見えぬを云ふ、渺冥も同意なり、〔有倫生於無形〕有倫は形質ある萬般の物なり、倫は類なり、「禮記」に儗人必於其倫注に猶類也、と見えたり、分別を得べきものなり、〔精神生於道〕精神は「成疏」に精知神識の心と見えて、其の靈心は至玄の道より生すとなり、「發蒙」に萬物職職而有倫類者、皆從無形無相而生

と、〔形本生於精〕本は質幹なり、「覆蒙」に曰く陰陽媾精而成形也と、以上昭昭以下形本云云までの四句は、無中に有を生ずるを謂ふ、「副墨」は云はく、無極之眞、二五之精妙、合而凝、而人生焉、其所謂神卽無極之眞也、其所謂精則二五之精也、知精神之生於道則知性之所自出矣、知形本之生於精則知命之所由立矣、上下二精字、要有分曉、蓋精神之精、卽道家所謂先天之精、淸通而無象者也、形本之精卽易繫所謂男女媾精之精、有氣而有質者也と見えたり、此れ後世宋代の儒家の說を援きて莊子に附會せし者にて未だ必しも盡く此章の意に同じからずと雖へども、亦併せ觀て發明する所あるべし、〔而萬物以形相生〕天地間の庶物は形を以て相禪り生生して已まざるを云ふ、〔故九竅者胎生云云〕竅は音「ケウ」、「說文」に竅空也、從穴敫聲と見えたり、竅は氣を出納する小孔なり、「素問」に淸陽出上竅、濁陰出下竅、或曰、人身九竅、八南向、其一處下以通穢也、と見えたり、人類獸類等は卽ち九竅にして胎生たり、胎生は通釋に述べたり、〔八竅者卵生〕八竅は魚鳥蟲等の類卽卵生す、佛經に四生とて、胎生、卵生、濕生、化生說けり、

【通釋】孔子嘗て老子を師とす、故に其の安居閒暇を承けて至道を詢ふ、其の言に曰はく、敢へて問ふ、至道は如何にと知了すべきかと問ふ、老子曰はく、道を問はむとならば、須らく先づ汝の思慮意念を愼み、心を專一清明に守り、飮食動作を妄にせず、身心を清淨にし、聖智を打破して、平然なれ、抑〻玄道は深遠にして、言辯し盡し難し、然れども、今汝が爲に其の小部分を擧げて、粗〻之を言ふべし、それ天地の間に最も昭明顯著なる物は凡人の目に認め難き冥冥の中に生じ又人間社會の種々の出來事は無形の內に生じ、精智神識の心は、至深の道より生じ、有形氣質の類の根本は、精微に生ず、畢竟皆獨化して何物にも資借する所あらず、原來無形の道能く有形の物を生じ、有形の物は形質氣類を以て相生ず、故に人獸は九竅即ち口、兩耳、兩眼、兩鼻孔、二便孔ある者は母體の胎內にて適當なる發育を遂げて後に出生し、八竅の者即ち魚鳥蟲等のごときは兩耳兩眼兩鼻孔一便孔の者は受精せる卵子の其の儘に母體外に出でて發育す、是之を自然に禀けて相易ふる事能はざるものなりとなり、

【解義】〔今日晏閒云云〕晏は「カン」と「ケン」との兩音にて、いづれも安と訓ず、靜なる意を含めり、閒は閑と同じ、暇ある時をいふ、〔汝齋戒疏瀹而心〕齋戒は思慮意念を愼み、心を專一清明に守る事、疏瀹は「成疏」に、猶洒濯也と見えて、身を清く濯ひて心を清淨にする事、瀹は音「ヤク」「成疏」に疏瀹猶洒濯也と見え、又「正字通」に疏瀹開滌也と見えたれば、「アラフ」と訓ずべし、但し瀹は「瀹」を正字とす、「正字通」に、俗作瀹瀹と見え、瀹の條に「正韻」瀹亦作瀹、瀹註引莊子疏瀹而心、未詳、莊子本作瀹、非作瀹也、「韻會小補」引集韻瀹亦作爚、尤非と見えたり、而は汝と同じ「ナンヂ」と訓ず、〔澡雪而精神〕汝の精神を澡ひ清むるなり、疏に澡雪猶精潔也と見えたり、澡は音「サウ」「テアラフ」と訓ず、後には轉じて單に洒洗の意とす、「說文」に澡洒手也と見え、「禮記」儒行篇に有澡身而浴德と見え、「文選」長笛賦に澡雪垢滓と見えたり、雪は「ス、グ」或は「キヨム」と訓ず、「正字通」には拭の意に釋せり、「正字通」又「莊子」知北遊篇汝齋戒疏瀹而心、澡雪而精神、又「史記」沛公遽雪足、杜甫詩、公子調氷水、佳人雪藕絲、註雪拭

住云云」人の行くや日に足を以て其の行くを見れども、終に其の住まる所を知らず、日に其の身の安居するは見れども終に其の手を以て如何に之を持てりと知らず、日に其の食ふ事あるを見れども、終に其の口を以て如何にして味ふかを知らず、然れば、其の行くも我が自が主となりてあるを知らず、其の身を持する幾十年の久しきに亙りても、我が能く自から留れるを知らず、其の食ひて味ふを知るも我が自から辯ずるを知らず、天地陰陽の氣之を運動せしめて然らしむるもの、皆各自の有せるに非ずとなり、「天地之彊陽氣也」彊陽は運動といふに同じ、其の理由は、人の形成の初より一點强烈なる運動の陽氣によりて然るものなり、故に若し此の氣一たび息まば行くを得ず、見るを得ず、食ふを得ずとなり、「又胡可得而有邪」原來かの形性より子孫に至るまで皆是天地陰陽運動の氣によりて然るを知り、類推せば、凡そ吾が身にありとある者更に何者か據りて我が有とするものあるべけむや、今此の幻身復何處にあつて、何を以て私にかの道を有すとなすべけむや、蓋し身が有にあらざるを知らば、則ち此の身に貪着して以て常となすも妄なり、又道の我が有にあらざるを知らば、此の道に貪着して以て得たりとなす者も亦妄なり、仔細に此の語を翫味すれば唯世人が鄙吝の私を消すべきのみならず、佛氏が所謂人法雙忘乃成空到といへるものも其の眞義亦想見すべし、

孔子問於老聃曰、今日晏閒、敢問至道、老聃曰、汝齋戒疏瀹而心、澡雪而精神、掊擊而知、夫道窅然難言哉、將爲汝言其崖略、夫昭昭生於冥冥、有倫生於無形、精神生於道、形本生於精、而萬物以形相生、故九竅者胎生、八竅者卵生、

【大意】此には、孔子が老聃に至道を問ふ事を説く、七小節に分ちて見るべし、其の一節には、萬物自然といへども胎生卵生相易ふべからざるを説く、

根由を推し尋ぬるとも其の所を知る事なく悉く自から然るなり、固是天地の運動なり、されば、是亦得て此の身を有すとなすを得ず、それ吾が身悉く皆吾が有にあらざる時は、又胡ぞ得て私にかの道を有するを得むやとなり、

【解義】〔舜問乎丞曰〕丞は太古の道を得たる人にて、舜の師なりといふ、「李注」に舜師也と見え、一説に官名と云へり、釈文に、李云、舜師也、一云、古有四輔、前疑後丞、蓋官名と見え、又「解莊」に「碧虚音義」を引きて古帝王有四輔、左輔右弼前疑後丞也、丞乃官名也と見えたり、〔道可得而有乎〕至道は虚通にして動植の物を生成すれど、自身の身の内にも此の道を得る事ありや否と、其の師に問へりとなり、〔曰汝身非汝有也〕人は天地陰陽結聚の餘に成れる所なれば、其の身は其の所有にあらず、況やいかでか至道の無に於てをやとなり、〔孰有之哉〕舜未だ生の意を悟らず、故に身我が有にあらずといはゞ誰か之を有するぞと反問す、〔是天地之委形也〕人は陰陽結聚を得て生るれば其の身は天より付屬せられたる形とす、故に汝の有にあらず、となり、委形の委は付屬するの義に從ふべし、「成疏」には、委結也といへり、「副墨」には積聚也と見えたり、兪樾は曰はく、司馬云、委積也、於義未合、「國策」齊策願委之於子高、注曰、委付也、成二年左傳王使委於三吏、杜注曰、委屬也、天地之委形謂天地所付屬之形也、下三委字竝同と、〔生非汝有云云〕人の生きてある事は天地の和氣を以て生きてあるものなれば、天地の付屬せる和氣なりとすといふなり、〔性命非汝有云云〕性命は天地より頒布せられたるものなり、故に天地の付屬に順へるものとすとなり、抑身は本來自身の所有とせば美惡死生之を自由にするを得べし、然るに、今氣聚りて生るゝも禁ずる能はず、氣の散じて死するも之を止むる能はず、之に由りて觀れば其の身たる其の者の所有にあらざるを知るべしといふなり、〔孫子非汝有云云〕我が子我が孫形形相禪る所、恰も蟬の蟬脱するがごとし、是天地の付屬せる蟬脱なりいかんぞ我が有とすべきとなり、人の生理と性命とは身の初に付與せられたるものにして子孫は身の後に替る者たり、今之を付與せられたりといふ上より推究する時は亦己の有にあらざるを發明すべし、〔故行不知所

とき人物ありと歎美してかくいへるなり、中にも骸、灰、媒、哉は韻相叶ひ、知持相叶ふ、「宣注」に、被衣が前に言へる所は、學道の功にして、後に歌ふ所は有道の象、未だ嘗て一字も道の字を言はず、然して滿眼總べて是道機といへるは、能く要を得たりと謂ふべし、上文形若槁以下何人哉まで歌の辭にして、

舜問乎丞曰、道可得而有乎、曰、汝身非汝有也、汝何得有夫道、舜曰、吾身非吾有也、孰有之哉、曰、是天地之委形也、生非汝有、是天地之委和也、性命非汝有、是天地之委順也、孫子非汝有、是天地之委蛻也、故行不知所往、處不知所持、食不知所味、天地之彊陽氣也、又胡可得而有邪、

【大意】 此には、舜が丞に道を問ふに就きて、我が身も我が有にあらざれば、此の身に貪着して有となすの妄を說く、

【通釋】 舜帝が其の師丞（或は云官名）に問ふ、我が身の內に此の道を有するを得るか、否かと問へば、丞答へて曰はく、夫れ人は陰陽和して後成れるものなれば、身は汝が所有にあらず、汝何ぞかの道を有するを得むやと、舜曰はく、然らば我が身我が有にあらざる時は、何人の有する所なるかと問ふ、答へて曰はく、是天地間の附屬する所の形質なり、されば生けるといふも汝の有にあらず、是は天地和順の氣、汝の生命を成せるものなれば、汝の有にあらず、氣の積聚せるもの生となり、散ずれば死となる、其の聚散已に汝に由らず、されば汝の生命も汝の有にはあらざるなり、孫や子や形形相禪りて窮極あらず、抑、子や孫や皆これ陰陽結聚して成れる所のもの、猶蟬の脫け替るがごとし、されば、孫も子も是亦汝の有にあらず、又行住食味の所作も皆自然に率ひてなす所のものにて、其の

已矣と見えたる此と同じ、〔天和將至〕、天道篇に、順天爲天和と見えたるがごとく、自然の和理歸りて身に至るを云ふ、卽ち正汝形は體の靜なるにて、一汝視は神の定まるを云ひ、形體耳目を忘れたるをいふなり、〔攝汝知一汝度〕私心を收めて平等ならしめ、志度を專一にして放逸せしめざるを云ふ、攝は「ヲサム」と訓ず、度は音「タク」、「ハカル」と訓ず、意を以て「アテハカル」の意、但し兪樾は、「正汝度」の誤として左の說あり、曰、一汝度當作正汝度、蓋此四句變文以成辭、其實一義也、攝汝知卽一汝視之意、所視者專一、故所知者收攝矣、正汝度卽正汝形之意、度猶形也、「淮南子」道應篇、「文子」道原篇、竝作正汝度、可據以訂正と〔神將來舍〕人間世篇に、夫狗耳目內通、而外心知、鬼神將來舍、況人乎と見えたると同じく神明將に來りて汝の胸中に舍らむとするをいふ、舍は「ヤドル」の意、〔德將爲汝美云云〕汝をして成德を得しめ、汝をして道に居るを得しめむとなり、〔汝瞳焉如新生之犢〕瞳焉は「成疏」に無知直視之貌と見え、又「李注」に未有知貌と見えたり、赤子の初めて生れたるときの眼は見ゆるがごとくにて

實は視るを得ざるものなるより、有道者が無心の狀を喩ふるなり、老子が所謂如嬰兒之未孩の意なり、〔而無求其故〕故は事の意、人其の視る所以の如何なるかを知らざるをいふ、卽ち無心の貌を形容せるなり、〔齧缺睡寐〕此に齧缺が被衣の言を聞きて未だ終らざるに、已に悟了して相對するをも覺えずして睡寐したるなり、畢竟無心の極致を解せるなり、〔被衣大說云云〕されば、被衣は大に悅び、喜躍して其の敏速に大道を行へるを贊し、歌ひて去るなり、以下何哉までは被衣の歌へる辭なり、〔形若槁骸云云〕形は枯木のごとく、心は冷えたる灰に類せりとは、無情直に純實の眞に任ずるをいふ、槁は音「カウ」、枯れたる木なり、齊物論に、形固可使如槁木と見えたるがごとし、〔不以故自持〕齧缺眞に實に此の理を知りたれば、師弟子の事實に循ひ、自から矜らざるを云ふ、〔媒媒晦晦〕「李注」に、媒媒晦貌、媒は昧と同音、霾と通ず、晦き貌、卽ち媒媒は昧昧の意なり、林注に芒忽無見也と見えたり、〔無心而不可與謀〕超然無心與に事を謀るべからざるの意、〔彼何人哉〕道に近きこと能く此のごとしといふに就きて世間此のご

齧缺問道乎被衣、被衣曰、若正汝形、一汝視、天和將至、攝汝知、一汝度、神將來舍、德將爲汝美、道將爲汝居、汝瞳焉如新生之犢、而無求其故、言未卒、齧缺睡寐、被衣大說、行歌而去之曰、形若槁骸、心若死灰、眞其實知、不以故自持、媒媒晦晦、無心而不可與謀、彼何人哉、

【大意】 此には、兩箇知道の人を選出して、相與に至道を語るを述べて、以て人をして其の悟を開かしむるを說く、

【通釋】 王倪の弟子齧缺、王倪の師なる被衣に至道は如何にして到るべきかを問ふに、被衣答へて曰はく、汝は先づ汝の形容を端正にして妄動せず、目は妄に視ずしてあらば元氣全かるべし、汝の思慮意識を去らば、汝の精神は善く其の形を守るべし、然る時は、汝の所行は皆汝の美をなすべく、至道は汝の心中に居るべし、汝は新に生れたる小牛の目は見えながら何物をも見るといふ事のなきがごとく、虛心坦懷にして其の事理を穿鑿する事を求むべからずと言ふに其の言語の未だ終らぬに、齧缺はウト〱と睡り入りぬ、被衣は大に滿足し行く〱歌ひて曰はく、形體は枯れたる木のごとく、心は冷えたる灰のごとくならば、是實に眞知なり、もし其れ無情にして直に純實の眞知に任せ、其の由りて來る所を知らず、世外を超脫せる無心に至りては、與に事を謀るべからず、彼は如何なる人ならむと歎息せりとなり、

【解義】〔齧缺問道乎被衣〕齧缺は「ゲキケツ」と讀む、疏に齧缺王倪弟子、被衣王倪之師也と見えたり、被は本「披」に作れり、蓋し音を假りたるものなるべし、〔若正汝形一汝視〕汝形を正すとは、妄動せざるを云ひ、汝の視る事を一にせよとは、妄に視ざるをいふ、一とは專一の意、庚桑楚篇に全汝形の注に守分也と見え、又、駢拇篇に、吾所謂明者、非謂其見彼而

見ざれども、神用無方なり、萬物を養成して之を知らず、此の無上の大威眞力是至道にして卽ち一根本なりといふなり、

【解義】〔六合爲巨未離其內〕六合とは、天地四方を云ふ、內とは至道の中をいふ、巨とは「オホイナリ」と訓ず、物の形の大なるをいふ、細の反對なり、巨人、巨室の類、又鉅と同じ、其の意は天地四方は其の形を云はゞ頗ぶ大なりとも、無極の中に在りては甚陋しとなり、「釋文」に其內、謂不能出自化也と見えたり、「列子」湯問篇に無則無極、有則有盡然無極之中、無無極、無盡之中、復無無盡、「張注」に既謂之無、何得有外、既謂之盡、何得有中と見えたるを參觀すべし、〔秋毫爲小待之成體〕秋毫とは秋の頃に脫け代りたる獸類の毛の先の義より轉じて、極めて小さき物に喩へたる語、「成疏」に、獸逢秋景、毛端生豪、豪極微細、謂秋毫也、巨大也、と見えたり、道の物にありては小大を遺さざるを云ふ、〔天下莫不沈浮云云〕沈浮は「シヅム」と「ウカブ」となり、猶ほ升降といふがごとし、又往來とも見るべし、世間の庶物往來窮まらず、是を以て日に新にして腐朽する事なし、「故」とは物の舊物となれるをいふ、〔惛然若亡而存〕惛は「釋文」に音「コン」又「ビン」の諸音を出せり、「クラシ」と訓ず、昏と同じ、「說文」に、不憭也と見え、「秦策」に皆惛於教、注不明也と見えたり、至道は昧きがごとく、無きに似て有るをいふ、「老子」に道可道非常道と見えたるに同じ、〔油然不形而神〕油然は「釋文」に音由、無所給惜也、と見え、「林注」に生意也と見え、「正義」に油然無所係也と見え、「覈玄」に油然入貌とも見えたれど、要するに、心なき貌と解すべし、至道は無心にし形象を現はさざれども靈妙の力ありとなり、〔萬物畜而不知〕畜は音「キク」、本「滀」に作る、「ヤシナフ」と訓ず、詩邶風に、畜我不卒、又小雅に拊我畜我など見えたり、養育の意、萬物は自から生じ自から育して其の何人か之をなすを知らず、此を至道の大本となすとなり、此の章の意中庸に萬物並育而不相害の一節と同意なり、亦以て莊子が學の原づく所を知るべし、〔可以觀於天矣〕觀は「ミル」と訓ず、篤と念を入れて見るの意、天は自然なり、理に達して本を知る者は自然の至道を善く見屆けて知りたるものといふべしとなり、

萬物亦省略して其中に包在し、次に單に物の一字を掲げて、證を易見の例に取れり、文字用心の精微亦以て窺ひ見るべし、〔扁然而萬物自古以固存〕扁然は「ヘンゼン」と讀む、「成疏」に扁然偏生之貌也と見え、釋文に音扁、又音幡と見え、又「正義」には、扁音幡、幡然變易之象と見え、又「徑解」には扁同翩、「副墨」には翩然と見えたり、按ずるに、疏の偏生之貌とあるは「林注」の有去而不已之意便是也と有に同じく、正義の幡然とあるは、「孟子」に既而幡然改曰の注に反也、「荀子」大略に君子之學如蛻、幡然遷之と見えたる類にして、「副墨」に翩然とあるは、「詩」小雅に幡幡瓠葉の注に輕翻也と見え、又「詩」巷伯に捷捷幡幡の傳に猶翩翩也と見えたるの類の意なるべし、姑く疏の說に據りて偏生の意に從ふ、自古以固存とは、下文の「郭注」に夫有之爲物、雖千變萬化不得一爲無、自古常有也と見えたるの意にして、卽ち萬物の化相尋いで去り、窮極ある事なく、而して其の造化は當に存在せりとなり、東坡が赤壁賦に所謂逝者如斯而未嘗往也の意亦此と同じ、

六合爲巨、未離其內、秋毫爲小、待之爲體、天下莫不沈浮、終身不故、陰陽四時運行各得其序、惛然若亡而存、油然不形而神、萬物畜而不知、此之謂本根、可以觀於天矣、

【大意】此には上文を承けて、遂に本根の何物なるかを說く、

【通釋】それ本根とは卽ち道なり、道は往くとして在らざるなし、故に天地の間は其の形たるや巨大なりと雖ども至道の中に在りて、卽ち造化の內を離るゝ事能はず、秋期に生ずるの獸毛は極めて微細なれ共之を待ちて以て質を成す、世間の庶物或は升り、或は降り往來住まらず、日に新にして少しも腐朽せず、陰陽の二氣氤氳春夏秋冬の四時運轉し、春秋寒暑の次序天然少しも愆まる事なし、不分明にして有りとも見えぬがごとくにして存在し、油然として形象を

夏秋冬の氣節皆一定の法則あり、然れども之を評議をなし極むる事なしとなり、議とは論の意に近けれど論は打寄りて種々意見を述ぶる事を云ひ、議は國語の「議定評定」などいふに相當して議論をし極むる事にて、其の事を實行するやうに會議する事なれば、空論にあらぬを云ふ、〔萬物有成理而不說〕天地間に存在する許多の物は、其の數を知らずと雖ども道は在らざるなし、是を成理ありと云ふ、通釋にも述べたるがごとく、鴨脚、鶴脛、熊膽、砂糖の各其の特性あるがごときを成理とす、說は言語を以て其の理を言ひ分くる事を云ふ、此の三句は「易」文言に、乾始能以美利利天下不言所利大矣哉と云ひ、又「論語」に天何言哉、四時行焉、百物生焉の數語と其の旨を一にす、〔聖人者原天地之美而云云〕聖人は自然に順ふは皆天地に得たるにて、畢竟天地の覆載に合し、萬物の生成に同するを以て、口にも言はず心にも作さず、自然に任するをいふ、聖人は卽ち至道を體せる人なり、〔大聖不作云云〕大聖至人は無爲無作、天地の覆載に觀て至道の生成に法る、無爲無言とは卽是なり、作は「ナス」と訓ず、與作してする事を云ふ、「爾雅」釋言に作爲也と見えたり、最古は唯「乍」の字に作れり、後に善人良民を乍爲するの義より、會意せる字なり、〔觀於天地之謂也〕天地の覆載に就きて觀察するを云ふ、卽ち天地の形容物宜を觀察して、天地と同一になるなり、〔今彼神明至精與彼百化〕今彼の彼は聖人を指し、下の彼は天地を指す、一說に、今彼神明至精與彼百化物と、物の字にて句を切りたるものあり、誤れり、卽ち聖人は無心にして身を變化の途に拘はらねば、爲に其の神明自若として常に適せるを云ふ、「郭注」に、百化自化而神明不奪と見えたり、〔物已死生方圓云云〕それ物の或は死し、或は生じ、或は方に或は圓なるは皆自から爲してあれば、變化自然にして、其の根源を知る事なし、唯、神奇が化して臭腐と爲り、臭腐が復化して神奇となるを見るのみ、畢竟皆自から造して、所謂造物と稱する者あるなしとなり、物は萬物を謂ふ、萬物は人の見易き者なるを以て、故に獨り物の字を揭げて、之を證するなり、按ずるに此段の文章、始めは天地四時萬物を擧げ、次に聖人を說きて、天地萬物を擧げ、四時は省略して其中に包在し、次に大聖を說き、獨り天地を擧げて四時

とあり、四字とも大抵は同意に用ひらるゝとみえたりと見えたり、

天地有大美而不言、四時有明法而不議、萬物有成理而不說、聖人者、原天地之美、而達萬物之理、是故至人無爲、大聖不作、觀於天地之謂也、今彼神明至精與彼百化、物已死生方圓、莫知其根也、扁然而萬物自古以固存、

【大意】此には、上文不言の意を受けて、天地陰陽萬物死生の理を論じて、終に本源に歸するを説く、

【通釋】大凡人の大功ある者は、之を言ひて止まず、然るに彼の天の覆ひ地の載するや、其の功最も大なるに、何事をも言ふ事無し、又春夏秋冬の中、寒來暑往月盈ちては虧け、物盛なれば衰ふる、皆一定明白の法則ありても、何事をも評議せず、萬物皆自然の理あり卽ち鳧の脚は短く、鶴の脛は長く、麥の穗は垂れて黍の穗は仰ぎ、水は冷かにして、火は熱く、熊膽は苦く、砂糖飴などの甘きがごとき、如何にか說明するを得む、聖人は天地の變に原づきて萬物の理に達す、故に亦無爲を以て妙用を成す、唯天地に就きて觀察して法を效すのみ、天地の妙理を以て彼の萬物の變化を觀れば、物は已に死と生と變を異にし、方と圓と象を異にす、人は其の然る所以の根本を知らず、唯許多の萬物にして時に隨ひて生育して、物として有らざるなく、古より固に存在して吾が知識を以て兎角言ふ必要もなし、其の必要なき以上は、いかでか吾人の言議を須ひむや、聖人が不言の敎を行ひて無爲の化を成す所以の者、此に徹して其の趣の深きを知るべしとなり、

【解義】〔天地有大美而不言〕天は覆ひ地の載する・其の功最大なれど、一言も言ふ事なしとなり、大美は猶ほ大功と云ふがごとし、「釋文」に大美謂覆載之美也と見えたり、〔四時有明法而不議〕四時は「シイジ」といふ讀癖あり、春夏秋冬の稱卽ち四季なり、春

者なりといひしは、其の自から知れりとせざるを以てなり、又彼の狂屈が道を知れるに近しといひしは、其の知れりと思へるを忘れたるを以てなり、予と汝とは、終に道を知らざるに同じと云へるは、其の之を知れりと思へるを以てなり、畢竟至道に達せむは知識を以て得べきにあらず、故に不知を以て眞に知れりと爲し、知れりと思へるは、既に私知を以てせるものなれば知らずとなすなり、狂屈之を聞きて、黃帝をば知を以て道の體を得て之を言に發したるを稱すといふなり、〔末段に狂屈を收めて終に無爲謂を出さざるは要するに無爲謂は唯知らざるを以て終りしに、狂屈は此の聞之の一聞多き程無爲謂に及ばざることと察するに足らむ、是上文に老子を引きて知者不言、言者不知、故聖人行不言之敎といへるに對して觀るべし、〕

【解義】〔吾問無爲謂〕吾は國語の「私」と云ふ程の意、本條中不我告、今予問乎若などのごとく、吾我予の三字を互用したれば、聊か其の意義の區別ある事に就きて先輩の說を擧ぐべし、我は本來自稱代名詞なれど、多く先方へ對して廣く此方の事を云ふ、コチラの意に用ゐる、予は余と大抵同じく、吾の字の意に近し、皆我一分に限れる意なり、但し予は「オレガ」といふがごとき意に用ゐる事あり、「說文」に我施身自謂也、段注に、「爾雅」釋詁曰、卬、吾、台、予、朕、身、甫、余、言我也、又曰、朕、予、躬身也、又曰、台朕賚畀、卜、陽予也、或以賚、畀、卜、予不同義、愚謂、有我則必及人故賚、畀、卜、亦在施身自謂之內也、論語二句而我吾互用、毛詩一句而卬我襍稱、蓋同一我義而、語音輕重緩急不同、施之於文若自其口出と見え、「正字通」には、石鼓文遨、詛楚文俉、皆釋作我即吾字、然無深義、吾我字殊義同、「長箋」以我爲自身、吾爲自道、引「莊子」吾喪我、又云、石鼓詛楚文、遨俉外、各別有我字、遨俉爲古吾字、分吾我爲二、不知莊子吾喪我、乃古文疊字法、石鼓詛楚、遨俉我互用、乃古文錯見法、非吾我異音異義也、箋說非と見えたり、應は「コタフ」と訓ず、先方の事を此方へ一筋に受けて心に響き應ずるをいふ、〔奚故不近〕奚は「ナニ」と訓ず、「操觚字訣」に奚は疑ひ問ふ辭、ふしぎに思ふになぜにぞと問ふなり、何に比すれば詰る意なし、然れども「正字通」に「六書故」を引て曰、奚何胡曷、一聲之轉、義同

倶に是聚なり、倶に是散なりと徹底して其の陶冶に任せば、何ぞ患ふる事あらむや、聊も患ふる事なしとなり、〔故萬物一也〕萬物の死生總べて一氣たるを云ふなり、〔是其所美者爲神奇云云〕今の人は、唯生をのみ神妙奇特となして之を美とし、死を腥臭腐敗となして之を惡むは、大に非なり、豈神奇と思へるが化して臭腐となり、臭腐と惡める者が復神奇となるを知らむや、反覆相因り窮極なきのみ、何を美として歆むべく何を惡として厭ふべき、其の本末の顚倒一に斯に至れるかとなり、〔聖人故貴一〕至道體得の大聖人は、此の生死の間に處して一如にして死生禍福窮達の分別を起さず、其の自然に任ず、所謂道を體するなり、一を貴む所の者は、天下萬物を通じて皆一氣なるを以ての故なり、一氣とは卽ち內篇の人間世の篇に薪は盡きたりとも、其の火は傳はりて其の盡くる事を知らざるがごときなり、

知謂黃帝曰、吾問無爲謂、無爲謂不應我、非不我應、不知應我也、吾問狂屈、狂屈中欲告我而不我告、非不我告、中欲告而忘之也、今予問乎若、若知之奚故不近、黃帝曰、彼其眞是也、以其不知也、此其似之也、以其忘之也、予與若終不近也、以其知之也、狂屈聞之、以黃帝爲知言、

【大意】此には、前章の意義を詳解して、眞の道は知らざるの境界に到るを以て眞となすの義を說く、

【通釋】知が黃帝に謂ひけるやうは、吾は無爲謂に道を問ひしが、無爲謂は我に答へずしてありき、是は我に答へざるにはあらずして、我に答ふることを知らざるなりき、吾後に狂屈に問へば、狂屈は初めに我に告げむとして我に告げざりき、是は我に告げざるにあらず、中途にして告げむとすることを忘れたるなり、今予汝に問ふに、汝は之を知れり、然るを何故なれば、眞に知れる者と遠しといふかと問へば、黃帝は之に答へて曰はく、彼の無爲謂が眞に道を知れる

も情には向背あり、故に情の美とする所は則ち神妙奇特となし、情の惡む所の者は則ち腥臭腐敗となす、而も本來を顚倒して此のごときに至るなり、然りと雖ども、物性同じからず、好む所各異なり、彼の美とする所を此は則ち之を惡み、此の惡む所は彼又美となす、所謂西施楊貴妃は人の美とする所なれども、魚若し之を見れば、深く水に沒し、鳥若し之を見れば、高く飛ぶ、則是神奇を臭腐とし、臭腐を神奇とす、是亦美惡何ぞ定まりあらむや、是に於いて天下萬物同一の和氣のみを知るを得となり、故に至道を體せる聖人は、臭腐神奇に處すとも、分別を立てず、此の眞一を貴みて萬境に冥同すといふなり、

【解義】〔生也死之徒云云〕世人の所謂生といふ者は變化の道を知れる者より云へば、死と異なりとせず、蓋し造化の機、功を成す者は退き、特に來らむとする者は進む、而して萬物の生と死との兩者も此の機に出入させるものなし、故に生と死は同類といふなり、徒は「タグヒ」と訓ず、同一種類の意、「左傳」宣公十二年傳、原屛咎之徒也、注に黨也と見え、「孟子」に聖人之徒也とも見えたり、是の語は本は老子に出づ、〔孰知其始〕孰は「タレカ」と訓ず、誰人かの意、知らむと呼應して反語を成し、誰人も知らぬの意を言ふ、「爾雅」疇孰誰也と見え、「論語」孰不可忍也、注誰也、誰孰亦一聲之轉と見えたり、「說文」に食飪也、從丮臺と見え、「正字通」に本作䎩、从臺、丮、聲、臺音純、亦䎩也、借作誰、俗作孰孰非と見えたり、然れば、本は熟にて物の能く烹えたる意なるが、誰と通用せるものなり、紀は紀綱にて物の大本を云ふ、綱紀とも同じ、氣聚まりて生る、是死の同類氣散じて死する猶是生の本始、生死循環窮極あるなく、聚散變化定まりあるなし、誰か其の大本を知らむやとなり、〔人之生氣之聚也云云〕大凡天地の間に盈ちたるものは、唯渾芒の一氣なるが、息を以て相次ぎ、或は聚まり或は散じて頓に生と死との異觀を成す、例へば、泡沫の浪に因りて發し、氷が寒に自りて凝結すれども、散ずれば則ち元の水に復るがごとし、生死の一氣たる知るべきなり、此の說殆佛家が所謂四大（地水火風）假合死して復散すといへるの說に似たり、〔若死生爲徒云云〕若し生死を以て異となさず、更に始めを相爲すを知れば、未だ孰が死、孰れが生なるを知らず、

事はといふなり、大人は大聖人を云ふ、本に反るに難からぬは、唯大聖人のみといふなり、大人は自然無爲なるを以てなり、

生也死之徒、死也生之始、孰知其紀、人之生、氣之聚也、聚則爲生、散則爲死、若死生爲徒、吾又何患、故萬物一也、是其所美者爲神奇、其所惡者爲臭腐、臭腐、復化爲神奇、神奇復化爲臭腐、故曰通天下一氣耳、聖人故貴一、

【大意】此には老子の言を引證して人の最も分別を起し易き生と死とに就きて、生死は其の形骸の變化に止まりて、眞性は天下唯一氣なるを述べて、聖人は彼我を同じうし、生死を一にするを說く、

【通釋】老子嘗て云はく、生と死とは齊しく同類なりと云へり、凡そ人の最も分別心を起し易きは生るゝ死ぬるとの二事に勝れる者なし、然れども、死すると生るゝとの二事も亦自然に任せて造化の域に出入するものなれば、變化の道を知れる者は見て以て異しと爲さず、例へば、春の花の咲き匂へるが、時を過ぐれば散亂して地に委するとひとし、然れば生と死とは又生の始たり、例へば桃栗柿の實などの落ちたるが地の緣を得れば復新芽を萌すがごとし、然れば、生死は循環して相互に始めをなして、未だ孰れが死にして孰れが生なるを知らず、今更に其の根底を云へば、抑人の生まるゝといふは、氣の聚まりたるものなり、聚まりたるは之を生となし、散ずれば之を死となす、尙ほ云へば、生者より之を云へば、生を聚となし、死を散となす、若し夫れ死者より之を言へば、生を散となし、死を聚となす、是相互に聚散をなす者也、聚散異なりと雖ども、氣たるは則同じ、死生聚散共に同類たらば、既に其の分別なし、何ぞ患ふる所あらむや、畢竟其の患たるや分別より生ずるなり、生死既に分別なくば萬物の理當に一たるべし、故に萬物は一なりといふなり、原來物に美と惡とあるなし、然

引用して之を證す、亦以て莊子の負ふ所あるを見るべし、「老子」大道廢章に、大道廢有仁義、智惠出有大僞と見え又老子第三十八章上德不德章に、上德不德、是以有德、下德不失德、是以無德、上德無爲而無以爲、下德爲之而有以爲、上仁爲之而無以爲、上義爲之而有以爲、上禮爲之而莫之應、則攘臂而仍之、故失道而後德、失德而後仁、失仁而後義、失義而後禮、夫禮者忠信之薄、而亂之首也、前識者道之華而愚之始也、是以大丈夫、處其厚、不取其薄、居其實、不居其華、故去彼取此と見えたるは此と善く合へり、對照して發明すべし、〔故曰爲道者損〕至道を學ぶ者は、日に自から損ぜむ事を求むるは、道は見聞に在らざるを云ふなり、宣穎は日損を去華と解せり、〔損之又損之云々〕智と事跡とを去り、漸次に減じ行けば、則ち自然に循ふに至るべし、「老子」爲學日益第四十八章に爲學日益、爲道日損、損之又損以至於無爲、無爲而無不作矣、と見えたるに較べて其の趣を知るべし、宣穎は損之又損之を絕仁棄義と解せり、〔今已爲物也〕物に隨ひて營爲するを云ふ、〔欲復歸根〕道德の根本至極の地に返るを云ふ、復は其の初に復るの復と同じ、又未だ生れぬ前に反ると解せるものあり、復歸の二字宜く連讀すべし、老子に復歸於嬰兒とあり、又復歸於無極とあり復歸於樸とあり、字法皆同じ、又「老子」致虛極章に、致虛極守靜篤、萬物並作吾以觀其復、夫物芸芸、各歸其根、歸根曰靜、靜曰復命、復命曰常、知常曰明と見えたるを併せ觀るべし、郭嵩燾曰はく、人所受以生者氣也、既得之以爲生、則氣日流行大化之中、而吾塊然受其成形、無由反氣而合諸漠、道之華爲禮、與氣之流行而爲人、皆非其所固然者也、通死生爲徒、一聽其氣之聚散、而吾無與焉、則無爲矣、道至於無爲而仁義理之名、可以不立、是之謂歸根と見えたり、此の說に依るときは、今已爲物也を、今我は既に天地の氣を受けて人物と爲れる以上は、根本の虛無の至道に立ち返るも亦難きものなれば勉めざるべからずと解すべし、宣穎は之を禮散而爲器矣と云へり、此れ上に禮相僞也と云へるに更に深刻に歩を進めて現今は其の禮は已に形而下の器と爲れり、故に其の歸根は尚更に難しと解したるなり、姑く錄して參考と爲す、〔其易也其大人乎〕易は「ヤスキ」と訓ず、「ムヅカシクアラヌ」を云ふ、難の反なり、歸根復命のなし易き

浮僞を心に染めて本を忘れ、道を以て物となすが故に、至道に反るは、決して容易の業にあらず、其の容易なるは唯大聖人のみは能く其の自然に任せて分別を起さざるを以て、能く無物の初に返る事を得、大聖人は畢竟無爲なる者なればなりといふなり、

【解義】〔夫知者不言〕知者不言言者不知の二句は老子に出づ、黄帝は、遠く老子以前の人なれども莊子の文元來寓言なれば必しも時代に拘るべきにあらず、無爲謂の答へざるがごときは無爲の境に居るが爲に、殊に分別なきを以て言ふ事を知らざるなり、之を知る者は言はずと云ふなり、〔言者不知〕黄帝と知とのごとき、眞に知らざる者は、言ふ事あるは知らざればなり、之を言者不レ知と云ふなり、之を證せんが爲めに、次に老子の言を引證するなり、〔故聖人行不言之敎〕聖人は大聖人にして卽ち至道を體得して無爲の域に處る者を云ふ、不言之敎は老子第二章の言にして、其の意は聖人は爲すと言ふとに心なく、唯萬物性命の理に順ふを云ふ、「老子」の天下皆知章に、聖人處ニ無爲之事一、行ニ不言之敎一と見えたるを引證したるなり〔道不可致〕致は「成疏」に得也と見えたり、至道は言辭を以て得べからず、自然に任するに在るを云ふ、〔德不可至〕德は仁義禮のみを以て求むべきにあらぬを云ふ、猶道と同じく自然に得べきものなればとなり、〔仁可爲也〕仁は博く物を愛する事、猶道に近し、故に此は爲すとも可なりといふなり、〔義可虧也〕義は理非を裁斷して分別あるものなれば之を減じ去るべしとなり、虧は音「キ」、「カク」と訓ず、氣の蒸發して減損する義より起りて物のかけて不足に見ゆる意にいふ字なれば、損ずるの意に見るべし、「爾雅」に虧毀也と見え、「小爾雅」に損也、去也、少也など見えたり、「詩」閟宮に、不レ虧不レ崩とも見えたり、〔禮相僞也〕禮は謙退辭遜恭以て和を守るの謂にして「禮記」王制に、修ニ六禮一以節ニ民性一と見えたるなどは、其の字義皆同じからず、而して禮は往來を尙ぶより、浮華にして僞詐の起るものとす、〔失道而後德〕至道は萬物の本也、德は則ち成物の功也、而して道は體にして德は用なり、故に道は無名を尊み德は無爲を重んず、然るに世降り道衰ふれば、本を棄てゝ末を逐ひ、樸を散じて澆となす、其の結果や遂に禮を行ふに至る、其の次第を述ぶるなり、故に更に老子の言を

也、故曰、失道而後德、失德而後仁、失仁而後義、失義而後禮、禮者道之華而亂之首也、故曰、爲道者日損、損之又損之、以至於無爲、無爲而無不爲也、今已爲物也、欲復歸根、不亦難乎、其易也、其唯大人乎、

【大意】 此に黄帝が多く老子の言を引證して、其の自然に任せて分別を起さざる時は、至道に至る所以を說く、而して又、此の條に於て莊子が老子に基ける事の肯綮を知るべし、

【通釋】 黄帝更に知に對して其の至道に至る道を說きて曰はく、知る者は言はず、言ふ者は知らずと、蓋し道は言語を以て盡すべきにあらねばなり、又、聖人は不言の敎を行ふと、其の謂は、其の自然に任せたるなり、若し之を致し之に到るは皆造作に屬すればなり、是の三句此の篇全段の大綱なり、熟讀翫味すべし、所謂敎外別傳、不立文字の空門も何ぞ言說を用ゐむや、至道自然にあり、言語を以て得る事能はず、言語を以て得るは至道にあらざるなり、至德は仁義禮の迹を以て求むべからず、所謂上德不德の意なり、それ仁は博く物を愛す、然して至仁は親なし、然も今偏愛の仁を行ふも可なり、義は分別に過ぐれば虧くとも可なり、禮に至りては則ち相助けて僞をなすものなれば浮華にして德を亂り、眞實のものにあらず、是其の取るべからざる所以なり、此の故に老子も道を失ひて後德起り、德を失ひて後に仁あり、仁を失ひて後に義あり、義を失ひて後に禮あり、禮は外面の虛飾にして、眞實なし、外飾の僞りは欺詐の由りて生ずる所なれば、亂の始めとするなりと、又重ねて云はく、道を修むるには、仁義禮の華僞を減じて漸次に之を減じて以て無に至る時は寂にして動かず、其の故の吾を忘るゝ時に達す、此のごとく無爲に至れば、則ち天理の自然に循つて何物をも爲さざるなきに至る、是なさざるなきにあらず、爲すとはなしに自然に爲すの境に到達せるなり、然るに今倒置蔽豪の類は、

る能はざるなり、既にして狂屈を見るなり、狂とは狂猖の狂にして進取の義なり、屈とは進取の意ありと雖ども未だ決定せず、進まむとして次且するの義、睹は觀と同じ、秋水に出せり、狂屈の字義に就きて郭慶藩が曰はく、「釋文」引李云、狂屈佯張似人而非也、「文選」甘泉賦、梢夔魖扶、僪狂狂屈、卽僪狂也、司馬與崔作詘失之と云へり、狂は氣が強くて當り散らす者なり、「論語」に其蔽也狂、孔注に、妄觸人也と見えたり、又「林注」に、知有思惟心者也、無爲謂自然者也、狂者狂猖也、屈者掘然如槁木之枝也、此書猖狂字、便與逍遙浮遊字同、猖狂而屈然、無知之貌也と見えたり、知則ち此の狂屈に對して、前の北遊の談をなせるなり、〔唉予知之〕唉は音「アイ」、應ずるに聲にて嘆聲なり、我が邦現今の口語のエ、といふの類なり、「史記」項羽本記に亞父曰、唉、孺子不足與謀、索隱に歎恨と見えたり、不滿の意を含む嘆聲なり、狂屈が汝が問ふ意を知れりとなり〔中欲言而云々〕初め言はむとして中途に之を忘れたりとなり、狂屈は至道を見て未だ徹底せず、故に嘆聲を發せるなり、此の故に中途にて言はむとして其の言はむと欲する所を忘れたるなり、究竟は言ふべからざるなり、〔反於帝宮見黄帝而問焉〕帝宮は主宰の宮、蓋し寓言にて實は心王の居る所なり、黄帝は中央の帝王にて、智の出づる所、宮室衣裳軒冕舟車臼甲子禮樂文字等皆此の帝より始まれり、さて知は自身の本心に立反りて問へば、一の無を以て之に答へむとす、卽ち無思慮、無處服、無從道の三無に依りて始めて至道を得べしといふ、皆自然乃ち道に合ふを言ふなり、〔知問黄帝曰云々〕知は我を汝とは知りたるに無爲謂と狂屈と知らざるは四者抑ゝいづれが是なると云ふなり、〔彼無爲謂眞是也云云〕無爲謂は道の本然眞に是なり、眞とは自得して知らざるを云ふ、狂屈は之に近しとは、殆ど道に合へるを云ふ、似は「チカシ」と訓ず、「林注」に似は近也と見えたり、〔我與汝終不近也〕黄帝と知とは有心有知を以ての故に道を相去る遠しと云ふなり、忘言の地に自得するは眞に知れるものなればなり、

夫知者不言、言者不知、故聖人行不言之教、道不可致、德不可至、仁可爲也、義可虧也、禮相僞

の寓言、但し自然の意に托せる假名なり、「南華經解」に無爲謂者、道妙、本無爲無謂也、又托㆓一個人名㆒と見えたるが如し、〔予欲有問乎若〕若は汝と同じ、無爲謂を指して云ふ、是は知が無爲謂に道を問はむとするを云ふにて、假に此の賓主を設けて話を起すなり、〔何思何慮則知道〕思は工夫する事、慮は「オモヒハカル」と訓ず、思案工夫の精詳なる分別と解すべし、念慮するを云ふ、卽ち如何に工夫し如何に謀りて至道を知らむといふなり、思慮を用ゐる事見るべし、〔何處何服則安道〕處は「ヲル」の意、「說文」に處止也、從㆓夂几㆒、夂得㆓几而止也、「段注」に人遇㆓几而止、引㆓伸之㆒爲㆓凡尻処之字㆒と見え、「晉語」に蚤處㆑之と見えて、注に定也と見えたり、服は「禮記」孔子閒居君子之服㆑之也と見えて、注に猶㆑習也と見えたり、因りて修行の意と見るべし、〔何從何道則得道〕從は「シタガフ」と訓ず、其の事物に附きて行く事、違の反なり、何道とは、何物を道としてといふなり、以上三問は、知が道を問ふ假說の言なり、〔非不答不知答也〕以上知の三問に對して無爲謂の答へざるは、答ふべき者あれど、默して答へざるにあらず、既に無爲謂は徹底して答ふべきの言なきを以てなり、陸方壺曰はく、道の物たる名もなく、相もなく知る者有るなく、知らざる者なく、安んずる者あるなく、安んぜざる者あるなく、得る者あるなく、得ざる者なし、然るに、知が問ふやうは、殊に思慮等の語を添出して、所㆑謂無㆑風起㆑浪、頭上安㆑頭矣といへるがごとく、觀ずれば、知のごとく問はざるを得ざるに至るなり、〔反於白水之南〕白水は「釋文」に水名と見え、又「成疏」に白是潔素之色、南是顯明之方と見えたり、知は先に北方に遊び問ひて決するを得ざるを以て南方明白の地に反りて更に問はむとするなり、〔登狐闋之上而睹狂屈焉〕狐闋は丘の名、李注に狐闋丘名と見えたり、但し、狐は狐疑猶豫の義を寓して用ゐたるなり、闋は事の訖りて門を閉づるの義より出でて、盡くるの意なれば、空靜物なきに取れるなるべし、今知が北の玄冥晦昧の域より反りて、明白南方の地に至りしと云ふは、蓋し玄冥晦昧の至道は幽玄にして知が其の知力を以て知り得る所にあらず、白水の南は明白なれば知を以て知り得べきの地たりとす、然れども、狐闋の上に登るとは半信半疑決定し難くして未だ理を窮む

之を問へば、黄帝曰はく、別の用心も入らず、分別も要せずして始めて道は知らるゝ也、又何の修行も用ゐずして道を知りて安心するを得る也、又何物に從ひ、何の道を道と心得ずして至道は得らるゝなりと云ふに、知は重ねて然らば我と汝とは之を知れるに、彼の前の無爲謂狂屈の兩人は之を知らぬはいづれが眞に正しき道を知れるものかと問へば、黄帝は答ふるやう、彼の無爲謂は眞に正しき道を知れる者にして、狂屈は稍知れるに近き者なり、但し我と汝とは結局知れる者に近しとも云ひ難しと答へたりと也、

【解義】〔知北遊於玄水之上〕知は智と同じ、知識を云ふ、此寓言にて、假に姓名を立てゝ理を明さむとするなり、卽ち知といふ人の意に用ゐたり、以下無爲謂、狂屈も此に同じ、北とは方角の稱なれど、此には幽冥の地の義に取りて、次の玄水と同じく深遠知り難き者の喩に假れるものなり、然して玄水とは川の名と李注に見えたれど、水も亦幽昧の方とせるより、用ゐたる寓言なり、然れば、實に北方の玄水といふ川のほとりに遊べりとにはあらずと知るべし、玄は幽玄の意に取れるならむ、上は川の端を云ふ、玄水或は元水に作れる本あり、此は清朝に至り康熙帝の諱を玄瞱と云へるを避けて改めしなり、古本には皆玄に作る、〔登隱弅之丘〕登は「ノボル」と訓ず、物の上にのぼる事を云ふ、五穀を祭器の豆の上にあぐるより起れるにて降の反なり、隱弅は「インフン」と讀む、弅は坌の譌なりと云ふ、隱とは隱然の隱にして、其となくの意、坌は土の高く持ち上りたる處を云ふ、卽ち隱坌は丘といふ程にもあらず、稍、土地の持ち上りたる處の意なり、弅は、「釋文」に、李云、隱出弅起之貌と見えたり、尙ほ弅の字は、「正字通」に與坌坋通、本作弅と見え、さて坌の條に云はく、坌埃起也、又眞韻、音棼「莊子」隱坌之丘、音義曰、丘隱出坌起也、譌作弅と見えて、又、案、防與坋義別、徐曲傳「說文」第二訓合坋防爲一非、正韻入眞、引莊子弅丘入軫收坋弅闕坌、舊本弁附廾部並非と見えたり、されば、正しくは坌と書くべきなり、然して「莊子考」に隱弅、蓋謂隱然高起、亦取不可得知之義也と見えたれば、其の意義に假りて用ゐたるものなるべし、〔而適遭無爲謂焉〕適は「タマ〳〵」と訓ず、丁度其處へと云ふ意、遭は「アフ」と訓ず、時にあふに行きあふ事、無爲謂は例

則知道、何處何服則安道、何從何道則得道、三問而無爲謂不答也、非不答、不知答也、知不得問、反於白水之南、登狐闋之上、而睹狂屈焉、知以之言也、問乎狂屈、狂屈曰、唉予知之、將語若、中欲言而忘其所欲言、知不得問、反於帝宮、見黃帝而問焉、黃帝曰、無思無慮、始知道、無處無服、始安道、無從無道、始得道、知問黃帝曰、我與汝知之、彼與彼不知也、其孰是耶、黃帝曰、彼無爲謂眞是也、狂屈似之、我與汝終不近也、

【大意】　此には、知、無爲謂、狂屈三人の名を假りて道の問答を述べ、終に黃帝の説に依りて、知る者は言はず、言ふ者は知らざるの意を説く、

【通釋】　知（人名）が北の方元水の上に遊び、小高き丘に登りて、折しも無爲謂（人名）に廻り逢ひぬれば、知は無爲謂に對して曰はく、予は汝に問ひたき事こそあれ、汝は如何に心を用ゐ、如何に分別して道を知るか、或は如何に修行して道を知りて安心するか、又は如何に何物に從ひ、何の道を道と心得て眞に至道を得るかと、三遍迄問ひたれども、無爲謂は只の一言の答だにせず、是は無爲謂が意地惡く答へざるにはあらず、左樣なる人工を以て分別する境界に在らざるが爲に答ふる所以を知らざる也、知は已む事を得ず、白水の南に反り、狐闋の丘上に登りて、狂屈に會ひ、件の言を以て之に問へば、狂屈はオ、予は之を知れり、今より子に語らむとす、初は言はむと思ひしが中途にて之を忘れたれば、言ふ事能はずと云ふに、知は問ふ事を得ざるを以て、帝宮に反りて黃帝に見えて、

もなければ、存亡もなし、故に亡者も必しも亡びず、亡者も更に存するなり、存者も獨り存せずして、存者も更に亡ぶるなり、要するに道を以て觀れば存亡得喪は更に無きを云ふなり、宣穎曰く眞存者無一(道)亡也、眞亡者無一存也、存亡在我、豈以國哉、又曰く連下三轉、峭宕無比、其快又如風、散散叙十一段詰說、段段精微、段段閃爍、一再讀之、耳目思心之外、隱隱如有所遇と、

名言

人貌而天虛、緣而葆眞、淸而容物、

目擊而道存矣、亦不可以容聲矣、

夫哀莫哀於心死、而人死亦次之、

有待也而死、有待也而生、吾一受其成形而不化、以待盡、

彼已盡矣、而女求之、以爲有、是求馬於唐肆也、

雖忘乎故吾、吾有不忘者存、

草食之獸、不疾易藪、水生之蟲、不疾易水、

棄隸者若棄泥塗、知身貴於隸也、貴在於我而、不失於變、

水之於汋也、無爲而才自然矣、至人之於德也、不修而物不能離焉、

至人者上闚青天、下潛黃泉、揮斥八極、神氣不變、

古之眞人、智者不得說、美人不得濫、盜人不得刧、

知北遊第二十二

此の篇は、知が北の方玄水の上に遊び、無爲謂に遭ひて、道を問ひ、更に南に反り、狂屈に問ふの寓言に起りて、至道の極致は遂に無に歸するを論じて、光耀が無有に問ふに極まり、其の下に古人を引きて無に歸するの證を爲せり、而して其の文章一の無の字を拈出して縱橫曲盡思議すべからざるものあり、陸方壺云へらく、讀南華者、知北遊最爲肯綮、從此悟入、則大乘法藏、皆可迎刃而解矣と、

知北遊於玄水之上、登隱弅之丘、而適遭無爲謂焉、知謂無爲謂曰、予欲有問乎若、何思何慮

天地」介は礙なり、既は盡なり、夫れ眞人は火に入るも熱せず、水に入るも濡はず、大山を經るも精神障礙なく、卑賤に屈死するも其の道虧けず、德は天地に合うて損せずとなり、〔既以與人云云〕以は已と同じ、既已は重語なり、言ふこゝろは我より人に與ふれば益〻減滅すべき筈なるに反りて愈〻充滿して大に有るを謂ふ、陸樹芝曰く不悅生惡死則不生不死、不生不死則神配天地、無往不可、隨處充滿、若造化生育萬物而不少減、豈非既以與人已愈有哉と、

楚王與凡君坐、少焉楚王左右曰凡亡者三、凡君曰、凡之亡也、不足以喪吾存、夫凡之亡、不足以喪吾存、則楚之存、不足以存存、由是觀之、則凡未始亡、而楚未始存也、

【大意】此段は存亡は我に係らざるなり、然れば我れの存亡も亦國に係らざるを言ふなり、卽ち上文の貴在我而不失於變の句に根ざし來りて、眞人の德を論じ人君に託して言ふ、又田子方全文の結穴の處は、夫子と老子との二段にあり、道の要を詮闡して已に遺蘊なし、

【通釋】楚王が凡國の君と共に坐す、楚王の左右の臣凡國が亡ぶと曰ふこと三、〔三とは少頃の間に三度亡びんと言ひたるなり〕、凡君の曰ふには凡の亡ぶるは吾が身に存する大道を亡すに足らず、楚の存するも亦如此、既に亡を以て亡とせざれば存も亦以て存とするに足らざるなり、されば凡國は未だ始めからして亡びずして楚國も未だ始めからして存せず、畢竟物の去來は定在すること無ければ世の存亡興廢禍福得失皆一時の幻影にして實在あらざるなりと、

【解義】〔楚王與凡君坐〕凡は國の名にて、周公の後にて、其の國は汲郡の界に在りて、今の凡城是なりと「成疏」に見えたり、〔曰凡亡者三〕楚は大國にて凡は小國なり、楚呑平の意あり、故に從者をして感を言はしむるなり、〔由是觀之—楚未始存也〕存亡は更に心中の惜む所より生ずるのみ、天下固より存亡なきなり、夫れ存亡は心の得喪より來るなり、既に得喪

な、我が爲す所に非ずして、唯〻天あるのみ、是の故に我に憂ふる顏色なきのみ、我れ何んぞ人に過ぎ越ゆることあらんや、我れ令尹となれば、人令尹たるを得ず、人令尹たれば我令尹たる能はず、且天地の間に高く視、遠く想うて人間の所謂る貴者賤者と云ふことを知るの暇はなしと、仲尼之を聞きて曰く、古の眞人とて大聖人は言辯智術を以て言ひ込めることは得べきのことに非ざるなり、又美形を以て淫しみだすこと能はず、暴威を以て屈することも出來ず、伏戲黄帝の世をも避け、天下を輕んじ、死生も意とせず、況んや人爵を貴ぶものに非らず、貧賤の地に居るも病となさざるなり、道我が身にありて天地に充塞し、人を化し、之を用ひて盡くることなきなり、

【解義】〔肩吾〕隱者の名、既に逍遥遊篇に見ゆ、〔孫叔敖〕楚國の賢人なり、〔栩栩然〕歡暢の貌なり夫れ達者は毀譽の爲めに動かず、寵辱の爲めにも驚かず、故に孫叔敖三仕へて榮とせず、三黜けられても憂ふる色なし、肩吾始めは其の言を聞くも猶ほ疑惑を懷きしも、其の貌を察すれば自然懽樂の情あり、故に子の心を用ふる奈何と問ふなり、〔且不知其在彼―亡乎彼〕亡は失なり、且つ知らず、榮華は定めて彼の人にあるか、定めて我れにあるかを、萬一にも彼人にあれば我れに失たり、若しも我れにあれば彼人において失となり、然れば彼我既に得喪何れにあるか、〔方將躊躇方將四顧〕躊躇は逸豫自得の貌なり、四顧は八方を高視するなり、本書の養生主篇にも爲之四顧爲之躊躇滿志の語あり、何の暇か人世に心を貴賤の關に留むるにあらんや、故に之を去りて憂ふるの色なきなり、〔人貴人賤〕貴人賤人の倒語、「覆蒙」に曰く遐想于天地之間、誰貴誰不貴者、則在我在彼皆忘之矣、所以憂喜不入也と、〔知者不得說云々〕「覆蒙」に曰く貧賤不能移、即知者不得說也、富貴不能威、是美人不能濫也、威武不能屈、盜人不能刧也と、乃ち縱ひ智言の人あるも之に向うて辯說するを得ざるなり、美色の姿も之に向うて淫濫するを得ざるなり、盜賊の徒も之に向うて何ぞ刧剝せんとなり、〔伏戲黄帝不得友〕伏戲黄帝共に上古の聖王なれども、廣成子に向うては道を問ひ、敎を受くる者にして之と對等の友たるを得ずとなり、王公不能友之、是伏戲黄帝不得友也、〔經乎大山而無介充滿―

肩吾問於孫叔敖曰、子三爲令尹而不榮華、三去之而無憂色、吾始也疑子、今視子之鼻間栩栩然、子之用心獨奈何、孫叔敖曰、吾何以過人哉、吾以其來不可却也、其去不可止也、吾以爲得失之非我也、而無憂色而已矣、我何以過人哉、且不知其在彼乎、其在我乎、其在彼邪、亡乎我、在我邪、亡乎彼、方將躊躇、方將四顧、何暇知乎人貴人賤哉、仲尼聞之曰、古之眞人、知者不得説、美人不得濫、盗人不得刧、伏戲黃帝不得友、死生亦大矣、而無變乎己、況爵祿乎、若然者、其神經乎大山而無介、入乎淵泉而不濡、處卑細而不憊、充滿天地、既以與人、己愈有、

【大意】此の段は身外の物は、眞の我れに於ては、本より加損することなし、要するに上文の貴在于我而不失於變の意より根ざし來るなり、

【通釋】肩吾と云ふ人が孫叔敖と云ふ人に問ふには足下は三度楚の國の令尹とて大官に上れども毫も之を榮華とせず、又三度罷められて官を去れども毫も憂ふる顏色なし、因りて吾れは始めは足下を疑へり、今足下の鼻間を視るに栩々然として心平にして氣靜かなる相あらはれたるなりと、孫叔敖が曰ふには、吾れ何んぞ人に過ぎ越えたる處あらんや、考ふるに富貴利達の來るや、之を退くること能はざるなり、又其の去るや之を引き止むること能はざるなり、一得一失み

方りて列禦寇の形は、丁度人形の如くにして毫も動かざるなり、伯昏無人が曰ふには、汝は巧みなれども是れ有心の射にして射ることを忘れ、無心にして射るの射術に非らざるなりと、是に於て高山に登り危石を躡み、百仭の淵に臨み、卽ち高山に面し深淵を背にしながら猶も後の方へすさりて止まず、足の一分は岸上に在れども、他の二分は淵の方に垂るゝなり、〔是れは極めに危險なる樣を形容するなり〕伯昏無人曰く、夫れ至人は大空と量を同うす、故に能く上は青天を闚ひ下は黃泉を潜くり、八方に氣を自由自在にするなり、然るに今汝は眼は眩みて懼るゝこと此の如くにして、弓を射あてんとするも難いかなと云ふなり、

【解義】〔措杯水其肘上〕措は置なり、禦寇は射を善くする人にて、右の手にて弦を引けば、其の樣子は附枝の如く動かざるなり、左の手は石の如く杯水を肘の上に置くも覆へらざるなり、共に其の停審敏捷の至極至妙なるを云ふなり、〔適矢復沓復寓〕適とは往なり、沓は重るなり、寓は寄るなり、發したる矢が往復重沓して其の妙を極るを云ふなり、〔當是時猶象人也〕不動の至を云ふなり、象人とは木偶土梗人とて木人形土人形の如く、禦寇射るの時に至りては、不動なること土人形の如くなるを云ふなり、〔是射之射非不射之射也〕汝は巧なりと雖どもまだ有心の射にて、無念無心の射に非らずとの意なり、〔臨百仭之淵若能射乎〕七尺を仭と云ふ、然れば七百尺の高山なり、此は是れ不射の射にて虛心無念の意を云ふなり、〔禦寇伏地汗流至踵〕怖れ懼れて頭を擧ること難くして地に伏して汗が流れて脚に至るなり、〔上闚青天―神氣不變〕揮斥とは縱放にて自在の意なり、夫れ德が內に充つれば神が外に滿ちて、遠近幽深なく所在皆明了なり、故に安危の機を審にして泊然として自得するなり、〔怵然有恂目之志〕怵然は驚懼の貌、恂は懼るなり、夫れ至德の人は大空と齊しく大量ありて、能く上は青天の高きを闚ひ測り、下は黃泉の底を潜くり、譬へば神龍の如く升りたり、沈みたり定りなく、八方を縱放し精神改らず、萬仭の深き淵に臨むも何とて懷に介するに足らん、今我れ汝を觀るに怵惕の心ありて目眩惑せり、汝の射術は未だ至らざるなりと、

に事かへ、弟子の師に事ふる皆北面して立つを以て禮と爲す、此にては弟子の禮を執るを謂ふ、〔朝令而夜遁〕遁るの速かなるを謂ふ、政可以及天下の問を聽き、其の天下に心ありて自然に任かすものに非るを知る故に、朝に文王が及天下の言を聞きて、即夜丈人は遁れたるなり、〔又何以夢爲乎〕「成疏」疑於顏子文王未極至人之德、眞人不夢何以夢乎と云へり陸樹芝曰く、必託諸夢以信諸大夫、似猶用術、疑未爲天下至德也と、〔彼直以循斯須〕斯須は須臾なり、循は順なり、時措之宜彼一託於夢、而大臣父兄以安其爲曲循者幾何、特斯須間耳と陸樹芝は云へり、

列禦寇爲伯昏無人射、引之盈貫、措杯水其肘上、發之、適矢復沓、方矢復寓、當是時、猶象人也、伯昏無人曰、是射之射、非不射之射也、嘗與汝登高山、履危石、臨百仭之淵、若能射乎、於是遂登高山、履危石、臨百仭之淵、背逡巡、足二分垂在外、揖禦寇而進之、禦寇伏地、汗流至踵、伯昏無人曰、夫至人者、上闚青天、下潛黃泉、揮斥八極、神氣不變、今汝怵然有恂目之志、爾於中也、殆矣夫、

【大意】此段は射に心ありて不射の射に非ざるを論ずるは、聖人に非ざるなりとの意にて、上段の其無釣の反論なり、

【通釋】列禦寇が伯昏無人のために弓をいりしに、左手が眞直ぐにして、肘平らなるが故に、その肘の上に一杯の水をのせおくことが出來きて、矢を射て今矢が向ふへ去りたかと思ふと、早や他の矢が又弦上に重さなりて在り、弦に在る矢が今去りたかと思ふと、復た他の矢が弦上に寓し在ることなり、〔凡て矢をつがへるの極めて神速なるを云ふなり〕是の時に

文王は一時の計略を用ひ、衆人の從ひ易きを欲して夢に託して云ふなり、

【解義】「觀於臧」臧は渭水に近き地名なり、「見一丈夫」此の丈夫は釣したる事に寄托して云へるなり作者の寓言なり、「恐大臣父兄」百姓之無天也」父兄は同姓親族の年長者を謂ふ、無天とは天は萬物の賴りて生ずる者なるを以て、百姓の倚賴する人に喩ふるなり、文王は既に賢人を見て之に國政を委任せんと欲すれども、又皇族宰輔の臣等猜疑して之を忌むを恐れ、捨て去らんと思へども、蒼生の倚賴すべき人物無くして國の亂れ荒むを見るに忍びずとなり、「屬諸夫夫」屬は告なり夫夫は大夫なり、一本に大夫に作る、管見に上夫字讀同大始皇刻石泰山、文曰御史夫夫、蓋篆文夫夫與大相似耳、「昔者寡人」郭慶藩曰く昔夕古通、昔者卽夕者也、或竟作夕者と、尙其の說集釋に詳かなり、「黑色而頿」頿は髯と同じ、「乘駁馬而偏朱蹄」駁は雜駁なり、偏朱蹄は蹄の片足赤色なるなり、「號曰寓而政」號は命令すること、而は汝なり、「諸大夫蹵然曰先君王也」文王の父は季歷なり、生存の日黑色にして髯多く好んで駁馬に乘る、故に文王の夢みる所、卽ち是れ先君の文王に敎令するなりと、是れを以て、蹵然として驚き懼るゝなり、或曰く先君の下に命の字を脫すと、此れ元と先君命王に作るなり、故に下文曰く先君命王其無他と、以て一證とすべし、「又何卜焉」此は是れ先君の命令たる決定疑ひなし、夫れ卜は以て疑を決す、疑はず何の卜することあらん、「遂迎臧丈人而授之政」君臣協議して丈人を迎へ拜して卿輔となし其の國政を授く、是に於て典章憲法一施改革なく命令復た出て行ふことゝなし、「列士壞植」列士は諸士なり、植は行列なり、散群は黨を散し養はざるなり、范無隱は曰く邊疆植木、以爲界、如楡關柳塞之類、壞植散羣、則散戍罷兵、隣封混一、此尙同也と此の說に依れば列士は宜く列土に作るべし、兪樾は植將主也、列士必有將主而後有徒衆、故欲散其羣、必先壞其植也と「長官不成德」衆と共に同く善を爲して己獨りにて其の德を成さざるなり、「斔斛不敢入於四境」斔は庾と同じ六斗四升を庾と曰ふ、鄰國の民共に其の仁政を仰ぎ、其の國家を信用して、詐欺を虞からざるを以て、其の國に來るに庾斛を携へざるなり、「北面而問」臣の君

須也、

【大意】此段は至人の句を承けて至人を擧げて夢に託して斯須の權を用ふるを論ずるなり、

【通釋】周の文王が渭水に近き臧と云ふ所に遊覽したる時に、一丈夫の釣を垂れてをるを見たるが、其の丈人の釣する樣は其の釣り眞に釣りをするに非らずして、他人の如く其の釣竿を持して魚を釣るを事とするものとは異なりて、唯、常に竿を持して自から適するのみ、そこで文王が彼の一丈夫を擧げて之に國政を授けんと欲したるが、大臣や父兄等が穩當ならざるを恐れて、遂に之をすて置かんと思ひしなり、然れども人民の覆蔭なきを見るに忍びず、是に於て文王は翌朝多くの大夫に告げて曰ふには、昨夜寡人は夢に賢良なる人が黑色にして髯ありて駁色にて一方の蹄は赤色なる馬に乘れるを見たり、其の人我に命じ曰く、汝ちの國政を臧の丈人に委任せば、人民の荒れ亂れたる病ひは必ず瘳えんとの夢の告ありと云ふ、是に於て多くの大夫は驚き懼れて曰く、君の夢に見給ひし所の人は亡き御父君の季歷ならんと、文王曰く然れば其の吉凶をトせんと、衆多の役人は曰く、

先君の我が王に命じ給ひし所なれば疑ふべきなし、何ぞトするに及ばんと、遂に臧の丈人を迎へて之に國政を授けたるに、法度も變更なく一事も肯て號令を出せしことなきなり、此の如きこと三年に及んで文王が國の政治を視察すれば、列士は從來の如く朋黨を立てず、長官たるものは其の成功を己れに歸せずして互に相ひ讓り合ひ、升目度量も正しく遠近の人皆な軌を同じうして、四境の諸侯敢て度量を其の境内に入れ收めず、列士の朋黨を立てざるは尙同とて大同するなり、長官の功を讓り合ふことは同務とて協心するなり、是に於て文王大人を以て大師と仰ぎ、北面とて弟子の位に就きて敬意を表して之に問うて曰く、善政は天下に及ぶべきかと、丈人は昧然と聞かざるが如く、何の返辭も爲さず、泛然と不確實なる挨拶を爲し、朝に命令を爲しながら早や夜分に遁れ隱れ其れ限り終身聞ゆることなかりき、之を顏淵が孔子に問うて曰く、文王は未だ德の至らざるか何の故に夢に託して丈人を用ふるやと、孔子曰く多言する勿れ、文王は諸大夫に任し、自ら任ぜず、之を盡すのみ、又何ぞ彼是と、非難することを得ん、彼の

〔解衣般礴臝〕 般礴とは箕踞のことなり、即ち兩足を投げ出すなり、臝は裸と同じく、赤身を露すなり、

文王觀於臧、見一丈夫釣、而其釣莫釣、非持其釣有釣者也、常釣也、文王欲擧而授之政、而恐大臣父兄之弗安也、欲終而釋之、而不忍百姓之無天也、於是旦而屬之大夫曰、昔日寡人夢、見良人黑色而頓、乘駁馬而偏朱蹄、號曰、寓而政於臧丈人、庶幾乎民有瘳乎、諸丈夫蹵然曰、先君王也、文王曰、然則卜之、諸大夫曰、先君之命、王其無它、又何卜焉、遂迎臧丈人而授之政、

典法無更、偏令無出、三年文王觀於國、則列士壞植散群、長官者不成德、斔斛不敢入於四境、列士壞植散群、則尙同也、長官者不成德、則同務也、斔斛不敢入於四境、則諸侯無二心也、文王於是焉以爲太師、北面而問曰、政可以及天下乎、臧丈人昧然而不應、泛然而辭、朝令而夜遁、終身無聞、顏淵問於仲尼曰、文王其猶未邪、又何以夢爲乎、仲尼曰、默、汝無言、夫文王盡之也、而又何論刺焉、彼直以循斯

に安んじ富貴利達を忘れたり、故に爵位俸祿は一切心中になし、後ち穆公其の賢を知り、委するに國事を以てし、毫も猜疑せず、故に其の牛に飯するの賤しきを忘れはてたりと云ふなり、〔有虞氏死生云々〕有虞は舜なり、後母の難に遭ひ、數ば躓頓を被むりても死生を以て心に關せず、子たるの道を盡し至孝四方に聞こえ、天地鬼神をも感動せり、是に於て堯帝妻はすに二女を以てし、任すに萬乘の尊きを以す、故に人を動かすに足ると云ふなり、

宋元君將畫圖、衆史皆至、受揖而立、舐筆和墨、在外者半、有一史後至者、儃儃然不趨、受揖不立、因之舍、公使人視之、則解衣般礴臝、君曰、可矣、是眞畫者也、

【大意】　此の節は眞の儒者を相するには外容の飾りを以てすべからざるを論ずるものなり、「發蒙」に曰く至道只是一味、眞無修飾、無作爲、任眞、率意而已、無別有也と、

【通釋】　宋の元君が將さに畫をかゝんとしたるに、多くの畫工は皆至り聚りて一禮して立ちて、筆をなめ墨をすり畫を競ふもの多く、外に在るも過半なりき、此の時に於て、一畫工の後れ馳せに至るものあり寬閒自得として如何にも舒遲たる樣子あり、其の時に衆多の畫工と一禮したれども、其の場に竝び立たずして直ちに走りて其舍に入るなり、元君怪んで人をして之を視察せしめしに、衣を解き兩足を投げ出して裸體となりて毫も憚る色もなし、元君の曰く可なり是れ眞の畫工なりと、

【解義】　〔宋元君〕宋國の君たり、元は其の諡なり、〔受揖而立〕　命を受け揖して立つなり、國中の山川を畫かんとする、此の時に畫師竝び至り、君侯の命令を受け拜禮して立つを謂ふ、〔舐筆和墨〕朱を調へ墨をすり爭うて功能を競ふ、〔在外者半〕其の拜禮を受けずして戸外に在りて、趍競するもの甚だ多くあるを謂ふなり、〔儃儃然不趨〕儃は音「タン」、儃儃は寬閒の貌、内既に自得たり故に外矜持せず、徐行して趨らず命を受くるも衆畫工の如くに立たざるなり

千轉萬變して窮りなかりしと云ふ、莊周乃ち曰く果して然り、魯國の廣きも眞の儒者は、唯に彼れ一人なるのみ何ぞ儒者多しと云はんやと、

【解義】〔莊子見魯哀公〕莊子は魏の惠王齊の威王と同時にして、哀公後百二十年に在り、是れ固より寓言のみ、比喩のみ、〔擧魯國而儒服〕夫れ服は以て德を象どるなり、哀公庸暗其の理を知らず、直に衣冠に由りて誤りて多儒と思ふなり、〔儒者冠圜冠―事至而斷〕圜は圓なり、緩は五色の條繩にて、玉玦を穿て以て佩を飾るなり、玦は決なり、緩は本と綬の字に作るもあり、支那の古說は夫れ天は圓く地は方なりとなせり、君子の服は以て德に象るが故に戴くに圓冠を以てして天に象るものは、日月星の三象の吉凶を知るを表はし、方履を履くは以て地に法るなり、此れは九州の水陸を知るを表するなり、緩を曳き玦を佩ぶるは事至りて決斷を表するなり、〔君子有其道〕君子の上に然の字を加へて看るべし、道を懷ふ人は必ずしも服を爲らず、服を爲るもの必しも道を懷かざるなり、如此きもの古今往々あり、是故に莊子寓言辯說するなり、

百里奚、爵祿不入於心、故飯牛而牛肥、使秦穆公忘其賤、與之政也、有虞氏、死生不入於心、故足以動人、

【大意】此の段は上文の喜怒哀樂の其の胸次に入らざるの意を證するものなり、

【通釋】百里奚と云ふ人は、爵位と俸祿の尊きをも決して其心に入りしことなし、それ故に牛を畜ふよと、遂に秦の穆公をして百里奚が身分の賤きをも忘れて、之に國政を任するに至らしめたり、有虞氏は大舜のことにて、父の瞽瞍は頑に、母は繼母にて嚚しくして常に舜を殺さんとしたれども、舜は死生を以て心に留めざりしなり、故に人をして感動せしめ得たるなりとぞ、

【解義】〔百里奚爵祿云云〕百里奚は姓は孟字は百里と云ひ秦の賢人なり、本と虞の國の人にて虞は秦の爲に亡ぼされしより、遂に秦國に入れり、初は用ひられず、貧賤にて牛を飼養し、生活をなして、所謂貧

道者、未必爲其服也、爲其服者、未必知其道也、公固以爲不然、何不號於中國曰無此道而爲此服者其罪死、於是哀公號之五日、而魯國無敢儒服者、獨有一丈夫、儒服而立乎公門、公卽召而問以國事、千轉萬變而不窮、莊子曰、以魯國而儒者一人耳、可謂多乎、

【大意】莊子は每に孔子の學を老子に問ふを假りて以て世に謂はゆる聖知は至道の盡るに非らざるを明すなり、其の實は孔子を尊ぶの至なり、此段は特に其の然るを見るべきなり、宣穎の說に依れば、莊子は哀公と時を同うせず、然るを相見ると云ふ妙想寓意なり一部の莊子大半皆此の類なり、本文の中に獨り一丈夫あるの文字は蓋し眞儒なり、其の人は誰ぞや、我か孔夫子に非ずや、此れを眼目となす、

【通釋】莊子が魯の哀公に見えたるに、哀公曰く、魯には儒者多くして先生の道を學ぶものなしと、莊子曰く、魯國には儒者少數なる筈なりと、哀公曰く、我が魯國には全國を擧ぞりて悉く儒者の服を着用せしに何故に少なしといふや、莊子曰く莊周之を聞くに儒者の圓形なる冠を被むるは、天の時を知るの表章なり、角形の履を履けるは地の形を知れるの表章なり、緩やかにして玦とて決の義に取りたる玉を佩用するは、事至りて決斷するの義に取れるなり、然れども君子にして其の道を有し懷くものは、必ずしも之を表すの服を作らず、又儒服を着るものは必しも道を知るとは限らざるなり、君もし不審と思ひ給ふならば、宜しく國中に布告して、此の道を知らざるに儒服を着くるものは、死罪に當てんと仰せあるべしと、是に於て哀公は此の事を布告すること五日にして、魯國中に敢て儒服するもの無きに至れり、然るに唯獨りの一丈夫の儒服して哀公の門に立つものあり哀公直に召し入れて國事を問はれしに、其の說く所

し、決して滑亂せず、況んや得喪禍福生涯の事をや、愈〻以て懷に介するに足らざるなり、〔而莫之能滑〕滑は亂なり、〔棄隷者〕隷は隷僕なり、〔不失於變〕變は前の小變を指す、小變の爲めに我の貴を失はざるを謂ふ、〔夫孰足以患心〕既貴在于我而不失于小變所以此心無患也と、〔已爲道者解乎此〕夫れ世物遷り流れて未た嘗て極りあらざるなり、然して變に隨つて化に任じて誰れか復た心を累さん、唯だまさに道を修むるの達人は正に能く此を解するなり、〔德配天地孰能脫焉〕配は合なり、脫とは免なり、老子の德は天地に配すれば天は言はず、而も自ら高く、地は長せず而かも自から厚し、是れ天地は自然にして老子も自然なるべきに、今乃ち盛かんに至言を談じて以て心術を修む、然れば古の君子誰れか能く言說を遺れて修爲を免るものならん、〔夫水之於汋也云云〕汋は汲み取るなり、水の淸澄として湛へるは其の性自然なり、人之を汲み取り、利潤をなすも自然なり、王先謙は說文に井有水一無水謂之濁汋とあるを引きて汋を水の自〻涌出するものと爲して曰く無所作爲其才之自然也と、才は働きを謂ふ、〔不修而物不能離焉〕人の高德智識ある、其の義も亦水の如く自ら修を言はずして物自然に從ひ來りて離れず、澤は群品に被むり、其の澤を知らざるなり、天は高く地は厚く日月照明する如く、何ぞ修爲せん自然なるのみ、〔其猶醯雞與〕醯雞は甕中の蠛蠓なり、司馬云醯雞は酒上を飛ぶ蚋なり、醋甕の中の蚋は物に觸るゝ毎に甕頭を蓋ふ、故に天地陰陽の二儀を見ざるなり、恰も孔子が聖迹に遭うて蔽覆せられて、事の理を見ざるに喩ふるなり、〔吾覆也〕「覆蒙」に曰く被仁義聖知蓋覆此心、空過一生と、〔天地之大全〕即ち上文にある萬物之所一を指して云ふ、

莊子見魯哀公、哀公曰、魯多儒士、少爲先生方者、莊子曰、魯少儒、哀公曰、擧魯國而儒服、何謂少乎、莊子曰、周聞之、儒者、冠圜冠者知天時、履方履者知地形、緩佩玦者事至而斷、君子有其

なり、其の法方の知るべきなきが爲なり、口辯論すること難きに非ざるなり、其の法方の辯論すべきなきが爲なり、强ひて之を辯ずれば其の體に乖くなり、又之を知れば其の眞を喪ふを恐るゝなり、〔嘗爲汝議乎其將〕嘗は試なり、將とは殆及の辭にて近似と云ふが如し、言ふこゝろは夫れ至理の元妙は意と言との能く詳にすべきにあらざるなり、試みに汝の爲めに陰陽の將を論ぜん、然れども是れ必ずしも眞ならざるなりと、〔至陰肅々至陽赫々肅々出乎天赫々發乎地〕肅々は陰氣にて寒なり、赫々は陽氣にて熱なり、卽ち陰中の陽にて、又陽中の陰、其の交も泰なるを謂ふなり、〔兩者交通—莫見其形〕陽氣は下降し、陰氣は上昇して、此の二氣交も通じて天地和合を爲すなり、此の和合の氣に因りて萬物發生して、四時の炎凉の順序ありて庶物主宰し各自變化すと雖ども、其の綱紀の形を見ることなし、紀とは主宰の謂にて造化のことなり、〔消息滿虛—日有所爲〕消息は陰陽の消息なり、夏は滿ち冬は虛、夜は晦らく、晝は明にて、日は遷り月は徙りて新々住まらず、故に有所爲と謂ふなり、〔終始相反—其所窮〕死生終始反覆往來して既に端緒なし誰れか其の極りを知らん故に至人は其の變に任かするなり、〔遊於至樂謂之至人〕既に無美の美を得て心を無樂の樂に遊ばすもの至極の人と謂ふべし、〔草食之獸—不失其大常也〕大常とは自然の眞なり、疾とは患なり、易は移るなり、夫れ草を食ふの獸類は藪澤を易へ移るを患へず、水中に生ずる蟲は池沼を改易するを患へざるなり、何となれば草あり、水あれば、獸蟲の眞たる大常を失はず、故に東に移り、西に轉ずるは小變のみ、亦人の大道の中に處して、變に隨ひ化に任せて未だ始より我れあらず、此れ大常生死の變を失はず、蓋し亦小變なりとの喩なり、〔喜怒哀樂不入於胸次〕喜怒哀樂は死生に較ぶれば小變なり、次は中なり不入於胸中とは心に感動せざるなり、喜は順なり、怒は逆なり、生を樂み、死を哀しむは人の生涯の事なり、然れども死生己れに變ずるなく、喜怒豈に懷中に入らん、〔夫天下也者萬物之所一也〕萬物は天下を以て所一と爲すを謂ふ成玄英曰く夫れ天地の萬物は其の體二ならず、故に斯の趣に達するものは萬物を混同し、物我皆空し、百體は塵垢の如く、死生は虛幻の如く、終始は晝夜に均

運轉し、又孰か能く之を終始して、之か宗主たるを得んや、孔子曰くさて是に遊ぶを請ひ問ふと、老子曰く夫れ是を得るは至美至樂なり、至美を得て至樂に遊ぶ、之れを至人と云ふなり、孔子曰く此に遊ぶの法を問ふと、老子曰く藪に異艸なく澤に異水なく、地は少しく變ずと雖ども、其の太常の極まりは自から在るが故に、獸蟲も其の居處を易ふることを惡まざるなり、人も境遇の小變ありと雖も、既に其の太常を失はざる以上は喜怒哀樂の事豈に其の胸中に入らんや、夫れ天下と申す者は萬物萬化の一に歸する所にして萬物の生は皆天の下にあり、故に必ず天の爲す所に任かせざるべからず、如何で自ら異にするを得ん、死生すら且つ其の心を滑亂すること能はず、況んや得喪禍福をや、貴き道我に備はり、外物の變我が至美至樂を失はざるなり、夫れ天地の間變化相依り、萬古此の如く、何ぞ盡くるの時あらん、得失禍福自然に非ざるはなし、故に吾が心の患となすに足らざるなり、孔子曰く夫子の德は天地と同じきに、猶は至言を假りて以て心を修む、古來の君子誰れも如此き語を爲すこと能はずと歎息するなり、老子曰然らず江河の水之れを酌めども竭きざるは、其の本質無爲にして自然なるを以てなり、至人の德は自然に本づき假修をなさずとも、外物離るゝこと能はざるなり、是に於て孔子出ゝ顏回に告げて曰く、丘の道に對するや、其れ猶ほ醯鷄の如きかと、醯鷄とは醋甕の中に生ずる蠛蠓と云ふ蟲なり、今老子に會うて其の道を聞きて、醋甕の蓋を開くが如く吾れの迷夢も醒めて、天地の大自然の道を悟り得るなりと、

【解義】〔孔子便而待之〕便は便坐なり、既に新に髮を洗うて之を曝して乾かして、神を凝らし慹然不動の貌にて枯れ木の如く、故に人に非らざるに似たり、故に孔子之を見て敢て往きて觸れずして折を見て之を待つなり、〔眩與其信然與〕眩は眼の眩燿すること其信然與とは先生は形と智を忘れ萬物を棄て獨化するかと、〔吾遊心於物之初〕初は本なり、夫れ道通じて萬物を生ず、故に道と名づく、萬物の初なり、心を物の爲めに遊ばすとは神を凝し、精を自然に任すなり、故に形槁木の如く心死灰の如き所以なり、〔曰心困焉而不能知口辟焉而不能言〕辟は口開いて合はざるなり、夫れ聖人の心知ること能はざるに非ざる

天地、而猶假至言以修心、古之君子孰能脫焉、老聃曰、不然、夫水之於汋也、無爲而才自然矣、至人之於德也、不修而物不能離焉、若天之自高、地之自厚、日月之自明、夫何修焉、孔子出以告顏回曰、丘之於道也、其猶醯鷄與、微夫子之發吾覆也、吾不知天地之大全也、

【大意】此段は心を不死に存せんと欲せば、必ず先づ心を未生に遊ずるを論ずるなり、

【通釋】孔子が老子に見えたるに、老子は新に髮を洗うて方さに髮を乾わかして居て、慹然として動かず、人に非ずして形は枯れ木の如きなり、此の時に孔子は折を見合はせて待つこと少時にして老子に見えて曰く、丘や目視ること明かならず、老子の人に非らざるに似たるを見るなり、向きに先生の形體は兀々然として獨立する如きなりと、老子曰く吾れは心を萬物の無きの初に遊ばすと、孔子曰如何なる理由ぞや、老子曰く一言には心困んで知ること難く、又口を開くも言說すること難く、故に其の理を明にし難きなり、由りて其の深妙なるは言ひ難きも其の近似なるものを擧げて論せん、夫れ至陰は肅々と嚴冷にして至陽は赫々と光明なるものなり、肅々は天より出て赫々は地より出發し、卽ち陽の中に陰あり、陰の中に陽あり、此の兩者交も通じ、中和を致し成して萬物を生ず（易の水火坎離の既濟の理にて、陰陽交も和して萬物自然に生ずるなり）然る後ち萬物を支配して、主宰するものあるに似たれども、其の形を見ること能はざるなり、消息盈虛は四時の氣にして、一晦一明は晝夜にして、日日に此の如くにして、天地自然の造化は功は成れども、孰れも得て名づくべきなし、死は未往に歸し、生は無物に萠さし、終始同じからずと雖ども、其の端を尋ね究むるべからず、さて此の如く神妙不測なるに非れば、孰か能く之を紀綱し、之を

似遺物離人而立於獨也、老聃曰、吾遊於物之初、孔子曰、何謂邪、曰、心困焉、而不能知、口辟焉而不能言、嘗爲女議乎其將、至陰肅肅、至陽赫赫、肅肅出乎天、赫赫發乎地、兩者交通成和、而物生焉、或爲之紀而莫見其形、消息滿虛、一晦一明、日改月化、日有所爲、而莫見其功、生有所乎萠、死有所乎歸、始終相反乎無端而莫知乎其所窮、非是也、且孰爲之宗、孔子曰、請問遊是、老聃曰、夫得是至美至樂也、得至美而遊乎至樂謂之至人、孔子曰、願聞其方、曰、草食之獸、不疾易藪、水生之蟲、不疾易淵、行小變而不失其大常也、喜怒哀樂、不入於胸次、夫天下也者萬物之所一也、得其所一而同焉、則四支百體將爲塵垢、而生死終始、將爲晝夜、而莫之能滑、而況得喪禍福之所介乎、棄隷者、若棄泥塗、知身貴於隷也、貴在於我而不失於變、且萬化而未始有極也、夫孰足以患心、已爲道者解乎此、孔子曰、夫子德配

〔薰然其成形〕 薰然は自動の貌なり、「覆蒙」に薰蒸也とあり、〔知命不能規乎其前〕 知命は命を知る、聖智の人を謂ふ、規は豫規なり、〔丘以是日徂〕徂とは往なり、時の變に從ひて行き、預め作さず、日日に新なりて化と倶に往くなり、 〔交一臂而失之〕 交一臂とは臂と臂と互に相交ふることにて、極めて親近するを謂ふ、陸樹芝曰く、言我本非絕塵而奔而汝特未達乎一間猶人交臂同行而忽然相察と、「方注」は吾終身以此身示汝今以爲不可及是猶不曾兩臂相交只交得一臂而相失豈可不哀哉と此れ交一臂を纔に片臂を交ふる許の短時間と解したるなり、「宣注」も乃轉盼已非故吾と云へり、 〔女殆著乎吾所以著馬於唐肆也〕 殆は近きなり、著は見はると訓ず、唐とは道のことなり、肆は市店なり、「循本」に曰く詩云、中唐有甓、注中唐爲庭中路、蓋賣馬之肆、庭中有路以便馬之出入也、漢書建章宮西有唐中、楊雄羽獵賦序云、甘露零其庭、醴泉流其唐、班固西都賦、前唐中而後太液、皆此唐字と、吾が見る所のもの變化限りなし、日に新たになるものなり、 顏回と孔子と對面して淸かに前日の言を談すれば遠久に非らず、言語近く見るゝなり、然れど故事は今日に於ては既に滅せり、汝向時の有を求めて今日に在ると謂ふは、馬を唐肆に求むる如きなり、唐肆は馬を停むるの所にあらず、昨日馬を市道に見て今日尋ぬれば馬既に去りて昨日の迹耳、故に知る新陳代り來りて住まらず、運轉遷移するのみなるを、〔吾服汝也甚忘〕 服は思ひ存するの謂なり、甚忘とは過去の速なるを謂ふなり、汝去りて忽然之を思へども恆に及はざるの意なり、變化は日に新たにして聖賢を問ざるなり、昨日の汝は今日既に去り、吾れ尋ね思へども亦竟に忘失するなり、 〔吾有不忘者存〕 夫れ變化の道は時に暫くも停ることなし、昨日の吾を失ふと雖ども今日の吾れ在ればなり、此れは忘れざるものありて存在するなり、是の故に未だ始より吾れあらざるなり、何ぞ患へんや、

孔子見老聃、老聃新沐、方將被髮而乾、慹然似非人、孔子便而待之、少焉見曰、丘也眩與、其信然與、向者先生形體、掘若槁木、

【解義】〔奔逸絶塵而回瞠若乎後〕奔逸絶塵は急走なるなり、庚桑楚篇に逸を軼に作る、解同處に見ゆ、瞠は直目の貌なり、塵を滅し速にして追ひ趂むべからず、故に直視して後に在るなり、上文の歩趨馳蓋し馬を以て喩ふ、故に此れ亦駿馬の及ぶべからざるを以て夫子の神速に比して云へるなり、〔無器而民蹈乎前〕器は爵位なり、夫子は言はずして人の信用する所となる、未だ嘗て親比せずして、物と周旋す、實に人君の位なくして、民皆な前に集りて從ふなり、〔夫哀莫大於心死而人死亦次之〕其の本然の眞を失ふを心死と謂ふなり、人は猶ほ身と云ふが如し、人死とは身の死するなり、人の萬物に貴きは心に在りて形に在らざるなり、故に輕重も自ら差等あるなり、〔日出東方云々〕日を以て心に喩へ物を以て道に喩ふるなり、「發蒙」に曰く蓋人有心猶天有日也と、又日を以て造化に喩ふとの說あり、「宣注」は以日喩化宰と云へり、〔萬物莫不比方〕方は「タクラブ」と訓ず、「覆蒙」に萬物莫不以日爲比方也と云へり、成玄英の說に依れば曰く夫れ夜は暗く、晝は明らか、日は東に出てゝ西に入る、人も入れば幽となり、出れば顯はれ、死すれば去り生きれば來たる也、故に知る人の死生は天の晝夜に喩へて之を以て寓比せば亦何ぞ惜まんや、陸樹芝曰く凡日出於東而入於西、日出而作日入而息故凡同生天地之間者、莫不比日月之升沈以爲作息之常と、〔有目有趾者待是而後成功〕趾は足也、是とは日を謂ふ、成玄英は曰く夫れ人の百體は天地陰陽の造化より受く、故に目は見る、足は行くも、造化に資る也、若し此の造化を待たざれば何を以て功を成さん、故に知る、死生は人に關するに非ざるなり、〔有待也而死云々〕有待は上の待是の待にして、此にては造化を待つなり、成玄英は曰く夫れ物の隱顯は一切造化を待つなり、隱は死なり、顯は生なり、日の出入既に存亡なし、物に隱顯なし、豈に生死あらんや、〔吾一受其成形而不化以待盡〕夫れ我の形と性は之を造化より受けたるなり、明闇妍醜已に成りて一定の後ち更に變化なし、唯に端然として盡を待つべし、此を以て一生を終へ、妍醜既に自由ならず、然れば生死の理も亦造化に任すべきなり、〔效物而動日夜無隙〕效は順成すると、「覆蒙」に人喜亦喜、人言亦言、目成見、足成行と、又效は感の如し、

卽ち生命の盡くること之れに次ぎて哀むべきなり、且夫れ日は東方より出で西の方に入るものなり、萬物は日の出づるによりて長短大小遠近等歷々として指點すべし、故に萬物比方せざるはなしと云ふなり、又總て目あり趾ある動物は必ず日を見て然る後ち事を爲し得べし、卽ち日が出で明らかなれば、萬物存在し、日入りて昏くなれば萬物は亡滅す、萬物の道を待つことあるは猶ほ人事の日を待つが如し、是れ天地の間の萬物亦然らざるはなし、人の生死も皆此の道の自然に循うて生死す、されば萬物は是れを待つありて死し、待つありて生ずるなり、我れも一度び成形を受けて我より之を化し亡さず以て自然の化の盡くるを待つ、是れ化せず以て盡くるを待つなり、凡物に效うて行ひ、自然に任かして其の間に一點の私心を容れず、日夜隙なく須臾も離れずして其の終る所を知らず、其の始まる所を知らず、唯、薰然として自から動きて形を成せども、果して何に物ありて然らしむるかを知らず、命を知る者と雖も亦豫め其の前に於て規り知ること能はず、只全く自然のみ、吾是を以て、亦自然と與に逝くのみ、吾れ終身汝と竝び立て周旋して、而かも汝は未だ此の道を得ずして後に瞠若たる者は是れ一交臂の間卽ち極めて近く極めて短き間に於て之を取り失へる者のみ、豈に哀まざる可けんや、夫れ道は必ず無きに至りて後ち盡くるものなり、然るに汝惟、目に見ゆるもの卽ち吾が顯著せる迹方に就きて之を求むるが故に見得て到らざるなり、彼の迹方は已に盡きて過去になりたる者なり、而かも汝ぢは之を得んと求む、是れ猶ほ馬を買はんとて市の既に散じたる空肆に求むると一般なり、到底得べからず（此の句は冒頭の步趨馳奔逸の意に應ずるなり）吾れ嘗て汝に誨へて甚忘の道を服膺せしめたるが、汝の吾れに服事するも亦甚忘の法を受けんが爲なり、夫れ甚忘と求有とは大に相違あるなり、然りと雖ども、甚忘などと申すと甚だ心賴り無き感あらんも汝奚んぞ患ふるに足らんや、過去の吾を忘ると雖ども、天地の間に吾と云ふ者は新々又生じて暫時の止息なし、蓋し汝の師たる吾は時々刻々隨處に存在してあれば汝は何時にても求め得らるべし、卽ち汝ぢ心に道を悟るとあらば、是れ吾は汝に存在す、奚ぞ奔逸絕塵に逢うて瞠若の慮あらんや、

待也、而死、有待也而生、吾一受其成形而不化以待盡、效物而動、日夜無隙而不知其所終、薰然其成形、知命不能規乎其前、丘以是日徂、吾終身與汝交一臂而失之可不哀與、女殆著乎吾所以著也、彼已盡矣、而女求之以爲有、是求馬於唐肆也、吾服女也、甚忘、女服吾也亦甚忘、雖然女奚患焉、雖忘乎故吾、吾有不忘者存、

【大意】 前文の目撃の句を承けて、初段の淸にして物を容るゝを證するなり、〇總べて夫子の大は爲すべくして、化は爲すべからず、然る所以を知らずして後に瞠若たる所以を言ふなり、

【通釋】 顏淵仲尼に問へるには、夫子步すれば小子も亦步し、夫子趨れば小子も亦趨り、夫子馳すれば小子も亦馳せて皆之を學ぶことを得れども、唯〻夫子奔逸絕塵とて恰も彼の駿馬が驅け出だして塵を見ざる程の神速なるに至りては小子追ひ及ばずして、後への方に目をみつめるのみと、仲尼曰く、回よ、何の謂ぞや、顏淵曰く夫子が步すれば回も亦步す、夫子が言へば回も亦言ひ、夫子趨れば回も亦趨り夫子辯ずれば回も亦辯す、夫子馳するも回亦然かす、夫子道を言へば回も亦道を言ふなり、唯に去るの速にして奔逸なる時には回は及ばずして後の方にぢつとして目をみつめて居るのみ、と申すことは夫子は人に信を期せずして人之を信じ、之を親比するを待たずして、其の情自然に周く、名位なくして萬民自から之に歸服す、而して小子は何が故に然るか其の道理を知らざるのみ、是れ後方に瞠若たる所以なりと、仲尼惡とて驚き怪むの聲を發して、曰く是れ豈に偶然ならんや、宜しく心を平かにして審かに察すべきことなり、夫れ世の哀みは澤山あれども心の全く失ひ亡くなりしより、大なる哀みはなし、而してさて人の死

威儀詳序于折旋俯仰之間」と、〔一若龍一若虎」龍虎共に文彩ある動物なるを以て智辯詭恢なるに喩ふ「覆蒙」に曰く、機知變化言笑風生と、〔其諫我也似子云云」「成疏」に依れば我れを匡し諫むるや、子の父に事ふるが如く、我れを訓へ導くこと父の子を敎ゆるが如し、夫れ遠近尊卑自ら情義あり、既に天の自然の性にあらず何ぞ慇懃を事とせん、是を以て知る聖人の迹の弊害は、遂に斯の如き自然を矯むるの害あり是れを以て嗟歎するなり、「覆蒙」は曰く「諫我也似子語言懇惻、其道我也似父敎戒深至と、「子路曰云云」雪子と孔子との二人互に意中を得、言語を忘るる所以なり、是れ此の節の眼目の所にて不言の敎なり、仲由未だ達せず、之を怪みて問を起す所以なり、〔目擊而道存矣云々」擊は動なり、「宣注」に曰く目觸之而已知道在其身矣と、神實已に著るなり、更に辭を費し其の聲音を容るべけんやと、不言の敎訓即ち悟道境に入るを云ふなり、

顏淵問於仲尼曰、夫子步亦步、夫子趨亦趨、夫子馳亦馳、夫子奔逸絕塵、而回瞠若乎後矣、夫子曰、回何謂邪、曰、夫子步亦步也、夫子言亦言也、夫子趨亦趨也、夫子辯亦辯也、夫子馳亦馳也、夫子言道、回亦言道也、及奔逸絕塵、而回瞠若乎後者、夫子不言而信、不比而周、無器而民蹈乎前、而不知所以然而已矣、仲尼曰、惡可不察歟、夫哀莫大於心死、而人死亦次之、日出東方、而入於西極、萬物莫不比方、有目有趾者、待是而後成功、是出則存、是入則亡、萬物亦然、有

【大意】 此段は上文の人の貌にして天なる順子の義を承けて、道德に不言の教あり、學者の意を得て言を忘るゝの妙旨を知るべきを說くなり、

【通釋】 溫伯雪子と云ふ人が嘗て齊の國に往かんとて魯國の地に宿りたる時、魯の人之に面會を請ふものあり、雪子曰く承知し難し、吾聞く魯の國の人は禮儀を重んずれども、性來が陋劣にて人の本心を識らざる也、故に吾之を見るを欲せずと、遂に齊に往きて要用を畢りて歸路に又魯の地に宿る、先日の魯の人又面會を請ふ、雪子曰く先日面會を請うて今又面會を請ふは、是れ必らずや我を感動せしむるならんと、出て面會して、入り來りて嗟歎す、明日も亦魯の國の人を見て又嗟歎すること前日の如し、是に於て雪子の家僕曰く、魯の客人に面會して入る每に嗟歎するは何の故ぞやと、雪子曰く吾れ元來汝に其の理由を語り告げんと思へり、元より魯國の人は禮儀を重んじて進退從容なれど其の心は陋劣なり、然るに昨日吾れに面會するもの其の進退の作法は眞に正然一一規矩に適ひて、容止の從容たること、實に龍虎の如き文彩ありて、我を諫むること子の父に於けるが如く、我を導くこと父の子に於ける如く如何にも尊卑の懸隔を設けて禮儀を飾れり、本心の眞實より出づるにあらず是の故に歎ずと、時に孔子は溫伯雪子を見て一言も語らざりしに、弟子の子路は怪みて問うて曰く、夫子は元來雪子を見んことを望みたりしに、今日之を見て一言をも發せざるは何の故ぞやと、孔子曰く雪子の如き人は一び目にて之を見れば直に其の身に道の存在せる知るべし、此の上に言語を發し、彼此と言ふに及ばざるなりと、

【解義】 〔溫伯雪子〕 姓は溫、名は伯、字は雪子と云ふ人にて、楚の國の道を懷ふ人なり、〔中國之君子〕 中國とは魯國を指し、君子は今我が邦の謂はゆる紳士の類なり、陋とは拙劣の謂なり、魯國の人は禮儀坐作進退の迹に明かにして人心を知るに拙劣なりと、「宣注」に習レ於二末學一而昧レ於二本體一と云へり、〔蘄見我云々〕 蘄は求なり、振は動すなり、昔日我れ齊に往きしとき我れに見ゆるを求め、我今日齊より魯に還る亦來りて見ゆることを求む、是れ必ず別に我を感じ動かさんと欲して來るならん、〔一成規一成矩〕 規は圓形を畫く器、矩は方形を畫く器「覆蒙」に曰く、

あるなり、〔使人之意也消〕世間の無道の物や邪僻の人を東郭順子は正然容儀を整へて坐して其人々を感化す、如何なる惑亂の意思も自然に消除すること紅爐點雪の如きなり、〔文侯儻然終日不言〕儻然とは自失の貌、順子の徳を談ずるを聞きて感服の餘り、茫然自失して言語を發すること能はず、〔吾所學者眞土梗耳〕土梗は土にて造れる偶はり、即ち貌を得て精神を遺ふことを謂ふ、又形は解き散じ動止する能はず、口舌は鉗困し言語すべきなく、自ら覺る、學ぶ所は眞に土偶人のみ、雨に逢へば忽ち壞れて眞物にあらずとの意なり、〔夫魏眞爲我累耳〕既に眞の道徳を聞きて感覺して爵位の累たるを知るなり、要するに形上と形下との貴賤を證するなり、

溫伯雪子適齊、舍於魯、魯人有請見之者、溫伯雪子曰、不可、吾聞、中國之君子明乎禮義、而陋於知人心、吾不欲見也、至於齊、反舍於魯、是人也、又請見、溫伯雪子曰、往也蘄見我、今也又蘄見我、是必有以振我也、出而見客、入而歎、明日見客、又入而歎、其僕曰、每見之客也、必入而歎、何邪、曰、吾固告子矣、中國之民、明乎禮義、而陋乎知人心、昔之見我者、進退一成規、一成矩、從容一若龍、一若虎、其諫我也、似子、其道我也似父、是以歎也、仲尼見之而不言、子路曰、吾子欲見溫伯雪子久矣、見之而不言、何邪、仲尼曰、若夫人者、目擊而道存矣、亦不可以容聲矣、

也眞、眞の一字通篇の眼目にて全德之君子等の字面は皆文線にて、以下は此節の證なり、

【通釋】 田子方或る日魏の文公に侍坐したるとき、數々谿工の人物を稱贊せり、文侯が曰く谿工は足下の師匠なるかと、子方曰く然らず彼は某の同郷の人なり、之れと道理を論ずるに往々人の心に當る、是の故に私は之を稱贊するなりと、文侯曰くされば先生は師匠はなきかと、子方曰くあり、文侯曰く先生の師匠は誰ぞや、子方曰く東郭順子と申す人なり、文侯曰く、されば何の故に順子を稱贊せざるかと、子方曰く順子は其の人柄(ヒトガラ)たるや眞に毫も假り飾ることなし、人の容貌なれども心は天なり、虛無にして萬物に順ひ、其の眞を失はず、淸淨にて能く萬物を包容するの度あり、又世上無道の物や邪僻の人には、東郭順子容を正して對坐して一言を發せざるも、彼れ自ら感悟して邪念は忽然として消滅するなり、此の如き不言の、感化の德を備ふる順子なれば、某の如き劣等のものは何によりて之を評論することを得んと、是に於て文侯自失歎息して終日言はず、終に前に侍立せる臣下を召して之れに語りて曰く、吾れ順子に及ばざること遠し、順子は道德完全なる大人君子なり、始め吾れは聖智の言や仁義の行を以て、至極なるものと思ひしに、吾れ今子方の師の言行を聞くに及んで、吾が形體は解き散じて動くこと能はず、吾が口は鉗(ツグン)て言ふべきの語なし、是れ吾が今日迄學びし所のものは眞に土偶人の如くにして、容貌は人の如きも精神なきなり、されば今日になりて見れば魏侯たるの人爵は眞に以て吾が累ひとなるのみと、

【解義】 〔田子方侍坐於魏文侯〕 姓は田、名は無擇、字は子方と云うて魏の賢人にて文侯の師なり、韓退之の說に依れば卽ち莊子の師なり、文侯は魏の君なり、〔數稱谿工〕 稱は稱美なり、谿工姓は谿、名は工と云うて亦魏の賢人なり、〔東郭順子〕 郭の東に居る、因りて氏となす、名は順子と云ふ、田子方の師なり、〔其爲人也眞〕 自然に任ずるの謂にて、天眞の自然を得るなり、〔人貌而天云々〕 貌は人と雖も心は天なり、眞たる所以なり、葆は保なり、己を虛にして物に順ひ、眞を保つて其の眞を養ふ、人貌にして天たる所以なり、淸なるものは毎に其の過刻を患ふるものなり、然れども順子は能く萬物を包容するの度

物固相累、二類相召、

田子方第二十一

此篇は全德の君子は眞を葆つを論ずるなり、世人皆其の糟粕を取りて其の精華を遺し、其の迹を追うて其の神理を亡ふ、然れば道德何によりて天下に明かならん、夫れ道德の妙は言語を以て傳ふべからざるなり、唯、眞を悟るもの之を得るなり、故に一の眞字を引き出して全篇に及んで此の意を發揮するなり、

田子方侍坐於魏文公、數稱谿工、文侯曰、谿工子之師邪、子方曰、非也、無擇之里人也、稱道數當、故無擇稱之、文侯曰、然則子無師邪、子方曰、有、曰、子之師誰邪、子方曰、東郭順子、文侯曰、然則夫子何故未嘗稱之、子方曰、其爲人也眞、人貌而天、虛緣而葆眞、淸而容物、物無道、正容以悟之、使人之意也消、無擇何足以稱之、子方出、文侯儻然終日不言、召前立臣、而語之曰、遠矣、全德之君子、始吾以聖知之言、仁義之行、爲至矣、吾聞子方之師、吾形解而不欲動、口鉗而不欲言、吾所學者眞土梗耳、夫魏眞爲我累耳、

【大意】　此の段は道德は精深に在り、俗人學者流の粗迹は到底言ふに足らざるを論ずるなり、○其爲人

に醜惡の妾は貴び愛せられて美容の妾は賤み悄まれたり、是に於て陽子怪みて其の理由を問ひたるに、旅宿の主人は答へて曰く、其の美なる方は自ら美として誇れるが故に吾れは其の美なるを感ぜず、其の醜惡の方は自ら醜惡なるを知りて謙遜するが故に其の柔順なる心に感じ醜き處を忘る故に之を貴べり、陽子曰く弟子等よ之を心に記憶せよ、彼の行ひ賢にして而かも自ら賢人なりと自負するの行ひを去るときは何くに往くも、人々に愛せられぬと云ふことはなしと、

【解義】〔陽子之宋〕姓は陽、名は朱、字は子居、秦の人なり、司馬彪曰く陽子楊朱と、〔宿逆旅〕逆は迎なり、旅は衆なり、衆人を迎へて泊宿の便をなす、即ち旅店なり、〔逆旅小子〕小子は賤者の稱なり、即ち逆旅の主人を謂ふ、〔美者自美云々〕美なるもの自ら其の美貌を恃みて、唯其の矜伐の厭ふべきを見て、其の美の愛すべきを見ざる也、惡なるものは自ら其の惡貌を愧ぢて謙抑するの同情すべきを見て、其の惡貌の悄むべきを知らざるなり、是れ美者の賤まるゝ所以にして、惡者の貴き所以なり、夫れ美者自ら美として其の美を失ひ、惡者は自ら惡として其の惡を忘るゝなり、然れば行ひ人に賢れて自ら賢れたりとせざれば、世間何の國に往くも、人の爲めに敬愛せられざらんや、蓋し自ら賢とするは時として可なることなきを戒むるなり、

名言

無譽無訾、一龍一蛇、與時倶化、而無肯專爲、一上一下以和爲量、

君其渉於江而浮於海、望之而不見其崖、愈往而不知其所窮、送君者皆自崖而反、君自此遠矣、

直木先伐、甘井先竭、

自伐者無功、功成者隳、名成者虧、

以利合者、迫窮禍患害相棄也、以天屬者、迫窮禍患害相收也、

君子之交、淡若水、小人之交、甘若醴、君子淡以親、小人甘以絶、

形莫若緣、情莫若率、緣則不離、率則不勞、

無受天損易、無受人益難、

有人天也、有天亦天也、人之不能有天、性也、聖人晏然體逝而終矣、

るを怪みて之を問ふなり、〔甚不庭乎〕此の文に據れば不庭を不逞と解する方優なるが如し、王念孫曰く逞字古讀若呈聲與庭相近故通作庭と、〔吾守形而忘身云云〕莊周が異鵲の利を見て、耳目の好きに從ふ、是れ形を守るなり、然るに虞人の疑を受けて辱を爲すを知らざるは身を忘るゝなり、夫れ動いて物と交るは卽ち濁水なり、靜にして天道自然を覺るは淸らなる淵なり、至人は心平生より靜にて物欲に迷はず淸淵の如し、然るに今莊子自ら以て迷ふと云へるは蓋し虛心に遊ばずんばあるべからざるを明すなり、〔且吾聞諸夫子云云〕莊周は老聃を師とす、故に老子を稱して夫子と爲すなり、夫れ達人は塵俗に同じうす、俗世には禁令あり、故に其の俗に入れば其の禁令に從ふなり、今莊周既に雕陵に遊びて栗を盜むと疑はる、此れ輕々しく憲綱を犯すものなりとて悔い責むるの辭なり、〔今吾遊於雕陵云云〕莊周の心は異鵲を取らんとて、遂に栗林の禁令を忘るゝは是れ身を忘るゝなり、番人が栗を盜むと疑ふは一身の恥辱なり、故に戶外に出でざるなり、夫れ莊子は大人なり、身を卑位に隱し、戰國に遨遊して性を漆園に養ふ、豈に淸淵に迷ひて心を利害に留むるものならんや、蓋し此を借りて群性の其の身を毀ち殘ふを評品せんと欲すればなり、

陽子之宋、宿於逆旅、逆旅人有妾二人、其一人美、其一人惡、惡者貴而美者賤、陽子問其故、逆旅小子對曰、其美者自美、吾不知其美也、其惡者自惡、吾不知其惡也、陽子曰、弟子記之、行賢而去自賢之行、安往而不愛哉、

【大意】此段は自ら賢とするの行を去るべきことを論ず、宣穎曰く有一我橫在胸中、涉世皆而牆矣、莊子反覆致警、蓋爲普天下人最深病根只在於此、

【通釋】陽子、宋と云ふ國に往きて逆旅に宿したるに、旅宿の主人に、二人の妾を畜へけるが、其の一人は容貌美麗なりしに、其の一人は容色醜惡なり、然る

圓さ一寸と云ふ意なり、〔感周之顙〕感は觸れさはることにて、顙とは額なり、〔翼殷不逝云云〕殷は大なり、逝は往なり、躩歩とは疾く行くなり、裳を蹇るは輕裝にて疾走に便にするなり、留は伺候するなり、翅が大なる故に遠飛する能はず、又目大なるによりて遠方を視る能はず、莊周其の樣子を怪みて忽然として之を求めんと思ひて、早く馳せ往きて彈弓を把りて之を射らんと伺ふなり、〔螳螂執翳〕翳は隱なり、蔽なり、司馬彪曰く執レ草以自翳也と、〔異鵲從而利之見利而忘其眞〕異鵲は螳螂の啄むべきを視て之を利して、莊周の彈を挾みて己を伺ふを知らず、翼ありて逝くこと能はず、目あるも觀るを得ず、是れ其の眞性を喪ふものなり、眞は性命なり、莊周は彈弓を執りて未だ放たざる中に、忽ち一蟬の樹葉に隱れて、此の蔭庇を美なりとして身あるを覺えざるなり、然るに螳螂ありて、木の葉を執りて自ら翳ひ、意は蟬を捕ふに在りて異鵲の後より啄まんとするを知らず、異鵲は螳螂を捕へ啄ばまんと欲して莊周の後より、彈弓を以て射らんとするを覺らざるなり、要するに前方の利を取らんとて、後より害を加へるものありて

性命を危くすることを覺らざるなり、是れ所謂る其の眞性を忘るゝものなり、〔怵然曰噫物固相累〕怵然は驚き惕る貌、螳螂は鵲が利に徇ひて、一身を忘るゝを見て驚き惕るゝなり、〔物固相累云云〕「郭注」に相爲レ利者恒相爲レ累と、蓋し物を欲すれば自ら其の明を蔽ふものなり、是れ物固より相互に累はすものなり、〔二類相召〕召は招と通ず、又物の能く他物を搏たり噬んだりすれば、必ず他物ありて以て其の後に乘じて來り害するものなり、恰も相互に招く如きなり、是れ卽ち二類相ひ召くと謂ふべきなり、「宣注」に蟬召二螳螂一螳螂召レ鵲皆自招レ害と、〔捐彈而反走虞人逐而誶之〕捐は棄つるなり、虞人とは栗園を取締る番人なり、誶は問ふなり、訴告なり、莊周利害の相ひ隨ふを覺りて彈弓を棄て反り走るや、番人は周が栗を盜むと疑ひて故に逐ひ來りて之を問ふなり、〔三月不庭〕「釋文」に三月一本作二三日一とあり、不庭は司馬彪は不出座庭中と云へり、家に歸りて愧ぢて門庭を出でざること久しきを云ふなり、王念孫は庭當三讀爲二逞、不逞不快也と、〔藺且從而問之〕姓は藺、名は且、莊子の弟子なり、師の近來戶を閉ぢて出でざ

螂一層、異鵲又一層、已數層之上、又轉出虞人遂誶一層、收入當身、如窮幽陟險之後又轉一勝、眞文家樂事也と、

【通釋】 莊周が一日雕陵の樊に遊べり、時に偶然一の異なる鵲が南方より飛び來るありて、其の翼の大さ七尺、目の大さ寸を運す、卽ち圓さ一寸なり、此の如き異なる鵲を見たり、然るに此の鵲は莊周の顙に觸れさわりて栗の木の林中に止りたり、莊周考ふるに此れは如何なる鳥ぞや、翼さ大なるが故に往くこと能はず、目も亦大なるが故に視ること稀なり、さればこそ吾が顙に觸れ又栗林に止まるなれと、因りて足を早めて彈を執りて之を射て取らんとて、偶然傍を見れば一匹の蟬が美しき木蔭を得て、其の身の安危をも打ち忘れて居たるに、螳螂ありて自身を蟬に見せまじとて、草を以て自身を翳して、蟬を搏ち取らんとて、得ることのみを見て、其の方に心を入れて其の自身の形を異鵲に見らるゝを忘れたり、此の時に異鵲は螳螂を捕へんとて利を見て其の眞性を忘れて無我無中になれり、卽ち莊周に自身を射撃せらるゝを氣附かざるなり、是に於て莊周怵然として驚き懼れて曰くさて〳〵物は元來互に相累はせり、二類相召すものなり、自分が他の物を欲すれば物又己を欲するものなり、とて彈を棄て走りて我が家に歸らんとすれば、栗の園の番人は莊周が栗を盜みたるかと疑ひて、逐ひ來りて莊周を罵りたりしかば、莊周は歸りて後ちは過を思ひて閉居して、戶外に出でざること三月餘りに及びたるなり、此時に弟子の藺且と云ふ人が怪みて曰く先生は何の故に久しく外出せざるやと、莊周曰く吾れ平生形を守るの學を修むること久し、然るに一旦輕々として其の身を用ひたり、又物と交りしため、靜かにして玄覺するの道に迷へり、且吾れの師匠たる老子より兼て聞き學びたるには、鄉に入れば鄉に從ふと、今吾れ雕陵に遊びて吾が自身を忘れ異鵲が吾が顙に觸れたるによりて、忽ち其の利を見て己の害を忘れ、遂に番人に賊と疑はれて辱め罵られたり、是の故に吾れ內に省みて愼み戒めて外出せざる所以なり、蓋し物の利を逐うて其の害を忘るゝを諷するならんか、

【解義】〔雕陵之樊〕雕陵とは栗園の名なり、樊は藩なり、栗園の藩籬の內なり、〔大運寸〕運は圓なり、

故に何ぞ能く終始を定めん、既に其れ終りと始めなし、乃ち死と生となき也、是を以て變に隨ひ化に任じ遇ふ所皆適ふ、正眞を抱守して造物を待つのみ、〔有人天也有天亦天也〕「宣注」に人與天皆爲之天卽理也とあり、〔人之不能有天性也〕「宣注」に人或不能全有其天以性分有所加損故也と、〔聖人晏然體逝而終矣〕晏然は安なり、逝は往なり、「宣注」に天者日逝而不停、聖人安然體其日逝者而終其身、又惡有以己與天抗者邪、此所以人與天一也と、

莊周遊乎雕陵之樊、覩一異鵲自南方來者、翼廣七尺、目大運寸、感周之顙而集於栗林、莊周曰、此何鳥哉、翼殷不逝、目大不覩、蹇裳躩步、執彈而留之、覩一蟬、方得美蔭而忘其身、螳蜋執翳而搏之、見得而忘其形、異鵲從而利之、見利而忘其眞、莊周怵然曰、噫、物固相累、二類相召也、捐彈而反走、虞人逐而誶之、莊周反入、三月不庭、藺且從而問之、夫子何爲頃間甚不庭乎、莊周曰、吾守形而忘身、觀於濁水而迷於淸淵、且吾聞諸夫子曰、入其俗、從其俗、今吾遊於雕陵、而忘吾身、異鵲感吾顙、遊於栗林而忘眞、栗林虞人以吾爲戮、吾所以不庭也、

【大意】此段は物の利益を逐ふ者は、必ず己の害を忘れて禍に罹ることを言うて戒となす、宣穎曰く接連寫出數層妙境、使人有目不及視之趣、蟬一層、螳

すなり、此れ變化の窮り無きを言ふ、是れ無始無終無生無死を明かさんと欲するなり、既に死生なし何ぞ窮塞哀むあらんや、「人與天一也」所謂る天損人益とは是れ敎迹の言なり、凝理の若きは皆自然なり、故に人天不二なり、「夫今之歌者其誰乎」夫れ大聖は虛にして物我を忘れ、兼ねて我を喪ふ、既に我が歌にあらず、是れ誰が歌ふぞ、我れ乃ち身なし、歌將た安くに寄らん、「窮桎不行」「成疏」に依れば桎は塞なり、天命の窮塞して道德の行はれざるを言ふ、王先謙は窮桎を窮困桎梏の二物に解して曰く飢渴也、寒暑也、窮困桎梏而不行也、皆天地之行、而運動萬物之所發見也と、「運物之泄」運は動なり、發は泄なり、「天地之行」行は活動すること、「言與之偕逝」「宣注」に惟順化與之偕往而已矣と、「始用四達」「宣注」に始用は初進なり、初進の時卽ち四達して利ならざるは無しと、「吾若取之」吾は孔子自ら謂ふ、「宣注」に曰く虛明爵祿無異盜竊、此君子賢人所不爲、吾獨取之何哉、「鳥莫知於鷾鴯」知は音智、鷾鴯は燕なり、上文に鷾怠に作る、「目之所不宜處」目は視なり處は居なり、之所不宜處は其所不宜居と云ふが如し、「不給視」給は暇給なり其の飛び去るに急遽にして復た四方を視て回翔するに暇給あらざるを云ふ「雖落其實」實は其の口に銜める食物を謂ふ、「其畏人也而襲諸人間」其は鷾鴯を指す、襲は入なり、畏人とは上述の急遽の狀を謂ふ、襲は入なり、人間は人の居室を謂ふ、「社稷存焉爾」焉は人間を指す、社稷は其の關繫上最大重物と云へる意味なり、國家は社稷を以て重しと爲す、故に以て喩と爲せり、鷾鴯の最も重んずる物なるに喩ふ、乃ち其の人を畏るゝや上記の如く甚しきに關せず、而かも其の巢くふは矢張り人の居室に入りて、離れざるは、是れ其の離る可からざるよりして然り、宛かも君子が國家に於ける、社稷に離るべからざる如しとの意なり、「義海」に曰く鷾鴯畏人、襲入人間、喩處世全身之知、其顧窠巢而不去、猶人守社稷而不可離也と、「化其萬物而不知其禪之者」禪は代るなり、夫れ道通じて萬物の變化を生じ、群方運轉停まらず、新々變易して日用知らざるなり、故に其の代謝を覺ゆるものなし、既に日新して變ずるなし、何の始終か之れあらんや、「焉知其所終焉」夫れ終れば是れ始り、始れば是れ終るなり、

其の卒りを知ることなく、又其の始めを知ることなし、其の始めを知ること無きが故に先づ此より迎ふることも難く、其の終りを知ること無きが故に預め待つことも又難く、唯、正道を守りて之を待ち、其の自ら化するに順ふ耳、回又問ふ、何をか人と天と一なりと謂ふか、孔子曰く世に人の有るも天なり、天の有るも天なり、天も畢竟人も皆倶に天の造れる者にして其の大本は一なり、然れども人の人たる性は天より之を命ずる者にして、人の干渉し能ふ所に非ず、然れば人の天を有する能はずして全く天と同一なることを得ざるは加損の等差ある性なり、然るに唯聖人は始終の二のみならず、死生の一たる理に通ずる故に、晏然として能く天命を體し、自然の化に隨うて往き、始もなく終もなく變化に一任して、其の一身を終ることを爲すなり、

【解義】〔歌猋氏之風〕古の帝王已に天運篇に見ゆ、風は音諷、義同じ詩の一體なり詩の關雎序に一曰風上以風化下、下以風刺上、主文而譎諫、言之者無罪、聞之者足戒、故曰風とあり、此れ後世周代に至りて定まれる詩體なれども亦以て風の意義を推知すべし、孔子は聖人なり、窮通の理に安じ、陳蔡の困に遭ふと雖ども無爲を廢せず、故に左手に槁木を擊ち、右手に枯枝に凭りて、恬然として自得、猋氏の淳風を歌ふなり、〔有其聲而無宮商〕其聲は歌聲なり、宮商は宮商角徵羽の五音を包括して云ふ、〔犁然有當於人心〕犁然は釋然と同じ、「覆蒙」に曰く如泥犁分上釋然と、當は適當して能く合ふこと、〔端拱還目而窺之〕端拱は端然として拱立すること、還は音旋、義も同じ、還目は目を回らして視ること、〔恐其廣己而造大〕其は顏回を指す、造は至なり、自ら廣くして自ら大とするに至るを恐るゝなり、「覆蒙」に曰く造大は至于無所窮極也と、〔愛己而造哀〕自ら愛して自ら傷ふに至るを恐るゝなり、「覆蒙」に曰く恐其過哀于愛己之聖而遂及于難、乃呼而告之と、此に依れば兩の己の字は孔子自から謂ふ、〔回無受天損易〕夫れ自然の理窮塞の損ありとも時の命に達して之を安んずれは易く、人倫の道有祿の益來る時之を推すは卽ち難く、此れ仲尼木を擊つと雖ども、其の歌ふや哀怨に無心なるを明すなり、〔無始而非卒也〕卒は終なり、今に於て始と爲すものは昨に於て終りと爲

なれば之に安んずることは易きも、人間業から俸祿の己を益するの身に來る時に、之を受けぬと云ふことは人情に於て難しとする所なり、又今日の始めは昨日の卒りにして、始めは卽ち卒りで、變化の極りなきものなり、且つ人と天とは皆自然に本づき一なり、されば今我が歌ふも畢竟何に者の歌ふなるか人か天か知るべからざるなり、回曰く天損を受くる無きは易しとは如何なる故ぞ、伺ひ度しと、仲尼曰く天命窮し塞がりて道德行はれざるは、饑渴寒暑の患あり、窮困桎梏の苦あり、自由に行動する能はざること皆是れ天命にして、猶ほ天に盈虛あり四時變遷して、萬物を運動し一旦發泄したるものは中途にて止るべからざるが如きなり、乃ち人たる者は識らず知らず自然の爲す儘に任して偕に往くより外なきなり、人臣たる者は主君の命令通りに從うて敢て之を去らず、人臣の道を執り行ふすら是の如くなれば、況して至尊無比なる天に對しては固より絶對的天命を順受する外なきなり、されば詰り自然の變遷に任かせば宜き故に爲し易きなり、顏回は又問ふ、何をか人に受くること無きを難しと謂へるか、仲尼曰く始め進む時四達して悖らず、自然順便なれば、爵祿己れに加はりて已むことなく、益を受くること甚だ多く、此れ外より來りたる利益は、己れが本來の有に非ず、是れ吾の命偶然外に在るが故に、斯くならしむるなり、君子や賢人は爵祿を盗まず、然るに吾獨り安然として之を取るは何ぞや、試に視よ鷾鴯は輕妙の鳥にして能く害を遠ざくるの智あり、人家に入り巢を作らんと欲して便宜なる處を得ざれば目給視ることを待たず、假令ひ口に含める食物を落しても顧みずして走るなり、然れども燕は斯の如く人を畏れて身を存するの智ありと云ふと雖も、遂に人間の家屋に住まざるを得ざるは、蓋し燕は人家を離るれば身を安んずべきの地なきこと、猶ほ人間が社稷の神を一度某處に鎭祭しては、復た他に移すの難きと同一ならん、人は己れに來る益の受くべからざるを知ると雖も、到底此の世間を離るゝこと能はざるも亦之と同じ、此れ乃ち難き所以なり、回又問ふ何をか始として卒りに非ざることなしと謂ふかと、仲尼曰く夫れ一氣相禪りて萬化極り無きは誰れか之を爲すやと云ふことを知らざるなり、或は之れを益して損じ、或は之を損じて益し

逝之謂也、爲人臣者不敢去之、執臣之道猶若是、而況乎所以待天乎、何謂無受人益難、仲尼曰、始用四達、爵祿並至而不窮、物之所利、乃非已也、吾命有在外者也、君子不爲盜、賢人不爲竊、吾若取之何哉、故曰、鳥莫知於鷾鴯、目之所不宜處、不給視、雖落其實、棄之而走、其畏人也、而襲諸人間、社稷存焉爾、何謂無始而非卒、仲尼曰、化其萬物而不知其禪之者、焉知其所終、焉知其所始、正而待之而已耳、何謂人與天一邪、仲尼曰、有人、天也、有天亦天也、人之不能有天、性也、聖人晏然體逝而終矣、

【大意】此段は窮に處して命に安んずるを論ず、但し前の兩段は孔子を抑へたり、故に此段は孔子を揚ぐるなり、又主眼とする處は人天の合に在るのみ、

【通釋】孔子陳蔡の間に窮困して七日の間も火食せず、左の手に槁れたる木を打ち右手にて枯れたる枝に據り、恬然たる形にて、神農氏の歌を吟じたり、然れども節調もなく五音にも合はざるなり、されど拍子を取る木の聲と、歌ふ聲とか田を犁く時其の土釋け分るが如く、釋然として人の心に應じ合ふなり、是に於て回は手を拱ぬく時は頭を正直して側視し難き故に、横目を以て其の方を窺ひたり、孔子は其の己を尊ぶこと過ぐれば大に至り過ぎ、己を愛すること切なれば却りて哀に至るを恐るゝなり、蓋し是れ皆焱氏の淳風に合はざるを云ふなり、因て顔回に謂うて曰く、回よ自然上から窮するの損あるも此は天命

【解義】〔衣大布而補之〕大布は粗布なり、〔正緳係履〕緳は帶なり、正は結ぶなり、履穿るゝが故に、繩を以て之を係くるなり、〔枏梓豫章〕枏は楠なり、梓は桐にて、琴の材なり、豫章は楠の一種皆な端直の好木なり、〔攬蔓其枝〕攬蔓は把捉すること、〔而王長其間〕王は旺と同じ、旺盛なり、王長は自得の貌なり〔雖羿蓬蒙不能眄睨也〕羿は古の善射の人なり、蓬蒙は其の弟子なり、眄睨は斜視なり、夫れ善士賢人時に遭ひ地を得れば猶ほ猿の直木を得て跳躑自在なるが如く善射の人あたゝと雖ども敢て目を擧て側視せず況や弓を彎くをや、〔柘棘枳枸〕柘は音「シヤ」、「ツゲ」と訓ず、棘は「バラ」と訓ず、枳枸は「カラタチ」と訓ず、此皆刺あるの惡木なり、〔振動悼慄〕悼慄は悲悼戰慄なり、〔非有加急而不柔〕急は束急なり、不柔は柔動を得ざること、〔此比干之見剖心徵也夫〕徵は徵驗なり、〔比干剖心の事既に內篇に解せり、「覆蒙」に曰く比干之見剖心者、以直道而行、昏上亂相之間、比干剖、心此爲證驗、今日苟安性命于亂世、以爲幸矣、而欲無憊、其可得乎、所以憊也と、宣注に曰く如欲不安於憊、則比干受害、其已驗者也、反掉一句、最峭と、

孔子窮於陳蔡之間、七日不火食、左據槁木、右擊槁枝、而歌猋氏之風、有其具而無其數、有其聲而無宮角、木聲與人聲、犁然有當於人之心、顏回端拱還目而窺之、仲尼恐其廣己而造大也、愛己而造哀也、曰、回、無受天損易、無受人益難、無始而非卒也、人與天一也、夫今之歌者其誰乎、回曰、敢問無受天損易、仲尼曰、饑渴寒暑窮桎不行、天地之行也、運物之泄也、言與之偕

德不能行、憊也、衣弊履穿、貧也、非憊也、此所謂非遭時也、王獨不見夫騰猿乎、其得柟梓豫章也、攬蔓其枝、而王長其間、雖羿逢蒙不能眄睨也、及其得柘棘枳枸之間也、危行側視、振動悼慄、此筋骨非有加急而不柔也、處勢不便、未足以逞其能也、今處昏上亂相之間、而欲無憊、奚可得邪、此比干之見剖心徵也夫、

【大意】此段は道德に處するものは形を以て議すべからざるの義を論じ、以て前段陳蔡と天の字とを承けて文線となす、

【通釋】莊子大なる粗布を衣て、之を補綴し、帯を結びて、履破れたるが故に、繩にて之を結びて、魏王の許へ立寄りたりしに、魏王曰く、先生は何の故に斯くは病み疲れたりやと、莊子が曰く此は貧乏なり、決して憊とは云ひ難し、夫れ士たるもの道德を懷きながら之を行ふこと能ざるは憊れたりと謂ふべし、衣は破れ履は穿たれたりとて憊れたりとは云ひ難く、是れ即ち貧乏にて時に遭はずと謂ふべし、且つ王は未だ騰猿を知らざるか、其の柟梓豫章の如き直木の枝に取りすがりからみ付きて、上下自在其の間に志壯かんと得意然たり、此の時に方りて、古代射の名人なる羿や其の弟子たる逢蒙が、之を射らんとするも到底能はざるなり、況や他人をや、然るに柘棘枳枸の如き刺のある惡木に至りては、危行側視し振動悼慄して身體引きつり、自然に自由を失ひ、其の技能を逞する能はざるなり、是れ他なし其の勢不便なればなり、今や臣は主昏く臣亂るゝの間に處るが故に、如何に憊るゝことを欲せざるも得べけんや、然れば忠臣比干が心を剖れしは此に適する實證にあらずや、

む、又他日桑雩曰く、舜の將に死せんとするや、禹に命じて曰く敢て人に驕ぶり抗せずして、謙讓人を推して、情は眞卒にして敢て矯めざるに若かざるなり、又文迹を求め借りて形容を飾るに及ばざるなり、果して然らば外物を待つの必要更になしと、

【解義】〔子桑雩〕姓は桑、名は雩と云ふ隱君子なり一說に雩は音戶、內篇太宗師の子桑戶は是の人なりと、〔窮於商周〕商は殷國の本號、周の時宋は殷の後裔にして其の國に封ぜられしを以て又商とも云へり〔假人之亡〕司馬彪曰く假國名と、成玄英曰く晋に滅さると、亡は亡滅なり、林回姓は林名は回、假の賢人なり、〔爲其布與〕布は財貨なり、〔相棄也〕「覆蒙」に曰く以利交者、遇有患害則掉臂不顧而去之惟恐其後、何不相棄と、〔相救也〕「覆蒙」に曰く父子一體也、偶有患難如救燃眉之急惟恐其燎也、何不相收と、〔君子交淡如水云云〕君子の交は利なし故に淡にして道合ふ、故に親し、小人は利を有す、故に甘く、利は常にすべからず、故に時ありて絕ゆるなり、〔彼無故以合者則無故以離〕事故に由らずして合ふものは父子の天屬なり、孔子先王に說き、朋友に親しむは元來天屬に非ざるなり、皆名利を求むる爲めに此に來るなり、是れ故ありて合ふにあらずや、又迹を削り、樹を伐られて去るは是れ故ありて離るゝなり、必竟天屬に非ず、故なく自ら親み故なく自ら離るゝものなり、〔徐行翔佯〕「覆蒙」に曰く、不自得之狀と、〔无挹於前〕挹は音揖、義同じ、「覆蒙」に曰く不爲揖讓之禮於前交淡于前也と、〔眞冷禹〕司馬彪云、冷は曉なり、眞道を以て禹に曉すなりと、冷或は命に作る、又令に作る、命は敎なり、按ずるに眞冷禹の三字當に乃命禹に作るべし、「釋文」に、眞司馬本作直とあり、王引之曰く直當爲卣、卣籀文乃字、形似直故訛作眞と、〔緣則不離率則不勞〕形順なれば常に物に合ふ、性率なれば用ひて弊なし、〔不離不勞云々〕「通義」に曰く不求文以待形固不待物、足乎己、無待於外也、孔子之困皆有待於物之故と、

莊子衣大布而補之、正緳係履、而過魏王、魏王曰、何先生之憊邪、莊子曰、貧也、非憊也、士有道

合者則無故以離、孔子曰、敬聞命矣、徐行翔佯而歸、絕學捐書弟子無挹於前、其愛益加進、異日桑雩又曰、舜之將死、眞冷禹曰、汝戒之哉、形莫如緣、情莫若率、緣則不離、率則不勞、不離不勞、則不求文以待形、不求文以待形、固不待物、

【大意】　功名を去るの意を承けて、友と交る、天屬の意を用ふべきを論じて孔子を抑ゆること上段の義と同じ、○天屬を以てするものは、形迹皆融和にて眞忤相感じ、其の人に交る、强合にあらず、豈に離れ易きを得ん、此れ處世第一の義なり、西仲云末忽ち別に一段を起し、斷に似て續けり、古穆奇奥にして變幻測ることなし、

【通釋】　孔子子桑雩に問うて曰く、吾れは魯宋衞陳蔡の諸國にて種々の大難に遇ひ、親交の徒友と間が益す疏遠なり、其の故何ぞや、子桑雩曰く足下は假國の林回と云ふ人が其の國を出奔せしことを聞かずや、林回價千金の璧を棄て赤子を負うて走る、或人怪みて曰く足下の赤子を負ふは賣りて財布を得る爲めか、假令ひ赤子を賣るも千金の璧よりも少し、千金の璧が累ひ厄介なる爲か、赤子の方が厄介益す多からん、然るに千金の璧を棄て赤子を負うて走るは何の故ぞ、林回曰く千金の寶璧は利合にして、赤子は親屬卽ち天合なり、夫れ利益を以て合ふものは、一朝窮禍患害に迫れば、相棄つること塵芥の如く、天倫を以て合ふたる親族は窮禍患害に迫るも相ひ收むは人情の自然なり、故に千金の寶璧と天倫の義とは同日の論にあらざるなり、且夫れ君子の交は淡く水の如く、小人の交は甘くして醴の如く、君子は淡けれども親むこと深く、小人は利あるが故に甘く利盡くれば交り絕ゆ、偶然相合ふものは亦何の理由もなく離れ背くべし、孔子曰く敬て訓誨を拜すと、徐行逍遙として家に歸り、學問を絕ち、書籍を拋つ、故に弟子等手を拱して、禮を行ふ儀式はなくとも、敬愛日に加り益す進

ること、〔乃比狂〕狂人は無智にして矜飾せざるを以て引きて比喩と爲すなり、〔削迹捐勢不爲功名〕痕迹を削り晦まし權勢を捐棄すること乃ち深く自ら韜晦するを謂ふ、〔是故無責於人人亦無責焉〕若し己の能に伐りて、人の不能を顯はすときは、是れ人を責むるもの也、然るに既に人を責むる無ければ、人も亦我を責めざるなり、〔至人不聞子何喜哉〕夫れ至徳の人は世に顯はれず、子は既に聖哲、何すれぞ喜んで聲名を好むや、「郭注」に寂泊無懷乃至人也とあり、〔孔子曰善哉〕孔子の語此に止まる、辭其交游より以下は記者の辭、〔而況人乎〕「覆蒙」に曰く人之所以有患累者以其驚群動衆矜張、其有能、是以不免、能虛己以遊、鳥獸不惡而況人乎、便是外人卒不能害也と、宣穎曰く、妙跌、更何自有死喪之患と、又曰く說到鳥獸相忘、透過人道一層、雖是快筆實亦至理也と、

孔子問子桑雽曰、吾再逐於魯、伐樹於宋、削迹於衛、窮於商周、圍於陳蔡之間、吾犯此數患、親交益疏、徒友益散、何與、子桑雽曰、子獨不聞假人之亡與、林回棄千金之璧、負赤子而趨、或曰、爲其布與、赤子之布寡矣、爲其累與、赤子之累多矣、棄千金之璧、負赤子而趨何也、林回曰、彼以利合、此以天屬也、夫以利合者、迫窮禍患害相棄也、以天屬者、迫窮禍患害相收也、夫相收之與相棄亦遠矣、且君子之交淡若水、小人之交甘若醴、君子淡以親、小人甘以絕、彼無故以

人より吾を責めらるゝ患ひなし、此の如く至人は名聞を求めざるに、足下は何故に名聞を喜ぶや、是れ足下が幾死の苦境に陷りたる所以なりと、一冷棒を加へしなり、此の時孔子曰く善哉足下の訓戒の言と、忽ち其の朋友間の交遊を謝絕し、其の門弟子を退け去りて、獨身大澤の邊に隱れ、裘褐を衣て、杼栗を食したり、心が無心無欲なるが故に、鳥獸の群に入るも鳥獸畏れ逃れざるなり、夫れ鳥獸の異類にして驚走し易き者すら畏れ惡まざれば、況して同類の人は勿論の事にて誰か敢て危害を加ふる者あらんや、

【解義】〔孔子圍於陳蔡云云〕楚の昭王孔子を召す、孔子魯より楚に聘せらる、途次陳蔡二國の間を經たり、陳蔡の人因りて兵を起して之を圍む、門人飢餒七日火食せず、窘迫困苦せり、其の事史記の孔子世家に詳かなり、〔太公任〕太公は老者の稱なり、又大夫の稱と爲し、任は其の名なり、〔翂々翐々〕翂は音紛、字或は㣞に作る、翐は音秩、共に舒遲の貌にて飛ぶ高からざるなり、〔意怠〕は玄鳥なり、「ツバメ」と訓ず〔迫脅而棲〕敢て獨棲せず、衆鳥の中に在りて纔に身を容るゝに足りて、宿して害の至るを避くるなり、

〔進不敢爲云云〕夫れ進退中に處る、害の至るを遠ざくる爲めなり、飮啄も行に隨ひ、必ず次叙に依る、〔而外人卒不得害〕玄鳥好んで人家に棲む、故に云ふ「覆蒙」に曰く、不唯同列不斥逐各依人家外人亦不得而害之と、〔大成之人〕大成の人即老子なり、道德宏博、生れながら庶品を成す故に之を大成と謂ふ、〔自伐者無功〕老子に出づ、伐は誇なり「コホル」と訓ず「覆蒙」に曰く自伐其能者人必從而毀之と、〔而還與衆人〕還與は功名を己が擅有と爲さず、衆人と共に分ち有するを謂ふ、「成疏」に夫能立大功建鴻名功成弗居、推功於物者誰能如是其唯聖人乎と、〔道流而不明居〕流は流行なり、明居は顯然と之に居らざること、其の道天下に周く流行すれども、自ら顯然と有道の者の場處に立たずとなり、「郭注」「成疏」は處の字を以て下句に屬すれども、今郭嵩燾の說に依る、〔得行而不名處〕得は「集韻」に德行之得也とあり、德と同義に用ふ、處は居なり、乃ち其の德の行はるゝも、恃みて名譽の地に居らず、自から名譽と爲ざるなり、〔純純常常乃比於狂〕純々は材空素なり、其の心を純一にすると、常々は物に混じて其の行を平凡にす

人不聞、子何喜哉、孔子曰、善哉、辭其交遊、去其弟子、逃於大澤、衣裘褐、食杼栗、入獸不亂群、入鳥不亂行、鳥獸不惡、而況人乎、

【大意】此節は前文の意を承けて、功を去れば患ひなきを論じて、痛く孔子を抑ゆ、實は偏固の學者を抑ゆるなり、

【通釋】孔子陳蔡の間に圍まれし時に、七日間火食とて物を烹て食ふことなかりしに、大公任と云ふ人往きて之を弔慰して曰く、足下は幾んど死に近きなりと、孔子曰く如何にもと、太公任曰く足下は死することを惡まるゝやと、孔子曰く如何にもと、太公任が曰く吾れ試に不死の道を語らん、東海に鳥あり其の名を意怠と云ふ、翂々翐々として奮ひ飛ぶこと能はざるが故に、飛翔する時は必ず仲間を引き連れ、敢て先づ飛ばず、棲む時は必ず其の脅翼を收めて群と共に棲み、敢て後るゝことを爲さず、食ふ時は敢て他に先たずして謙讓を爲し、嘗むるときは必ず其の棄て餘りを取りて嘗むるが故に其の行列に斥けられずして、群と共にし、各々人家に依りて外人も遂に害することを得ず、是を以て患を免るゝを得るなり、夫れ直ぐなる木は第一に伐らる、美材にして用多きが故なり、甘水の井戸は先づ竭くるは、飲む人の多きが故に然るなり、吾意ふに子も亦知を飾りて愚人等を驚かし、身を修めて他人の汙行を昭かにし、著るしく世人の目に觸るゝが故に此の患ひに遇ふならん、吾れ之を大成の人に聞くに、道德を大成したる人は、世間一樣の人にも曰く、己自ら其の才能を矜る者は必らず人に排斥せられて功なしと、功の成りて退かざるときは必らず失敗し、名聲顯はれて善く光を韜まざるときは必らず虧損す、誰れか能く功と名を與ふる者ぞ、大道を備ふる聖人に非らざれば能はざるなり、天に晝夜四時あれども默して之を運行し、嘗て其の道を明かにせざるが如く、志を得て道を行ふに至りても、其の功名を以て伐ることなく、其の心を純一にし其の行を平常にして、狂者の無知なるが如く、門を閉ぢ車を謝して王侯に事へずして功名に意を留めざるなり、其の故に吾より人を責むることをも爲さず、又

〔儻乎其怠疑〕儻は無慮なり、怠は退なり、狐疑思慮の類一切なしとの意、〔萃乎芒乎云々〕萃は聚なり、物の萃聚芒然として物の去來を知らざるの謂ひなり、又迎送をも爲さざるなり、各其の物に任せ、芒昧恍忽心無的にして、其の迎送に隨ひ物の往來に任すなり、〔因其自窮〕其とは外物を謂ふ、卽ち百姓を指す、「覆蒙」に曰く因其力之自窮、不强其所不堪也と、〔而況有大塗者乎〕塗は道なり、「義海」に曰く因其自窮、使各盡其情而已、吾能止此、而上下二懸猶足以不擾而辨、況懷大道於身者乎、蓋其謙辭也と、「宣注」に曰く賦斂且然、況處天下有大通之塗者乎　其順應可知已、

孔子圍於陳蔡之閒、七日不火食、大公任往弔之曰、子幾死乎、曰、然、子惡死乎、曰、然、任曰、予嘗言不死之道、東海有鳥焉、名曰意怠、其爲鳥也、翂翂翐翐而似無能、引援而飛、迫脅而棲、進不敢爲前、退不敢爲後、食不敢先嘗、必取其緒、是故其行列不斥、而外人卒不得害、是以免於患、直木先伐、甘井先竭、子其意者飾知以驚愚、修身以明汙、昭昭乎如揭日月而行、故不免也、昔吾聞之大成之人曰、自伐者無功、功成者墮、名成者虧、孰能去功與名、而還與衆人、道流而不明居、得行而不名處、純純常常、乃比於狂、削迹捐勢、不爲功名、是故無責於人、人亦無責焉、至

【大意】己を虚するの句を承けて、人臣に託して己を一にすれば重斂も病と爲さゞるを論じ來りて、初段の意を證す、○北宮奢の云ふ所は卽ち己を虚するの道なり、一の間敢て設くるなきなり、とは是れ己を虚するの精神精髓の語なり、所謂る大塗も又豈に一の間の外に在らんや、

【通釋】衞國の北宮奢と云ふ臣、衞の靈公の爲に厚く賦斂卽ち年貢運上を取り立て、其の金銀にて鐘を鑄造して、壇を郭門の外に造り、三月にして漸く上下の縣とて鐘を懸ける架を落成したり、其の時王子の慶忌と云ふ人之を見て、北宮奢に問ひて曰く、足下如何なる方術を以て之を設け爲したるやと、奢答へ曰く、唯々心意を一にするの外、敢て他術を設けたるに非ず奢之を聞く既に彫り既に琢きて、華を去りて素朴の本性を用ふと、今吾は侗乎と無情にして其の淳朴に任せ一も識る所なく儻乎と思慮もなくして狐疑を怠めて萃乎芒乎として物の聚り生じて無心なるが如く、來去は一切彼の外物に任せて迭迎もなく、來者禁ぜず、去者止めずして、侗乎其無識の意に叶ひ、其の彊梁とて頑强なるものは之に任せて逆らはず、其の曲傅とて柔順なるも亦之に任せ從ひ、儻乎其怠疑の意に叶ひ、彼れ自ら力盡くれば、自ら窮し止むに任せて、吾よりは因りて敢て逼り强ひず、此の如く一切外物を以て吾が心を動さゞるが故に、我の精神毫も挫け損ずるなし、今吾輩の如き俗物が區々たる賦斂の事すら自然の道に順應すれば、其の效功以上の如くなるに况して大道を備ふるものに在りては其の行爲の自然に順應するの當然なるは猶更の事也と、

【解義】〔北宮奢〕は衞の大夫にて、北宮に居り、因りて以て號と爲し、奢は其の名なり、〔以爲鍾爲壇乎郭門之外〕鐘は樂器なり、鐘を造れば先づ祭を設くべし、壇を爲す所以なり、〔成上下之縣〕上下は八音を調へ備ふるが故に、縣と曰ふ、縣とは架を設け、鐘を懸く、上下各六卽編鐘なり、三月にして成るとは其の速なるを言ふなり、〔王子慶忌〕は王族なり、周の大夫、疑ふらくは衞に仕ふるもの、其の簡速を怪みて之を問ふなり、〔一之間無敢設〕泊然一を抱く耳、敢て假設以て事を益すにあらざるなり、卽ち一毫の法術も敢て設けざるの意にて、此段の眼目なり、〔侗乎其無識〕侗乎は無情の貌にて、其の淳朴に任ずる耳、

り、〔建德之國〕魯を去る旣に遙か、無爲の道德國の假名なり、〔而蹈乎大方〕方は道なり、各其の本步を恣にして、人々自ら其の道を蹈めば、萬方得ざるなく亦た大ならずや、〔猖狂妄行〕猖狂とは無心なり、妄行は跡を泯じて能く大方の道を得るなり、〔吾願君去國捐俗與道相輔而行〕捐は棄つるなり、俗を棄てゝ無爲至道と相輔導して行くなり、〔君曰彼其道遠而險云々〕迷と悟と性を殊にし、故を以て魯越の隔てを致す、〔以爲君車〕形は物と夷らぎ心は物と化す、斯れ物に寄せて以て自ら載るなり、〔君曰彼其道幽遠〕未だ獨化を體せず、物俗を忘るゝ能ざればなり、〔雖無糧而乃足〕所謂る足るを知れば、足らざる所なし、〔君其涉於江而浮於海〕江は智の謂なり、海は道の謂なり、卽ち上善の江を涉りて大道の海に遊ぶを謂ふ、〔送君者皆自崖而反〕君の欲絕ゆれば、民皆反りて其の分を守るなり、君の行を送りて道德の鄕に至り、民其の眞に反りて自ら其素分を守るの謂なり、〔君自此遠矣〕超然として萬物の上に獨立し、君此より情高く道德元遠なり、〔見有於人者憂〕人の役用する所となりて、魯を忘るゝ能はず、故を以て鬼を敬し、賢を尊び、人に矜り、衆を恤み、民の驅役と爲る、安ぞ憂患にあらざらんや、〔遊於大莫之國〕大莫は大無なり、天下能く之を雜ゆることなきの喩となす、〔雖有惼心之人不怒〕褊狹にして急なる人も怒らざるは船の虛なるに由るなり、

北宮奢爲衞靈公賦斂以爲鐘、爲壇乎郭門之外、三月而成上下之縣、王子慶忌見而問焉曰、子何術之設、奢曰、一之間、無敢設也、奢聞之、既彫既琢、復歸於朴、侗乎其無識、儻乎其怠疑、萃乎芒乎、其送往而迎來、來者勿禁、往者勿止、從其彊梁、隨其曲傅、因其自窮、故朝夕賦斂、而毫毛不挫、而況有大塗者乎、

り、人に有せられ、卽ち衆人に望を囑せられて君主たる者は亦之に相當たるの憂あり、故に古への聖主堯帝は天下の主たれども、其君たるを忘れて人を有せず、亦其人民に相忘れられて人に有せられず、吾願はくは君も亦堯に倣ひて君の累と憂とを除き大道に遊ばんことを、尙又譬を設けて重ねて說かんに、今兩舟相竝びて河を渡るに一つの空船あり、來りて衝突するときは如何程短慮なる腹立易き人も更に怒るなし然も一人の人ありて船を外に向け又は內に向けと呼びて一呼聞こえず、二三呼に及びて尙聞こえずんば、必ず惡口雜言を以て之に加へん、是れ他なし、向や怒らずして今や怒り、向や虛心にして今や心の中に實物あり、卽ち無心と故意との相違あればなり、然れば人能く己を虛にして以て世に遊べば孰れか能く之を害するものあらんや、

【解義】〔市南宜僚〕姓は熊名は宜僚と云ふ人にて、市南に居り、因りて號と爲すなり、按ずるに左傳に云ふ市南有熊宜僚楚人也と、〔吾學先王之道修先君之業吾敬鬼尊賢〕先王とは周の王季文王の道を謂ひ、先君は魯の先祖周公及伯禽を謂ふなり、〔君之除患之術淺矣〕其の身を有して其國土に矜り、故に憂懷萬端、鬼神を敬ひ賢者を尊ぶも患慮愈〻深し、〔無須臾離居〕兪樾曰く「崔本」に離の字なし、居の字を以て上句に連ねて讀むべし、「呂覽」の愼人篇に胼胝不居とあり高注に居を訓して止と爲せり、是れ居と止と同義たるを證すべし、無須臾止也は正に上句行の字と相對して義を成す、學者居字の旨に達せず、「中庸」の不可須臾離の文に習ひて、遂に妄に離の字を加へ、居の字下に屬して讀むは之を失ふと、亦以て一說とすべし、〔豐狐文豹〕豐は大なり、文章の豐美毛衣の悅澤とを以ての故に人の爲めに利益となるを謂ふなり、〔棲於山林伏嵓穴靜也云々〕靜は靜居なり、戒は愼なり、隱は痛なり、約は窮なり、胥は皆なり飢渴するも斟酌して相共に江湖の邊に食を求むるなり、〔今魯國獨非君之皮邪〕君之皮とは魯君の災を招く具たるを謂ふ、上文を承け正喩混說す、韓退之の送溫處士序に東都固士大夫之冀北也の語亦此と同一筆法、〔吾願君刳形云々〕形を刳くは、身を忘るゝなり、皮を去るは國土を忘るゝなり、灑心とは智を忘れ貪を息めて、無人の野卽ち道德の鄕に遊ぶを謂ふな

君には一身を忘れ、國土を忘れ、智と欲とを忘れて、然る後ち道德の鄕に遊び給はんことを、果して然るときは君の皮毛とも申すべき災の媒介物は取り除かれて安全ならん、是れ君が禍を除く術たるべし、然るに君は態々此より災に近くことを爲して、鬼神を敬し賢者を尊ぶとは豈に迂濶千萬ならずや、さて此より無人の鄕とは如何なる處を指すかを云はん、南越の地方に建德の國と名くる一邑がありて、其の人民は愚直にして質朴、眞實に私心少く、利慾寡し既に自己の私心無きが故に唯々働きて而かも別に貯藏することを知らず、又人我の差別無きが故に、他人に物を與へて而かも別に其の報酬を求めず、近隣交誼上の往來もなく、義理分別の智慧も無く、往來交際の禮も無く猖狂妄行とて我が思ふ儘に爲し而かも自然に道德に適ひ、生きて樂み死して葬り、即ち生死共に何れに於ても不可なき也、吾願くは君の魯國を去り、世俗を捐て時に安んじ順に處りて、哀樂と云ふを知らざる卽ち至樂無爲の至道と相助け合ひて行ふ國なりと魯君曰く、彼の建德の國は其の道遠くして險阻にして、又江山の隔てあり、我には舟車の便利なければ奈何なすべきかと、市南子曰く、高貴の形容を恃みて倨るなくんば圓轉すべく、滯り守ることなくんば物之を阻つることなきが故に、之を君の乘り給ふ車として行かるべしと、魯君又曰く、建德の國に行くべき道は幽遠にして人の住めるものなしと、然らば吾れ行くも誰れと共に比隣をなさん、且吾れに糧食もなし何によりて彼の國に至るを得ん、市南子曰く足ることを知れば足らざるはなし、君の費を少くし、君の慾心を寡くせば、糧食なくとも別に不自由を感ぜずして足るべし、君は江山の險を仰せらるゝも、君彼の江を涉り越えて大海に浮び出で渺茫たる有樣を望んで其の際崖を見ず、愈進む程愈陸地と遠ざかりて其の窮極を知らざる時は、君を見送りし者は皆岸より後へ引き戻りて到底君に隨ひ行く者なし、君は此より世人と相遠ざかりて始めて無人の地に到るべし、其れと同理にて、君は私智私心を去り世の利慾と遠かりて虛無恬澹の地に立ち給へば、自然の大道に相稱うて聖人と爲り給はん、されば此の江山の險ぞ君が國を去り俗を捐つるの便路なり、故に人を有ち卽ち衆人の心を得て、國を有つものは國を有つの累であ

此遠矣、故有人者累、見有於人者憂、故堯非有人、非見有於人也、吾願去君之累、除君之憂、而獨與道遊於大莫之國、方舟而濟於河、有虛船來觸舟、雖有惼心之人不怒、有一人在其上、則呼張歙之、一呼而不聞、於是三呼邪、則必以惡聲隨之、向也不怒而今也怒者、向也虛而今也實也、人能虛己以遊世、其孰能害之、

【大意】此の段は魯侯と市南宜僚と問答の言に託して前段の道德に遊ぶものは累ひなきの義を證す、〇建德の國、大莫の國等の字面は皆な道德の鄕なり、其の要訣は唯己を虛にするに在る耳、行文淸機飄渺連如として人をして塵心頓に盡きしむ、

【通釋】市南の宜僚と云ふ人あり、魯侯に見えたる時に、魯侯憂ふる顏色ありしに、市南子は君憂色あるは何故なりやと問ひたり、魯侯答へて曰く吾れは先王の道を學び先代の君の遺業を修め、吾又鬼神を敬し賢人を尊びて懇切に之を行ひ、須臾も之と離るゝことなきに、依然として患を免るゝこと能はず、故に憂ふるなり、市南子が曰ふに、君が患を除き去らんとするの術何ぞ淺きや、夫れ善く肥えたる大狐及び文彩斑然たる豹は、山林に棲み嵓穴の間に隱れ伏すは卽ち靜なり、夜步行して晝は潛み隱れ居るは、卽ち自ら不虞の變を戒むるなり、饑ゑ渴きて隱み約むと雖ども、猶ほ江湖の上に人と相ひ遠ざかりて食物を求むるは、卽ち場合を斟酌して計略を定むるなり、如此一身の防禦に注意してさへ網羅罝罘の患を免れざるは、豈に他の罪ありて然らん、直に是れ彼の立派なる皮毛がありて此の災を取れるなり、只今君は此の魯國のあるが爲めに種々樣々に心を苦勞し給へるが、是れ魯の國土は恰當君の皮色にあらずや、願くは

吾敬鬼尊賢、親而行之、無須臾離居、然不免於患、吾是以憂、市南子曰、君之除患之術淺矣、夫豐狐文豹、棲於山林、伏於巖穴、靜也、夜行晝居、戒也、雖饑渴隱約、猶且胥疏於江湖之上、而求食焉、定也、然且不免於罔羅機辟之患、是何罪之有哉、其皮爲之災也、今魯國獨非君之皮邪、吾願君刳形去皮、洒心去欲、而遊於無人之野、南越有邑焉、名爲建德之國、其民愚而朴、少私而寡欲、知作而不知藏、與而不

求其報、不知義之所適、不知禮之所將、猖狂妄行、而蹈乎大方、其生可樂、其死可葬、吾願君去國捐俗、與道相輔而行、君曰、彼其道遠而險、又有江山、我無舟車、奈何、市南子曰、君無形倨、無留居、以爲君車、君曰、彼其道幽遠而無人、吾誰與爲鄰、吾無糧我無食、安得而至焉、市南子曰、少君之費、寡君之欲、雖無糧而乃足、君其涉於江而浮於海、望之而不見其崖、愈往而不知其所窮、送君者皆自崖而反、君自

ることなくんば、得て累らはさるべきことなきなり、是れ上古の聖王たる神農黄帝の法則なり、然るに夫の萬物の情、人類の傳習する所に依れば然らず、合へは離され、成れば毀られ、圭角あれば忽ち挫き折られ、尊ければ彼是れと非議せられ、爲すことあれば虧き損せられ、賢なれば人の爲めに謀られ、排斥を蒙り不肖なれば欺かれ侮らる、然れば材と不材と均しく其の患を免るゝこと能はざるなり、悲むべきことならずや、弟子等は善く之を心に記憶せよと云ふなり、

【解義】〔舍故人之家〕舍は息なり、周禮に舍は休沐の處なり、左傳に凡師の一宿爲舍とあり、〔命豎子殺雁而烹之〕豎子は童僕なり烹は煮なり、王念孫曰く、此の烹字はもと亨に作る、讀で享と爲す、烹之とは莊子を享するを謂ふ、故人莊子の來るを喜び故に雁を殺して之を享するなり、享は饗と通ず、呂氏春秋の必己篇に使豎子殺雁饗之に作る、是れ其の證なり、古書に享の字を亨に作る、故に釋文誤り讀で烹と爲し、今本遂に亨を改めて烹となすと今其の說を用ふ、〔若夫乘道德而浮遊則不然〕道德は玄道至德を謂ふ、浮遊は一處に停滯せずして能く推移すること乃ち逍遙遊の義なり、既に材と不材との二偏を忘れ、又た中一をも遺れ、能く世に浮遊虛通するなり、〔與時俱化〕變化なり、此れ中を忘るゝなり、既に二偏を忘れ、又中一をも忘れ、又玄の玄をも忘るゝなり、〔一上一下以和爲量〕至人は能く時に隨ひ、上下和同を以て度量と爲すの意、〔若夫萬物云々〕情は實なり、萬物之情とは物の實際的を謂ふ、倫は類なり「覆蒙」には萬物之貴に作る、釋して曰く萬物之所貴重と姑く一說として錄す、〔合則離成則毀〕「覆蒙」に曰く交合則從而離之、功成則從而毀之と、〔其唯道德之鄉乎〕能く中平の理を用ひ其の道德の鄉たるを謂ふなり、〔不肖則欺〕合則離より以下七句材不材を論ぜず、皆患を免れざるを謂ふ、而して不材を言ふ者は不肖則欺の一句のみ、亦以て材の害を受くること不材より多きを見るべしと、藤澤東畡は云へり、

市南宜僚見魯侯、魯侯有憂色、市南子曰、君有憂色何也、魯侯曰、吾學先王之道、修先君之業、

虧、賢則謀、不肖則欺、胡可得而必乎哉、悲夫、弟子志之、其惟道德之鄉乎、

【大意】 此段は道德に遊ぶものは累ひなきの義を論じて、逐段來り叙し、自然の章法を爲して、以下兩段は皆な此段の證なり、○内篇の人間世は不材の用を說くこと至詳にして且悉せり、此は不材の累を受くるより一段の議論を出して道德に歸納し、自ら駁し自ら解きて言下遺蘊なし、○材は有用を以て傷を致す、不材は無用を以て傷を致す、材と不材は兩界の如く俱に傷を免れず、唯道德は材不材の迹、俱に化して萬物の上に超然たれば累何ぞ至らん、嗚呼斯の鄉や、農黃以後其れ再見せず、

【通釋】 莊子山中に行き大木の枝葉繁茂せるものを見たる時、木を伐る人其の木の傍に止りて敢て木を取らざるが故に、莊子怪みて其の故を問ひたり、伐木の人答へて曰く、之を伐るも實用に立ち難しと、莊子歎息して曰く此の大木や不材なるが故に、却りて其の天年の壽を全うし得るなりと、莊子山より出でゝ故舊の知人の家に宿りたるに、故人は大に喜悅して家僮に命じて、鴈を殺し烹て之を饗應せんと欲せし時、家僮伺うて曰く、其の一羽は能く鳴けども、一羽は鳴くこと能はず、何れを殺すべきかと、主人の曰く鳴く能はざるものを殺せと、其の明日、弟子等莊子に問ふに、昨日山中の大木は不材無用の爲めに其の天年を終ふるを得、今主人の鴈は不材鳴く能はざるが故に死せり、先生何れを善しとなし給ふやと、莊子大笑して曰く、予は材と不材の間に居らんと思へども、此れは未だ物の爲めに物とせらるゝを免れず、善きに似て實は非なり、身を道德の上に置きて世の外に浮遊し、世俗の中に溺れず、此れ即ち世の中に在りて實は世の外に出づるものにて、譽れもなく訾りもなく、一龍一蛇とて宛かも龍蛇の如く出入屈伸自在なり、時に乘じて變化定りなき、肯て專ら主として爲すことなく、一上或は龍の天上に飛ぶ如く、一下或は蛇となりて穴に潛み、太和の道を以て度量となし、我が心を萬物の祖なる衆父の父たる地位即ち道の根本に遊ばし、物を物とし使うて、物の爲めに物とし使はる

山木第二十

此篇は人に敎ふるに、世に處し患を免るゝの道を說く、唯其の大意は道德に放任して累ひなきに在り、然れども道德を說く、總て是れ一片の淸虛を旨とするなり、故に內篇人間世と參看すれば思ひ半に過ぎん、

莊子行於山中、見大木枝葉盛茂、伐木者止其旁、而不取也、問其故、曰、無所可用、莊子曰、此木以不材得終其天年、莊子出於山、舍於故人之家、故人喜、命豎子殺雁而烹之、豎子請曰、其一能鳴、其一不能鳴、請奚殺、主人曰、殺不能鳴者、明日弟子問於莊子曰、昨日山中之木、以不材得終其天年、今主人之鴈、以不材死、先生將何處、莊子笑曰、周將處夫材與不材之間、材與不材之間、似之而非也、故未免乎累、若夫乘道德而浮遊者、則不然、無譽無訾、一龍一蛇、與時俱化、而無肯專爲、一上一下、以和爲量、浮遊乎萬物之祖、物物而不物於物、則胡可得而累邪、此神農黃帝之法則也、若夫萬物之情、人倫之傳、則不然、合則離、成則毀、廉則挫、尊則議、有爲則

訓す、九竅は既に前篇に解せり、〔食之以委蛇〕陸樹芝曰く之をして從容自得して食せしむるなり 、又委蛇は「釋文」に李曰く大鳥は蛇を呑むと、司馬曰く委蛇は泥鰌なりと、兪樾曰く鳥を養ふ者未だ必らず食ましむるに蛇を以てするを聞かず、泥鰌も亦臆說たり、至樂篇に夫以鳥養養鳥者、宜棲之深林、游之壇陸、浮之江湖、食之鰌鰷、隨行列而止、委蛇而處とあり、然れば此の本文も亦當に食之以鰌鰷、委蛇而處と云ふべきを傳寫の際に闕文あるのみ、且委蛇而處と云へば、方に下文の則平陸而已矣と文義直屬す、若し而處の二字無くんば、下句便ち貫せずと、按ずるに兪說是なり、〔平陸則已〕平陸は平原なり曠野なり、陸樹芝曰く當に之を平原曠野に置くべく、之を朝廟に迎ふべからざるを言ふと、又一說に平陸は夷路と云ふ如し、乃ち平坦の路なりと、已は止と同じ、〔今休款啓寡聞之民也〕款は空なり、啓は開なり、空の開く如くにして所見の小なるを云ふなり、〔載鼷以車馬樂鴳以鐘鼓也〕鼷は小鼠なり、鴳は雀なり、乃ち之を譬ふれば孫休に告ぐるに、至人の德大道の深味を以てするは、宛も小鼠を載せるに大車を用ひ、雀を娯ましむるに韶樂を用ふる如く、却りて彼の驚きを招くや必せりと云ひ、以て其の彼に告げし言の大小輕重の序を失ひしを悔ゆとの意を示したるなり、

名言

達生之情者、不務生之所無以爲、達命之情者、不務知之所無奈何、

生之來、不能郤、其去、不能止、

其天守全、其神無郤、物奚自而入焉、

醉者之墜車、雖疾不死、骨節與人同、而犯害與人異、

復讐者不折鏌干、雖有忮心者、不怨飄瓦、

以瓦注者巧、以鉤注者憚、以黃金注者殙、

善養生者若牧羊然、視其後者而鞭之、

畏途者小殺一人、則父子兄弟相戒、必盛卒徒而後敢出焉、不亦知乎、人之所取畏者、衽席之上、飲食之間、而不知爲之戒、

工倕旋、而蓋規矩、指與物化、而不以心稽、

忘足履之適也、忘要帶之適也、知忘是非、心之適也、

獨修と事ふことを聞かずや、內は其の心を忘れ外は其の耳目を忘れて、視て視ず、聽いて聽かず、芒々然として世間塵垢の外に彷徨し、無事の業に逍遙任適す、是を爲して恃まず、長じて宰せずと云ふなり、今汝は私智を飾りて愚能の人を驚かし、己が身を修めて他人の汙を反映的に明かにし、恰も昭々乎として日月を揭げ示すが如く、人の耳目を聳動せり、さても以上の如きに管せず、汝ぢが形體を全うし、九竅を具有して、中道にて聾盲や跛蹇ともならず、人間竝の生活を遂げ得たるはまだしも幸福ならん、何ぞ天を怨むるの暇あらん、汝速に去るべしと、孫休出で去りたるに、扁子內に入りて坐し、暫らくして、天を仰ぎ歎息せり、弟子怪み問うて曰く、先生は何の故に歎息し給ふや、扁子曰く嚮きに孫休來りし時、吾之に告ぐるに至人の德を以てしたるに、吾れは休が其の道の大なるに驚きて、遂に惑に至らんことを恐るゝなりと、弟子曰く然らず、孫休が言ふ所是にして、先生の言ふ所非ならば、固より非は是を惑はすこと能はず、又孫休が言ふ所非にして先生の言ふ所是ならば彼れは固より惑うて來りたるを、先生之に敎へ給ひしことなれば、吾れに於て何の罪か之れあらんと、扁子曰く然らざるなり、昔日鳥あり云々、（以下前の至樂篇の條に同じければ略し但稍〻異れる字句は解義に釋す）

【解義】〔踵門詫子扁慶子〕踵は至るなり、詫は告ぐるなり、子扁慶子は扁は姓にして子慶は名、魯の賢人にて孫休の師なり、故に特に姓上に子を加へて子扁慶子と曰ふ其の例は前篇列子を子列子と曰へると同じ、〔子獨不聞夫至人之自行邪〕成玄英曰く至人は行を立つる虛遠淸高なるが故に、內は五藏の肝膽を忘れ、外は六根の耳目を忘れ、蕩然空靜にて纖介を胸中に止むるなしと、〔芒然彷徨―逍遙乎無事之業〕芒然は無心の貌なり、玄英曰く彷徨は是れ縱放の義逍遙は任適の稱乃ち染に處りて染らず、世塵の表に縱放して、物務の中に任適するなり、〔是謂爲而不恃長而不宰〕宣注に曰く性に率うて、能を恃まず、物を長じて功に居らずと、王先謙曰く此の語老子に出づと、〔今汝飾知云々〕此の三語又山木篇に出づ、乃ち己が智能を炫し矜りて、自ら衆人と別異にするを謂ふ、〔汝得全而形軀云々〕而は爾と同じ、「ナンヂ」と

孫子出、扁子入坐、有間、仰天而歎、弟子問曰、先生何爲歎乎、扁子曰、向者休來、吾告之以至人之德、吾恐其驚而遂至於惑也、弟子曰、不然、孫子之所言、是邪、先生之所言非邪、非固不能惑是、孫子所言非邪、先生所言是邪、彼固惑而來矣、又奚罪焉、扁子曰、不然、昔日有鳥止於魯郊、魯君說之、爲具太牢以饗之、奏九韶以樂之、鳥乃始憂悲眩視、不敢飲食、此之謂以己養養鳥也、若夫以鳥養養鳥者、宜棲之深林、浮之江湖、食之以委蛇、則平陸而已矣、今休欵啓寡聞之民也、吾告以至人之德、譬之若載鼷以車馬、樂鴳以鐘鼓也、彼又惡能無驚乎哉、

【大意】　前文の適の字を承けて、至人にして始めて生を全うするの道を云ふなり、即ち小人に告ぐるに至德を以てする勿れ、唯生命の情を達するもの丶み能く行ふものなりとの意にて、初段の總證とす、

【通釋】　孫休と云ふ人あり、子扁慶子の門に至りて告げて曰く、我れ鄕里に居るとき品行方正にて、如何なる難事に臨みても勇氣なしと云はれしことなし、然るに原野に耕作すれば豐年に遇はず、君に事ふれば世に遇はずして用ひられず、鄕里の人には擯斥せられ、州部よりは逐ひ出され、不幸と云ふ不幸打續けり、抑も我は天に對し如何なる罪ありて、斯かる運命に遇ふことぞやと、扁子曰く、足下は獨り夫の至人の

たるなり、適は恰度頃合のことにて、乃ち己が足の有無を心に覺えざるは本と履ける履が、己が足に恰度頃合なればなり、若し聊かにても大小あれば決して足に氣を牽かれ忘るゝ能はずとなり、〔忘腰帶之適也〕文例前句と同斷、陸樹芝曰く、忘足忘腰の二句、是れ履帶の適を借りて心適を襯出すと、〔知忘是非心之適也〕知は智と同じ、心智に是非の觀念あればこそ心は寧一ならず、若し是非を忘れて妄念を一掃すれば、心は自然に恰度善き頃合に落ち着くを謂ふ、藤澤東畡曰く知の字下の七字を管す、此の説に依れば是非を忘るは、心の適なるを知ると讀みて乃ち足と腰との理を以て推すときは、心も亦同じく然るを知るとなり、〔事會之適也〕成玄英曰く外智凝寂として內心移らず、物境虛空にて、外は事に從はず、乃ち眞道所在に適すと、〔始乎適而未嘗不適者忘適之適也〕始乎適とは其の始めは猶ほ自ら適てふ觀念を心に抱くを謂ふ、未嘗不適とは、處として物として皆自然に心に適して復た其の適たるを自覺せざるなり、忘適之適とは眞正の適なるを謂ふ、

有孫休者、踵門而詫子扁慶子曰、休居鄉、不見謂不修、臨難不見謂不勇、然而田原不遇歲、事君不遇世、賓於鄉里、逐於州部、則胡罪乎天哉、休惡遇此命也、扁子曰、子獨不聞夫至人之自行邪、忘其肝膽、遺其耳目、芒然彷徨乎塵垢之外、逍遙乎無事之業、是謂爲而不恃、長而不宰、今汝飾知以驚愚、修身以明汙、昭昭乎若揭日月而行也、汝得全而形軀、具而九竅、無中道夭於聾盲跛蹇、而比於人數、亦幸矣、又何暇乎天之怨哉、子往矣、

忘足履之適也、忘要帶之適也、知忘是非心之適也、不內變不外從事、會之適也、始乎適而未嘗不適者、忘適之適也、

【大意】此の節は足腰等を忘るは皆自然にて、適を忘るの適なり、故に生を養ふものは、物を忘れて以て天の自然を全うするを明らかにす、

【通釋】工倕といふ名工は手を旋ぐらして圓形を引き方形を作ること、其の巧みなること規矩を用ふるよりも巧妙にて、倕の指と外の物との相得て一致すること自然造化の如く、心聊かも工夫を費して始めて之に合ふにあらざるなり、今夫れ歩行する時に自己の足あるを覺えざるは履の善く足に適ふに由るなり、又帶を締めて居ることを忘るゝは、帶が善く腰に適ふが故なり、其れと同理にて凡て物事に對し心が適せざる故に、是非も起るなれ、苟も心が其の事物に適すれば是も非も忘れて起らざるなり、されば、心智が是非を忘るゝは、是れ心が適樂すればなり、內心が變じ移らず外事に從ひ、拘束せられざるは、善く其の境遇に適し安んずればなり、されば心に適あるを知るは、已に適てふ觀念が心中に滯り在りて尙ほ眞に適せざるものなり、唯全く適てふ觀念をも忘れて仕舞つて始めて眞の至適に至るなり、果して然らば自然の化育に適うて往くとして、物として適せざるものなしとなり、

【解義】〔工倕旋而蓋規矩〕倕は堯時の工人なり、旋は運旋なり、蓋は掩なり、工倕資性極めて巧なれば、唯指先を旋らしながら、自然に方圓の規矩に適ひて、毫も間隙なく、宛かも規矩の上を掩へるが如しとなり、又蓋は掩過なり、其の巧妙なる規矩に過ぐるを謂ふとの說もあり、〔不以心稽〕稽は留なり、心に留めざるを謂ふ、又一說に稽は考なり、手指と物と自然に相得て、恰も造化の働きの如く、心の稽考を要せざるなりと、〔故其靈臺一而不桎〕靈臺は神靈の舍る場處と云へる意味にて卽ち人の心を謂ふ、一は凝一なり、內に專らにして外に散せざるを謂ふ、桎は桎梏なり、卽不桎とは物に牽束せられざるを謂ふ、〔忘足履之適也〕履之適とは適履と同義にて修辭上倒語を用ゐ

也、使之鉤百而反、顏闔遇之、入見曰、稷之馬、將敗、公密而不應、少焉果敗而反、公曰、子何以知之、曰其馬力竭矣、而猶求焉、故曰敗、

【大意】此節は天を以て天に合するの反にて、世の累ひ窮りなく、形骸勞して精神虧くるの喩となす、

【通釋】東野稷は馬を御するの達人たるを以て、魯の莊公に見ゆ、さて其の馬を御するや進退の法規に合ひ、左旋右旋の法規に中りて、誠に名人なり、是に於て莊公は其の進退抑揚の巧妙は、組繡の織文も及ぶべきにあらずと嘆賞せり、因りて東野稷をして鉤曲すること百回にして復た其の跡に反らしむ、顏闔途中にて之に行遇ひ入りて莊公に見えて曰く、稷の御する馬は將に失敗に至らんと、莊公信ぜず、一言の答へもあらず、少らくして果して敗れて反れり、莊公顏闔に向つて汝は如何にして之を知るかと、顏闔曰く馬の力既に竭きたるに、尙ほ頻に馬の奔走を求むるが故に其の必らず敗るゝを知るなりと、

【解義】〔東野稷以御見莊公〕姓は東野名は稷善く馬を御するを以て、魯の莊公に事ふ、〔進退中繩〕左右旋轉が規の圓に合ひ、矩の方に叶ひ、進退抑揚が墨繩の直に中り、頗る視るべきなり、〔以爲文弗過也〕司馬彪曰く織組の文に過ぐるを謂ふ、王先謙曰く卽ち「詩」の執轡如組なり、此の說に依れば、御者として轡の使ひ方の巧妙なることを織組に譬へて謂へるなり、〔使之鉤百而反〕馬の旋回に任すること、鉤の曲るが如く、百度之に反りて其の跡に復す、〔顏闔遇之〕顏闔は魯の賢人なり、既に前に見ゆ、〔公密而不應〕密は默なり、莊公信ぜず、故に密默して應答せざるなり、〔曰其馬力竭矣云云〕過耗すれば敗るゝは唯に車馬のみにあらず、萬物皆然るを含みて云へるなり、

工倕旋而蓋規矩、指與物化、而不以心稽、故其靈臺一而不桎、

就するに及んで、見る人其の精巧なること、人造にあらず、殆ど鬼神の作かと疑ふに至る、時に魯の君之を見て問うて曰く、汝は如何なる術を以て之を造るかと、梓慶答ふるに臣は賤しき工人なれば、如何なる術もなし、然れども鐻を造らんとする時に元氣を費さず、必ず齋戒して氣全く、心中自然に靜なり、如此くする三日にて利欲を一切忘却して、又後五日には人の譽め非りや、巧拙を氣に留めず、名聞を忘るゝなり七日に至りて忽然不動の狀態になり、一身を忘却して無我の境に入る、是の時に方ては公朝を視るも無き如く、其の心専一にて外物の我が心を動かす物一朝消え失せ、因りて山林に分け入り、天性好木の形貌至りて精妙にして、鐻となすに堪へたるものを見分けて、巧を施し手を下し、其の木の自然の性に從ひ、寸毫も自然を離れず、人工を加ふると雖ども、天然の儘なる所以なりと、

【解義】〔梓慶削木爲鐻〕姓は梓、名は慶、魯の大匠なり、又梓は梓人とて官號なり、鐻は樂器にて夾鍾に似たるものなり、其の巧妙なる人工に類せず、見る人驚きて鬼神の作る所かと疑ふなり、〔輙然忘吾有四枝形體也〕輙然は不動の貌なり、齋潔既に久しく、情義清虛なり、是に至りて百體四肢一時に忘却して、輙然として不動なること枯木の如しとなり、〔其巧專而外骨消〕骨は滑と通じて亂るゝなり、內に巧の心を專にして、外に滑亂の事を除くなり、〔形質至矣然後成見鐻〕「宣穎」は觀天性を句とし、形軀至矣を句とし、然後成見鐻を句となして曰く、觀天性は木の生質を觀るなり、形軀至矣は本質の極めて鐻たるに合ふなり、然後成見鐻は如全鐻在目と、此に依れば本句の意は梓慶自ら未だ鐻の實物を成就せざれども、既に意匠中には現品として描き成せるとなり、今「通釋」は成疏に依りて解したれども宣說亦用ふべし、〔則以天合天器之所以疑神者其是與〕成玄英曰く機變人工を加ふると雖ども、木性の自然に因るが故に、天に合ふなり、又鐻の製作の微妙なること、鬼神の作と疑はるゝものは、木の天性に因り、其の自然に順ふが故に如此を得るなりと、

東野稷以御見莊公、進退中繩、左右旋中規、莊公以爲文弗過

子をして流に從うて之を救助せしむるなり、〔游於塘下〕塘は岸なり、既に水に安んず、故に髮を散して行きながら歌ひ自得遥々岸下に遨遊するなり、〔吾始乎故長乎性成乎命〕初め我れ陸に生じて、陸と故舊たり、長大にして水中に游泳し、習ひ性と成り、水に習ひ性を成して懼れ憚るなく、情を恣にし遂に自然の天に同じとなりと、〔與齊俱入與汨偕出〕湍の沸き旋ぐり、入ること礑心の轉ずる如きものを齊と云ふなり、回り復りて騰漫なるものを汨と云ふなり、王念孫曰く人臍は腹の中に居る故に、之を臍と曰ふ、臍は齊なりと、「宣注」に水の旋り入る處、臍に似たりと、汨は司馬曰く涌波なりと、既に水の自然に從ひ、天命に符す、故に出入齊汨共に懷に介せざるなり、以下通釋に同じければ略す、

梓慶削木爲鐻、鐻成、見者驚猶鬼神、魯侯見而問焉曰、子何術以爲焉、對曰臣工人、何術之有、雖然、有一焉、臣將爲鐻、未嘗敢以耗氣也、必齊以靜心、齊三日、而不敢懷慶賞爵祿、齊五日、不敢懷非譽巧拙、齊七日、輒然忘吾有四枝形體也、當是時也、無公朝、其巧專而外滑消、然後入山林、觀天性、形軀至矣、然後成見鐻、然後加手焉、不然則已、則以天合天、器之所以疑神者、其是與、

【大意】 前文の私を爲さずの意を承けて、名利と一身とを忘れ我れの天を以て天の天に合するを論じ來り、無情の木を削りて、猶ほ神に疑はしきの喩を引きて、前章の天と一なるの證となす、

【通釋】 梓慶が木を削りて鐻とて、鐘鼓等の樂器を懸くる架木にて其兩端に彫刻あるものを制造す、成

也、

【大意】 此節は前文操舟の節と頗る同じ、天に物を藏する時は、物傷くること能ざるの義を言ふなり、卽ち私なければ激水も尙ほ親むべきの義を論じて、初段の命の情を達するの證となす、

【通釋】 孔子が呂梁と云ふ處の水を見物したる時に其の縣水卽ち瀑布は三十仞もありて、水の激するによりて沫を飛ばすこと四十里の遠きに達するなり、故に黿や魚類も游泳すること能はざるの難場所なり然るに一男子の激流に游ぐを見たり、孔子は是れ溺に逢うて困苦するなりと思ひて、忽ち弟子に命じて流に隨うて之を救はしむ、彼の男子は數百間流れて水中より出て散髮の儘自得從容として行く行く歌ひて岸下に泰然たり、孔子怪みて問うて曰く、余は汝を鬼神かと思へば人なり、汝能く此の深水を游泳する道ありやと、答へて曰く更に道術なし、唯だ久しく游ぐが故に巧みに習ひ以て性とするのみなり、陵に生きて陵に安んずるは久しければなり、水中に成長して水に安んずるも游ぎ習ひて性となればなり、心に憚りなく慾情放任して遂に自然に同じく水渦の水と共に水中に沒し、湧き出る水と共に水面に出で水の性に任せて自己の勝手をなさざるなり、孔子重ねて其の意義を釋けと曰はれしに、彼は曰く、久しく水中に游泳して性となり、自然の天命に從ふのみ、豈に他に術あらんやと、蓋し人能く其の能くする所を得て之に任せば、天下に難事なし、無難を以て生涯を涉る是れ人生の道何れに往くも通ぜざるはなしとの寓意ならん、

【解義】 〔孔子觀於呂梁縣水三十仞〕 呂梁は水の名なり解同じからず、或は黃河縣絶の處に呂梁ありと、又は蒲州二百里の所に龍門あり、河水が瀑布となりて下ると、又宋の國彭城縣の呂梁なりと、八尺を仞と云ふ、〔黿鼉魚鼈〕黿は「オホガメ」と訓じ、鼉は「オホトカゲ」と訓ず、魚に似て脚あり、鼈は「ウミカメ」なり、此の水瀑布にて、波流激湍なるが故に、水族も泳ぐ能はず、況や陸上に生ずる人をやの意なり、〔以爲有苦而欲死使弟子並流而拯之〕 並は傍なり、「ソフ」と訓ず、拯は救なり、激湍沸涌して人の能く游ぐべき所にあらざるなり、忽然一人の游ぐを見る、困苦することありて投身して死せんとするならんと思ひて弟

目なり)、

【解義】〔紀渻子爲王養鬪雞〕「成疏」に依れば、姓は紀名は渻子、王は齊王を指す、兪樾は「列子」の黄帝篇に紀渻子爲周宣王養鬪雞とあるを引きて、齊王に非らずと爲せり、〔十日而問鷄已乎〕「列子」の黄帝篇には雞已の間に可鬪の二字あり、據りて本文を補ふべし、〔方虛憍而恃氣〕憍は高なり、驕矜なり、實なくして驕る故に、虛憍と曰ふ、〔猶應嚮景〕他鷄の聲を聞き、影を見れば、猶ほ心を動かすを謂ふ、〔猶疾視而盛氣〕鬪はざるも鬪はんと欲する氣未だ消せず、顧み視ること速く、意氣强盛にして、心神尙ほ動くが故に堪ずとなり、〔曰幾矣〕幾は近なり、其の鬪ふ可きに近きを謂ふ、〔鷄雖有鳴者已無變〕鷄は他雞を指す、已無變矣は此の雞爲めに變動せざるなり、「發蒙」に曰く不應影響矣と、〔望之似木雞矣〕神識安閑として形容審定なるが故に、遙に之を望むもの木雞の如く動かず驚かず、其の德全く具りて他人の雞之を見て反りて走るとなり、

孔子觀於呂梁、縣水三十仞、流沫四十里、黿鼉魚鼈之所不能游也、見一丈夫游之、以爲有苦而欲死也、使弟子並流而拯之、數百步而出、被髮行歌、而游於塘下、孔子從而問焉曰、吾以子爲鬼、察子則人也、請問蹈水有道乎、曰亡、吾無道、吾始乎故、長乎性、成乎命、與齊俱入、與汨俱出、從水之道、而不爲私焉、此吾所以蹈之也、孔子曰、何謂始乎故、長乎性、成乎命、曰、吾生於陵而安於陵、故也、長於水而安於水、性也、不知吾所以然、而然命

云ふ、神の名、〔水有罔象〕罔象は水神の名、司馬曰く狀小兒の如し、赤黑の色赤爪大耳にして、長臂と、〔丘有峷〕峷一に莘に作る、狀狗の如し、角あり文身五采ありと、〔山有夔〕又曰く夔は、狀鼓の如くにして一足ありと、〔野有彷徨〕又曰く方皇は狀蛇の如し、兩頭にして五采文ありと、沈有履より以下蓋し各處に鬼神ありて別に怪むに足らざるを謂ふ、其の形狀の如きは後人の誕說深く信ずるに足らず、姑く錄して考に供すのみ、〔見之者殆乎霸〕殆は近なり「發蒙」に曰く桓公始疑爲妖、故懼而成疾、皇子以一霸字、微言挑動、是以與之不終日而不知病之去也と〔囅然而笑〕囅は音軫大に笑ふ貌、

紀消子爲王養鬪鷄、十日而問、鷄可鬪已乎、曰未也、方虛憍而恃氣、十日又問、曰未也、猶應嚮景、十日又問、曰未也、猶疾視而盛氣、十日又問曰幾矣、鷄雖有鳴者、已無變矣、望之似木雞矣、其德全矣、異鷄無敢應者、反走矣、

【大意】此は自傷の前文を承けて、神を藏し、氣を守るの喩となす、卽ち前節の反論にて、全德の鷄を論じ來りて、遙に上文の形精不虧の證となす、

【通釋】紀消子が王の爲めに蹴合鷄を養ひし時に、鷄は既に全く蹴合ひに用ふべきかと問ふ、曰く未だ氣荒らく、敵の來るを待ち求むるなりと、其の後十日にして又問ふ、又曰く鷄の聲を聞いたり又形を視れば直ちに應ぜんとす、此れは氣少しく內に在りと雖ども猶ほ外に盛なり、又十日の後に至りて問ふ、答へて曰く敵の至るを見れば飛び掛からんとす、此は氣漸く內に在るも猶或は敵に應ぜんとす、又十日を經て問ふ、曰く最早道に幾し、他の鷄が來りて鳴きても聞かざる如く、更に泰然として驚かず、動かず、其の形木造の鷄の如く、其神全く、其の德具れり、他の鷄之を見ば逃走せんと（蓋し天下に敵なし此れ本節の眼

似て黑衣、赤爪、大耳、長臂の鬼あり、丘に狀、狗の如く角を生じ、文身五采の鬼あり、其の名を峷と云ふ、山には夔あり、其の狀鼓に似て、一足あり、原野に其の狀蛇の如く兩頭五采の鬼あり、又澤中に委蛇と云へる神ありと、然るに初め桓公鬼を見たるは本と澤中にありたれば問うて曰く、其の委蛇は如何なる狀なるか、敎を承け玉はり度しと、告敖對へて曰く委蛇は其の大さは車轂の如く、其の長さは車轅の如くにして、紫衣を被り、朱冠を戴けり、其の性質たるや、雷車の如き大聲を聞くを惡み、若し之を聞くときは、其の首を擧げて立つ者なるが、若し之を見る者あらば多分天下の覇者たらんと承り居れりと、桓公其の言を聞き囅然と嬉しき笑ひを漏らして曰く、此の委蛇なる神は卽ち寡人が今度新に見たる神なりと、是に於て衣冠を正し整へて、告敖と向ひ坐し、終日ならざるに其の病は何の間にか快愈したり、

【解義】〔曰仲父何見〕仲父は管仲を謂ふ、管仲名は夷吾にして、仲は其の字なり、父は古へは字の下に加へて、呼ぶ辭なり、音は「ホ」字亦甫に作る、〔公反誒詒爲病〕誒詒は是れ懈怠倦失魂の狀態卽ち失心の模樣なり、〔皇子告敖〕姓は皇子字は告敖、齊の賢人なり、〔公則自傷〕公の妄想心にありて自から傷病に遭ふなり、鬼何の力ありてか能く公を傷らん、正理を以て其の邪病を遣らんと欲するなり、〔夫忿滀之氣散而不反則爲不足〕「釋文」に李云忿は滿なり、滀は結聚なり、精神逆ふあれば陰陽內に結ぼれ、魂魄外に散ず、故に不足と曰ふなりと、〔上而不下―當心則爲病〕夫れ邪氣上りて下らず、上方頭を攻むれば人の心中をして怖れ、鬱して怒を好ましむ、下りて上らず陽伏し陰散ずれば精神恍惚として忘る、心は精神の主なれば邪氣心に當れば病となるなりと、〔沈有履竈有髻〕沈は水の汙泥なり、司馬本に沈有漏に作る、漏は神の名と兪樾は沈を煁に作るべし、煁沈音相近きを以て假用す、煁は竈なり、煁有履、竈有髻とは同類を以て並び言ふなりと、〔戶內之煩壤〕「成疏」に門戶內の糞壤中に鬼あり、名づけて雷霆と曰ふと、〔陪阿鮭蠪〕陪阿は神の名なり、鮭蠪は、狀、小兒の如し、長さ一尺四寸、黑衣赤幘にして、劍を帶び、戟を持すと、「釋文」の司馬說に見えたり、〔泆陽處之〕司馬彪曰く、泆陽は豹頭にして馬尾と一に狗頭なりとも

野有彷徨、澤有委蛇、公曰、請問委蛇之狀如何、皇子曰、委蛇其大如轂、其長如轅、紫衣而朱冠、其爲物也、惡聞雷車之聲、則捧其首而立、見之者殆乎覇、桓公辴然而笑曰、此寡人之所見者也、於是正衣冠與之坐、不終日而不知病之去也、

【大意】桓公の一話を借りて、物累は皆な心の自傷に起りて、物累の能く傷を爲すにあらざるを論じて、生の情を達せざるの證となす、公則自傷鬼惡能傷公の一語此章の眼目なり、

【通釋】齊の桓公が或る澤に獵したる時に、鬼を見て心に怖懼する所ありて、管仲の手を執り之に問ふ、管仲對へ曰く臣は更に何物をも見ずと、蓋し凡百の病患は妄想によりて成るものなれば、桓公歸りて誒詒とて疲れ「ボンヤリ」として讝言を吐き、遂に病を爲して數日出づるを得ず、時に齊の賢人にて皇子告敖なる人進みて曰く、是れ公自心に妄想病をなし給へるなり、鬼安くにか能く公を傷はん、夫れ忿滀の氣心內に欝結して精神外間に放散して反らざるときは心に物足らざる感あり、又欝抑の氣が頭上に上りて下へさがらざれば、人をして奇態奇妙に忿怒せしむ、又下へさがりて上らざれば、人をして好忘せしむ、上らず下らず身の中央に結ぼれて胸につかへるときは種々なる妄想病を爲すなり、されば今吾が君の鬼を見給ひけるは全く君の御病氣の所爲にして、卽ち君自ら傷ひ給へるものにて、彼の鬼神の君に祟りを爲せるにあらずと、桓公曰く然れば果して世には鬼と云ふ者はなきか、皇子告敖對へ曰く、有るあるなり、其れ沈水の汚泥には履と云ふ鬼あり、竈には髻と云ふ鬼あり、其の狀美女に似て赤衣を衣るものなり、又糞掃の餘積に雷霆あり、東北艮位の下には陪阿鮭蠪の鬼之に躍るあり、其の狀は小兒の如く長け尺四、黑衣、大冠、劍を帶び戟を持ち、西北の乾位には泆陽とて豹頭豹尾なる鬼之に居り、水には罔象、狀、小兒に

なり、〔藉白茅加汝云云〕藉は薦藉なり、「シク」と訓ず、白茅は其の清潔を取るなり、易の大過に藉用白茅と見えたり、俎は肉を盛る器なり、雕俎は雕飾の俎を謂ふなり、〔錯之牢筴之中〕錯は置なり、牢筴は豕の室なり、筴は木欄なり、卽ち豕を畜ふ圏を謂ふ、〔有軒冕之尊〕大夫の尊位を謂ふ、軒冕の圖解は已に上篇に見ゆ、〔豚楯之上聚僂之中〕郭嵩燾の說に依れば、豚は篆なり、楯は輴と同じ、豚輴は畫輴なり、「禮記」の喪大記にある葬用輴は卽ち是なり、聚僂は器の名、一に曲籥と曰く、荀子には之を曲器と謂ふ、喪大記に熬(煎穀)君四種(黍稷粱稻)八筐、大夫三種(黍稷粱)六筐、士は二種(黍稷)四筐とあるは卽ち是なり、蓋し殯葬の時煎穀を盛りたる筐筲を棺傍に設け、蚍蜉の類を感せしめて、其の棺に近づくことを防ぐ者なり、輴は柩を載する具なるが故に、豚楯之上と曰ひ、熬筐は椁の外棺の內に納むる物なる故に、聚僂之中と曰ふ、皆大夫以上葬を飾る具なり、王念孫は曰く聚僂は柩車の飾を謂ふなり、衆飾の聚る所なるが故に、聚僂と曰ふ、其の形、中高くして四下なるが故に、僂と曰ふと、

桓公田於澤、管仲御、見鬼焉、公撫管仲之手曰、仲父何見、對曰、臣無所見、公反誒詒爲病、數日不出、齊士有皇子告敖者、曰、公則自傷、鬼惡能傷公、夫忿滀之氣、散而不反則爲不足、上而不下則使人善怒、下而不上則使人善忘、不上不下中身當心、則爲病、桓公曰、然則有鬼乎、曰有、沈有履、竈有髻、戶內之煩壤雷霆處之、東北方之下者、陪阿鮭蠪躍之、西北方之下者、則泆陽處之、水有罔象、丘有峷、山有夔、

戒、三日齋、藉白茅、加汝肩尻乎雕俎之上、則汝爲之乎、爲彘謀曰、不如食以糠糟、而錯之牢筴之中、自爲謀則苟生有軒冕之尊、死於腞楯之上聚僂之中、則爲之、爲彘謀則去之、自爲謀則取之、所異彘者何也、

【大意】此の節は生を美するに反して、彘を借りて眼目となし、生を養ふ能はざるものを論じて生を達せざるものゝ證となす、

【通釋】祝宗人とて、本邦の神主の如き人が、玄端とて黒き装束を着用して、牢柵即ち豕小屋に豕に說きて曰く、汝は何の故に死を惡むぞや、吾れは三月の間甘味をもて汝を豢ひ、十三日の間齋戒し身を清め物忌みして、白茅を藉き、汝を犧牲として汝の肩と尻との肉を雕刻したる美なる俎板の上にのせんと欲するが、汝之を欲するかと、されば生命を犧牲として尊榮を得るは其の實愚なるは分り切りたることなれば、彘になり代りて之を謀るときは必らず曰はん、糟糠の如き物を食はして穢き豕小屋の中に入れ置かるゝとも一時の虚榮の爲めに死するよりは萬々優れりと、彘の爲めに謀るは此の如く明らかなる人にても一旦己れ自身の爲めに謀るときは苟くも生きて居て大夫の位に上つて、軒冕の尊き身分と爲り、死して腞楯とて美なる喪車上にのり、聚僂とて立派なる葬具の中に藏めて葬らるゝことなれば、寧ろ之を爲さんと欲するなりと、夫れ豕の爲めに謀る時は之を不可とし、己れ自身の爲めには可となすは、何ぞや、全く利欲の爲めに其の智慮を昏まされて迷へばなり、眞に憫むべきことならずや、

【解義】〔祝宗人玄端云々〕祝は祝史なり、玄端は衣冠なり、筴は圈なり、彘は豬なり、宗廟を祭れば必ず祝史が衣冠を具へて版を執りて鬼神を祭る、今未だ祭らざるの間に豕を入るゝ圈に臨みて豕に說き聽かせ告ぐるなり、〔吾將三月豢汝〕三月とは久しき月日の意味にて、必ずしも三ケ月に拘らずは豢音「患」養

をして折中せしむと、〔魯有單豹者〕姓は單名豹魯國の隱者なり、〔巖居而水飮〕山中に住み水を飮みて居ること、〔有張毅者〕姓は張名は毅亦魯人なり、〔高門縣薄〕高門は富貴の家なり、縣薄は薄は簾薄なり、「宣注」に簾薄を懸けて門を蔽へることにて、小家を謂ふ、〔無不走也〕大家小家の別なく奔走伺候して己が生を營むなり、前の單豹が不與民共利と全く相反す、「淮南子」の人間訓篇に曰く、張毅好レ恭、過二宮室廊廟一必趨、見二門閭聚衆一必下、廝徒馬圉皆與抗禮、然不レ終二其壽一、內熱而死と、以て參考と爲すべし、兪樾は本文の走の字を趣の壞字なりと云へり、〔皆不鞭其後者也〕豹は寡欲淸虛にて其の內德を養ふも、虎其の外形を食ふ、毅は世の貴賤人に交游して、其の外形を養ふも病氣が其の內を攻めて以て死す、此二子は各其一邊に滯りて折中せず、故に前の牧羊の譬に比すれば、竝に其の後を鞭たざる者なり、〔無入而藏ー若得其名必極〕「成疏」に依れば既に內に入たる上に又深く藏むる無れとは、即ち單豹の如く山林に隱れて世と利を共にせざるを爲す無れとなり、陽は顯なり、既に出で外に出でたるが上に、又陽に顯るとは張毅の如く大家小家に趣かざる無きを爲す無れと戒むるなり、柴とは木なり、出るに滯らず、處るに滯らず、出と處と共に忘れて槁れ木の如く無情にて此の二邊を離れて、中央の道に獨立すべしとなり、「宣注」は而を爾と解し、爾が藏を入る無れと讀みて、其の靜に過ぐるを恐るなりと釋し、爾が陽を出だす無れと讀みて、其の動に過ぐるを恐るなりと釋せり、亦一說と爲すべし、〔其名必極〕宣穎曰く至人と稱すべしと、〔夫畏塗者云々〕塗は道路なり、畏途は畏懼すべき危險なる道路也、十殺一人とは、十人の中にて一人の死することにて、比較的死人の多きを謂ふ、〔不亦知乎〕下句を管到して言ふ、〔衽席之上飮食之間〕人の畏るべきは衽席の上其の淫を恣にし、飮食の間に節する能はざるに在り、是れ萬に一をも生全することなし、仲々に十人中一人を殺す比にあらざるに、擧世往々反りて畏れ戒むるを知らざるは實に過の大なるものなり、

祝宗人玄端以臨二牢筴一、說レ彘曰、汝奚惡レ死、吾將三月豢レ汝、十日

色あり、然れども不幸にして途中にて餓虎の爲めに食ひ殺されたり、又張毅なるものあり、常に富貴の家に出入し、權門に諂ひて世利を逐ひ酒肉に飽きしが、僅に四十歳にして熱病の爲めに死したり、然れば豹は其の內德を養うて、其の外の形骸を虎の爲めに害せらる、毅は其の外たる形骸を養うて、病其の內部に生ず、此の二子は一は內のみ、一は外のみを養うて各一方に偏して折衷せず、皆羊の後るゝを鞭たざる如きものなりと、仲尼之を評して曰く、身を晦まし藏るる心ある單豹の如き、又立身出世に腐心せる張毅の如きことなく、時に隨つて或は晦まし、或は顯れ、柴立とて木偶人の如く無心にして立ち、出づるに心なく、入るに心なく、中庸に居るも中庸に居るといふ心なし若し以上の三者の如きを得るときは完全なる人物にて、其の名は必らず至極せる人と謂ふべきならん、夫れ畏途とて、途中にて山賊や虎狼の害に逢ふか、又嶮阻なる所ありて十人の中に必らず一人殺され死すると云へる畏るべき處あるときは、父子兄弟互に相要心して家來を大勢從へて武器を具へて然る後に旅するなり、然れども何ぞ知らん、一層人の畏るべきは衽席飲食とて娛樂燕飲上の色欲が最も一身を殺すに足るものなるを、然るに之を戒めざるは大なる過で、善く生を養ふものとは言ひ難きなり、

【解義】〔田開之〕姓は田、名は開之、道を學ぶ人なり、〔祝腎〕姓は祝、名は腎、道を懷ふ人なり、〔周威公〕「史記」の周本記に據るに孝王其弟を河南に封ず是を桓公と爲す、桓公卒し、子の威公代り立つと、此の周威公は卽ち其人ならん、〔操拔篲以侍門庭亦何聞於夫子〕開之は祝腎を謂ふ、夫子と爲す、拔篲は掃帚なり「ハ、キ」と訓ず、田開之は掃帚を提げ門戶に侍して庭前を灑掃するのみにて、何ぞ敢て先生養生の道を聞かんと、蓋し古人は師に事ふには皆篲を擁して以て役に從ふなりと「成疏」に云へり、今按するに唯先生家の掃除役を爲す位の賤人にて到底其の道を聞くが如き者にあらずと謙辭なり、故に威公も田子無讓の語あり、〔田子無讓寡人願聞之〕讓は謙遜なり、養生の道寡人願くは聞かん、幸に請ふ陳べて謙遜辭退するなかれとなり、〔若牧羊然視其後者而鞭之〕我れ祝腎の養生を說くを承けて、之を譬ふれば羊を牧養するが如く、其の後るゝものを鞭ちて其れ

然、視其後者而鞭之、威公曰、何謂也、田開之曰、魯有單豹者、岩居而水飲、不與民共利、行年七十而猶有嬰兒之色、不幸遇餓虎、餓虎殺而食之、有張毅者、高門縣薄、無不走也、行年四十而有內熱之病以死、豹養其內、而虎食其外、毅養其外、而病攻其內、此二子者、皆不鞭其後者也、仲尼曰、無入而藏、無出而陽、柴立其中央、三者若得、其名必極、夫畏塗者、十殺一人、則父子兄弟相戒也、必盛卒徒而後敢出焉、不亦知乎、人之所取畏者、衽席之上、飲食之間、而不知爲之戒者過也、

【大意】 外重く內拙なしの上文の意を承けて、譬喩を以て善く生を養ふものは衽席と飲食とに在るを戒めて、上文の生の情を達するの證論となす、

【通釋】 田開之が周の威公に見えしに、威公曰く余は祝腎なるもの養生の法を學ぶと聞けり、足下は祝腎と懇意なり、何と養生の法を聞けるかと、田開之曰く開之は篲を取りて庭園を掃除するまでにて、何にとて祝先生より養生の法を聞くことを得ん、威公曰く謙遜せずして告げよと、開之曰く然らば申し上げん、之を祝先生より聞くに、曰く、善く生を養ふものは羊を牧ふが如く、其の後るゝ羊を鞭て進ましめ、進む羊は留めて過不及なからしむと、威公曰く何の理由ぞ、田開之曰く魯に單豹なるものあり、山林に住居し世人と絕えて利を共にせず、水を飲み淡を食ふが故に、行年七十の老人なれども恰も顏色は小兒の血

なり、遂に淵潭を視ること、恰も陸上に異ならざるに至るなり、假令ひ舟の顚覆するも車の坂上に郤退するが如く思ふなり、〔覆郤萬方陳乎前而不得入其舍〕舍は心の中なり、言ふは舟の進退の方向に隨ひ、萬端の波瀾困難來りて目前に在るも、心中に關係せざる也、既に水を忘れたれば豈に又た心中に何の苦勞もなし、兪樾曰く萬字の下に物の字を脫す、此は本と覆郤萬物を以て句と爲し、方陳乎前而不得入其舍を句と爲し、方とは竝ぶ也、方の本義は兩舟相ひ竝ぶを方となす、故に方の字に竝ぶの義あり、「荀子」致仕篇楊雄傳等に方起又は方征の字面あり、皆な方は竝の義にて說く、是れ其の證なり、方陳乎前とは萬物竝び前に陳列するなり、今上句に物の字を脫して、方の字を以て上に屬して讀めば、所謂陳乎前とは果して何を指すか、「列子」黃帝篇には正に覆郤萬物方陳乎前而不得入其舍に作る、據て以て訂正すべしと、〔惡往而不暇〕成玄英曰く性に率ひ、舟を操る眞に任せ、水に游び、心中に毫も矜係なし、何に往くも間暇餘裕ならざらん、豈に唯に舟を操るのみならん、道を學ぶも亦然り、但し能く忘れて然る後ち生を遂するを得るなり、〔以瓦注者巧以鉤注者憚以黃金注者殙〕注は射なり、憚は怖懼すること、殙は昏亂すること、瓦器の賤物を用ひて戲れ賭して射る人は心中に惜む氣なき故に、巧みに中るなり、鉤帶は稍く貴き物なるが故に、的に中らざるを恐るゝ故に中らざるものなり、黃金は是れ極貴の物故に惜みて心智も昏亂して中たらざるなり、卽ち彼の津人は忘を以ての故に、其の巧妙なる神の如くなることを、反比例を以て云へるなり、〔凡外重者內拙〕夫れ故に內心昏拙なるなり、豈に唯に射のみにあらんや、萬事皆な然りとなり、

田開之見周威公、威公曰、吾聞、祝腎學生、吾子與祝腎遊、亦何聞焉、田開之曰、開之操拔篲以侍門庭、亦何聞於夫子、威公曰、田子無讓、寡人願聞之、開之曰、聞之夫子曰、善養生者、若牧羊、

易く舟を操るなりと、因りて回は再度其の理を問へども、敢て告げざるなり、故に敢て請ふ如何なる理の存するかを問ふと、孔子答へて曰く善く游ぐものは數度の練習にて能くすとは、是れ心中に水あるを恐れずして水を忘ればなり、尚ほ今一層進歩して水の中に沒するの人は、目に舟と云ふものを視ずして之を操るに至りては、彼れは既に淵川を視ると陵陸の如く、舟の覆へるを視ると宛も車が坂より却（アトズサ）りするが如くに思ひて泰然自若たり、然れば或は覆り又は却くことと度々目前に來るも、其の心に入ることを得ず、卽ち之が爲めに心は何等の動搖を來たさゞるなり、蓋し彼の心中に十分の餘裕ありて、其の餘暇のあるは巧妙の生ずる所以なり、例へば今瓦器の如き賤物にて賭（カ）けものにして弓を射て勝負を決する時は、心を賭者（カケモノ）の爲に累はされざるが故に、必ず巧妙に的中して勝を得るも、若し少しく價の貴き帶鉤を賭けて勝負すると、心は其の方に牽かれて懼れ憚るが故に的中せざるなり、尚ほ此よりも貴き黃金を賭物とする時は、唯に賭物を人に取らるゝを憂ひて、其の心遂に昏亂するが故に的中することなきなり、是れ他なし射術の巧妙は、瓦と鉤と黃金とを論ぜず、同一にて變化なしと雖ども、唯心に惜み矜れる所ある故に、外物たる賭物のみを重んじて心が的に向うて機と云ふことに專一ならざるが爲めに的中せざるものなり此れは射術のみならず、凡て外を重しとする時は內必ず拙きものなりと、

【解義】〔觴深之淵〕觴深は淵の名なり、其の狀は杯の如し、因りて以て名となす、宋の國にあり、〔津人操舟若神〕津人とは津を濟（ワタ）す人を謂ふなり、操は捉るなり、顏回或る時旅行して斯の淵を渡るに、津人が舟を操る甚だ方便ありて、其巧妙なること神の如きなり、顏回之を怪みし故に孔夫子に問ふなり、〔善游者數能〕游は水面に浮ぶなり、「オヨグ」と訓す、數能は數度の練習を積みて名人に至るなり、以て物は稟受の自然とは雖ども、亦習うて以て性を成すべきを知るべし、〔善游者數能忘水也〕水を游ぐ數度の練習を經て能く心に忌み憚ることなく、水を忘るればなり、〔若乃夫沒人云云〕沒は泅ぎて水中に入るなり、「シヅム」又「モグル」と訓ず、沒人は沒を善くする人を謂ふ、水を好くするもの、數ば游習して以て性と

神〕凝の字蘇東坡以て疑の字の誤と爲す、兪樾曰く、凝は當さに疑に作るべし、下文梓慶木を削りて鐻を爲る、鐻成る、見るもの驚きて鬼神の如しと、即ち此れ所謂る神に疑るなり、列子黃帝篇に正に疑に作る、張湛の注に曰く意專らなれば相似るものなり、據て以て訂正すべしと、錄して一說とす、〔痀僂丈人〕丈人は老人の稱、既に前に解せり、

顏淵問仲尼曰、吾嘗濟乎觴深之淵、津人操舟若神、吾問焉曰、操舟可學邪、曰可、善游者數能、若乃夫沒人、則未嘗見舟、而便操之也、吾問焉而不吾告、敢問何謂也、仲尼曰、善游者數能忘水也、若乃夫沒人之未嘗見舟、而便操之也、彼視淵若陵、視舟之覆猶其車却也、覆却萬方陳乎前、而不得入其舍、惡往而不暇、以瓦注者巧、以鉤注者憚、以黃金注者殙、其巧一也、而有所矜、則重外也、凡外重者內拙、

【大意】上文の終句を承けて、津人の水を忘るれば即ち舟を操る自由自在なるを論し來りて、前節の事を棄つれば勞せざるの證となす、且つ忘水の二字を以て骨子となす、

【通釋】顏淵が其の師の孔子に問うて云ふには、回は嘗て觴深と云ふ淵川を渡りたる時に、津人とて渡船場の船頭が、舟を操るの術巧妙なること神の如くなるを見たり、因りて回は彼の船頭に舟を操るの術は學んで能くすべきかと尋ねたるに、彼の船頭答へて曰く學ぶべきなり、夫れ水を游ぎ練習久しければ、誰れにても上達進歩するものなり、然れば水中を沒ぐる程の水練の達人は、目に舟といふものを見ず、容

の先へ二つ累ねて修業し、然る後丸を墜さぬ樣に幾多の苦辛と工夫とを積みて後は、蜩を取るに方りても錙銖毫毛の外は失もなく、次ぎに丸を三つ累ねて墜さぬ樣になつてからは、十の蜩の中で一疋位失ふまでになり、又其の次ぎは五つ累ねて墜とさぬ樣に進歩せしよりは、凡て蜩を手取りにする如きもので、一疋も取り逃したることなく、余が身を構へる有樣は全く斬り殘したる枯れ木の枝の如く、臂を用ひ竿を執る姿は槁木の枝の如く、凝り止まりて少しも動かず、神凝り心定まりて天地の大にして萬物多しと雖ども、一心不亂に、唯蜩の翼のみを承知して、吾は少しも變動せず、他に如何なる物を以て來るとも、蜩の翼に取り易へざるなり、されば如何して得ざるべきや、其の蜩を得るは當然ならずや、孔子此の話を聞きて門弟子を諭して謂ふに、志を用ふること專一なれば、神凝りて動かずといふことがあるが、是れ此の痀僂丈人の如き人を云ふなり、

【解義】〔見痀僂者承蜩猶掇之〕痀僂は腰の曲りたる貌なり、蜩を承るは蟬を取るなり、承は拯と同じく取るの義なり、掇は拾ふなり、孔子が楚に聘して深林の中に出て老人に遇ふ、其の老人が竿を以て蟬を取るの巧みは、恰も俛して地芥を拾ふ如く一の遺すことなしとなり、〔失者錙銖〕錙銖とは微數のことなり、既に前に解す、初め蜩を取るを學ぶこと半歲を費す、故に蜩を取るとき、差ふ所は微少の間に過ぎずとなり、〔累五而不墜猶掇之也〕五丸を竿頭に累ねて一つも墜落なく停審の意遂に斯に到る、是以て蟬を取ること恰も俛して地上の芥を拾ふが如きなり、〔吾處身也―若槁木之枝〕拘は斫り殘りたる枯樹の枝を謂ふなり、執とは用の義なり、我れ身心を處する、恰も枯樹の如く、臂を用ひ竿を執る槁木の枝の如く、凝寂停審不動の至りなり、前文の有道とは此の謂ひなり、〔雖天地之大―唯蜩翼之知〕陰陽の二儀は極めて大なり、萬物は甚だ多きなり、然るに智を運らし、心を用ふるは唯だ蜩翼に在るなり、此の蜩翼の外は毫も緣慮なしとなり、〔吾不反不側―何爲而不得〕反側とは猶ほ變動の如きなり、內心凝り靜かにて萬物多しと雖ども蜩翼に注げる知を奪はれず、是を以て芥を拾ふ如きに達したるなり、天下何事か成らざらん、世間何を爲してか得ざらん、〔用志不分乃凝於

したるは正に是れ此の傷神犯害の患あるが故なることを暗示せり、而して純氣之守とは是れ無心自然の謂なるに外ならずして本文に謂はゆる開天之天とは卽ち是なり、知巧果敢之列とは處々に有心的着迹ありて本文に謂はゆる開人之天とは卽ち是なり、故に其の前者を務めて後者を戒めて遠ざくるときは氣の純よりして神の全なるを得て養神の訣蓋し亦此に盡くべきを以て結びたり、讀者大概此の如く本文を觀るときは其の語意穿透して彼此遺すなく融會することを得るに庶幾らん、

仲尼適楚、出於林中、見痀僂者承蜩、猶掇之也、仲尼曰、子巧乎、有道邪、曰、我有道也、五六月累丸二、而不墜、則失者錙銖、累三而不墜、則失者十一、累五而不墜、猶掇之也、吾處身也、若撅株拘、吾執臂也、若槁木之枝、雖天地之大、萬物之多、而惟蜩翼之知、吾不反不側、不以萬物易蜩之翼、何爲而不得、孔子顧謂弟子曰、用志不分、乃凝於神、其痀僂丈人之謂乎、

【大意】上文純氣之守の句を承け來りて、志を用ふる專一に、神凝るの理を論じて、前段形精不虧の證となし、且つ蜩を承くる尙ほ然り、況んや生を養ふをやとの意にて、神を藏するの妙用を說く、

【通釋】孔夫子が楚の國に往かんとして、途中に深林の中に出でたるに、痀僂の人が竿の頭に黐を附けて蜩を取るを見たるが、其の巧みなること全く手づかまへの如く容易でありし也、是に於て孔夫子は其の人に向ひ、君は實に巧妙なり、何か其に傳授の方法があるかと、其の人答へて曰く固より然り、余は五六月の間も此の蜩を取る修業する爲めに、初めは丸を竿

「成疏」に曰く常に自然の性を用ふるは是れ天を厭はざるものなり、智に任せて自然に物を照さば、斯れ人を忽かせにせざるものなり」と、〔民幾乎以其眞〕幾とは庶幾なり、「チカシ」と訓す、「宣注」に庶幾神全而反眞と、「成疏」に曰く率土盡眞、蒼生無僞と、

【備考】本文は一見の際頗る語意の看取に苦しむべき虞あるを以て左に其の大體を說かん、此の章は列子の言を援引して養神の訣を語りたる者なるが、先づ是純氣之守也と非知巧果敢之列也との二句を提けて大綱と爲し、而して後一正一反互に申覆して其の意を明らかにしたり、蓋し人の宇宙に於けるや其の神全きときは虛無靈通の境に逍遙游して外物來り誘ふも能く之を惑はし傷つくること莫し、之に反して如何に專ら一塊然たる形軀を恃み區々たる智術を弄びて之が爲めに少しく喘息の延長をなし多少の命脈を保ちたればとて便ち養生の妙を得たりと爲すべきにあらず、而して謂はゆる神なる者は氣に乘じて形軀に寓する者なれば、一方より論ずれば神は卽ち氣、氣は卽ち神にして本と劃然と分離すべきにあらず、されば其の神を全くせんと欲すれば氣を養はざるべからず、是れ其の第一に純氣の守を說きたる所以にして養神の訣より觀れば最も其の肯綮を得たる者と爲す、彼の智巧果敢の如きは共に人爲的の作用に傾きて純氣と相反すること多し、故に凡有貌象聲色云々と則物之造乎不形云々の二節を以て一（智巧果敢）は是れ形而下の迹方に滯りて同一物に拘泥する所以なると一（純氣）は是れ形而上の淵源に游びて事物の得て止むべきに非る所以なるとを兩項に分論し、而して彼將處乎不淫之度より以下は純氣を守る工夫を陳べて苟に氣の守を得れば神の全きを得るの義に落到し、又神の全きを得れば物の入ること能はざる義に落到し、又醉者の一喩を引き來りて神全たければ物の入ること能はざるが故を申明したり、列子の語は以上に止まれるが作者は更に又復讎の一喩を引き來りて前に反して純氣を守る能はざる者は人慾の事を用ひて此の氣を阻離するが故に神の傷つきて爲めに種々なる害毒を致すことを示し、以て開口一番に「非知巧果敢之列也」と云ひ、又其の居予語汝凡有貌象聲色皆物也物與物何以相遠夫奚足以至乎先是色而已と云ひ、一反筆を用ひて人爲的の知巧果敢の列を非難

は前の聖人を指す、自とは從なり、是の若きものは其の自然の道を保守して虧けず、其の心神凝乎とし閒郤なし、故に世俗の事物何によりて心に入らんとなり、〔夫醉者之墜車雖疾不死〕此より以下凡そ三譬あり、以て聖人の獨に任して無心なるに況ふるなり、一は醉人、二は利劍、三は飄瓦なり、而して此れは其の第一喩也、夫れ醉人は車に乘りて忽然顚り墜ちて疾み苦むも死に至らざるなり、其れは心中無慮にて神凝り全きが故に、乘墜共に知らざるなり、然る故に死生も入らず外物に遌ふも情に於て慴懼することなきなり、〔死生驚懼云云〕遌とは音「ゴ」忤なり、逆なり、「サカフ」と訓ず、爾雅の「郭注」に謂干觸也とあり「成疏」に乘墜不知死生、是故不遌於外物而不慴懼」と、是れ本句を醉人に係けて解せり或は死生驚懼云々を以て至人の情態と爲し解する者あり、謬れり、〔彼得全於酒云云〕彼の醉人困酒に因るも、猶ほも暫時の凝淡を得て物の爲めに傷つけられず、況してや德の全き聖人をやとなり、〔聖人藏於天〕神を天に藏するなり、卽ち藏手無端倪之紀を謂ふ、〔復讐者不折鏌干〕此れは第二の喩なり、干將鏌鋣は共に古代の良劍宛も本邦の相州の正宗、越中の義弘の寶劍の類なり、「吳越春秋」に據るに吳王闔閭干將をして劍を造らしむ、劍に二あり、一つを干將と曰ひ、一つを鏌耶と曰ふ、鏌耶は干將の妻の名なり、乃ち此の良劍を以て殺害して讐を打ちしと雖ども、怒りて其の良劍を折ることなし、其れは劍自身には無心にて人を害すことなき故なり、〔雖有忮心者不怨飄瓦〕此れは第三喩なり、忮は害とあり、又佷むなり、飄は落なり、飄落の瓦が偶然人を傷くるも、如何に忮逆の人も終に怨み恨むことなし、其れは瓦は元來無心のものなればなり、以上三喩は聖人の無心自然なるを說明す、〔不開人之天〕人之天とは人の私智を用ふるを務めざるを謂ふ、上文にある智巧果敢は卽ち人の天なり、〔開天之天〕天之天は自然の性にして、上文の純氣なり、〔開天者德生開人者賊生〕「成疏」に曰く夫れ性に率ひて動けば動くも常に寂然たり、故に德生ずるなり、智を運らし世を御すれば害を爲すこと極めて深かし、故に賊生ずるなり、老子の所謂る智を以て國を治むれば國の賊なり、智を以て國を治めざれば國の德なりとは之を謂ふなりと、〔不厭其天不忽於人〕

能はざるなり、高卑を一視するが故に心中恐懼せざるなり、〔是純氣之守也〕純氣は純和之氣卽ち先天の精を謂ふ、〔知巧果敢之列〕知は智と同じ、知巧は智と同じ、知巧は心智巧詐にして、果敢は勇敢果決なり、卽ち意見を逞くし、事を用ふるの意なり、〔夫奚足以至乎先是色而已〕先とは未始有物之際を謂ふ、姚鼐曰く江南本色上有形字と「呂注」に先則未有物之先、色則物之已有、奚足以語純氣之守至虛之遊乎と云へり、「宣注」に曰く是色而已とは、終に迹相たるのみを謂ふ、此れ乃ち知巧果敢の者の務むる所なりと、〔則物之造乎不形而止乎無所化〕造は至也、不形とは無形の意、無所化とは無化の謂造乎不形色無く相無きの太初に至る也、止乎無所化とは混茫一氣未た化することあらざる處に止まるを謂ふ、卽ち上文の純氣之守を指す、王先謙曰く列子の張湛が注に有旣無始、則所造者無形矣、形旣無終、則所止者無化矣と以て參考とすべし、「宣注」に此所謂先也と云へり、〔夫得是―得而止焉〕是れとは上句の造乎無形云々を指す、「成疏」に夫れ造化の深根を得て理を窮め性を盡すもの世間萬物何ぞ止るを得ん、故に獨往獨來出沒自在の妙を得るなりと云へり、〔彼將處乎不淫之度〕彼とは上の道を得る聖人を指す、不淫とは所受の本分を謂ふ、「宣注」には守中無爲と云へり、〔而藏乎無端之紀〕「宣注」に動靜不測と云へり、大道は端もなく、緒もなく、又始終もなく、此の混沌を用ひて紀綱とする故に、聖人は心を藏して迹を恍惚の鄕に晦ますとなり、〔放乎萬物之所終始〕「郭注」に終始者物之極と云へり、「成疏」に曰く夫れ物の始終する所を造化と謂ふなり、卽ち生死始終は皆是れ造化の物なり、故に聖人は自然の境に放任し、造化の場裡に遨遊するなりと、〔一其性養其氣合其德以通乎物之所造〕一とは飾らざるなり、性に率うて動くが故に二ならず、養とは能く守りて濫用せざるなり、「發覆」に曰く物之造于不形而止于無所化、是養其氣也と、合とは合うて離れざるなり、卽ち與天地合其德を謂ふ、「發覆」に曰く處不淫之度藏無端之紀是合其德也と、「成疏」に曰く旣に性を一にし、德に合ひ、物と相應するが故に、能く至道の原に達して自然の本に通ずるなりと、以上純氣を守る工夫を言ふ、〔夫若是者其天守全其神無郤物奚自入焉〕是と

に如此きに至れば天の自然なる守り全くして、其の精神は自然にて間隙の乘ずべきものなきなり、然ればば外物何によりて能く其の心に入ることを得ん、今夫れ酒に醉へる者の誤つて車上より墜落するや假令傷つき病むとも死に至らざるなり、夫れ醉者の骨節も不醉者の骨節も皆同一なるに、其の害に係ること不醉者と異なるは、畢竟醉者は其の神全くして毫も外に散ぜざればなり、元來醉者は車に乘るも知らざるなり、又墜落するも知らざるの境にあればなり、唯だ此れのみならず、死するも生きるも驚き懼るとも一切彼が胸中に入らず、即ち無我夢中たる者なり、是の故に外物に遇ひても一向懾れず、是れ其の神全きが故なり、彼の神全きを酒の力に借りてすら猶ほ此の如し、況してや神全きを自然の天道より得たるものをや、是れは至人が其の神を無心の天に藏するが故に、外物これを傷害することなき所以なり、例へば干將鏌邪の名劍は之を用ひて殺害して讎を構ふも讎を報ずるの人憤怒して此の劍を折ることなきは何ぞや、他なし劍は本と無心なるが故に折らるゝの害を蒙むらざるなり、縱令ひ如何なる忮心ある人も屋上の瓦が飄がり落ちて、其の身を傷るも之を怨み怒る人はなかるべし、是れ他なし瓦は元來無心無情なればなり、是の故に無心無情なれば天下不平と云ふことなくして均平に至るなり、天下均平なるが故に攻伐戰鬪の亂もなく、又殺戮の刑罰もなく、天下は至極平和無事に至るなり、此は元來此の無心無情の道に由りて然るを得るなり、是の故に人の寶とする知巧果敢は人の天と申すべき大切なものなれど、之を開くを務めずして、天の天を開き即ち自然的純氣の守を大切にす、天を開く德者は生す即ち外物敢て之を傷はず、人を開く者は賊生ず、即外物之を害ふ、されば其の天德を厭はずして常に之に依り、人心の狂ひを油斷なく愼み防ぐときは、民は神全くして、其の眞性に反へるに近からん、

【解義】〔子列子―潛行不窒〕子列子は列禦寇なり、關尹姓は尹名は喜字公度函谷關の令たり、故に關令尹と云ふなり、窒は塞なり、夫れ至極なる聖人は光に和し燿を匿くし潛伏して世を行き、迹を同塵に混して、物の爲めに障礙せられずと也、〔蹈火不熱行乎萬物之上而不慄〕寒暑に冥合するが故に火も災すると

道也、不開人之天、而開天之天、開天者德生、開人者賊生、不厭其天、不忽於人、民幾乎以其眞、

【大意】上段の形精不虧の意を承けて、至人は純氣の眞を用ふることを論じ來りて、前文の天を助くるの證となすなり、○至人潛行又は得全於天等の句は此節の眼目にて又全節の文線なり、

【通釋】子列子の子は古人の師を稱して子といふ即ち有德の美稱なり、例へば子程子の如き是なり、關尹は函谷關の令なり、即ち老子の留りて書を著したる尹喜のことなり、其の尹喜に問うて云ふには、至人とは神の如き人のことを云ふなり、此の至人は潛りて水底に入り金石の堅きに入るも窒がり礙ることもなく、又火を蹈むも熱からず、萬物の上に行く雲氣に乘じて日月を挾み空中を凌ぐも從容自若として聊も慄れざるは是れは何如なる理であるかと、尹喜答へて云ふには夫れ至人は純神の氣を守りて、能く身外の身を成すは眞神其の内を離るゝことなきが故に外物之を侵すこと能はざれば能く此の如きを得るなり、彼の知巧果敢の心ありて物に勝たんことを求むるの類に非らざるなり、汝先づ坐に復せよ、予れ汝に委細を語り聞きかすべし、凡そ貌や象や又聲や色のあるものは皆是れ物品なり、然れば我と汝と亦是れ物品たるを免れざるものなり、物と物と相近くして相去ること幾何ぞや、要するに何ぞ遠く異なるを得んや、されば何ぞ萬物の先となるに足らん、是れ他なし、形と色との間を離るゝこと能はざればなり、今物の中に無生に生れて死して死せざるものあり、是は道を得て之を窮め盡さば自から形體を離れ化を超えて物の先に至るを得ればなり、されば修養を積みて是の域に達せば外物を禦ぎ止むるを得るなり、是の故に至人の身を處するの道は如何と思ふに、物の中を得たる度に處し、始終もなく恰も環の如く循環極りなくして廣大なる紀綱に藏れ自然の境に放任し造化の庭に遨遊し、其の性を一にして二にせず、其氣を養成して耗らざるなり、即ち元氣を愛養して天の自然の玄德と合うて散せざるを謂ふなり、是れに由りて以て物を通ずれば能く造物者と遊ぶものにて、眞

能移とは天地と共に合散を同くすることにて、卽ち上文の與彼更生の謂なり、又與天爲一の謂なり、〔精而又精反以相天〕反は還なり、本へ立ち返る意なり、相は贊相なり、人本と天地に由りて生ず、今天地化育を贊相す、故に相と云ふ、

子列子問關尹曰、至人潛行不窒、蹈火不熱、行乎萬物之上而不慄、請問何以至於此、關尹曰、是純氣之守也、非知巧果敢之列、居予語女、凡有貌象聲色者、皆物也、物何以相遠、夫奚足以至乎先、是色而已、則物之造乎不形、而止乎無所化、夫得是而窮之者、物焉得而止焉、彼將處乎不淫之度、而藏乎無端之紀、遊乎萬物之所終始、一其性、養其氣、合其德、以通乎物之所造、夫若是者、其天守全、其神無郤、物奚自入焉、夫醉者之墜車、雖疾不死、骨節與人同、而犯害與人異、其神全也、乘亦不知也、墜亦不知也、死生驚懼不入乎其胸中、是故遻物而不慴、彼得全於酒、而猶若是、而況得全於天乎、聖人藏於天、故莫之能傷也、復讎者不折鏌干、雖有忮心者、不怨飄瓦、是以天下均平、故無攻戰之亂、無殺戮之形者、由此

【解義】〔達生之情者〕達は暢なり、通ずるなり、「廣雅」に曰く生は出也と、情は實なり、〔達命之情者不務知之所無奈何〕知は智と同じ、夫れ人の生ずるや、各其の分あるものなり、例へば形體の妍醜命の長短、貧富貴賤愚智窮通は命に非らざるはなし、故に性命に達するの士は性靈明照にして、分外に己れの事たるに關せざるなり、智慮工夫も之を奈何ともする能はざればなり、〔養形必先之以物云々〕物とは生活上日夕必用なる物品を謂ふなり、夫れ身形を養ふには先づ物品を用ふべし、然れども物品は分限ありて涯りなかるべからず、故に凡鄙の徒は諸物を積聚して餘りあるも却りて衞養足らざるもの世間往々之れあり、究竟物は未だ身形を養ふに足らざるなり、〔有生必先無離形云々〕既に此の浮世を有すれば、形體を離るゝ能はず、然れども形體は有れども精神散亡して行尸走肉と一般なる人、世亦之れあり、となり、〔悲夫世之人以爲養形足以存生〕夫れ壽夭の去來は天命にして己の制する所に非らざるなり、然るを世俗の人は悟らず、多く資產貨財を貪りて、厚く其の身體を養うて、妄りに以て生を存すと思ふは、深く悲み歎ずべきことならずやとなり、〔世奚足以爲哉〕「宣注」に形不足以存生、則世之備物、養形者何足爲哉と云へり、〔雖不足爲而不可不爲者〕上句の世奚足爲哉を承轉して云へるなり、乃ち物を備へ、形を養ふことは爲すに足らざれども、既に人世に在る以上は亦爲さゞる可からずとなり、〔其爲不免矣〕即ち不可不爲と言ふ、〔正平則與彼更生更生則幾矣〕彼は造化を指す、幾は盡なり、更生は更も生するなり、日に新なるなり、夫れ本身分外の事を棄つれば、憂ひ累ひもなし、苟も憂ひ累ひなければ正眞眞平の道に合ふなり、此の地に達すれば、日に新なる道に冥合して、道の玄妙を盡すとなり、〔夫形全精復與天爲一〕夫れ形ち全ければ擾れず、故に能く天命を保完し、精神固くして虧けざるなり、本に復りて神全く天の德と一となる所以なり、〔合則成體〕「宣注」に曰く二氣（陰陽）合則生物形〔散則成始〕「成疏」に曰く氣息離散則反於未生之始と、此に依れば始は虛無を謂ふ、「宣注」に曰く散於此者爲成於彼之始と、此に依れば始は物の始と解す、〔形精不虧〕上文の形全精復を顧みて云ふ、〔是謂能移〕移は遷轉すること、

るを知りて、之れがために思慮を費さざるなり、夫れ形體を養ふには、必ず形體を養ふべき衣食住の如き物質を備ふるなり、然れども其の物質餘りある程、澤山にしても、形體の養はれざるものあり、卽ち世俗往々富貴にして短命なるが如きものなり、是れ畢竟物質のみにては形體を養ふに足らず、人は生を有する以上は必ず先づ形體ありて、其形體を離るゝこと無し、然るに形體は依然として有りながら、精神已に散し、元氣先づ亡びて唯生きて居ると云ふ許り(バカ)の者あり、是れ畢竟形體のみにては生命を保つに足らず、且つ生の來るや之を卻け拒むべき事も爲し難く、又其の去るや之を引き止むること能はざるものにて、是れ卽ち生の實情なり、然るに悲むべきは、世人は形體さへ養へば生は保存し得らるべきと思うて多く財貨を聚めて此の生を養ふとなり、如何程形體を養へばとて、決して生を保つと云ふことは不可能のことなり、然れば世の人人何ぞ人生に必用なる諸物を備へ、身體を保つに足るべき食物等の養を營みを爲すに足らんや、なれども此の爲すに足らざることを爲さざるを得ざるは、畢竟既に世間に在る以上は習俗の爲めに免かるべからざればなり、是の故に形體の爲めにする累ひを免れんと欲せば、一切の世事を棄てゝ務となさざるに若かざるなり、苟も世事を棄つれば憂へ累ひもなきなり、累ひなければ、心中正平にして本然の道を得べし、正平なれば彼の造化と更々生ずるの地に至るなり、卽ち造化と互に前と爲り、後と爲りて循環して推移するを得べし、更生の玄妙を得れば至道に幾きを得るなり、然れば事は何の故に之を棄て、生は何の故に之を忘るゝやと云はんに、曰く事を棄つれば形體勞することなく、生を忘るれば精神全くして虧けることなし、夫れ形體全く精神元氣に復すれば、天の德と同一となるなり、卽ち造化の自然に合致す、天地は萬物を生ずる父母にて、天地陰陽の二氣相合すれば體實を成し、天地陰陽の二氣散ずれば虛無と爲りて未生の始に歸るものなり、唯、形體と精神と虧けざるもののみ、能く滯り無く礙り無く、推し移りて物と共に盡きざるなり、卽ち天地と更生す、形此の如くにして精を養ひて精の又精卽ち精の極に至れば、反りて天の化育を輔けて、天地位し萬物育の地に達し得るなり、

養ふを要すとの意にて、側面より比喩を以て養神の妙を明らかにし、或は養形の非を明らかにし、末段子扁慶子を借りて感慨を寄せたるが如き蓋し至言を淺人に告るには、譬喩の用、亦已むを得ざるに出づ、內篇の養生主と參看すべきなり、

達生之情者、不務生之所無以爲、達命之情者、不務知之所無奈何、養形必先之物、物有餘而形不養者有之矣、有生必先無離形、形不離而生亡者有之矣、生之來、不能却、其去不能止、悲夫、世之人以爲養形足以存生、而養形果不足以存生、則世奚足爲哉、雖不足爲而不可不爲者、其爲不免矣、夫欲免爲形者、莫如棄世、棄世則無累、無累則正平、正平則與彼更生、更生則幾矣、事奚足棄、而生奚足遺、棄事則形不勞、遺生則精不虧、夫形全精復、與天爲一、天地者、萬物之父母也、合則成體、散則成始、形精不虧、是謂能移、精而又精、反以相天、

【大意】事を棄て生を忘るれば、天地位して萬物育するなり、故に生命の情に達するものは天と一たるの理を論じて、以下の諸節は此の節の證たるに過ぎざるなり、

【通釋】生命の實情に通達するものは、身外の物を以て其生の益となすことを務めず、命は天の制する所にして、人力の左右し得べきに非ざるなり、故に命の實情に達するものは人智の奈何んともすべからざ

依れば、生の上に再び食醯頤輅の四字あり、〔生乎九猷〕天瑞篇に再び食醯黄軦の四字あり、〔瞀芮生乎腐蠸〕瞀芮は蟲の名、腐蠸は「成疏」に螢火蟲也とあり、〔羊奚比乎不箰久竹生青寧〕羊奚は草の名、根は蕪菁に似たるもの青寧は蟲の名久は老なり、箰は筍と同じ、「タケノコ」と訓ず、筍を生せざる老竹と交接して菁寧と云ふ蟲を生ずとなり、〔青寧生程〕程は蟲の名、玄英曰く程生馬馬生人未詳所據と、按ずるに此の段天地造化の測られざるを言ふ、其の名及び關繋に至りては、今日より觀れば大に疑ふ可き者あり、大抵にして可なり、〔物皆出於機皆入於機〕機は發動なり、造化を云ふなり、造化は物なし、人既に無より有を生じて又反りて無に歸す、豈唯に人にのみあらん、萬物皆な然らざるはなし、千變萬化始より極りあらざるなり、機變に出入す、之を死生と謂ふ既に變化の無窮を知れば、又安んぞ生を欣び死を惡まん、此の趣旨を體する、之を至樂と謂ふなり、以て此の篇の收結と爲すなり、

名言

人之生也、與憂俱生、壽者惛々、久憂不死、

忠諫不聽、蹲循勿爭、

萬物職職、皆從無爲殖、

生者假借也、假之而生、生者塵垢也、死生爲晝夜、

褚小者不可以懷大、綆短者不可以汲深、

魚處水而生、人處水而死、

達生第十九

此の篇は生命の情を達するものは、形體を養はずして天然に從ふを論ずるなり、元來不朽の形骸なくして不朽の神理あり、形骸の必ず朽ち、形ちあれば必ず毀つは此れ亦た數の制する所の者にて、神理の不朽は本より論なし、斯れ得て毀つなく、此れ亦た數の得て制すること能ざる所なり、人ありてより今日に至るも不腐の人あらざるなり、仙家も亦尸解の言あり、然れば形骸の存するに足らざるや明けし、故に聖哲の士は往くと雖も、其の靈は猶ほ一日の如く、所謂薪盡きて火傳はる是なり、故に莊子惓々として生を養はんと欲するものは必ず神を

を讙に作る、呼聲にて生を云ふなり、兪樾曰く養は讀で恙と爲す、「爾雅」の釋詁に恙は憂なり、若し果して恙ふか、予果して歡ぶか、恙は歡と對す、猶ほ憂と樂と對する如きなり、汝の死憂ふべきに非らざるなり、予の生樂しきに非らざるなり、恙と養とは古字通用と、兪說從ふべし、〔種有幾〕陰陽造物は變轉窮り無きなり、其の種類を論ずれば深く計るべからずとなり、〔得水則爲㡭〕水土之際は水と土と相際して生ずるを謂ふ、㡭は「釋文」に此古絶字、徐音絶、今讀音繼、司馬本作繼、本或作斷、又作斷續とあり、王先謙曰く水舃なり、寸寸節あり、之を拔けば復た生ず、故に㡭を以て名と爲すと、㡭は繼の古字、王先謙以て水潟卽ち水寫なりと爲す曰く、水潟は葉牛舌草に似たり、獨葉にして長し、秋白花を開く、叢を作し、穀精草に似たり、秋末根を采り、暴乾すと、〔水土之際爲鼃蠙之衣〕鼃蠙の衣とは靑苔なり、恰も水中に在りて綿を張る如き、俗に之を蝦蟆衣と云ふなり、〔生於陵屯則爲陵舃〕屯は阜なり、陸舃は車前草なり、既に陵阜高陸の水無き處に生ずれば變化して車前艸となる〔陵舃得鬱棲則爲烏足〕鬱棲は糞壤なり、烏足は草の名、陵舃糞土の中に在れば化して烏足の根と爲るとなり、〔烏足之根爲蠐螬〕司馬彪曰く蠐螬は蝎蟲なりと、「スクモムシ」と訓ず、王先謙曰く蠐螬は蝤蠐と二物なり、「爾雅」の釋蟲に依れば蟦蠐螬の「郭注」に在糞土中とあり、又蝤蠐蝎（和名「キクイムシ」）は「郭注」に在木中と、蟦は疑らくは糞の轉音ならん、乃ち烏足は陵舃の糞土の中に在りて化する者にして其の根糞壤の中に在り、出て蠐螬と爲るなりと、〔其葉爲胡蝶〕其とは烏足を指す、烏足の根は蠐螬に化し、烏足の葉は胡蝶に化すとなり、〔胡蝶胥也〕舊解に胥を以て胡蝶の名と爲す、兪樾は胥也の二字を下に連らねて胡蝶胥也化而爲蟲と讀みて曰く、與下文鴝掇千日爲鳥兩文相對、千日爲鳥言其久也、胥也化而爲蟲言其速也、天瑞篇（列子）釋文胥少也、謂少時也とありと、〔其狀若脫其名爲鴝掇〕脫は皮殼なく、其の狀剝脫したるが如きを謂ふ、鴝掇は蟲の名なり、〔乾餘骨之沫爲斯彌〕乾餘骨は鳥の名、其の口中の沫化して斯彌の蟲と爲るとなり、〔食醯頤輅〕酢甕中の蠛蠓なり、又醯雞と名づく、「カッヲムシ」又は「マクムシ」と訓ず、〔生食醯頤輅〕列子の天瑞篇に

竹、生青寧、青寧生程、程生馬、馬生人、人又反入於機、萬物皆出於機、皆入於機、

【大意】 上文の命有所成の二句を承けて、死生の一理たるを悟り、無情が有情に化し異類相生じたる非常の變化を論じ來りて、至樂は無樂の意なるを結ぶなり、

【通釋】 列禦寇が旅行して路傍に食せしに、百歳程も經たる髑髏を見たれば、蓬を攓いて之を指して曰く、天地の間に唯だ吾れと汝とのみ無二莫逆の親しき友にして、未だ嘗て眞に死せず、又未だ嘗て眞に生きず、所謂る生死あることとなし、汝は果して死を以て安養となすか、吾れ果して生を以て歡樂となすか、未だ一定すべからず、且つ又萬物發育變化の種類を論ずれば、勝げて計るべからざるも、大略は左の如くなり、水を得れば㡭となり、水土の際を得れば鼃蠙の衣となる、陵屯に生ずれば陵舃となり、鬱棲を得れば烏足となり、烏足の根は蠐螬となり其の葉は胡蝶となる、胥は卽ち胡蝶の一種なり、胥は變化して蟲となりて竈の下に生ず、其の形新に皮を脫せるが如くにして其の名を鴝掇となす、掇鴝は千日を經て鳥となり、其の名を乾餘骨と云、乾餘骨の沫は斯彌となり、斯彌變化して食醯となる、其の他頤輅、黃怳、九猷、瞀芮、螢等の諸蟲や、羊奚などの艸が久しく筍を生ぜざる竹と交合して青寧と云ふ艸を生じ、其の艸が豹を生み、豹又馬を生み馬又人を生む如く、天地間の萬物は皆な陰陽二氣の機より出でゝ、終に皆な此の機に入る也、

【解義】〔攓蓬而指之〕攓は拔くなり、從は傍らなり列子旅中路傍に食するの際、枯れ朽ちたる白骨の蓬艸の下に隱れたるを見、遂に蓬艸を拔きて言ふなり、〔惟吾與女云々〕白骨は生を以て死となし、死を以て生となす、列子は生を以て生となし、死を以て死となす、然れば生死各一方を執りて未だ定論となすに足らざるなり、故に未だ嘗て死せず、未だ嘗て生きずと云ふなり、〔若果養乎予果歡乎〕汝は冥々を欣び冥々果して養を怡ぶか、我れは人間を悅ぶ、人間は決して歡ぶべきか、情の遇ふ所に適して未だ定むべからずとなり、司馬本に養を暮に作る、死を云ふなり、又歡

噴聒なり、咸池は堯の樂なり、「成疏」に依れば洞庭之野は天地の間を謂ふとあり、還は繞ぐるなり、咸池九韶は惟人々之を愛し之を好む、然るに魚鳥の諸物は其の聲を聞くを惡むなり、是れ齊侯に說くに堯舜黃帝等の事を以てするは其の人に非らざるを譬ふるなり、〔人卒聞之〕卒は猝ゝ同じ、〔還而觀之〕還は繞なり、〔魚處水而生人處水而死〕魚は水を好みて陸上を惡む、人は陸上を好みて水中を惡む、彼の人と魚とは稟性各自別なれば、好惡も同じからずとなり、〔其好惡故異也〕故は猶本と云ふが如し、〔故先聖不一其能不同其事〕古の聖人は物の性に循ひて、人をして器の如くにして、其の能を一にせず、各其の情に稱うて其の事を同うせず、是れ三皇の道を以て齊侯に說くは深く不可なるを知るとなり、〔名止於實—條達而福持〕夫れ實によりて名を立て、名は以て實を召くものなり、故に名は實に止りて實の外に名を求むるを用ひざるなり、義は宜なり、宜きに隨ふて施し設けて性に適ふのみ、己れを捨て人に効ふべからず、如此の道は條理通達して福德扶持するものと謂ふべしとなり、

列子行食於道、從見百歲髑髏、攓蓬而指之曰、惟予與女知而未嘗死、未嘗生也、若果養乎、予果歡乎、種有幾、得水則爲㡭、得水土之際、則爲鼃蠙之衣、生於陵屯、則爲陵舃、得鬱棲則爲烏足、烏足之根爲蠐螬、其葉爲胡蝶、胡蝶胥也、化而爲蟲、生於竈下、其狀若脫、其名爲鴝掇、鴝掇千日爲鳥、其名爲乾餘骨、乾餘骨之沫爲斯彌、斯彌爲食醯、頤輅生乎食醯、黃軦生乎九猷、瞀芮生乎腐蠸、羊奚比乎不箰久

きは互に歡び樂むべし、夫れ魚は水中に處て生ずるも、人もし水中に處らば忽ち死に至るなり、如此必ず相ひ異なるは天性の自然にして、其の好惡する所隨うて異なるは理の當然なり、故に先世の聖人は其の智能を一にせず、隨うて其の事業も各自の長に任せて其の業を異にするなり、是れ知る三皇の道を以て、齊侯に說くは極めて不可なるを譬ふなり、

【解義】〔顏淵東之齊孔子有憂色〕齊は魯より、東にあり、顏回は西より東に往く、卽ち魯國より齊國に往きて三皇五帝の道を以て齊侯に敎へんとす、孔子は機に當らざるを恐れて憂ふる顏色あるなり、故に門弟の子貢は席を避けて自ら小子と稱して、謹んで夫子憂色あるの由を問ふなり、〔褚小者不可以懷大綆短者不可以汲深〕褚は布袋なり、懷は包藏なり、夫れ布の袋の小は大物を容るべからず、短き繩は深き井戶の水を引き上ぐべからず、此の言管子の言に出づ、孔子之を善しとし引きて以て譬となすなり、〔命有所成而形有所適也夫不可損益〕夫れ人は天の命を受けて愚智各成る所あるものなり、又形を造化に受けて情好も適する所あるなり、故に鳧の足の短かきも、鶴の脚の長きも損益すべからず、其の自然の儘に任して當らざるなきなり、御は迎ふるなり〔魯侯御而觴之于廟云云〕九韶は舜の樂名なり、太牢とは牛羊豕の肉なり、韶樂を奏め太牢を設けて、太廟の中に迎へて之を觴宴するは敬禮を以て之を待遇するなり、〔鳥乃眩視憂悲—三日而死〕夫れ韶樂太牢は乃ち美にして善なれども、之を海鳥に施せば餐ひ且つ聽くべきに非らざるなり、故に目眩み心悲み、數日にして死するなり、恰も三皇五帝の道は高尙にし之を齊侯に施せば聞くべきにあらざるに喩ふるなり、〔此以己養養鳥也非以鳥養養鳥也〕韶樂牢觴は是れ人を養ふの具にて、鳥を養ふの物にあらざるなり、亦猶ほ顏回の己が學術を以て齊侯に敎ふるは樂む所にあらざるがごとしとなり、〔夫以鳥養養鳥者—隨行列而止委蛇而處〕壇陸は湖渚なり、鰌は泥鰌なり、鰷は白魚の子なり、委蛇は寬舒自得の貌なり、夫れ鳥を養ふの法は宜しく、茂林に栖ませ、洲渚に放ち、魚の子を食はしめ、江湖に浮べて群を逐うて飛び、自然に閑放せしめ、此れは鳥を養ふの法を以て鳥を養ふものなり、〔奚以夫譊譊爲乎咸池九韶之樂〕奚は何ぞなり、譊は

而福持、

【大意】 上文の髑髏の無爲なるを承けて、實論譬喩を以て無私自然の福來るを說く、故に福を持つと云はずして福持と曰ふなり、此節は都べて命は成る所あり、形は適する所ありて强ふべからざるの義を論ずるなり、宣穎曰く前三段看破生死、又着此段、乃知不是故作達觀、實理之不得不然耳、攻意全不在遊說人主上と、

【通釋】 顏淵が東の方齊に往きて齊侯に說かんとせしに、孔子憂ふる氣色あり、子貢席を下りて問うて曰く、小子敢て問ふ、今日顏囘が東の方齊國に往かんとするに、夫子憂色あるは何に由て然るかと、孔子曰く善いかな、汝の問ふこと、昔日齊の賢人なる管仲に格言あり、吾は甚だ之を尤なりと思へり、布袋の小なるものは以て大なるものを懷くべからず、綆の短きものは以て深き井戸の水を汲むべからずと、夫れ管子の是の如く言へるは、其の心、以爲らく天命自づから成就する所あり、形は各、適する所ありて、故に損益すべからざるなり、吾れ恐らくは顏淵齊に至りて、齊侯に對し、堯舜黃帝の道を說き、加ふるに燧人氏神農氏の言を以てせば、彼の齊侯は之を內己れに求め得ざるなり、果して得ざれば惑ふならん、惑へば必ず暴怒を發せん、然れば顏囘は爲めに死すならん、且つ汝は聞しことなきや、昔し、海鳥ありて、魯の郊外に止まりたる時に、魯侯は珍らしく思ひて、迎へて之を太廟に觴して、九韶とて舜の音樂を奏して以て樂みをなし、太牢とて牛羊豕の肉の料理を備へて膳となしゝに、鳥は却りて眩視憂悲して敢て一切の肉をも食はず、敢て一杯の酒をも飮まず、三日程立ちて死にたり、此れ自己の欲情の養ひを以て鳥を養ふものにして、鳥の自然に於ける養を以て鳥を養ひしに非ざるなり、夫の鳥の養ひを以て鳥を養ふとは、宜しく之を深山幽谷の林中に栖ませ、之を陸上に遊ばせ、之を江湖に浮べ、之を養ふには鰌鰷の類を以し、又鳥の自由の列に隨うて止まらせ、委蛇として居らしむべし、彼の鳥は惟、人の言を聞くことを惡むものなり、如何でか九韶譊々の音樂を樂むべき、抑も九韶の樂は之を洞庭の野に張れば鳥これを聞きて飛び去り、獸之を聞きては驚き懼れて走るなり、魚族之を聞かば深く水底に下り入るべし、然るに衆人之を聞くと

下席而問曰、小子敢問回東之齊、夫子有憂色何邪、孔子曰、善哉女問、昔日管子有言、丘甚善之、曰、褚小者不可以懷大、綆短者不可以汲深、夫若是者以爲命有所成、而形有所適也、夫不可損益、吾恐回與齊侯言堯舜黃帝之道、而重以燧人神農之言、彼將內求於己而不得、不得則惑、人惑則死、且女獨不聞邪、昔日海鳥止於魯郊、魯侯御而觴之於廟、奏九韶以爲樂、具大牢以爲膳、鳥乃眩視憂悲、不敢食一臠、不敢飮一杯、三日而死、此以己養養鳥也、非以鳥養養鳥也、夫以鳥養養鳥者、宜栖之深林、遊之壇陸、浮之江湖、食之鰌鰷、隨行列而止、委蛇而處、彼惟人言之惡聞、奚以夫譊譊爲哉、咸池九韶之樂、張之洞庭之野、鳥聞之而飛、獸聞之而走、魚聞之而下入、人卒聞之相與還而觀之、魚處水而生、人處水而死、彼必相與異、其好惡異故也、故先聖不一其能、不同其事、名止於實、義設於適、是之謂條達

莊子之を信ぜずして曰く、吾れ司命をして再び子の形を生かし、子の骨肉肌膚を作り、子の父母妻子或は鄕黨の知人に反さんとするか、子は之を願ふかと、髑髏深く矉蹙して曰く、吾れ如何で南面王の樂みを棄てゝ再び人間世の勞苦をなすべけんやと、

【解義】〔莊子之楚―因而問之〕之は適なり、髐然は潤澤なき貌、撽は打擊なり、馬捶は馬杖なり、莊子が楚に征く時に、遇ま髑髏の容、骨肉朽ちて潤ひなきを見て、馬杖を以て打擊して之に問ひ、死生の理均齊なるを明さんと欲して、故に髑髏に寄せて寓言答問するなり、〔曰夫子貪生云云〕夫子は髑髏を指して云ふ、貪生は己が生命を長くせんと求むるを謂ふ、失理は自然の道理に悖り違ふを謂ふ、爲此とは性命を夭折して此の骸骨たるに至りしや、〔亡國之事斧鉞之誅〕亡國之事は征戰の事を謂ふ、斧鉞之誅は罪を犯して誅殺せらるを謂ふ、〔不善之行愧遺父母妻子之醜〕或は姦盜不善の行を爲して、世間の人共に惡まれ、人倫上恥づる所爲にて、父母妻子の恥辱を慚ぢて死したるを謂ふ、〔將子有凍餒之患〕餒は餓なり、貧窮にして衣糧に乏しく、飢凍に患へて死したるを謂ふ、〔將子之春秋故及此乎〕春秋年紀の如きなり、老年に及び自然の命數にて死したるを謂ふ、〔於是語卒援髑髏枕而臥〕卒は終なり、援は引なり 髑は音獨、髏は音樓、初め枯骨に逢うて馬杖を引きて之を擊ち、語既に終りて、白骨を枕にして臥するなり、〔夜半髑髏―子欲聞死之說乎〕子の言ふ所は皆是れ生人の累患なり、死せば此の憂ひもなし、子は生人にて死人の說を聞かんと欲するか、莊子睡眠中に此の夢に感ずるなり、〔髑髏曰死無君於上云々〕夫れ死は魂氣が天に昇り、骨肉は土中に歸して、既に四時炎涼の事もなく、安くに君臣上下の累ひあらんや、從容として天地陰陽と其の壽命を同くし、南面孤と稱する王侯貴人の樂みも亦之に過ぐる能ざるなり、〔髑髏深矉蹙頞曰吾安能棄南面王樂而復爲人間之勞乎〕矉は音頻、感は顰又蹙に同じく、共に愁ふ貌なり、既に莊子の骨肉に復り鄕里に歸るの說を聞きて、愁ひて曰く南面王たる死人の樂を棄てゝ、復た生人の勞苦を爲さんやと、

顏淵東之ㇾ齊、孔子有リ二憂色一、子貢

則無此矣、子欲聞死之說乎、莊子曰、然、髑髏曰、死無君於上、無臣於下、亦無四時之事、從然以天地爲春秋、雖南面王樂、不能過也、莊子不信曰、吾使司命復生子形、爲子骨肉肌膚、反子父母妻子閭里知識、子欲之乎、髑髏深矉蹙額曰、吾安能棄南面王樂、而復爲人間之勞乎、

【大意】 西仲曰此の段は生死を齊くするの意、看得て活動す、「淮南子」曰く、始め吾れ未だ生せざるの時焉ぞ生の樂を知らん、今吾れ未だ死せず、焉ぞ死の樂からざるを知らん、若し莊子は生を厭ひ、死を歆するの心ありと說かば、便ち是れ痴人の夢を說くなりと、要するに上文の假借の字塵垢の字を受けて一髑髏に託して無爲の樂を說くなり、而して「從然以天地爲春秋、雖南面王樂不能過也」の本文の數句を以て眼目とす、「南華經解」に死者之況、生者言之不似也、託之髑髏妙矣、

【通釋】 莊子が楚國に往きし時、途中にて空髑髏を見たり、髐然として潤澤なく形あり、莊子馬捶を以て之を撽ち、因りて髑髏に向ひて曰く、夫子は生を貪り理を失うて如此成り果てしか、將た足下は亡國の事、斧鉞の誅ありて此に至れるか、將た足下は不善の行ありて、父母妻子の醜辱をのこさんことを愧ぢて此に死せるか、將た足下は凍餒の患ありて此に死せるか、將た又足下は年壽を以て此に死したるかと、是に於て語り卒りて髑髏を援りて之を枕にし打ち臥したるに、夜半に方り髑髏、夢に見えて曰く、足下が談ずる所は總て辯士の口吻に似たり、足下が問へる語は皆人の生きて居る時の累患にて、死すれば此の累患なし、足下死の說を聞かんと欲する乎と、莊子曰然りと、髑髏曰く、死すれば上下君臣の類なく、又春秋四時の事なく、從容として天地を以て春秋となす、其樂みたるや南面の天子と雖も之に過ぐる能ざるなりと

の中のものとなりて、此の如く我に瘍を生ずることと爲れり、されば我何ぞ惡み嫌はんや、嗚呼此の生すら我が有にあらず、假借の物なり、況や左肘の柳をや豈に言ふに足らんや、

【解義】〔支離叔〕支離は支體の離析にて、不具者のことなり、解已に內篇の德充符に見ゆ、叔は字なり、名未だ詳かならず、本より莊子寓言の人なり、〔滑介叔〕「成疏」に滑介猶骨稽也とあり、智を忘るゝの譬へなり、叔世の澆訛を寓して、故に叔と名づけしなり眞に其の人あるにあらず、〔冥伯之丘〕冥伯は丘の名なり「成疏」に冥、闇也、伯、長也、言神智杳冥堪爲物長とあり、卽ち杳冥の處に喩ふ、「宣注」は曰く冥伯死者之稱と、〔崑崙之墟〕崑崙は山の名、墟は大丘なり、〔俄而柳生其左肘〕「釋名」に柳は瘤に通ず、「コブ」と訓す、內起の病なり、「成疏」は柳を字の如くに解し、曰く柳者易生之木、木者棺槨之象、此是將死之徵也と、〔蹶蹶然惡之〕蹶々は驚動の貌、〔予何惡〕言心は瘤の身に生ずる假借なり、人の生ある亦假借なり、我本と身なし、天地の氣を假合結聚し、借りて一身を成せり、然れば生は塵垢なり、穢累なり、眞物に非ざるなり、故に生は晝の如く、死は夜の如く、天地に晝夜の別あれば人も亦生死なからん、我が君と同遊して變化を觀て、天地の變化と同化す、何ぞ瘤を嫌ひ惡まんやとの意、故に至樂の道に合ふとの寓言なり、

莊子之楚、見空髑髏、髐然有形、撽以馬捶、因而問之曰、夫子貪生失理而爲此乎、將子有亡國之事、斧鉞之誅、而爲此乎、將子有不善之行、愧遺父母妻子之醜而爲此乎、將子有凍餒之患、而爲此乎、將子之春秋故及此乎、於是語卒、援髑髏枕而臥、夜半髑髏見夢曰、子之談者似辯士、諸子所言、皆生人之累也、死

如くに踞くまり敖然として自から樂むなり、鼓は擊なり、〔何能無槩然〕槩は感なり哀亂の貌、又概に通ず、驚嘆なり、〔芒忽之間〕芒忽は忽荒と同じ又恍惚に作る既に見ゆ、〔偃然寢於巨室〕「成疏」に偃然安息の貌也、巨室謂天地之間、とあり「釋文」に巨大也、司馬彪云、以天地爲室也と、〔噭噭然〕噭は叫と同じ、叫叫は哭聲なり、〔自以爲不通命〕夫れ余等を安息せしむるに死を以てす、天地の間に臥す彼の炎涼何を以て來らん、然るを哀慟すれば、自から天命の流行の理も知らざるに似たり、故に哭を止めて盆を鼓して歌ふと惠子に答へしなり、是れ莊子の達觀せし高見にあらずんば能はざるなり、

支離叔與滑介叔觀於冥伯之丘、崑崙之虛、黃帝之所休、俄而柳生其左肘、其意蹷蹷然惡之、支離叔曰、子惡之乎、滑介叔曰、亡、予何惡、生者假借也、假之而生、生者塵垢也、死生爲晝夜、且吾與子觀化、而化及我、我又何惡焉、

【大意】此節は大抵上文の義にて、唯上文は妻の死を以て無爲の理を說き、此れは己の病を以て、無爲の理を說くの別ある耳、而して上文の不通於命の命の字を受けて、生者假借也の數字を眼目となす、

【通釋】支離叔が滑介叔と、冥伯と云へる丘、崑崙と云へる墟にして昔し黃帝曾て休息せし所に見物したるに、俄かにして滑介の左肘に瘍を生じたれば、其の心に驚き動きて之を惡みきらへり、支離叔が曰く、足下は柳の左肘に生じたるを惡むかと、滑介叔答へ曰く否な、吾れ如何ぞ之を惡まん、夫れ生は陰陽の二氣五行四支百體假りに結び來りて、之を借りて身を成すものなり、生既に假なり、又之を假りて生生を遂げるものなれば、是れ塵垢の相集るに過ぎざるなり、然れば死生は卽ち天に晝夜あると同然なり、且つ君と同じく冥丘に於て天地の物化を觀て、我等も又化

是其始死也、我獨何能無槪然、察其始而本無生、非徒無生也、而本無形、非徒無形也、而本無氣、雜乎芒芴之間、變而有氣、氣變而有形、形變而有生、今又變而之死、是相與爲春秋冬夏四時行也、人且偃然寢於巨室、而我噭噭然隨而哭之、自以爲不通乎命、故止也、

【大意】　莊惠二子淡水の素交を爲す、既に死亡あれば理に於て宜く往いて弔すべきなり、今此の二子の交誼に寓せて命に通ずるものは能く無爲なるの理を寓すと、

【通釋】　莊子の妻死したるとき、惠子往て之を弔ひたるに、莊子丁度兩足を長く伸ばして、盆をたゝき、節を取りて歌を歌うて居れり、惠子怪みて曰く、貴君は永く令妻と同棲し、子孫を長養し、今日漸老いて死亡せるに、哀哭せざるさへ常禮に非ざるに似たり、然るを盆を叩て歌ふとは餘り人情に缺けたることならずやと、莊子曰く、否々然らず、余も天地の間に棲息する人なれば、妻の死亡したる時は、如何でか槩然として驚かざらんや、去りながら其の原始を察するに、本來生も無きものにて、只に生も無きのみならず、元來形も無きもので、只に形が無きのみならず、本來氣といふものなきなり、其の氣の生ずるは天地混沌の中に造化し來りて、陰陽の二氣となるなり、此の二氣變じて形となる、形既に成りて始めて生あるなり、此は無より有を生じ、方に生き方に死するなり、然れば今有より無に復し、變化して死したるなり、宛然春夏秋冬四時の往來循環極りなきと同然なり、今余が妻偃然として安息して、天地の間に寢ぬるなり、然るに余叫叫然として大聲を揚げて哭せば、春夏秋冬天命流行の理に達せざるものなり、故に哭を止むるなり、

【解義】〔箕踞鼓盆而歌〕「成疏」に箕踞者、垂兩脚如簸箕形也、盆、瓦缶也、とあり、兩脚を垂れ箕形の

【大意】此段は無爲二字眼目にて、無爲なれば至樂に適ひて一身を活するに足ることを論ず、言ふ心は天下の事唯無爲なれば道に庶幾するなり、天は元來無心にして清く、自然に清虛なり、地も亦無心自然にして寧靜なり、故に天地無爲にして陰陽の兩儀相合し、升降災福萬物化生す、若し天地有心して之を爲さば能はざるなり、人も亦此の無爲自然に從ふべし、

【通釋】天下の是非は果して甲乙互に異にして、未だ一定すべからず、然れども唯無爲にして虛心恬淡なるときは、是非兩ながら忘れて公平無私なるが故に反りて是非を定むべし、又俗人の樂みと爲すことは上に述べしが如く、死に趣くと同じきものなるが、眞の至樂は、以て身心を養ひ、天命を終ふべし、而して唯無爲なるときは長に存するに近し、されば無爲こそ眞の至樂と申すべきなり、試みに之を言ん、天地共に無心無爲にして萬物化生す、若し有心有爲なれば萬物を化生すること能ざるなり、芒々乎忽々然として從つて出づるなく、造化物を生じて恍惚として測り難く、其の從ひ出づる所を尋ぬるに其形を視るなし、然るに萬物繁多生々して已まず、各主とする所ありて、種植豈に有爲ならんや、故に天地は無爲にて爲すなり、人亦然り、無爲なれば樂みなくして、至樂も至るなり、

【解義】〔至樂活身〕上文の俗樂皆傷生の具たるを論ぜしに對して、唯だ至樂の活身の道たるを云ふ、〔唯無爲幾存〕「成疏」に幾は近なり、存は在なりとあり〔故兩無爲〕天地共に無爲なるを云ふ、〔芒乎芴乎〕「釋文」に芒音荒、芴音忽とあり、郭慶藩曰く芴芒卽忽荒也、「淮南子」原道篇高注忽怳無形之象、「文選」七發李注引淮南作忽荒と、又芒は茫と通ず、廣昧の貌、芴は忽と通ず、無本の貌との說あり又通ずべし、〔萬物職職〕職職は繁多なる貌、春は生じ夏は長し、萬物繁多自然に生じ、其の源流を尋ぬるに無爲にして種植するのみ、

莊子妻死、惠子弔之、莊子則方箕踞鼓盆而歌、惠子曰、與人居、長子老身、死不哭、亦足矣、又鼓盆而歌、不亦甚乎、莊子曰、不然、

譽無レ譽、

【大意】 世俗一般の人は、色聲を以て樂となし、貪染を以て心となせども、眞の至樂は虛淡無爲に在りて、俗人と苦樂の相反するを云ふ、故曰俗之所ニ大苦一也との本文ある所以なり、至樂至譽の四字上文の富貴爭名の字と相應して一篇の綱領なり、

【通釋】 一方の是は一方の非と爲りて、未だ定らざること此の如し、されば世人は富貴榮華金玉色聲等を上樂とし、美味美言佞善等を令聞令譽とし、擧世群聚競爭して皆最上の歡樂となすも、予より之を視れば誙々然と死に趣くも止まざるが如きものにして吾は未だ之を樂みと爲さず、然しそれと同時に、之を樂まずとも爲さず、然らば果して樂てふことが有るか、有る無きか、吾は以爲らく、無爲恬淡なるこそ眞實なる至樂の存する處なり、然れども世人は大に之を苦みとなして、其の味ひを知らざるなり、故に曰く至極の樂みは反りて樂みなく、至極なる譽は反りて譽れなし、畢竟至人と俗人と好尙の相反すればなり、

【解義】 〔誙々然如將不得已〕「成疏」に誙誙趣ニ死貌也、已止也とあり、擧世の人歡樂とする處に群聚競走して死に至るも止息する能はざる也、誙音は「カウ」、〔至樂無樂云々〕至樂は無爲なり、故に世人得て樂む處なきなり、至譽は至德廣大にて、俗得て賞譽するを得るなきなり、乃ち其の樂みは俗人と異るも樂みは矢張り樂なり、其の味を知るものは道を學ぶ人にあらざれば能ざるなり、

天下是非果未レ可レ定也、雖レ然、無爲可三以定二是非一、至樂活レ身、惟無爲幾レ存、請嘗試言レ之、天無爲以レ之淸、地無爲以レ之寧、故兩無爲相合、萬物皆化、芒乎芴乎而無レ從出一乎、芴乎芒乎而無レ有レ象乎、萬物職職、皆從二無爲一殖、故曰、天地無爲也、而無レ不レ爲也、人也孰能得二無爲一哉、

より根し來る、而して「故曰忠諫不レ聽」の正證と、子胥は諫爭して死するの反證を以て、一正一反に善ありや否との意を論ずるなり、

【通釋】忠勇義烈の士は、世人の爲めには善として尙べども、其一身の上より視れは決して善にあらず、性命を全うし安逸を得る能ざるなり、世人よりは時難を救ひ尊敬さるゝも、一身の壽命を保全すること難し、然れば吾人は列士等が一世の難を救ひ治め、實に善事なれども、それが眞實善事なるか、又眞に不善なるかを知らざるなり、萬一國難を救ふを以て最大なる善行とすれば、其の一身は難に赴くを以て、活くるを得る能はず、されば全く善にも非るべし、之に反して國難等に殉ずるを以て不善とすれば、己が一身を捨つるも、多くの國人は賴りて救はれて活くるを得るなり、されば必しも不善にあらず、故に曰く君を忠諫して聽かれざる時は蹲循とて自分の身を卑下して君に循ひ與に是非を爭ふこと勿れそれが爲めに昔は吳の伍子胥は君を諫爭して身は誅戮せられたり、然し諫爭せざる時は名譽も同時に成らず、乃ち諫爭すれば殺され、殺されざれば忠義の名は立たず、されば誠に天下に善と云ふ者ありや、抑も善は有ること無きものなるか、

【解義】〔蹲循勿爭〕蹲、或は踆に作る、循は巡と通ず、漢書に巡行郡國を循行郡國に作る、是れ其の證なり、蹲循とは踆巡と同じ、卻退なり、「宣注」は曰く蹲卑レ身也、言諫レ君而君不レ聽、當二卑レ身循一レ君、勿二與爭一レ善と、〔子胥爭之〕子胥は姓は伍、名は員、吳王夫差を諫めて殺さる事、既に内篇に解せり、又十八史略の卷の一に見ゆ、

今俗之所レ爲、與二其所一レ樂、吾又未レ知二樂之果樂邪、果不一レ樂邪、吾觀二夫俗之所一レ樂、擧レ群趣者、誙誙然如レ將レ不レ得レ已、而皆曰レ樂者、吾未二之樂一也、亦未二之不一レ樂也、果有レ樂無レ有哉、吾以二無爲一誠樂矣、又俗之所二大苦一也、故曰至樂無レ樂、至

早く仕事を働き、多く財貨を積み重ねて、而かも之を世間有用に散ずることを爲さず、卽ち身は徒に金の番人に生れたるものにて、其の形軀上の爲めに計ることも亦的外れなることなり、夫れ貴顯なる位に居り、厚祿を食む人は、終日仕事を爲して足らず、夜を以て日に繼ぎ、晝夜共に斯くすれば都合宜きか、宜からざるかと只管噛り付きの工夫にのみ心膽を碎くことを爲せるが、是れ全く利祿の爲めに己が心思を苦勞し、身は利祿の犧牲も同樣にして、己が身の自由は無きことなれば、其の形軀上の爲めに計ることも、亦已に疎慢にして周到ならず、斯の世に生れ來るや憂慮と俱にせるものにて、卽ち憂慮は一生涯の間、苟も命の有らん限りは、必らず有るが當然なり、然るに彼の壽老長命を希へる者は惛々と精神が闇く、久しく憂苦しながら、死して此の苦境を脫することを思はず、何ぞ其れ自ら苦しむの甚しきや、是れ又其の形體の爲めに計るも亦迂遠なるなり、卽ち世人が富貴壽を慕ひ願へるは、固より精神を後にして、形體を先きにする謬見より出でたるも、更に一步を進めて言へば、形體上の計に於ても亦失ひたる者なり、

【解義】〔苦身疾作〕苦身は身を勞苦すること、疾作は勤作なり、〔思慮善否〕「成疏」は晝夜思慮獻可替否と解し、宣注は爲固位計也と云へり、今後說に從ふ〔惛々久憂不死〕惛々は心の昏闇なるを謂ふ、宣穎は惛々久憂を一句と爲し、不死を一句と爲せり、

列士爲天下見善矣、未足以活身、吾未知善之誠善邪、誠不善邪、若以爲善矣、不足活身、以爲不善矣、足以活人、故曰忠諫不聽、蹲循勿爭、故夫子胥爭之以殘其形、不爭名亦不成、誠有善無有哉、

【大意】此節善の一字を貼して以て眼目と爲す、而して謂はゆる善なる者は果して眞の善なるか、不善なるか、未だ得て知るべからざるを云ひ、以て世の迷ひを喩す、文中の活身活人の語は上文の「可活身者」

【大意】世俗の苦樂と爲す所は、共に只形體上に止まりて、其の眞を得ざるを言ふ、

【通釋】天下世俗一般の人々の尊重する所のものは家富み財貨多く、身分貴く、一門繁榮壽命長久名聞令譽の後世に傳ふに足るをいふなり、又至りて歡樂とする所は、身は安樂に美味口に爽ひ、麗服を身に着け美好の色が目を悦ばし、面白き音樂が耳を娛ましむるをいふなり、卑下として嫌ひ厭ふ所は、貧しく、身分賤しく、若くは夭折とて短命夭死し、又は醜惡な名評判なり、又其の苦しむ所は、以上と反對にて身は安逸なるを得ず、口は美味を味ふを得ず、形は美服を着くるを得ず、目は美色を樂むを得ず、耳には面白き音樂を聽くを得ざるをいふなり、若し之を得ざる時は大いに憂へて懼れを爲す、凡て世俗の人は多く此の如くなるが、是れは全く形體を修むるためで、道を學ぶ人より視れば、甚だ愚にして且つ癡ならずや、大憂の二字此一節の眼目なり、要するに俗人の情は大概如此にて、形體上の樂みに過ぎず、一愚字を以て斷按となすなり、

【解義】〔壽善〕壽は長壽を謂ふ、善は令譽なり、〔音聲〕音樂なり、音は笛等にて、聲は鐘等にて、凡て宮羽等の音樂なり、〔夭惡〕夭は「玉篇」に短折也、不ㇾ盡二天年一謂二之夭一、とあり、幼にして死することなり惡は惡名にて不名譽をいふなり、〔爲形也〕爲は去聲に讀んでためとす、

夫富者苦ㇾ身疾作、多積ㇾ財而不ㇾ得二盡用一、其爲ㇾ形也亦外矣、夫貴者、夜以繼ㇾ日、思二慮善否一、其爲ㇾ形也亦疏矣、人之生也、與ㇾ憂倶生、壽者惛惛、久憂不ㇾ死、何之苦也、其爲ㇾ形也亦遠矣、

【大意】世俗の人の富貴壽を重んずるの計は形體上に重きを置けるより出づれども、畢竟するに、精神上は勿論、形體上の計に於ても已に謬れるを云ふ、此節富貴壽の三者を分說す、上文の天下有至樂の句に根し來る、

【通釋】夫れ富豪の人は身體を苦しめ、疾作とて手

恬愉は無爲の中に樂み存すればなり、然るに世俗は無爲を以て苦みと爲すは、此れ他なし、皆な生を欲するの一念ありて之が累を爲せばなり、之を要するに世俗の樂む所は名は生を愛するも實は大に之を傷けるなり、莊生蓋し無爲中に活あるの理を說きて世俗の迷夢を醒さんとの意ならんか、

天下有至樂無有哉、有可以活身者無有哉、今奚爲奚據、奚避奚處、奚就奚去、奚樂奚惡、

【大意】此れ假問の辭なり、乃ち天地の中に頗る至極歡樂なる所がありて、以て身體と性命とを養ひ活すべきものありや否やとの意、〇至樂を說き出だす處の句法、屈原の卜居篇の如くにして下文の分說を待ちて、其の意始めて明らかなり、後世論文の冐頭あるが如し、

【通釋】天下に至極せる快樂の事ありと、然し實に左樣なること有るか、天下に身を活かして行く可き道ありと、然し實際左樣なる事あるか、さて今至樂の道を行ひ、以て一身を活さんと欲するものは、まさに何んの爲す處か、何れに依據するか、何れを諱み避け何れに安じて處り、何れに就き從ひ、何れを捨て去り、何れをか歡び樂み、何れをか惡み嫌ふ者なるか、豈に疑問ならずや、

【解義】〔至樂〕樂は音洛、歡ぶなり、至は極なり、至極歡樂を云ふなり、〔奚爲奚據〕奚は何なり、又惡なり、皆何れにと場所を指して云ふ辭なり、「副墨」に曰く二無有哉、反詰之意、今奚爲奚據、正詰之詞と、要するに以上は共に問詞なり、

夫天下之所尊者、富貴壽善也、所樂者、身安厚味美服好色音聲也、所下者、貧賤夭惡也、所苦者、身不得安逸、口不得厚味、形不得美服、目不得好色、耳不得音聲、若不得者、則大憂以懼、其爲形也、亦愚哉、

文を讀みて輟めざりしは、いかに會心の所ありけむかし、

名言

井鼃不可以語於海者、拘於虛也、夏蟲不可以語於氷者、篤於時也、曲士不可以語於道者束於敎也、吾在天地之間、猶小石小木之在大山也、方存乎見少、又奚以自多、

計人之所知、不若其所不知、其生之時、不若未生之時、

自細視大者不盡、自小視明者不明、

可以言論者、物之粗也、可以意致者、物之精也、言之所不能論、意之所不能察致者、不期精粗焉、

道人不聞、至德不得、大人無己、

以道視之物無貴賤、以物視之自貴而相賤、以俗視之貴賤不在己、

知道者必達於理、達於理者必明於權、明於權者不以物害己、

牛馬四足、是謂天、落馬頭、穿牛鼻、是謂人、

夔憐蚿、蚿憐蛇、蛇憐風、風憐目、目憐心、

水行不避蛟龍者、漁父之勇也、陸行不避兕虎者、獵夫之勇也、白刃交於前、視死若生者、烈士之勇也、知窮之有命、知通之有時、臨大難而不懼者、聖人之勇也、

用管闚天、用錐指地、

學行於邯鄲、未得國能、又失其故行矣、直匍匐而歸耳、

子非魚、安知魚之樂、子非我、安知我之樂、

至樂第十八

此篇の大意は樂の一字に在り、道を學ぶの人と、世俗の同く尙ぶ所も皆な是れ樂の一字なり、故に「孔子曰、樂在其中矣」、「孟子亦曰、樂莫大焉」、但し世俗の至樂となす所は、富貴壽善衣服飮食等の形骸上の享受にありて、道を學ぶ人の至樂となす所は、情性の恬愉に存するものなり、其の名目は同じくして其の實は大に異れり、夫れ形骸の享受を以て樂みと爲すは、是れ拘身の桎梏、伐性の斧斤にて樂みと爲すに足らず、却て一身の累をなす、性情の

【解義】〔遊於濠梁之上〕濠は川の名、梁は石橋なり、濠水の石橋の上に遊べるなり、「成疏」に濠是水名、淮南鍾離郡、今見有莊子之墓、亦有莊惠遨遊之所、石絶水爲梁、亦言、是濠水之橋梁、莊惠清談在其上也と見えたり、〔鯈魚出遊從容〕鯈魚は小魚の名、「ハエ」の類なるべし、鯈は疾き意なり、疏に、鯈魚白鯈也と見え、釋文に、李注に、音由、白魚也、爾雅云鮂黑鰦、郭注、卽白鯈也、一音篠、謂白鯈魚也、と見え、「正字通」に鰷田聊切音迢、白鰷形狹而長、若條然、「詩」周頌鰷鱨鰋鯉、毛傳白鰷也、と見えたり、從容は、容姿の優裕して迫らず急がぬ狀を云ふ、「成疏」に、從容放逸之貌也と見えたり、〔是魚之樂也〕魚は水に游ぎ、鳥は陸に棲めるは、各其の性に率ひて逍遙す、然るに、莊子は善く物情に達するを以て、魚の游ぎて樂めるを知れるなり、〔子非魚安知魚之樂〕惠子は物情に達せざるが爲に、莊子が魚にあらざる故に、魚の樂みを知らざらむと質疑を試みたるなり、〔子非我安知我不知魚之樂〕惠子は我の魚にあらざるを知るべくば、我が魚にあらずとも亦魚の樂みを知るべきとなり、是は相與に知るにあらざれば、相知るべからざるの義を明さむが爲に設けたるなり、〔惠子曰我非子云云〕上條に魚にあらざれば、いかでか魚の樂みを知らんと云へるのみにては、事足らずとて、更に我と子と相知らずと雖ども猶同じく人たり、然れども魚に至りては異類なれば、決して知るを得ず、全く相知るの理なしと難ずるなり、「義海」に曰く全矣、全猶必也、猶言全然不知魚樂之意と、〔請循其本〕循は「タヅヌル」と訓ず、惠子が辯口に任せて無理を言ひ張りて、其の論據を失ふを以て莊子は先づ其の源を尋ねて難ずる事なかれと云ふなり、〔子曰汝安知魚樂云者云云〕子曰とは、莊子が惠子を稱する辭なり、惠子の本言を尋ぬれば、魚にあらざれば相知るに由なしと云へり、其の言に由りて既に我の魚にあらざるを知れるは、我にあらずして我を知れるの證とすべし、されば我が魚の自適を知るも何ぞ妨あらむとなり、要するに、常人は常に眞性に昏迷するを以て、憂患相尋ぐに至る、然るに、莊子は唯能く其の樂を自得するが故に、魚の樂を知る、それ魚の江湖に相忘れ、人の道術に相忘れ物我一體、之を至人の極數とす、傳へ聞く、昔者鐵脚道人雪に和し、梅を嚼み、此の

樂、惠子曰、我非子、固不知子矣、子固非魚也、子之不知魚之樂、全矣、莊子曰、請循其本、子曰、汝安知魚樂云者既已知吾知之而問我、我知之濠上也、

【大意】　此には、莊子が惠子と鯈魚の出遊を見て人能く物情に達する時は、推して知る事を得べきを言ひて、其の眞に反る事を說く、宣穎曰く此段發反其眞意也反眞則眞在我安往而不與物同樂乎、其寓意俱在若離若卽之間と、

【通釋】　莊子が惠子と濠水の石橋の上に遊べる際に、鯈魚が水面に浮びて自由に游げるを見て、是こそ魚の樂みなれと云へば、惠子之を疑ひて、子、魚にあらずんばいかでか其の樂しき意を知らむやと云ふ、莊子答ふるやう、子は我が魚にあらざるが爲に魚を知るを得ずと云はゞ、子は既に我にあらざれば、何ぞ我を知るを得む、若し子が我にあらずして我を知ると云ふを得ば、我が魚にあらずといふとも、何ぞ魚を知れりといふに妨げあらむやと、反問して、其の難なきを告ぐれば、惠子は曰はく、我は莊子にあらざるが故に、莊子を知らず、莊子は必ず魚にあらざれば、いかでか魚の樂めるか樂しまざるかを知るを得べきと、其の本を捨てゝ十分に言ひ張りぬ、是に於て、莊子更に告げて曰はく、請ふらくは、子其の無理を言ひ張る事を止めて、其の我に問へる本意に立返れかし、子は云はずや、魚にあらざれば、魚の心を知るに由なしと、然して、今子は我にあらざるなり、而も子は我に向つて安くにか魚の樂みを知らむと云へるを見れば、是則我の魚にあらざるを知れる證なり、且子は既に我にあらずして我を知り、我を知れる上に、而も我に問ふ、然らば、我も亦何ぞ我が魚にあらずして魚をを知り魚を知りて魚を歎ずるに妨げあらむや、抑天地の間物性同じからず、況や水と陸とあるもの、亦其の數を殊にせり、然れども、其の理に達せる者は、其の情を我が身に引當てゝ見れば、今此の濠上に彷徨しても、濠下に魚類が自適せるを知るに足れり、如何で特に水に入りて後に始めて知るとせむやとなり、

甘泉にあらざれば飲む事なし、然るに、鳶あり、腐敗せる鼠を得て自から其の味を美なりとせるに、會、鵷雛之を過ぎれば、鳶は之を仰ぎ視て必定腐鼠を奪はるゝならむと思惟して、大に怒りて一聲クワッと叫びぬといふ、今君は梁國の相たるを以て、榮となし、我を猜疑して、奪はんかと恐るゝは、彼の鳶が腐鼠を以て美物なりとして仰ぎ視て鵷雛を嚇怒せるに似たらずやと云ふなり、

【解義】〔惠子相梁〕惠子、名は施、宋の人、梁惠王の相となる、博識を以て聞えたり、相は君王を輔けて大政を行ふ者、「禮記」月令命相布德和令と見え、又「呂覽」擧難に相也者百官之長也と見えたり、〔惠子恐搜於國中〕搜は音「シウ」匿れて見えぬものをさがす意正しくは、挍に作るべし、釋文に挍字又作搜或作廋、所求反、李悉溝反、云索也、「說文」云、求也、盧文弨曰、今本作搜と見えたり、〔其名爲鵷雛〕鵷雛は「成疏」に、鵷雛鸞鳳之屬、亦言鳳子也、と見え、「文選」子虛賦に、鵷雛孔鸞と見え、「漢書」司馬相如傳には、宛に作れり、鳳の屬なるべし、〔非梧桐不止〕梧桐は「アヲギリ」なり、梧桐科に屬する落葉喬木なり、〔非練實不食〕練實は竹の實なり、「潛確類書」の注に、練竹實也、取其潔白と見え、「淮南子」時則訓の注に、練實鳳凰所食也、と見えたり、〔非醴泉不飲〕甘くして味の美味なる天水なり、李注に、泉甘如醴と見えたれど、「爾雅」釋天に、甘雨時降、萬物以嘉、謂之醴泉と見えたれば、普通に云ふ甘酒（一宿に熟する酒）の意にはあらず、靈泉なり、〔鴟得腐鼠〕鴟は鳶の類、「倭名類聚抄」に鴟、本草云、鴟、一名鳶、（上音祇、下音鉛、亦作鳶度比、）「爾雅」云一名鴽喜食鼠而大目者也と見え、「箋注倭名類聚抄」に辯あり、參看すべし〔仰而視之曰嚇〕嚇は音「カ」又「カク」の兩音を用ゐる、司馬注に嚇怒其聲恐其奪己也、「詩箋」云、以口拒人曰嚇と見え、又「正義」に怒而拒物聲也と見え、「正字通」に嚇呼白切、音赫、怒也、通作赫と見えたり、

莊子與惠子遊於濠梁之上、莊子曰、儵魚出遊從容、是魚樂也、惠子曰、子非魚、安知魚之樂、莊子曰、子非我、安知我不知魚之

するの具とす、故に之を珍貴とす、〔巾笥而藏之〕笥に入れて、之を藏め、巾を以て之を覆ふ、巾は今の袱紗のごとし、〔曳尾塗中乎〕塗は泥なり、土の水に雜りて融けたるもの、「正字通」に塗音徒泥也、と見えたり、泥中に尾を曳くとは、賤しきながら生きて身を全くするを云ふ、〔二大夫曰云云〕二大夫は性に率ひて莊子の無爲にして身を全うせむ方に答へたるなり、〔吾將曳尾於塗中〕我が性に適へる方法を取りて、身を全うせむといふなり、是蓋し彼の犧を恐るゝ段と趣を同じうせり、

惠子相梁、莊子往見之、或謂惠子曰、莊子來欲代子相、於是惠子恐搜於國中、三日三夜、莊子往見之曰、南方有鳥、其名鵷雛、子知之乎、夫鵷雛發於南海、而飛於北海、非梧桐不止、非練實不食、非醴泉不飮、於是鴟得腐鼠、鵷雛過之、仰而視之曰嚇、今子欲以子之梁國而嚇我耶、

【大意】此には富貴名譽攘奪するに至りては、是名に殉ふの最甚しき者たるを以て、之を擧げて證し、以て物の嗜好同じからず、願望各極りあることを說く、

【通釋】宋人惠施博識にして聞く事多く、莊子の親友たり、嘗て梁惠王の相たる時、莊子往きて之を見むとす、或人莊子の才德衆に超えたるを以て、王の必ず之を用ゐむには、恐らくは爭奪の事あらむとて、惠子に告ぐるに、此の事を以てす、是に於て、惠子國人の言を聞きて、實なるべしとなし、大に恐れ、兵を揚げて三日三夜、國中を搜索し、以て莊子を尋ねたり、かゝる程に、莊子は往きて之を見て、譬を設けて說いて曰はく、南方に鳥あり、其の名を鵷雛と稱す、名鳥なり、以て來儀祥瑞の物とす、君それ之を知れりや、かの鵷雛は、南海より飛び出でて、北海に至る、梧桐にあらざれば止まらず、竹の實にあらざれば食はず、

骨而貴乎、寧其生而曳尾於塗中乎、二大夫曰、寧生而曳尾於塗中、莊子曰、往矣、吾將曳尾於塗中、

【大意】 此には、道を知る者は、國爵に戀々たらず、其の分に安んじて、無爲を全うするを說く、宣穎曰く此段二發無以得殉名之意一也國爵又殉名者所傾慕也、故又以此證焉と、

【通釋】 莊子濮水に出でて、魚を釣りて居たるに、楚の威王莊生の賢を知り、屈請して卿となさむとし、玉帛を齎らし、爰に使者を發して、濮水に至らしめ、先づ其の意を述べ、國境の內を以て 賢人に委託せむといふを以てす、王事頗る繁忙、故に之を累はさむと云ふなり、莊子之を聞き、釣竿を持ちながら、顧みずして曰はく、吾聞く所に據れば、楚國に神異の龜あり、故に刳いて以て卜に用ゐ吉凶を決せむとす、(龜卜の法支那太古よりあり)之を貴重するが故に、盛るに笥を以てし、之を覆ふに袱紗を以てし、之を朝廷に藏め國家の大事を占するに用ゐむが爲に頗る之を貴重せり、其の龜の刳かれてより今日に至りて已に三千歲なりとぞ、此の龜はむしろ死して骨を刳かれて名を留めて朝廷に貴まれむか、但しは生きて 其の身を全うして泥塗の中に尾を曳いて賤しくとも生きて無爲なるを希ふべきかと、云へば、二人の使者は、答へて曰はく、むしろ生きて泥中に棲むとも死して骨を留むるは堪へ難しとする所なりと云ふに、莊子然らば疾く歸るべし、吾は我が高尙なる志を保ち山海の逸心を貴びて泥龜の尾を曳くと同じく、無爲を全うせむと云へりとなり、

【解義】 〔釣於濮水〕濮水は楚國の川の名、釣は魚を釣るなり、莊子心處無爲、跡を綸釣に託するなり、〔楚王使大夫二人往先焉〕楚王は 史記の莊周傳に據れば威王なり、二人の使者を先づ遣りて、旨を傳ふるなり、〔願以境內累矣〕國境の內、卽ち楚の全國を擧げて、賢人に託せむとなり、累矣は「ワヅラハサム」と訓ず、俗に云ふ「苦勞ヲカケル」を云ふ類と同じ、「齊策」以國事累君、注に屬也と見えたり、〔有神龜〕神異の龜有るなり、龜は刳いて 其の甲を以て吉凶を卜

或は未だ兵役に就かざる者にて、一般子弟の意なりと云ふ、「成疏」に弱齡未壯、謂之餘子、と見え、又司馬注に、未應丁夫爲餘子、郭慶藩云はく、案餘子民之子弟、「周禮」小司徒、凡國之大事致民大故致餘子、鄭司農云、餘子謂羨也、以其餘卒也、蓋國之大事、則致正卒、大故則幷羨卒而致之也、「逸周書」糴匡篇、成年餘子務執年儉 餘子務穡年儉 餘倅務運、「漢書」食貨志、餘子亦在於序室、蘇林曰、未任役爲餘子、卽司馬未應丁夫是也と見えたり、趙都の地、其の俗能く行く、故に燕國の少年遠く來りて步を學ぶ、通義に曰く邯鄲之行、潤步麗容、動人觀而起人敬者と國能は通義に曰く猶言國是言其行動之態優於他國者と既に本性に乖き、未だ趙國之能を得ず、更に壽陵の故を失ふ、是を以て止むを得ず兩手地に掘り、匍匐して還ると云ふ、是より事を倣ひて得ず、而も故を失ふ者を邯鄲の步を學ぶと云へり、匍匐は「ハラバフ」と訓ず這ひて行くなり、〔今子不去云云〕今子は莊子を學びて終に理を得るなく、子の故態と失はば、よく邯鄲の步を學ぶ者の喩へに一致すべしとなり、〔口呿而不合〕呿は「成疏」に開也、と見え、「正義」に呿張口貌と見えたり、「ヒラク」と訓ず、胠と同じ、傍より開くを云ふ、開いた口が塞がらぬなどいふ意、〔舌擧而不下〕舌が引釣つて物の言はれぬ事、驚く貌にいふなり、此の章は下の二章と同じく、皆名に殉ふを戒むるものたり、我國、名を好むの士が、競うて口辯を以て先として、眞の修養を務めず、徒に虛譽を誇る、是れ得を求めて反りて失を受くる者たり、故に之を戒むるなりと、但し、一說に此の文章甚深旨なし、莊子亦人を貶し自から譽むる事此のごくなるまでに至るべからじ、恐らくは、後人の贋筆たらむと云へり、通義には曰く豈猶二戴之禮(大戴禮小戴禮)出於衆人之所記故多攙入附會者乎、

莊子釣於濮水、楚王使大夫二人往先焉、曰、願以境內累矣、莊子持竿不顧曰、吾聞、楚有神龜、死已三千歲矣、王巾笥而藏之廟堂之上、此龜者、寧其死爲留

母」たり、自失は俗に肝を潰す事、此の文は小を以て大を羨むが故に自失せるなり、〔且夫不知是非之竟〕知は智なり、竟は境に同じ、其の智未だ是非の境を窮むる能はざるを云ふ、〔是猶使蚊負山商距馳河也〕蚊は「カ」といふ蟲の名、小さき蟲の譬とす、商距は「ヤスデ」蟲の名、又「アマビコ」又「ヲサムシ」とも云ふ、成疏に商距馬蚿也、亦名商距、亦又且渠と見え、司馬注に、商距蟲名、北燕謂之馬蚿、一本作蝁徐と見えたり、馬蚿は小さく弱き蟲なれば、黄河を馳せしむべきにあらぬに取れり、此の文の意は、物には各天分あれば、強ひて希ひ傚ふべからざるを云ふなり、〔是非埳井之鼃與〕公孫龍が狭き心を以て廣き荘子の言を窮めむとするは、不可能の事にして、畢竟是非を辯折して一時の名利に適するのみにて、之を己の道とするに於ては、井蛙と異なるなからむといふなり、是までにて、譬を完結せり、〔且彼方跐黄泉而登大皇〕彼とは荘子を指す、跐は「成疏」に、蹈也亦極也とあり、「コユル」又「キハムル」の意なり、黄泉は地下を云ふ、大皇は天を云ふ、此の意は、荘子の言の至妙至大なるを云ふなり、〔奭然四解淪於不測〕奭然は盛大の貌なり、「正義」に、奭猶釋也、釋然達於四方、淪於不測之地、豈分南北と見えたり、四解は四方に達するなり、淪は「シヅム」なり、沒の義、「書」微子に、今殷其淪喪と見え、「廣雅」に淪漬也と見えたり、測り難き底に沒するなり、〔無東無西〕上の無南無北と同じく、廣きを云ふ、郭慶藩云はく、王念孫の說を引いて、無西無東の誤にて反於大通の通と此の東と叶韻たりと云へり、曰はく、案無東無西、失其韻矣、今本乃後人妄改之也、王念孫曰、無東無西、當作無西無東與通爲韻、〔子乃規規然而求之〕成疏に、規規經營之貌也と見え、又、「正義」に規規求索之貌と見えたり、宣注には小貌と云へり、されば區々然などと大概同じ、〔是直用管闚天用錐指地也〕管は「クダ」なり、竹筒など細く長く中の空虛なるを云ふ、闚は「ウカガフ」と訓ず、「楊子方言」に闚視也、凡相竊視、南楚謂之闚と見えて、窺と同義なり、俗に云ふ、一寸のぞく意、我國の諺の「葦の髓から天井のぞく」と同じ、此の文の意は、其の任にあらざるものは、止め去るに若かざるを云ふなり、〔夫壽陵餘子之云云〕壽陵は燕の邑の名、邯鄲は趙の都の名、餘子は弱齡の者ども、

しに、忽ち海鼈の談を聞き茫然として自失すと云へるは、公孫龍が夙に先王の道を學び仁義の行に篤く、百家の知を困しめ、衆人の辯を窮せしが、忽然莊子の言を聞きて驚ける事亦猶は井蛙が海鼈に逢へるが如きに喩へたるなり、公孫龍は性識聰敏と雖も但俗智にして眞智に非ざれば、未だ是非の境を窮むる能はず、而も今莊子が至理の至言を觀察せんとするは何ぞ蚊をして丘山を負はしめ、馬蚿(商距)をして黄河を馳せ渡らしむるが如く、必ず其任に勝へざるべし、且つそれ公孫龍が學ぶ所の心智狹淺にして何ぞよく莊子が極妙の言を議論すべきや、是祇是非を辨別して一時の利に適するのみ、いかでか斯を以て道とせむやと、是畢竟坎井之蛙なりと云ふ、蓋是の譬喩にて譬を終へたる也、且又莊子の言や、理の精妙を窮めたれば、其の高き事九天の上に登り、下は黄泉の下を極め、四方八極盛大にして無邊なり、此の妙智は隱沒して測量すべからず、其の道や見聞すべからざる點より始まりて、物として有らざるなきに終るなり、今君茫然として其の見難く、知り難き者を知らむとす、是譬へば竹筒を以て天の廣狹を知らむと志し、錐を以て地の淺深を測らむとするがごとく、其の懸隔甚し若かず速に歸り、去らむにはと、且君獨かの燕人餘子が趙人の行歩に絶妙なるを習はむと欲し、少壯にして趙に學びしが、既に其の本性に乖けるを以て、未だ趙國の能を得ず其の本來の燕の風をも失ひしかば、手を以て地を匍匐しつゝ還りぬといへるにあらずや、是己の性を捨てゝ、妄りに人に傚ふの弊なり、今莊子は道とする所至玄にして物外に超脱せるを、公孫龍、言辯宏博と雖ども、いまだ域中を離れざれば、此のごとき智を以て、莊子の談を學ばゞ、終に其の理を得べからず、若し心をして其の道を求むるの企望を生じ躊躇して歸らずんば、必ず君が學業を失ひて、子の特長を忘るべし、此前の餘子の譬と一致せるにあらずやと云へば、公孫龍開いたる口も塞がらず、舌も引釣りて言ふ事叶はず、心神恍惚として、一散に逃げ還りぬといふなり、

【解義】〔適適然驚規規然自失也〕適適は「釋文」に音「タク」又音「セキ」又音「テキ」等あり、「成疏」に驚怖之容、規規自失之貌と見え、又「釋文」に適適規規皆驚視自失貌と見え、(又庚桑楚篇に、若規規然若喪父

と云へるは洪水は實に堯の時なれど禹が其の命に依りて之を治めしかば、然云へるなり、〔水弗爲加益〕海水が洪水の爲に殖えずとなり、〔崖不爲加損〕は旱天の爲に海崖を損せぬを云ふ〔不爲頃久推移〕海は溟渺深宏にして暫時の出來事の爲に變改せざるを云ふ、頃久は須臾頃刻と同じ、暫時の間なり、司馬注に猶早晩也と見えたり、

於是埳井之鼃、聞之、適適然驚、規規然自失也、且夫知不知是非之竟、而猶欲觀於莊子之言、是猶使蚉負山、商蚷馳河也、必不勝任矣、且夫不知論極妙之言、而自適一時之利者、是非埳井之鼃與、且彼方跐黃泉而登大皇、無南無北、奭然四解、淪於不測、無東無西、始於玄冥、反於大通、子乃規規然而求之以察、索之以辨、是直用管窺天、用錐指地也、不亦小乎、子往矣、且子獨不聞夫壽陵餘子之學行於邯鄲與、未得國能、又失其故行矣、直匍匐而歸耳、今子不去將忘子之故、失子之業、公孫龍口呿而不合、舌擧而不下、乃逸而走、

【大意】此には、更に反復して、小に勝つ者は、大勝する能はざるの理を說く、

【通釋】以上の說を聞きて、埳井の蛙は、大に驚き、且怖れ茫然として居たり、此は井蛙が從來埳井の美を擅にして、自から天下之に過ぐる者なしと言へり

べし、郭慶藩云はく、案、斡當從木作榦、「說文」正篆作韓、井垣也、「漢書」枚乘傳、單極之統斷榦、晉灼曰、榦井上四交之榦と見えたり、〔入休乎缺甃之崖〕缺甃は、破損せる井戸端の敷瓦なり、甃は音「シウ」「シキイシ」なり、地上に方にて平なる石或は瓦など敷き並べたる所を云ふ、〔赴水則接腋持頤〕水に入り足を張り、口を閉づる事、但し赴は司馬本に踣に作り、赴の意とす、又盧文弨曰はく、赴疑是仆字とせり、〔蹶泥則沒足滅跗〕泥の中に跳ね廻れば、足を踏み込み、足の甲を見えざらしむるなり、〔虷蟹與科斗〕虷は音「カン」蜎と同じ、俗に云ふ赤棒振蟲とて夏時蚊の卵の溜水の中にて孵化せる者、「成疏」に虷井中赤蟲也、と見え、「釋文」に音寒、井中赤蟲也、一名蜎、「爾雅」に云、蜎蠉、郭注云、井中小結蠛赤蟲也、」と見えたり、科斗は蛙の子、「オタマジャクシ」なり、「成疏」に科斗蝦蟇子也と見えたり、〔且夫擅一壑之水云云〕壑は音「ガク」「オチコミノアナ」なり、「說文」に溝也と見えて、段注に、周禮大司徒、溝封、鄭曰、溝穿地爲阻固、也、凡穿地爲水瀆、皆稱溝稱壑と見え、又「操觚字訣」に、壑は坑也、一丘一壑、又海を大壑といふ、欲のふかきを谿壑と云ふ、「左傳」に壑谷と云ふことあり、みな「オチコミノアナ」なり、大小に通ずと見えたり、跨峙は得意になりて安心に構へ込む意、〔夫子奚不時來入觀乎〕蛙が鱉を呼んで夫子と稱するなり、尊稱なり、入觀は井中に入りて見物せよとなり、此の一文の意は、猶彼の逍遙遊篇に小鳥が自から蓬蒿に自得せる例と一般の意なり、〔右膝已縶矣〕已縶は右膝下れるのみにて、已に拘束せられしなり、司馬注に拘也と見えたり、縶は馽に同じ、馽は音「チフ」、「說文」に絆馬也と見え、轉じて「マツハル」の意となる、「左傳」成公九年傳に、南冠而縶者誰也、注に拘執也、と見えたり、此の文の意は淺井戸の狹小にして海鼈の巨大なれば大なる者の滿足せる所を願望するにあらざる理を云ふなり、〔逡巡而却〕逡巡は「成疏」に從容也と見えたれど、今は後に退く意に云ふ、「シリゴミ」「アトジサリ」なり、〔千仞之高〕仞は「成疏」に七尺曰仞と見えたるを是とすべし、舊注に一尋八尺也と見えたるは非なり、〔十年九潦〕十年に九回の洪水あるなり、潦は「ニハタヅミ」、雨降りて地上に溜りて流るゝものを云ふ、洪水の事に用ゐたるなり、禹の時

水を專にし、淺き井戶に安んじたる樂しみは、此より勝れるものなし、其の場所こそ陋けれ、游涉には事足らぬ事なし、先生何ぞ暫く來りて 我が處を見物し給はずやと、自から矜れるなり、東海の大龜は入りて見むとて來れば右の膝下れる計りにて已につかへて入るを得ず、此に於て、退却して、蛙に向ひて、大海の狀を告げて曰はく、それ世人は千里を以て遠しとなす者あらば、之には未だ東海の廣大を語るべからず、千仭の高さを以て 高しとする者には、大海の至深を言ふべからず、されば、海の深大は、人の能く測り知る所にあらざれば、まして淺き井戶の深さを以て至極とせむは、其劣れる者ならずや、君能く之を思へ、堯帝の世、洪水汎濫萬民、其の生に安んぜず、禹に命じて之を治めしめて功あり、然るに、堯十年の中に九年の大洪水に遭ひぬ、湯王八歲の間、七歲旱魃せり、然れども、東海の崖は少しも損せず、洪水も亦其の量を加ふる事なし、是須臾の爲に水量の多少に由りて變改せず、東海の樂しみは此にあるなりと告げたり、

【解義】〔隱几大息〕隱几の解は、齊物論に出づ、大息するは、公孫龍の辯の淺きを識りて 莊子の言の深きに鑑みて歎息するなり、〔埳井之鼃〕埳井は淺き井戶なり、埳は「正字通」に同レ坎と見え、「易」序卦傳に坎者陷也と見えて、「廣雅」に埳陷也と見え、又「禮記」檀弓に其坎深不レ至ニ于泉一など見えたるがごとく、坎、埳、峪、陷、皆通用して、土地の凹みて穴の明きたる位の淺き所を云ふなり、鼃は蛙なり、「成疏」に、蛙蝦蟆也と見え、「說文」に鼃蝦蟇也と見えたり、或は蛙は蝦蟇と別物なりとの說あれども、「和名類聚抄」には「唐韻」云、蛙、蝦蟇也、古文作レ鼃、加閇流と見えて、「箋注」に、「干祿字書」云、蛙、鼃、上通、下正、「說文」有レ鼃無レ蛙、顏氏以ニ鼃爲一正字、是、此云ニ古文一非レ是、鼃字、後人變レ黽、从虫作レ蛙、其字與ニ蚳圭字一混、圭蠆也、「史記」律書、北至ニ於圭、圭者主レ毒、螫ニ殺萬物一也、是也、「孟子」蚳鼃、當レ作ニ蚳圭、蓋以ニ是物一爲レ名也、今本从レ黽从レ氐、皆誤、○中略 按、蛙今俗呼ニ阿乎加閇流、又足長鼃者是也、加閇流、蛙、蝦蟇之總稱耳、と見えたり、〔東海之鱉〕鱉は鼈と同じ、「カハカメ」なり、今の俗「スッポン」と稱する者なり、〔跳梁乎井幹之上〕跳梁は、飛び跳ねる事、井幹は、井の緣を木にて方形に組みたる者、「キゲタ」なり、宋、亦井欄に作る、但し幹は當に榦に作る

口を緘ぢたるなり、喙は正字通に口也と見えたり、開は本、關に作り、或は闓に作る、

公子牟隱几大息、仰天而笑曰、子獨不聞夫埳井之鼃乎、謂東海之鼈曰、吾樂與、出跳梁乎井幹之上、入休乎缺甃之崖、赴水則接腋持頤、蹶泥則沒足滅跗、還虷蟹與科斗、莫吾能若也、且夫擅一壑之水、而跨跱埳井之樂、此亦至矣、夫子奚不時來入觀乎、東海之鼈、左足未入、而右膝已縶矣、於是逡巡而却、告之海曰、夫千里之遠、不足以擧其大、千仞之高、不足以極其深、禹之時、十年九潦、而水弗爲加益、湯之時八年七旱、而崖不爲加損、夫不爲頃久推移、不以多少進退者、此亦東海之大樂也、

【大意】此には、公子魏牟が、公孫龍の問に對し、埳井の蛙と東海の鼈との兩譬を擧げて、二子の勝負を明かすを説く、

【通釋】魏の公子牟、至道を體得して識見淸高、物外に超脱したれば、今や公孫龍の說の淺薄にして、莊子の言の深遠なるに鑒みたるを以て、此に几机に凴りて天を仰ぎ歎息して之を冷笑して、さて曰はく、子は獨り彼の淺き井戸の中に棲める蛙を聞かざるか、蛙が東海の大龜に語りていはく、吾出でては則ち淺き井戸の井桁の上に飛び跳ね、入りては破損せる敷瓦の涯に休み、又水に入れば、兩腋を以て水を抑ちて、其の口を緊しく閉ぢ、又泥を蹴れば、足を踏み込みて跗を滅す、顧みれば虷や小蟹や蚪斗の徒と、逍遙快樂して、我に如く者なしと思へり、其の上に、我は一壑の

王之道、長而明仁義之行、合同異、離堅白、然不然、可不可、困百家之知、窮衆口之辯、吾自以爲至達已、今吾聞莊子之言、汒焉異之、不知論之不及與、知之弗若與、今吾無所開吾喙、敢問其方、

【大意】　此には公孫龍が言辯に善きも、未だ虛玄の道を知らざるを莊子の言を聞きて、其の奇異を怪しみて、己の學の淺きを悟り、莊子の語の深きを知りて、更に益を魏牟に請へるを說く、三段に分ちて解すべし、宣穎は曰く此段一發無以得殉名意也と、

【通釋】　堅白同異の辯を以て名高き公孫龍は趙人なり、魏の公子魏牟に問ひけるは、某少きより堯舜禹湯の道を修め、五德の行を明らめ、堅石、石にあらず、白馬馬にあらず、然るを然らずと爲し、可を不可となして、百家の書を難ずれば、皆困窮して誰人も辯口を振ふ事能はず、戰國の世に生れて、一家を成し、天下に横行し、名を當世に擅にし、之と爭ふ者もあらず、故に其の學問至妙に至れりと自負したりしに、忽ち莊子に逢ひて言を聞いて、茫然として議論のみならず、其の智力も及ばずと知りて、自から其の口を緘して、更に魏牟に對して其の方を請ふとなり、

【解義】　〔公孫龍問於魏牟曰〕　公孫龍は公孫は姓、龍は其の名、趙人なり、委曲は齊物論に出づ、魏牟は魏の公子なり、〔學先王之道〕　堯舜禹湯の治跡を云ふ、〔合同異離堅白〕　異を合せて同となし、同を離して異となすこと、白馬と云へば、馬とは云ふべからず、堅き石と云ふ時は既に廣義に云ふ所の石にあらずの類なり、既に逍遙游篇に釋す、〔汒焉異之〕　汒は音「バウ」、「郭注」音「マウ」、巟に同じ、巟は茫の本字、天地篇に汒若于夫子之所云矣と見え、「釋文」に、或作芒と見え、又「正義」に汒然自失之意と見え、又「正字通」に音芒、汒洋也、亦作茫通作芒と見えたり、〔吾無所開吾喙〕　喙は口なり、口を開く所なしは、言ふ能はざるを云ふ、其の口を緘づる事、己の學の淺きを覺りて、

衞字之誤也と見えたるのみならず、匡は衞の邑なれば誤たる事知るべし、孔子を圍む事は、通釋に逃べたるがごとし、數帀は幾重も取卷きて出さぬを云ふ、帀は「サフ」匝と同じ、「正韻」には、匝は俗字とせり、「メグル」、周圍をまはる義なり、〔絃歌不惙〕絃は琴を彈ずる事、惙は音「テツ」本は輟に作れり、輟は「ヤム」なり、中止する事、「爾雅」に輟已也、「論語」に耰而不輟、又「禮記」曲禮に輟朝而顧、注に輟猶止也と見えたり、〔何夫子之娛也〕當に憂懼してあるべきを、絃歌する故に怪しみ問ふなり、娛は「成疏」に樂也と見えたり、「タノシム」なり、但し國語にては、「ナグサム」の意に當る字なれば、樂とは別なり、本書の鼓瑟足以自娛とあると同じ、〔來吾語女〕女は「ナンヂ」と訓ず、汝、若、而、爾、と同じ、「孝經」に女知之乎と見えたり、〔我諱窮久矣〕窮は「成疏」に否塞也と見えて、貧のつまりたる事、官路の ふさがりたる事なり、諱は「イム」と訓ず、忌みて云はぬ事、貧につまりたる事を言ふを忌むなり、〔求通久矣〕通は「成疏」に泰通也 と見えて、貴顯になる事なり、「郭注」に將明時命之固當、故寄之求諱と見えたるは、聖人は時命を知るが故に 別に窮を諱み、通を求むるなきを以て之を寄すといへるなり、寄すは寄託なり、〔非知得也〕人智に得あるにあらざるを云ふ、〔水行不避蛟龍者〕水行は水上を行くなり、蛟は「ミヅチ」なり、角なき龍と云ふ、蓋し鱷魚 の類か、「抱朴子」に母龍曰蛟、「楚辭」守志の注に、無角曰蛟と見えたり、〔不避兕虎〕兕は音「ジ」、「說文」に如野牛、青色其皮堅厚、可制鎧と見えたり、〔烈士之勇也〕烈は「タタシキ」なり、貞士と同じ、正字通に剛正曰烈士、貞女曰烈女と見えたり、〔由處矣云云〕由は子路の名、處は「成疏」に安息也と見えたり、「ヲレ」と訓ず、席に復して安居するなり、制は疏に分限也と見えて、制限するを云ふ、天命は自己に於て如何ともなし難く、自然の分限ありとなり、〔無幾何〕少許の時の程にの意、〔將甲者〕甲を被たる者 卽武裝せる 兵士を統帥したる者、大將たるものを云ふ、將は「ヒキヰル」と訓ず、本は持甲に作れり、〔請辭而退〕孔子を陽虎と誤り認めて圍みし事を陳謝して歸りしを云ふ、

公孫龍問於魏牟曰、龍少學先

容貌の陽虎に似たりし上、其の弟子の顏剋も亦陽虎と同じく、匡邑を暴したりしのみならず、今や孔子の御となれるを見て、陽虎復來れりと思ひて兵を興して之を圍みぬ、孔子能く窮通の命數に達せるを以て、琴を彈じ歌ひて輟めず、匡人既に圍みたれば、當に憂懼すべきが、常人の理なるを、今やさる樣も見えざれば、門人子路は未だ聖人の心情を解せざるを以て、怪しみて何故に夫子はかゝる際にも樂しみて輟め給はざるかと問ふ、是に於て、夫子命じて來らしめ、其の至理を語りて曰はく、我今汝に語るべし、我窮困を忌みて、免るゝを獲ざるものは、豈天命にあらずや、又通達を求めて得る能はざるものは、未だ明時に遇はざるなり、それ、時と命とは來るにも拒むべからず、其の去るにも留むべからず、故に安んじて之に任せてあらば、何處に往くとしても適せざる事なしとて、又更に語らるゝやう、人生れて堯帝舜帝の聖代に當らむには、天下太平、人々各其の分内に安んずる故に、窮困の人なきも知に得あるにあらず、若又夏の桀王、殷の紂王の時に生れてあらば、天下暴亂にして物皆其の性を失へれば、通達の人あるなしとも知の失あるにあらざるなり、時に窮通あるに由りて然るなり、それ水中に入りて蛟龍をも避けざるは漁する者の勇氣なり、山地を行きて兕虎の猛烈なる者をも避けざるは、獵する者の勇氣あるが爲なり、太刀閃々眼前に交りても死するを以て生るゝがごとく觀じたる者は義勇に滿ちたる者の勇なり、是蓋其の情に安んずる所ありて、其の怖懼を打忘るゝ意にして譬を起すなり、聖人は時と命あるを知り、困窮通達の理に達するを以て、危險の中にありても未だ始めより安んぜざるはなし、是則聖人の勇なり、子路席に着け、我汝に語らむ、我は天命を禀けて自から涯分あり、豈人事の能く分限する所ならむやと語られたる程に、少焉して甲士を率ゐる者來り進みて、孔子を拜し、誤りて圍める事の無禮を謝して曰はく、嚮に陽虎と思ひしも、是は此孔子にして陽虎に關係ある事なければ、是を許し給へとて退けりとなり、

【解義】〔孔子遊於匡〕匡は衞の邑の名、孔子魯より衞に適かむの道すがら匡邑を經たるを云ふ、遊は「ユク」なり、「禮記」曲禮遊毋倨注に行也と見えたり、〔宋人圍之數帀〕宋は衞の誤なり、「成疏」に、宋當爲

はく、指者、手嚮之、鰌者、足蹴之、「荀子」强國篇、巨楚縣吾前、大燕鰌吾後、勁魏鉤吾右、楊倞注、鰌蹴也、言蹴踏於後也、と見え、「正義」には、鰌通遒、蹴也と見えたり、〔蜚大屋者〕蜚は音「ヒ」、本は蟲の名なるを古來「飛」の假借字となす、「史記」周本紀にも蜚鴻滿野と見えたり、〔爲大勝者聖人能之〕大勝の解は、齊物論に出づ、宣穎曰く目與心二喩、獨省文者、蓋天機、在形迹之外、不有用足之勞、蛇無用足之勞、蛇所以勝也、蚿有足之用。蛇無足之用、蛇所以勝也、蛇有體之運、風無體之運、風所以勝也惟無體、故似爲不勝、而實成大勝、蓋至於風而形亦盡矣、目與心之運雖更神、然當身可自喩之故省文也と、

孔子遊於匡、宋人圍之數帀、而絃歌不惙、子路入見曰、何夫子之娛也、孔子曰、來吾語汝、我諱窮久矣、而不免命也、求通久矣、而不得時也、當堯舜而天下無窮人、非知得也、當桀紂而天下無通人、非知失也、時勢適然、夫水行不避蛟龍者、漁父之勇也、陸行不避兕虎者、獵夫之勇也、白刃交於前、視死若生者、烈士之勇也、知窮之有命、知通之有時、臨大難而不懼者、聖人之勇也、由處矣、吾命有所制矣、無幾何、將甲者進解曰、以爲陽虎也、故圍之、今非也請辭而退、

【大意】此には、人事を以て天命を滅する能はざるの意を證せむとす、畢竟聖人は能く小に勝たず、大に勝つの意を說く、

【通釋】孔子魯より衞に適かれける折しも、匡邑を經られしに、陽虎が嘗て匡人を侵暴せしかば、孔子の

也、と見えたり、憐は「アハレム」と訓ず、「成疏」に是愛尙之名と見えたり、卽ち羨慕すると、〔蚿憐蛇〕蚿は百足蟲なり、又蜈蚣の字を用ゐる、其の脚數實は四十二脚あり、百足蟲は足ありて安行するより、蛇の足なくして辛苦するを哀むなり、〔蛇憐風〕蛇は「ヘビ」なり、蛇が形ありて適樂せるより風の質なくして冥昧なるを愍むなり、蓋し蛇は全身鱗甲もて掩はれ、脚耳等顯れざるより、足なしといへるならむ、〔風憐目〕「通義」に曰く目力乘虛、高則天象、遠則山林、一擧目而見勝於風矣と、〔目憐心〕「通義」に曰く心則轉盼之間而再撫四海其出入絕無聲臭尤勝於目と、〔趻踔而行〕趻踔は音「チンタク」、片足を擧げ、他の片足のみにて飛び步く事、東京の方言にチンチンモガ〳〵と云ふ步き方なり、夔は一足なりと云へば、其のごとき步き方を云ふなるべし、「成疏」に、趻踔跳躑也、「釋文」に趻の音「チン」「テン」「シン」の諸音あり、〔予無如矣〕如は「イカン」と訓ず、如は奈なり、書の高宗肜日に乃其如台と西伯戡黎に今王其如台とあるを蔡傳に如台奈我何也と云へり、又論語に如其仁如其仁とあるを劉淇の「助字辨略」に此亦省文言何如其仁也と云へり、〔今予動吾天機云云〕天機は自然なり、百足蟲の衆足は乃ち是天然の機關運動して行くものにして、未だ其の噴唾と同じきことを知らずとなり、〔夫天機之所動云云〕自然の發動は、智力の制する所以にあらず、何如にして此を彼に易ふるを得むやとなり、〔吾脊脅而行則有似也〕脊は「セ」なり、脅は「成疏」に肋也とあり、「アバラボネ」なり、蛇の行くには必ず脊脅を動かして行くを云ふ、似は「成疏」に像也と見え、又郭嵩燾が說に、「玉篇」似肖也、所以行者、足也、動吾脊脅而行、無足而猶肖夫足也、有形則有肖、無形則亦無所肖也と云へれば、此に據れば、似は「ニル」の義に用ゐたりと思はる、〔蓬蓬然〕「成疏」に蓬蓬風聲也、亦塵動貌也と見え、李注に「風貌」と見えたり、俗に「ゴウ〳〵」と吹くなど云ふ程の意なり、〔而似無有何也〕形像の見るべきなきはいかにと云ふなり、〔指我則勝我〕人が手の指を以て風を搞く時は、風は之を折る能はずとなり、〔鰌我亦勝我〕鰌は「フム」なり、足を擧げて踏むなり、「釋文」に音「シウ」「李注」に藉也、藉則削也、本蹴音「シク」迫也と見え、又郭嵩燾は李注を引きて曰

の行く事の疾きを羨むは、人の妄に羨望して、其の天然を滅するを知らざるに譬ふ、夔は百足に語るやう、吾は一足にて俗に云ふチン〳〵モガノ〳〵して行くに、其の簡易なる事吾に及ぶものなし、誠に苦勞なれども予に於て致し方なし、然るに今君は幾多の足を自由に使うて行くは羨慕の至りなり、獨り之を奈何にして左樣に自由に使ひ給ふにやと、百足答ふるやう、否否、さにあらず、君はかの唾はく者を見給はずや、かの唾噴く者は本來大小あらしめむとて、噴くにはあらず、然るに、大小の質自から分れて、或は大にして眞珠のごとく、或は小にして霧のごとく、雜はりて飛ぶ、其の數の多少固より數ふべからず、今百足の衆足を使ふも是天然の機關運動して行くものにて、何が故に然るかを知らずと、百足又蛇に語るやうは、吾は衆足ながら行く事遲きに、君は無くして行く事速なり、抑、此の遲速有無の差、之を自然に稟く、此の理如何と問へば、蛇答へて曰はく、天然機關、此の効用あり、遲速有無改易すべからず、若しそれ、無心にして運用に任せむには何れの處にか足を用ゐる要あらむやと云ふ、さて後蛇は風に對して問うて曰はく、吾は行かむとする時は足なければ脊脇を動かして行くを思へば猶形像あり、然るに、君は形像なく、鼓動方なし、北より南に徂いて南海の波濤を揚ぐ、其の形なくて力ある甚し、竊に疑ふ所あるなり、故に之を問ふと云へば、風曰はく、然り予は如何にも蓬々然と吹き起りて、北海より南海に入りて、怒濤を揚げしむるを得、然れども、人もし手の指を以て、風を搖せば風は指を折る能はず、若し脚を以て風を踏まば、風亦脚を折る能はず、此卽ち小には勝つを得ざるなり、然りと雖ども、飄風卒かに起りて、吹き立つれば、大木を摧折し大厦高屋を飛揚することは唯だ我が力之を能くするなり、されば衆多の小なる不勝利を以て終に大なる勝利を爲す者なり、さて此の如く大勝利を博する者を我が人間界に於て求むれば、唯大德ある聖人にして始めて之を能く爲すとなり、

【解義】〔夔憐蚿〕夔が一足にて跳躑して行くより、蚿が衆足にて煩勞せるを哀むなり、夔は音「キ」、一足獸の名と云ふ、「山海經」に、東海之內、有流波之山、其山有獸、狀如牛、蒼色無角、一足而行、聲音如雷、名之曰夔、昔黃帝伐蚩尤、以夔皮冒鼓、聲聞五百里、

夔憐蚿、蚿憐蛇、蛇憐風、風憐目、目憐心、夔謂蚿曰、吾以一足趻踔而行、予無如矣、今子之使萬足、獨奈何、蚿曰、不然、子不見夫唾者乎、噴則大者如珠、小者如霧、雜而下者、不可勝數也、今予動吾天機、而不知其所以然、蚿謂蛇曰、吾以衆足行、而不及子之無足、何也、蛇曰、夫天機之所動、何可易邪、吾安用足哉、蛇謂風曰、予動吾脊脅而行、則有似也、今子蓬蓬然起於北海、蓬蓬然入於南海、而似無有、何也、風曰然、予蓬蓬然起於北海、而入於南海也、然而指我則勝我、鰌我亦勝我、雖然、夫折大木、蜚大屋者、唯我能也、故以衆小不勝、爲大勝也、爲大勝者、唯聖人能之、

【大意】　此處には、物の動くや、各天機あり、彼此の難易多少有無の間にあらざるを說く、蓋し河伯問答の餘意、其の文亦奇絕、宣穎曰く突起一下、三喩鼓舞文有仙工と、

【通釋】　一足獸とて有名なる夔は、其の足一足にして少なるを以て、多きを企て百足蟲の足多く行く事疾きを羨めば、百足蟲は其の足の多きに過ぐるを厭ひて、足なき蛇を羨む、然るに、蛇は其の形の小なるを以て大を企て、風を羨めば、風は其の形の見る事を得ざるを嘆きて、目の明に物を知るを羨慕すれば、目は其の外にあるを以て、內なる心を羨む、かく互に其

道を顯せるにあらずや、されば牛と馬とに就きて之を說く、さて曰はく、右のごとくなれば、馬と牛を束縛して使用するは、妨げなしと雖も、馬鼻を穿ち羈絡を加へば、人情の矯疑を逐うて、天理の自然を滅するものと謂ふべきにあらずや、千里の馬も其の性に牽ひて動く事分に過ぎざれば、則ち千里に行くを得て、天命全きを得むも、若し駑駘を鞭撻して驅馳する事、節を失ふ事必せり、果して然らば、是人の所作の爲に天理を滅せむ、此の理豈特に馬牛のみならむや、若し又限りある分際を以て、限りなき名に殉ふ時は、天理滅して、性命喪はるべし、抑、人の賢愚も長命なるも短命なるも、將又榮華も恥辱も皆之を自然に禀けたるものにして、各其の分あるものなり、故に唯右の三つの者を謹みて固く守りて表はさざる者は、眞性に復る者と謂ふを得べし、

【解義】〔落馬首穿牛鼻〕落は絡と通用す、絡は「マトフ」と訓ず、馬に羈絆を施すを云ふ、「說文」に絮也、「段注」に、今人聯絡之言、蓋本於此、包絡字、漢人多假落爲之、其實絡之引伸也、と見え、又落は「漢書」西域傳贊 落以隨珠和璧、と見えたり、〔無以人滅天〕馬鼻を穿ち牛首を絡するがごとく、自然に乖く事勿れとなり、「郭注」には、穿落之可也、若乃走作過分、驅步失節則天理滅矣 と見えり、〔無以故滅命〕故とは心ありて爲すの義、有心故造又は故意故殺などの故なり、命は天性なり、故は「說文」に使爲之也と見え、「正義」に有心曰故と見えなり、されば、人事とも解すべし、人事を以て天理を滅す事勿れとは、馬と牛の自然を失はしむるのみならず、萬物皆然るべし、〔無以得殉名〕得は「トク」と音讀す、己が德を云ふ、殉は「シタガフ」と訓ず、徇と通ず、狥に作るは俗字なり、我が欲に引かるゝことなり、「正字通」に以身從物曰徇、與殉通と見えたり、限りある自己の分を以て涯りなきの名に徇ふ事勿れとなり、〔謹守而勿失〕其の分を固く守りて失ふ事勿れとなり、守とは持して物を逐はざるなり、〔是謂反其眞〕眞は眞性を云ふ、「義海」に曰く天在內所以立體、人在外所以應用、德在乎天則合乎神而無方不測者也、體天居德則屈伸從世、反要語極則弗失其眞、若然則處己處人之道盡矣、故河伯心冥體會、而無所復問焉と、

は世に處し、物に隨つて變化し、曾て定執なく、動いて時に會ふを云ふ、「反要而語極」要は要極にて、齊物論に所謂道樞なり、極とは虛極なり、深玄なる極位なり、卽ち至德の人は、人間に混ずと雖ども、心恒に凝靜なれば、自から反して常に至道の要に居れは、動いて寂に乖かず、實理の極を語りて默に乖かず、是虛通の極則にして唯至道を知れる人にして始めて之を能くすべし、何ぞ至道は貴むに足らざらむやと云ふやと詰る也、道要理極は卽ち上文の大義之方萬物之理といへる者なり、要するに此の章は六次の問答に依りて「要義は純を守り和を養うて、其の極致に至るを說けるなり、「義海」は曰く自篇首至此凡六問答、如風驅遠浪漸近漸激、至是而雪濤噴薄、使人應接不暇、須臾澄靜則波光萬頃、一碧涵天、人之息僞還眞、中局虛湛者有類於此、

曰、何謂天、何謂人、北海若曰、牛馬四足、是謂天、落馬首、穿牛鼻、是謂人、故曰無以人滅天、無以故滅命、無以得殉名、謹守而勿失、是謂反其眞、

【大意】此には、河伯が天人の區別を問ふに答へて、北海若が物各自然の分あり、內に得て道を喪はず、眞性に復れと告げ以て上文の玄妙の理を總括す、宣穎曰く註明天字、隨用三語束住、命卽天理、得卽天德、故卽是人心、名卽是人事、特遞遞致戒耳、以語大起以反其眞收、看他一路次第、又曰く第七番問答、歸根復極と、

【通釋】河伯未だ玄妙に達せず、更に此の疑問を起して天人の道を問ふ、北海若答へて曰はく、牛も馬も其の足の四本なるは、是を天然と云ふ、卽ち天然に禀けて四脚あり、人に關するにあらず、故に之を天然と謂ふ、然るに人の世に居るや、牛を用ゐ、馬に乘らざるを得ず、之を用ゐむとすれば馬の頭に覊勒を加へ、牛の鼻を穿ちて繩を附く、是は人の意より出でたり、故に之を人と云ふ、然れ共、牛の鼻は穿つべく、馬の首には覊絆を附くるは、其の原因を詳にせざれども、事は人情に出でて、理は終に自然に歸するは、天人一貫の

禽獸等侵害する事なけれど我よりも亦輕々しく之を犯さざるを云ふなり、「孟子」に知ㇾ命者不ㇾ立二巖墻之下一の意なり、「崔注」に謂下以ㇾ體著上ㇾ之と見えたり、然れば、薄は迫と同義にて、「セマル」と訓ずべし、〔言察乎安危〕安危は安きと危きとなり、安きと危きとの次第を知りて、之に順ひて逃るべからざるを知るなり、〔寧於禍福〕寧は「ヤスンズル」音「ネイ」なり寧と同じ、禍は「ワザハヒ」なり不幸を云ふ、福は「サイハヒ」なり利達を云ふ、「成疏」に寧安也、禍窮塞也、福通達也、と見えたり、其の謂は、至德の人は唯適する所に從ひ、窮通の命あるを體し、禍福の門なきに達するが故に、樂しむ所は幸不幸にあらずして遇ふ所に於て常に平安なるを云ふ〔謹於去就〕自然に從ふを云ふ、去は其の位置を止むるなり、就は其の位置に從ふなり、謹は「ツヽシム」なり、一筋に念を入るゝ事、専重嚴禁の意、謹信、細信などの用法を見て知るべし、恒に當れる者に居るなり、〔莫之能害也〕莫能害之也の倒字法を用ひたるなり、害は「ソコナフ」なり、安危を一にし禍福は自然に基づくを知り、自然と同化すれば、卽ち害を以て害とせず、故に能く之を害する者なきを云ふ、此の文卽ち以前の不下以ㇾ物害上ㇾ己の義を總統せるなり、〔故曰天在内人在外〕天然の性を内心に藏め、人事に順ふを云ふ、卽ち禍福去就皆天然の順ふべき者なり、大宗師に知二天人之所一ㇾ爲者至矣、明二内外之分一皆非ㇾ爲也と見えたると同義なり、〔德在乎天〕至德の美は天に在り、若し恣に人々自己の智に任ずれば、天性を失ふ、其の天然の分に安んずるを内得といふ、〔知天人之行云云〕天人の行を知るを眞知と云ふ、天位は自然の居處なり、今それ眞知を運らして世に行はゞ事物は千變萬化すと雖とも恒に自然を以て本となし、虛極に居て其の性を喪はずんば始めて靜寂を得るなり、〔蹢躅而屈伸〕蹢は「成疏」に「テキ」「タク」の兩音あり、躅には「チョク」「ダク」の兩音あり、而して蹢躅進退不ㇾ定之貌也と見えたり、「ユキツモドリツ」する事、或は却き或は進むの意彳亍の代用語と云ふ、又躑躅に作るも同じ、「說文」蹢住ㇾ足也と見え、「禮記」三年問に、蹢躅焉、釋文に不ㇾ行也と見え、「荀子」禮論に躑に作り、注に以ㇾ足擊ㇾ地也と見えたり、屈伸は屈は「カヾム」なり、伸は「ノブル」なり、或は隱れ、或は見はるゝを云ふ、至德の人

ば、四肢五臟精神已に爲さずして自から成れるもの、如何ぞ生成の後に意あるべきとなり、此の實理に達せる者は、時の宜を見て安排し、外物に害せられず常に全しといひて河伯の疑ふ所に答へ、次に至道の貴むべきを說明す、さて曰はく、抑至道を得たる人は、和光同塵四時にも侵されず、火水禽獸にも害せられず、此のごとく之を內に得れば、外物も賊ふ事能はず、此卽ち至道の貴ぶべき所なり、さりとて、水火禽獸が侵犯せずとても、之を輕んずるにはあらず、只心の安んずる所は、苦も苦にあらず、傷も傷にあらざるなり、要するに其の逃るべからざるを知ると安寧なるも困窮するも自然の分ある所に安んじ去就取舍の物に順つて移る事を審にし、害を以て害となさざるを言ふなり、天然の性は之を內心に韞み、人事の順ふ所は外に涉る、此定理なり、故に人の德は、理に順つて天にある者は天人の行ふ所此のごとくなる事を知り、恒に自然を以て本となし、德に定位すれば種々の機會に遭遇すとも進退其の理に順うて能く至道の要に反りて實理の極を語るとなり、

【通釋】「何貴於道乎」河伯が上文の旨に從つて更に爲すと爲さざるとを混一すれば、自然に任ずるを以て、何ぞ至道を貴まむやと、疑ひて北海若に問ふなり、「知道者必達於理」至道を知る者は知力の能くする所にあらざるを知る、之を理に達すと云ふ、理とは自然の實理なり、「必明於權」權とは事の宜しきに從ふを云ふ、之を明に知る者は物を以て己を害せずとなり、權はもと權衡の權にて、乃ち物の輕重を權り定むるなり、取りて斯く其の時處を計りて事を爲す義に用ひたるなり、漢代の儒者多く反レ經合レ道爲レ權と解すれども唐の陸贄は曰く權之爲レ義、取二類權衡一、若重二其所一レ輕、輕二其所一レ重、而謂二之權一、不二亦反一乎、以レ反レ道爲レ權、以レ任レ數爲レ智、此所下以以長二姦多一喪亂上也と此れ本文と直切關係なけれども亦權の字を解する參考とすべし、「禽獸弗能賊」賊は「ソコナフ」と訓ず、「論語」に賊二夫人之子一、皇侃疏に賊害也と見えたり、「火弗レ能レ熱以下此までは至德の人は既に之を內に得て、心に安んずれば危きも危からず、意として適せざるなければ、苦も苦とせざるを云ふ、亦大火不レ能レ燒の意なり、「非謂其薄之也」薄は「成疏」に輕也とあり「カロンズル」なり、今は「成疏」の說に據る、水火

に大驅也と見えたり、生滅流謝の停まらずして迅速なる事馬の馳するがごとしとなり、〔無動而不變云云〕流動變化せざるなく、時代は移らざるなし、共に執りて守るべからざるを云ふ、〔夫固將自化〕萬物の紛亂なるも同じく天然に稟くる所に出づ、故に安んじて之に任せ變化すべし、之を自化と云ふ、若し之に反して爲すと爲さざるとに勞すれば道の自然を敗るとなり、

河伯曰、然則何貴於道邪、北海若曰、知道者必達於理、達於理者、必明於權、明於權者、不以物害己、至德者、火弗能熱、水弗能溺、寒暑弗能害、禽獸弗能賊、非謂其薄之也、言察乎安危、寧於禍福、謹於去就、莫之能害也、故曰、天在內、人在外、德在乎天、知天人之行、本乎天、位乎得、蹢躅而屈伸、反要而語極、

【大意】此には、上を承けて自然の變化に順はゞ何ぞ至道を貴まむやとの疑問する河伯に對して、北海若が、無心なる者は、物と冥合して天人の道全き事を説く、宣穎曰く知道則達理明權超然自全於物表、純是天機妙用、何言道不足貴耶と又曰此方明上所云無方自化之妙、惟知道者能之落到天字上純是絕頂議論と、又曰く第六番問答、造極之言と、

【通釋】河伯更に北海若に問ひけるやう、若し爲すと爲さざるとを混一にする時は、聖人は既に自然に任せてあらむ、然らば何ぞ至道に貴ぶ所あらむやと問ふ、北海若答へて曰はく、凡そ能く虛通の道を知れる者は必ず幽玄なる實理に達せり、實理に達せる者は其の用を不窮に善くする者を知る、即ち道を知る者は、其の智力の能く爲す所にあらざる事を知る、既に智力の能く爲す所にあらざる所を知れば、何如にして我を生ぜしかを知らむや、我は自然にして生ぜしもの、己は己の能く爲す所にあらざる事著し、然れ

承は接承、翼は扶翼なり、卽ち拱扶の義、私愛を形容するの語なり、〔是謂無方〕萬物を方として一方を定むるなきなり、〔萬物一齊云云〕萬物を視て一體となし、其の各足るを知る時は、長もなく短も爲しとなり、〔道無終始云云〕虛通の道終りなく始めなし其の死といひ生といふは、唯無窮の變のみ、これを始めあり終りあるものと見るは變化の窮りなきを知らざる徒のみ、〔不恃其成〕成は事の成るを云ふ、道を得て世外に超然たる時は、如何ぞ相對の事物を假りて後に其成業を恃まむや、恃は「タノム」と訓ず、人に依負する事、「老子」に萬物恃之而生と見え、「說文」に恃賴也と見えたり、成に常處なきことを云ふ、「列子」張注に生之不知死、猶死之不知生、故當其成也莫知其毀、及其毀也亦何知其成と見えたり、〔一虛一滿云云〕虛は「ムナシ」器中に物のなき事、滿は「ミツ」物の一バイになる事、物のみつると、むなしきとは、例へば花の開くと散ると月の滿つると缺くるとのごく、其の形に一定の位なし、然るに、其の形のみを守りて變ずるを知らざれば、道を知らざるなりといふなり、此れ愚者は消息盈虛の常なきこと知らざるを說く、〔年不可擧〕擧は手にて操るを謂ふ又「成疏」に其來也不可擧而令去と見えたり、年の來るを取つて去らしめ難しとなり、〔時不可止〕進み行く時を止めて停まらしむる能はずとなり、年不可擧と、此の不可止とは、天理に出づるものにて、人に由らざれば奈何とも爲すべからざるを云ふ、「消息盈虛云云」消は「キユル」にて陰氣の死する事、息は陽氣の生ずる事、「禮記」月令の注に、陽生爲息、陰死爲消と見えたり、盈は「ミツル」にて物の器に「ミツル」事、滿のに近し、而して盈虛と對する時は、漸次に多くなりみちあふるゝ意あり、又嬴に作る、虛は上文に出せり、陰の消し陽の息し、夏に盈ち、冬に虛なる、氣節の循環終りて復始まる、變化日に新にして、未だ舊態を守るべき者なしとなり、〔是所以語大義之方云云〕如上に海若が述べたる所は、正に大道の正義を語り、萬物の玄理を語る所なりとなり、〔若驟若馳〕驟は音「シウ」馬を策ちて疾く走らす事、「說文」に馬疾走也と見えたり、蓋聚馬の疾走よりの會意の字なるべし、馳は音「チ」馬を走らする事、共に「ハスル」と訓ず、「晉語」に多而驟立、賈注に疾也と見え、又馳は「說文」

志云云〕而は「ナンヂ」と訓ず、對稱の代名詞、疏而汝也と見えたり、朱駿聲云はく、「禮記」中庸抑而强歟、注而之言女也、按猶爾也、乃也、爾、乃、汝、女、若、戎、皆一聲之轉、と見え、又「正字通」に而又汝也、「左傳」余而所嫁婦人之父也、王柏正始之音曰、而之爲爾、爾之爲汝汝之爲若皆高下諧聲也、と見え、「操觚字訣」には畢竟今日文の上にては、爾、汝、女、而相通用すと見えたり、〔而道大蹇〕虛通の理と違ひて平かならぬと云ふ、蹇は「タガフ」なり「釋文」、に本或作與天道蹇と見え、「崔本」は浣に作る、「林注」に違礙也と注せり、〔是謂謝施〕其の用を去るなり、疏に謝代也、施用也、と見え、司馬注に謝代也、施用也、「崔注」に不代其德、是謂謝施と見え、「宣注」には更謝而施、言無定也と見えたり、〔與道參差〕參差は「シンシ」と讀む、齊しからぬ貌なり、「詩」關雎に參差行菜、疏に不齊貌と見え、又、「正義」に參差者未能渾合自然と見えたり、代謝施用變に隨ふ能はざれば、道に齊しからぬをいふ、〔嚴乎若國之有君云云〕嚴乎は儼然と同じ、「イカメシキ」なり、「大學」に其嚴乎、注に言可畏敬也、「孟子」に有嚴諸侯注に尊也

と見えたり、卽道に達せる人は之を望めは、「イカメシク」國君の位に在りて萬國の仰ぎ戴くがごとくなるなり、〔無私德〕其の私を用ゐ所なきを云ふ、「郭注」に公當而已と見えたり、〔繇繇乎云云〕繇繇は「イウイウ」と讀む、成疏に、繇繇、賒長（遠長）之貌也、釋文に、繇繇音由と見えたり、又「爾玄」に、「漢書」韋賢傳注云、繇繇讀作悠悠と見えたり、〔其無私福〕衆人の社稷を祭るに社稷は人に私福を與ふる事なしとなり、〔泛泛乎云云〕泛泛乎は、疏に普徧之貌と見えて、汎く行き屆く義、「釋文」に又作汎と見えたり、汎は音「ヘン」「廣雅釋詁」に博也と見えたり、是亦通ずべし、至人の志周普無偏にして、群生を濟ひ泛愛の平等なる譬へば東西南北曠遠窮まりなく虛空のごとしとなり、〔其無所畛域〕畛は音「シン」幅廣き「アゼミチ」の義より轉じて境界の義とす、「左傳」定公四年傳に、封畛土略、と見えたり、又域は釋文に音于逼反舊于目反とあり、于逼は「オク」于目は「オク」なり、「正字通」には音役とあり、宇内曰域中と見え、本文を引きたり、〔兼懷萬物云云〕兼懷は、兼ね藏むる義、大聖慈悲庶品を兼ね藏めて偏愛なきなり、其孰承翼は

物に應じて方なく、超然獨化する時は、其の成る事を恃まず、春に於て草木の榮え、秋に於て凋落するがごとき所謂四時の序、成功者退を見れば誰人か其の定位を形迹の間に守るべけむや、已往の年は再び來し難し、故に拾うて擧ぐべからず、未來の時の方に長くなるを止め難し、陰消すれば陽息し、夏に盈つれば、秋に虛しくなる、氣節の循環終つて復始まる、混成の道變化日に新にして未だ嘗て故を守ることあらず、前來論ずる所の談正に是大道の義方を語り、萬物の定理を論ずるものなり、抑、物の生ずるや、生滅停ることなく、其の運々迅速なる驟するがごとく、馳するがごとく、百年も一刹那に異ならず、何ぞ意に介するに足らむや、其の變動轉移執つて守るべからず、道既に測るべからず、物亦常なし、然らば、果して何をか爲し、何をか爲さざらむ、故に固より自然に任せ適從する所なきの中に自から適從すべしとなり、

【解義】〔我何爲乎云云〕河伯未だ前旨に達せず、道已に區別を事とするなしと云へば、何の所にか適從せむと更に疑を決し、解釋を聞かむとて、何事をなし何事を爲すべからざるかと問ふなり、而も又辭受趣舍の四者終に如何にすべきとなり、辭は辭讓なり、受は受納なり、趣は進趣なり、舍は退舍なり、此の四者は世に處する上に於て常人のなかる可ざる所なれば也奈何は「イカン」と訓ず、奈は柰を本字とす、「說文」に柰果也、從木示聲、「朱注」に字亦作奈、假借發聲之詞、「書」召誥曷其奈何弗敬、「禮記」曲禮柰何去社稷也、疏猶言如何也「廣雅」釋言柰那也、按那者柰何之合音也、王引之云、奈何或但謂之奈、「淮南」兵略唯無形者、無可柰、と見え、「操觚字訣」に「イカン」は「イカヾナル」、「ドウショウゾ」、「ナゼニ、」と云ふことばなり、如何、若何、奈何、奈、若爲、同じ類なり、奈は廣韻に云ふ如なり、那なり、如何と用ると同事にて、その內少々差別ありと見えたり、〔是謂反衍〕反衍は反りて平なるなり、謂は反りて吾が身に求めて綽々として寬裕なる事、大途の平衍なるがごとしとなり、衍「釋名」釋地に下平曰衍、言漫衍也、と見えたり、反衍には異說多し、疏には反衍猶反覆也、又本亦作畔衍、と見え、「李注」に猶漫衍、と見え、郭慶藩案「文選」左太冲蜀都賦注引司馬作叛衍云、叛衍猶漫衍、と云ふ「宣注」は反衍猶汎衍、言寬衍也と云へり〔無拘而

化ノ二字妙、到テレ此ニ則一切滯見不レ消セ破除ス、自レ爾雪釋氷融矣、と又曰く第五番問答大通自在と

【通釋】　河伯、海若に問うて曰はく、我が此の世に在りて道を修めむとするに如何なる事を爲し、何事をか爲さざるべき、我が辭讓受納進趣退舍の四つは、皆世に應ずる大端にして、苟くも人たる者の、廢する能はざる所、之を捨てむには、適從する所なきに似たり、願はく修身奉遵すべきを誨へ給へと云ふ、海若曰はく、それ貴賤高卑は妄執より生ずる者なれば、いまだ心を平ならしむる能はず、然るに、今虚通の明鏡を以て之を照さば、卽ちいはゆる貴といふ者は反りて賤にして、賤といふものは反りて貴にして、分別あるなく、大道と一致す、然る時は、我が身反衍にして卽ち綽々として餘裕ありて、平坦なり、故に道を修むるの人は、すべからく放任すべし、汝自から世情の見地を以て汝の心を拘束して得たりとせば道と大蹇にして卽ち大道と乖き苦みて通せざるに至る、抑、物は少なきを聚めて多きを成す事あり、或は多きを散じて少しとなす時もあり、此の多といひ少といふ比較の私に拘はれば、物を逐ひて取捨するを免れず、故に之を止むる時は卽ち少多の分明なく、道と渾一す、之を行を謝すといふなり、若し又汝が行爲をなすに一を執りて多少の施行に拘はれば道と冥合せず、至道を身に行ひ得たる者は、儼然として恰も國王の公平にして私德を行はざるが如く悠々として社祭に於ける神助の私に人を福せざるがごとくなるべし、又若し心の廣大なれば四方の外の極窮する所なきがごとくなるべし、萬物皆我に備はる時は、偏愛なし、此に至らば、誰人をか特に私愛を以て扶翼せむや、是を無心といふ、我既に無心ならば萬物を視て一體となす、而も其の各自から足るを知れば、或は短く、或は長しといふ差異あることなし、例へば鳧の脚は短にあらず、鶴の脛も亦長きにあらぬがごとし、虚通の道は始もなく終もなし、例へば、今に於て始たるもの昨日は終たるがごとき、始は卽ち終たり、變化窮まりなし、山木にも無キレ始メ而非ルニ卒リ也と見えたるがごとし、されば、死と生といふものも、畢竟無窮の變化のみにして、始終にはあらず、例へば、形骸は逆旅とし眞性は過客となす時に於て見れば、死生は形骸の變化のみなるがごとし、（「老子」にも迎不レ見ニ其首一、隨不レ見ニ其後一と云へり）

纂と見え、「楊子方言」に、凡取物而逆謂之纂と見えたり、豫め計算して取るなり、〔謂之義徒〕事宜に適せる者なり、唐虞湯武の類を云ふ、〔默默乎〕言ふべきを言はぬ事、俗に云ふ「ダマツテキル」事なり、默は「說文」に犬暫逐人也と見えたれど、無言の義はなし、「讀書通」に、默嘿通作穆、無言貌、「漢書」東方朔傳、吳王穆然、又通作繆、「管子」小問篇、公遵遁繆然卽默然と見えたり、〔貴賤之門小大之家〕門と家とは緣りて起る所の意、貴賤大小の原因と云はむかごとし、

河伯曰、然則我何爲乎、何不爲乎、吾辭受趣舍、吾終奈何、北海若曰、以道觀之、何貴何賤、是謂反衍、無拘而志、與道大蹇、何少何多、是謂謝施、無一而行、與道參差、嚴乎若國之有君、其無私德、繇繇乎若祭之有社、其無私福、汎汎乎、其若四方之無窮、其無所畛域、兼懷萬物、其孰承翼、是謂無方、萬物一齊、孰短孰長、道無終始、物有死生、不恃其成、一虛一滿、不位乎其形、年不可舉、時不可止、消息盈虛、終則有始、是所以語大義之方、論萬物之理也、物之生也、若驟若馳、無動而不變、無時不移、何爲乎、何不爲乎、夫固將自化、

【大意】此には、河伯が既に高尙なる義理のある事を領得したれども、尙未だ其の旨歸に達せざれば、其の適從する所を問へるに、海若は宜しく其の道の自然に任せて爲すと爲さざるとの間に云々すべからずと說く、宣穎曰く大道渾同、始於無方、歸於自化、自

ヤアルウマ」なり、驥は「説文」に、千里馬、孫陽所相者、從馬冀聲、と見え又、「論語」に驥不稱其力と見えたり、所謂伯樂の相せしと云ふ駿馬なり、驥の字は、冀北の地に産するより作れる會意の字なり、驊は「アカウマ」なり、「説文」に載せず、「漢書」地理志に、得華騮緑耳乘と見え、師古の注に華騮言其色如華之赤也と見えたり、「箋注倭名類聚抄」に云はく、按、漢語抄驊及赤驊皆恐騂字之譌、騂卽騂字、源君〇源順所見本、誤从華作驊、故以爲驊騮字、遂音華、雖驊騮亦赤馬名、然須連言驊騮、不得單言驊、則漢語抄本作騂可證也、音華者誤と云へり、「クリゲウマ」なり、一に「アカウマ」にて、尾と髦との黑き馬なりと云ふ、「説文」に赤馬黑髦尾從馬、留聲と見えたり、騮は騮の俗字なり、〔不如狸狌〕狸は野猫なり、狸は貍と同字、「説文」に狸伏獸と見え、朱氏の注に、字亦作狸、蘇人謂之野猫と見えたり、狌は「イタチ」なり、「集韻」に鼠屬と見え、又或作鼪と見えたり、鼪は鼬の別名なり、郭璞の注に江東呼鼬爲鼪と見えたり、鼬は「爾雅」鼬鼠の注に、今鼬似貂、赤黄色大尾、啖鼠、江東呼爲鼪と見えたり、「説文」に如鼠赤黄而大食鼠者、「倭名類聚抄」に鼬鼠音性、以太知、漢語抄云、鼠狼と見えたり、「藝文類聚」に「廣志」を引いて云はく黄鼠善走、凡狗不得、惟鼠狼能得之、と見えたり、〔鴟鵂夜撮蚤〕鴟鵂は梟なり、疏に云はく、鴟鵂鶹也、亦名隻狐、是土梟之類也、晝則眼暗、夜則目明、故夜能撮捉蚤蝨、密視秋毫之末、晝出瞋張其目、不見丘山之形、と見え、「崔注」に、鴟鵂鶹與委梟同と見えたり、撮は「ツマミトル」なり、二本の指にてツマムことを云ふ、「説文」に從手最聲、亦二指撮也と見えたり、崔本最に作る最撮古音同一なれば、假用せるなり、「説文」に、最犯取也と見えたり、蚤は「ノミ」なり、人畜につきて血を吸ふ小蟲、以上狸狌の鼠を捕り、鴟鵂の夜蚤を撮むは、各其異なるに任する時は、萬物皆當らざるものなき事を説くなり、〔蓋師是而無非云々〕師是而無非とは、我が心を本として妄に偏執を爲し、己を是とすれば、他にては我を非としてある事を知らぬを云ふ、師治とは我が性に適するを以て本とすれば、他の和を失へるを知らず、是猶俗情に因はれたる者の所爲也、〔謂之簒夫〕位を盗む者なり、之噲白公の輩を云ふ、簒は音「サン」「ウバフ」と訓ず、「説文」に逆而奪取曰

其の殊能につきて之を任せば、物として當らざるなきを云ふ、されば物は各其限れる心を以て妄に偏執をなし、自己を以て是となせば、他の非となすも知らず、我を以て治となせば、他の亂となすことを知らず、我の是とする所彼亦之を非とす、故に是非は主なく、治亂は源を同じうす、治亂同源は天地の理にして、是非主なきは萬物の情なり、斯の趣に明ならざれば、此の義に達する能はず、天地陰陽は相對してあり、而も若し天ありて地なくば、萬物成らず、陰ありて陽なくば萬民生せず、此のごとくば其の行はれざること言はずして知るべし、然るに、尙且之を口にして捨てざるものは、至愚の人にあらすんば、則是誣罔たるべし、五帝は宗族相承け或は讓りて他姓に與へ其の禪を殊にす、又夏殷周の三代の王は、或は父子相繼ぎ、或は兵を興して簒弑し、其の繼ぐを殊にす、而も堯舜の禪讓は其の時に順ひ、湯武の時代は人意に合したるを子噲は堯舜を慕ひて以て嗣を絶ち、白公は湯武に倣ひて身を滅ぼせり、此のごとき流は之を簒奪の人と云ふ、之に反して、湯武の兵を興し、唐虞の揖讓するがごときは上は天道に符し、下は人心に合ふ者なり、此のごとき徒は之を義となすなり、沈默たれ河伯よ、汝何ぞ知らざるや、俗の貴む所も時ありて賤しく、物の大なる所も世或は之を小とする事あり、故に物の跡に順ふ時は、自から殊ならざるを得ず、是則五帝三王の同じからざる所以なるをとなり、

【解義】〔梁麗可以衝城〕梁は屋の「ハリ」、麗は屋の「ムネ」なり、梁棟の大なる者は城を衝き崩すに足るを云ふ、今案ずるに梁麗に異說多し、「司馬注」に梁麗小船也、「崔注」に屋棟也と見えたるを、兪樾は之を非として「詩」「墨子」「左傳」「文選」等を引きて車之有樓者と云へり、然るに、郭慶藩は司馬注の小船を非とし、兪樾の樓車を附會の說とし、「列子」「文選」「玉篇」等を引きて、斷案を下して曰はく、正謂椽柱之屬、當從崔說爲勝爲梁麗必材之大者、故可用以衝城、不當泥視と云へり、姑く此に從ふ、〔騏驥驊騮〕共に古の駿馬なり、「李注」皆駿馬也と見えりたり、但各字には亦意義あり、此の條とは別義なれど、其の一二を示す、騏は「詩」駟に有騂有騏又小戎に駕我騏馵と見え、又「爾雅」釋獸に、驨如馬一角、不角者騏、「說文」に馬靑驪、文如博棊也と見えたり、「アヲグロア

堯舜湯武の時には則ち貴く、之噲白公の時に於ては則ち賤しく用舍亦常例あらざるなり、宣穎曰く散ニ東數句ヲ歸ニ到貴賤一、貴賤有リ時、未ダ可ニ以テ爲ス常、則小大可レ知と、

梁麗可以衝城、而不可以窒穴、言殊器也、騏驥驊騮、一日而馳千里、捕鼠不如狸狌、言殊技也、鴟鵂夜撮蚤、察毫末、晝出瞋目而不見丘山、言殊性也、故曰、蓋師是而無非、師治而無亂乎、是未明天地之理、萬物之情者也、是猶師天而無地、師陰而無陽、其不可行明矣、然且語而不舍、非愚則誣也、帝王殊禪、三代殊繼、差其時、逆其俗者、謂之簒夫、當其時、順其俗者、謂之義之徒、默默乎河伯、汝惡知貴賤之門、小大之家、

【大意】此には、貴賤大小の名は本來常在なく、只人の名づくるに因る、故に海若言語を棄てゝ默默たれと說く、宣穎曰く眞見道體、看破物情、原無貴賤小大足據、則上所云不期精粗、非强泯之也、熟讀此段、當得無礙光明と、

【通釋】棟梁の大なる者は城を衝き破るには適すべけれど、之を以て鼠穴を窒がむ事能ふべくもあらぬは、大小の器物同じからざればなり、駿馬は一日にして千里の遠きに達すべけれども、鼠を捕らむには、狸狌に及ばざるは其の枝藝の異なればなり、梟鳥は夜は視力强く、晝は見るを得ざるの鳥なり、されば暗夜に蚤を捕りて微少の物をも明知するを得れども、白晝に出て目を張りて視れども丘山を見る事を得ざるは其の物性の同じからざればなり、要するに、萬物

傳に雖賈人有賢操、注に謂所執持之志行也、と覩の解は本篇上文に出づ、此れ趣操の無常なるを言ふ、宣穎曰く又恐人各以意之所向爲貴、所不向爲賤、故又着此一層と、

昔者堯舜讓而帝、之噲讓而絶、湯武爭而王、白公爭而滅、由是觀之、爭讓之禮、堯桀之行、貴賤有時、未可以爲常也、

【大意】此には、堯舜武子噲白公の例を擧げて、貴賤大小の常なきを説く、

【通釋】昔時堯帝は舜帝に天子の位を讓り、舜帝は又後ち夏の禹王に位を讓りて帝と崇められ、燕の相なる子之と燕王子噲は堯舜に倣うて王位を讓りて國家爲めに亂れ、敵國外より攻めて滅絶したり、殷の湯王周の武王は戰爭して、湯王は夏を滅し武王は殷を亡して天子と爲り、王と崇められ、楚の白公は亦戰爭して爲めに滅亡したり、されば戰爭禪讓の禮誼堯舜聖帝の行も貴きと賤きと各時ありて同じからず、未だ以て一概に之が是なりと、常久的に定むべからざるなり、

【解義】〔之噲讓而絶〕之は燕の相子之なり、噲は燕王の名、子之は卽ち有名なる辯舌家蘇秦の女壻なり、秦の弟蘇代齊より燕に使し、堯が許由に讓るの故事に由り燕王噲をして位を子之に讓らしむ、子之遂に之を受く、然るに國人其の讓を受くるを恨みて皆子之に服せず、三年にして國亂る、齊宣王蘇代の計を用ゐて兵を興し、燕を伐つ、是に於て燕王噲を郊外に殺し、子之を朝廷に斬り、以て燕國を滅せり、〔白公爭而滅〕白公名は勝、楚平王の孫太子建の子、平王は費無忌の言を用ゐ、秦より女を納れて太子を疏んず、太子鄭に奔り、鄭の女を娶りて勝を生む、卽ち白公なり、かくて大傅奢は殺され、子胥は吳に奔る、勝も亦從ひて吳に奔り、子胥と野に耕す、楚令尹子西、勝を迎へて國に歸り、白邑に封ず、僭して公と稱せり、勝は鄭人が其の父を殺すを以て、兵を請うて讎を報ぜむとて頻りに請へども允されず、遂に兵を起して反す、楚は葉公子高を遣はして伐つて之を滅す、事は「左傳」哀公十六年傳に詳なり、〔貴賤有時〕爭讓の禮、

〔惡至而倪貴賤〕如何なる處に至りて貴賤の極界あるかとなり、惡は「イヅクニカ」と訓ず、曷、何、安、焉、等の字と同じく用ゐらる、「左傳」桓公十六年傳、惡用子矣、注に安也、「論語」に惡乎成名又卒然問曰、天下惡乎定など見えたり、〔以道觀之云云〕道は虛通の妙理、妙理を以て物の形質を觀る故に貴もなく賤もなし、〔以俗觀之〕世の中普通人の觀察なり、卽ち榮譽恥辱等の出來事、榮譽に對して欣喜して、失へば恥辱とするがごとき是なり、〔以差觀之〕差別を以て觀るなり、疏に差別也と見え、郭嵩燾は差者萬物之等差也と云へり、其の說に云はく、道者通乎人我者也、物者必有所據以衡人者也、俗者徇俗爲貴賤者也、差者萬物之等差也、功者人我兩須之事功也、趣者一心之旨趣也、繁然殽亂而持之皆有道、故言之皆有本、貴賤大小辨爭反復、而天下紛然多故也、と見えたり、〔因其所有而有之云云〕天下の物相與に彼我の關係をなさざるものなし、而も我彼各皆自から自身の爲にせむとしつゝあり、彼の脣齒のごとき未だ始より相爲にするにはあらざれども、所謂脣亡すれば齒寒しといへるがごとく、脣自身の爲にして、實は齒の功をなす事大なり、是によりて相反して亦なかるべからざる者を知るべし、故に眼の視、耳の聽きて四肢百體の各功ある稟分定まるが如し、然るに、若し口食せず、鼻嗅がずんば、四肢百體否塞せむ、此のごとく無心に用を相濟すに於て、彼の功自然に成る、之を其の有る所に因りて有すとすれば、萬物有らざるなしといふ、又其の眼視ず耳聽かずして我が爲にするに非ずと云はゞ、卽ち其の無き所に因りて之を無しとすれば、萬物無からざるなしと云ふなり、〔則功分定矣〕功分の無常なるを言ふ、則の字は相反而不可相無の義を緊頂して言ふ、乃ち物の功分は上句の言の如く定まるとにて功分に一定ありと云ふにはあらず、宣穎曰く上言貴賤小大之無定、又恐指物之有功者爲貴、物之無功者爲賤、是果有貴賤矣、故又着此一層と、〔以趣觀之〕趣は一心の旨趣、是非の見解をなす情趣を云ふ、〔因其所然而然之云云〕是とする所に因れば、是となり、非とする所に因れば、非とするがごときを云ふ、〔則趣操覩矣〕趣は情趣なり、操は志操なり、琴賦の序に、覽其旨趣、注に意也と見え、又操は「楚辭」謬諫に、何夫執操之不固、注に志也、又「漢書」張湯

【通釋】河伯更に北海若に對して問うて曰はく、今夫れ貴賤の差等小大の分際は物性の內にあるか、又外にあるか、未だ其の源に達せず、願はくは其の說を聞かむと云ふ、北海若曰はく、抑々道は虛通の妙理にして、物は形質の粗事のみ、然るに世人皆其の粗事の形質を以て妙理を視むとするが故に、此に小大の區別あり、然れども、大人は妙理を基として、粗事の形質を見れば、貴もなく、賤もなし、蓋し皆自足るを以てなり、然るに世人は形質を基として、形質を觀る、此の區區たる分別に迷惑し、皆自己を以て貴として他を賤めば、他も亦自から貴として彼を賤むが爲に自他互に相賤しむ、此の相對に相是非する所は、卽ち萬般の區別あるを錯綜すれど、各其の性分に足るを以て、齊一となす妙用なり、俗人の官位など得て以て榮譽となし、失ひて以て恥辱となすは、皆外物に由る、されば貴賤は自身にはあらざるなり、それ萬物の等差を基として觀れば、毫末をも大とすれば、何物も大ならざるものなし、天地を以て小として觀れば、何物も小ならざるはなし、其の餘りなきによれば、天地の大も大倉の一粒に異ならず、自から足るを以て大とすれば、毫末も丘山と異なる事なし、若しそれ其の差別のみを觀て至道に由らずんば、其の差數相增して察するに勝へざるなり、今又各自の職分を以て觀れば、眼の物を視、耳の聲を聽き、手の物を捉り、脚の步むが如き、各其の職分あるもの丶、無心に其の職分を盡すときは、さらぬ呼吸器消化器等の職分も、亦能く行はる丶を知るに足るべし、然も若し手は物を捉り、足は行くを自からの爲にすることを忘れて、單に耳目口鼻の爲にするとせば、手足の功此に滅せむ、東西は相反する物の最甚しき物なり、然れども東なくば西立たず、かく相反しつ丶も互に相無かるべからざるを知らば其の職分の用ありて性分は各定まるべし、若し又物の情趣を以て之を觀れば、自から是とせば、物皆是ならざるなし、又物皆相非とせば皆非ならざるなし、それ天下に極めて相反するものは堯と桀との二君なり、堯は無爲を以て是となし、桀は無爲を以て非となす、堯桀二君の自然に相反し相非とするを知らむには、則ち天下萬物の情趣、志操、確に見届くるを得べし、

【解義】〔若物之外云云〕物の性分の內外を云ふ、

不足爲辨、又何爵位戮恥足爲勸懲哉、「聞曰道人不聞」聞曰とは我古に此の語ありしを聞くとなり、山木に、昔吾聞之大成之人云云とあると同じ、大人は和光韜晦、功を物に推して功名の聞すべきなきを以て之を他人に寓す、故に聞曰と云ふなり、「至德不得」至極無上の德は得失の表に超越して德と云ふべきなきなり、得は德なり、「老子」に上德不德の意なり「約分之至也」分限に依るを以て此の上德に至る也、一義海」に曰く大人虛己而道德自歸非越分而求也と、

河伯曰、若物之外、若物之內、惡至而倪貴賤、惡至而倪小大、北海若曰、以道觀之、物無貴賤、以物觀之、自貴而相賤、以俗觀之、貴賤不在己、以差觀之、因其所大而大之、則萬物莫不大、因其所小而小之、則萬物莫不小、知天地之爲稊米、知豪末之爲丘山、則差數觀矣、以功觀之、因其所有而有之、則萬物莫不有、因其所無而無之、則萬物莫不無、知東西之相反、而不可以相無、則功分定矣、以趣觀之、因其所然而然之、則萬物莫不然、因其所非而非之、則萬物莫不非、知堯桀之自然而相非、則趣操觀矣、

【大意】此には、河伯が貴賤と小大との極限は何處に在るかとの問に對して北海若が、其の觀察法を說く、「宜穎」は下の二節と連ねて一段と爲し、曰く眞見道體、看破物情、原無貴賤小大足據、則上所云不期精粗、非强泯之也、熟讀此段、當得無礙光明と、又曰く、第四番問答、胸如智珠と、

【解義】〔不出乎害人〕大人の行は卽ち無意にして、天行に任すれば物を利する事ありとも人を害する事なきなり、是亦知北遊に聖人處物不傷物の意なり、〔不多仁恩〕物を害せずとはいへど、亦物を愛するを以て能とせざるなり、仁は博く愛するなり、恩は心の因就する所に依りて慈愛を加ふるなり、「說文」に仁親也、从人二、又恩惠也、从心因と見え、「禮記」の喪服四制に、恩者仁也と見え、「詩」鴟鴞の傳に恩愛也とも見えたり、〔動不爲利〕門隷は賤役にして利を求むる者なれど、大人は賤役して利を求むる者を以て非なりとせず、故に理に應じて動けば利の爲にせざれども、門隷を賤とせず、畢竟役を賤み己を貴む念ある時は、旣に痕跡あればなり、〔不賤門隷〕門を守る者と僕隷とを以て賤しとせざるは、榮辱を混じ、窮通を一にすればなり、門は門を守る者、卽ち門番人なり、隷は賤臣なり、「左傳」定公四年の傳に社稷之常隷也、注賤臣也と見えたり、隷は隸の俗字なり、〔貨財弗爭〕分に止まりて貪慾を肆にせぬなり、貨は金錢なり、財は布帛錢穀なり、貨は「說文」に財也と見え、又「書」洪範八政、二曰、貨、「周禮」大行人其貢貨物、注に貨は龜貝なり、貨は本來貝の名より出で、貝の用となり、遂に錢を以て代ふるに至れり、財は「說文」に人所寶也、「周禮」に太宰以九賦斂財賄、注に帛穀也、又職方氏に與其財用、注に帛穀貨賄也と見えたり、〔不多辭讓〕分に當れば辭せず、所謂世間の謙遜辭讓を敢てせざるなり、辭讓を以て能となせば、名に近ければなり、〔事焉不借人〕事々皆自から爲して人に資る所なきなり、然して自から爲すに足りて、之に心力を盡さざるなり、〔不賤貪汚〕貪汚の人も亦之を賤しとせず、「孟子」萬章下に爾爲爾、我爲我のごとし、〔行殊乎俗〕其の行、和光同塵、可もなく不可もなく、實に俗人に異なれども、自から異なりとせざるなり、〔不多辟異〕辟は僻なり、辟異は崖異なり、大人の理に任せて自から殊なるを以て、他に殊なるを能とせぬなり、蓋し衆人は衆に異なるを以て心となして、終身衆人を免れず、大人は衆に同じきを以て心として理自から衆に殊なるなり、〔不賤佞諂〕大人は佞め諂を鄙み惡まざるなり、「義海」に曰く不爲利動、而不賤趨利之人、此下皆述大人之行異乎世俗、以至佞諂亦不賤之則君子小人聽其兩行、是非小大

分、細大之不可為倪、聞曰、道人不聞、至徳不得、大人無已、約分之至也、

【大意】此には、大道に至れる人の其の分に依り、自然に冥合するを説く、宣穎曰く詳寫大人許多話、也是兩邊(小大)倶掃、虚中無相而已と、

【通釋】大人の行爲や、大凡五事あり大人の行爲は無意にして自然の儘にすること、譬へば四時寒暑の自然に運行して心なきがごとく、少しも我意を用ゐざるが故に、人を害する事なし、さればとて自から其の恩惠を勝れりとせず、譬へば春の日影の草木を惠むがごとくなれど、春は徧く恩惠を行へるを能とせざるかごとし、而して、又機に應じて動けばとて物を利せんとて動くにあらず又人々の其の能に任へて其の位地を得ると思ひ定むるが故に、門番も奴隷も其の身分の賤しきを賤しきとせず、又其の欲を寡くして足るを知り、分を守りて貪らざれば、他と貨物も資財をも取らむと爭ふ事あらず、さればとて又其の性に率ひて自から中和を得るを以て能く用捨するが爲に終に情を矯め辭を飾りて多く讓る事を勝れりとせず、人に借りて分外に務を求めず、分内に安んじて心力を疲勞せしめず、至道の域に達したれば、別に情欲なきを以て俗人のごとく清廉を貴びて、貪り汚れたるを賤まず、己自身は世外に超脱したれば自から其の行や世人に殊なり、其の身を持つや至道を體すれば理に任せて自から殊行あり、別に人に乖き異しきを振舞ふことなし、其の所爲や衆人の爲す所に背かず、天性忠貞なるが故に、敢へて邪道に入らず、故に佞り諂ふを鄙みて後、正直なるにはあらず、かの世上の高位高官に上りしを以て榮譽とせず、又刑罰黜落をも恥とせず、是れ榮枯通塞の去來は固より定まれる理あるを以てなり、然るに、各々是非を執るを以て是非は定まらず、互に大小を爲すが故に、小大何にして極限あるを得む、抑々大人は功を推して自から取らず、故に其の名の聞くべきなし、得と失とを均しうすれば、亦得失の言ふべきなし、大聖の人は爲に任じて已む事なし、其の分限に依りて自然に冥合す、故に之を德の至極とす、

名の域を期するを以て言論の外に超越する能はざるなり、形質なくして至大なるは、只道のみ、至道は深玄にして、心も及び難く、思も盡くし難し、故に名數を以て分別すべからず、亦數量を以て窮め盡すべからず、言語論辯を以てすべき程度のものは、物の粗跡あるなり、心意を以て知了し盡すべき者は、物の精細あるものなり、然れども、如何なる言辯にも論窮する能はず、聖心にも察知する能はざる者は妙理なり、されば、眞に言論心意の外に求むる者に至りては、何ぞ精と粗との間を限らむや無言無意の域に入りて始めて至るべし、

【解義】〔至精無形〕至極の細少なる者は形質なしと云ふ、則陽篇に、精至於無倫、大至於不可圍とあり、參看すべし、〔是信情乎〕是信實かと云ふに同じ情の解は帝王篇參看、〔垺大之殷也〕垺は音「フ」、七百里ある大郭の義より轉じて甚大なる意とす、「李注」に音「ハイ」、「徐注」に音「フ」謂盛也、又「郭注」に音「ヒウ」、「崔注」に音「ホウ」等の諸音あり、「疏」に垺殷大也と見えたり、殷は樂の盛なる義より轉じて盛大の意とす、「說文」に作樂之盛稱殷從殳㐆聲と見えて、「易」の豫卦、殷薦之上帝、馬注鄭注共に盛也と注せり、然るに「釋文」に殷衆也と見えたるを、郭慶藩が說に、案、殷大也、故疏云、大中之大不當訓衆と見えたり、〔故異便〕便する所を異にするなり、便は便宜なり、「說文」に人有不便更之故從人更、「荀子」の解蔽に由執謂之道矣盡便也、注に便便宜也と見えたり、〔夫精粗者云云〕物の精と云ひ、粗と云ふ時は必ず形あるを期するが故に、自から形無きを得ず、卽ち言辯の外に超脫せざればなり、

是故大人之行、不出乎害人、不多仁恩、動不爲利、不賤門隷、貨財弗爭、不多辭讓、事焉不借人不多食乎力、不賤貪汙、行殊乎俗、不多辟異、爲在從衆、不賤佞諂、世之爵祿、不足以爲勸、戮耻不足以爲辱、知是非之不可爲

「郭注」に音「ゲイ」の諸音あり、大宗師篇の不レ知ニ端倪ヲ、又齊物論の天倪も亦同じ、

河伯曰、世之議者、皆曰、至精無レ形、至大不レ可レ圍、是信情乎、北海若曰、夫自レ細視レ大者不レ盡、自レ大視レ細者不レ明、夫精、小之微也、垺大之殷也、故異レ便、此勢之有也、夫精粗者期ニ於有形ニ者也、無形者、數之所レ不レ能レ分也、不レ可レ圍者、數之所レ不レ能レ窮也、可ニ以レ言論ニ者、物之粗也、可ニ以レ意致ニ者、物之精也、言之所レ不レ能レ論、意之所レ不レ能レ察致者、不レ期ニ精粗ニ焉、

【大意】　此には河伯が至精至大の極致に達せざる疑問に對して、北海若は更に答へて精粗の極致は言辨論說の外にある理を說く、宣穎は次の一節を連ねて、一段と爲し曰く上段既收ニ轉小字ニ似レ乎小大倶到、此又一并掃去、饒他將ニ小字ニ說到ニ至微ニ也是期レ於ニ有形、將ニ大字ニ說到ニ至殷ニ也是期ニ於有形ニ夫道豈在レ形哉、故小大兩字、都用不着、所レ謂言意倶盡不レ期ニ精粗ニ焉是也と、又曰く第三番問答、纖翳不レ留と、

【通釋】　河伯が北海若に問うて曰はく、世俗の議論に皆言ふ、至りて精細なる物は形質なく、廣大なる物は之を包み繞らす事を得ずといへるは、眞實の智惠なるかと問へば、北海若答へて曰はく、目の視る所には常に一定の度合あれば廣大なりといふ者にも視盡さざる所あり、細なる物にも知り盡せざる所あり、畢竟目の力の逮ばざるが爲にして、精微の者と至大のものと、決して無きにあらず、是未だ相對に拘はれる見地にして、至無の境に至らざるなり、それ精は至小なる者なり、垺は殷大なる者なり、今其の小中の小なる者と、大中の大なる者とを知り盡さむとすれど、便宜ありて同じきを得ず、此は未だ有の境を超脱せざる自然の數なり、一體精と云ひ、粗と云へば、必ず形

此の句に於て上文の物量無窮の意を結べるなり、〔證曏今故〕今故に今故なきを證明するなり、證は「シルス」又「アカス」と訓ず、徵を立てゝ明かにするなり、曏は明にするなり、音「キヤウ」、「崔注」に往也、又「郭注」に明也と見えたり、〔故遙而不悶〕遙は長生するなり、長生しても思ひ煩はざるなり、既に今古に今古なきの理を知りたればなり、悶は音「モン」、「モダユル」なり、「廣雅」釋詁に、悶懣也と見え、又「正字通」に、煩鬱也と見え、「易」の文言に、遯世無悶、又「老子」に其政悶悶と見えたり、懣は「說文」に煩也と見え、報任少卿書に不得舒憤懣、注に悶也と見えたり、〔掇而不跂〕掇は音「セツ」、郭注に短也と見え、跂は一本企に作る、「クハダツ」と訓ず、爪先にて立ちて、及ばざるを望仰する貌、謂は早死すれども、之を歎きて長生を企て望まざるなり、然るに郭嵩燾の說に、郭象注遙長也、掇猶短也、「說文」掇拾取也、「易」疏患至掇也、若手拾掇物然、言近而可掇取也、跂者所以行也、「淮南子」原道訓、跂行喙息、馬蹄篇、蹩躠爲仁踶跂爲義、謂煩勞也、知時無止順行之而已、故者非遙無漠涀也、今者非近無強致也、郭象注未

恢と見えたれど、今猶本說に據れり、〔察乎盈虛云云〕盈つると缺くるとを見て得失の理を察するなり、盈は音「エイ」、器にみつる事、「說文」に滿器也從皿夃聲と見え、又「廣雅」に滿也充也と見えたるごとく、滿の意に近けれど多く盈虛盈縮など對して漸次に多くなりてみちあふるゝ意あり、通じて嬴に作れり、「禮記」禮運に三五而盈と見えて疏に謂月光圓滿と見えたり、虛は「ムナシキ」なり、形ありて內容のなきを云ふ、「廣雅」に虛空也とあり、〔明乎坦途〕坦は「タヒラカ」なり、大道の平なるを云ふ、塗は道なり、坦然平等の大道とは死を以て死とせず生を以て生とせず、死生隔つるなきを云ふ、坦は「易」の履卦に道坦々、「論語」に君子坦蕩々、注に、寬廣貌と見えたり、我が國、北條時賴の偈に、明鏡高懸、三十七年、一槌打破、大道坦然の坦、亦此の坦の意なり、〔故生而不說〕死生の不二の理に達すれば生れたるも欣ばず死すとも禍とせず、說は音「エツ」「ヨロコブ」の義、悅の本字、今は悅をのみ用ゐる、眞の本字は「兌」の字を用ゐるべし、〔足以定至細之倪〕至極の微物の限りと定むるに足らぬなり、倪は「釋文」に音「ガイ」、「徐注」に音「ケイ」、

るに足らず、偶然に死亡等のありたりとて心に懸けて憂ふるに足らず、此の憂と喜とを忘れて始めて分の常なきを知るべし、死を以て死となさず、生を以て生となさざれば死生一様、坦然平等の大道に明らかなり、それ故に死生の一途たる理に達すれば、終始の日に新なるを知る、人の强ひて知る所は、眞に乖き知らざる者は道に會す、此を以て計れば凡そ物事の數に於て知る者は知らざる者に若かず、蓋し知る所各限りあればなり、其の未だ生れざる時は喜び事もなければ憂もなし、然るに既に生れて後は、愛執の心あり、故に亦惜む事あり、以て其の生れたる時の生れぬ前に若かざるを知るべし、蓋し生には各年あればなり、其の限り有る小智を以て無窮の至大の境を求むれば無窮の境未だ周からざるに有限の智は已に失はるべし、是の故に終身迷亂して自から安んずる能はず、是畢竟受くる所の本分に安んせざるに由る過なり、此の故につらく觀ずれば、毫毛の末は小なりと雖も、其の性の以て大に稱ふに足るべく、天地大なりと雖も餘りなければ以て小に稱ふべし、更に云へば、至小の端は毫末に在りと定むるに足らず、況や又至大の位置は其の理天地に窮むるを得むやとなり、

【解義】〔吾大天地云云〕河伯既に自から事物持前の分定まりあるを知りたるを以て、其の儘に心得るの否可を問ふなり、〔物量無窮〕物には其の物に隨つて各々持前の器量ありて同一なるものなし、只其の受くる所に隨つて各々情に稱へば其の一々の種類には窮まりなきを云ふ、量は器量なり、〔時無止〕死と生と皆新に行はれて住する事なし、時は常なり「說文」に、四時也、從日寺聲とあり、〔分無常〕自然の分命、時に隨つて變易するなり、分は持前、天禀の分限なり、〔終始無故〕終始故き事なく、日に新なるなり、故は古なり、「爾雅」釋詁に古故也、故今也、今者對古而言、古爲舊、今之舊事亦爲古、今之舊人亦爲古と見えたり、終は「ヲハリ」なり、始は「ハジメ」なり、終は「說文」に絿絲也、從糸冬聲と見え、「廣雅」に終極也窮也と見え、「論語」に天祿永終と見えたり、始は「說文」に女之初也、從女台聲と見えたり、〔是故大知觀於遠近云云〕此の句自から足る事を云ひて、下に至り上文の量無窮の義を釋するなり、〔大而不多〕天地の大と雖も餘りなきを云ふなり、〔知量無窮〕

足以窮至大之域、

【大意】 此には、河伯が既に其の悟領するを以て、己が解心の點を述べて、海若に詢ひて、海若より稟分不同、各々其の受くる所に隨つて各々稱適を得れば、其の自己の知る所に率ひて定となすべからざるを聽くを說く、宣穎曰く上段極意推豁、似呼一味向大邊去、此段急收入來、爲局方者言、要他見大然纔有意窮大、大何可窮、況眼前便已空却矣、夫道各至足、豪末非誇天地非益惡在小之可忽哉と、又曰く第二番問答探理入細と、

【通釋】 河伯既に大小の分別を知了せるを以て更に海若に對ひて問ひて曰はく、然らば形體の大なる物は天地に過ぎたる物なく、實質の小なる物は毛の末より小なる物なしと思ひて誤なきかと問ふ、北海若答へて曰はく、否然思ふべからず、それ物の器量持前の分各々同じからず、其の情に適する千差萬別、其の種類や窮まりなし、苟くも其の用に適する處を云はゞ、大もなく小もなし、例へば象は象の身に適したるを體とし、蚊は蚊の身に適したるを體として、いづれも大小なきがごとし、死するあれば生るゝありて共に時々刻々に行はれて止まず、其の天與の分命、時に隨ひて變易し、嘗て常住なる事なし、復終ると雖ども復始まりて未だ嘗て新ならざるもの あらず、是の故に大聖の知を以て遠き理を視、近き事を察す、故に其の毫毛のごとき微物と雖も體を備へたる上にては自から足りて少しも寡しとする處なし、又大なりとて餘る處あらず、例へば、天地は大なりと雖も餘る處なければ、自から多しとはなさざるがごとし、蓋し多しとせざれば誇る事なく、寡しとせざれば自から安んずべし、されば其の要點を攬つて之を觀れば、遠近大小の物異なりと雖も、各々量ありて窮まりなきを知る、以て上文の物量无窮の意を悟るべし、既に小大の小大にあらざるを知らば、則ち古今に古今なきを證明するに足らむ、既に古今に古今なきを知らば、則ち命長き者も早死の者も果して長生早死といふ譯にあらず、されば生命は延長しても生を厭ひて悒悶せず、早死の者も亦欣ばず、以て時の止まるなきを知るべし、抑々天道自然に盈虛あり、人間の事業爭でか得喪なからむ、是を以て月日の盈昃の變を視て人間得喪の理に達すれば、一旦の勢力を得たればとて滿足す

兗、靑、徐、揚、荊、豫、梁、雍の九州なり、轉じて支那全土の稱とす、〔豪末〕豪は亳の本字なり、「素問」刺要論に、病有在毫毛腠理之間者の注に、毛之長者曰豪と見え、「禮記」に差如毫釐と見えたり、〔五帝之所連〕五帝連接して揖讓するなり、司馬注に、謂連續仁義也と見え、「崔注」には、連續也と見えたり、又江南古莊本には、連の字、運の字に作るを以て妥當なるべしと云へる一說もあり、本の儘にても通ずべし、〔三王之所爭〕夏禹殷湯周武の三王は、皆師を興して戡定せるを云ふ、〔仁人之所憂〕關龍逢、比干、箕子、伯夷等の類を仁人と云ふ、蓋し仁義を以て君を正し、社稷を憂ふる者なり、〔任士之所勞〕任士は、職務に任ずるの士なり、伊尹、太公望、傅說、周公旦の類、〔爾向之〕向は「サキニ」と訓ず、鄕の字と通用す、嚮に作るも同じ、庚桑楚に、向吾見若眉捷之間と見え、「呂覽」察今の篇に、嚮之壽民と見えて、注に曩也と見えたり、

河伯曰、然則吾大天地而小豪末可乎、北海若曰、否、夫物量無窮、時無止、分無常、終始無故、是故大知觀於遠近、故小而不寡、大而不多、知量無窮、證曏今故、故遙而不悶、掇而不跂、知時無止、察乎盈虛、故得而不喜、失而不憂、知分之無常也、明乎坦塗、故生而不說、死而不禍、知終始之不可故也、計人之所知、不若其所不知、其生之時、不若未生之時、以其至小、求窮其至大之域、是故迷亂而不能自得也、由此觀之、又何以知豪末之足以定至細之倪、又何以知天地之

てはづる意、慙は心に係り、醜は形にかゝる字なり、〔尾閭〕海水を泄す所なりと云ふ、「崔注」に海東川名と見え、司馬注に、泄海水出外者也と見え、又「文選」嵆叔夜が養生論の注に、司馬注を引きて曰はく、尾閭水之從海外出者也、一名沃焦、在東大海之中、尾者在百川之下、故稱尾、閭者聚也、水聚族之處、故稱閭也、在扶桑之東有一石、方圓四萬里、厚四萬里、海水注者、無不燋盡、故曰沃燋と見えたり、姑く錄して參考とす、〔吾未嘗以此自多〕吾未だ海を以て他に勝れる大なる者とはせずとなり、多は「マサル」の義、時日を重ぬる久しきの義より云ふ、「說文」に緟也、從緟夕、夕者相繹也、故爲多と見えて、「段注」に、緟者增益也、故爲多、多者勝少者、故引伸爲勝之稱、戰功曰多、言勝於人也と見えたり、〔方存乎見少〕方は眞最中の意、「ミサカリ」と云ふに同じ、存は在の意、「說文」從子在者と見え、「易」繫辭傳に、成性存々とありて、「爾雅」釋訓に存々在也と見えたり、〔不似礨空之在大澤乎〕礨は音「ルヰ」又「ライ」蟻の穴に突き上げたる土即ち蟻塚なり、穴は蟻の穴なり、蟻の礨穴の大澤中にあるは其の幾分にも當らざるを

云ふ、郭嵩燾云はく、釋文引崔云、礨空小穴也、李軌云、小封也、一云蟻塚、今案、礨空自具兩義、言高下之勢也、礨者突然而高、空者窪然而下、大澤之中、或墳起、或洿深、高下起伏、自然之勢、常相因也、故謂之礨空、司馬相如上林賦、丘墟掘礨亦同此義、言丘墟之勢、或掘而成穴、或壘而成丘也と見えたる說是なるべし〔不似稊米之在大倉乎〕稊米は野生の稗米なり、司馬注に、小米也と見え、李注に稊草也と見えたれど、知北遊に、道在稊稗と見え、又「孟子」に五穀之不熟不如荑稗と見えたるを以て、荑も稊と通ずるなるべし、〔人卒九州〕卒は釋文に司馬注を引きて、卒衆也と見え、又崔注に盡也とあり、「崔注」に據れば、九州の人數を盡すの意とす、兪樾は司馬崔兩注の義通ずべからずとて、大率の二字の誤ならむとして曰はく、人間世、率然拊之、釋文曰、率或作卒、是率卒形似、易誤之證、率誤爲卒、因改大爲人、以合之、據至樂篇人卒聞之、盜跖篇、人卒未有不興名就利者、是人卒之文本書所有、然施之於此、不可通矣、大率者、總言之辭、上云、計四海之在天地之間也、又云、計中國之在海內、計與大率其義正同と云へり、九州は冀、

陽に受くれば象るべきものなし、故に物に譬ふれば、猶ほ小木小石の泰山に在るがごとく、海若の大理に對する極はめて寡少なり、されば、物各々量あり、亦何ぞ自から勝れりとするに足らむ、今四海が天地間に存在するや、宛かも礨空の大澤中に存在するに似ずや、中國の海内に存在するは、稊米の太倉中に存在するに似ずや、凡そ物の品數を概稱して萬物と謂へるが、吾が人類は僅かに其の一部分に居れり、又大率九州の穀食の生ずる所、舟車の通ずるところは仲々に盛んにして且つ廣きことなるが、其の中には動植其の他の諸物もありて、人類は僅かに其の一部分に居れり、是れ彼の人類は萬物の衆盛なるに比較するときは、其の差は誠に細き毛の末が、馬の身體上に存在するに似ずや、實に肉眼にては有るか無きか分らぬほどの微細なる物なり、然るに昔しより五帝の連續して治むることも、三王の血を流して爭ふことも、仁人の心を痛めて憂ふることも、志士の力を盡くして勞することも、皆盡く太倉の稊米に似たる、中國又此の馬上の毫末に比すべき、極はめて細微なる人類の爲めに外ならず、豈に憫笑すべきのことならずや、而して世に廉潔を以て名高き伯夷は此の取るに足らざる、眇たる中國人類が已に歸服するを辭退して受けざればとて、天下百世に廉潔の名譽を揚げ、孔子は此の中國人類の事を語ればとて、博聞多識の聖人と爲れり、此れ彼等が自ら誇りて、多く賢れりと爲ることは、宛かも汝が曩きに僅小なる河水の中に居て、吾に賢るもの無しと爲したるに似ずや、實に其の世間見ずの愚なる加減は、話にも成らずとなり、

【解義】〔觀於大海〕大海の無窮を眺め見るなり、觀は篤と念を入れて見る義、勸勉諦視するなり、「論語」に、「觀其所由」と見え、「穀梁傳」隱公五年傳に、常視曰視、非常曰觀、轉義、以此視彼曰觀、故使彼視此、亦曰觀と見えたり、〔乃知乃醜〕河伯が自身の狹劣なるを愧づるなり、乃は「スナハチ」と訓じて、俗に「ソコデ」の意、乃醜の乃は汝と同じ、王氏の「經傳釋詞」に乃猶於是也、「書」堯典曰、乃命羲和是也と見え、又「書」に、乃言底可績とあり、傳に汝也と見えたり、醜は愧の本字、德充符篇に寡人醜乎の崔注に愧也李注に慙也と見えたり、自身の醜惡なるを人に對し

者、自以比形於天地、而受氣於陰陽、吾在天地之間、猶小石小木之在大山、方存乎見少、又奚以自多、計四海之在天地之間也、不似礨空之在大澤乎、計中國之在海內、不似稊米之在太倉乎、號物之數謂之萬、人處一焉、人卒九州穀食之所生、舟車之所通、人處一焉、此其比萬物也、不似豪末之在於馬體乎、五帝之所連、三王之所爭、仁人之所憂、任士之所勞、盡此矣、伯夷辭之以爲名、仲尼語之以爲博、此其自多也、不似爾向之自多於水乎、

【大意】 此には、河伯が其の分別を知るを以て始めて大理を言ふべきを說く、

【通釋】 今しも河伯が水に駕し、流に乘じて、河の涘を離れ、大海に出でて、始めて海若に逢ひ此に於いて詳に瀚海の無窮を觀て、方に小河の陋劣を鄙しみ、既にして居る所の限りあるを悟りしかば、大理の虛通を語るべしとて、海若の說き出すやう、世の中に於いて水の最も大なるは海に勝るものなし、許多の河川は皆聚注して何時か其の止む時を知らねども、嘗て滿ち溢れたる事なし、尾閭の名ある海水を泄らす所は、絕えず之を泄せども、嘗て泄し盡せる事なし、春にも秋にも多少なく、氾濫する事もなく、旱魃する事もなき大海の大なることは、到底江河の比較にあらず、其の量數を語り難し、而して、海若は海を以て自から勝れたる者とせず、萬物は天地より大なるはなく、化育の力は陰陽より大なるはなし、されば、海若は形を天地に比すれば、等級の言ふべきなく、氣を陰

の夏にのみ執着すればなり、曲見偏執なる人が絶對の至道を説くものの蚊の睫を大として、泰山を小とするがごときを聞かば、之を信ぜざるべきは、名敎に束縛せらるればなり、故に河伯も洪川に至りて、未だ海若に逢はざる程は、自から矜りて大得意となれると共に、其の義亦同じきとなり、

【解義】〔井鼃〕古井戸の蛙なり、鼃は蛙と通ず、王引之が説に、鼃は本は魚の字に作りしが、後人改めて鼃に作れるなりとて、「太平御覽」蟲豸部に引く所の井魚不可以語於海、及び「淮南子」原道篇に、井魚不可與語大、拘於隘也等を擧げたるは、從ふべきがごとし、但し本邦にも、古來、井蛙夏蟲の譬は、廣く行はれたれば、其の改められしも、古きを知るべし、「荀子」正論篇には、坎井之鼃不可與語東海之樂などあればいつしか改められしなるべし、尙下文に出づ、參看すべし、〔拘於虛〕虛は墟と同じく、居る所なり、本は墟に作れるもあり、而して、崔本には虛は井中の空なりと云へど、王念孫は之を駁して曰はく、虛與墟同、故釋文云、虛本亦作墟、「廣雅」曰、墟尻也、尻古居字「文選」西征賦注、引聲類曰、墟故所居也、凡經傳言郷墟者、皆謂故所居之地、言井魚拘於所居、故不知海之大也、魚居於井、猶河伯居於涯涘之間云々と云へり、〔篤於時〕篤は信ずる事の固きなり、「論語」に、篤信好學と見え、又「禮記」儒行篇に、篤行而不倦などあるに同じ、蓋し上文拘於虛の拘の字と對して看るべし、〔曲士〕司馬注に、鄉曲之士也とあれど、曲は僻の義にして、偏曲の意とすべし、「文選」吳都賦に、固亦曲士之所歎也とあり、注に、謂僻也と見えたるに據るべし、

今爾出於崖涘、觀於大海、乃知爾醜、爾將可與語大理矣、天下之水、莫大於海、萬川歸之、不知何時止、而不盈、尾閭泄之、不知何時已、而不虛、春秋不變、水旱不知、此其過江河之流、不可爲量數、而吾未嘗以此自多

間〕涘は音「シ」水の涯際なり、渚は小洲なり、洲は「釋名」に、小洲曰渚、渚遮也、體高能遮水、使從旁廻也と見え、又水中可居者曰洲、洲聚也、人及鳥物所聚息之處也とも見えたり、崖は「キシ」なり、小高き「キシ」を云ふ、又、涯に作る、厓と同じ、〔不辨牛馬〕牛と馬との相異をも分別せられぬなり、辨は見分くるなり、〔河伯〕河神の名なり、姓は馮、名は夷、華陰潼堤郷の人、水仙の道を得と云ふ、一名冰夷、一名馮遲、已に大宗師篇に出づ、〔欣然〕心の嬉くしてイソ〳〵する貌、〔天下之美〕世上の榮華盛美なり、李頤は東海之北と云ひ、「成疏」には今之萊州とあり、卽ち後世の謂はゆる勃海灣を云ふ、〔旋其面目望洋〕河伯の顏を擧げて仰ぎ視るなり、望洋は或は盳羊に作る、洋羊共に假借字、正しくは陽に作るべし、王充「論衡」骨相篇に、武王望陽とある是なり、卽ち太陽を仰ぎ觀るより訓じたるなり、〔野語〕野人の語、卽俗諺と云ふがごとし、〔聞道百〕道を聞く事多き事なり、百は多數を擧ぐる詞なり、古注に百萬分之一の意とするは當らず、謂は道を聞く事多しとも、其の窮り無きを知らざれば自失する事ある意なり、〔今我睹〕河伯が海若の窮りなきを睹るなり、睹は今は覩に作る、確に目に見屆けたる事、「崔本」には「今睹我」に作れり、〔殆矣〕殆は「アヤフシ」と訓ず、危げにて不安心の貌、「論語」に闕殆行餘の意を以て知るべし、〔大方之家〕大道の人なり、方は道といふに同じ、

北海若曰、井鼃不可以語於海者、拘於虛也、夏蟲不可以語於冰者、篤於時也、曲士不可以語於道者、束於敎也、

【大意】此には、海若が河伯の狹小なるを知り、三種の譬を擧げて以て之を說く、

【通釋】北海若が曰はく、一體、古井戸の蛙に對して大海は風なけれども洪波萬丈なりといふとも必ず之を信ぜざるは、其の居る所にのみ拘はる爲なり、夏時に生ずる蟲の蟬や蜻蛉などのごとき秋に死する物に對して、嚴冬の時に水は結んで冰となり、雨は凝つて霰となると云ふとも必ず之を信ずまじきは、其の心

也、吾非レ至二於子之門一、則殆矣、吾長見レ笑二於大方之家一、

【大意】 此には、海若が何伯に告ぐる言に依りて、其の大を見れば、小なる者は論ずるに足らざるを說く、宣穎は本節及次の三節を連らねて、一段と爲して曰く、以下七段倶借二北海若一登壇說法也語大二字、是此段主意と、又曰く學者一念滿足 此外再無二入處一故必先與撤去、使二胸中一片空洞一乃進道之機也と、又曰く、第一番問答、開二拓心胸一と、

【通釋】 秋天の霖雨に、百川の水は膨脹して、皆黃河に灌注し、濁流滔々兩岸を拍ちて氾濫すれば、涯岸は曠く、洲渚は遙なり、水を隔てゝ遠く看れば、牛と馬との分別をも辨せず、是の時に當りて、河神河伯は嬉しさに堪へずして思へらく、世の中の榮華盛美は、盡く我が一身に在りとて、流に沿ひて東方に行き、大海に出で頭を擧げて見渡せば一望蕩々、水日相映じて、目も輝くばかりなり、是に於て海神海若に對して歎息して曰ふやう、世の諺に僅に物を知りたる者の、己に勝る者なしとて滿足する者ありと聞けるは、今我が身に思ひ當れり、其の上に又嘗て聞ける事に、世人は皆孔子が六經を刪定したるを以て、博聞多識となし、伯夷が國を讓りし清廉を以て、其の義重んずべしとなせるを、通人達士が議論して、伯夷の義を以て輕しとなし、孔子の博聞を以て寡聞となせりといふを信用せざりしが、今日、大海の宏博にして窮め難きを見て、方に昔日の聞ける所の虛妄ならざるを覺れり、我、今日君が門に至らざらむには大失敗をもなすべかりしを、此のごとく見る所の狹くあらば、長く大理に通ぜる人に笑はれむものをと、いふなり、

【解義】 〔秋水〕 秋期の大水なり、水は春に生じて秋に壯なれば、以て旺盛の水の稱とす、「釋名」に水準也準平也、天下莫レ平二於水一故匠人建レ國必水レ地、と見え、「說文」に、象二衆水竝流中有二微陽氣一也 とも見えたり、〔灌河〕 河は黃河なり、灌は注の意、注ぎ流るゝ事、集りてサラ〳〵と聲の高き意、「漢書」地理志の注に、灌々水流盛貌と見えたり、〔涇流之大〕 涇は快く通り流るゝ事の宏大なるなり、司馬注に、涇通也と見え、崔本に徑に作り、直度曰レ徑、又云、字或作レ涇と見えたり、「涇渭など云ふ涇の意にはあらず、〔兩涘渚崖之

故不自隱、
道固不小行、德固不小識、小識傷德、小行傷道、當時命而大行乎天下、則反一無迹、不當時命、而大窮乎天下、則深根寧極而待、古之所謂得志者、非軒冕之謂也、謂其無以益其樂而已矣、今之所謂得志者、軒冕之謂也、軒冕在身、非性命也、

秋水第十七

本篇は、篇首に河伯が黃河に氾濫せる秋期の洪水を觀て後、北海若の論に依りて、遂に眞の大理を知了せりといふ事があるに取りて、篇に名づく、原來莊子の主とする所は、絕對にして世人の所謂大小精粗多寡有無の相對を期せずして、物理に明達し以て眞に反るに在れば、今は秋水を借りて端を發し、さては夔蚿蛇風井蛙海鱉等の譬を設けて、遂に儵魚の從容自適等を說いて、眞に反るの極則を示せり、本篇は彼の內篇齊物論より脫化して、更に一機軸を出したるを以て、運詞の變幻、復天巧を擅にせる所、實に千古有數の文字たり、要するに本篇中名言至理の取るべき者亦少なからず、但し、其の中孔子匡に畏るゝと、公孫龍が魏牟に問ふとの二段は贋作ならむとの說もあれど、姑く舊に仍れり、

秋水時至、百川灌河、涇流之大、兩涘渚崖之間、不辨牛馬、於是焉、河伯欣然自喜、以天下之美為盡在己、順流而東、行至於北海、東面而視、不見水端、於是焉、河伯始旋其面目、望洋向若而歎曰、野語有之曰、聞道百以為莫己若者、我之謂也、且夫我嘗聞少仲尼之聞而輕伯夷之義者、始吾弗信、今我睹子之難窮

爲軒冕肆志」肆は「ホシイママニ」と訓ず、我が精一ぱい思ふさまにする意、「成疏」に肆申也と見え、又「小爾雅」に肆極也、と見え、「左傳」昭公十二年傳、昔穆王欲肆其心と見えたり、澹然として軒冕の來りて我が身に加はりたるを以て十二分の滿足とはせざるを云ふ、〔不爲窮約趨俗〕趨は「オモムク」と訓ず、又「ハシル」とも訓ずれば、其の目的に向つて足を疾めて行く意なり、「成疏」に、趨競也と見えたるもよく當れり、窮約は運の行きつまりて貧困なるを云ふ「廣雅」に約儉也と見え、又「論語」に不可以久居約と見え、皇侃疏に約猶貧困也と見えたり、されば、或は窮困し果てたる時も世人の俗惡を競はずとなり、〔其樂彼與此同〕彼とは軒冕を云ひ、此とは窮約なり、彼の軒冕の儻來るも窮約の儻來るも皆外物にして等しく是本性にあらざれば、儻し彼の軒冕を樂まば亦此の窮約をも喜ぶべし、是其の我に寄り來ることは二物倶に同じければなり、〔故無憂而已矣〕倶に是外物なれば軒冕をも樂まず、窮約をも苦しまず、憂なき所以なり、所謂聖人は終身の樂みありて、一日の憂なきもの、古の身を存するに由りて、志を得る者は此のごとし、〔今寄去則不樂〕今世の人の淺慮なる外物身に來れば之を喜び、されば、落膽するは尋常の事なりといふなり、〔雖樂未嘗不荒也〕荒は「スサム」と訓ず、心の進みに進みて取止めもなき迄に墮落する事、「孟子」に從獸無厭謂之荒と見えたり、今世の人の淺慮にして榮華に樂みて、貧困に樂まざれば、若し榮華一朝身に來れば、其の本心は皆散亂して、ある事なきなり、〔故曰喪己於物云云〕それ一朝榮華身に加はれば、之を喜び、去れば憂へ、すべて己を以て外物に徇ひぬれば、即ち己を失ふなり、又窮約には本性を失ひて俗習に齷齪する是れ今人の常習とするなり、〔謂之倒置之民〕倒置は顚倒といふに同じ、正當の位置を逆にする事なり、即ち外物を以て重しとなし、本性を忘るゝは、上を下に倒さに置きたるがごとくなれば、名づけたるなり、尚本篇の首にも解說せり、參看すべし、要するに、本篇は俗學俗思の徒をして、眞性の根本を知り、且恬知交養の祕訣を得ば、至道は本來我に備はれるを確知せしめむとなり、

名言

世無以興乎道、雖聖人不在山林之中、其德隱矣、隱

失ふ輩は、實に此の外物を以て內性に易へたる者なれば、之を位置を顚倒したる者と謂ふといへるなり、

【解義】〔古之所謂得志者〕上文に樂全之謂得志と云へるを承けて、更に其の詳細を說かむが爲に設けたるなり、〔非軒冕之謂也〕軒は卿大夫乘用の車にして、冕は大夫以上の禮冠なり、因りて爵位服飾等人爵の羨望すべき物の換稱とす、既に前篇に圖解を爲せり、〔謂其無以益其樂而已矣〕至道を體得せる人は其の志恬夷にして樂みを取るに在り、官位爵祿の榮譽を身に加ふるを待たざれば、其の樂みを益することなしと云ふなり、益とは附加するの意、之を古人の樂とす、〔軒冕之謂也〕今の人の樂を取るは、冕を戴き軒に乘りて、人爵に汲々たるを樂みとして、志を得たりとするを云ふ、〔軒冕在身非性命也〕官位爵祿の榮華は身の固有せるものにあらず外より受くる者なりとなり、〔物之儻來寄者也〕儻は「タマタマ」或は「モシ」「スナハチ」等の諸訓あり、本は攩に作り、古くは黨に作れり、「成疏」に、意外忽來者耳と見えたり、又「釋文」に、「崔注」を引きて云はく、作黨云衆也と見えたるを、郭慶藩は之を非なりとして、更に辯じて云はく、案崔本儻作黨、黨古儻字、黨者或然之詞也、「史記」淮陰侯傳、恐其黨不敵、「漢書」伍被傳、黨可以徼幸、並與儻同、「淮南」臣道篇、怪星之黨見、楊注訓黨爲頻、王念孫、謂於古無據、惠定宇九經古義曰黨見猶所見也、又訓黨爲所、則據「公羊」注義也、亦似未協、崔云黨衆也尤非と見えたり、「說文」に攩朋羣也、從手黨聲、「朱注」に、經傳皆以黨爲之、亦作儻、作攩、假借作掌「莊子」繕性物之儻來寄也、按猶曾、「史記」伯夷傳注、未定之辭、と見えたり、軒冕は稀に來る者との意にして當てにならぬを云ふなり、〔寄之其來不可圉〕圉は「フセグ」と訓ず、「釋文」に、本作禦と見えたり、禦と通用するなり、又圄とも通用す、「正字通」圉御韻、音禦、止也、扞拒也、「莊子」繕性篇、其來不可圉、「管子」大臣篇、吾參圉之、安能圉我、漢書叙賈誼傳、建設藩屛、以守疆圉、吳楚合縱賴誼之慮與、禦同と見えたり、禦は差當りたるフセギなり、拒はこばみさかふ意なり、時世に逢ひて軒冕を取るとも不運に遭ひては之を去らるゝとも如何ともする能はざるは、外物の止むを得ざるに依るを云ふ、〔故不

性自得となすなり、

古之所謂得志者、非軒冕之謂也、謂其無以益其樂而已矣、今之所謂得志者、軒冕之謂也、軒冕在身、非性命也、物之儻來寄也、寄之、其來不可圉、其去不可止、故不爲軒冕肆志、不爲窮約趨俗、其樂彼與此同、故無憂而已矣、今寄去則不樂、由是觀之、雖樂未嘗不荒也、故曰、喪己於物、失性於俗者、謂之倒置之民、

【大意】此には、上文の得志を承けて、古の得志の者と、今の得志の者との差を說き、倒置の民を述べて今の古に違へるを云ひ、以て學の眞俗を辨ぜり、宣穎曰く又承得志二字發明、三擧古人、其不得不隱者爲存身也、存身爲得志也、得志非軒冕之謂也と、

【通釋】古昔の淳朴無爲にして志を得たる者といへば、恬淡に樂みを取りて、別に車馬祿位の名譽を附加する事なきを期せり、然るに、今日の志を得たりと云ふ者は、榮華を貪りて心に適せりとせり、そもそも爵位車馬等の榮華の物は身外の物にして我が固有の性命にはあらず、暫時我が身に來りて寄れる者なり、いかで長く久しくあらむや、されば若し之を身に附くるも身に附けざるも、我に於ては得失なき筈なり、此の故に、古人窮通の命あり、榮枯盛衰の己にあらざるを知るものは、之を得とも志を得たりとせず、之を失ふとも、世俗に競爭せず、唯自得せるのみ、其の樂み其の外物のありとなしとによりて異ならず、故に憂ふる事なし、今世の人は識見淺薄なるが爲に、此等外物を身に得る時は欣然として喜べども、一旦去るに及べば、悒々として樂しまず、是の事に就きて觀察すれば、彼等は始めより其の本性を忘却せるものなりとす、故に外物の爲に己を喪ひ、俗習に陷りて本性を

【大意】此には、上文存身の意を承けて、其の身を行ふを說く、宜穎曰く又承存身二字、發明、落出得志二字、得志二字、漸逼俗思二字、

【通釋】古昔の身を存せむとする者は、唯其の眞知に任せて、浮華の言辯を用ゐて分別の小智を飾る事なし、故に私知を以て、天下の事物を窮めず、又私知を以て自ら强ひて自然の道の德を窮め知らんとせず危然と唯獨り身を正くして其の自から安んずべき所にて本性に反り、自然に任かして行ふのみ、仁義百行のごときは大道にあらず、之を小行と謂ふ、是非の見解は、大德にあらず、之を小德と謂ふ、小識と小知とは深玄の盛德を損じ、小學と小行とは虛通の大道を傷くるものたり、故に己の身正道を履みてあらば、樂しみ至からざるなし、道其の身に備はらば、其の身存す、身存すれば、其の志得られざるものなし、之を至樂となすとあり、

【解義】〔古之存身者〕上文を承けて起せるにて、即ち眞の隱者なり、〔不以辯飾知〕辯は辯口にて小智を飾らぬなり、即ち眞知に任するを云ふ、陸樹芝曰く言能養恬、而不以辯飾知、止於所不知矣と、〔不以知窮天下〕窮は「キハム」と訓ず、杜預の春秋左氏傳序に、究其所窮とあるを孔疏に言窮盡其所窮之處也と云へり、窮天下とは天下の有らゆる事物を窮め盡くすを云ふ、「成疏」に窮者困累之謂と爲し、私知を縱にして、蒼生を苦めざるなり、〔不以知窮德〕其の本分に止まりて、自得を守るを云ふ、〔危然處其所而云云〕危然は單獨に正しくせる貌なり、山の峙つがごとく獨立せるを云ふ、「釋文」に郭云、獨立貌、司馬本作恑云、獨立貌、崔本作垝、音如累垝之垝、垝然自持安固、又疏に危猶獨也と見えたり、然れば、獨正しくして亂世にありても其本分に居して動搖せず、自然の本性に反りて無爲にあるを云ふなり、〔道固不小行〕大道は廣大なれば、仁義百行の小行をなさずとなり、〔德固不小識〕上德の人は、眞知周偏なるを以て、是非の識鑿をなさずとなり、〔小識傷德云云〕私知の小識少知は、至德を損じ、小學小行は自然の大道を傷るなり、〔故曰正己而已矣〕其の本心を半にして、哀樂順逆なくするを云ふ、〔樂全之謂得志〕正道を履みて虛通なる者は作す所として適せざるなし、之を至樂全しとす、此のごとくにして後志

迹の見るべきなし、是卽ち混芒澹漠の至一なる者なり、若し時世の無道に逢ひて、命亦窮して、時命兩つながら當らざる時は、獨り深く恬知和理の眞を脩め至極の性に安んじ、安排して以て時命の至るを待つ、此卽ち眞の隱者が身を存するの道なりといふなり、

【解義】〔非伏其身而弗見〕伏は「カクス」と訓ず、身を地にヒタリと附けて居る義よりかくるゝ意とす、「易」說卦に、坎爲隱伏、又「廣雅」釋詁に、伏藏也と見え、「老子」に福也禍所伏と見えたるがごとし、見は「アラハス」と訓ず、隱れたる者の表面へあらはるゝ意、「廣雅」釋詁に、見示也と見え、「易」乾に見龍在田注に出潛離隱故曰見と見えたり、現に作る方は俗字なり、〔時命大謬也〕謬は「成疏」に僞妄也と見え、「正字通」に差誤と解して本篇を引用せり、「說文」には、狂者之妄言也と見えたり、右に據りて案ずれば、本は狂者の妄言の義より轉じて、名實相差の意に變じて、「アヤマル」「ダガフ」の意に用ゐるならむ、「林注」に戾也と注せるも、此意なるべし、時世運命共に大に差誤するを云ふ、〔當時命而云云〕時は有道に逢ひ、命は理達するを當時命と云ふ、大行乎天下とは廣く德化を天下に施し行ふことを云ふ、〔則反一無迹〕「宣注」に復於至一之世、而無形迹、又映前幅と、乃ち天下の人皆至一の本に反りて亦人爲の形迹なきことを云ふ、卽ち淡漠の時なり、〔不當時命云云〕時の無道に遭ひ、命亦窮すれば、德化行はれず此の時は、獨り己が眞性を修め、恬知交養の極に安んじ、以て時命の通ずるを待つ、是卽ち道の表はれざる所とす、〔此存身之道也〕窮通休戚を度外視して、靜に時命の當るを待つは、卽ち我身を存する所以なるを云ふ、我を存するは道を存するなり、

古之存身者、不以辯飾知、不以知窮天下、不以知窮德、危然處其所、而反其性、已又何爲哉、道固不小行、德固不小識、小識傷德、小行傷道、故曰、正己而已矣、樂全之謂得志、

【解義】〔世喪道矣〕喪は「ウシナフ」と訓ず、跡方なくする事、影も形も其の跡を止めぬ意、卽ち世の澆季に逢ひて、無爲の道の痕跡も止めずなれるを云ふ、郭慶藩云はく、「文選」江文通雜體詩注、引司馬云、世皆異端、喪道、道不好世、故曰喪耳、釋文闕と云へり、〔道喪世矣〕無爲の道の廢するに由りて、淳朴の世を變じて、浮華の世となるを云ふ、此が爲に世と道と交互に相滅却すと云へるなり、〔道之人云云〕道之人とは至道を體する聖人なり、聖人高踏して世を避けて、少しも世を治むる事なければ、澆季の世となりては至道に興感するものもあらずとなり、〔雖聖人不在山林之中云云〕澆季の時、聖道行はれざれば、假令跡を降して、俗塵に混ずとも、人の知る者無し、聖德を藏して能く用ゐらるゝ事なければ、朝市にありとも、山林に處ると異なる事無しとなり、〔隱故不自隱〕「宣注」に曰く蓋遭道隱之世、故不必自隱而已隱也、此時尙何得不隱、其落筆甚圓と、乃ち聖道行はれざるが爲に自から其の德を隱すに及ばずとなり、

古之所謂隱士者、非伏其身而弗見也、非閉其言而不出也、非藏其知而不發也、時命大謬也、當時命而大行乎天下、則反一無迹、不當時命而大窮乎天下、則深根寧極而待、此存身之道也、

【大意】此には、上文を承けて、眞脩の隱者が身を存するの道を說く、宣穎曰く又承隱字發明、落遞出存身二字と、

【通釋】古昔の所謂、隱者と云ふ者は、其の身を匿して現はさゞるにあらず、又其の口を緘して言はざるにあらず、又其の智惠を藏して發せざるにはあらず、是唯時世の僞妄に逢ひて、我が運命の窮するに遇へるが爲なれば、世の盛衰に隨つて身を全うし、害に遠ざかれるなり、若し又時世の有道に逢ひて、運命亦理達し、時命兩つながら相謬らざるときは、恬知交養、和理其の性に出づるの一に反りぬれば、恬知和理の

知者外心之適也、知識並生而亂始繁矣、烏足以定天下哉と見え、兪樾は知識同義として、向本の職に作れるを非とせり、曰はく、識知二字連文、詩曰、不識不知、是識知同、故連言之曰識知也、心與心識知而不足以定天下、明必不識不知而後可言定也、諸家皆斷識字爲句、非是、向本作職、尤非と見えたり、〔不足以定天下〕其の私知を逞うしても天下を定め人民を服するに足らざるを云ふ、知を忘れ、性に任すれば、乃ち定まるの意なり、〔附之以文益之以博云々〕文章と博學とを以てするに文勝てば質滅び、博至れば心を溺らす、末を逐ひ本を忘るれば、民始めて惑亂し、其の恬淡を失ひて私知をなすを求めざる者なし、是俗學俗思の由りて出で來る所なり、

由是觀之、世喪道矣、道喪世矣、世與道交相喪也、道之人何由興乎世、世亦何由興乎道哉、道無以興乎世、世無以興乎道、雖聖人不在山林之中、其德隱矣、隱故不自隱、

【大意】此には前章を承けて、世と道と交々相喪ひて聖人も施すに由なきを說く、宣穎曰く承上文積衰之後、深致其慨、落出隱字、蓋世道交喪所學不行、則當明志、此遞入俗思之線索也、此篇篇法最巧、讀之止是一順說去と、

【通釋】右の事跡に由りて之を觀察するに、時世衰へて無爲の道を廢棄すれば其の廢するに由りて、淳朴の世を變ず、是に於て道と世と互に相滅却するを知る、聖人如何にして世を隆興せしむべき、世も亦何に由りて、聖道を興隆せむ、斯のごとく衰へたる時には、無爲の道も世に行はれず、世も亦無爲の道を用ゐざるに至りては、聖人俗人の中にありとも、俗人之を知らず、たとひ聖人は朝市に在りとも、亦山林に隱るゝ聖人と少しも異なる所なし、されば時世の昏亂に逢へば、聖道行はれざるを以て、聖人は自から其の德を隱さずとも自から隱れて知らるゝ事なし、何ぞ自から隱るゝ事あらむといふなり、

化を興し、流に沿ひて本を忘る擧を爲せば、民は安を求めて必らず順はずとなり、〔及唐虞始爲天下〕唐は唐堯、虞は虞舜、倶に至德の君と稱す、皆人の能く知る所なれば、煩を厭ひて省略す、〔興治化之流〕文治を興し、敎化を行ふを云ふ、〔澆淳散朴〕澆は澆と同じ、音「ゲウ」、「釋文」に、本亦作澆と見え、「正字通」に澆漓也と見え、「淮南子」齊俗訓に、澆天下之淳、注に薄也と見えて、「ウスシ」と訓ず、畢竟、淳の反對にして、風俗のうすきに云ふ字漓澆も同じ、澆季、澆訛など用ゐる、淳は音「ジュン」、「アツシ」と訓ず、厚くしてまざりのなき意、漓の反對なり、風俗又は性質の上に云ふ、醇、惇と同じ、散は「ミダス」の意、「淮南子」精神訓に不與物散、注に襍亂貌と見えたり、朴は樸と通ず、木地のまゝの意、「荀子」性惡に生離其朴、注に質也と見えたり、聖人は無心にして、自然に任す然るに之をして或は厚く、或は薄からしむるは、皆聖にあらずとなり、〔離道以善〕善は適を過して美を矜るものなり、故に善現れて道の自然は離るゝを云ふ、「外物篇」に去善而自善美と見えたり、〔險德以行〕險は險阻なり、又傾危之道の意にして、「易」繫辭傳、德行恒易、以知險、「京注」に惡也、「禮記」、中庸小人行險以徼幸、注謂傾危之道とあるが如く、畢竟平に反するを云ふ、行は性に違ひて行ふ故に、行は立てども、德は夷然たらざるなり、郭慶藩は上文善の字は爲の字の誤として曰く、案離道以善、險德以行、善の字は疑らくは是れ爲の字之誤ならん、所爲の大道に非ず、所行の大德に非るを言ふ、「淮南」俶眞篇に雜道以僞、儉德以行とあり雜は離の訛にして、儉は險と古字相通ず其の語は卽ち此に本づけるなりと、〔去性而從於心〕其の自然の性を去つて其の有爲の心に從ふを云ふ、〔心與心識〕我有心を以て爲せば、彼は有心を以て應ずるが爲に、本性に任する事なきを云ふ、但し識は「釋文」に如字衆本悉同、向本作職、云、彼我之心競爲先職矣、郭注既與向同、則亦當作職也と見えたり、而して郭嵩燾は曰はく、疑心與心、非彼我之有異心也、心自異也、本然者一心、然引之而動者、又一心、引之而動、一念之覺、而有識焉、冬則識寒、夏則識煖、是也、因覺生意、而有知焉、食則知求甘、衣則知求温是也、佛家以意識分兩境、知者意之發也、故曰不識不知、順帝之則、識者內心之熖、

徳を捨てゝ、然して後、自然の性を去り、分別の心に從ふ、彼我の心更に是れ善惡を謀りて競うて先識をなし、少しも本性に任するなし、人心私智を逞うすれば、禍亂此に源因して、天下定まらざるに至る、此のごとくなりてより、之に附益するに、文華を以てし、之に益すに博學を以てすれば、文華は素質を滅し、博學は心靈を沒却す、是に於いて萬民始めて惑ひ亂る、其の恬淡の情性に反りて其自然の初本に復るを得ざるに至る、噫是心知文博の大過に外ならざるなり、

【解義】〔逮德下衰〕逮は「オヨブ」なり、足にて及ぶの意、德の衰ふるは、聖人の無爲を以て世を維持する能はず、無爲の跡を羨みて人爲を加ふるに由るなり、〔及燧人伏戲始爲天下〕爲は治なり、燧人は支那太古有巢氏の次に立てる君、燧を鑽りて始めて人に火食を敎へたりといふ、名義亦此に由る、伏犧亦包犧とも云ふ、三皇の始の君、燧人氏に代りて王たり、始めて八卦を畫し、書契を造り、以て結繩の政に代へ、嫁娶を制し、儷皮を以て禮となし、網罟を結ひ、佃漁を敎へ、犧牲を養ふに庖厨を以てす、故に庖犧と云ふと、史に見えたれば、此等の類を指して、天下を爲むと云へる也、〔是故順而不一〕順は「成疏」に順二黎庶之心一と云へり、此に依れば上たる者が民の心に順ふを謂ふ、通義には起レ心欲レ順、便自不レ一とあり、此に依れば民たる者が上の施設に順はんとて、各々思を勞するを謂ふ、二說俱に通ず、〔及神農黄帝云云〕神農は炎帝神農氏、三皇の第二の王、風姓、無懷氏に繼ぎて立てる君、火德王たり、農事を興しゝより、神農と云ふ、木を斲りて耜を造り、木を揉めて耒を造り、始めて耕作を敎へ、百草を嘗めて始めて醫藥の發明あり、又人をして日中に市をなし、交易せしむる類、大に民治に心を用ゐたり、黄帝は軒轅氏、三皇第三の君、神農氏に代りて王たり、炎帝の世衰ふるや、諸侯相侵伐す、軒轅干戈を用ゐるに習へるより、之を征伐し、炎帝と戰ひて、勝ちて天子となる、蚩尤亂をなす、指南車を作りて、之を擒にす、舟車を作り、風后を相とし、力牧を將とし、河圖を受け、天文の官を始め、暦を作り、算術を作り、十二律の筩を制し、十二鐘を鑄て、五音を和すと史に見えたり、〔是故安而不順〕通義に曰く、求レ安必不レ順と、乃ち伏羲燧人の治、民既に之に順はんとして心思を勞して、自ら寧一ならざるに、今又治

自然、語末斷と見えたり、

逮德下衰、及燧人伏戲始爲天下、是故順而不一、德又下衰、及神農黃帝始爲天下、是故安而不順、德又下衰、及唐虞始爲天下、興治化之流、澆醇散朴、離道以善、險德以行、然後去性而從於心、心與心識、知而不足以定天下、然後附之以文、益之以博、文滅質、博溺心、然後民始惑亂、無以反其性情而復其初、

【大意】此には、燧人氏以下唐虞の世に至り、文華博學を用ゐるが爲に、萬民亂を成して本性に復し難くなれる事由を說く、「宣穎」曰く此遞出俗學也、文學之弊、民無以復其初、而猶繕性於此、以求復其初、豈非蔽蒙乎と、

【通釋】然るに至德の世衰へて燧人氏に至り、始めて火を燧つて火食を敎へしが、伏犧氏に至りては、牛馬を用ゐ、庖厨を立て、八卦を畫し、以て文字を制し、蜘蛛を放ちて、密網を造りぬ、此の如く人の智詐次第に起り、故意的に天下を治むるよりして、淳樸の心は散じて無爲の道德衰へ天下は之に順へども、人々固有の德一ならず、天下其の性を失ふ、神農黃帝に及び、神農氏共工を伐ち黃帝は蚩尤の戰あり、是れ又更に人爲的に天下を治めんとするよりして天下は安んずれども順はず、又下り衰へて、唐堯虞舜の世に及ぶや兩帝は五帝の末に居り、三王の始に立てり、政治を興し、文化を敷きて淳素を毀ち、樸質を散じて、文飾を用ゐるに至れり、原來、虛通の道にありては、善惡兩つながら忘れたるを、今に至りては、己を捨てゝ人に倣ひ、名を飾りて善を企つ、其の善とは既に自然に乖むけるもの故に道は既に離れたり、而して又性に率ゐて眞に任じ其の蹤を晦ます事能はず、皆情を矯め行を立て以て聲譽を取らむとす、故に內德は危險に及ぶ、少しも淸安なるなし、虛通の道を離れ、淳和の

て靜に、神と人と幽顯各分を守りて互に混雜せず、涼しきも熱きも、四季の順序節よく相調ひて、災眚なく萬物は總べての生類を傷けず、各々天年を盡して夭折の人ある事なし、故に心に知るの術ありと雖へども、無爲なれば、之を用ゐるなきなり、彼此を無爲に均うし、是非を恬淡に混じ、物と我と二あらず、故に之を至一と謂ふ、之を爲すなくして、自から無爲を爲して、然る所以を知らず、而して自然なり、故に此の時に當りて、人は無爲の德に懷き、物は自然の道を含めりとなり、

【解義】〔古之人在混芒之中〕古之人とは、三皇以前太古の時、名號なきの君を云ふ、混芒は混々芒々にして天とも地とも分れずして相混じたるを云ふ、混沌とは、天地開闢の始めに物事の判然せざる狀態なり、「崔注」に、混混芒芒、未分時也と見え、「文選」洞簫賦混沌の注に、善曰、混沌不分貌と見えたり、字又渾沌に作るは「孫子」に渾渾沌沌形圓と見え、又我が邦の物ながら、日本書紀卷一に、古天地未分、陰陽不分、渾沌如雞子と見えて、渾沌を古訓に「マロガレタルコト」と訓せり、「マロガレ」は、ムラガルの意にて、不分之貌と注せるに合へり、〔得澹漠焉〕恬澹寂漠の義、安靜にして騷がしからぬ事を云ふ、畢竟無爲の道なり、〔鬼神不擾〕鬼神は人と取あひて騷動せぬ事即治まれる意、俗に云ふ祟をせぬなり、「ミダル」と訓ずれども、亂に煩の義を兼ねたるものにて、本は手に事を執るの煩しき義より轉じて、煩亂の義となす、「覈玄」に不祟也と見えたり、〔羣生不夭〕萬般の生類短命にして死せるなく、皆天年を全うするを云ふ、夭は音「イヨウ」若死する事、「魯語」に澤不伐夭、注に草木未成曰夭、此の義より云ふなり、〔此之謂至一〕物と我と一致する故に至一と云ふ、至とは物事の極度の義、「說文」に鳥飛從高下至地也、段注に、凡云來至者、皆於此義引伸假借、引伸之爲懇至、爲極至と見えたり、〔莫之爲而常自然〕莫は無きなり、之を爲る事なくして自から無爲をなす時は、然る所以を知らずして自然なるを云ふ、自然は自成なり、「郭注」に、物皆自然、故至一也と見えたるを、郭慶藩云はく、自然謂自成也、「廣雅」然成也、「大戴禮」武王踐阼篇毋曰、胡殘、其禍將然、謂禍將成也、「楚詞」遠遊無滑而魂兮彼將自然、言彼將自成也、郭云、物皆

也」大道、物に通ずれば義をなすにあらずして、義自から宜しきを云ふ、「義明而物親忠也」義理盡きて仁至れば忠を言はずして忠自から大なるを云ふ、〔中純實而反于情樂也〕陸方壺本中の下に心の字あり、「宣注」に承上忠字と云へり、中心質實にして其の本性を得る時は外界の事物に接觸なすとも、眞情に歸着し恆に和適すれば樂を言はずして樂自から諧ふを云ふ、〔信行容體而云云〕信は實なり、敬中心に發して容儀外に行はれ、内外一致する之を信行と云ふ、かくして以て性分の誠を發すれば、自然の節文あり、之を禮と云ふ、禮は人の履行せざるべからざる則にして「說文」に禮履也と見えたるがごとく、履は足の係る所にして、常に踏むものたり、故に人の履行せざるべからざる則と訓ず、〔禮樂偏行云云〕仁義忠樂禮の五者は、皆和理の中より出づ、然れども虛心にして物に應ずる能はずして禮樂のみを以て偏行する時は、其の性情に反して、以て其の初に復る事能はざるに至る、亂の解くるの期、決してあるべからず、「林注」に偏行猶言只見一半也と見えたり、〔彼正而蒙己德〕彼とは正道を履むの人を云ふ、其の德物を正すに足れども物の自然に聽つて吾が德を晦まし、未だ此の德を以て天下に强ひて之を亂す事なしとなり〔冒則物必云云〕天下に强ひて之を亂す時は物の自から正しきにあらず、然れば物の其の性を失ふ事甚しとなり、

古之人在混芒之中、與一世而得澹漠焉、當是時也、陰陽和靜、鬼神不擾、四時得節、萬物不傷、群生不夭、人雖有知、無所用之、此之謂至一、當是時也、莫之爲而常自然、

【大意】此には、太古聖人は、時世と一となり、恬淡なりしを說く、

【通釋】三皇以前の太古の君は、元氣の混沌として未だ全くは開けざる中に在りて、時世と一となり、冥然跡なく君臣上下、倶に恬淡無爲の道を得たり、是の混沌の時に當りて、淳樸の世、擧世恬淡陰陽二氣和ぎ

す、德の深遠なるは物を容れざるはなく、慈愛博大なれば仁の跡則現はる、而して、道は能く物を通ずれば物として理に當らざるなし、理既に宜しければ、義功いかでか著はれざらむや、義理明顯にして、情は正、中に率ゐて、自から矜らざれば、物は皆來り親しみ附く、仁義交々其の心を盡せば、卽ち忠なり、忠とは中心の純實なるなり、純實にして其の眞情に立ち反るときは何等の煩悶苦痛なくして面白きこと限りなし、卽ち之を樂と謂ふ、信に容體の行ふ所に任せて而も自然の節文に順はゞ其の跡則禮となる、然れども、苟くも其の本性に循はずして其の跡を襲ぎて唯禮樂のみ是行ふ時は制作紛紜天下此より亂る、是其の末の一方を偏執するに由れり、凡そ聖人は其の德を已に積みて外に露はさず、故に彼れ天下の人は各々自から正くして何時と無く自然に我が道を蒙りて相感化す決して聖人より押し付けて天下に己が德を蒙らしめんとは爲さず若し之を人に押し付けて蒙らしめんと求むる時は則我の力を以て物を侵し物皆其の自然を失ふ事必定なり、

【解義】〔以恬養知〕恬は音「テン」「成疏」に靜也、心に念慮の驚動せぬ事、シックリと落附きたる意、驚の反對なり、「書」梓材に、引養引恬、又「呉語」に又不自安恬逸と見え、注に猶靜也と見え、「老子」に恬澹爲上と見え、「説文」に安也、從心甜省聲と見えたり、心に安心して甘しと思ふ意、此の謂は、外物に心を蕩かさぬ法を以て眞實の智を養ふを云ふ、佛敎に所謂定にして能く慧を生ずるの意なり、〔知生而無以知爲也〕眞智は生得なれど、之を用ゐて爲す事なきなり、之を智を以て靜を養ふと云ふ、卽ち慧を用ゐずして益々定なるの意なり、〔和理出其性〕眞智を以て知れども、爲す事なき時は、恬を害する事なく、恬にして自から爲す時は、智を傷ふ事なし、此を交々相養ふと謂ふ、二者交々相養ふ時は、和と理との分別本性に出づるを得る也、和は則ち天和、理は則ち生理、因りて下文に德は和也道は理也と云へり、「夫德和也云云」是道と德との定義を示せるなり、德は中和を義となすに由りて、德は和也と云ひ、物に通ずるを理となすが故に、之を大道と稱す、〔德無不容仁也〕德の深き事、萬物を包容す、乃ち慈愛宏博、仁を爲すにあらずして、仁自から洽きをいふ也、〔道無不理義

畢竟、無學を以て學びて其の本に復るべく、無思を以て思ひて其の明を求むべしとなり、〔謂之蔽蒙之民〕蔽は「成疏」に塞也、蒙暗也と見えたり、俗學俗思を以て本に復り、自然の明智を求むるがごとき類は、心靈の塞がりて暗き人、理窟の別らぬ愚人を謂ふとなり、

古之治道者、以恬養知、生而無以知爲也、謂之以知養恬、知與恬、交相養而和理出其性、夫德和也、道理也、德無不容仁也、道無不理義也、義明而物親忠也、中純實而反乎情樂也、信行容體而順乎文禮也、禮樂偏行、則天下亂矣、彼正而蒙己德、德則不冒、冒則物必失其性也、

【大意】此には、古の至道を治むる者が、外物に動かされざるの心を以て、眞實の智を養ふ事を云ふに就き、本に循つて行ひ其の性を失はざる法を説く、宣穎曰く從養性中推出仁義禮樂、語最細最平、可見他處只是恨人襲仁義禮樂之迹故作激昂語耳と、

【通釋】古の至道を治むる聖人即ち眞の學を治むる者は道を以て身を治め、國を治むるに、必ず外物に動かされざる定靜の心を以て眞智を養ひ、外に迷はざらしむ、人には天與の性あれば其の性によりて知るは卽ち知りながら生れたるものと同じ、又其の知りたりと思はずして知るは、智を用ひたるにあらず、智に任せてあるのみ、此の知を眞智とす、此の眞智を以て彼の恬靜を養ふと謂ふなり、原來恬靜ならざれば、眞智を生ずる能はず、又眞知にあらざれば、いかでか此の恬靜を致すを得むや、されば、恬は眞智に由りて能く靜なるを得、眞智は靜より出でて眞智となるべし、是のごとくなれば眞智と恬靜とは、互に相養ふものなり、是則中和の道は、自己の精神に存して自然の理は、天性に出でて皆我に在り、いかんぞ他に關する事あらむや、一體德は身に修めて人に施す、故に中和を以て義となす、理は物に通ずるを以て之を道とな

【通釋】　凡そ人の天性は、之を自然に禀く、故に各其の生分を守り、率ゐて之を行はむには、自から至理に合ふべし、然るに今世の人は己が天性を人爲の僞法即ち仁義禮智等のごとき世間竝の道の上に於て修め繕ひ區々の學問を恃みて其の本來の初めに復らんことを求め、人物を矯めて天性を困蔽するを知らず、以て眞性を治めむと己が欲望を名聞利益等の物に亂し、分別思量の私知を以て、本來の心靈を求めむとす、此のごとき所爲を爲すものは之を名づけて蔽蒙の民即ち理非不分の愚昧人と謂ふとなり、

【解義】　〔繕性於俗〕繕は「ヲサメテ」と訓ず、修め直す事、「崔注」に治也、或云善也と見えたり、俗は世俗のことにて即ち世間竝通常の義なり、〔學以求復其初〕學は學問なり復は「カヘル」と訓ず本へ立ち戻ること、初とは本の義、本初の性を云ふ、學問して本初に復らむを欲するが故に、智慧愈開けて、天眞の性愈失ひ、學愈近くして道愈遠く、求むる所の者愈其の方法を失するを云ふ、舊本多く學の字の上に俗の字を重衍す、陳碧虛は張君房の校本に從ひ之を削る、「宣注」亦之を用ふ、但「宣注」は繕性於俗學の五字を一句と爲し、下又滑性於俗思を一句と爲せり、蘇輿は曰く學與レ思對文、言性與レ欲皆已爲二俗所一レ汨、雖二學思交致一、只益二其蒙一、宣以二俗學俗思一句斷失レ之と、今蘇說を取る、〔滑欲於俗〕滑は音「クワツ」亂なり、欲とは心思なり即ち己が心思を世間並の物事の上に用ひ亂だすこと彼の貪富榮辱得失是非の類皆是れなり、此等の本性を障害する所の貪欲を俗界に貪らむとして心靈を暗黑ならしむを云ふ、又「崔注」に滑治也とありて是れ「論語」の亂臣を治臣と解するが如く、謂はゆる反訓なるが兪樾は之を取り上文の繕と對し二句一義とせり、曰はく上文繕二性於俗學一以求レ復二其初一、崔注亦訓レ治蓋二句一義、繕也、滑也、皆治也、故曰、求レ復二其初一、求致二其明一、若訓レ滑爲レ亂、則與二求字之義一不レ貫矣、滑得レ訓レ治者、滑猶レ汨也、「說文」水部汨治レ水也、是其義也「玉篇」手部曰、搰亦搰字、然則滑之與レ汨、猶二搰之與一レ抇矣と見えたり、〔思以求致其明〕妄に汲々として心慮を勞して、其の本性を明にせむと思ふをいふ、「論語」に學而不レ思則罔、思而不レ學則殆と云へるが如く元來學と思とは相待ちて功效を爲すべきを莊子は後の學徒が徒に其の形跡に拘々たるを見て之を貶黜し

聖人也と見えたり、又作者の說に就きて「莊子因」に此篇發揮精神之理、微言依著、但細玩其行文蹊徑、與天道篇如出一手、此則略少波瀾耳、或以膚淺疑其疑作、此明眼者之言也、と見えたるを莊子雪は之に反して曰はく此篇所言多散見諸篇、而以虛靜無爲收歸養神、以純素二字括之、爲入聖成眞之要、實大宗之歸宿也、有議其膚淺疑非莊筆者、然起首以五等之士陪出天地之道聖人之德、以下疊六故曰、重重證解、重重申贊、參伍錯綜、而精彩百出、不拘拘唧接、而大氣貫注、末乃以一喩一諺作結、此種神力、故非史漢以下所有也と見えたり、

名言

不爲福先、不爲禍始、

其寢不夢、其覺無憂、其神純粹、其魂不罷、虛無恬惔、乃合大德、

悲樂者德之邪、喜怒者道之過、好惡者德之失、

衆人重利、廉士重名、賢士尙志、聖人貴精、

繕性第十六

本篇は、主として、人が稟性の自然に率ゐて行ふべき眞修を捨てゝ、人爲の俗學を習び、遂に蔽蒙倒置の民となるを以て、唯須らく自然に從ひ、志を求め末を捨てゝ本を務むべきを說き、且又三皇五帝の治世に各異同あり、古昔の隱者に存身の種類ある等を示して以て眞修を志すべきを述べたり、宣穎曰く俗學俗思雙起一篇之意、前半篇完俗學之概、接手用由是視之一節、遞入俗思之概、行文有蛛絲馬跡之巧、兩章俱借古傷今、前幅兩用古人、落到俗學、後幅三用古人、落到俗思、最有蕩漾之趣と、

繕性於俗學、以求復其初、滑欲於俗思、以求致其明、謂之蔽蒙之民、

【大意】此には、俗學者が取れる方法の誤れるを說き、又其の學者に名づくるを說く、宣穎曰く此節冒起一篇、三句起前半篇、三四句起後半篇也、

言無的當と見えたる此の說のごとくなるべし、「衆人重利云云」「成疏」に、世俗衆多之人咸重財利、則盜跖之徒是也、貞廉純素之士、皆重聲名、則伯夷介推是也、賢人君子高尚志節不屈於世、則許由子州支伯是也、唯體道聖人無所偏滯、故能寶貴精神、不蕩於物、雖復應變隨時而不喪其純素也と見えたり、「故素也者云云」「解莊」に夫人之所寶莫尚於純素、能寶純素、則天地萬物、皆吾本體中之微物耳、故曰、素也者謂其無所與雜也、人間世曰、夫道不欲雜、雜則多、云云、若人欲體純素、而胸中安著純素二字、則雜而多也、不可謂之素也、無所與雜、而後始可謂之素而已と見えたり、又素は「シロシ」と訓する字、「說文」に白致繒也、從糸𠂹取其澤也、段注に繒之白而細者也、致者、今之緻字、鄭注雜記曰素生帛也、然則生帛曰素對練繒曰練而言、以其白色也、故爲凡白之稱、以白受彩也、故凡物之質曰素、以質未有文也と見えたり、又雜は「說文」に五采相合也從衣集聲と見え、又「正字通」雜の條に「說文」本作襍、五色相合也、與雥通、正譌从雥廢雜泥と見え、又「干祿字書」に雜雜上通下正と見えて、今は專ら雜の字を用ひたり、「純也者云云」「解莊」に純也者謂其不虧其神也、上文曰、純粹而不雜此乃養神之道、此其德全而神不虧也と見え、又「覈玄」に純不雜也、今以純爲不虧、素爲不雜者純素各帶不虧不雜之義也、按純全一、故曰不虧、素一色故曰不雜と見え、又疏に夫混迹世物之中、而與物無雜者至素者也、參變囂塵之內、而其神不虧者至純者也、豈復獨立於高山之頂、拱手於林籟之間、而稱純素哉、蓋不然乎、此結釋前純素之道義也と見えたり純は「說文」に絲也、從糸屯聲、「論語」曰今也純儉、段注に純與醇音同、醇者不澆酒也、假純爲醇故班固曰不變曰醇不襍曰粹、崔覲說易曰、不襍曰純不變曰粹其意一也、美絲美酒、其不襍同也、と見えたり、さて虧は音「キ」「カク」と訓ず、既に上文に解せり、「能體純素云云」「成疏」に體悟解也、妙契純素之理、則所在皆眞道也、故可謂之得眞道之人也、と見え、發覆には結歸處要見、抱純素之道者纔謂之眞人、其餘尚行尚名之人皆非正正之流、非狂即狷也と云へり、又眞人を解して林雲銘は曰く眞人至人也、前曰聖人之德、此又曰眞人、便知、內篇、所謂至人無己、神人無名、皆只是聖人字、却換許多名字、非曰眞人至人又高於

上帝の意を以て制字の本義とす、後に天下に王たるもの〻稱とす、「莊子雪」に呂注を引きて精神際天蟠地、其用之利、豈止干越之劍哉、其名爲同帝、其貴豈直劍之可貴哉と見えたり、〔純素之道云云〕純素之道は卽ち神を養ふの道なり、「解莊」に純素之道、唯神是守、能守神而不輕用、勿失則與形合一、而無弊竭之患、形神合一、則精與神亦合一、而上合天理、下合人倫、諸解分精與神、以爲主宰、爲作用、不知合一之旨と見え、「莊子雪」に純素、總括前文、解在下文、純素之道、專以守神、守之勿失、至於純熟、則形神合一而不相離矣、合一之精、無所不通、無爲也、而無不爲、則神之運用、流行充滿、與太和元氣所以主宰造化、自有倫序者、吻合而無間矣、所以名爲同帝也と見えたり、〔合於天倫〕倫は「成疏」に理也と見えて自然の理といふに同じ、

野語有之、曰、衆人重利、廉士重名、賢士尙志、聖人貴精、故素也者謂其無所與雜也、純也者謂其不虧其神也、能體純素、謂之眞人、

【大意】此には眞人が純素を以て、其の精神を養ひ、天と合する所以を說く、

【通釋】民間に隱れたる逸人の語に曰はく、今日の俗習として一般の人々は咸く金錢を重んじ、正直なる人々は實利よりも名譽の盛なるを重んじ、賢き人は志を高くして苟くも世と合はずして我が節を立てむを尙ぶ、唯至道體得の聖人は偏滯する所なし、故に能く精神を寶として貴び、外物に心を蕩さず、復變に應じ、時に隨ふと雖ども、而も其の純素を喪はず、故にたとひ迹を世の中に混じたりとも、物と雜はる事なきは之を素と云ふ、又俗人の中にありても、其の神損せざる者は之を純と云ふ、此の純と素とを悟り了れるものは之を眞道を得たる人と謂ふべしと云ふとなり、

【解義】〔野語有之曰〕野語とは野人の語なり、里語或は諺といふに同じ、「成疏」に、莊生欲格量人物志尙不同、故汎擧大綱、略爲四品、仍寄野逸之人、以明

せるにあらずや、萬民を化導し、萬物を育生し、一方を守らざれば形象を以て之を限るべからず、其の名を同帝となす、蓋し天帝と用を同じうするものの意なり、形や弊えず精や竭きず、純粹靜一淡にして無爲なるは此神を養ふの道卽ち是純素の道なり、純精素質之道唯神を守るに在り、神を守りて喪はざれば、精神凝靜ならん、而して形は枯木に同じく、心死灰のごとく、物我兩つながら忘れなむには、身神一たらむ、身神合一なれば精智無礙なり、故に以て自然の理に冥合すといふなり、

【解義】〔夫有干越之劍者〕干越之劍は所謂干將莫邪の名劍なり、疏に干溪名也、越山名也、干溪越山倶出良劍也、又云、干吳也、言吳越二國並出名劍、因以爲名也、と見え、又「釋文」に司馬云、干吳也、吳越出善劍也、李云、干溪越山出名劍、案吳有溪名干溪、越有山名若耶、並出善鐵、鑄爲名劍也と見え、郭慶藩は曰はく、案王念孫曰、干越猶言吳越、「漢書」貨殖傳辟猶戎翟之與于越不相入矣、于亦干之誤、干越皆國名、故言戎翟之與干越、顏師古以爲春秋之於越、又因于而誤於、當從司馬說爲是（淮南原道篇干越生葛絺、高誘注曰干吳也、劉本改干爲于、云于越一作於越非と姑く錄して一說と爲す、〔柙而藏之〕柙は音「カフ」我が邦の唐櫃の類、堅牢なる匣の意、「論語」に虎兕出於柙は（ヲリ）にて別義なり、「列子」湯問篇には匣而藏之、未嘗啓封と見えたり、寶劍すら大事あるにあらざれば用ひず、況や精神は輕々しく用ひざるに喩へたるなり、唐櫃に納れて祕藏するは寶としては最上のものたるを知るべし、それ人の精神之を名劍に比すれば其の寶たる果して如何、然らば則ち宜しく祕藏して輕用せざるべし、然るに世人之を利名の中に拋擲して惜まざるは如何ぞや、以て神を守るべきを知るべし、〔精神四達云云〕四達は四方に通達するなり、並流は同通と同じ滯るなきを云ふ、〔上際於天云云〕際は及ぶなり蟠は集まるなり、以上精神四達より蟠於地までは、精神の用を云ふ、〔化育萬物云云〕「成疏」に化導蒼生、含育萬物、隨機俯應、不守一方、故不可以形象而域之也と見えたり、〔其名爲同帝〕天帝に同じきの意、帝は「成疏」に審也と見え、「說文」に諦也と見えて「アキラカ」若くは「ツマビラカ」の義にて、至微にして察知せざるなきの意

爲而不以毫厘之知慮夾于其間、則不知不識其性自平而淸、此乃天德之所以然也と見え、又林雲銘は以水爲喩雖似尋常之說、但曰鬱閉而不流、亦不能淸則非全然如枯木死灰矣、不雜則淸、莫動則平、此無爲也、不流不能淸此無爲之中有爲也と云へり、〔純粹而不雜〕「成疏」に雖復和光同塵、而精神凝湛、此覆釋前其神純粹也と見え、又「正義」に象水之淸と見えたり、〔靜一而不變〕疏に縱使千變萬化、而心恒靜一、此重釋一而不變と見え、又「正義」に象水之平と見えたり、〔惔而無爲〕疏に假令混俗揚波而無妨虛淡、與物交接亦不廢無爲、此釋前恬惔之至也と見えたり、〔動而以天行〕「解莊」に動以天行、常靜常應、常淸靜也、夫衆人失之於動、故聖人養之以靜、然其靜也、非塊然一無所爲、故以水喩、靜與動、交相爲用也、而動靜兩　無所關、此乃養神之道也と見えたり、〔此養神之道也〕「莊子雪」に以上疊用六故曰字、申贊聖人之德、至此方總束一句、曰此養神之道也、將前文衆美俱收歸養神、下文乃就養神說到成眞と見えたり、

夫有干越之劍者、柙而藏之、不敢用也、寶之至也、精神四達並流、無所不極、上際於天、下蟠於地、化育萬物、不可爲象、其名爲同帝、純素之道、唯神是守、守而勿失、與神爲一、一之精通、合于天倫、

【大意】此には干越劍の例を引きて、神を守りて失ふなき時は、自然の理に合するを說く、宣穎曰く將上數節、都歸養神、是一篇之主と、

【通釋】干越の寶劍は天下の名劍なり、常に柙の中に祕藏して輕々しく用ひず、寶として之を重んずれば此のごとし、然るを況や精神を愛する者に於てをや、精神を愛養する者は四方に通達して滯る事なし、上は玄天に逮び、下は厚地に迫り、上下四方極めざる所なし、動きて常に寂たるは輕々しく用ひざるを證

已則勞、勞則竭、水之性、不雜則清、莫動則平、鬱閉而不流、亦不能清、天德之象也、故曰、純粹而不雜、靜一而不變、淡而無爲、動而以天行、此養神之道也、

【大意】此には聖人が靜を以て神を養ふを說く、而も靜は一も爲す所なきの謂にはあらで、動くに天行を以てするを述ぶるなり、

〔通釋〕人の體形精神は限りあり、而も役用涯際なき時は必ず死す、故に方外に形を勞して休息を知らざれば則ち困斃す、精神物を逐うて止まることを知らざれば必らず勞損す、損すれば精氣竭き果つべし、抑、水の性や清平なり、善く物を鑑みるを得、然れども若し之を混雜閉塞すれば常性に乖くを以て亦波瀾を起し、流注する能はず、亦物を鑑みる事能はず、故に動かず閉ぢずんば清且平、照して私なく物の準的となるは即ち天德の象なり、是聖人の心靈皎潔にして鑑照私なきは自然に象り天と德を合せたるものとするに譬へたるなり、故に曰はく、純粹にして雜ならず、靜一にして變ぜざるがごとく、清且平にして、而も淡而無爲、即ち一念の私なく物に感じて動き應じて心なく天道の運行に同ず、是神を養ふの道なりといふなり、

【解義】〔形勞而不休則弊〕弊は「ツヒユ」と訓ず、疲れて物の用に立たぬやうになる意、身體を甚しく勞して疲れ果つるを云ふ、〔精用而不已則勞〕勞は「ツカル」と訓ず、力に堪へ得られぬやうになる意、天道篇に不搖其精、乃可長生と見えたると相發明すべし、〔勞則竭〕勞して已まざれば精力の枯竭するを云ふ、「解莊」に此の三字は注文の攙入と云へり、「莊子雪」に精、即神之用也と見えたり、〔水之性云云〕水を以て人の性に喩へたり、「老子」に上善若水とあるに對照すべし、「解莊」に夫水之性、不雜則清、人之性亦然、欲清之而用種種知慮、則愈慮而愈擾、莫動則平、水不動而平、則大匠取法、人能一念不動則性自平而清、鬱閉而不流、則亦不能清、若欲一念不動、而强抑動念、則其念愈動、故唯任性之自

と見え、「郭注」に乃與天地合恬惔之德也と見えたり、

故曰、悲樂者、德之邪、喜怒者、道之過、好惡者、德之失、故心不憂樂、德之至也、一而不變、靜之至也、無所於忤、虛之至也、不與物交、惔之至也、無所於逆、粹之至也、

【大意】此には人の心本來物なきに、一も動く所あれば、皆妄念に屬するを說くされば諸念起らざれば本體瑩然たることを知るべし、

【通釋】心に違へば則ち悲しみ、意に順へば則ち樂しむ、是天德を傷る、又心に稱へば則ち喜び、情に乖けば則ち怒る、喜怒忘れざるは是道の罪過なり、好むなきに好むをなし、惡むなきに惡むを爲す、是德の失なり、故に喜はず、怒らず、憂ふるなく、樂しむなく恬惔虛夷なるは至德の人とす、眞一の玄道を抱きて、塵土に混じても變ぜざるは靜の至極なり、能く世と乖き逆ふ所なきは、虛豁の至極なり、分を守りて物に交はり期待する所なきは恬惔の至極なり、靈智精明にして物に逆はざるは純粹の至極なりとなり、

【解義】「悲樂者云云」此の以下德之至也までは要するに至德は常に適すれば情、心に觸れて惱む事なしといふなり、「無所於忤云云」忤は「サカフ」と訓ず、心にさかひて氣に入らぬの意、虛を以て受くれば違ふ事なきなり、「不與物交云云」物自から來れば之に交はり、我より交はらざるを云ふ、「無所於逆云云」逆は「サカフ」と訓ず、順の反にて物の顚倒して來るの意、「解莊」に與物迕觸則胸中紛紛不虛、與物交則馳逐世情而胸中繁雜不淡、與物拂逆則方寸擾々不粹、靜也虛也、淡也粹也不向外馳之至、而其德之虛無恬淡可以自證也、於天道篇雖既說道德之可見者、人誤認則皆爲外物所拘牽終失自己之本體、故於此篇反覆詳說、唯無外逐之念不爲外物所牽倒、而後始可以治外物而已、此篇引故曰文與天道篇、意同而語異、讀者察諸と見えたり、

故曰、形勞而不休則弊、精用不

案故詐也、「晉語」多爲之故以變其志、韋注曰、謂多作計術以變易其志、「呂覽」論人篇去巧故、高注巧故僞詐也、「淮南」主術篇上多故則下多詐、高注、故巧也皆其例、「管子」心術篇去智與故、尹知章注、故事也、失之と、〔故無天災〕災は「ワザハヒ」と訓ず、思ひがけぬわざはひを受くる事、「說文」に𡿧害也從一雝川、春秋傳曰、川雝爲澤凶と見え、段注に害者傷也、𡿧害字本如此作、「玉篇」云、天反時爲𡿧、今凡作灾、災、菑皆假借字也、災行而𡿧廢矣、「國語」曰陽塞而在陰、川原必塞、原塞國必亡、以一塞川、是爲害川、故字從一雝川と見え、又「正字通」に𡿧災本字、正譌从𡿧、有物梗之爲𡿧、會意、借爲天火之𡿧、別作灾、烖、災、後人所制隷字也と見えたり、〔無物累〕累は「ワヅラヒ」と訓ず、それが引かゝりとなりて進まぬやうになる意、〔無人非〕非は「ソシル」と訓ず、誹と同用す、人の惡事を言ひ立つる意、謂は人と同する故に衆人必ず是とするを云ふ、然れば是非の非とも見るべし、〔無鬼責〕鬼は神なり、「郭注」に同於自得、故無責と見えたり、責は其の所作を詰るなり、無天災以下本句に至る四語亦天道篇に見えたり、〔其生若浮云云〕「郭注」に汎然無所惜也と見えたるは、繫戀無きを云ふなり、〔光矣而不耀〕自から晦ますを云ふ、「成疏」に智照之光明、逾日月而韜光晦跡、故不炫耀於物也と見え又「老子」（其政悶悶章）に光而不耀、又（道冲章）和其光、同其塵と見えたると相發明すべし、〔信矣而不期〕必を物に取らざるを云ふ、「成疏」に逗機赴感、如影隨形、信若四時必無差忒、機來方應不豫期也と見えたり、〔其寢不夢云云〕此の句既に大宗師篇に見えたり、「成疏」に契眞、故凝寂而不夢、累盡、故常適而無憂也と見えたり、覺は「サムル」と訓ず、夢の醒めたる意何となく心を用ゐずして知るを「サトル」と云ふに比して、其の意を知るべし、「釋文」に、古孝反「カウ」の音を出し、「正字通」には、音敎、夢醒曰覺、「詩」王風、尙寐無覺、叶上、憂、造、云云と見えたり、〔其神純粹〕「成疏」に純粹者不雜也、既無夢無憂、契眞合道、故其心神純粹而無間雜也と見えたり、〔其魂不罷〕罷は「ツカル」と訓ず、力の疲れて後に退る意、疲と通用す、無欲なれば疲るゝ事なきなり、此の語亦天道篇に見えたり、〔虛無恬惔云云〕「成疏」に歎此虛無與天地合其德

に同じ、其の動靜時に順ひて無心なり、一般の人は福の先たるを善みし、禍の始となるを惡む、禍の始となるを惡むは、人々能く知りて之を避くれども、然も福の始たらむとして反りて禍を受くる者少なからず、然るに聖人は福の先とならざるは乃ち道德の主とする所、感じて後に應じ、機會至りて動き、止むを得ずして後に起つ、是皆無私無心より出づるものなり、內には事に先だちて謀る事もなく、外には已に過ぎたる迹を去てて、自然の妙理に順へば天然の災害もなく、物の累なく、人に非らるゝ事なく、神罰なし、其の上に聖人の動靜は無心にして死生一貫なれば、其の生きてあるは流に浮ぶ泡沫の暫らく起るがごとく其の死せるや疲勞したる者の休息するがごとく、少しも繫戀あるなし、其の心や死灰のごとく、緣念を絕ち、事に先だちて謀る事なく、譬へば鏡の高く懸りて物の來るを待つがごとし、其の光天と均しく、特に自から輝かさむとする事なし、又其の信は四時のごとく、而も必期の念なし、此の意、更に固我兩つながら倶に絕ちたるものなり、其の精神は純粹と專一なれば、寢ぬれども夢みる事なく、恬惔無爲にして心神閑逸なれば、其の精魂應用すとも、些少も疲勞する事なし、是乃ち自然と其の德を合するとなり、

【解義】〔聖人生也天行〕天行は天理に順ひて行くなり、此の條も亦天道篇と同じ、彼の解を觀るべし、〔其死也物化〕物化とは身を視ること蟬の身を脫するがごとしとなり、係はる所なきを云ふ、〔靜而云云〕動靜の無心なるを云ふ、〔同波〕は正義に波流動之意と見え、又「林注」には同波同流也と見えたれど、「成疏」には動與陽氣同其波瀾と見えたり、〔不爲福先云云〕「林注」に隨所感而後應、我無容心、故超出乎禍福之外矣と見え、又疏に夫善爲福先、惡爲禍始、既善惡雙遣、亦禍福兩忘、感而後應、豈爲先始者也、と見え、又陸樹芝は二句卽養生主、爲善無近名、爲惡無近刑之意、不爲福先、善亦懶爲也、不爲禍始、惡更不爲也とも云へり、〔迫而後動〕「成疏」に迫至也、逼也、動應也、和而不唱、赴機而應と見えたり、〔不得已後起〕「郭注」に任理而起、吾不得已也と見え、「成疏」に已止也、機感通至事不得止而後起應、非預謀と見えたり、〔去知與故云云〕「正義」に知者自用之私、故者有心之爲と見え、郭慶藩は曰はく

有心有爲にして恬淡寂寞の眞を失ふを言ふ、「宣注」に八箇字、是聖人一生功用、此節一提、下四節都寫此八箇字、と見えたり、〔天地之平云云〕「正義」に平定也、謂定理也、質實也と見えたり、〔聖人休休焉〕兪樾曰く、休焉二字傳寫誤倒、此本作故曰聖人休焉、休則平易矣、天道篇故帝王聖人休焉休則虛、與此文法相似、可據訂正、と見えたり、然る時意更に明白なるべし、但し「呂注」に休休、不役心於取舍之間、平則不陂易則不艱、恬然無知、惔則不交物所謂寂寞無爲者如是而已と見えたり、「林注」に休止也、言帝王聖人之心止於此也、亦猶曰止於至善也と見えたり、〔邪氣不能襲〕正義に襲侵也と見え、又「解莊」には、掩其不備而入曰襲、枚乘七發有邪氣襲迹之文、と見えたり、兩義孰も通ずべし、〔故其德全而云云〕「郭注」に夫不平不惔者、豈唯傷其形哉、神德並喪於內也と見え、又「解莊」に至於其德全而神不虧、則能盡平易恬惔之旨者也、と見えたり、

故曰、聖人之生也天行、其死也物化、靜而與陰同德、動而與陽同波、不爲福先、不爲禍始、感而後應、迫而後動、不得已而後起、去知與故、循天之理、故無天災、無物累、無人非、無鬼責、其生若浮、其死若休、不思慮、不豫謀、光而不耀、信矣而不期、其寢不夢、其覺無憂、其神純粹、其魂不罷、虛無恬惔、而合天德、

【大意】此には聖人の物に應ずる、自然に順ふは、其の虛無恬惔を成して、天に合ふ所以を說く、亦天道篇を併觀すべきもの多し、

【通釋】聖人は勞すると息するとの二ならず、去ると來るとの一たるを體得したるが爲に、其の生きてある時は天道の運行の如く、其の死せるや萬物の變化に類して、些少も心底に介するなし、精神の凝靜なるは大陰と同じく、其の威德應感して動く事は陽氣

又「莊子雪」に極窮也、無不忘、故澹然不窮、無不有、則衆美從之矣、下二句卽申上二句之意と見えたり、又「林注」に無極無定止也、衆美從之備萬善也とも見えたり、〔此天地之道云云〕郭注に不爲萬物而萬物自生者天地也、不爲百行而百行自成者聖人也と見え、又「老子」（天地不仁章）に天地不仁、以萬物爲芻狗、聖人不仁、以百姓爲芻狗と見えたり參看すべし、又「莊子雪」に此段言聖人與天地合德已造其極、乃一篇之綱、下文、六故曰錯舉成說以申贊之、似無倫次、而實一氣唧接也と見えたり、「正義」に曰く特舉聖人以見得天地之眞者惟此と、

故曰、夫恬惔寂漠、虛無無爲、此天地之平、而道德之質也、故曰、聖人休、休焉則平易矣、平易則恬淡矣、平易恬淡則憂患不能入、邪氣不能襲、故其德全而神不虧、

【大意】此には前揭五等の士の好む所を去てゝ、聖人の心に歸すれば、恬淡にして自然なるを說く、天道篇の首に同文あり、併せ觀るべし、

【通釋】それ人は恬淡と安靜にして、寂漠と空虛なるは凝湛の心なれば天地は此の法を以て平均の源となし、虛無無爲なるは寂用の智なれば、道德は此の法を以て質實の本とせり、故に曰はく、聖人は心を恬淡の鄕に休め、智を虛無の境に息へば、艱難を履めども簡易にして、危險を渉れども平夷なり、抑〻患難は有爲に生ず、有爲亦患難に生ず、故に心を恬淡に休むれば平易なり、平易にして恬淡なり、されば平易と恬淡と互に相成すを知る、心既に恬淡にして、迹亦平易なれば心と迹と一致する時は、憂患も其の心に入る事能はず、邪氣妖氛も其の身を侵す能はず、恬淡無爲は外形の毀はるゝなきのみならず、內德も亦圓滿なり、形と德と安ければ精神損せざる事亦論なしとなり、

【解義】〔夫恬淡云云〕此の文は既に天道篇にある者と意は同じうして語少し異なり、惔は天道篇には淡に作れり、天道篇は質の字、至に作れり、同義なり、要するに意を刻して、聖人の道德を學すれば則ち皆

無功名而治、無江海而間、不道引而壽、無不忘也、無不有也、澹然無極而衆美從之、此天地之道、聖人之德也、

【大意】此には上述五樣の人々の所作のごとく己を勵ましてなす事は、道の本旨にあらざれば、唯聖人のみ天地の眞を得たる由を說く、

【通釋】若しそれ至道體得の聖人は、意を刻せずして、其の道彌〻高く、仁義なくして恒に自から修習し功名を忘れて天下大に治まり江海に處らずして淡泊の位地に立ち、導引の術を用ひずして壽命極まりなし、是物と我と盡く忘れざるものなし、故に萬物之に歸するなり、萬物歸するが故に有らざるなし、是卽ち忘れてこれを有するものにして、之を有すとして有するにあらず、心意澹然として虛しければ、其の道窮まることなし、而して萬德の美皆從ふ、畢竟萬物をなさずして萬物自から生ずるは天地なれば、聖人も化育に心なくして、百行成るがごとく、天地の道は卽ち聖人の德と同じといふなり、

【解義】〔不刻意而云云〕不刻意而高以下不道引而壽に至るまでの五樣の所作は皆自然に歸宗するを云ふ、卽ち眞脩なり、郭嵩燾曰はく、仁義者、人與人相接而見焉者也、愛焉之謂仁、因乎人而愛之、是固有人之見存也、宜焉之謂義、因乎人而宜之、是仍有己之見存也、無人己之見存、則仁義之名可以不立、而所修者乃眞修也と、〔無不忘也云云〕忘れざるなく有らざるなしとは無爲にして爲さざるなきを云ふ、郭慶藩曰忘は亡の借字にして猶失の如しと云へり、慶藩案 忘乃亡之借字、亡猶失也、「管子」乘馬篇今日爲明日忘貨、「史記」孟嘗君傳、所期勿忘、其中並與亡同、「漢書」武五子傳、臣聞子胥盡忠而忘其號、師古注忘亡也、「淮南」修務篇に、南榮疇耻聖道之獨亡於己、「賈子」勸學篇、亡作忘、皆其例と見えたり、「莊子雪」に云はく、無不忘、無不有、至無而含至有也、と、〔澹然無極云云〕澹然は「成疏」に 一本作澹而と見えたり、「嚴玄」に澹然無飾貌と見えたり、「成疏」に云はく、心不滯於一方、迹冥符於五行、是以澹然虛曠、而其道無窮、萬德之美、皆從於己也と見え、

厚養人也と見えたり、處は「ヲル」と訓ず、安居するなり、間曠は山川の清き處に逍遙するを云ふ、間は閑なる意、曠は「トホシ」と訓ず、「家語」辨樂に曠如望羊、注用志廣遠と見えたるがごとき意なり、〔無爲而已矣〕「正義」に無爲猶言間散と見えたり、〔間暇者云云〕林注に間暇隱者也、逃世遠去、超出是非之外故與爲亢非世者不同、と見えたり、〔吹呴呼吸〕吹は「フク」と訓ず、急に息を出すこと、呴は音「ク」の時は煦と同じく息を以て暖むる事、又音「ギョ」の時は「スフ」と訓じて息を急に入るゝ事、卽ち吹呴は呼吸と同じ、但し「成疏」に、吹冷呼而吐故、呴暖吸而納新と見えたれば、濁氣を吐きて新鮮なる氣を納るゝを云ふなり、「老子」(將欲取天下章)に、凡物或行或隨或噓或吹と見え、「說文」に吹也、從口虛聲、と見え、「聲類」に出氣急曰吹、緩曰噓と見え、又「正韻」に蹙脣吐氣曰吹、虛口出氣曰噓、吹氣出於肺、屬陰故寒、噓氣出丹田、屬陽、故溫、と見え、天運篇に孰噓吸と具えたる類是なり、案ずるに釋文に呴、況于反、字亦作煦と見えたれど、「康熙字典」噓の條に、按「正韻」云、亦作呴、煦、歔、此三字並匈于切、屬虞韻、噓屬魚韻、音切各異、「正韻」非と見え、又按諸韻書並作噓「字彙」「正字通」作噓附十二畫非、今改正と見えたり、〔吐故納新〕釋文に李云吐故氣、納新氣也と見えたり、〔熊經鳥申〕熊の樹に登り鳥の翼を延べて長く息をするを云ふ、「釋文」に熊經司馬云、若熊之攀樹而引氣也、鳥申司馬云、若鳥之嚬呻也と見え、「正義」には若熊之攀樹而引氣、若鳥之伸頸而運體とも見えたり、いづれも通ずべし、〔爲壽而已矣〕年を延ばすの法となり、〔此道引之士〕道は導と同じ、導引は手を以て身體を按摩して、身體を和らぐる法にて、後には醫術の一に入り、俗に按摩と稱す、釋文に李云、導氣令和、引體令柔と見えたり、此の法を行ふ人なり、「衆玄」に、「後漢書」華佗傳云、古之仙者爲導引之事、熊經鴟顧、引挽腰體、動諸關節、以求難老、注云、熊經、若熊之攀枝自懸也、經縊也、形如縊死也、申伸也、若鳥之伸翼と見えたり、〔養形之人〕年を延ばし、身體を永く保持する人なり、〔彭祖壽考者云云〕彭祖は古の長壽の人の名既に上文逍遙遊篇に出でたり、

若夫不刻意而高、無仁義而脩、

は「説文」に訕謗也、從言山聲と見え、論語に悪居下而訕上者、孔安國注、訕謗毀也、と見え、野王の説に、「禮記」に爲人臣者、有諫而無訕、是也、蒼頡篇訕誹也と見えたり、以て謗の傍側より非議すると區別を知るべし、要するに高論怨誹にして大言を吐きて、世を憤るの意なり、「釋文」に、李云、非世無道、怨己不遇也と見え又「林注」に怨誹は憤世嫉邪也とも見えたり、〔爲亢而已矣〕亢は音「カウ」、「タカシ」と訓ず、高きを窮むるの義、易の亢龍の亢即ち是なり、「釋文」に李云窮高曰亢と見えたり、志を尊大ぶりて見下ぐる意なり、「叢玄」に以其行爲高、因怨誹世人也と見えたり、而已矣は只是ぎりなりと限る辭にして耳、爾よりは其の意重し、〔山谷之士〕山谷に隱處する人なり、即ち隱遁者を云ふ、〔非世之人〕世事の是非を議論する人なり、「正義」に非世は輕世也と見えたり、〔枯槁赴淵者云云〕枯槁赴淵は「正義」に沈淪不返也と見え、又「林注」に、枯槁寂寞也、赴淵投赴淵靜也、即入林恐不密、入山恐不深之意と見えたり、即ち枯槁は淡泊に甘んずるを云ひ、赴淵は身を潔うするを云ふ、さて又「集釋」に司馬云、枯槁若鮑焦介推、赴淵若申徒狄と見えたり、是までにて一種の人なり、〔語仁義忠信云云〕此の言行は即ち儒學の態度なり、〔爲修而已矣〕爲修とは修身の本となすなり、〔此平世之士〕平時治世の士の意、〔教誨之人〕教を施し物を誨ふる人を云ふ、誨は「ヲシフ」と訓ず、丁寧に物を言ひ聞かする意、〔遊居學者云云〕「正義」に整齊世道、誘掖末俗、或遊或居、隨在皆學と見えたり、諸所を遊歴して、意見を闘はし、或は安居して道を講説するの類を云ふ、是等は學者の態度にして道者の主とする所にあらずとなり、是までにて亦一種の人を擧げたるなり、〔語大功立大名〕是の一種の人は政治勳功の臣なり、功は功績なり、名は名譽なり、〔禮君臣正上下〕君と臣との禮節を定め君臣上下の名分を正すなり、〔致功並兼者云云〕「林注」に致功幷兼是莊子當時目擊之語と見えたるは或は然らむ、「叢玄」に覇者之屬幷兼土地也と見えたり、「就藪澤處閒曠」是以下の一種は高士の態度なり、藪は音「ソウ」、「ヤブ」と訓ず、草木の茂生せる處を云ふ即ち山の草木の茂生せる所に幽栖するを云ふ、「叢玄」に大澤曰藪、風俗通云、藪厚也、有草木魚鼈所以

ず身心を刻勵し、其の行爲を高尙にし、世を離れ俗に異なり、超然獨立五帝の風を淸談し、三皇の敎を高論し、有爲の才を抱きながら、世に遇はざるを怨み無道を誹り、志を高くし、山林に入りて隱處す、是所謂山谷の士、時世を誹譏するの人、寂寞なる者には、則ち飽焦、介之推の類のごとき、若しくは零落したる者には、申徒狄卞隨の類のごとき、皆是偏曲の士、何ぞ至道を語るに足らむや、若しくは又口を開き氣燄を吐けば、則ち仁義を語り、以て修身の本となす、此乃ち平時治世の士、敎を施し物を誨ふるの人、例へば子夏が西河に在り、孔子が洙泗に居り、或は天下を游行して議論し、或は安居して講說するは、是學者の好む所たり、然れども未だ至道を語るに足らず、又天下一統の功績を建て、千古に鴻名を揚げて、君臣の儀禮を致し上下の大義を正し、社稷を安んじ、人道を治め、既にして君主を尊み荒遠の國を服し、本國を强くし、兼ねて敵國を併合するは朝廷の士廟廊の臣例へば皐陶、伊尹、太公望の徒のごときが好む所なり、若し又、山澤に隱居し、閑散の地に樂み、魚を釣り世を遁れて無爲を願ふ、天子も臣とするを得ず、諸侯も友とするを得ざる底なり、從容閒暇の人、例へば巢父、許由、公閱休の類のごときが好む所なり、若し又一呼一吸、故を吐き新を納れ若しくは熊の樹に攀づるがごとくにして、氣を引き、鳥の翼を伸ぶるがごとくにして、體を運して以て神氣を導引し、强健長壽の法を講ず、例へば彭祖の八百歲白石の三千年のごとき、人の好む所なり、以上數子の尙ぶ所同じからず、各一方に偏し、刻意すれども未だ玄々の妙諦に達せず、聖人の稱するを欲せざる所とす、

【解義】〔刻意尙行〕此の一種は隱遁者の態度なり、「釋文」に司馬云、刻削也、峻其意也、案　謂削意令峻也、「廣雅」云、意志也と見え、又叢玄に刻猶彫刻、守意不變之謂也、行謂廉潔之行也と見えたれば人の意志を苦しめて其の行を高向ならしむるなり、〔離世異俗〕は世間を捨てゝ一般の習俗に格段なる態度を取るを云ふ、「叢玄」に好超俗絕世之行也と見えたり〔高論怨誹〕誹は「ソシル」と訓ず、人の惡事を言ひ立つる事「正義」に誹訩也と見えたれど訩は詾と同字なれば「ウッタフ」の意にて此に適はぬかごとし、案ずるに訩は訕の誤か、訕は「上をソシル」の意なり、訕

刻意第十五

本篇は篇首の語を取りて篇に名づく、先づ五樣の人物を排列し、然して後に八聖人を出し、さて其の五樣の人物の所作は更に言ふにも足らずとして、又六箇の「故曰」の字を擡出して、以て聖人の聖たる所以を寫し、末に野語を引いて結尾となし、以て凡人は名譽を尚べども、唯聖人は尚ぶべき本體を得たりと述べたり、其の文や眞に醒世の良劑たり、若しその恬淡寂寞虛無無爲を説けるは實に是聖功の要領にして、養神の二字は則ち其の主張たり、而して又貴精の字面は卽ち養神二字の換面たるを讀破して、次下繕性の篇と仔細に參究せば、蓋し蒙叟が遺意を千歳の下に求むるを得べからむかし、

刻意尚行、離世異俗、高論怨誹、爲亢而已矣、此山谷之士、非世之人、枯槁赴淵者所好也、語仁義忠信恭儉推讓、爲修而已矣、此平世之士、教誨之人、遊居學者所好也、語大功、立大名、禮君臣、正上下、爲治而已矣、此朝廷之士、尊主彊國之人、致功并兼者所好也、就藪澤、處間曠、釣魚間處、無爲而已矣、此江海之士、避世之人、間暇者之所好也、吹呴呼吸、吐故納新、熊經鳥申、爲壽而已矣、此道引之士、養形之人、彭祖壽考者之所好也、

【大意】　此には山谷の士以下導引の士まで五等の士の好む所を擧げて、世間普通に趣好する所を述べて、聖人逍遙の本旨を道破する前提を説く、

【通釋】　大凡世上偏滯の人は未だ理を解せず、必や

【解義】〔烏鵲孺〕孺は交尾するを言ふ、〔魚傅沫〕釋文に傅は音付、又音附、本亦作傳と、〔細要者化〕要は腰なり、細要は「シガバチ」にて詩の謂はゆる蜾蠃なり、詩の小宛の篇に曰く螟蛉有子、蜾蠃負之と、正義に曰く蒲盧（蜾蠃の一名）、卽細腰蜂也、又螟蛉者桑上小靑蟲也、蜾蠃土蜂也、似蜂而小腰、取桑蟲負之、於木空中七日而化爲其子と、然かし實は蜾蠃の子は至微見難し、蜾蠃其の餌となさんが爲め、螟蛉を負ふなるに、古人謬り見て其の子に化すと爲せるなりと云ふ、上の鳥獸に於ても此の類多かるべきも、今深く拘はるべからず、〔有弟而兄啼〕林希逸云ふ兄弟同母、必乳絕而後生、兄不得乳、而後有弟、故曰兄啼と、陸氏が母孕弟而兄病也と云へるも林解に本づくなり、宣注に曰く烏之於卵不相屬也、魚之於沫不相交也、細腰者之於螟蛉不相類也、弟之於兄不相礙也、然而卵已有矣、沫已成子矣、螟蛉已肖矣、兄已悲泣矣、此皆神理轉移不知其然而然者不得以形迹推之也、其錯綜甚奇と、宣頴曰く就老子上三件外、又拈得四件神理所傳、似可解、似不可解、悟者自得之と善評と謂ふべし、

名言

以敬孝易、以愛孝難、以愛孝易、而忘親難、忘親易、使親忘我難、

至貴國爵幷焉、至富國財幷焉、至願名譽幷焉、

三皇五帝之禮義法度、其猶柤梨橘柚邪、其味相反、而皆可於口、故禮義法度者、應時而變者也、

今取猨狙、而衣以周公之服、彼必齕齧挽裂、盡去而後慊、觀古今之異、猶猨狙之異乎周公也、

仁義、先王之蘧廬也、止可以一宿、而不可以久處、

古之至人、假道於仁、託宿於義、以遊逍遙之墟、食於苟簡之田、立於不貸之圃、

播糠眯目、則天地四方易位矣、蚊虻噆膚、則通昔不寐矣、夫仁義憯然、乃憤吾心、亂莫大焉、

鵠不日浴而白、烏不日黔而黑、黑白之朴、不足以爲辯、

夫六經、先王之陳迹也、豈其所以迹哉、今子之所言猶迹也、夫迹履之所出、而迹豈履哉、

白鶂之相視、眸子不運而風化、蟲雄鳴於上風、雌應於下風而風化、類自爲雌雄、故風化、

べし、蓋し眸子之相注と、下文の蟲鳴之相應と皆相誘するなりと云へり、〔類自爲雌雄故風化〕副墨に山海經を引きて、類を獸名鳥名と爲す、山海經に曰く亶爰之山有獸焉、其狀如狸而有髮、其名曰師類、帶山有鳥、其狀如鳳、五采文、其名曰奇類、皆自牝牡と、但本文而風化と曰はずして故風化の口氣より推せば、上の鳥蟲兩風化の故を釋したる者と看る方、穩なりと爲す、

孔子不出三月復見曰、丘得之矣、烏鵲孺、魚傅沫、細要者化、有弟而兄啼、久矣夫丘不與化爲人、不與化爲人、安能化人、老子曰、可、丘得之矣、

【大意】 孔子終に老子が說に屈伏して、道は無爲自然にあることを悟れることを云ふ、而して不與化爲人不與化爲人、安能化人は則ち其の主意、又天運一篇の大主意なり、故に曰く可なり、丘之を得たりと全篇を結束する所以なり、

【通釋】 孔子、老聃の言を聞き、深く感ずる所ありしも、未だ全く其の意を得ず自ら外出を禁止し、沈思默考すること三箇月にして漸く得る所あり、乃ち再び老子に見えて其の得る所を述べて曰く、某先生の言に因りて始めて合點したり、成る程烏鵲は交尾して子を生み、魚は雄沫を吐き雌之を受けて子を生み、蜾蠃の如きは螟蛉の子を取り養ひて己れが子と化す、人類に就いて見れば弟が生るゝと兄は母の乳を離れて啼くといふ狀態、此れ皆もと各〻二物たる者が相互に關繫を保つことなるが、誠に神妙なる次第にて貴說の通り性は易ふべからず、命は變ずべからず、而して時の止むべからざる、道の壅ぐべからざるも、自ら此の間に存せり、造化の玄妙にて無爲なる自然なるも、亦至れり、久しいかな、某が先王の陳迹に停滯して、此の造化に從つて人たらざりしことよ、いかにも造化に從つて人たらずんば、安くに能く人をも化すべき、某只今に至りて行年五十有一の迷夢始めて此に晴れたりといへば、老子曰く斯くてこそ可けれ、丘よ汝今道を得たりとて允可したりとなん、

と爲すの類のみ、復た何ぞ人の說き難く道の明にし難きを怪まん、

【解義】〔先王之陳迹〕陳は故なり、迹は足跡なり、一轉して凡前人所遺留者曰迹と字典に見えたり、陳迹は既に故びたる迹方なり、〔豈其所以迹哉〕唯其の迹方を履むのみにして其の精神を閑却するを謂ふ、〔子之所言猶迹也〕「宣注」譬則人之所踐之迹耳と、

夫白鶂之相視、眸子不運而風化、蟲雄鳴於上風、雌應於下風而風化、類自爲雌雄、故風化、性不可易、命不可變、時不可止、道不可壅、苟得於道、无自而不可、失焉者、无自而可、

【大意】老子の正意は、此の一節に在り、言ふこゝろは道を明にするは、神氣の運化に在りて陳言舊迹に在らざるなりと、

【通釋】夫れ白鶂の雌雄は互に相ひ注視すれば交接を待たずして子を生む、之を風化と謂ふ、蟲類又雄は風上に鳴き、雌は風下に應じて風化する者あり、蓋し同類雌雄を爲せば、其の神自ら相ひ感ずる所あり、故に唯、視を以てするも聲を以てするも各〻能く風化すること此の如し、而して其の機、微妙孰れか然る所以を知らん、然らば物の性たる易ふべからず、天の命たる變ずべからず、時の來る止むべからず、道の行はるゝ壅ぐべからず、此に會得して能く處する者を道を得たりと爲す、苟も道を得たる上は物に事に由るとして不可なることなし、道に失する上は物に事に由るとして可なることなし、子其れ之を思へと、

【解義】〔白鶂〕鶂は鳥の名、「釋文」に三蒼云、白鶂鶬鶂也、司馬云鳥子也、と「集韻」に鶂水鳥名と、〔眸子不運〕眸子は睛なり、不運は猶ほ不轉といふがごとし、睛を定めて凝視するをいふ、〔而風化〕神氣相ひ感じて子を孕む、本と形迹の見るべきなし、故に風化と曰ふ、陳壽昌は「左傳」の僖公四年唯是風馬牛不相及也とあるを、賈逵が疏に牝牡相誘曰風と云へるを引きて、風化とは當に卽ち相誘ひ化生する義なる

次ぎの老子が發言の端となすのみ、

【通釋】　孔子慨然として老聃に謂ひて曰く、某少壯より詩書禮樂易春秋の六經を研究し、自心に於ても窃に久しとせり、去れば書中の譯柄も餘程熟知したる積りなり、斯くして有ると有らゆる列國の君主に進謁して用ひられんことを求めて、飽くまで文武先王の道は斯く〳〵、周召二公の典禮はしか〳〵と說き見たれども、一君として尤もとして取り用ふる者なし、甚しいかな人の說得し難きこと、抑も亦道の自ら明にし難きためなるやと、

【解義】　〔孰知其故矣〕孰は熟と通ず、故は事なり、〔以奸者〕奸は干なり、干は犯なり、求なり、此の方より先方へ取り入つて、其の用を求むる意、〔七十二君〕案ずるに七十二とは我が國の八握、八咫、八洲、八雲、八潮、八百萬、八千代などと云ふが如く、大數を擧ぐるときの常語にて必ずしも實數にあらず、封泰山禪梁父者七十二家、稷下先生七十二人、周公夕見七十二士、身通六藝者七十二人、左股有七十二黑子、下齊之七十二城、攀龍髯而上者七十二人、五威將帥七十二人、明堂七十二牖、謚七十二品、「列仙傳」「高士傳」亦均しく七十二の如き殆んど枚擧すべからず、〔無所鈎用〕「釋文」に鈎取也とあり、蓋し魚鈎の意より轉せり、

老子曰、幸矣子之不遇治世之君也、夫六經先王之陳迹也、豈其所以迹哉、今子之所言、猶迹也、夫迹履之所出、而迹豈履哉、

【大意】　先づ孔子の學ぶ所を駁して、然る後本旨に入るなり、

【通釋】　老子曰く是れ不幸ならず、實に幸なり、子の治世の器量を具ふる賢君に遇はざりしこと、遇はば必ず彼れに笑はれしならん、夫の六經は先王の陳迹なり、之を措きて可なり、豈に後人の慕ひて追迹すべき所以ならんや、今子の言ふ所の者は追迹するがごときなり、誤れりと謂ふべし、夫れ人の足迹は其の履の印出せる形にして、形迹は豈直に其の履ならん、相ひ去ること甚だ遠し、而して子は其の迹を認めて履

にて日月の虧蝕、山川の崩竭、寒暑の錯亂を致すと看るは鑿せり、「憯於蠣蠆之尾」憯は慘なり、釋文に蠣は音例、郭音賴本亦厲に作ると見ゆ、蠆は音「タイ」にて、王引之は二字皆蠍の異名と云へり、蠍は「サソリ」の類にて本邦には無し、藥用として乾したるを舶來するのみ、長さ三寸許の青色の蟲にて、尾端の勾刺に劇毒あり、此の句、唯、其の害を形容したるまでの如くなるも、又其の爲す所を陋とし、小として卑むの意言外にあり、上の日月山川四時の規模と隱然として相照す、「鮮規之獸云々」鮮規は「成疏」に小貌、「釋文」には李云明貌、一云小蟲也、一云小獸也と、林解には解少也、規求也、小獸之求、不過鮮少、如狐狸之類、と、「辯正」には伏於山林、人所少見也と、要するに其の意は此人情の日に危險に、人智の日に機巧にして、擾動を他類にまで及ぼすを言ひて、以て咎を三王の治化に歸する也、初めは倨堂而應徹と云ひ、子將何以戒我と云ひ、終りは三王五帝を罵倒して、蠣蠆の微蟲と同視し、氣焔霓を吐く、即ち是れ尸居而龍見、雷聲而淵默、發動如天地者を實現したるなり、讀者莊子の用意を知らざるべからず、「不可恥乎其無恥也」甕谷曰く猶言其無恥如此豈不可恥乎と、「蹵蹵然」蹵は蹴と同字にて、子六反、縮小にして不安の貌、

孔子謂老聃曰、丘治詩書禮樂易春秋六經、自以爲久矣、孰知其故矣、以奸者七十二君、論先王之道而明周召之迹、一君無所鉤用、甚矣夫、人之難說也、道之難明邪、

【大意】以下四節を連ねて第八段と爲す、既に三王五帝までを攻撃して、儒者の根本を覆したれば、其の總大將の降伏の順序となりて、本篇の終りを告ぐるなり、即ち世儒よ汝が祖の孔夫子も我が老君に由りて終に道を悟れり、道とは何ぞ、無爲のみ、無爲の外には復た道とすべき者無きぞかしといふなり、而して其の無爲を言ふことと全く風化の神理に入りて已みぬ、是れ本篇天運の意を完結する所以なり、此の一節の如きは孔子が道の行はれ難きを嘆ずるを叙して、

曰、治之、而亂莫甚焉、三皇之知、上悖日月之明、下睽山川之精、中墮四時之施、其知憯於蠆蠆之尾、鮮規之獸莫得安其性命之情者、而猶自以爲聖人、不可恥乎、其無恥也、子貢蹵蹵然立不安、

【大意】 上節は是れ三王五帝の治迹を陳べ、此の節は其の斷案にして、名は治たれども、其の實は亂のみ、自然の道に反して性命の精を傷ふ者なり、豈に以て聖人と爲すに足らんやと子貢の詰問に答へつゝ、儒者の本尊を攻擊して一段を了る、

【通釋】 既にして老聃再び語を續ぎて曰く余、汝に三王五帝の治を語らん、成る程名義にては天下を治むとはいふものゝ實は天下を亂せる者の最上なり、彼の五帝は勿論なるが三皇と雖へども、徒に己が私智を用ひて天下を治めんとせり、而して其の智は專ら察察を事として天下を率う、是れ上は日月の明に悖り、下は山川の精に睽き、中は四時の施を墮す者なり何んとなれば四時の施も山川の精も、日月の明も皆是れ無爲にして、六合に彌り、悠久を極め、萬物を生育せしむる所以なればなり、彼れ此に出でず、徒に專ら其知を有爲に鶩す、故に其の慘毒蠆蠆の尾よりも甚しく、鮮規の小獸すら其の性命本來の情を山林に放にして、寧處することを得るなし、況や民に於てをや、而も彼れ自ら聖人を以て居るとは、心に恥づべからずとして然る乎、たゞしは其れ全く恥なくして然る乎、厚かましき次第ならずやと、例の絕聖棄知主義より大氣焔を吐きたれば、流石の子貢も辟易せざるを得ず、蹵々然として其の立容安からず見えたり、

【解義】 〔三皇五帝〕 或は曰く其の意唯堯舜のみを指す、「辯正」に非謂黃帝亦亂也と注せり、然れども此れ亦槩して言ふのみ、〔三皇之知〕 知は智と同じ、〔上悖日月之明云々〕 悖は戾なり、睽は音圭にして、乖なり、墮は音許規反にして、廢壞するなり、此の三句は造化の無爲に則らざるを誹るのみ、治道の感應

帝堯の民は是非を知りて之を非とせざるなり、而して老子の之を言ふの意も亦同からず、上の非とせずは賛成にて、之を言ひ、下の非とせずは不賛成にて之を言ふ、「殺其殺」釋文に曰く並所戒反、降也と既に親疎の別を立て、親疎又各、等あり喪の服制之に從ひ、其の降殺すべき者を降殺するなり、「民孕婦十月生子云々」古の孕婦は十四箇月にして子を生み、其の子も二歳にして方に言ふとは成疏に從ふ、其の說の出づる所を知らざるも、姑く錄して考に備ふ、「不至孩而始誰」孩は說文に笑也とあり、孟子の孩提之童の注に云ふ、二三歳間、孩笑、可提抱者と、誰とは「郭注」に曰く別人之意也、未孩、已擇人、言其競教速成也と、「使民心變」「成疏」には民好爲禍變、「發覆」には機變と解せり、從ふべし、古に變ぜしむと言ふは淺し、「人有心」人各心ありて一ならざるなり、「史記」に禹出見罪人、下車問而泣曰、堯舜之人以堯舜之心爲心、寡人爲君百姓各自以其心爲心、寡人痛之とは是なり、「兵有順云々」兵は凶器、殺は至慘、其の天道に反し、人性を傷るも亦甚し、而して逆に加ふるが故に順なり、盜を誅するが故に殺に非ずとの理窟を付し、之を施して怪まざるに至る、「而天下耳」是れ亦莊子が例の奇筆にして、解說一ならず、其實は離散しつゝあるも强ひて合して天下を爲すとは、「辯正」の說なり、天下皆然りとは「副墨」の解なり、是れ亦通ず、他に而字を於なりとして解するが如きは、故なきにはあらざれども、鑿せり、「其作云々」其は前の諸帝王を指すなり、倫は序なり、理なり、廣義に解すべきを下の婦女に照して狹く人倫と解する者あるより前の儒墨皆起ると襯せず、故に郭嵩燾は荀子の亂世之徵、其服組、其容婦、及び楊倞が注の婦好貌と云ふを引きて、儒墨の興る、其の言皆倫要ありたれども、今や相ひ與に諧好を爲して、人を悅ばしむと爲す、一應尤もに聞ゆれども、是れ荀子が口吻にて、老莊向きにはあらず女とは年齡の未だ嫁に至らざる者を謂ふ、之を婦とするを云ふは流弊の終に自然の道に背ける一例を擧ぐるのみ、男は三十にて娶り女は二十にして嫁するは古の通則なればなり、「宣注」に曰く今則不待二十而嫁、亦人心澆漓之一端也と、

余語汝三皇五帝之治天下、名

知覺稍〻開け、差別の見漸く生じ、喪の服制を立てゝ其の親に隆にせんが爲めに、其の疎に殺ぐこと有るに至れり、而も他も亦之を當然として非なりとせざるなり、帝舜やがて其の天下を受けたるが、舜の治は賢を尙び能を使ひ、遂に民心をして競爭の念を熾にせしむ、競ふ者は漸く寧靜の和氣を失ひて、機竅早く開く、故に民の孕婦は十箇月にして子を生み、其の子も生後僅に五箇月にして能く言ふ、古の孕婦の十四箇月にて產み、其の子の二歲にて方に言ふとは大に趣きを異にし來れるのみならず、二三歲（孩）にも至らざる其の子は人を見れば誰は好し誰は好からずと早くも（始）心に好き嫌ひの分別を挾むに至れり、知識の發達斯く速なるからは元氣の早く發泄し易きも自然の理なれば、人其の天年を終る能はずして、始て玆に夭折の患生じぬ、舜既に崩じて夏禹位を踐む、即ち是れ三王の始めにて、其の治は遂に其の民心をして機變ならしむ、蓋し堯舜の民は親疎の辨を立つと雖も、其の親を親とするに一なる者なり、爭競の念を生ずと雖も、善を競ふに一なる者なり、卽ち皆堯舜の心を以て心と爲す者なり、禹の民に至つては人人各〻其の心ありて愈〻知巧を事とし、趨舍萬殊なれば法禁漸く詳に、賞罰始て嚴に、乃ち兵を其の逆とする所に加へて、兵に順の名あり、其の盜とする者を殺して、殺に非ずの說あり、是れ其の化の民心をして愈〻機變ならしむる所以にして、是れより賢愚善惡劃然として各〻自ら其の種類を以て、分立して相ひ容れず、强ひて合して天下を共にするのみ、禹より以下湯といひ、文武といふも、其の治皆此に出でず、是の故に紛爭の氣常に天下に彌漫して、大に驚駭する者と狀態を同うし、堯舜を祖述する儒流とか、禹道を遵奉する墨者とか、先後競ひ起りて各〻主張する所を以て相ひ攻擊し、紛々擾々窮極する所なし、蓋し三王五帝の道たる、其の興作の始め倫序條理の見るべき無きにあらざるも、實は其の由る所を失ふが故に、流弊相ひ承けて轉た甚しく、今や人、幼弱の女を婦として靦然たるにあらずや、天道の自然を强ふる萬事此の如し、予れ復た何をか言はん哉と說き來つて暫く慨然たりき、

【解義】〔民不非也〕下の民不非也と語同じくして意異なり、黃帝の民は是非を知らずして之を非とせず、

意は天下古今聖人といふ聲名を取りて、各帝王の身に結係することは皆異らずといふなり、

老聃曰、小子少進、余語汝三皇五帝之治天下、黄帝之治天下、使民心一、民有其親死不哭、而民不非也、堯之治天下、使民心親、民有爲其親殺其殺、而民不非也、舜之治天下、使民心競、民孕婦十月生子、子生五月而能言、不至乎孩而始誰、則人始有夭矣、禹之治天下、使民心變、人有心而兵有順、殺盜非殺人、自爲種而天下耳、是以天下大駭、儒墨皆起、其作始有倫、而今乎婦女、何言哉、

【大意】 以下皆老子の言にして始めて本段の正意に入る、上節子貢が言の三王五帝の治の不同に端緒を借りて、其の治の道に於ける、漸く降り漸く遠きを說きて、下節に其の治の却て是れ亂るを斷定するの前提と爲すなり、林獻齋云ふ禮記の大道爲公一段亦有此意、但莊子說得太甚と陸方壺も之を然りとして曰く人若以平易之心讀之則固未嘗異也と、大道爲公の一段は禮記の禮運篇にあり、就きて看るべし、

【通釋】 老聃乃ち子貢を呼びて曰く小子更に少しく近うせよ、汝が謂はゆる三王五帝の治とは吾が謂はゆる三王五帝の治と異なり、其の治の不同は勿論なれども、汝の觀る所は尋常淺近の見のみ、豈に能く其の實を知るに足らんや、余汝に之を語らん、五帝の首を黄帝となす、黄帝の治は民心をして純一ならしめき、故に其の民混沌無知にして、獨り其の親を親とせず、其親死にたれども之を哭せざる者あり、而も他の民も之を非なりとせざる也、斯くして顓頊帝嚳を經て帝堯に至れるが、堯の治は民心をして親睦せしむる方針を取れり、親あればこゝに疎あり、故に其の民

貢、心內窃に彼れと一論戰を試むるも亦愉快と、遂に孔子が門人といふ名義を以て申し入れて面會を老聃に求めたり、老聃時しも安閑として堂上に箕踞し、應待の聲もいと低微にして勵しからず、過ぎ往く年に關守なく、予もはや斯く老耄せり、態々の來訪、恐縮の次第なるが、何を以て敎戒せられん乎、聞かまほしと、語氣も頗る謙退せり、子貢乃ち先づ問答の端を發して曰く、夫れ三王五帝の天下を治めたる形迹は各、不同なれども、令聞美名を其の身に係けたるは、いづれも同一にして、天下古今皆稱して聖人といふなり、然るに先生のみは之を排して聖人にあらずと申さるゝ由、かねてより承り居るが、いかにも奇怪なり、如何なる次第にて斯くは申さるゝやと問へば老聃は少子よ、少しく近うせよ、子は何故なれば三王五帝の治は不同と謂はるゝ、不同の實如何と、子貢事も無げに對へて曰く、堯は天下を舜に讓り、舜は天下を禹に授け禹は力を用ひて天下の水を治め、湯は兵を用ひて夏桀の天下を取り、文王は天下の三分の二を有ちながら、敢て商紂に反抗せず、武王は八百諸侯を率ゐて、背て紂に恭順せず、遂に之を滅して天下に王たり、此れ等は不同の一例なりと、

【解義】〔尸居雷聲云云〕辯正に尸居の句下に無爲而有爲之意と注し、雷聲の句下に有意而無爲之意と注す、但、字義は既に在宥篇に解せり、〔發動如天地〕發動に意なくして萬物を發動して已まざる者は天地なり、功化の神妙に喩ふる所以なり、此の一句は上一句を結びたる者、又三句を通じては上節の孔子が語中の龍合而成體四句の意を承けて言ひたる者なり、〔遂以孔子聲〕「副墨」に曰く稱道(聲)孔子、以爲先容、欲弟子通而見之也と、林解に曰く稱夫子之門人而脩謁也と、〔方將倨堂〕此の場合、唯方字の意のみありて、將字の意なし、故に岡松甕谷は云ふ將誤衍也、然莊生屢有此言、或行文之間、偶然至此耳と、倨は踞と通ず、〔三王五帝〕釋文に云ふ、本或作三皇、依注(郭注)作王是也、餘皆作三皇と、而して岡松甕谷は下節に於て云ふ、前曰三王、此曰三皇、非有他義、或前節王字當作皇、蓋誤寫耳と、案ずるに「副墨」「宣注」等の諸本多く三皇に作る、〔其係聲名一也〕「辯正」に係字に注して云ふ取以歸己如結係於身也、と聲名は成疏に令聞とす、即ち聖人の稱なり、句

來得べきや思ひも寄らぬ事なりと、
【解義】〔亦將何規哉〕岡松甕谷云ふ將字疑衍と、蓋し諸注何規を以て既往の問ひとしたるが爲めなれども、將來の問ひと見ても通せざるにあらず、規は規正なり、其の非を規正して訓誨するなり、〔合而成體散而成章〕案ずるに合とは靜にして收斂するなり、散とは動きて開張するなり、二句の意は正に程子の謂はゆる放之則彌六合、卷之則退藏於密と同じ、〔口張而不能噂〕噂は釋文に許刧反、合也とあり、心驚懼する所あれば、口開張して閉合せず、其の言ふ能はざるは勿論なり、故に曰く予又何規老聃哉と、而して又三日不談の何故なりしかも自ら知らるべし、

子貢曰、然則人固有尸居而龍見、雷聲而淵默、發動如天地者乎、賜亦可得而觀乎、遂以孔子聲見老聃、老聃方將倨堂而應微曰、予年運而往矣、子將何以戒我乎、子貢曰、夫三王五帝之治天下不同、其係聲名一也、而先生獨以爲非聖人、如何哉、老聃曰、少子少進、子何以謂不同、對曰、堯授舜、舜授禹、禹用力而湯用兵、文王順紂而不敢逆、武王逆紂而不肯順、故曰不同、

【大意】前述の通り此の節未だ正意に入らず、語句多しと雖も、其の實は僅に三王五帝之治天下云云を設けて、次ぎの老子が說法を叙するの端緒を爲すのみ、

【通釋】子貢其の師の語る所を聽き畢りて曰く、然らば人にはいかにも無爲にして有意、有意にして無爲體用具備して功化の神妙なること天地の如き者ある乎、誠に珍しき次第なれば某も往きて彼れを觀一觀するを得ばやと、孔門三千中の智辯と聞えたる子

りの意となり、相ひ忘るゝは名譽の觀なければなり、江湖は大道の譬にして、不足以爲廣と反映す、泉涸以下の四語既に太宗師篇に見ゆ、

孔子見老聃歸、三日不談、弟子問曰、夫子見老聃、亦將何規哉、孔子曰、吾乃今於是乎見龍、龍合而成體、散而成章、乘雲氣而養乎陰陽、予口張而不能嗋、予又何規老聃哉、

【大意】以下四節を連ねて第七段と爲す、前兩段にて先づ孔子が仁義を奉ずるを駁し了る、乃此の段を設け溯つて其の祖述憲章する五帝三王を誹る、蓋し業に既に外郭を破れり、今將に其の牙城を陷れて巢窟を覆さんとするなり、此の節及び下節は文章上其の陣立の形容に過ぎずして、攻撃者の老聃は奇正變化の神妙を得たる老將なれば、流石の孔子も意氣沮喪し、帷幕の知者と呼ばれたる子貢が出でゝ一戰を試むるの餘儀なきに至れりといふまでなり、

【通釋】孔子老聃に出遇ひて歸れるが三日を經れども默然として思案に沈める樣子なり、蓋し多年奉じ來たれる仁義は道の蘊奥と思ひの外、一旦老聃を見て其の說を聽けば玄の又玄、變の又變を極めて殆んど摸捉すべからざるに苦み、惝怳として其の氣を喪ひて然りしなり、然るに弟子輩此に氣付かず問ひて曰く、夫子已に老聃と會見せられたるが、斯くも猶ほ思案に暮れらるゝは又も何か彼れを規誨せらんとするにやと、此の時孔子始めて言を發し嗟嘆して之に答へて曰く、吾れ昔、話の上にて龍といふ者あるを聞き居たるまでなるに、此の度老子との會見に於て始めて龍は斯かるものかと其の眞相を目擊するを得たるなり、夫れ龍の德たる至靈にして、深淵に潛伏すれば、首尾蟠卷して渾然として其の體を成し、天上に飛騰すれば、鬣爪開張し隱見出沒陸離たる文章を成し、雲氣に乘じて傲遊し、陰陽を吐納して自ら養ふ、吾れ彼の老子を見るに、實に此の如きものあり、吾れ之に遇ひて一度び口の開きたるまゝ今に尙ほ復た合せ兼ねたり、それに爭でか往きて又彼を規誨する事の出

通也とあれば、建鼓とは希逸の說に從へば、自然に聲の高大なる鼓なるべし、

夫鵠不日浴而白、烏不日黔而黑、黑白之朴、不足以爲辯、名譽之觀、不足以爲廣、泉涸魚相與處於陸、相呴以溼、相濡以沫、不若相忘於江湖、

【通釋】 看よ白鳥は日々沐浴して塵垢を洗ひ落さゞるも、眞白に、烏は日々に黑く染めざるも眞黑なり、是れ彼れ等が之を自然に稟け得たる本質にて、自己の希望に出でたるにもあらず他の强制に因れるにもあらず、白は固より白、黑は自ら黑、黑白の本質に就いて豈に美惡優劣の分別を辯論するに足らんや、天下の事々物々亦皆此の如きのみ、然るに妄りに分別の見、是非の意を生じ、是非の意遂に名を修め譽を求むるの觀を成す、其の陋劣狹隘も亦甚し、豈に以て廣大とするに足らんや、今泉流涸れて魚族俄に相ひ與に陸地內に居る、是れ已に魚の本質を失ふものなり、然るに口中より些少の濕氣を吹き掛け、體上より殘餘の沫を濡し合ひて、情を掛けたりとか、義理を立てたりとか思ひて、得得たるは氣の毒の至り也、斯かる義理立て、情の掛け合ひ等は一切止めて、鮒は鮒、鯉は鯉、蝦は蝦に各〻其の本性に順つて長江大湖の渺漫たる煙波中に悠游して、互に相ひ忘れんには若かざるべし、人の區々たる仁義に拘泥して是非を立て名譽の觀を脫出せざる者は、是れ陸上に相ひ呴濡するの魚のみ、焉ぞ江湖の如き無爲自然の大道に相ひ忘るゝの至樂を知らんやと、

【解義】 〔夫鵠不日浴〕 鵠、本又鶴に作る、同じく胡洛の反と「釋文」に見ゆ、然かし字の如く胡沃の反に讀みても妨げなし、鵠は「クグヒ」にて俗に白鳥と呼ぶ水鳥なり、形鵞に似て雁よりも大に、嘴脚の外は皎白雪の如し、〔不日黔而黑〕「成疏」に染緇曰黔黔黑也と見ゆ、〔泉涸云云〕 呴は音詡、「集韻」に嘔と同じとす、口を開きて氣を出すなり、泉涸れ魚の陸に處るは、失其朴の譬、呴濡の兩句は仁義の小なる譬、而して三句を通ずれば、大道廢れて而して後に仁義あ

又蟁に作る、音「文」、虻又蝱に作る、音「盲」あぶなり、噆は音「慘」又「帀」、「說文」に嗛也、玉篇に銜也とあり、普通に齧むと訓めども、脣にて銜み味ふ氣味、〔通昔不寐〕通は徹なり、昔は「釋文」に夜也と見えたり、夕と通用す「博雅」に夜なりとあり、左傳の哀公の四年に爲一昔之期などゝも此の例なり、〔憯然乃憤吾心〕憯音「慘」、「說文」に痛也とあり、慘毒の貌なり、憤は「釋文」に本又作憒とあるより、郭慶は字形の近似する爲め相混じたる者なれば、憒に從ふを宜しとせり、蓋し憒憒は心の亂るゝ貌なれば、下の亂字とも能く襯すとせるなり、然かし老莊は心の恬淡虛靜柔和なるを貴ぶが故に、仁義の說の如きは吾が心を衝動して憒興せしむる者なれば亂これより大なるは莫しとするなり、憤字の方却つて活氣ありて意切なり、〔失其朴〕朴は樸と同じ、「說文」に木素なりとす、故に「郭注」質を以て之を解す、本質を言ふなり、「成疏」に淳樸とするとは稍〻同じからず、〔放風而動總德而立〕放は依放なり、之に順ひて逆らざるの謂、風は猶ほ化のごとし、「成疏」に放無爲之風と爲せども、無爲は却て放字上に在り、總は摠と同じ、將領なり、聚束なり、「辯正」に不散布也と解せり、故に總德とは其の德を純一にして强ひて仁義等の辨を立てずに、立脚地を渾沌に据うるなり、要するに化のまゝに順つて動けば、無爲の行となり、德を二三にせずして之を總べて執りて立てば、本然の性を失はず、動靜體用皆な自然の眞を得ると謂ふなり、亦是れ上文に云はゆる外に正あり中に主あるの意、〔傑然云云〕「成疏」に傑然を力を用ふるの貌とし、建を擊とす、蓋し前の天道篇の偈偈乎揭仁義若擊鼓而求亡子と意思全く同一、文字も略〻異ならざれば、注疏共に其の句を以て此の句を解したるなり、偈も傑も同じく居謁の反なれば、固より通用なるべきも、建の字は果して擊の訓あるや、牽强の嫌なき能はず、宣穎は建鼓は大鼓なりと云へど亦建に大の義あるにあらず、蓋し林希逸が王建路鼓于寢門〔周禮夏官〕建鼓言所建之鼓也に本づきて推定せるならん、要するに建字の義は頗る漠たれども全句の意は已に天道篇に解したるが如く明瞭なれば拘せずして可也、而して希逸は「周禮」夏官大僕に建路鼓於大寢之門外、而掌其政とあるに據れり、路鼓は說者の解に四面鼓曰路鼓、示無不

此者、未可以爲抖擻(此には只見捨てゝの意)人事、絕與世無相關者、此亦其徵也と、

孔子見老聃而語仁義、老聃曰、夫播穅眯目、則天地四方易位矣、蚊虻噆膚、則通昔不寐矣、夫仁義憯然乃憤吾心、亂莫大焉、吾子使天下無失其朴、吾子亦放風而動、總德而立矣、又奚傑然若負建鼓而求亡子者邪、

【大意】此の節、下節を連ねて第六段と爲す、亦仁義を誹るなり、其の意に謂ふ儒者仁義を奉じて金科玉條となせども、區區たる名目を立てゝ人をして是非の辨を生じ、名譽の慾望を起さしめて天下遂に自然の朴を失ひ、本然の性を傷るに至る、貴ぶに足らんや渾沌の道德中に相忘るゝには如かずと、全段又六比喩より成る、而も連綴痕なく人をして覺らざらしむ、

【通釋】孔子、先王の陳跡に滯り、口を開けば仁義を語る、其の老聃に遇ひたる時も亦然り、老聃乃之を誡めて曰く夫れ粉糠を振播きて目に入れば至微の物とはいへ、我が目之れが爲めに昏みて、上下四方も其の位を易へて確ならず、蚊や虻は極小の蟲なれども膚を齧めば我が身痛みて終夜安眠しかぬるなり、夫の仁義の說に至つては豈に外部の目や膚の障りを爲すの比ならんや、其の毒慘然として深く人の內部を犯し、吾が心を憤與妄動せしむ、蓋し物の本性を亂すこと是れより甚しきはなかるべし、貴殿は好んで之を唱ふれども、請ふ速に棄て去りて世間の人をして其の性の本然を失ふことなからしめ、貴殿自身も外、天地の化のまゝに行動し、內、其の本性を總べ執りて、自立せよ、又奚んぞ仁義の道に腐心し他人にまで世話を燒きて、彼の太皷を背負ひ打ち鳴しつゝ逃亡者を捜し廻るが如き虛騷と無汰骨折とを爲るに及ばんや、

【解義】〔播穅眯目〕播は補過切搖動なり、又簸と通ず、人間世篇にも鼓筴播精とあり眯は音米、物、目中に入るなり、又塵粃の視を迷すなり、〔蚊虻噆膚〕蚊

る者の祿を貪る心より、他を怨み他を恩とし、他より取り他に與へなば、果して如何、顯を是とする者の名を好む心より、上を諫め、下を敎ゆることあらば果して如何、權を愛する者の柄を弄する心より民を生し、民を殺せば、果して如何、其の顚倒錯亂して物を害し世を亂ること言ふに勝ふべけんや、然らば唯だ名利權勢の外に超脫して、逍遙の墟に遊び、造化の自然に順從して、滯塞せざる人にして、始て能く此の八條件を用ふるを得ると爲す、何んとなれば此れ等の人にあらざれば、己に於て先づ正しき能はず、己に於て先づ正しからざれば物に於ても亦其の正を得る能はざればなり、予故に曰く正とは正なりと、正の決して邪より出づべき筈の之れ無きを謂ふなり、今若し此れ等の說を聞くも心中に然りと會得すること能はざる者あらば、是れ猶ほ名利權勢の境に滯塞するの證にして、天機の門決して開けじ、爭でか道を得るの期あらんやと、

【解義】〔唯循大變無所湮者〕循は順なり、意を以て逆らはずにそれなりに從ふなり、湮は塞なり滯なり、大變は死生等の大變故と解し、謂はゆる臨ンデ大節ニ而不可カラ奪と一樣に看る向きもあれども、老莊の文義上には意却て滯を生ず、林注は造化と解せり、頗る奇なるが如くなるも、造化は變化の主なれば尊稱し大變と云ひ、自然の意も自ら兼ねたり、今之に從ふ、故に大變の大も大小の大とせずに、晉泰の大と看るべし、「通義」には循フハ大變ニ則苦シメ心志ヲ勞スル筋骨ヲ(孟子)等意、無キ所湮チカラ卽チ動カシ心ヲ忍ビ性ヲ增ス益不ル能ハ(同上)意と云へり、〔故曰正者正也〕上の正は前の外無ケレ正而不行の正にて之を引き來りて、此に解釋するなり、下の正は上句の循大變無所湮者を正としたるなり、循大變無所湮者は造化の自然に順つて成心なきの人、卽ち詩の謂はゆる思ヒ無キ邪の人にて、無邪は卽ち正なり、故に正者正也は外に無邪にて其の當を得るは中に主たる思の無邪に發するに外ならずの意にて、文字の解釋に事寄せ瓜の蔓に茄子はならぬの理を示すなり、上の正は是れ用、下の正は是れ體、〔其心以爲不然者云云〕文理に於ては一般の然らずとする者を指せども、實は專ら對話者に「アテコスリ」たる口氣味ふべし、本段中の數節の如き、理實に言質にして、人を誨ふる頗る切なる者あり、岡松甕谷曰く莊生之言時亦有リ如キ

休息することを知らざるなり、是れ其の外に正なきや亦言を待たず、此の如きは畢竟其の天に反する者にして、天の刑戮を免れざるの民なり、之を彼の釆眞の至人に比すれば、其の道の得失其の人の賢不肖はそれ何如ぞや、固より同日の談にあらず、

【解義】〔以富爲是者〕爲是の二字固く是なりと思ひ込むことにて迷執の意を含む下句皆同し、〔親權者〕親ら權を執ると解するは一應尤もに聞ゆれども「成疏」の權勢を親愛する者とするを穩當なりとす、〔與人柄〕柄は本と器物の把柄にて、矛戟刀劍も其の柄を執らざれば揮ふべからず、故に實權の在るところを亦柄と謂ふ、〔操之則云々〕操は把持なり、之を得るを言ふ、舍は捨なり、之を失ふを言ふ、操舍の字は直に權柄を承けたるものなれども、意は富祿顯名をも兼ねて承けたり、〔以闚其所不休者〕闚は窺と同じ、所不休者は前の遊逍遙之墟、食於苟簡之田、立於不貸之圃と反映す、案ずるに者字は猶ほ處と云ふがごとし、東坡が前赤壁賦の此非曹孟德之困于周郎者乎の者字の例なり、文字通りに此句を言へば、常に自ら好んで勞苦して休息すべからざる境界のみを窺伺するなり、其の愚迷を晒ふの意言外にあり、〔天之戮民〕前句の不休卽ち終生神を勞し思を苦むるは是れ已に天の刑戮なり、而して「史記」の伯夷傳に援ける賈誼が謂はゆる貪夫殉財、烈士殉名、夸者死權の如きも亦勿論刑戮なり、

怨、恩、取、與、諫、敎、生、殺、八者、正之器也、唯循大變無所湮者、爲能用之、故曰、正者正也、其心以爲不然者、天門弗開矣、

【大意】此の一節は前二節の中に主あり主なきを承けつゝ、外に正あり、正なきを說きて本段の終を告ぐるなり、亦是れ一正一反の法を用ふ、而して末二句は本節の結束のみならず、又全段の結束にて孔子が未だ道を得ずして來り問ふに答ふるの意に於て結び得て極めて緊にして且つ完圓なりとなす、

【通釋】夫れ怨恩と取與と諫敎と生殺との八條件は蓋し治道に於て固より之れ無かる可らざる者にて卽ち外に正あるの用なりとす、然るに若し富を是とす

輕にする意、故に養ひ易き也但、養字は田を養ふを謂ふ、猶ほ治むといふがごとしと「辯正」に云へり、從ふべし、不貸は其の貸は己れを損じて、他に施與するの謂にて、不貸は其の反對にて、因物還物而已の解あり、即ち猶ほ惠而不費の意のごとし、論語に子曰因民之所利而利之、斯不亦惠而不費乎と、惠むと雖も費なければ本と貸さゞると一般、故に出さずと言ふなり、

〔采眞之遊〕采は採なり、眞は僞の反、即ち是れ逍遙遊にして前三句は即ち此の采眞二字の工夫、采眞の二字は即ち得道の實、上文に云はゆる中にあるの主、外にあるの正も皆是れ此の眞なり、

以富爲是者、不能讓祿、以顯爲是者、不能讓名、親權者不能與人柄、操之則慄、舍之則悲、而一無所鑒、以闚其所不休者、是天之戮民也、

【大意】前節に反照して、中に主無ければ即ち道を失ふと爲すことを示す、前節の如きは是れ至人の爲す所、本節の如きは是れ戮民の爲す所、彼れは眞、此れは僞、其の道に於けるの得失瞭然として見るべし、

【通釋】夫れ富有の如き、顯榮の如き、將た權勢の如きは、是れ一時の形迹にて謂はゆる外より入る者なり、常に中に主たるべき者にあらず、故に聖人至人は之を浮雲と一樣に看過して、別に采眞の遊を爲す所以なり、俗士は則ち然らずして其の道と爲る所は常に此の域を出づる能はず、此に停滯し此に固執し、此に齷齪し、其の富有を是とする者は、己獨り之を占めて他に其の財祿を讓る能はず、顯榮を是とする者は己獨り之に專にして、他に其の名譽を讓る能はず、權勢を愛する者は己獨り之を握りて、其の把柄を他に與ふる能はず、全く公器の多く取るべからざるを忘れて、之を一人に隱藏せんとし、幸に得て之を探れば或は失はんことを慮りて、深く恐れ、不幸にして失ひて之を捨つれば再び得られざるを憂へて痛く悲む、是れ其の中に主なきを知るべし、されば大道の眞に至つては一毫も鑒識する所なくして、終生、徒らに此の迷繆の境にのみ注目し、役役として外物を逐ひて

祖、而遺其精、看見先王許多事務、便謂道在是矣、問之中心、其實茫然、毫無據也、及心所欲爲、便謂、道如是行矣、藉之時運、實蹈其弊、而不知也、故中外不相符、人己不相得、惟不知道之精、故不知道之變也、何怪其以蘧廬爲安宅哉、と、

古之至人、假道於仁、託宿於義、以遊逍遙之虚、食於苟簡之田、立於不貸之圃、逍遙無爲也、苟簡易養也、不貸無出也、古者謂是采眞之遊、

【大意】此の一節は仁義蘧廬也の意を承けて、至人の所爲を說き起し、中に主有るときは卽ち道を得たりと爲すことを示す、至人は道を得たる者の稱、卽ち前節の聖人なり、

【通釋】故に古の至人の爲す所を觀るに、決して仁義を道の目的地とするにあらずして、目的地に到る間、暫く假るべき道路、暫く託すべき宿舍とするに過ぎず、豈に此に眷戀彷徨して逗留に其の日子を消せん、さつさと過ぎ去りて、目的とせる世界に到着し、然る後に氣樂に其の逍遙の墟に遊び、其の苟簡の田に食み、其の不貸の圃に立ちて永住す、逍遙とは成るが儘にて爲す無きなり、苟簡とは手輕にて食ひ易きなり、何の勞か之れあらん、不貸とは己れより出さぬなり、何の費か之れあらん、皆是れ強ひず、矯めす、僞りもせざれば飾りもせず、歸する所は一箇の眞のみ、唯だ至人にして始めて能く之を採取して傲遊すべし、故に古昔是れを采眞の遊と謂ひき、眞を採れるは卽ち道を得たるなり、

【解義】〔遊逍遙之虚〕岡松甕谷は遊字の下蓋し於字を脫せるならんと云へり、下文を以て例するに是なるが如し、虚は墟に同じ、此の句、文に於ては下の二句と對立すれども、意は則ち之を統べたり、田も圃も皆此の逍遙墟中に在るなり、〔食於苟簡之田立於不貸之圃〕苟簡不貸は次に解す、但田圃と言ふは「成疏」に明是聖人養生之地と見ゆ、面白し、〔逍遙無爲也云云三句〕是れは作者自ら前三句を釋せるなり苟簡は苟且簡略なり、其の場其の時の間に合せて手

行、自外至者無主不止の語を援きて、文義相似と爲して曰く、自外至者無主不止、故此言中無主而不止也、自内出者無匹不行、故此言外無匹而不行也と、〔由中出者聖人不隱〕「辯正」に從へば由中出者とは不因物而由心造者、不受於外とは遷物而物不受也聖人不出とは不以施於物也、由外入者とは見聞入而留於心也、無主於中とは心不清虚則喪其心也、聖人不隱とは不以藏於心也と、「今通釋」大體此を取れり、案ずるに中无主而不止、外無正而不行とは是れ先づ反言を用て道の體用を說くなり、下の由中、由外の兩句は其の義を申明するなり、由中出者とは卽ち外無正者なり、不受於外とは卽ち不行なり、由外入者とは卽ち中無主者なり、無主於中とは却て是れ不止なり、上下左右參錯牽引して自ら至道の存する所を發明せしむ、而して兩句下各、聖人を揭げ、不出と不隱とを言ふ、之を斷ずる所以なり、〔名公器也、不可多取〕釋文、器用也、郭注、名者天下之所共用、矯飾過實多取者也と、「副墨」に云ふ若夷齊喪命於首陽之下、比干剖心於暴人之前皆多取之累也と、「遽廬」「釋文」に遽、音渠、司馬郭云、遽廬猶傳舍也と而して林解、副墨等は草屋とす、蓋し草屋は直に其の物を解し、傳舍は其の用より釋す、故に猶と言ふなり、要するに何れも其の久息すべからざるに喩ふ、〔覯而多責〕「發覆」に曰く覯見也、遇也、言以仁義自見者、人必吹毛求疵と、「成疏」に云ふ、客停久疵釁生、聖迹留過責起と、「通義」には曰く覯而多責一句、上下疑有缺文意言久處仁義則標榜成迹、迹有可見則趨名、趨利者、皆因之而起責望之心也と、

【備考】　中无主而不止以下諸注頗る紛々たり、今其二三を錄して考に供す、朱得之曰く中無主云云、言志不專、則道不凝、外無法則事不達、正猶政、聖人不强聒、不自私、蓋以常人之情有成心者不能虚受能受善者其中必虚、虚則無往而非契道之地矣と、「義海」には曰く中無主、謂内無其質故道不舍止、外無正、謂世無師匠故道不流行、若郢人之於匠石、則中有主外有正、故能成其妙斲、况至道授受之微、神交心契於恍惚杳冥者乎、夫聖人以道覺民、猶天降甘露、未嘗擇地、然非瓊瑤之器、不能容受此、不受於外、無主於中之謂也と、宣穎は曰く求道者、得其

求め得て獻ずべく進むべく、告ぐべく與ふべき者ならしめば、世間何人か之を己が敬事する君父に進獻せざらん、親愛する兄弟に告げざらん、愛養する子孫に與へざらん、然り而して容易に斯くすることの不可能なるは何ぞや、其の故は他にあらず、道なる者は徒に見聞に依賴し、物迹に追隨して中心折角の主人公を喪失せば、決して我れに住止して其の體を成さゞる者なり、さりとて外、物に因り事に應じて其の自然の正しきに相當することなければ、決して世に行はれずして其の用を失ふものなり、蓋し中より出づと雖も、專ら物に加へて之を强ゆるに意ある者は、其の宜しきを得ずして、外物に受容せられず、是れ其の行はれざる所以なり、故に聖人は强ひて我れより之を出して施すことを爲さゞるなり、外より入る者に至つては是れ固より粗迹にして到底我が身中に永住して主人公たるの價値なし、是れ其の止らざる所以なり、故に聖人は決して私に之を藏して愛惜し固執することを爲さゞるなり、要するに眞の道なる者は其の容易に得べからざること此の如し、然るに世の道を言ふ者は皆な名を好むの情なき能はず、而して仁義を以て道の至極と爲す、是れ中に主なく外に正なき者なり、聖人の出さず隱さずに反する者なり、名は天下公共の用なり、豈に獨り之を貪りて多く取るべけんや、仁義は先王が民を導く方便より假設したる者に過ぎずして、言はゞ道中の草舍の如きのみ、道中の草舍には只行旅一宿の用を借るべし、豈に永住の安宅とすべけんや、若し然らずして此に滯り飽くまで仁義を以て世を觀れば、世人も亦我が瑕疵を求めて交〻相責むるに至り、寛厚淳樸の風蕩然として地を掃はん、自他ともに何の得る所ぞや、

【解義】〔老子曰然〕「發覆」に然を宜乎、其不得也と注す、乃ち如何にも左樣ならんの意也、〔中无主而不止〕中は心を謂ふ、主は主人にして心中に自得の資あるを謂ふ、而は則と通ず、林注に曰く中無主、非自見自悟也、言學道者非有所自得、雖欲留之不住也、〔外无正而不行〕「辯正」に曰く因物者應物之正事、道之用所以行也と兪樾は正を以て匹の誤と爲し、「禮記」の緇衣篇に、唯君子能好其正の鄭注に、正當爲匹字之誤とあるを引て、正匹の二字相訛する例證と爲し、又宣三年の「公羊傳」に自內出者無匹不

者なり、且つ又未だ名利に意あるを免れず、是れ下に老子が一場の談議を引き起す所以なり、

【解義】〔乃南之沛〕釋文に曰く沛音「貝」司馬云老子陳國相人、相今屬苦縣、與沛相近と、陳壽昌は漢の沛郡相縣は皆今の安徽鳳陽府宿州の界に在りと云へり、〔求之度數五年〕度數は「副墨」に制度名數とし、「發覆」に法度禮數とす、成疏に云ふ、數算術也、三年一閏、天道小成五年再閏、天道大成、故言五年也と、〔求之陰陽〕「辯正」に曰く度數陰陽之目、陰陽度數之綱、目不勝窮、故求其綱以擧之云々と「成疏」に云ふ十二年陰陽之一周也と、林解に云ふ五年十二年初無義理、但曰精粗求之久而未得爾と、「通義」に曰く度數之學、可以律曆考也、陰陽之學可以氣候推也、道之爲體不關律曆、不涉氣候、所以於此求之而不得と、

老子曰、然使道而可獻、則人莫不獻之於其君、使道而可進、則人莫不進之於其親、使道而可以告人、則人莫不告其兄弟、使道而可以與人、則人莫不與其子孫、然而不可者無他也、中無主而不止、外无正而不行、由中出者不受於外、聖人不出、由外入者無主於中、聖人不隱、名公器也、不可多取、仁義先王之蘧廬也、止可以一宿、而不可久處、覯而多責、

【大意】先づ道は容易に得べからざるを言ひ、中无主而不止より以下は其の得難き所以を言ひ、名公器也より以下は、其の粗を得て其の精を遺すことを誡む、

【通釋】老子之を聞き謂ひて曰く子の道に於ける此の如くなれば其の得る能はざるは固より然るべき筈なり、若し道にして彼の器物の如く容易に之を外に

視るなり、〔西施―醜人―矉〕「辯正」に云ふ、以易人而用、比易時而用と、〔富人―不出、貧人―走〕「辯正」に云ふ、比不適於人心と、陳壽昌は、富人は婦人の訛にて貧人は丈夫の誤なりと爲せり、其の説南華眞經識餘に見ゆ、

孔子行年五十有一、而不聞道、乃南之沛見老聃、老聃曰、子來乎、吾聞子北方之賢者也、子亦得道乎、孔子曰、未得也、老子曰、子惡乎求之哉、曰吾求之於度數、五年而未得也、老子曰子又惡乎求之哉、曰吾求之於陰陽、十有二年而未得、

【大意】　以下三節を連ねて第五段を成す、「發覆」に曰く、正明夫子之所以窮者不知道不可求不可獻、尤自以爲聖、挈仁義之道以行所以不入道也、此の一節は孔子老聃を見て道を問ふ、文章上の書出しに過ぎず、下節の老子曰然より始て正意に入る、

【通釋】　孔子行年既に五十有一歲、門人益々衆盛に、講學日久しと雖も、講ずる所は皆古人の陳迹禮義の末節にして、未だ大道の玄極を聞くを得ず、心常に安んずる能はざるより、遂に魯國より南の方楚の沛に之き、老聃を訪問したるに、老子接見してこれは〳〵子來られたる乎、承れば子は北方の賢者なりとかや、然らば子も道を悟得せられたらん乎と云へば、孔子はいかで然る事のあるべき、未だ少しも得る所あらずと答ふ、老子曰く然らば如何なる方面に向て求められたるやと、孔子はされはなり、吾れ初め之を法度名數の上に於て求めたること五箇年に及びたれども得ざりきと答ふ、老子は更に推して問へらく、然らば其の後は又如何なる方面に轉じて求められたるやと孔子曰く更に進んで之を陰陽消長の上に於て研究したるなり十二箇年の久しきに涉りたり、然かし是れ亦未だ得る所あらざるなりと、蓋し孔子の道に於けるは下節の謂はゆる中に主なき者なり、外より入る

周公之服と、〔齕齧〕音「紇臬」並に「カム」と訓ず、〔慊〕音〔医〕足なり、

故西施病心而矉其里、其里之醜人、見而美之、歸亦捧心而矉其里、其里之富人見之、堅閉門而不出、貧人見之、挈妻子而去之走、彼知矉美、而不知矉之所以美、惜乎而夫子其窮哉、

【大意】　此の一節は醜婦が佳人の矉に傚ふの譬を以て其の道の時宜に適せざる者は、畢竟ずる所は末節に拘して、其の原因を審にせざるに坐するに喩ふ、此を本段の結論とす、故に惜乎而夫子其窮哉の一句を再提し、以て緊しく六譬喩を一括す、「通義」に曰く里矉效跡失意、言不能自知、此直指孔子、以實其取窮之故と、

【通釋】　故に古今の異を審にせずして、爲す所の者は、醜婦が西施の矉に傚ふが如きのみ、越の女西施は天下の絶美なる者なり、其の村里に住みたる頃嘗て癪の催しにもありけん、胸の痛みに眉を顰め居たるに、鄰里の醜婦ども之を見て彼れの顰める樣如何にも美なり、佳人の佳人たるは正に此にありと、各々其の栖家に歸り去りて、胸に手を當て眉を蹙め、西施が樣を學びて得意なり、顰も西施にありては美なれども、醜婦にありては醜に愈〻醜を加へて、目の當てらるゝ姿にあらず、而して此の事日に里中に流行の氣勢を增し來りたれば、里民は奇異の思をなし、何か變災の前兆にもあらんと恐れけん、富者は堅く門を閉ぢて一家外出を見合せ、貧者は妻子を引き連れて他村に逃げ移れりとなり、彼れ等醜婦の連中は徒に西施が面上にて顰の美なるを知れども、其の美の由りて來れる所は、之を措て尋ねざる故、胸に手を當て眉をさへ蹙むれば誰れにても美なることゝ考へたるは間違なり、惜いかな貴殿の夫子も先王の禮義法度を行ふに熱心なれども是れ亦顰に傚ふ類にて、世に容れらるゝ筈なければ、此度の游歷も氣の毒ながら其れ窮せん哉と、

【解義】　〔矉其里〕矉は顰又は嚬と通ず、眉を蹙めて

義法度者、應時而變者也、

【大意】此の一節は柤梨橘柚の譬を以て、三皇五帝各〻禮義法度を異にして相沿襲せざるに喩へ、以て宜しく時に因るべきことを言ふ、「通義」に曰く柤梨言當可此汎論也と、

【通釋】故に古の三皇五帝の禮義法度の尙崇すべき所以は、形式上の同一なるに在らずして、唯だ其の結果の治平なるに在るなり、之を譬ふれば恰も柤梨橘柚の如くならんか、其の味は梨橘は甘、柤柚は酸にして相ひ反し、酸にも亦酸の別あり、甘にも亦甘の異ありて一ならず、而も之を喫すれば、何れも皆人の口に適して、甘にても美、酸にても美なり、故に柤梨橘柚の味は唯だ口に適するのみにして各〻異なる者なり禮義法度の用は唯だ時に應ずるのみにして世々變る者なり、

【解義】〔不矜於同〕矜は「辯正」に云ふ尙也と、賈誼が「治安策」に謂はゆる嬰以廉恥故人矜節行も亦此の矜字の類、〔柤〕音「詐」、樝に同じ、「說文」に似梨而酸と見ゆ、其の實夏熟す、頭尾凹し、「コボケ」、「ノボケ」、「クサボケ」、「シドミ」等の稱あり、

今取猨狙而衣以周公之服、彼必齕齧挽裂、盡去而後慊、觀古今之異、猶猨狙之異乎周公也、

【大意】此の一節は、猨狙の譬を以て、强ひて古道を今人に服せしむるの不可なるに喩ふ、而して其の文反掉法を用ひ、今字に由りて戾轉す、「通義」に曰く、猨狙强以不欲言不能知人、

【通釋】然るに今や猨狙を捕へて强ひて之に着するに、周公の被れる冠冕、衣裳の服を以てせんか、成程周公の服は美なれども、猨狙に在りては啻に之を美として貴ばざるのみならず、其の己れに便ならざるを怒り、口にて齧み切り、手にて挽き裂き、冠冕をも衣裳をも皆除け去りて、始めて心に滿足するなり、古と今との時勢、民情、風俗、習慣を觀るに、猶ほ猨狙と周公との相違あるがごとし、然るに强ひて之を行はんと欲す、豈に人情世態を解せざる甚き者ならずや、

【解義】〔猨狙〕猨は俗に猿に作る、狙も亦猨屬、〔周公之服〕林氏曰く周公制禮、有冠冕衣裳之制、故曰

與」與は歟と同じ、〔今蘄行〕蘄は釋文に云ふ、音「祈」求也と、〔无方之傳〕司馬云ふ方常也と、前段の无方の方の如きは方向なり、今常となすは時を論ずるを以てなり、傳は郭慶藩曰く讀若轉、言無方之轉動也、呂氏春秋必己篇、若夫萬物之情、人倫之傳、高注、傳猶轉也漢書劉向傳、禹稷與咎繇、傳相汲引、猶轉相汲引也、淮南主術篇、生無乏用、死無轉尸逸周書大聚篇、作傳尸、襄二十五年左傳注、傳寫失之、釋文傳一本作轉と、

且子獨不見夫桔槹者乎、引之則俯、舍之則仰、彼人之所引、非引人也、故俯仰而不得罪於人、

【大意】此の一節は桔槹の譬にて、上節無方之轉應物而不窮を喩へて、其の貴ぶべきの意を申明す、「通義」に曰く桔槹言隨人と、

【通釋】且つ貴殿は獨り彼の桔槹を見られずや、桔槹の機たる水を汲む者、之を牽引するときは俯下し、之を放捨するときは仰上す、蓋し彼れ初より成心なく、人の引くがまゝに任せて、我れより人を引くに非ざるなり、故に俯すべきに俯し、仰ぐべきに仰ぎて、能く用捨の時宜に應ずるが爲め、人より罪を受けずして、破毀廢撤せらるゝ等の殃を免るゝなり、賢なりと謂ふべし、

【解義】〔且子獨不見〕已に舟車の逆用を以て其の殃あるを說き、又將に桔槹の順用を以て罪を得ざるを說き、以て其の義を申明せんとす、故に且字を用ひて轉ずる所以なり、〔桔槹〕音「結羔」「成疏」に云ふ挈水木也と、卽撥鈎瓶なり、郭慶藩曰く案文顯說烽火云（史記信陵君傳注）櫓上有桔槹以薪置其中、有寇則然之、字從木、通俗文機汲、謂之擽捍、字從手、然則從木者櫓上之物、從手者、汲水之物也、據莊子文義、當從通俗文爲正と、

故夫三皇五帝之禮義法度、不矜於同、而矜於治、故譬三皇五帝之禮義法度、其猶柤梨橘柚邪、其味相反而皆可於口、故禮

明かにす、此れ猶ほ顏子の不可及の愚のごとし、見聞知識一時都て泯滅す、此に至りて能く自然の本眞に反りて道と合體することを得べし、故に道可載而與之俱也の語を以て、之を結べるなり、以上はもと褚伯秀が義海の說なるが、亦以て此章の意義を發明すべき者あれば、今聊か其の文意を節譯して、此に附載すること此の如し、

夫水行莫如用舟、而陸行莫如用車、以舟之可行於水也、而求推之於陸、則沒世不行尋常、古今非水陸與、周魯非舟車與、今蘄行周於魯、是猶推舟於陸也、勞而無功、身必有殃、彼未知夫無方之傳應物而不窮者也、

【大意】此の一節は舟車の譬を以て、古今時宜の異なるに喩へて、夫子の之を知らざるを譏るなり、「通義」に曰く舟車言隨時と、

【通釋】夫れ水上の行には舟を用ふるに如くはなくして、陸上の行には車を用ふるに如くはなし、是れ舟の水上を行くに適すればなり、車の陸上に於けるも亦然り、千萬里に至らんも難しとするに足らず、然るに之に反して舟を陸上に推して行らんと求めば、終生力を費すも尋常の距離にも行る能はざるべし、是れ其の宜しきを得ざればなり、古今代を殊にするは猶ほ水陸のごときにあらずや、周魯道を異にするは猶ほ舟車のごときにあらずや、然るに今汝の夫子は文武周公が立てたる周の古制古道を、今日の魯國に行はんと希望するは、何を以て舟を陸地に推すに異ならんや、啻に骨折り損の草臥儲けとなるのみならず、其の身は必ず禍殃を受けん、樹を伐られ、迹を削られ七日火食せざるが如き是れのみ、故に聖人は一道を固執せず、無方の變通運用にて物に應じ機に隨つて窮らざるなり、而して彼れ孔子は未だ嘗て之を合點せずとは惜からずや、

【解義】〔沒世〕沒は盡なり、終なり、〔尋常〕周禮地官媒氏の注に八尺曰尋、倍尋曰常と、〔非水陸

〔死生相與鄰〕死か生かの間卽ち九死一生の場合にあるを言ふ、

【備考】此の章莊子の道を論ずるに黄帝三奏の樂を以てしたるは、猶彼の齊物論に於て、三籟を以てしたると互に參照して其の妙詣を悟得すべし、乃ち本章に奏之以人、行以禮義と云へるは始めて作すこと有るを謂へるなり、徵之以天、建以太淸と云へるは漸く自然に近づくなり、四時迭奏、萬物循生と云ひ、陰陽調和流光其聲と云へるは、文武經綸盛衰淸濁の間を離れず、此れ樂の初奏にして卽ち人籟なり、次ぎに奏以陰陽之和燭之以日月之明其聲能短、能長、能柔、能剛、滿谷滿阬、以物爲量と云へるは卽ち謂はゆる地籟なり、終りに奏以無怠之聲調以自然之命と云へるは有焱氏の頌に充滿天地苞裹六極と云へると共に天行の健に法り、自然無間の謂にして、林樂而無形、布揮而不曳、幽昏而無聲、動於無方と云ひ、又女欲聽之、而無接焉と云へるは共に道情に達し、至命を遂げし者は視聽するに區々の耳目を以てせず、形聲に拘々たるべからず形を形とし聲を聲とする根本の存するあるを說きたるが、此れ卽天籟の妙處なり、而して其謂はゆる混逐叢生とは彼の齊物論の萬竅怒呺なり、林樂而無形とは卽ち怒呺する所以の者は之を求むるも得べからざるを謂ひ、布揮而不曳とは又齊物論の厲風濟也と其の意相同じ、幽昏而無聲とは齊物論の謂はゆる衆竅爲虛なり、動於無方、居於窈冥とは、此の如くにして不測の神に入れり、故に或謂之死、或謂之生、或謂之實、或謂之榮と云へるが如く、行流散徙して常ならず、此れ凡人の疑ふ所にして、聖人の考據する所なり、天機不張とは謂はゆる形體を墮し、聰明を黜くるなり、五官皆備とは存して用ひざるなり、無言而心悅に至りては是れ天樂にあらずして何ぞ、禮に大樂、與天地同和と云へり、人の道性未だ和樂よりして得ざる者あらず、樂は和に臻りて天地應ず、而して人にあらざれば成す能はざるなり、故に此の章は音樂を借り以て道に喩へ、學者をして形氣交も和し、至音潛に暢び、聲無くして和を聞く、是れ眞の天樂にして初めより金石絲竹の繁奏に在らざるを知らしむ、又末に有焱氏の頌を擧げて至道至音は視聽の能く接する所に非らず、是を以て卒に惑に之く、惑ふが故に愚となることを

なり、皆是れ先王の芻狗を拾ひ取れる祟にあらずして何ぞや、

【解義】〔師金〕「釋文」に曰く、李云ふ魯太師也金其名也と、〔何也〕「成疏」に曰く問窮之所以也と、〔芻狗〕芻は草なり、巫祝草を結び、狗を爲り用ひて、解厭し禳の呪をする畢れば、之を棄つ「義海」に曰く芻狗所以致敬也、祭已而存之則妖興、法度所以適時也、而執迹則弊至と、〔未陳也〕未だ芻狗を陳列して祈禱せぬときを謂ふ、〔篋衍〕釋文に云ふ、篋本或作筐、衍李云笥也、盛狗之物也、司馬云合也、（合はかぶせ蓋のある函箱の類）〔巾以文繡〕巾は成疏に覆となし、郭慶藩は疑飾字之誤と云ふ、然れども巾字亦飾の訓あり、必ずしも誤とすべからず、〔尸祝〕成疏に云ふ巫師也と、〔齊戒以將之〕齊は齋、將は送なり、〔蘇者〕「釋文」に云ふ、案方言云江淮南楚之間謂之蘇、史記云、樵蘇後爨、注云蘇取草也と「通義」に曰く眯重於夢蔽漸深也、蘇爨芻狗夢魅自息、下乃釋其故、以見芻狗之當爨不可依棲也と、〔彼不得夢必且數眯焉〕「郭注」に曰く廢棄之物、於時無用則更致他妖也と、「成疏」に曰く假令不致惡夢、必當數々遭魘、故郭註云云と、辯正に曰く總芻狗爲祟之意と、岡松甕谷曰く且將也と、數は音朔、しば／＼と訓ず、眯は音米、司馬曰く厭也、音一琰反と、厭は卽ち魘と同じ、說文に云ふ夢驚也、類篇に云ふ、眠不祥也と、案ずるに不得夢は夢の穩かならざるを謂ふ、卽ち三字を連ねて成氏の謂はゆる惡夢なり、然るに成氏は夢字を惡夢と解し、更に不得を解するに不致を以てす、不致惡夢にては師金が孔子の窮困を喩ふる譬にはならざるべし、蓋し師金が意は不得夢は惡夢の猶ほ甚しからざる者、眯は惡夢の最も甚しき者とするなり、又案ずるに人の棄てたる芻狗を拾ひ置く者は、其の祟を受けて夢に襲はるゝとは、當時俗間にて云ひ合へる言なりしならん、〔削迹於衞〕「成疏」に云ふ、夫子嘗遊於衞、衞人疾之、故剗削其迹、不見用也と、「發覆」に云ふ去衞、衞削其迹と、〔窮於商周〕朱得之曰く宋衞乃商之舊都と、甕谷曰く莊生屢有窮於商周之言、謂之商周者終不可解、林氏以爲周之都有商之舊地舊民、其說亦屬牽强、且夫子歷聘、未嘗過於周、然此亦寓言、不必深求可也と、〔圍於陳蔡之間〕此の事竝に伐樹於宋は史記家語及十八史略等に詳なり、

を成し、輾轉遞送して變換窮りなく、譬喩も亦巧妙斬新なり、宣穎評して圓滑糴燦之文と爲す、眞に然り、此の一節は芻狗の譬を以て、孔子の目的は已に錯れるが故に、其の自ら窮困することは、前にも幾囘も有りしことを擧げて、此の度の西遊も、亦必ず失敗に終るべきを推す、卽ち一段の總論なり、

【通釋】 孔子魯より西の方衞國に再游す、蓋し其の道の或は行はるゝを希望するなり、顏淵魯に在りて、其の遇合を氣遣はしく思ひたれば、試みに魯の太師名は金なる者に向ひて、吾が師が此の度の游歷に付きては果して衞の君臣の信用を受けて望みを達し得べきや否や、貴考何如と問ふ、太師金は蓋し亦當時の賢士にして道を知る者、之に答へて曰く、夫れ芻狗は君が知らるゝ如く祈禱に用ひて不祥を禳ふ者なるが其の祈禱の未だ畢らざる先きは、之を篋笥の中に盛り、之を文繡の服紗にて覆ひ、巫祝(カンナギ)潔齋していと鄭重に、いと恭しく取り扱ふも、一旦之を道路に送り出して用の濟みたる後は、二度と振り向きもせで棄て去り、通行者は無遠慮にも其の頭背を踐み付けて往來し、草苅りは其の殘骸を拾ひ取り、燒(タ)き付けの用に供して飯を炊ぐなり、是れ等は頗る無殘なるが如く見ゆれども、芻狗に在りては最早其の用も濟みたれば斯くなるは寧ろ本望なり、然るに再び之を取り擧げ、篋笥文繡にて尙ほも之を盛り之を覆ひ愈〻褻れて、其の下に遊居し寢臥するが如き者あらば、却て芻狗の祟を被り、其の人は夜々夢見の惡しきのみならず、必ず幾度となく襲はれ驚かさるゝ苦痛を見んとす、今貴殿の師も幾百年前の文武周公が當時に施して、今日となりて陳腐極まれる禮義法度の芻狗を拾ひ取りて本尊とし、幾百千人の弟子を聚めて其の下に遊居し寢臥す、故に嘗て宋に在て講說場の日蔽ひとしたる大樹は、司馬桓魋が爲めに伐り倒され、衞に往いても足跡を削られたる侮辱に遭ひ、又商周の地に於ても窮困したりしは、是れ其の夢を得ざるの夢にあらずや、其の楚に往かんとする途中、陳と蔡との間に於て蔡人に圍まれ、七日の久しき炊(タ)食するを得ず、其の徒餓ゑて能く興つものなく、生死已に知るべからずといふが如き窮境に陷れることもありき、是れ其の一層甚だしき夢に襲はれて驚駭を喫したるにあらずや、貴殿の師の窮を取るは決して今に始めぬこと

此境界、方有進歩處と、又曰く、說樂雖作三段、亦無大分別、但鼓舞其言而已と、宣穎曰く如此五節論樂妙文、引來止爲一箇愚字、說懼說怠意、止在於惑字一節也、意止在於惑字一節者、意止在於愚之一字也、意止在於愚之一字、故從懼遞由祟字、從怠遞由遞字以便於從惑遞由愚字也、何也、愚故道也、愚故道可見、求道者無一知半解可自用也、道可載而與之俱、則順而已矣と、能く莊子が本段を結構したる用意を盡せりと謂ふべし、又案ずるに懼字、怠字、惑字、愚字は元來好文字にあらず、然るに翻つて道に入るの階梯と爲し來る、是れ莊生が奇想奇筆人を驚倒せしむる處なり、

孔子西遊於衛、顏淵問師金曰、以夫子之行、爲奚如、師金曰、惜乎而夫子其窮哉、顏淵曰、何也、師金曰、夫芻狗之未陳也、盛以篋衍、巾以文繡、尸祝齊戒以將之、及其已陳也、行者踐其首脊、蘇者取而爨之而已、將復取而盛以篋衍、巾以文繡、遊居寢臥其下、彼不得夢、必且數眯焉、今而夫子亦取先王已陳芻狗、聚弟子、游居寢臥其下、故伐樹於宋、削迹於衛、窮於商周、是非其夢邪、圍於陳蔡之間、七日不火食、死生相與鄰、是非其眯邪、

【大意】以下六節を連ねて第四段と爲す、全段を通じて師金が孔子の衞に遊ぶは必ず當に窮すべき所以を論ずるの言を借りて、以て儒者の言ふ所は、皆古昔の陳言にして決して今世に用ふるに足らざることを謂ふなり、惜乎而夫子其窮哉を以て起り、又同句を以て終る、其の間六種の譬喩を用ゐて、一譬喩自ら一節

於聖人、蓋知聖人、則知樂矣と、〔遂於命〕遂も亦通達の意、〔天機不張〕「文粹」に云ふ元神不動也と、元神とは主宰の謂なり、〔心說〕「釋文」に曰く說音悅と、〔有焱氏〕「成疏」以て神農と爲す、蓋し焱或は炎に作るを以てなり、然れども必ずしも推究せずして可なり、蓋し古への帝王の一人なり、〔充滿天地苞裹六極〕釋文に曰く苞音包、本或作包と、岡松甕谷云ふ古韻地與極諧と、案ずるに楚辭の天問に曰く厥萌在初何所意焉、璜臺十成何所極焉、と、極は渠記切音曁なり、卽ち亦地と諧ふ所以なり、〔而故惑也〕而は汝なり、「通義」に曰く恍惚無稽曰惑、非疑二也と、

樂也者、始於懼、懼故祟、吾又次之以怠、怠故遁、卒之於惑、惑故愚、愚故道、道可載而與之俱也、

【大意】本段の總收なり、「辯正」に曰く、以上借樂言道、以下借聽樂之事、指示人以入道之門と、

【通釋】樂なる者之を奏するに聽者をして悚懼せしむるより始る、悚懼するが故に心胸兢々然として鬼物に祟らるゝ如き不安の狀態あり、是れ先づ其の六根を震動せられたるが爲めなり、吾れ次ぎに其の奏を變じ、聽者をして之を遂ひ之に從はんとするも由なくして、心力疲れ果てゝ漸く倦怠せしむ、倦怠するが故に絶望して遁れ去るが如き狀態あり、是れ漸く其の妄力を去り、宿習を脫するの兆候なり、最後に至ては吾更に其の奏を深遠玄妙にし、聽者をして窈冥に無方に迷惑せしむ、迷惑するが故に惝怳として自失して全く愚と一般に歸す、是れ深く廣漠に入りて意識倶に消亡したるの效驗なり、意識倶に消亡せば始めて無爲自然に近しと爲す、汝今惑ひて愚に入る、之を保重して失ふことなければ、道は其身に載せて之れと同體なるを得べきなりと、

【解義】〔懼故祟〕宣穎曰く鬼神出而警人曰祟、神（精神）爲之爽、如被祟然と、〔愚故道〕「通義」に曰く上文所言懼怠惑、非一時所感、蓋黃帝進德之階、歸宿於愚、其曰愚故道、所以示道不在知識也と、林西仲曰く前言懼怠惑、未見其意、到歸結處、方說愚而可以入道、這一轉尤妙、蓋言人之求道須經歷、如

達し、天命に通じて、全く自然と一致したればなり、其の元神虚靜恬淡未だ嘗て動かずして、而かも耳目口鼻身の官皆具備して、各、其の職を效して窒礙する所なし、是れ所謂はゆる無方に動き窈冥に居る者にして、必ずしも聲樂を主とせずして、而かも其の樂自ら存在す、是れを天樂と謂ふべし、卽ち無怠の聲に樂奏し、自然の命にて調する者にあらずや、聖人固より之を言語に擧げずと雖も、其の心は常に和悅す、是れ亦林樂して形無き者に非ずや、樂の理、聖の德其の致は一なり、聖人を知れば則ち斯に至樂の如何を解せん、故に有焱氏なる者あり、之が頌辭を作れり、其の意に云ふ、大音は希聲なり、世俗の耳之を聽かんとしたればとていかで聞えん、大象は無形なり、世俗の眼之を視んとしたればとていかでか見えん、然れども希聲の聲無形の形は在らざる所なく兼ねざる所なくして、天地の間に充滿し、六合の外を苞裹すと、其の大其の妙既に此の如し、汝之を聽かんと欲するも徒に耳のみに依賴しては、其の消息を承接するに由しなし、此れ其の卒に聞きて惑ひたる所以なり、

【解義】〔無怠之聲云々〕林注無怠を以て不レ已となす、之を得たり、蓋し下の謂はゆる天樂なればなり、「詩經」周頌に曰く維天之命、於穆（幽深玄遠の意）不レ已と、本文は卽ち不レ已を以て樂の用とし、於穆を以て樂の體としたるのみ、故に奏レ之以二無怠之聲一、調レ之以二自然之命一と曰ふ、「辯正」に云ふ調主二其奏一而控二縱之一之意と、〔故若混逐叢生〕混逐は混交して相逐ふなり、此れ禽獸を以て喩ふ、叢生は叢り生ずること、此れ草木を以て喩ふるなり、「辯正」に云ふ形二容上二句一之詞と、蓋し人物草木の盛に混逐叢生するは無怠の狀なり、然して然る所以は只之れ自然の命にて、各、自ら其の緣起を知らず、〔林樂而無形〕林樂は宣注に林然共樂とあり、林然は衆盛の貌、〔布揮而不曳〕不曳は林解は不レ容二力以牽曳一とし、宣注は不二曳滯一とし、辯正は不レ留とす、要するに凝滯の痕迹なきなり、〔或謂之實云々〕實は果なり、榮は花なり、「爾雅」の釋草に木謂二之華一、草謂二之榮一云々と見ゆ、蓋し死と謂ひ實と謂ふが如きは、謂はゆる窈冥に居る趣き、生と謂ひ榮と謂ふが如きは無方に動く趣きに就いて呼ぶ者なり、〔世疑之稽於聖人〕世の字の下に當の字を加へて看るべし、宣穎曰く世疑二此樂一何不レ考

聲、動於無方、居於窈冥、或謂之死、或謂之生、或謂之實、或謂之榮、行流散徙不主常聲、世疑之稽於聖人、聖也者達於情而遂於命也、天機不張而五官皆備此之謂天樂、無言而心說、故有焱氏爲之頌曰、聽之不聞其聲、視之不見其形、充滿天地、苞裹六極、汝欲聽之而無接焉、而故惑也、

【大意】此の一節は咸池第三成の趣きを說き、北門成が卒に聞きて惑ひたる所以を解するなり、宜穎曰く、其渾沌渺茫、非復聲音之事、句句入微之至と、

【通釋】第三成の如きは專ら天道に由れりと雖も、猶ほ陰陽日月の分別の言ふべきもの ありき、第三成に至つては渾沌寂寞として之を奏するに無怠の聲を以てし、之を調するに自然の命を以てす、無怠の聲とは恆久にして已まざるの聲なり、自然の命とは之を致すこと莫くして、自ら至るの謂なり、されば人物の混然として相ひ逐ひ、草木の叢然として相ひ生ずるが若く、樂を作す者も之れと共に林林然として相ひ悅樂するの自然より、此の至樂を暢發して、全く形迹の外に超脫し去り、其の聲を布散揮洒して曳滯せず、幽幽昏昏の極は寂然として聲無きに至る、聲無きが如きに至るも亦無方無邊に動き、布揮して已まず、布揮して已まざるも、又窈冥幽昏に居て、寂然として聲無し其の用や測度す可らず、其の體や思慮の外にあり、故に聽く者各ゝ其の言を異にして、或は之を死と謂ひ、或は之を生と謂ひ、或は之を實と謂ひ、或は之を榮と謂ひて、一定する所なし、要するに此の樂は無怠の聲に奏せられて流行散徙して底止せず、自然の命に調せられて人間尋常の節簇を主とせざればなり、蓋し樂の善美も神妙も是に至れば盡きたり、極れり、世人之を疑はゞ、何ぞ試に聖人を引いて對照比較して一考せざる、夫れ聖人の聖たる所以の者は、物情に

の傳に、理之爲紀とし、疏に紀者別理絲數とす、故に宣穎は行其紀を循軌と解せり、卽ち各其の軌道を失はずして運行するなり、此の二句は至樂感應の功德を賛するなり、〔吾止之於有窮流之於无止〕諸解概ね自然に順ふの意とすれども、句意の係屬する所に至つては頗る曖昧なり、案ずるに是れ緊しく上兩句を結び、而して暗に下の委蛇に至るの張本とするなり、上句を結ぶとは鬼神守其幽は止之於有窮の應、日月星辰行其紀は流之於无止の驗なればなり、〔予欲慮之云云〕予字郭本の外、皆子字に作れり、然れども本段北門成を呼ぶに皆汝を以てするに、此處にのみ子と呼ぶは穩ならず、尤も黃帝も自ら吾と稱すれとも吾と予とは近し且つ子とすれば下の儻然立於四虚之道ものは誰ぞ、北門成とせざるを得ず、而して吾既不及已夫に至つて撞着を生ず、故に郭本に從ふ、〔儻然立於四虚之道云々〕儻然は宣穎曰く無依貌、岡松甕谷曰く獨立無偶之貌と、四虚之道は卽ち亦洞庭廣漠之野の意、今樂聲の之く所を追尋するの場合なる故、四虚と言ひ、道と言ふ、〔槁梧は解已に德充篇の惠子據槁梧の下に見ゆ、此より以下節尾に至る光景蒼涼、精思縹渺、筆の能く釋する所にあらず、讀者宜しく言外に翫味すべし、〔已夫〕天道篇に見えたる如く、他本又多く已矣に作る、且つ多く上句に屬して、吾既不及已矣とすれども、「辯正」は已夫に從ひて已字のみを此の句に屬し、夫字をば下に屬して夫形充空虚といふ樣に讀み、岡松氏の考には二字共下に屬して已矣形充空虚と讀むべしとせり、〔形充空虚——委蛇〕釋文に蛇は以支反、岡松甕谷云ふ、蛇音移、委蛇舊爲委曲自得之貌、而莊生微變其意、林氏以爲放弛、蓋得之と宣穎曰く惟覺樂之形著滿空虚、心遂弛弱、悍氣盡矣と、又曰く委蛇二字妙妙、人心純是悍氣未融、故凡事、欲以我與直到四邊不着、始覺通體俱柔如、此說怠字、此時塵濁不沃自盡矣、老子喜柔正是這箇緣故と、蓋し宣說の悍氣盡矣にて委蛇を味ひ、然る後怠字の意始めて得べきなり、「通義」には曰く心形坦蕩曰怠、非惰慢也と、

吾又奏之以无怠之聲、調之以自然之命、故若混逐叢生、林樂而无形、布揮而不曳、幽昏而無

闘きに稱ひて之に滿ち、坑に在ては坑の狹きに稱ひて滿て往く所、在る所として宜しからざるはなく、遍からざるはなし、然からば之を奏する者に在つては、何の智巧を用ひて能くも斯く爲し得るかといふに、全く然るにはあらず、いかにも心知の孔（郤）を閉塞（塗）して、凝然として獨り神を守りて、我より强て裁制を設けず、大小高下長剛短柔の應は一切物の自量に任ずるのみなれば、其の聲音を言へば悠揚にして綽乎として迫らざるの趣あり、陰陽の和調を得たればなり、其の樂を名けなば高明と曰はんか、日月の光華あればなり、されば鬼神も其の位に安んじて祟禍を致さず、三光も其の軌に循ひて變災を爲さず、是れも畢竟吾が樂の自然の大道と表裏して其の止まざるを得ざる所に止み、其の行かざるを得ざる所に行ける感應なり、夫れ既に此の如し、予之を慮らんとするも至樂は本と玄妙にして知ること能はず、之を望みたりとて本と形色なければ見ること能はず、之を逐ひたりとて本と蹤跡なければ及ぶこと能はざるなり、孤身ほれ〳〵と四面空濶の地に立つて、一張の琴（槁梧）に倚り、吟嘯しつゝあるも、目の働きには限りありて見んと欲する所に窮し、力の量にも限りありて逐はんと欲する所に屈し、既に之を奈何んともするなくして已みぬ、惟だ其の面影の瓢蕩して太虚寥廓の間に充滿し居るが如き感に打たれて、身力氣力も之が爲めに頽然として失せたり、汝も亦斯くあればこそ、倦怠を覺えたるなれ、

【解義】〔阬〕坑に同じ、塹なり、坎陷の虚なり、〔塗郤守神以物爲量〕塗は杜なり、塞なり、郤は「釋文」に云ふ與隙義同じと、「郭注」に兊（穴）也とし、「成疏」に孔也とし、「林解」に言七竅也とす、義皆同じ、「成疏」に曰く、閉心知之孔郤、守凝寂之情神と、即ち林氏の謂はゆる黜聰明、而守之以神なり、以物爲量は「發覆」に曰く、在坑在谷、任物之自量と、二句は奏樂者の意中を言ふなり、〔其聲揮綽其名高明〕「成疏」に云ふ、揮動也、綽寛也と、即ち悠揚發越して、寛綽餘りあるの意、案ずるに揮綽は陰陽之和と照し、高明は日月之明と映ず、此の二句は樂聲の美を言ふなり、〔鬼神守其幽、日月星辰行其紀〕「成疏」に云ふ、人物居其顯明、鬼神守其幽昧、各得其所而不相撓と、故に宣穎は安位と稱せり、紀は詩の大雅の綱紀四方

と二句は變化の窮りなきを謂ふなり、〔一不可待云云〕「郭注」に曰く初聞無窮之變、不能待之以一、故懼然悚聽也と、「副墨」に曰く一卽一死一生一僨一起之一と、兪樾は一を皆と訓じ、「郭註」を非とせるも必ずしも然らざるに似たり、待は期待なり、〔女故懼也〕此れ上文の吾始聞之懼の義を喩せしなり、「通義」に曰く惺惕如曉曰懼、非恐懼也と、亦一說と爲すべし、

吾又奏之以陰陽之和、燭之以日月之明、其聲能短能長、能柔能剛、變化齊一、不主故常、在谷滿谷、在阬滿阬、塗郤守神、以物爲量、其聲揮綽、其名高明、是故鬼神守其幽、日月星辰行其紀、吾止之於有窮、流之於无止、予欲慮之而不能知也、望之而不能見也、逐之而不能及也、儻然立於四虛之道、倚於槁梧而吟、目知窮乎所欲見、力屈乎所欲逐、吾既不及已、夫形充空虛、乃至委蛇、女委蛇故怠、

【大意】此の一節は咸池第二成の趣きを說き、北門成が再び聞きて倦怠を覺えたる所以を解するなり、

【通釋】第一成に在つては之を建るに太淸を以てすと雖も、之を奏し之を行ふに猶ほ人を以てし、禮義を以てしたるなり、然るに第二成に至つては、一歩を進めて人事禮義の境界を脫離し、專ら天道に由り之を奏するに陰陽の和を以てして、其の合を爲し、之を燭すに日月の明を以てして、其の辨を立てたれば、其の聲は短かるべきに短く、長かるべきに長く、柔なるべきに柔に、剛かるべきに剛く、律呂の變化は全く自然と齊一にして、人間界に於ける音樂の故常を主とせず、愈〻出でゝ愈〻新に、洋々乎として谷に在ては谷の

ふ、「文選」の陸機が文賦の注に於て、李善曰く許愼淮南子註曰、鼓琴循絃謂之徽、翰曰徽調也と、卽ち調べ方の意なり、太淸は「成疏」には天道とす、卽ち下句の自然なり、「發覆」には聲氣之元とし、林解は合造化也とし、甕谷の考には聲律之至淸者とする等其の說樣々なれども、聲律之至淸なれば聲氣之元なり、聲氣之元なれば合造化なり、合造化は天道なり、自然なり、扨て又四句一連なれば、人卽ち禮義、天卽ち太淸、奏卽ち行、徽卽ち建なりと知るべし、〔夫至樂者―太和萬物〕宣穎曰く太淸下、俗本誤、雜入註中三十五字、今去之と、蓋し此の三十五字は諸家多くは本文として上を承け、下を起すの句の如くに解すれども、全く强解にして宣說の通り、古注文の雜入したること疑なし、文義を案ずれば直に其の然るを知らん、又其の五德の文字に就いて觀るも、或は貌言視聽思と注し、或は木火土金水と解し、「辯正」の如きは禮義、則仁智信在其中と爲す、然るに仁義禮智信を一組にしたる語は漢の董仲舒より始まる、莊子の時代には未だ此の語のあらざるを奈何せん、是等を以てするも注文たること明なり、〔文武倫經〕禮樂記に云ふ、始奏以文、復亂以武、鄭註に曰く文謂鼓、武謂金と、疏に曰く金屬西方、可以爲兵刃、故爲武、鼓主發動衆音、無兵器之用、故爲文と、卽ち一盛一衰の謂なり、次の陰陽調和と對偶して文を成す、但、一淸一濁陰陽調和は對峙を以て言ひ、一盛一衰文武倫經は流行を以て言ふ、倫は比類なり、經は經脈なり、〔流光其聲〕流光の字甚だ奇なり、或は流暢を以て解し、或は流動光彩を以て解し、或は當其交動、光輝盈溢を以て解する者あれども、未だ明透ならず、岡松甕谷は曰く、謂流暢其聲而放大之、光猶大と、此の說尤も當を得たり、而して下句とも能く襯す、〔蟄蟲云云二句〕尤も能く流暢放大の氣味を得たり、唯だ是れ樂聲の形容にて、猶ほ若雷霆之驚蟄蟲、使始作といふがごとし、而かも之を倒書し一箇の若字をも用ゐず、直に實寫をして見せたれども、吾驚之の三字を中間に插入して、隱然形容なるを知るべからしむ、此は是れ莊老が例の奇筆なり、〔其卒無尾其始無首〕「林解」「成疏」並に老子が迎之不見其首、隨之不見其後の語を引きて注せり、運轉の端なきを謂ふなり、〔一死一生一僨一起〕僨は「釋文」に曰く方問反、司馬云仆也

謂にして、其の聲音律呂をして節文（禮）裁制（義）ありて、條理順序を混淆紊亂せしめざる也、之を調するに天理を以てすとは、卽ち太淸（一語にて釋し難し解義を見よ）の本原によりて之を建立するの謂にして、彼の禮義に象れる節簇は人事といふものの決して故意の制作に出でたるにあらず、天道自然の聲氣を以て主宰としたるなり、是れ咸池第一成の本旨なり、體統なり、（是れより以下卽ち本文太淸の下より太和萬物の句に至るまでの三十五字は姑く通釋を缺く其故は解義の下に附す）、是の故に樂律の推移轉換すること、四季の其の序を逐ひ更迭して起るが如く、物類の其時に隨ひて生成するが如く、一盛し一衰して文武の比類經脈は皦如として相ひ奪はず、一淸一濁と陰陽の調和は純如として相ひ離れず、其の聲を流暢にして之を大にするときは、仲春の月に蟄蟲の始めて振作して更に雷霆の聲を發するが如く、壯大に愉快に發動舒暢して自ら已む能はざるものあり、斯く井然として常規ありて亂れざるは、卽ち太淸の本源より之を建て、禮義の節制より之を行ひて、人事天理の中和に由りたればなり、然れども其の常なる者は尋常世俗の謂はゆる常にはあらずして、其の終を求むればとて、尾もなく、其の始を求むればとて、首もなく、畢竟環の端なきが如く繹如として一聲死すれば一聲生じて之に繼ぎ、一音仆るれば一音起きて之を承け、其の間に變化行はれて端倪すべからず、然らば變化は卽ち常にして常とする所は變化窮り無きなり窮り無きは固より測り難し、測り難きは豫め其の一を執つて之を待つべからざるなり、是れ汝が之を聞きて先づ心に悚懼を覺えたる所以なり、

【解義】〔殆其然哉〕「辯正」に曰く言固宜如此也、「通義」は曰く汝殆其然哉、喜而訝之之辭、猶曰汝乃能如此聽哉其間精義非余淺陋所能及不敢臆說と、〔奏之以人―至建之以太淸〕「辯正」に上二句を解して、言所奏者是人事而卽天理と云ひ、下二句を解して、所以奏之者禮義卽太淸と云ふ、乃ち知る上下二句各、相ひ表裡し、而して上二句は是れ槪言、下二句は詳言にして、亦相ひ表裡することを、要するに四句一意なり、若し每句各、別意と爲せば誤れり、奏は林氏曰く作也と、樂を作すの意なり、徵は當に徽に作るべし、「釋文」に古本多作徽と云ふ、琴節を徽とい

這便是天道之運行、是以言樂と「通義」に曰く、此篇論樂、全不及器、正謂鐘鼓之音、羽毛之容、樂之末也、

【通釋】 姓北門、名は成なる者其の君黄帝に問ひて曰く、嚮に帝咸池の樂を洞庭の曠野に張り給へる時、臣最初に之を聞いて悚懼を覺え、再び之を聞いて倦怠を覺え、終りに之を聞いて迷惑し、蕩々然として神思定まることと能はず、默々然とし口之を言ふことと能はざるなり、何を以て斯く悚懼し倦怠し迷惑するか、臣其の然る所を自得するなし、敢て問ふ何の故ぞと、

【解義】〔咸池〕樂の名なり、「禮記」の樂記に云ふ咸池備矣、注に咸皆也、池之爲言施也、言德之無不施也と、〔洞庭之野〕「成疏」に天地之間、非太湖之洞庭也と、宣穎曰く猶廣漠と、〔蕩蕩默默〕林氏曰く蕩々精神散也、默々口噤也と「辯正」に曰く惑之狀と、〔乃不自得〕「辯正」に曰く不知上三事之所以然也、

帝曰、女殆其然哉、吾奏之以人、徵之以天、行之以禮義、建之以太清、(夫至樂者、先應之以人事、順之以天理、行之以五德、應之以自然、然後調理四時、大和萬物、)四時迭起、萬物循生、一盛一衰、文武倫經、一淸一濁、陰陽調和、流光其聲、蟄蟲始作、吾驚之以雷霆、其卒無尾、其始無首、一死一生、一僨一起、所常无窮、而一不可待、女故懼也、

【大意】 以下皆黄帝の答にて、其の樂を論ずるや徵に入り、神に入る、而して此の一節は即ち先づ北門成が始に之を聞きて懼るゝ所以を解するなり、

【通釋】 黄帝曰くさても汝は能く左様にまで聽き別けて呉れしか、感心の至りなるが、吾今其の然る所以を語げん、吾が咸池の樂の第一成は吾之を奏するに、人事を以てして、之を調するに天理を以てせり、奏するに人事を以てすとは、即ち禮義の意を以て行ふの

彼の堯舜の盛德をも小視して、(遺)之を爲すことを屑しとせざるなり、天下をして兼ねて我を忘れしむる者の利澤に至つては、萬世の後に施して蒼生を潤せども天下は曾て之を知らざるなり、其の規模の大なること、盛なること此の如し、豈たゞ讃嘆して區々たる仁と孝とを言はんや、元來一體孝悌とか、仁義とか、忠信貞廉とかいふ者は、世俗は至極の道と心得居るも、實は此れ皆自然に背き自ら勉强矯飾して、天賦の德性を勞役するに過ぎざる者なれば、決して尙ぶ(多)には足らず、されば至人より言へば別に宇宙の至貴なる者あり、世俗の至貴とする爵位の如きは、何んか有らん、宇宙の至富なる者あり、世俗の至富とする財寶の如きは何んか有らん、宇宙の至願なる者あり、世俗の至願とする名譽の如きは何んか有らん、其の至願至富至貴なる者は果して何者なるや、吾が謂はゆる道是れのみ、道は至れり、是を以て萬古を貫き天地を極めて變(渝)らざる者なり、世俗の爵位財寶名譽の如きは、變滅浮雲の如し、言ふに足らざるなり、

【解義】(德遺堯舜而不爲也)遺は棄なり、故に林氏は蔑視と解し、胡氏は小視するの意と解せり、「郭注」に云ふ、遺堯舜然後堯舜之德全耳、若係之在心、則非自得也と、(太息)「成疏」に曰く猶嗟嘆と、林氏云ふ、嗟嘆自誇也と、(不足多也)多は猶ほ尙ぶといふがごとし、(國爵幷焉)幷は屛と同じ、屛け棄るなり、故に何ぞ取らん、又は何んか有らん、又は與らざるなりの意となる、但、「副墨」には兼而有之之意、辯正には包於其度內不能誇爲所無也と解せり、竝に兼倂の倂と視て其の範圍の廣大にして漏すことなしの意としたるなり、亦通ず、

北門成問於黃帝曰、帝張咸池之樂於洞庭之野、吾始聞之懼、復聞之怠、卒聞之而惑、蕩蕩默默、乃不自得、

【大意】以下四節を連ねて第三段と爲す、樂を借りて道を喩ふるなり、「發覆」に曰く、篇名天運、而言樂者、以其至樂之妙、亨通萬物、樂主和、至人合陰陽氣、敘之和順化以行、使物物遂情遂命而不識不知、

て天下を忘るゝは易く、天下に兼て我を忘れしむるは難し、敬孝より推して此に至るの間隔は決して近きにあらず至人にあらずば孰れか之を能くせん哉、

【解義】〔商太宰蕩〕商は即ち宋なり、周の武王殷の微子啓を宋に封じ、其の祀を存す、殷もと商と名づく故に莊子宋を謂つて商となす、今河南の歸德府は其の都なり、太宰は官の名、「成疏」に名盈字蕩とあり、蓋し下の蕩聞之を一本に盈聞之に作るものあるより司馬彪以て蕩を字としたるに依れるなり、〔至於郢〕以井反、楚の都なり、今の荊州府、〔冥山〕冥山は山の名、「郭注」には在乎北極とし、釋文には司馬云北海山名、或は朔州の北に在りと云ふ、〔忘親易而使親忘我難〕「通義」に曰く忘親則事親以適、無所難矣、使親忘我則不貽親念、行無迹矣と、乃ち子の親に事ふるに爲めに念を凝らさず、自然に任かして樂しむことは易き事にはあらざれども、更に親子の間何等心配せず打ち解けて如左右なくして彼れ此れの形ち跡なきは尤も難しとなり、〔使天下兼忘我難〕莊子本と太宰が言に因りて、至仁は倘しとは云へるもの、實は孝は勿論、至仁と雖も定名ある者を言ふを屑しとせざるなり、故に宣穎此の句下に注して曰く、至此則纖痕不留矣、孝字着不得、仁字亦着不得、看他一卸一卸直卸至此、將仁孝都歸氷釋、分明是典道供此也と（典道供、此原文字形不明、姑存疑）、

夫德遺堯舜而不爲也、利澤施於萬世、天下莫知也、豈直太息言仁孝乎哉、夫孝悌仁義忠信貞廉、此皆自勉以役其德者也、不足多也、故曰、至貴國爵幷焉、至富國財幷焉、至願名譽幷焉、是以道不渝、

【大意】既に忘字を以て都て仁孝を抹殺し了り、此節に入りて忘字の本體を現して道字に化し、道不渝を以て一段を結ぶ、

【通釋】夫れ兼ねて天下を忘るゝ者の德に至つては

しとは、至仁者の天下に於ける、其眼中此れをば親愛すべし、彼れをば親愛すべがらずなどの區劃を存せずといふに在りて、詰り下に謂はゆる忘るゝの意なり、然るに太宰は親愛無き者は薄情至極の者なれば、父母に對して無論不孝といふ淺俗なる理窟より割り出して、至仁にあらざるを證せんとするなり、其の疑惑するも尤もなれば、莊子は懇に之に曉喩して曰く否な〳〵至仁とは最上至貴の道なり、德なり、君の謂はゆる孝の如きは、固より其の一局部の粗迹なれば、豈に之を以て其の眞を盡すに足らんや、然るに君が直に孝を至仁に律する所より觀れば、君が云ふ至仁は此れ孝以上に過ぐる言にあらで、孝にも及ばざる言なり、夫れ旅客の南行する者楚國の都(郢)に至らば其の城池市街は詳細に見物し得んも、此處にて北面したりとて既に背馳して離れたる冥山は見えまじ、是れ其の地と山との距離の至遠になりたるが爲めなり、此の譯と同じく、郢即ち孝位は見得らるべきも冥山即ち至仁に至つては、到底君が眼力の及ぶ所にあらず、其の間に餘程の懸隔あり、余故に君が爲めに孝を起點として其の道中を語らん、(故曰)先づ孝と曰ふも其れには敬孝と愛孝の別あり、敬とは其の外貌を肅にして恭敬を致すの謂にして愛とは其の中心より發したる和氣愉色にて奉事するの謂なり、故に敬を以てする孝は易くして愛を以てする孝は難し、然れども愛を以てする孝は猶ほ親を愛するに意ありて全く凝滯の形迹を免れ得たる者にあらず、故に猶ほ易くして親を忘るゝは難し、然れども親を忘るゝは自己の一身上に止りて未だ相互ともに忘れ得たる者に非れば、親を忘るゝは猶ほ易くして、親にも我を忘れしむるは難し、親にも我を忘れしめ、我も已に親を忘れたるは、是れ日に用ひて兩者其の然る所以を知らざる者にて、親も無心、子も無心、彼此間無く、渾化して迹を存せざる者なり、然れども是れ猶ほ一家父子の間を出でざる者なり、故に親をして我を忘れしむるは易く、兼ねて天下をも忘るゝは難し、蓋し其の功業天下を蓋ふに足りながら、其の自己に由れるを忘れて泊然として與り知る所なければなり、然れども之を彼の天下の民をして蕩々乎として能く我に名くることなからしめ、帝力我に於て何んか有らんと歌はしむるが如き者に較ぶれば猶ほ間あり、故に兼

虎狼仁也、曰、何謂也、莊子曰、父子相親、何爲不仁、曰、請問至仁、莊子曰、至仁無親、太宰曰、蕩聞之、無親則不愛、不愛則不孝、謂至仁不孝可乎、莊子曰、不然、夫至仁尚矣、孝固不足以言之、此非過孝之言也、不及孝之言也、夫南行者、至於郢、北面而不見冥山、是何也、則去之遠也、故曰以敬孝易、以愛孝難、以愛孝易、而忘親難、忘親易、使親忘我難、使親忘我易、兼忘天下難、兼忘天下易、使天下兼忘我難、

【大意】 下節を連ねて此を第二段となす、胡方曰く上段先以天地爲案、此段方著其說、總言道在無成心而因是、忘者己無其心、物亦不知其爲也と、故に本節に先づ太宰の問を借りて世俗の要道至德とする仁と孝との問答を爲しつゝ、行文の妙、何時しか之を轉送し去つて一箇の忘字に化せしめ了る、

【通釋】 商即ち當時の宋に太宰の官職に居れる名は蕩なる者、仁の意義に於て疑ふ所ありて、之を莊子に質す、莊子は言下に虎狼も仁なりと對ふ、是れ實に太宰の一驚を喫せる所にて悟るべくもあらざれば、何の謂ぞと問ひ返すに、莊子は虎狼と雖も、父子の親愛は天性に具れり、何ぞ不仁と爲すべきと曰ふ、成程斯く言はるれば、其れも道理あり、然かし已に猛惡至極の獸類にも仁ある以上は、仁の道も最早難有味を減却したれば、太宰は更に一歩を進めて、然らば至仁は如何と問ふに、莊子は直樣至仁には親無しと曰ふ、此の言も太宰が耳には又も奇怪千萬なり、乃ち之を詰つて曰く蕩が嘗て聞ける所を以てすれば、親情無ければ愛情なし、愛情無ければ不孝なりと、然らば至仁を不孝と申して宜しかるべきやと、蓋し莊子が親無

て私智を弄し、私意を用ひて營作する所あらば、是れ此に反する者にして、必ず凶禍を招かん、洛書九疇の事の如きは皆天に應じ物に因れるものにて治道自ら成就し、帝德自ら完備す、以て日月の如く此の下土に照臨し、天下億兆の民擊壤鼓腹して之を歡戴して太平を致さん、是れを上皇と謂ふと、卽ち至治の君なり、

【解義】〔巫咸袑曰來〕袑の音は條又紹、「成疏」に云ふ、巫咸神巫也、爲殷中宗相、袑名也と、宣穎曰く袑卽招字之訛、巫咸明於天、此蓋托言巫咸相招致答耳、舊乃音超以爲人名可笑、古來止有巫咸、那得又有巫咸袑邪と、案ずる宣說從ふべきに似たり、又案ずるに應帝王篇に、既に、鄭有神巫曰季咸とあり、是れ著者自ら明に云ふ所なれば、これにて差支なきに似たり、尙ほ考ふべし、〔吾語女〕女は汝なり、後ち皆同じ、〔六極五常〕或は六氣（陰陽風雨晦明）五運とし、或は六合（上下四方）五行（木火土金水）とし、或は六極五福（書經の洪範に見ゆ）とする等注解一ならず下文の九洛を以て洪範九疇と爲すときは此の說用ふべきに似たれども必ずしも深究せずして可なり、宣穎曰く六極五常果足承當上文五孰字乎、蓋分明要逼出道字、姑隱躍其詞、使人自遇之、此五六止是道之使用、然能順此五六則道在其中矣と、又曰く帝王代天行事、其設施與天地日月雲雨風飇一般、天地日月雲雨風飇之主人（道）卽帝王經綸設施之主人也那可不順と、〔九洛之事〕「成疏」及「林解」など卽九州聚落の事と解し、洛は落と同じとせり、他は多く卽ち洪範九疇の事と解せり、洪範は「書經」の篇名、殷の箕子、周の武王に天道を問はれて陳べたる篇名なれ共、夏禹洪水を治むるとき、洛水神龜を出し、禹其の背文を見て發明する所あり、是れを洛錫書といふ箕子の陳べる洪範は元來之を推衍したるものなり、其の九疇とは五行五事八政五紀等九類ある意なり、故に之を以て九洛之事を解したり、〔此謂上皇〕上皇は上古三皇の義なり、「義海」に曰く、按此答語似乎不應所問、考其歸趣義自昭合、治道躋乎上皇、則民各安其自然之分、人事盡而天理可推、則其運處往來之機、不言而喩、是所以答之之道也と、

商太宰蕩問仁於莊子、莊子曰、

ず、敢て問ふ何の故ぞ豈に其れ故なからんや、
【解義】〔其爭於所乎〕所は地位なり、方角なり、詩の獻于公所「左傳」の聞火乃至火所「禮記」の不當君所とあるが如き皆同じ、〔孰居無事〕「成疏」に日月代謝星辰朗耀各有度數咸由自然誰安居無事而行之乎、此一句解日月無爭所と、〔孰主張是ー維綱〕孰は誰なり、是は之に同じ、前文を指して云ふ、主張綱維は林解に云ふ、但是著力之意と之れを得たり、
【意者其有機緘云云】意は意を以て測度すること、機は機關なり、緘は閉なり、不得已とは是非に及ばず致し方なきの意味なり、邪は乎と均く「カ」と訓ずれども乎は是れ問辭「デアラウカ」と譯す、邪は是れ疑辭、自心に決定し難きなり、「デアルカ知ラン」と譯す、混同する勿れ、〔孰隆施是〕「成疏」に云ふ隆は興也と宣穎云ふ隆興也、指雲、施指雨と、兪樾は隆を降と古字通用すと云へり、〔淫樂而勸是〕宣穎曰く、雲雨乃陰陽交和之氣所成、故以爲造化之淫樂と、「辯正」に云ふ淋漓鼓舞之意と、〔風起北方〕「發覆」に曰く北方土高、陽亢而戰、故多風と、北方の地勢は高燥にて陽氣亢上して陰と戰ふが故に、風起り易しとの意なり、〔有上彷徨〕「辯正」に有の字を在字之訛ならんと爲せり、從ふべきに似たり、〔披拂〕「成疏」に猶扇動とし「林解」に搖蕩也とす、其の意略同じ、

巫咸祒曰、來吾語女、天有六極五常、帝王順之則治、逆之則凶、九洛之事、治成德備、監照下土、天下戴之、此謂上皇、

【大意】本節は前節の答なり、而して答ふる所は、天有六極五常の六字に過ぎず、帝王順之より以下は帝王の治は畢竟之に傚ふべきを言ふ、言簡に事平凡の如きも、全篇の正意は實に此に存す、

【通釋】巫咸祒は天を知れる者なり、吾が疑問を聞き吾を呼んで曰く、來れ吾れ汝に語げん、天には上下四方の六極あつて、木火土金水の五行常に其の間に行はれて、自然にして此の如きのみ、故に帝王たる者亦之に順從して物の常性に任せ、天下を率ゐなば天下は自ら治りて、吉祥ならざるはなし、萬一然らずし

源とするに在り、乃ち入手突如疑問を呼び起して讀者の心魂を聳動し、連詰重究又其の疑念を挑發して、容易に其の何の故なるを示さず、本節一百言渾て之れを糢稜に費し去る、蓋し讀者の耳目に爛熟せる無爲自然を以て平平說き起さば、讀者の爲めに又例の定文句とせられて、馬に念佛の無效に了らんことを恐るればなり、朱穆之は曰く此猶屈原之天問、欲人反觀而知天機之在我也と、行文の筆致亦極めて趣あり宣穎は評して曰く突然而起、參差錯落、如疎雨點蕉之聲と、又曰く、五箇孰字、定有承當之者、尋出這箇主人、可爲宇宙依歸也、

【通釋】　嗚呼彼の天や、刻々に時々に日夜歲月を論ぜず運轉して、已まざるが如く見ゆれども、果して是れ運轉する者なる乎、地や千秋に萬古に寂然として靜處するが如く思はるれども、果して是れ靜處する者なる乎、日や月や其の行道を同じくして追逐し、或は離れ或は薄り、常に其の居場所其の道筋を相ひ爭ふが如くに見ゆれども、是れ亦果して相ひ爭ふ者なる乎、知らず何者か是れを主宰し施張する、何者か是れを維持し綱紀するか、若し果して實に其の者ありとせば、何者ぞ好くも此の大仕事を擔當するに足れる手隙(無事)ある境遇を占め得て(居)之れを推進行動せしむる、さても奇奇なり、怪怪なり、之れを臆測するに(意者)、此の天地日月は他の之れを發動する機括、抑制する緘束に強ひられて已むを得ずして然るにや、たゞしは自體に運轉の活機を具して、其の勢の趣く所自ら制止すること能はずして然るにや、豈に唯此に限らん、彼の雲は雨となる乎、雨は雲となる乎、雲固より散じて雨となると雖ども、雨の山澤に下る、又蒸して雲となりて、其の先後本末の知るべきなし、然らば何者か此の雲を興し(隆)、此の雨を施すか實に其者ありとせば、何者ぞ好くも斯かる手隙ありて陰陽を交和(淫樂)して、此の雲雨の行動を勸めたる、雲雨より連想し去れば彼の風も不思議ならずや、北方高燥の地に吹き起り、忽ち西し、忽ち東して、天上に彷徨ふなり、風を氣息とすれば、何者か是れを吐納(噓吸)する、實に其者ありとせば、好くも閑暇ありて、專ら此の風を斯くまで吐納して太虛を煽動する、他の萬有とても亦皆然らざるはなく、其の形迹を觀れば神妙、其の原因を思へば玄幽にして悟るべから

莊子國字解下

藻洲　牧野謙次郎講述

外篇（承前）

天運第十四

司馬本は天員に作れり、運員の二字古通用す、全篇凡八大段より成る、其の大旨は爲治者の當に成心なく唯物に因るべきを言ふなり、是れ亦天道篇と大異なきも天道篇は帝道聖道の差、君道臣道の辨より本末先後の序を審にせしめんと要し、此の篇は道體の渾焉にして流行の無方なるを述べて、直に其の眞情を得せしめんと欲するの別あるに過ぎず、但其の文雲湧波動、變化窮り無くして殆んど應接に暇あらざらしむ、是れ固より莊老が筆端操縱の妙迹にして、其の實は一箇の無爲自然にあり、陸氏故に云ふ讀莊子者如觀幻人幻物、知其爲幻、則千法萬法皆從一法而生、不復受其簸弄矣と、

天其運乎、地其處乎、日月其爭於所乎、孰主張是、孰維綱是、孰居无事推而行是、意者其有機緘而不得已邪、意者其運轉而不能自止邪、雲者爲雨乎、雨者爲雲乎、孰隆施是、孰居無事淫樂而勸是、風起北方、一西一東、有上彷徨、孰噓吸是、孰居无事而披拂是、敢問何故、

【大意】此の節下節を連ねて第一段と爲す、其の用意は先づ篇首に道の自然にして不可思議、天地萬物を一貫して至らざる所なし、爲治者は此に倣ひ之れを體するより外、到底別法なきを示し、以て全篇の發

（下卷了）

莊子國字解下目次

外篇（承前）

雜篇

第二十九巻

莊子 下

牧野藻洲講

外篇の下半と雜篇全部とを網羅す（莊子大尾）

先哲遺著追補

漢籍國字解全書

早稲田大學出版部藏版

漢籍國字解全書